附言　是は明治三十一年以後の統計である。是より見ると音樂の意向が、略推定せられる。同校の仕事と言つたら、上欄より敎へて、管絃附唱歌までの六種である。セロの獨奏は、流石の本家本元でも、中々容易には物にならぬようである。音樂取調所以來常に幅を利かして居つた箏は、明治三十八年を一期として、歐樂と分離せんとして居る。是は勿論然かあるべきもので、宜しく邦樂演奏會に伍する方かと思ふ。三十年以前の分もあると、一層面白いものであるが、其處まで調査が屆かなかつたのは、誠に遺憾至極である。この統計にない部分、即ち伊澤校長や村岡校長の時代を考へて、この演奏樂の種類と比較して見ることが出來れば、其こそ隔世の感がある。(1)

伊澤先生が大禮服で、儀式を擧げられて、又村岡先生が洒々たるフロツク姿で、壇上に立たれて、其から愈々奏演となると、上眞先生が、竹製のベトーンを持つて、閑雅靜肅の姿でスラリと立たれる。するとヂツトリヒ先生は、堂々プロフエツソル姿で、鬚髯を一寸握つて、眼鏡越しに譜表を見て、ズンズンとピアノを打つて行く、場面が變ると、幸田延先生がコルセツト高く、ヴアイオリン携へて、得意のソロがある、時にはボーカルのソロも拜聽する、同幸先生は振袖姿美々しく、又ヴアイオリンを奏せらる。橘先生はアツサリした裾模様かなんかで、厚い草履を穿き、ソナタ集を抱いて、正面に現はれる。入り代つて、今の山縣夫人たる內田きく子令孃は、文金の高髷なんかで、ピアノに座する。更に場面が變ると、山勢松韻先生が小使の手に引かれて、ドーアを出ると、遠山甲子子女史が、官吏の奧樣然と是に續く、すると今の今井新太郎先生も、是に續く。時には荒木古童先生や萩岡先生や、山登先生も現はれる。箏の外には三絃や胡弓や尺八も演ぜられる。たまさか上原六四郎先生が、大乘經でも讀み上げる樣な姿で、折本を前に一管を吹き、滿場をシンとさせる。殊に聽衆を感動せしめたものは、箏の連奏にヴアイオリンを合奏する時である。ベンチの樣な長い臺に、幕を掛けたらしいもの、其に一々箏が載せられて、七八臺も出ると、ヴアイオリンも亦七八人箏曲集の（落梅）かなんかを彈ずると、聽衆が全然醉はされた樣に、靜肅に聽き取れる。稀には箏の柱を工夫して、多人數揃ふて、小學唱歌集の「鏡なす」なんかを彈く。まるでローマンチツクな話を聽く樣だが、事實である。處で今は世界第一の名家ニキシユ師の高弟、クローン先生などの活動面を拜見するのであるから、隔世の感があるとは、決しておまけではあるまい。

（1）四～五頁を參照。

**明治三十一年一月三十日　同声会第一回集会**

一、開會の辭　小山理事
二、ピアノ獨奏　ベートーヴエン作ソナタ二七番ノ二　遠山甲子
三、演說　音樂改良論　渡邊校長
四、ヴァイオリン獨奏　バツハ作　チヤツコーナー　幸田延子
七、獨唱　幸田延子
　一、トステイー作　ヴレイモリール（羅甸語）
　二、ケルビニー作　アヴエマリア（伊太利語）

（『本邦洋樂變遷史』四一三頁）

**明治三十一年四月二十三日　同声会春季演奏会**

明治三十一年四月二十三日（土曜日）午後一時半
東京上野公園音樂學校奏樂堂に於て開會
春季音樂演奏會曲目

同聲會

第一部

一、歐洲吹奏樂……陸軍軍樂學校諸氏
ルスチゲン　ワイベル歌劇の序……ニコライ氏作曲
二、獨唱……納所辨次郎氏
夢の小蝶……（メンデルソーン氏作曲／中村秋香氏作歌）
三、ヴァイオリン聯奏……（賴母木駒子／幸田幸子）
第三番（二）短調）……シット氏作曲
四、唱歌……學友會々員諸氏
甲、歸雁……（ハウプトマン氏作曲／由比彖子作歌）
乙、可憐女……中村秋香氏作歌
五、ヴァイオリン合奏……會員及學友會々員諸氏
甲、アンダンテ　カンタビーレ
乙、タランテレ　……エベルハルト氏作曲
六、歐洲吹奏樂……陸軍軍樂學校諸氏
デル　プロフェット歌劇中拔萃……マイエルベール氏作曲

第二部

七、ピアノ聯彈……（橋本正作氏／瀧廉太郎氏）
シンフォニー　第一番……ベートーヴェン氏作曲
八、唱歌……學友會々員諸氏
甲、春の歌……（ハウプトマン氏作曲／鳥居忱氏作歌）
乙、進軍の歌……（ベニケ氏作曲／大和田建樹氏作歌）
九、ヴァイオリン、ピアノ合奏……（ヴァイオリン　幸田幸子／ピアノ　内田菊子）
ソナタ（イ）短調）……ベートーヴェン氏作曲
十、二部合唱……會員及學友會々員諸氏
未定……（メンデルソーン氏作曲／鳥居忱氏作歌）
十一、ピアノ獨彈……遠山甲子子
ディ　フォレレ（シューベルト）……ヘルレル氏編
十二、歐洲吹奏樂……陸軍軍樂學校諸氏
カール王行進曲……ウンラート氏作曲

會費
特別席　金壹圓
一等席　金五十錢
二等席　金二十五錢

## 土曜日の音樂

藤村[1]

然り、と上野の樂堂なる西側の廊下にて、われはひとりの友の肩をたゝき言葉をつゞけぬ。同じく西歐の趣味を傳ふるものなれども、音樂は他の美術と大にことかはりたるふしあり。繪畫彫刻のことはしばらく言はず、文學の上にとりて考ふるも、詩歌にまれ小說にまれ戲曲にまれ一旦我國語

に飜譯したる後ならでは、讀者にその趣味を傳ふることかなはず。小說の飜譯には驚くべき成効となせるもあれど、詩歌に至りては東西言語の組識性質いたく異なりたれば、美妙なる聲調を傳へんことは難し。總じて飜譯には飜譯の妙もあれど、直ちに原作を味ふものゝ目より見れば、あきたらぬふしも亦た少なからず。時には其の形のみを傳へて、香もうせたる花をかぐの嘆あること多し。音樂はしからず、異なりたる言語をもて飜譯するの困難なければ、彼の用ゆる樂器は我もまた用ゆべく、その趣味をとり來りて、直に聽衆の心に傳ふるを得るなり。われは廊下の白壁にもたれてかく語り出でたるに、友は破璃窓に倚りて庭のかなたに殘れる紅き桃の花の繪の如くなるを眺め入りしが、にはかに身を起して、かく言ひぬ。げに君の言ひたまふがごとし。西の國の文學も、繪畫も宗教も、哲學も、多くは皆な男子の手によりて傳へられたるに、ひとり音樂のみは女性によりて傳へられたるゝも奇ならずや、今の藝術の國に於てつぎつぎに名媛のあらはるゝも樂界のみなりと、かく語るうち、演奏の開會を報する鐘鳴り響きければ、友は別れてかなたにゆきぬ。

この日の演奏を聞かんとてつどひ來れる人々早や滿ちたれど、樂堂のありさま、いはんかたなく靜かなり。ことしの春は雨がちにて艶なる日和のつゞくことも少なく、兎もすれば空曇りて花も嵐に散りすましたるほどなれば、あすの土曜もいかゞあるべきなど、いづれもこゝろをなやましたるに、この日はうらゝかに晴れ渡り、若葉を泄れて葡萄染の窓掛の間よりさしてらす春のひかり演臺の正面に高く刻まれたる壁上の古琴にうつりて、白堊の色もうるはしく見えたり。きのふの夕暮、新たに獨逸より着きたるピアノを演臺の上に置き並べたるが、漆色の巖疊作りにて、脚はきらきらと光りたるさま、足のみは金色なる黑色の獅子の力を入れて立てるにも似たり。人々の目をひきぬ。

序はルスチンゲン、ワイベル歌劇の「プロゝオグ」をもて始まれり。オツトオ、ニコライが「ウヰンナ」の官劇部をやめて、伯林の官劇部に轉ずるとき、告別の演奏會に臨みて始めて世に披露せし曲とかや陸軍軍樂學校諸氏が吹奏樂なれば、銀色の「フリユウト」は金色の「バス」の喇叭に映り、きら〳〵と光りかゞやきて、大太鼓のとゞろき渡れる、「シンバル」の銀の鈴のごとくに鳴りひゞける、早やいみじき藝術の國に遊ぶかと思はれたり。序につぎて納所氏の獨唱あり、伴奏は幸田氏なり。歌を「夢の小蝶」といふは、中村氏の作にかゝる替歌にて、元歌は「旅のうた」なり。メンデルソオンの集よりとれり。おほかたの樂藝に思ひ合するに、唱歌は演奏會のうちの花ともいふべきなり。その趣よりいへば、こゝに獨唱のあるは譬へば戲曲に獨語のあるがごとし。かりに第一部第一齣を見よ、「クラリオネツト」、「フリユウト」、「トランペツト」など出でゝさま〳〵の白をつくし、物語の端緒も既に開けぬ。獨唱のこゝに入りたるは、俗に立役の出でゝ腹藏なく心の中を言ひあらはし、運命のさま〳〵を語るにも似て、かの深夜欄干に倚りて涕淚滂沱たるマンフレッドの蒼鶻にはあらずとも「問ふ人もなし、春の夕、」より、「曉の鐘に、花ぞ、ちりかふ。」まで、正且が花實をつくしたりともいふべきにや。「夢の小蝶」につぎたるは、ヴアイオリンの聯奏なり。プライムは賴母木氏、添は幸田氏、曲はハンス、シツトの「ヂユエツト」第三番（二）短調なり。プライムは鼠色の裾摸樣に藤の無垢をかさね、紅葉の色したるヴアイオリンを彈きたり、添は矢羽子つなぎの藤色に薄鼠をかさね、秋蔦の色の濃きに黑斑入りたるヴアイオリンを持たり。いみじく彈きいでたるさま、物語に見るほどのことも思はれて、はなやかにきよげなり。第四は唱歌。唱歌は四部合唱。甲の「歸雁」は元歌は「遊子の夜の歌」、乙の「可憐女」は元歌は「乙女のなげき」、前の替歌つくられたるは由比氏、後のは中村氏の作なり。高音部は安達、幸田、河合、植村、神戸、堤、石井、田中、佐藤、中音部は高木、林、石黑、三上、永井、次中音部は瀧、鈴木、益山、岡野、渡邊、低音部は石野、栗本、川添、入江、高折、中村の諸氏なり。次中音部と低音部とは制服を着け、高音部と中音部とは思ひ〳〵なるをかさねたり。西の國ぶりなれども姿は大和歌をかりて若き人々が唇より發する合唱なれば、樂器の力を借るものとはことかはり、その歌は人間自然の聲にして、皆な心胸より出づる響なり。かの叙情詩のごとくに、その區域こそ狹けれ、聽衆の同情を牽くはこの妙味のあればなるべし。高音部は花やかに、中音部は明らかに、次

中音部は深く、低音部は重々しく、あるひは離れ、あるひは合し、「誰が爲と織れるきぬぞ、あくるより暮るまで。」に終る。次にはヴァイオリンの合奏あり。甲は「アンダンテ、カンタビイレ」、乙は「タランテレ」共にエベルハルトの曲なり。第一部はマイエルベエルが「デル、プロフエツト歌劇」の一節にて納めたりしが、こは軍樂學校諸氏の吹奏樂なり。

五分あまりの休憩には人々吸煙室に趣きて思ひ思ひなる評を語りいづるさまなり。廊下には微笑みつゝ窓に倚りて立てるあり、狂氣のごとくになりて歩み廻るあり。奏樂堂より見れば吸煙室を漏れて出づる煙草のけむり渦の形をなして、白く廊下に滿ち渡りぬ。

第二部は橋本、瀧の二氏がピアノの聯彈にて始まれり。曲はベトオヴエンが九番ある「シンフオニイ」のうちの第一番なり。西暦千八百年の四月、世に公けにしたるものにて、ベトオヴエンが三十歳の頃の作ときこゆ。その月の二日、第一の水曜に「ウキンナ」の「バルク」座にて演奏會を催せし折、目錄のうちの最終にはさみて、始めてこの名手が彈き試みたるものなりといふ。この曲はレンツが所謂彼の創作時代の三期のうち、初期に入るべきものにて、大家モザアトの樂風を慕ひたるころの作なり。さればハイヅンが「シンフオニイ」の句のはなれ〴〵なるにひきかへ、銀の鎖のつながりたるに譬へらるゝは是なり。ピアノ聯彈に次ぎて、四部合唱は、甲は「春の歌」、乙は「進軍の歌」。「春の歌」は鳥居氏の作、「進軍の歌」は大和田氏の作なり。第九はヴァイオリンとピアノの合奏にて、ヴァイオリンは幸田氏、伴奏のピアノは内田氏なり。曲は千八百二年に出版せしベトオヴエンが（イ）短調の「ソナタ」にて、こはリヒノスキイに呈したるものなりと傳ふ。年まさに三十二歳の作ときこえたれば、曲の花やかに壯なるはいふまでもなく、年月のたくみをかさねて、今こゝに彈きいづるさまあざやかに、ともに同じやうなる春の花のかたちしたるをかざし、」伴奏は鹿の子摸樣の鳩羽色なるを着たり。合奏につぎたるは二部合唱なり。高音部は幸田、安達、河合、中音部は高木、堤の諸氏にて、元歌は「贊美歌の一篇」とあるを、替へて「葵の祭」といへる歌に作り、メンデルソオンの曲に合せたるは鳥居氏なり。遠山氏がピアノの獨彈は目錄の第十一にすわり、この日の軸なり。曲はステフエン、ヘルレルの編にかゝれるシユウベルトの「デイ、フオレレ」を選みたり。ヘルレルは獨逸を周遊し、巴里に住ひ、英吉利にまで渡りたる樂人なり。この曲は「ラ、ツルウツ」とて、世に名あるものにて、千八百十七年の作にかゝるといふ。日のひかり花やかにさし入りたれば、竪縞の風通を着て、新らしきピアノにうちむかひたるさま、いみじき指のはこびのほども、くもりなく見ゆ。終には軍樂學校諸氏の吹奏樂ありて、ウンラアトの「カアル王進行曲」いと賑やかに、かのたくみなる漁夫が大海に網うちたるがごとく、たぐり持ちたる一すぢの綱にて、次第にこの日の演奏を納め畢りたるはめでたし。

（『讀賣新聞』明治三十一年五月二日）

（1）藤村（本名島崎春樹）は明治三十年から翌年にかけての一年間、東京音樂学校の選科において、ピアノを専攻した。師は橘絲重である。

**明治三十一年六月十一日　学友会演奏会**

明治三十一年六月十一日（土曜日）午後一時半

音樂學校　學友會演奏曲目

東京上野公園地音樂學校奏樂堂ニ於テ開會

第一部

一　唱歌

甲　埴生の宿　〔シシリヤ國風〕〔里見義氏作歌〕

乙　高砂　〔ワグネル氏作曲〕〔鳥居忱氏作歌〕〔名譽員山田源一郎氏指揮〕

二　ピヤノ（獨奏）　鈴木毅一氏演奏

ソナチナ　クレメンチー氏作曲

三　唱歌

甲　遊獵　　ウエーベル氏作曲　某氏作歌

乙　他郷の月　　メンデルスゾーン氏作曲　佐藤誠實氏作歌

丙　未定　　カルコット氏作曲　旗野十一郎氏作歌　名譽員小山作之助氏指揮

四　ヴァイオリン（獨奏）

ロマンス　　石野巍氏演奏　リーディング氏作曲

五　ピヤノ（聯彈）

メヌエット　　瀧廉太郎氏　栗本清夫氏　神戸絢子氏　田中ヤソ子　演奏　メリオー氏作曲

第二部

六　ピヤノ（獨奏）

ソナタ　　高木チカ子演奏　ハイデン氏作曲

七　二人合唱

我日の本　　安達カウ子　高木チカ子　演奏　メンデルスゾーン氏作曲　中村秋香氏作歌

八　ヴァイオリン（合奏）

甲　キーゲンリードヘン　　シューマン氏作曲

乙　ガボット　　ラモー氏作曲

九　ピヤノ（獨奏）

ロンドー　　瀧廉太郎氏演奏　ベートーヴエン氏作曲

十　唱歌

甲　心の水　　メンデルスゾーン氏作曲　本居豐頴氏作歌

乙　花の孤子　　ハウプトマン氏作曲　大和田建樹氏作歌

丙　鬪草花　　シューベルト氏作曲　旗野十一郎氏作歌　名譽員上眞行氏指揮

## 明治三十一年七月九日　卒業式

高等師範學校附屬音樂學校　生徒卒業證書授與式及音樂演奏順序

明治三十一年七月九日（土曜日）午後三時
ヨリ上野公園音樂學校ニ於テ執行

高等師範學校附屬　音樂學校生徒卒業式順序

一、主事渡邊龍聖報告
二、卒業證書授與
三、校長理學博士矢田部良吉告辭
四、文部大臣祝辭
五、卒業生徒總代謝辭

演奏　曲目

第一　唱歌

甲　郭公……マッヂンギ氏作曲　旗野十一郎氏作歌

乙　君は神……ベートーヴェン氏作曲　里見義氏作歌

第二　ヴァイオリン（獨奏）……專修部卒業生　安達カウ

甲　アンダンテ、カンタビレ…エベルハルト氏作曲
乙　マツルカ……シツト氏作曲

第三　ピヤノ（獨奏）……専修部卒業生　高木チカ
スイト、ミニヨン……ラインホールド氏作曲

第四　唱歌
甲　海邊眺望……（ロムベルグ氏作曲　鳥居忱氏作歌）
乙　樂我世……（作曲者未詳　旗野十一郎氏作歌）

第五　ヴァイオリン（ピヤノ伴奏）…卒業生其他諸氏
甲　キーゲンリードヘン……シユーマン氏作曲
乙　モーメント　ミユジカル…シユーベルト氏作曲

第六　ピアノ（獨奏）……専修部卒業生　瀧廉太郎
ソナタ……クレメンチ氏作曲

第七　四部合唱歌……専修部卒業生（高木チカ　安達カウ　瀧廉太郎　石野巍）
夏の朝……（スリヴアン氏作曲　鳥居忱氏作歌）

第八　ヴァイオリン（獨奏）……幸田幸
コンセルト第九番……ベリオ氏作曲

第九　唱歌
橿日宮……（ハンデル氏作曲　鳥居忱氏作歌）

明治三十一年十一月十三日　試業演奏会

第一回試業會順序（選科）

一、ピヤノ聯彈　第一期生徒（原吉　川みさい　ちゃ子）
デル、クライネ、ポステヰロン　クラインミッヘル氏作

二、單音唱歌　第一期　第二期　女生徒
甲、菊　アルレン氏作曲　鳥居忱氏作歌
乙、紅葉狩　アプト氏作曲　中村秋香氏作歌

三、箏曲　第一期生徒（久野ふみ子　児玉はま子　柏田ゑみ子　高梨春野子）
落梅　音樂取調掛作歌

四、複音唱歌　第一期　第二期　女生徒
甲、指とり數へ　グンベルト氏作曲　本居豐穎氏作歌
乙、菊の園　作曲者未詳　旗野十一郎氏作歌

五、ピヤノ獨奏　第一期生徒　上原きせ子
進行曲　ベートーフェン氏作

六、箏曲　第三期生徒（内藤すて子　垣屋きん子　今井うさ子）
八千代獅子　藤永撿校調

七、オルガン獨奏　講師　天谷秀氏
甲、ラルゲトー　モツアルト氏作
乙、ホッホ、ツァイツ、マルッシュ　メンデルスゾーン氏作

八、箏曲　講師　今井慶松氏
松づくし　音樂取調掛作歌　第四期生徒（内藤すて子　上原みえ子）

九、ヴァイオリン獨奏　　講師　賴母木こま子

ラ、メランコリー　　ジ、ヘルムスベルゲル氏作

十、三重音唱歌　　第一期　第二期　男女生徒

甲、我國　　ハイドン氏作曲　本居豐穎氏作歌

乙、秋景　　フロートー氏作曲　旗野十一郎氏作歌

〔手書き〕

〔前略〕

今春以降音樂學校は頻に其樂堂を開て數回の演奏會を催し、聲樂器樂共に未だ當年の伎倆を失はざるを示せり。合唱の部は先年來有望の諸氏が踵を接して校を去りし爲め昔日の觀無しと雖も、後進の人にして傾聽す可き者少からず。殊に男聲は之を數年前に比して顯著なる進歩ありと云ふ可し。洋琴の部に於ては近時絢子神戸氏の進境注目す可きものありと稱す。幸田氏姉妹が聲價は既に洽ねく人の知る所なれど、『ギオロン』に、肉聲に、毫も退歩の徴なく、數月前延子氏が歌ひし『アヂ、マリヤ』幸子氏の奏せし『コンチエルト』の如き先年の盛時に於て、鑑識ある聽衆の前にせざりしを惜ましむるの感ありき。音樂學校がなほ昔日の『トラジチオン』を失はざるは、唱歌の指揮者に上眞行氏あり、又聲樂器樂を督するに幸子氏あるが爲なり。近時ドクトル、フオン、ケエベル氏も亦洋琴部の教示に從事せらると聞けば、氏が樂風も亦後進者間に傳はるなるべし。〔後略〕

（『帝國文學』第四巻第七号、明治三十一年七月、九一～九二頁）

## 明治三十一年十一月二十日　同声会秋季演奏会

明治卅一年十一月二十日（日曜日）午後一時半

東京上野公園音樂學校奏樂堂ニ於テ開會

秋季音樂演奏會曲目　　同聲會

第一部

一、ピアノ獨彈……内田　菊子

ソナタ第三番……ベートーヴエン氏作曲

二、ヴァイオリン獨奏……幸田　幸子

コンサルト……ローデ氏作曲

三、唱歌……學友會諸氏

甲、羽衣……（鳥居忱氏作歌／ハウプトマン氏作曲）

乙、菌狩……（旗野十一郎氏作歌／エンセン氏作曲）

四、オルガン獨奏……天谷　秀氏

ローマンス……ショパン氏作曲

五、ヴァイオリン、ピアノ合奏……（賴母木駒子／橘絲重子）

ソナタ第六番……モザルト氏作曲

第二部

六、吹奏樂……軍樂學校諸氏

聯隊の少女……ドニゼッテイ氏作曲

七、ヴァイオリン獨奏……幸田　延子

レゲンデ……ウィニアウスキ氏作曲

八、唱歌……學友會諸氏

甲、閑庭菊……（鳥居忱氏作歌／ワインウルム氏作曲）

乙、消え行命……（武島又次郎氏作歌／ワインウルム氏作曲）

九、ピアノ獨彈……橘　絲重子

ロンドー（ペルペチュウム、モビレ）……ウエーベル氏作曲

十、ヴァイオリン合奏 ……會員諸氏
甲、サラバンデ ……バッハ氏作曲
乙、ルール ……同氏作曲

Concert
GIVEN BY
THE DŌSEIKWAI
On Sunday, the 20th Nov., 1898,
IN THE
MUSIC HALL
OF
THE ACADEMY OF MUSIC
UYENO, TOKYO.
THE CONCERT COMMENCES AT 1.30 P.M.

Part I.

1. Piano Solo.
   "Sonata" (No. 3.) .....*Beethoven.*
   Miss Uchida.
2. Violin Solo.
   "Concert" .....*Rode.*
   Miss K. Koda.
3. Chorus.
   a: "Lerchenbaum" .....*Hauptmann.*
   b: "Veilchen unter Gras versteckt" .....*Jensen.*
   The Students of the Academy.
4. Organ Solo.
   "Romance" .....*Chopin.*
   Mr. Amaya.
5. Duo for Violin and Piano.
   "Sonata" (No. 6.) .....*Mozart.*
   Misses Tanomogi and Tachibana.

Part II.

6. Brass-Band.
   "La fille de Régiment" .....*Donizetti.*
   Members of the Gungakugakko.
7. Violin-Solo.
   "Légende" .....*Wieniawski.*
   Miss N. Koda.
8. Chorus.
   a: "Toscanishe Lieder" (No. 1.) .....*Weinwurm.*
   b: 〃 〃 (No. 6.) .....*Weinwurm.*
   The Students of the Academy.
9. Piano-Solo.
   "Rondo" (Perpetuum Mobile).
   Aus der Clavier Sonate .....*Weber.*
   Miss Tachibana.
10. Violins.
   a: "Sarabande" .....*Bach.*
   b: "Loure" .....*Bach.*
   Members of the Dōseikwai.

○同聲會秋季音樂演奏會

歸りてのち、泣き祈り且つ歌ひ、而して狂ひ悶ふること、大凡そ一時間。これ秋の同聲會が賜物なり。さればとて、始めより終まで、悉く我れを動かせしといふにはあらず。たゞベートーフェンがソナタ第三番の獨彈

と、ヴヰオリンのレゲンデ獨奏とに打たれたるなり。これぞ此日の白眉なるらむ。内田菊子君の樂堂に現れざりしやこゝに久し。されど世には俠氣ある坂部氏の如きありて、ケーベル教授の言にまかせてか、しきりに君を揚げしも、我れはこれまで君に動かされたること殆どこれなかりしものゝ一人なり。たゞ春期演奏會の時なりしか、一段の進境に入られしよと覺えしのみ。而して、いまソナタ第三番の獨彈を聽くに及んでや實に坂部氏の讃辭の全く空からざるを了せりといはんか。古き既往はいざ知らず、この三四年、原作者を傳へたる人忍が岡の樂士中殆んどあるなし、一人もあるなし。たゞこの日、菊子君始てよくこれをせり。女性の常として稍々その發動に力を欠き、雲を隔てゝ之に聽くの恨みありしと雖ども、ベートーフエンか心に火の柱の如く立てる至大莊嚴複雜の實相は、確にその一部を之によりて我等に傳へたるものゝ如し。共なりしところの詩人藤村子また感歎措く能はずして曰く、これ實に暗澹たる黑雲勃如として天の一方に起るも、愛光燦として其間に照らすの相なりと。殊にはそのペタルの用ひ巧みにして、藤村子が所謂黑雲を起こすところ、景中の景なりともいふべきか

⊙幸田延子君が此の日の演奏ヴアイオリン―レゲンデの曲も又驚くべきものゝ一つなるべし。われは之を以て歸朝以來最上の出來榮えなりと讃せん。そのレゲンデとは『物語』との意なるべく、如何なることのレゲンデなるか我れ之を知らねど、自ら一種の恐怖に驅られ、何となく、もの愴くて、慄ひ出んとせしを思へば、古き希臘の怪談にても仕組みたるものにや。近頃世間には女史を攻擊するの聲甚だ强きものあるより、この日特に力を注がれたるためか、その腕寧ろ巧みなりといはんよりはすごく恐ろしかりき。元來女史の腕は微妙伶巧の曲ならんよりは壯大雄麗のものに適す。されど今にしてまた思へば、このレゲンデの如く、狼が寒夜月に嘯く如き、或は妖靈の旅人をおどさんとする如き或は海賊船を走らして獲物を海にあさらんとするが如きものこそ、更に最も適するらめ。女史は此の日和裝せられたれは、弓の力に充分の見榮えを添へ得ざりしこそ上なき恨みなれ。瀧氏がピヤノ伴奏は、稍々氣取り過ぎて、調和の機微を欠けるものの如く、まことに惜しきことなり。されど、延子君の氏を伴へるは目新くして難有かりき。我れは終に女史のため輕快洒然たる洋裝を勸めんと欲す

⊙妹幸子君がローデ氏作コンサルト獨奏は、尋常といふのみにて卒業演奏會のコンセルチノには比ぶべくもあらず。加ふるに前半曲の、臆病氣に勝たれて見えもし聽こえもせるは、何故にや。亦、己れ弓を取らざるも、すでに伴奏の始まりたらば、身は最早や曲中にあるものなり。されば全心をその伴奏の音曲にさゝげて、胸中燃ゆるが如くに湧き煮たち、これが勢に乘じそのインスピレーションに驅られて、弓を取りもし歌ひもすべき筈ならずや。さるをその心掛けの更になくて、餘所ごとの如くに聽きながし、我が部に來りて急に思ひつきたる如く、弓取るごときに至りては、樂士の愧づべきことなり。而して、幸子君が此曲を奏せんとして、その弊を襲ひしごとかりしもなさけなや。伴奏の延子君終の頃に至りて、曲譜の紙如何にしけん、一度ならず二度三度折れど反せど、仲々に反へらず、是に於てか一種のインスピレーション俄にその胸底に燃えたるものゝ如く、麗火忽ちその面に溢れ、更に一段の力を添へて、曲譜なく彈じ終りたるさま勇ましくも又心地よげなり。⊙それオルガンの長ずるところは、ピヤノの輕快痛切なるに反し、幽邃沈痛なるものありて、何となく大人君子の態度あるにあり、さればかゝるピヤノ、ヴヰオリンの數多き番組の間に立て、特にオルガンの演奏を試みんとするの大膽あらば、よろしくオルガンの特長を發揮して、幽遠深邃の曲を撰ぶべきなれ。さるを、考慮茲にいたらず、ただ偏に面白ろからんことを欲して、オルガンのみの番組ならば、或は喝采を得べしと思はるゝ輕快なるローマンスの曲を撰ふ。加ふるに、ショツパンはピヤノの名手にして、オルガンはその得たるものに非ず。是に於てか、天谷秀君がショツパン氏作ローマンスのオルガン獨奏は、全く失敗に終はれりといふべし。⊙賴母木駒子君橘絲重女史とのヴヰオリン、ピヤノ合奏モツアート氏ソナタ第六番は、寧ろピヤノに勝を占められたりとやいはむ。賴母木子がヴヰオリンの批評は之をしばらく後に讓るも、絲重君の近來格段の進境を見ず、可もなく不可もなく、却て後進のために押し攻めらるゝの傾あるは、悲むべきことなり。このまゝにして遂に過ぎなんか、遠山女史と共に壇浦落のほか、又道なかるべし。是に至りて坂部氏の言當

らずといふべきなり。

（『女學雜誌』第四七七号、明治三十一年十二月、二六～二七頁）

**明治三十一年十二月四日　第一回定期演奏会**

明治三十一年十二月四日（日曜日）

午後一時半開會

秋季音樂會演奏曲目

高等師範學校附屬音樂學校

第一部

一、唱歌……生徒

甲、此御山……（モツアルト氏作曲／旗野十一郎氏作歌）

乙、別歌……（ゼーリング氏作曲／鳥居忱氏作歌）

二、ピヤノ獨奏……研究生　瀧　廉太郎

イタリヤニッシエス、コンセルト……バハ氏作曲

三、唱歌（女聲三部）……生徒

友……（ロート氏作曲／中村秋香氏作歌）

四、ヴァイオリン、ピヤノ合奏……（助教授　賴母木コマ／助教授　橘糸重）

ソナタ（ホ短調）……モツアルト氏作曲

五、箏……（助教授　遠山甲子／教員　今井新太郎及生徒）

六段調……八橋検校作曲

六、唱歌（單音）……生徒

甲、君は神……（ベートーベン氏作曲／東京音樂學校作歌）

乙、我國民……（モツアルト氏作曲／大和田建樹氏作歌）

第二部

一、ヴァイオリン合奏……職員、卒業生及生徒

ラーゴ……ヘンデル氏作曲

二、ピヤノ聯奏……（三年生　神戸絢／研究生　内田菊）

バレット……ルビンスタイン氏作曲

三、唱歌……生徒

甲、閑庭菊……（ワインウルム氏作曲／鳥居忱氏作歌）

乙、松浦佐用姫……（ワインウルム氏作曲／武島又次郎氏作歌）

四、ヴァイオリン聯奏……（教授　幸田延／研究生　幸田幸）

コンセルト……バハ氏作曲

五、ピヤノ獨奏……コイベル氏

六、唱歌（管絃合奏）……職員、卒業生及生徒

天岩戸……（ハイドン氏作曲／旗野十一郎氏作歌）

Concert
ON SUNDAY, DECEMBER 4TH, 1898,
IN THE
CONCERT HALL
OF
THE ACADEMY OF MUSIC,
UYENO PARK.

TO BEGIN AT 1.30 P.M.

## Part I.

1. Chorus:
   a. "Ave Verum." .....*Mozart.*
   b. "Komm doch herein." .....*Sering.*
   *Students of the Academy.*
2. Piano Solo:
   "Italienisches Concert." .....*Bach.*
   *Mr. Taki.*
3. Female chorus (*Three parts*):
   "Forget me not." .....*Rotoli.*
   *Students of the Academy.*
4. Violin and Piano:
   "Sonata" (*e moll*). .....*Mozart.*
   *Misses Tanomogi and Tachibana.*
5. Koto:
   "Rokudan." .....*Yatsuhashi.*
   *Instructors and Students of the Academy.*
6. Chorus:
   a. "Die ehre Gottes aus der Natur." .....*Beethoven.*
   b. "Vaterlandsruf." .....*Mozart.*
   *Students of the Academy.*

## Part II.

1. Violins:
   "Largo." .....*Händel.*
   *Instructors, Graduates and Students of the Academy.*
2. Piano Duo:
   "Ballet" aus der Oper Feramors. .....*Rubinstein.*
   *Misses Kambe and Uchida.*
3. Chorus:
   a. "Toscanische Lieder" *No. 1.* .....*Weinwurm.*
   b. 〃 〃 *No. 6.* .....*Weinwurm.*
   *Students of the Academy.*
4. Violins:
   "Doppelconcert." .....*Bach.*
   *Misses N. Koda and K. Koda.*
5. Piano Solo:
   *Dr. Koeber.*
6. Chorus with Orchestra:
   "God of Light" *from Seasons* .....*Haydn.*
   *Instructors, Graduates and Students of the Academy.*

〔前略〕次に亦余輩の喜ふべきことは昨冬に於ける音樂學校としての演奏會か上野にて行はれしことなり。渡邊主事の報告するところによれば、音樂學校が音樂學校としての演奏會は此般を以て嚆矢となすと。又曰く、該演奏會（乃ち音樂學校としての演奏會）は第一回の事なり、且萬事不整頓なり、故に今般の演奏會は演奏會としてよりは寧ろ學校の今日進行しつゝある事業の報告を諸君に紹介するか如しと。余輩は其會か演奏會にせよ、報告會にせよ、何れなるや何如は問はざるなり、亦其演奏會の巧拙の批評を試むるに非ざるなり。余輩か茲に賛成し、且音樂界の一現象として見る所の點は他なし、乃ち音樂學校としての音樂演奏會を起されたるの一事之なり。從來は如此奏會よりも多くの希望を此學に繫くる所以なり。〔後略〕

（『帝國文學』第五巻第一号、明治三十二年一月、一三〇～一三一頁）

## 明治三十二年一月　試業会

神田一ツ橋通リノ分教場ニ於テハ生徒ノ父兄保証人ニ授業ノ實況及ビ成績ヲ報告センカ爲メニ一月、五月、及ビ十一月ノ三回試業會ヲ開キタリ

〔手書き〕
（『明治三十二年度年報』）

## 明治三十二年三月　学友会演奏会

評判記　　無草庵　有美

○音樂學校學友會演奏會

取りわけて、書きたつるほどのこともなけれど、鳥居忱氏が作歌にてウエーベル氏の作なりといふ『探梅』の一曲、會員諸氏によりて歌はれしが、曲詞の相和せざること、近來無類にて『自轉車に油させよ……』とおかしく合聲を斷續せられし時には、笑聲其所此所に起り、思はず噴き出さざるを得ず、純然たる一大滑稽たりしといふべく、茶番と譏らるゝも申譯の辭なかるべし。たゞ『木下川あたりは……』の一行のみ、稍々春の日に遇ひし心地しぬ◉神戸絢子君のものと田中ヤソ子君のものと、ピヤノ獨彈は二つありしが、世間の狠連が騒ぐほど、感服は仕らす。絢子君の如き巧みは確に巧みなりと雖ども、ヴアヰオリンに於ける頼母木子の如く、わざとらしきところ多く、末の望み少し。我れは寧ろヤソ子君を以て、將來大成の器あるものと言はん。凡て『ぶる』といふこと、藝術進歩の大害なり◉ヴアヰオリン合奏の時、向つて左の端に立たれたる川井子とか聞く一女生、仲々演奏に身を入れ居らるゝ如く、一見して故鈴木福子君を想はしむるほどにて、其姿勢發動優に他に異れり。之を喩ふれは、ピヤノの由比久米子君に似たらんか◉今更の如く、この日又感激に堪えざりしは、幸田延子女史が女聲唱歌『夜の歌』及『枯風』の伴奏なり。伴奏とはいひながら、三昧に入れる女史が死物狂ひの彈じ方、感嘆の外なし。活氣あり氣慨あり、凡て女史の指に觸れたる鍵板の音は、餘人の彈ずるものと別種の活音なりて、其の力凄し。矢張り西樂界の名人は斯の人なりけり。

（『女學雜誌』四八五号、明治三十二年四月、三〇～三一頁）
〔八八～八九頁の「音樂界」も参照のこと。〕

## 明治三十二年四月二十一日　皇后行啓演奏会

明治三十二年四月二十一日　　東京音樂學校

演奏曲目

一　合唱……卒業生及生徒
　　惶き御影……（モツアールト作曲／中村秋香作歌）
一　ヴァイオリン二部合奏……（教授幸田延／研究生幸田幸）
　　ドッペルコンセルト……バッハ作曲
一　ピアノ獨奏……助教授橘絲重
　　ソナタ（パテチーク）……ベートーヴェン作曲
一　ヴァイオリン、箏合奏……生徒
　　雪の朝　八ッ橋撿校調
一　獨唱……教授幸田延
　　甲、船出……（フランツ作曲／佐々木信綱作歌）
　　乙、デル、ノイギエリゲ……シューベルト作曲
一　ヴァイオリン合奏……卒業生及生徒
　　甲、アンダンテ……グルック作曲
　　乙、ルール……バッハ作曲

一　箏……生　徒
　都の春……〔山勢松韻作曲　鍋島侯爵作歌〕
一　ヴァイオリン、ピアノ合奏……〔アウグスト、ユンケル　ラファエル、フォン、コイベル〕
　ソナタ……ルービンスタイン作曲
一　合　唱（管絃合奏）……職員卒業生及生徒
　國の光……〔メンデルソーン作曲　黒川眞頼作歌〕

〔八八～八九頁の「音樂界」も参照のこと。〕

明治三十二年に皇后が東京音楽学校の演奏会に行かれたのは、楽界の大事件だったらしい。武蔵野音楽大学の福井直秋前学長の談話では〈毎年二回やられた奏楽堂の音楽会は、聴衆集めに学校当局が頭を悩ましたもんだ。演奏そのものよりお客集めがなみ〔ママ〕ならない苦労で、曲目がどうかとか、うまい下手ではなく、一時間あまりもがまんしてきいているのがたまらないというふうだったから、お菓子でも出さなきゃ集まらなかった。それが皇后陛下の行啓が数度に及ぶと、その時はいつも超満員になり、《音楽御奨励》の思召しが叶い、実に愉快だった。

入場券をもらっても、何時間も無為に過ごすのを有難迷惑に感じていた連中が、列席できるのを光栄と感じ、喜んで来るようになったのだからな〉とある。

（『明治は生きている』一一七～一一八頁）

**明治三十二年四月二十三日　第二回定期演奏会**

明治三十二年四月二十三日午後一時半開會

春季音樂演奏會曲目

東京音樂學校

一　合　唱……卒業生及生徒
　祝　歌……〔ベルニ〔ママ〕作曲　旗野十一郎作歌〕
一　ヴァイオリン二部合奏……〔教授幸田延　研究生幸田幸〕
　ドッペルコンセルト……バッハ作曲
一　ピアノ獨奏……助教授橘絲重
　ソナタ（パテチーク）……ベートーヴェン作曲
一　ヴァイオリン、箏合奏……生　徒
　雪の朝　八ッ橋撿校調
一　獨　唱……教授幸田延
　甲、船出……〔フランツ作曲　佐々木信綱作歌〕
　乙、デル、ノイギエリゲ……シューベルト作曲
一　ヴァイオリン合奏……卒業生及生徒
　甲、アンダンテ……グルック作曲
　乙、ルール……バッハ作曲
一　箏……生　徒
　都の春……〔山勢松韻作曲　侯爵鍋島直大作歌〕
一　ヴァイオリン、ピアノ合奏……〔アウグスト、ユンケル　ラファエル、フォン、コイベル〕
　ソナタ……ルービンスタイン作曲
一　合　唱（管絃合奏）……職員卒業生及生徒
　國の光……〔メンデルソーン作曲　黒川眞頼作歌〕

Concert
ON SUNDAY, APRIL 23rd, 1899,
IN THE
CONCERT HALL
OF THE
TOKIO ACADEMY OF MUSIC.
UYENO PARK.
TO BEGIN AT 1.30 P. M.

Programme.

1. Chorus:
   "The March Chorus." (*Norma Vieni*) .....*Bellini.*
   *Instructors, Graduates and Students of the Academy.*
2. Violin Duo:
   "Doppelconcert." .....*Bach.*
   *Misses N. Koda and K. Koda.*
3. Piano Solo:
   "Sonate." (*Pathétique*) .....*Beethoven.*
   *Miss I. Tachibana.*
4. Violins and Koto:
   "Yukino Ashita." .....*Yatsuhashi.*
   *Students of the Academy.*
5. Vocal Solo:
   a. "Gute Nacht." .....*Franz.*
   b. "Der Neugierige." .....*Schubert.*
   *Miss N. Koda.*
6. Violins:
   a. "Andante." .....*Gluck.*
   b. "Loure." .....*Bach.*
   *Graduates and Students of the Academy.*
7. Koto:
   "Miyakono Haru." .....*Yamase.*
   *Students of the Academy.*
8. Violin and Piano:
   "Sonata." .....*Rubinstein.*
   *Mr. August Junker and Dr. Raphael von Koeber*
9. Chorus with Orchestra:
   "Lord! Thou alone art God." .....*Mendelssohn.*
   *Instructors, Graduates and Students of the Academy.*

本校事業ノ成績ヲ報告シ併テ技藝ヲ奬勵センカ爲春秋二期ニ音樂演奏會ヲ公開セリ春季演奏會ハ四月二十三日ニ擧行シ其演奏曲目ハ行啓ノ際御聞ニ達シタルモノゝ内第一合唱ヲ祝歌（ベルエ〔ママ〕作曲、旗野十一郎作歌）トシ其他ハ總テ同一ナリ當日午前午後兩度ニ演奏ヲナシ午前ニハ諸學校生徒其他ノ者ヲ入場セシメ午后ニハ兼テ招待シ置キタル者ノ來場アリタリ兩度共來聽者千有餘名ナリキ

秋季音樂演奏會ハ十一月二十五日二十六ノ兩日公開ス二十五日ニハ諸學校生徒其他ノモノヲ入場セシメ二十六日ニハ兼テ招待シ置キタル者ノ來場アリタリ兩日共參聽者千有餘名ナリキ　〔手書き〕

（『明治三十二年度年報』）

## 樂評手前味噌

青柳生[1]

◎音樂學校春季演奏會

これほどの大人數を、うまくこなすこと、並々の腕には六ケしかるべし。その聲調の亂れて、聽き苦しき醜躰を示さずやなど、憂へたるは謬りなりき。本校も來れ分校も來よと、幼きは十二三歳より、大も小も男も女も、柳櫻とときまぜて百五六十ほどが、あやに歌へる單音の合唱『祝歌』は、よく揃ひ整ひて、些かの亂れ外るゝものなく、殊にはポーズのふしぶし巧にして、意外の上出來なりしは、指揮者なる小山氏の譽れなりといふべし。且つこの歌は、『あゝゝゝゝ』の一部だけを除かは、歌曲の調和無類にて、空前にして恐らく絶後なるべき　皇后陛下行啓の紀念ともなり、さまで歌ひにくき者にもあらねば、須らく、その一部を訂正して、長く『東京音樂學校々歌』たらしむること、策の妙なるものならずや◉箏とヴァイオリンの合奏ほど、面白きはなかりき。こは、その出來ばえの良かりしがゆえにはあらで、稍々滑稽の趣ありし故なり。先づ其發點に於て、兩者不揃にして亂雜を極め、進んで兩者の呼吸愈々合はず、實に滅茶苦茶の音流にて、素よりエキスプレッションなどいふもの、藥ほどもなく、立て板に水を流せしとは、斯ることにや。たゞ音の連續の、情なくも斧にて切り出さるゝを聽くのみ。這れよりは、ピヤノと尺八とを洋曲にあはせて合奏せるなど、却て面白ろかるべし。其ヴァイヲリンの演奏部は、何を基として作りたてられたるものなるや知らねど、三曲合奏の三味線の部を、そのまま西洋譜にうつして、ヴァイオリン部となさば、如何のものにや◉大幸田子の獨唱は、和洋何れともに、餘り大事を取り過ごして、小心翼々の如くに現はれ、子が特色たる何時の生氣を欠き、無理な原曲に拘泥せられたるに非ざやなど思はれたり。然し、其意、餘情を豐かならしめんとするにあるごとけれと、過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとく、寧ろ却て思ふ存分精一杯のぼどこそよけれ◉管絃樂入りの合奏『國の光』は、いふべき事も心付かねど、大村恕三郎君とぞ聞く人のフリユート、この日殊に生氣發動に充されて我儕の耳に入りしは、難有かりき。此人、恐らく管樂仲間の第一位なるべし。自愛せられたきものなり◉ヴァイオリンの二部合奏は、大小幸田子の出しものなりといふにも似ず、變化少くして面白ろからざる曲なりといはんか。これもバツハゆえなるべし◉橘子のピヤノ獨奏はベートーフエンのソナタなりといへど、例の如く人を襲ふ氣力を欠けるは恨めし◉聽きたきものは大幸田子のピヤノ獨奏なり。

（『女學雜誌』四八八号、明治三十二年五月、三三頁）

（1）青柳有美は青柳猛の稚号。

〔八八～八九頁の「音樂界」も参照のこと。〕

**明治三十二年五月七日　同声会春季演奏会**

明治三十二年五月七日（日曜日）午後二時

上野公園地東京音樂學校奏樂堂ニ於テ開會

春季音樂演奏會曲目

同聲會

第一部

一、合唱……東京音樂學校生徒諸氏

甲、ふるき都……（シューマン氏作曲／武島羽衣氏作歌）

乙、野薔薇……（ワインウルム氏作曲／旗野十一郎氏作歌）

二、ヴァイオリン及ピアノ合奏……（幸田かう子／山縣きく子）

ソナタ……ベートーヴエン氏作曲

三、ピアノ獨彈……瀧　廉太郎氏

ヴアリエーション……ベートーウエン氏作曲

四、ヴァイオリン獨奏……エム、ペリー孃

レゲンデ……ウイニアウスキ氏作曲

五、ピアノ四人聯彈……神山橘遠　山戸縣　甲あき絲　重子やく　子子子子

ヘブリーデン……メンデルソーン氏作曲

第二部

六、ヴァイオリン、セロ及ピアノ合奏……幸イエ　ム、田　ペの　リリぶ　ーー　子孃孃

七、獨唱……ク　ル　プ　夫　人

甲、リーベストロイ……ブラームス氏作曲

乙、ツアウベルリード……マイエルくルムンド氏作曲

八、ヴァイオリンセロ獨奏……イー、ペリー孃

九、ヴァイオリン獨奏……ユンケル氏

ピアノ伴奏……ケーベル氏

コンサルト　ミリテール……ベリオ氏作曲

十、合唱（絃樂及ピアノ伴奏）……東京音樂學校諸氏

薩摩潟……鳥シ　居ユ　忱ー　氏マ　氏ン　作氏　歌曲

Concert
GIVEN BY
THE DŌSEIKWAI
On Sunday, the 7th May, 1899,
IN THE
Music Hall
OF
THE ACADEMY OF MUSIC,

UYENO, TOKYO.
THE CONCERT COMMENCES AT 2 P. M.

PROGRAMME.

PART. I.

1. Chorus.
   a. John Anderson.....*Schumann.*
   b. Ich weiss ein schönes Röselein ...*Weinwurm.*
   *The Students of the Academy.*
2. Violin and Piano.
   Sonata. .....*Beethoven.*
   *Miss K. Koda and Mrs. Yamagata.*
3. Piano Solo.
   Variation. .....*Beethoven.*
   *Mr. Taki.*
4. Violin Solo.
   Legende.....*Wieniawski.*
   *Miss M. Perry.*
5. Piano Duo for 8 Hands.
   Hebriden. .....*Mendelssohn.*
   *Misses Toyama, Tachibana, Kanbe and Mrs. Yamagata.*

PART. II.

6. Violin, Violincello and Piano.
   Trio c moll .....*Beethoven.*
   *Misses M. Perry, E. Perry and N. Koda.*
7. Vocal Solo.

a. Liebestreu. .....*Brahms.*
b. Zauberlied. .....*Meyer Helmund.*
*Mrs. Herb.*
8. Violincello Solo.
*Miss E. Perry.*
9. Violin Solo.
Concert Militäre.....*Bériot.*
*Mr. Junker.*
10. Chorus with String Orchestra and Piano.
Zigeunerleben. .....*Schumann.*
*The Students of the Academy and others.*

◎同聲會春季演奏會

昨年の秋季と同く、この春も又、同聲會は學校が催せる演奏會に勝りて成功せるものゝ如く、凡て近年には珍らしく面白き音樂會なりしといふを得んか。この會と、同じ奏樂堂にはハウス指揮の下に開ける明治音樂會とは、蓋し近來音樂會中の白眉ならまし。これ迄何處の樂會に參しても、飽き足らぬ心地のみせしが、この會にて、始めて思ふ存分食ふたけ喰はせられたる如く、滿腹の快ありとやいはん。たゞ第一の合唱『ふるき都』のみは、非常の失敗にて、その亂脈なること、これが音樂學校生徒の唱歌にやと疑はるゝほどなり。假令へば『佳人のそで』の『そ』、『みへずなれど』の『み』、『金壺の酒』の『さ』などの邊にては、女聲方に滅法早く出るものなどあり、聞きぐるしきこと限なし。これは種々原因もあるべけれど、上眞行氏その指揮をやめて、ユンケル氏その任に當れること確に一原因なるべけれ。ユンケル氏の如き癖勝ちの指揮方にては、歌ふもの仲々に苦しく、應々調子外れに流れ易すかるべければ、敦厚にして詩趣多き上氏を指揮者に据え置くこそ却てよけれ◉幸子君と內田とよべる山縣菊子君とのピヤノ、ヴアイオリン合奏なるベートーフエンのソナタは、兩者の氣合よく合して、非常の成効なりしといふべく、とても賴母木橘兩子が合奏の比などに非ず◉瀧廉太郎氏は、今度こそチョツピリせる短かものならずして、仲々に長きベートーフエンものを奏せられて我儕を悅ばせたるは難有く、これも非常の大成効なりしといふより、評すべきなし◉兩ペリー孃と延子君とのヴアイオリン、セロ及ピヤノの合奏あり。延子君はピヤノを彈せられしが、ペリー孃のヴアイオリンこそ仲々におかしきものなれ。その右の肩の關節に何か故障ありてか、妙に肩ばりてゆつたりせず、その弓を用ゆる樣、西洋鋸にて、木を挽くが如しとやいはん。されど、兩孃ともユンケル氏の弟子と聞くたけありて、流石に元氣にして大膽なるは、歎賞するに足るべく、到底音樂學校の姫たちや、なまめける男生などの及ぶところにあらず。さはいへ、無論幸子君などの下にあるものと知るべし◉此の日、特に吾れ人を驚かしたるは、ケーベル博士の伴奏につれて、ユンケル氏が獨奏せるベリオ氏作のコンサルト、ミリテールなり。たゞ驚かしたりといはゞ、足りぬべく、蓋しその曲の壯快なるにもよれど、我儕如き俗耳にはこよなふ面白く、同氏來朝以來第一のものと覺えたり。昨年の卒業演奏會に幸子君のヴアイオリンを聽て泣きしも、たしか同じベリオ氏作のコンサルト第三番なりしと覺ゆ。依て思ふに、凡て氏の曲は、我が國人の樂流に合するものに非ざるか。此後とて、同氏の作を折々出し、その是非を試みられたきものなり◉管弦樂入りの合唱は、近頃既に兩三回これありしも、人聲多くは器聲に消されて、充分の成効を見ざりしが如し。蓋し、管の構造は、頗る人類發聲器の構造に似て、その音色互に相類似し、その强きもの、悉くその弱きものを吸收し去るにこれよらんか。故に二三百人の大勢なるオラトリオ樣のものならは、その管樂も大に合唱の妙を助くべけれど、音樂學校の如き二三十人の合唱にては、却て其妙を削くの恐れありとやいはん。而して、管樂をやめて、弦樂のみを加へたるこの日の『薩摩潟』合唱は、我れを以て見るに、無類の大成効なりしものゝ如し。この點に於て、我れは『讀賣』の樂石君と、全く其意見を異にするものなり。弦樂は人聲と全く音の性質を異にするを以て『薩摩潟』の弦樂は、兩者互に相助け相潤飾し、頗るその妙を發輝せるに似たり。その中にありし人聲各

部のソロも仲々美はしく出來たりしが、神戸絢子君のソツプラノのソロに至りては、實に怪しきまで拙劣にして殆んと調をなさずといふも、過言に非ず。同子のピヤノとて驚くほどのものに非るは、既にいへるが如くなるも、この度のソロに至りては、更に甚しく、音樂學校若し此上ソツプラノの名手なしとすれば、誠に心細きことならずや。生氣のなきは素より、その聲又もつれて頗る昂らず◉この日殊に遺憾なりしは、これほどの成効に、人出の少かりしと、ペリー孃がヴアイオリン獨奏の見合はせられたることなり。蓋しその奏せられんといへるゲンデーの曲は、曾て延子君の奏せられて、大に我れを打ちしものなれば、けふこそ比較し見んものと、待ち構へゆきたればなり。

（『女學雜誌』四八八号、明治三十二年五月、三三～三四頁）

〔八七～八八頁の「音樂界」も参照のこと。〕

## 明治三十二年五月　試業演奏会

〔八七～八八頁の「音樂界」を参照のこと。〕

## 明治三十二年七月八日　卒業式

東京音樂學校　生徒卒業證書授與式及音樂演奏順序

明治三十二年七月八日（土曜日）午後三時
ヨリ上野公園東京音樂學校ニ於テ執行

東京音樂學校生徒卒業式順序

一、報告
二、卒業證書授與
三、學校長心得渡邊龍聖告辭
四、文部大臣演說
五、卒業生徒總代謝辭

演奏曲目

一ピアノ聯彈　卒業生　神戸　絢
　　助教授　橘　絲重
一合唱　研究生　瀧　廉太郎
　　オウヴエルテユーレ　研究生　前田久八
　　甲　別歌　モツアルト作曲　卒業生及生徒
　　乙　さつき　クレムゼル作曲　旗野十一郎作歌
一絃樂　甲　エーゼストート　メンデルゾーン作曲　大和田建樹作歌
　　乙　アニトラスタンツ　卒業生及生徒
一ヴアイオリン及ヴイオラ　グリーグ作曲
　　シンフオニーコンセルタンテ　同　上
一ピアノ獨奏　研究生　幸田　幸
　　ヴアリエーション　モツアルト作曲
一ヴアイオリン獨奏　教授　幸田　延
　　コンセルト第一部　卒業生　神戸　絢
一合唱（絃ピアノオルガン合奏）　メンデルゾーン作曲
　　高津宮　職員及生徒　研究生　幸田　幸
　　メンデルゾーン作曲　鳥居忱作歌

Commencement Exercises
OF THE
Tokio Academy of Music,
UENO PARK.
3 P. M. Saturday, July 8 th, Meiji 32 (1899).

Programme.

I. Report.
II. Presentation of Diplomas.
III. Address to the Graduating Class by Riusei Watanabe, Acting Director of the Academy.
IV. Address by His Excellency Count Kabayama, Minister of State for Education.
V. Response by the Representative of the Graduating Class.

1. Two Pianos for 8 Hands:
Ouverture zu "Figaro's Hochzeit" .....*Mozart.*
Misses Kambe, Tachibana and Messrs Taki, Maeda.

2. Chorus:
*a.* Lebewohl .....*Kremser.*
*b.* Mailied .....*Mendelssohn.*
Graduates and Students of the Academy.

3. String Orchestra:
*a.* Ases Tod from "Peer Gynt Suite" .....*Grieg.*
*b.* Anitra's Tanz 〃 〃 〃 〃 .....*Grieg.*
Graduates and others.

4. Violin and Viola:
Symphonie Concertante .....*Mozart.*
Misses K. Koda and N. Koda.

5. Piano Solo:
Variation in B dur.....*Mendelssohn.*
Miss A. Kambe.

6. Violin Solo:
Concert 1st Part .....*Mendelssohn.*
Miss K. Koda.

7. Chorus with String Orchestra, Piano and Organ:
Elias .....*Mendelssohn.*
Instructors, Graduates and Students of the Academy.

〔批評は八八～九〇頁の「音樂界」を參照のこと。〕

**明治三十二年十一月二十五日、二十六日　第三回定期演奏会**

明治三十二年十一月二十五日（土曜日）午後一時半開會

秋季音樂演奏會曲目

東京音樂學校

第一部

一　合唱……職員及生徒

甲、天浮橋……カシオリニー作作歌曲
　　鳥居忱

乙、秋風吟……武島又次郎作作歌曲

一　ヴァイオリン獨奏……助教授　頼母木コマ

アンダンテ、レリギオソー……トーメ作曲
一 絃楽……職員及生徒
甲、アゼス、トード……グリーグ作曲
乙、アニトラス、タンツ……同上
一 ヴァイオリン、ヴイオラ及ピアノ……（教師アウグスト、ユンケル／教授幸田延／教師フォン、コイベル）
シンフオニー、コンセルタンテ……モツアルト作曲

第二部

一 管絃楽……職員及生徒
甲、モリス、ダンス……ジエルマン作曲
乙、シエッパーヅ、ダンス……同上
一 ピアノ獨奏……研究生 瀧廉太郎
ソナタ……ベートーヴエン作曲
一 合唱……職員及生徒
甲、秋の別……（クレムゼル作曲／大和田建樹作歌）
乙、夕映……（伊太利亞ニーポリタン民歌／中村秋香作歌）
一 ヴァイオリン及ピアノ……（教師アウグスト、ユンケル／同フォン、コイベル）
ソナタ……ベートーヴエン作曲
一 合唱（管絃合奏）……職員及生徒
高津宮……（メンデルゾーン作曲／鳥居忱作歌）

音樂學校秋季演奏會　同會は去る廿五廿六の両日同校音樂堂に開けり、初日は學生及職員生徒の知己を招きて滿場立錐の地なくその數無慮千百餘名と注せらる、後日は各省大臣高等官両院議員各國公使、領事等を招きてこの日亦立錐の地なし、演奏は両日共非常の好成績にて去七月の卒業式演奏に比し頗る長足の進歩を示したり、演奏批評は明日の紙上に掲ぐべし

（『讀賣新聞』明治三十二年十一月三十日）

## 音樂學校 秋季大演奏會批評

黄華生

天寒く風膚を刺して滿都只物寂しき今日此頃東京音樂學校秋季大演奏會は霜月二十六日忍ケ岡の樂堂に開かる此の日の來賓は樺山文部大臣、德川公爵、獨逸、露西亞の両公使を始め貴衆両院議員其の他朝野の紳士淑女無慮千有餘名にして頗る盛況を極めたり聞けば前日も府下各學校生徒及其他の希望を充さんために特に同種の演奏會を催され此の日に劣らざる盛會なりしとぞ今畧評を試みんに當日の演奏は概して好成績にして就中合唱の如きは前回に比較せば一層の進境に達せるが如く曲目の撰擇も又概して當を得たり職員諸氏の平素熱心なる薫陶さこそと思ひ遣らるゝなり

第一部

第一　合唱、甲、天浮橋、乙、日の出の歌共に上出來なりしが日の出の歌は寧ろ日沒の歌と改題する方一層原曲の悲味に適合すると思ふは如何に曲目には秋風吟とありて多分改題せられしならんか余輩は却て秋風吟の方を贊せんとす

第二　頼母木（たのもぎ）こま子の「ヴァイオリン」獨奏「アンダンテ、レリギヲソー」は發想宜しきを得且つ音調滑かにして近來同子が技倆の大に圓熟したるを証するに餘あり然れども惜哉（をしいかな）同子は稍意氣込に乏しく今一境の奮發を要す子夫れ勉めよや

第三　絃樂、甲「アゼストード」は曾て本年の卒業式に於て聽聞せしこ

とありしが今回は熟練の功顯はれ一層原曲の意味を顯し得て餘蘊なく恰も寂莫たる深夜に鬼神の出沒するが如き感情を喚起せしめたり、乙「アニトラスタンツ」は大体に於て無難の出來なりしが「セロ」の調子稍不整なりしが爲め少しく混雜の様ありしは遺憾なりしが是とても決して失敗と云ふ程にはあらず先々上出來と云ふも妨げなく妖女の舞蹈は左こそあらんと思はしめたり

第四　「ヴァイオリン」、「ビオラ」及び「ピアノ」、合奏「シンフオニーコンセルタンテ」は當日の呼物の一つにて流石は當代名家の演奏とて批難すべき点更になく三名家が絶妙なる手腕には感嘆の外なし唯余輩が憾みとする所は「ヴァイオリン」と「ビオラ」との調子が其の音量に於て少しく權衡を得ざりしことにて若し幸田孃「バイオリン」を取りユンケル氏「ビオラ」を取りて演奏せられしならんには恐らくは此の憾みはあらざりしならんか

第二部

第五　管絃樂、甲「モリスダンス」、乙「シエッパーヅダンス」共に「ゼルマン」の作に係る此の曲は甲乙共に頗る賑かにして面白く素人受けよき曲なり殊に「トリアングル」及び大鼓等を交へたりしは一層興味を添へたるが如し

第六　瀧氏の「ピアノ」獨奏「ソナタ」は有名なる「ベートーヴエン」の作にして曲柄の素人好きのせざるは是非もなきことながら同氏が技倆の進歩は確かに見えたり好男兒奮勵一番せよ

第七　合唱、甲、秋の別、乙、夕映、共に第一部の合唱に比し一層の上出來なりき演奏者中には近頃入學の豫科生も少からず見受けたりしが斯る上出來は豫想外なりき

第八　「ヴァイオリン」及「ピアノ」合奏「ソナタ」は是ぞ當日の大立物なるユンケル及コイベル二大家が妙腕を奮はるゝ所にして千有餘の聽衆が今や遲しと待ち構へしことゝて二氏の演壇に顯はるゝや一同拍手喝采して之を迎へたりコイベル氏が「ピアノ」を彈ずる様は猛虎の巖頭に嘯くが如くユンケル氏が「ヴァイオリン」は龍の雲間に駈るが如し美音は妙音と相應じ至絶至妙聽衆皆醉へるが如くさしもに廣き樂堂も寂として水を打ちたるが如し軈て演奏終るや一齊に拍手喝采する響は百雷の一時に落つるかと疑はれたり

第九　合唱（管絃合奏）高津宮は曾て卒業式の際にも聽聞したりしが今回は練習の功顯はれ一層壯大の感じを起さしめたり獨唱部を唱ひし納所氏が技倆も見事なりし

管絃樂は全体四曲ありしが其の中三曲共舞蹈曲なりしは素人受は兎に角選擇當を得たりと云ふ可らず同校生徒の技も近來追々進境に達したれば次回の演奏會には「ベートーヴェン」の「シンフオニー」の如きものを選擇せられては如何に囑望々々

（『讀賣新聞』明治三十二年十二月四日）

## ◎近時の二演奏（承前）

樂石生

是は大体に就ての事なるが當日の演奏曲目を誰れの撰定になりしかは知らねど『モツアルト』の作一ツ、『ベートーベン』の曲二ツ、而もそれぞ〳〵長くてむづかしきものを加へしは如何なる考か余の如きは第一部の『モツアルト』にて十分『クラシツク、ミユージツク』の御馳走に飽きたる曉に又瀧氏の『ピヤノ』『ベートーベン』殊に此作家が『モツアルト』の風のみ學びし當時の曲をきかせられ加之又々ユンケル、ケーベル二氏の連奏にて『クラシツク』の三の矢を受けし苦難は如何ばかりなりしよ、たゞに高尚々々と上のみ見て後ろには口を開きてぽんやり乎たる聽衆の多きに御氣が付かれぬにや當今我邦の人民は極めて卑近なる近世洋樂すら理解し得ざる否寧ろ常々音樂會に出入する人々すら其妙味を味ひ得ざるもの多し否寧ろ演奏者は自身すら其曲の意味に通曉せらるゝやは疑問なり其所にて長長と古樂を奏するとは何の故ぞやこれは曲目制定者の責任なり

第二部に於けるユンケル、ケーベル二氏の連奏『ベートーベン』はあらずもがなと思ひぬしかも其演奏も甚だしく不親切にして多少聽衆を無視せし傾ありしに於てをや

瀧氏の『ピヤノ』獨奏は同氏の技術の多少進歩せしと同時に氏がケーベ

ル氏を眞似る技量も大に上進せる事を証せり氏にしてもし眞面目に自己の職業に熱心ならば十分の發達疑ひあるまじ

最後合唱『高津の宮』は至極の難物なりき前評者は壯大と云はれしがもしそれ音の大なるの意味なれば適評と云ふべし此合唱に就ては嘗て余が同校卒業式の批評中に詳しければ今は別に云はず喧嘩する下女、救を呼ぶ老人等と云ふ惡口は今度も亦適用し得るなり

以上記せしは二十五日の畧評なり前評言の二十六日の演奏を評せしなれば説の異なりし点もあり讀者は此心して讀まれたし

（『讀賣新聞』明治三十二年十二月九日）

## 明治三十二年十一月　試業演奏会

〔八八～九〇頁の「音樂界」を参照のこと。〕

## 明治三十二年の概評

### ○音樂界

七月の初めにあるへき音樂學校卒業式を終らば、又秋風の立ちそめて、「シイゾン」の歸り來る迄はいづこにも演奏會の開かるべくもあらじ。されば今は今年上半期の樂界の消息を傳へて、後半期の如何を想ふには好き時節なるべし。

去年の終りより此頃に至る迄、音樂界に生ぜし主なる出來事は、十數回の演奏會音樂學校の獨立、「ユンケル」氏の雇入れ、幸田幸孃の留學確定等なり。かく列擧し來れば眞に華かにして急足の進歩ありし樣なるが、其十數回の演奏は如何なる有樣なりしかを思へば、決して滿足し得べきものならず。一月早々開かれし明治音樂會は先つ失敗せり。次て中央會堂に開かれし慈善音樂會は、幸にして來聽者の多數を得しも、演奏せるものにて聞くべきものは「ケーベル」博士の「ピヤノ」一つ位とはなさけなき事ならすや。二月には一回もなくて、三月に音樂學校學友會音樂會等ありき。此會はたゞ當校に「ピヤニスト」神戸孃あるを紹介せしのみ。同じ月の明治音樂會は稍成功せり。「ハウス」氏を聘して技術顧問とせし甲斐見え、管絃樂等前々に比しては數段の進歩を示せり。四月の末に開かれし音樂學校演奏會はめづらしき盛會なりき。橘孃の「ピヤノ」、「ユンケル」「ケーベル」二氏の「ピヤノ、ヴイヲリン」合奏、幸田延孃の獨唱等皆それ〴〵得意なりしならむ。されど最後の合唱國の光は大に當校聲樂の價値に疑を抱かしめぬ。同し月の明治音樂會は中通りの成蹟（ママ）なりき。「ハウス」氏は病氣にて指揮する事を得ざりしが、會員各自十分の注意を以て演奏し、皆それ〴〵にめでたく、ことに佐藤左久氏の箏曲はきゝものなりき。同じ二十九日錦輝館に於きて、大日本婦人教育會の催せる音樂會は幸に聽衆多かりき。五月六日の女子獨立學校音樂會は不成蹟なりしがこれ等の慈善會は別に論ずるに足らず。たゞ怪しきは七日に開かれし同聲會なりき。來會者の少なかりしは天氣の都合として、又餘儀なき事なれとも、曲目至て面白からず、しかも外人の演奏を主とせる如き有樣なりしは、兎に角當時一流の樂人を網羅する此會としては相應しからさりき。同し月の半に開かれし音樂學校分教場の試業會は、まだうわかき生徒諸氏の技とて評するまてもなし。此月の明治音樂會も一通りの出來にて取出でゝ云ふ程のこともあらざりき。此他にも二三の慈善會等ありしが、總じて數多かりしにひきかへ、いづれもめざましき程のものなく、前年のに比して寧ろ遜色ありと云ふべし。されど當年上半期の演奏會に於ては、發達進歩の跡殆んど見えざりきといはんも酷ならじ。

音樂學校の獨立は久敷以前よりの問題なりしが、三四月頃に至りて確定せり。されどこれも當局者が留學生を派するは單に技術に秀しものを作らむの目的ならば、幸田孃こそ最も適任ならめど、もし其目的にして其學生歸朝の上は、此校の有力なる指導者となさむと云ふにあらば余輩は孃の撰出に首肯し得ざるなり。總て學問技藝を問はず、多數人の上にたちて統御の任に當る者を、女性に求めんは失當なり。かゝる事は人の皆よく云ふ所なれども、ひとり音樂にありては猶未だ迷のさめきらずして、望を常に女流樂家に置くの弊あり。こは一方には男子に於て技術に秀でしもの少なき爲ならむも、技藝の二の町なる男子其拔群なる女子よりも、よく多くの仕事をなすものなり。當時はなほ未だ洋樂創立の時代なれば、一人の卓越せる技

術者を作らむより、寧ろ音樂教育に長ぜし人を作ること却て急務ならずや。

音樂學校はかく時勢に適せざる方面に勉めつゝある間に、式部外山近衞等の各音樂部は極めて沈默を守り、たゞ式部の諸氏は月々明治音樂會に於て働くのみ、當年前半期の洋樂界は其裏面に於ては、寧ろ怠惰に過したりと云はざるを得ず。

かく洋樂界が無爲なりし間に、和樂界も亦至て平和に保守的なる半年を過したり、從好會等二三の催しと、各家の春季演奏會とが主なるものなり。何處にても琴三味線の音聞こえて、外見大に盛なる如く感ぜらるゝも、箏曲は山勢氏一派の專有となり、其欠點なる無味の奏法は弟子より弟子に傳はりて一層に甚しく、余輩をして漸く「窓をもるゝ六段江の島」に耳を掩はしむるに至れり。只二三年以前に北越の旅路より歸京せる佐藤左久氏の技倆非凡なるは感服の他なし。もし世人が門閥の迷を去り、此人の技を學ばゝ、箏曲に一生面を開かん事疑ひなけむ。長唄清元の如きに至りては、眞に保守一方に流れ殆んど其改良に望を絶たざるべからざるの有樣にあり。從好會にて改良せる汐汲の如き、未だ滿足する事能はず。

如是叙し來らば樂界の前途は進歩の望皆無と云ふが如くなれども、又決して然らざるものあり。此春我が　皇后陛下は音樂學校に臨御ありて、親しく職員生徒の演奏を聽かせ給ひき。此榮譽たゞ名義の變更のみにて別段の改善もなきやうなり。此校の內情などもらすは、好ましからぬことなれば、今は云はねど、兎に角其統御者の適任ならぬは疑もなし。從て部下の人々が自ら我儘なるはまぬかるべくもあらず。此際獨立を機として十分の刷新ありたきものなり。

獨立と殆んど同時に、「ユンケル」氏は入て此校の教師となれり。此人去年あたり渡航し來りて以來、京濱間の演奏會に幾度か其技を示して、一個の「ヰオリニスト」なる事はよく知られたり。されど我帝國唯一の音樂學校の教師となり、兼て式部音樂隊の指揮者とならむとは、余輩の夢想だもせざりし所なり。此人果して一校の指導者管弦樂の「コンダクトル」たり得るの人物なりやは、未た疑問に屬す。嘗て兩三度此人の「アレンヂメント」になれる管絃樂をきゝしが、余輩の見若し誤らずは未だ其器にあらざる如く思はる。此人を得きとも、音樂學校良教師を得たりとは未だ容易に斷ずるを得ず。

音樂學校より海外留學生を派遣せんとは前々よりの風說なりしが、選遂に幸田幸孃に落ちぬ。學なし、只卒業式に際しての演奏ありしのみなり。此學を擴張して所謂音樂學校か學校としての演奏會を開き朝野の士女に今音樂學校か爲しつゝある事業何如を紹介せられたるの一事は余輩大に渡邊主事矢田部校長の熱心を多とするもの。たとひ其演奏會の結果何如にせよ、音樂學校としての活動は實に此演奏會に起因すと稱して不可なかるへきを信して疑はざるなり、之れ余輩か賛成する所以の理由にしてまた他の幾多演は斯道にとりては少なからぬ奬勵となりき。又外山、伊澤等の諸氏は幾度か音樂に對する意見を公けにせられ、加之演奏會の度々に技術の批評を掲ぐる新聞紙あり。之れ等は皆世人の音樂に注意し來れるを證するに足る。且つ音樂學校に於ても、昨年より分教場を設けて、一般好樂者に斯道研究の便を與へたり。なほ又青年樂手よりなれる明治音樂會の、幾多の失敗に屈せずして益勉むるあり。若き「ピヤニスト」なる瀧氏の如き、其技藝の日に月に進みつゝありと聞く。されば余輩は涼風のわたり初めて、都の再び賑はん頃に、目ざましき演奏會の數多くあらんを期して疑はず。先進後進の樂人諸君が相扶けて音樂の爲に盡力し、其發達をはかられん事は、心よりして望む所なり。

（『帝國文學』第五巻第七号、明治三十二年七月、一一七～一一九頁）

## ○音樂界

余輩が嘗て三十二年七月の當誌上に於て同年前半期の音樂界消息を傳ふるや、明治音樂會第十四回演奏會に於て筆を止めたり。其後同年中に演奏會の催ありし事僅かに六旬、即ち七月一日に於ける明治音樂會第十五回演奏會、此演奏會は曲目變更等多かりし由閑を得ずして聽もらせし故今は是非も云ひ難し。七月八日に執行せられし音樂學校卒業式に於ける演奏會、此會にては注目すべき演奏二三ありき、即ち卒業生神戸孃の洋琴獨彈、研究生幸田幸子孃の「ヴヰオリン」獨奏及び合唱、高津の宮等とす。此會に

於ては前記三演奏と今一ツの合唱とを加へ都合四曲は「メンデルスゾーン」の作、此他「モツアルト」の曲二ツありき、これ等は特に曲目制定上參考ともなるべきものなり、同作家の手になりしものをかく數多く出すは其結果は如何にや將來十分の研究を要すべし。かくて夏期六旬の間はいづこにても催なくたゞ明治音樂會員が八月上旬東海道各地に巡回演奏をせしのみ、三伏の暑中毎日毎夜の演奏は非常なる勉强と感服の他なし。秋風吹きそめし頃より、十月二十九日明治音樂會は第十六回演奏會を開けり、此會にてはきくに足るものあらざりき、こは全く次回の演奏預備に忙かしかりし故と後に思ひ合されたり。月をかへて十一月に音樂學校分教場は生徒の成績を其父兄保證人に示さむとて試業會を一ツ橋教場に於て開けり、一般に生徒の成績は前回前々回に比して數等の進歩を示せり、特に上宗孃の「ピヤノ」獨奏「クレメンチ」作「ソナチナ」の如き優に專門家を凌駕する技能なり、余輩はこゝ四五年を出でずして斯道に名媛を出すべき預言を爲すに躊躇せず。又柳田、荒川二孃の洋琴の如きも初學者として極めて有望なるものなりき、若し十分の熱心勉强を以て修業せらるれば將來の發達驚くべきものならむ。此他小童宇津木氏の箏、目賀田、樫村諸孃の「ウキヲリン」高橋孃伊藤孃等の箏等とりぐに數段の進歩を見しは音樂普及の上に於て余輩の大に賀する所なり。聞けば音樂學校にては猶他に一の分教場を設置するの企ある由、余輩は當局者の勞を謝すると共に猶他府縣にも音樂專門學校の設立せられん事を熱望するものなり。同月二十六日音樂學校は同校秋季演奏會を催せり分教場の日に月に發達するに引きかへ本校の甚しく不活潑なるはいかにぞや、此度の演奏會の如き「ユンケル」「ケーベル」二氏を待ちてからくも其會を賑はしたる跡あり、其他僅かに賴母木孃の「ヴヰオリン」を聞くべきのみ、將來極めて有望なりと目されたる瀧氏の如き奏法漸く亂れて誠實を欠く傾を生ぜり。此多望なる青年樂手も今にして猛省せずんば同じく碌々の徒に列すに至らん、合唱の如きも進歩せずと云はんより寧ろ退歩せりと云はざるを得す、唱歌者各己の發音練習の不足なるは蓋其主因なるべし。抑此音樂學校演奏會は同校學友會演奏會の變態せるものと見做し得べく、該學友會は嘗ては大に世の注意を引きし團躰なりき、明治二十六年の暮橘絲重孃は此會にて「フンメル」の「ソナタ」を奏せられ好樂者流の心を奪はれし事ありき、二十七年の春には幸田幸孃は「ベリオ」の「コンセルト」を奏して當時一流の「ウキヲリニスト」たる桂冠を得られし事ありき、合唱、薩摩潟、富士登山、子日の遊、干瓢、頌德の歌、此御山、雷鳴、春の行方、國の光、等皆此會によりて紹介せられしなり、その樂界に貢獻せし事の大なる又たいはでもあるべし。然るに現今の有樣に至てや、演奏は漸く無責任に傾き、殊に新曲を出す事比較的少なくなれるは最痛歎すべきなり。往時は合唱の數多くして少なくも八九曲ありしに、當時は其數大に減じ多くして五六回に過ざるは何の結果なるや、此現象の果して喜ぶべき事なるか否かは當局者の十分に思慮せられたき事なりかし。十二月二日に催せる日本音樂會の如き前の二十六日に於ける音樂學校演奏會と大同小異にしてたゞ軍樂隊のありしのみ、此會も亦從來盛なりしものなり、日清戰爭以前に於ては學友會の他に存する唯一の音樂會とも云ふべかりき、開會の度毎に我邦の上流社會、并に外人の多數を其聽衆として有したるも近來は大に衰運に傾けり、二日の會の如き廣き大成殿の中庭にてはことに寂寞を感ぜり、これ又大に同會幹事諸氏の奮勵を望む所なり。同月九日に上野の樂堂に催せる明治音樂會第十七回演奏會は普通の來聽者を得しのみなれども演奏は近頃の好成績なりき、顧問「ハウス」氏を得てより此會は急足の進歩をなし幾多の大曲を演奏せり、三十一年の春より始めて僅に二星霜を經し間に此大進歩をなす、「ハウス」氏にして益健康に會員諸氏にして益勤勉ならば將來の成功疑ふべからず、此演奏會を以て三十二年演奏會の最終とす。此後小演奏會の一二ありしも云ふに足らず、此他邦樂に於ては各家の納會數多くこゝかしこに催されたり、余輩は唯後半期に於て同聲會の演奏あらざりしを惜む、此會は去る二十九年の春第一回演奏會を催してより常に年二回づゝ開會し其都度面白き演奏も數多くありき、然るに三十二年春季よりして漸く振はず、遂に秋季には開會の順序に至らざりき、音樂學校卒業生を網羅せる此會としては奇怪なる事なり、此會の如き我邦最高の音樂團躰たるべき資格の存するに、今後會員諸氏は十分の熱心と奮發とを以て斯會隆盛を圖られたし、之を要

するに明治三十二年の樂界は極めて平凡の經過をなし、紀念とすべきもの殆ど之なしといふべし。而してこれに對する一般社會は如何と問ふに例により皆極めて不注意なり、僅かに讀賣紙上に樂石生の批評を散見するのみ、音樂に對せる意見を吐露する者殆ど之なく、音樂に對せる著述に至ては終に之を見ることをえず、極めて冷淡に極めて不熱心に世人は、此國民が精神的教育の重要なる一端を看過しつゝあるなり、獨逸より歸朝せられし田中氏等二三の人よりなれる俗曲研究の如き猶未た滿足すべきものにならず、蓋此如く無頓着なる社會に對しては技術家か不熱心に且つ不親切に流るゝ事無理ならず、余輩は斯道熱心なる人々相一致して音樂批評會の如きものを組織せば面白き結果あらむと信ずるなり。

（『帝國文學』第六巻第一号、明治三十三年一月、一一三～一一六頁）

**明治三十三年三月四日　試業演奏会**

○音樂學校第五回試業會　今四日午後一時半より一つ橋分教場に於て講習科生徒の第五回試業會順序は左の如し

一唱歌　單音　一春の夜　二樂しき教場

一ピアノ三人聯彈（吉原千代、渡部君代、同さつき）瑞西國調「ツエルニー氏作」

一箏（宇津木富三郎、今井とし、榎本とき）早春興「中村氏作歌今井氏作曲」

一ピアノ聯彈（上原せつ、同きせ）練習曲

一オルガン（仙波あい）一カンテキク「作曲者未詳」二ヴオルンタリー「同上」

一箏（金澤やすの、内藤すて、青木しげ）越後獅子「峰崎勾當調東京音樂學校修正」

一ピアノ聯彈（松平れい、松本たつ）エールデコーロア「佛國ルイ第十三世作」

一ヴアイオリン（島川のゑ、細谷やい、目賀田正代、樫村たけ）小品二曲「シエロイデル氏作」

一ピアノ（柳田かう）ソフラキフノ「クーラウ氏作」

一唱歌複音（撰科女生徒）一千町田「メンデルスゾーン氏作曲某氏作歌」二こども「ウエーベル氏作曲旗野氏作歌」

一ピアノ（上原きせ）水車「エンセン氏作」

一箏（北村とり、高橋せい）きらし「北澤勾當調」

以上　外に本校教師ユンケル氏其他數氏の演奏あり

（『國民新聞』明治三十三年三月四日）

**明治三十三年五月十九日、二十日　第四回定期演奏会**

明治三十三年五月二十日午後二時開會

春季音樂演奏會曲目

東京音樂學校

一合　唱　甲　奉祝の歌

乙　奉祝の歌

一箏　鶴　龜

春季演奏會曲目

一管絃合奏　シンフオニー……シユーベルト作曲

一 合唱

橘の薫……鳥シェル居忱ビニー作歌曲

一 管絃合奏

甲 アンダンテ……ユンケル作曲

乙 モリス、ダンス
丙 シェッパージ、ダンス……ジェルマン作曲

一 合唱

甲 アベ、マリア……コイベル作曲

乙 天の浮橋……鳥カシオリ居忱ニー作歌曲

一 管絃合奏

ウェッディング、マーチ……メンデルゾーン作曲

一 合唱（管絃風琴合奏）

金鵐……鳥メンデル居忱ゾー作歌曲

SPRING CONCERT
OF THE
Tokio Academy of Music
TO BE HELD AT
UENO PARK
ON
Sunday, May 20th, 33 Meiji (1900).
AT 2 P.M.

CELEBRATION.
On the occasion of the Prince Emperial's Wedding.

SONGS AND KOTO MUSIC.
CONCERT
CONDUCTED BY PROF. JUNKER.

Programme.

1. ORCHESTRA:
   Symphony, B minor (unfinished).
   First Movement .....Schubert.
2. CHORUS:
   Requiem, C Minor .....Cherubini.
3. ORCHESTRA:
   *a.* Andante religioso.....Junker.
   *b.* Morris Dance .....} German.
   *c.* Shepherd's Dance, from Henry VIII .....}
4. CHORUS:
   *a.* .....Koda.
   *b.* Ave Maria .....Koeber.
   *c.* Veni Creator .....Casciolini.
5. ORCHESTRA:
   Wedding March .....Mendelssohn.
6. CHORUS, ORCHESTRA AND ORGAN:
   "And then shall your light,"
   (from the Elijah) .....Mendelssohn.

本校生徒ノ學業成績ヲ公表シ併テ技術ヲ奬勵センガ爲メ春秋二季ニ音樂演奏會ヲ催セリ春季演奏會ハ五月十九、二十日ノ兩日秋季演奏會ハ十二月八、九ノ兩日擧行シ二回共初日ニハ諸學生生徒其他篤志ノ者ヲ入場セシメ第二日ニハ在朝在野ノ別ナク著名ノ學者、政治

家、教育家、實業家等ヲ招待シタルニ兩度共來會者千有餘名ノ多數ニ達シ會場ノ狹隘ヲ感ジタリ其演奏順序左ノ如シ〔曲目省略〕〔手書き〕

（『明治三十三年度年報』）

○音樂界

去月廿日、音樂學校春季演奏會には、御慶事奉祝の合唱二歌、箏曲「鶴龜」を始とし、西樂の合唱、管絃合奏數種ありしが、其内「シンフォニイ」「モリス、ダンス」「シェッパアズ、ダンス」「婚姻進行曲」を除くの外、餘は器樂も、聲樂も、皆悉く基督教樂なりしは、此校に珍らしき趣向と謂ふ可し。ユンケル師作「アンダンテ、レリジオソ」既に宗教の素無しとせず、ケエベル師作合唱「エニ、サンクテ、スピリトゥス」は純然たる讃美の曲なり。「橘の薫」と題して小楠公を咏じたる歌は、宗教の樂に、強ひて忠君の意を被せたるに過ぎず、實はケルビニイの「レクイエム」なり。又「天の浮橋」といふ合唱は、カシオリニイ作「エニ、クレアトル」にして、基督教樂の醇なるもの、最後の合唱「金鵄」も亦、メンデルスソオンの豫言者「エリヤ」の一節なるべし。今回の演奏は、斯の如く、合唱合奏の類なれば、全般に就て評せむに、聲樂に於て、近時此校の最高音は、傑出の歌者を缺きたる如く、坐に數年前二三のソプラノありて、獨吟に美音を弄し、合唱に衆聲を導きたりし盛時を追憶せしむ。管絃樂に於て、ギオロン部は、適當の代表ありて、此校の傳を保てども、バッソ等の類に外人數名を交へたるは何故ぞ。其他なほ三四の歐米人ありしは、果して校外者なるか否かは知り難けれど、兎に角、此校の音樂は、善かれ惡かれ、なるべく邦人の演奏に依らむこそ望ましけれ。又曲目選定に就て言はむに、近時此校の樂會に、唱歌獨吟、又は洋琴ギオロン等獨奏の〔曲〕目なきは如何。又合唱に歌者の數のみを增して、各部聲量の比例、又歌聲の微影に少しく注意を怠る如き跡あるは何故ぞ。徒に合唱の聲强大に過ぎて粗漫に失し、表情法に用意淺きは吾等の與せざる所なり。又歌詞の方面より論ぜむに、近業多くは叙事の傾を帶び、抒情の意少し。これ樂曲の性質にも因る可けれど、一には叙景、友情等に限られ、奔放なる情熱の歌を草する能はざるより、作家が歴史古傳に逃れむとすればならむ。されば吾等は樂曲選定の時は管絃の伴奏を要する今の複雜なる合唱の傍らに、幽婉なる民謡風の樂、例へば英獨伊の旋律、又はシウベルト、シウマン等の抒情歌を加へて、着實なる音樂趣向を助長し、作歌者も亦これまでの無味なる花鳥風月忠君友情の歌詞のほかに、まことの情の哀を傳へ、活きたる自然の美を寫し、沈痛なる愛國の調、深遠なる宗教の聲を發揚せむことを冀望す。

然れども要するに今回の演奏に於て、敬虔深沈の宗教樂を、音樂學校の樂堂に耳にし得たるは、吾等の大に賛同する所、さればとてかくの如く聖樂をのみ奏せよといふにあらねど、爾來此種の樂曲に、適當の地位を與へて、莊重の趣味を普及せしめむことを囑す。

又曩に報ぜし如く田中上原氏等の組織せる攷樂會は、聲は高からねど、質實なる研鑽を積みて、俗謡をも攷究し、就中田中氏は近時三味線樂に注意しこれに和聲を添ふる工夫中なりといふ。此種の研究は、元來音樂學校の夙に着手すべきものなる可けれど、未だこゝに何等の活動なきに際し、篤志の士が會を組みて、此難事業に當らむとする意氣のほと察するに足れり。又明治音樂會は今回少しく規則を改良し、次會よりは舊に增して、一段の美術的價値を添ふるならむと噂すれば、好樂の士女今より指を屈して此會の演奏を待つなるべし。

（『帝國文學』第六巻第六号、明治三十三年六月、一四〇～一四一頁）

## 明治三十三年六月三日　試業演奏会

○音樂界

〔前略〕

又音樂學校分教場は去六月三日の第六回試業會に於て一段の進歩を示せり將來我邦音樂普及の上に一大光彩を添へむ事吾等の囑望する所なり。因て記す、音樂學校出身の『洋琴家』瀧廉太郎氏は此程獨國留學を命せられぬ。男子にして此命に接せしは氏を以て嚆矢とすれば隨て其責任や大なりと謂ふ可し。ことに吾等はさきに洋行せる幸田幸孃と其結果の優劣を比較

し得るの便あるを忘るべからず。

（『帝國文學』第六巻第七号、明治三十三年七月、八二～八三頁）

**明治三十三年七月七日　卒業式**

東京音樂學校生徒卒業式順序

明治三十三年七月七日（土曜日）

午後三時半ヨリ施行

卒業式

一　報告

一　卒業生ピアノ獨奏

一　卒業證書授與

一　卒業生四部合唱

一　校長告辭

一　文部大臣演説

一　卒業生總代謝辭

演奏

一　合唱　生徒

甲　樂德……（バッハ作曲／旗野十一郎作歌）

乙　蘇武……（メンデルゾーン作曲／鳥居忱作歌）

二　ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ合奏　教師コイベル／教授幸田延／教師ユンケル

アンダンテ／メニエエットー／アレグレットー……モツアルト作曲

三　獨唱　來賓青木子爵令孃

甲　グーテ、ナフト／乙　エス、ハット、ヂー、ローゼー／丙　リーベル、シャッツ……フランツ作曲

四　ピアノ、ヴィオラ合奏　教師コイベル／教師ユンケル

アレグロ、アパシオナタ／アンダンテ、ウン、ポコ、アダジオ／アレグレットー、グラツイオソー／ヴィヴァツエ……ブラームス作曲

五　合唱　生徒

甲　王昭君……（メンデルゾーン作曲／武島又次郎作歌）

乙　告別……（メンデルゾーン作曲／文學博士黑川眞頼作歌）

Graduating Exercises
OF THE
Tokio Academy of Music,
UENO PARK
Saturday, July 7th, Meiji 33, (1900).
3. 30 P.M.

PROGRAMME

Graduating Exercises.

I.—Report.

II.—Piano Solo by a Graduate.
III.—Presentation of Diplomas.
IV.—Double Quartette by members of the Graduating class.
V.—Address to the Graduating class by Riusei Watanabe, Director of the Academy.
VI.—Address by His Excellency Count Kabayama, Minister of State for Education.
VII.—Response by the Representative of the Graduating class.

Concert.

1. CHORUS:
   *a.* Chorale—"If I should e'er forsake Thee" .....Bach.
   *b.* He that shall endure to the end .....Mendelssohn.
   *Students of the Academy.*
2. TRIO *in E flat major for Piano and Viola* .....Mozart.
   Andante,
   Menuetto,
   Allegretto,
   *Dr. von Koeber, Miss Koda and Prof. Junker.*
3. SOPRANO SOLO:
   *a.* Gute Nacht .....
   *b.* Es hat die Rose ... } .....Franz.
   *c.* Lieber Schatz .....
   *Miss Aoki.*
4. SONATA *in F minor for Piano and Viola* .....Brahms.
   Allegro Appassionato,
   Andante un poco Adagio,
   Allegretto Grazioso,
   Vivace.
   *Dr. von Koeber and Prof. Junker.*
5. CHORUS:
   *a.* Entflieh mit mir .....
   *b.* Es fiel ein Reif ..... } .....Mendelssohn.
   *c.* Auf ihrem Grab .....
   *d.* Abschied vom Walde
   *Students of the Academy.*

**明治三十三年十二月八日、九日　第五回定期演奏会**

明治三十三年十二月八日、九日午後一時半開會

秋季音樂演奏會曲目

東京音樂學校

一　合　唱

甲　玉　匣……{ バ　鳥　居　忱ハ　作歌曲

乙　蘇　武……{ メンデルゾーン　鳥　居　忱　作歌曲

一　管　絃　合　奏

シンフォニー（スコットランド）…メンデルゾーン作曲

一　合　唱

一 管絃合奏

甲 天安河……鳥セル居ツ忱フ作作曲歌

乙 形見の刀……鳥ゲル居ツ忱ク作作曲歌

カルメン……ビゼー作曲

甲 プレリュード

乙 アラゴネーズ

丙 インテルメッツオ

丁 フィナール

一 合唱

甲 霜の旦……旗ボ野ヘ十ミ一郎ア作民歌

乙 里祭……旗露野十西一郎亞作民歌

丙 幼兒……旗露野十西一郎亞作民歌

丁 櫂歌……武露島又西次郎亞作民歌

戊 河邊の花……武露島又西次郎亞作民歌

一 管絃合奏

ダニューブ舞踏曲……シトラウス作曲

AUTUMN CONCERT
OF THE
Tokio Academy of Music,
TO BE HELD AT
UYENO PARK

ON
Saturday and Sunday, December 8th
and 9th, 33 Meiji (1900).
AT 1. 30 P.M.

PROGRAMME

*I. CHORUS:*

*a. Chorale: Commit Thy Ways to Jesus .....Bach.*

*b. He that shall endure to the end.....Mendelssohn.*

*II. ORCHESTRA:*

*Symphony, A minor (Scotch) .....Mendelssohn.*
*First Movement.*

*III. CHORUS:*

*a. Hymn of Praise.....Seruff.*

*b. Oh! in the Woods so Sad and Sombre ...Gluck.*

*IV. ORCHESTRA:*

*Suite Carmen .....Bizet.*

*a. Prelude.*

*b. Aragonaise.*

*c. Intermezzo.*

*d. Finale (les Toréadors.)*

*V. CHORUS:*

*a. Bohemian Folks Song.*
*b. At the Gate .....*
*c. The Flax.....* } *Russian Folks Songs.*
*d. Soldiers' Song .....*
*e. On the River.....*

*VI. ORCHESTRA:*

*The Beautiful Blue Danube Walz* .....*Strauss.*

Prof. AUG. JUNKER,
*Conductor.*

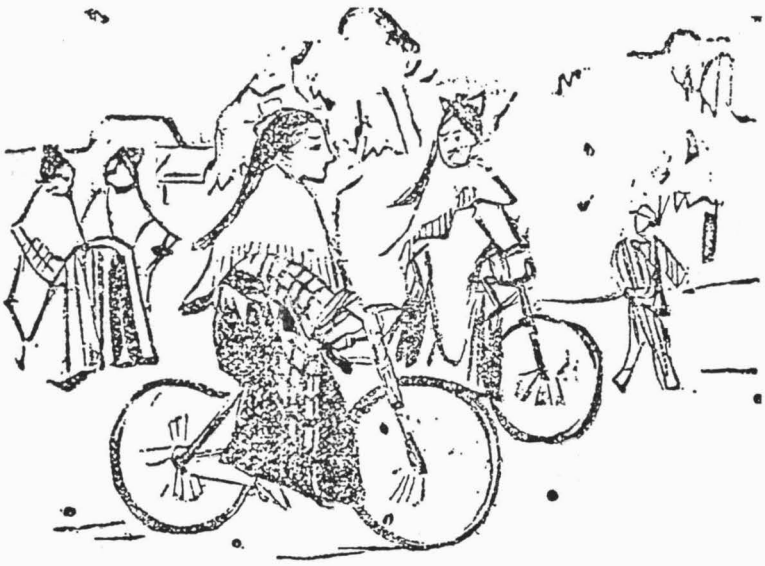
⊙東京音樂學校　東京音樂學校の秋季演奏會は彌々來月二日に決定せり當日演奏の曲目は重に四部合唱と管絃樂の大物にて合唱中には『ルシア』の民歌等もあり管絃樂には『カーメン』『ダニウヴ』の舞踏の如き賑やかのものあり特に管絃中には在來本邦にて未だ一度も使用せざりし樂器も數多加はり居る由にて隨分當日は盛會ならんとの事なり

（『社界新報』明治三十三年十一月二十二日）

●葉がき集　▲音樂學校の秋季演奏會へ行つて見たが中々の盛會で、瀧氏のピアノ獨奏『語なき歌』（メンデルソン作曲）は中々愉快であつた、管絃樂の中ではメンデルソン作曲のシンフオーニーとビゼー作曲のカルメンの中フイナールとが最も快味を感ぜられた、寧ろシトラウのダニユーブ舞蹈曲より此二種の方が面白かつたと思ふ、合唱ではバハの玉匣、メンデルソンの蘇武、セルツフの天安河、ボヘミア民歌の霜の旦である、殊に始めの二者に於て感深かつた。里祭は寧ろ滑稽である、漁翁吟も面白かつたが「萬頃、月てる」のあたり歌の音調が惡いのが瑕瑾である歌は武島より鳥居がいゝ（正聲倶樂部ＫＡ）

（『讀賣新聞』明治三十三年十二月十日）

●昨日音樂學校の秋季音樂演奏會に女生徒の自轉車に乘りて赴きしもありし



（『二六新報』明治三十三年十二月十日）

●音樂學校秋季演奏會の光景

長く人の噂に登りし音樂學校秋季演奏會は愈々本月八日九日を以て開會せらるゝこととなれり、余は九日は不參せしも八日は幸にして出席し、此校の名物として人の知れるコーラス、並に管絃樂合奏の靈妙なる音樂を聞き、慥に腦味噌の洗濯をなし得たり、

曲目外オーガン、ピヤノの二獨奏あり、即ちバッハ氏作曲オーガン島崎氏演奏、此曲面白しといはんよりも、高尚にして只氏の手腕を驚嘆するの外なく、只何となく「ぶっきらぼう」にて、オーガンには今少し靜かなるものをとは思はれたり。次は瀧氏ピアノ獨奏、メンデルゾーン作曲にして其の何といふ事は聞き漏せしも、暗譜にして　氏が例の意氣盛なる風采にて演ぜられたる、何ともいひやうなかりし、日外の「樂しげの農夫」といへる題目にて、同氏が演奏せられたるものに極似せりと思へるは、素人耳なるべし、嗚呼氏は將來我國樂界の王たらん人乎、曲目第一合唱甲玉匣、乙蘇武、共に鳥居教授の作歌にして、前者はバッハ後者はメンデルゾーン作曲なり、練熟不足の故か、多くは其手なる紙面に忠實にして歌詞をのみこみて、發情するとは愚か、只無意識に顔目を上下して樂譜紙の文字を拾ひ讀みするなり、嗚呼余は伊澤校長時代を追懐せざらんと欲すれども能はざるなり、且余等印刷の題詞を受くる能はず、蘇武は以前一度聞きしものとて、歌は一向きゝとれねど、曲は耳底の記憶を呼起して、惡しき心地はせざりしが、玉匣は毫も耳底にあらざりき、第二管絃樂合奏、メンデルゾーンのシンホニー管樂器も平常より增加し、七月の會よりも餘程進歩見えて嬉しく、余をしてオルケストラはユンケル師の、特長ならむと言しめたり、而して余のコーラス好をしてオルケストラに傾かしむるに至れり、第三、合唱、甲天安河、乙形見の刀共に鳥居氏作歌にして甲セルツフ作曲乙グルツク作曲なり、乙は曲も歌も結構の者のやうなりしが、前合唱同樣何を歌へるにか、甲は「あまの」といふ詞はわかりしも、何が何やらわからず、乙「かたみの……」と耳だち、後はぐじやくになりて、如何なる詞の現はれゐるにや窺ひ知る能はず、偏に作歌者に對し御氣の毒といふの外なかりき、演奏振に至りては如何にも達者なるユンケル師コンダクターたればエキスプレッションの妙味にごまかされつべし、第四、管絃合奏カーメンビゼー作曲、甲プレリユード、乙アラゴネーズ、丙インテルメツオ、丁フイナール、面白く拜聽せり、殊に丙丁は可愛らしく麗しき曲にて誠に嬉しかりき、管樂に故障つきしも、概して此日はオルケストラ勝利を得たりといふべきなり、第五、合唱、甲霜の旦、乙里祭、丙幼兒、丁櫂歌、戊河邊の花、甲乙丙は旗野講師作歌丁戊は武島教授作歌にて甲のみボヘミア民歌他は盡く露西亞民歌なり、不思議にも乙里祭、丙幼兒は歌詞聞き取れて、參聽者を喜ばしめたり、他は前合唱同樣にして河邊の花の如きは、一人として之を暗んぜざるが如く、ビリ〳〵者の其醜体いはん許りなかりし、かくの如きならば態々作歌者を煩はすの要なし、無言題として曲のみをせらるゝ方勝れるを思ふ、此に敢て渡邊校長に直言す、第六、管絃合奏ダニユーブ舞踏曲シトラウス作曲、花やかにして忽ちに穩か又嚴肅變化頗る多く嬉しかりき、

當演奏會は管絃樂上出來にして、其生徒諸氏の上達著しく現はれ、大に進歩せる事を示せり、實にオルケストラ萬々歳の感あり、憾くは從來此校唯一の名物として知られたる、コーラスの衰微此事なり、一二年前よりは此に俄にコーラス演奏者を增加し、外見は誠に立派の樣なるも、音聲之と適はず、是何ぞや、アヤフヤ連を寄り集めたるの致す所といはざるを得ざらんなり、聊か感慨を記すと云爾。

（『讀賣新聞』明治三十三年十二月十一日）

**明治三十四年五月十九日　中学唱歌披露演奏会**

明治三十四年五月十九日（日曜日）午后二時開會

中學唱歌披露演奏會曲目

東京音樂學校

一　ピアノ連彈……器樂第一年生　本田カツ
　　甲種師範科二年生　加藤カネ
　　ロンド……モツアルト作曲
一　中學唱歌……生徒
　　豊太閤
一　ピアノ獨奏……撰科生　上原キセ

一　ソナタ……モツアルト作曲
一　中學唱歌……生　徒
　初旅、歸雁、武藏野
一　中學唱歌……生　徒
　甲鐵艦、寄宿舍の古釣瓶、箱根八里
一　ヴァイオリン……專修部三年生　天野ハツ
（ピアノ、オルガン伴奏）
　アヴエ、ヴエルム……モツアルト作曲
一　中學唱歌……生　徒
　今は學校後に見て（四部）
一　ピアノ獨奏……撰科生　樫村タマ
　ロンド……フンメル作曲
一　中學唱歌……生　徒
　駒の蹄、遠別離、我等は中學一年生
一　女聲四部合唱……專修部三年生〔前田ジヤウ　櫻井富貴　安井カウ　天野ハツ〕
　斯道……〔ロシニ作曲　中村秋香作歌〕
一　ヴァイオリン二部……〔前田ジヤウ　安井カウ〕
　シンフホニー、コンセルタント……ダンクラ作曲
一　中學唱歌……生　徒
　荒城の月、去年今夜
一　合唱、（管絃伴奏）
　御世の幸人……〔ヘンデル作曲　旗野十一郎作歌〕

●東京音樂學校の音樂會　中學校には音樂を獨立の一科となし生徒の必修を要すとは改正中學令の規定する所なるが從來の唱歌集は重に（ママ）小學校生徒に適せんか爲めに編輯したるものにして未だ中學生徒に適當なるものあらざれば東京音樂學校にては早くも茲に注意し中學唱歌と云ふを編纂したるにより其披露旁々豫記の如く十八日同校に教育家を招待して音樂會を開きたり

（『國民新聞』明治三十四年五月二十一日）

●中學唱歌演奏會　過る日曜日を以て上野音樂學校に催したる同會は中樂唱歌の單音部にて演奏者は同校生徒のみなれば無邪氣なる奏法毫も嫌味なく選科生上原孃のピアノ獨奏（ソナタ）は小兒丈に音色の稍不充分なる點ありしもエキスプレツションに於ては申分なく優（まさ）に未來のピアニストたる資格を現し專修部生天野孃のバイヲリン獨奏（アヴエ、ヴエルム）同前田安井兩孃のバイヲリン二部（シンホニーコンセルタント）も面白く聞かれたり殊に專修部生安井櫻井前田天野の諸孃四部合唱は頗る好くヂスカントのソロと云ひバスの具合は却つて邪氣を帶ぶる大家連のポルカには聞く事を得ざる妙味ありし管絃等伴奏のハレルヤの曲は其騷々しき奏法とユンケルの舞蹈的タクトに依りて散々に破却されたれども聽衆席には最も歡迎されたるが如しビヲロニストの幸田孃ピアニストの瀧氏等相續ひて去りし今日斯（かく）の如き可憐の演奏會開かれしは斯道の爲め最も祝すべし

（『都新聞』明治三十四年五月二十三日）

## 明治三十四年六月一日　試業演奏会

試業總會學行次第　明治三十四年六月一日（土曜日）午后一時開會

第一部

一　ピアノ四手連彈　（橋本氏受持）〔山崎普立　菅沼新〕

| | | | |
|---|---|---|---|
| 進行曲 | 作曲者不詳 | | |
| 一 ヴァイオリン | (村松氏受持) | 〔浅羽 室田 英 きを〕 | |
| 歌調 | シット氏作曲 | | |
| 芝生 | ギリアリー氏作曲 | | |
| 一 ピアノ | (神戸氏受持) | 原 みち | |
| ソナテキナ | ベートーヴェン氏作曲 | | |
| 一 唱歌(二部) | (岡野氏受持) | 唱歌科乙組女生 | |
| 友の別 | 〔ガイベル氏作曲 武島氏作歌〕 | | |
| 一 ヴァイオリン | (賴母木氏受持) | 角倉正道 | |
| ホーマン教科書ノ中 | | | |
| 一 オルガン | (島崎氏受持) | 水原みち | |
| 楽しき我家 | | | |
| 一 ピアノ | (橋本氏受持) | 内田ふみ | |
| ソナテキナ | クレメンテキー氏作曲 | | |
| 一 ヴァイオリン | (村松氏受持) | 守屋あづま | |
| ガボッテ | バハ氏作曲 | | |
| 一 オルガン | (天谷氏受持) | 中澤ふじ | |
| アンダンテ、ソステニュトー、メンデルゾーン氏作曲 | | | |
| 一 箏 | (今井氏受持) | 〔山本富三郎 今井とし〕 | |
| 越後獅子 | | | |
| 一 ピアノ | (幸田氏受持) | 小林禮 | |
| ソナテキナ | クレメンテキー氏作曲 | | |
| 一 唱歌(三部) | (橋本氏受持) | 唱歌科甲組女生 | |
| 虹 | 〔ロッシニー氏作曲 武島氏作歌〕 | | |
| 第二部 | | | |
| 一 ヴァイオリン二人連奏 | (賴母木氏受持) | 〔樫村たけ 細谷やい〕 | |
| ガボッテ | エグヴェル氏作曲 | | |
| 一 ピアノ | (橋氏受持) | 荒川あい | |
| ソナテキナ | クーラウ氏作曲 | | |
| 一 唱歌 | (幸田氏受持) | 唱歌科甲組女生 | |
| うれしからまし | ヒルレル氏作曲、武島氏作歌 | | |
| 殘月 | ベルグ氏作曲、武島氏作歌 | | |
| 伊國民歌 | ブルデキシアーテ氏作曲 | | |
| 一 オルガン | (島崎氏受持) | 仙波あい | |
| ガボッテ | バハ氏作曲 | | |
| 一 ヴァイオリン | (賴母木氏受持) | 樫村たけ | |
| タランテン | エベルハルヅ氏作曲 | | |
| 一 ピアノ | (橋氏受持) | 上原きせ | |
| ソナタ | モツァールト氏作曲 | | |
| 一 箏 | (今井氏受持) | 〔青木し 金澤柔能げ〕 | |
| 四段砧 | | | |
| 一 ヴァイオリン、ピアノ合奏 | (幸田氏受持) | 〔鈴木保羅 樫村タマ〕 | |
| ドゥヲ | プレイル氏作曲 | | |

一　ピアノ八手連彈　（橋氏受持）　〔上原きせ　吉原ちよ　柳田かう　渡部さつき〕

メヌエット　メグリオ氏調　〔手書き〕

○音樂學校の試業會　一つ橋の音樂學校分校にては一昨日午後一時より試業總會を開き各科生徒の演奏あり何れも中々の上出來にて其進歩は著しく驚く許なりき、式終て茶話會を開き生徒の催にかゝる舞踏、餘興、福引等ありしが就中「遽法師」と云へる能狂言は尤も會衆の喝采を博したりき

（『中央新聞』明治三十四年六月三日）

**明治三十四年六月四日　皇后行啓演奏会**

明治三十四年六月四日

演奏曲目

東京音樂學校

第一部

一　合唱……生徒

惶き御影……〔モツアールト作曲　中村秋香作歌〕

一　ピアノ獨奏……豫科生　小林禮

ソナティナ……クレメンティ作曲

一　中學唱歌……生徒

馬上の少年、寄宿舍の古釣瓶、箱根八里

一　ヴァイオリン獨奏……專修部三年生　前田じやう

コンセルティノ……シット作曲

一　オルガン獨奏……師範部二年生　齋藤左右田

プレールヂウム……メンデルゾーン作曲

一　管絃合奏……職員及生徒

ラルゴー……ヘンデル作曲

一　合唱……生徒

橘の薫……〔ケルビニー作曲　鳥居忱作歌〕

第二部

一　箏……選科生　〔上原みゑ　山本富三郎　今井とし〕

越後獅子

一　ピアノ四人聯彈……選科生　〔上原きせ　吉田かちよ　柳田かう　渡部さつき〕

メヌエット……メグリオ作曲

一　ヴァイオリン、ピアノ、オルガン……〔教授　幸田延　教授　橘重郎　研究生　島崎赤太〕

ロマンス……サンセン作曲

一　ピアノ獨奏……專修部三年生　櫻井ふき

ソナタ……ハイデン作曲

一　女聲四部……專修部三年生　〔前田じやう　櫻井ふはう　天野かつき　安井うつき〕

斯道……〔ロシニー作曲　中村秋香作歌〕

一　ヴァイオリン、ピアノ……教師（アウグスト、ユンケル　フォン、コイベル）

ソナタ（第二部第三部）……ドヴォシャック作曲

一　合唱（管絃伴奏）……生徒

寄藤祝……（ヘンデル作曲　鳥居忱作歌）

○微妙じき『君が代』　皇后陛下坤徳世を蓋うて文藝の御奬勵に御心を傾むけさせらるゝことは今更申すも畏こし、去四日といふに、陛下は東京音樂學校へ御行啓ましく、生徒及び職員の演奏を聞し召されけるが、御感斜めならずして、校長へも厚き御沙汰あり、一昨年（此年同校へ御臨幸あり）よりも生徒の進歩著るしきは、職員の提撕多きに居る故なるべし、尚此後とも勉勵せよとの御諚なりき、さて當日演奏の中殊に堪能の評を博したるは、豫科生小林禮氏のピアノ獨奏、專修部三年生前田じやう子のヴアイオリン獨奏、教師ユンケル、コイベル兩氏のヴアイオリン、ピアノ等にして、取分選科生の上原みゑ山本富三郎今井とうの三幼兒が、小さき手に奏づる箏の松吹く風の音とも聞えて感に堪へぬはなかりけり、恁て最後は生徒一同の合唱（管絃伴奏）は（寄藤祝）てふ鳥居忱氏の作歌にて、大庭の千年の松に床しき藤波のかゝれるを祝ひ壽ほぎしめでたき唱歌なるに加へて、諸種の樂器の數を盡して一齊に奏づるいと賑やかに曠々しきものなりしかば、陛下は此上なう愛で聞したまうて、御滿足の色に見受け奉りぬ、此一曲の終ると共に陛下は玉座を立たせたまへば、生徒は前の伴奏を續けて君が代を奏しけるが、此伴奏の音の妙なる、深くも御思召に適ひけん、御退座の階段を登らせたまひつゝありし陛下は、一段毎に御足を止めて、畏くも聞入らせたまひけるにぞ、並居る生徒は拙なき調の恁まで大御心に叶ひしかと、いみじき果報を嬉しみ、中には感極まりて涙に咽ぶもありけるとなん、

（『中央新聞』明治三十四年六月七日）

## 明治三十四年七月六日　卒業式

東京音樂學校生徒卒業式順序

明治三十四年七月六日（土曜日）午後三時ヨリ施行

### 第一部

一　報告

一　卒業生合唱

一　卒業証書授與

一　專修部卒業生唱歌

一　校長告辭

一　文部大臣演說

一　卒業生總代謝辭

一　生徒合唱

### 第二部

一　管絃樂　卒業生及其他

ラルゴー……ヘンデル作曲

一　合唱　豫科修了生

甲　大塔宮……（シルヘル作曲　黑川眞頼作歌）

乙　去率擊たな……（シルヘル作曲　旗野十一郎作歌）

一　オルガン獨奏　師範部卒業生　齊藤左右田

アンダンテ、トランクヰロ（オルガン、ソナタノ一部）……メンデルゾーン作曲

一　ヴァイオリン合奏　　専修部卒業生〔前田ジャウ　天野ハツ　安井コウ〕

甲　サラバンデ　乙　ブーレー……バハ作曲

一　四部合唱　　女生徒

甲　述懐　乙　清流〔ブラームス作曲　武島又次郎作歌〕……

一　ヴァイオリン（オルガン伴奏）　〔専修部卒業生　オルガン選科卒業生　安井和田コウ年〕

アダジオ、カンタビーレ……ナルディニー作曲

一　ピアノ獨奏　　専修部卒業生　櫻井フキ

メヌエット、アランチーク……パデレウスキー作曲

一　合唱（絃樂伴奏）　　生徒

別情……〔ベートーヴェン作曲　旗野十一郎作歌〕

一　ヴァイオリン獨奏　　専修部卒業生　前田ジャウ

コンセルティノ……シット作曲

一　合唱（管絃伴奏）　　生徒

神武東征……〔ヘンデル作曲　鳥居忱作歌〕

## 明治三十四年十一月十六日　試業演奏会

### ○音樂學校の演奏會

東京音樂學校では、時々其選科生の爲に試業演奏會を開いて、生徒の父兄並に學校關係者の來聽を求める、是は修學中の生徒の成蹟を示すと同時に、公衆の前に其伎藝を演ずる練習の爲で、他校には餘り無い頗る結構な催しと思ふ、去る十六日午後一つ橋分校に於て催ほされたものは、即ち其演奏會である。

演奏の種類はピアノ、ヴァヰオリン、オルガン、唱歌、箏の各科で、其數二十餘に渉り、巧に配合された、勿論各級生徒の中から選び出した演奏者だから、上手な者許りはない、極初心な人もある、然し一体の出來は非常に好い方で、受持教員の滿足左こそとお察し申す、今其中に就て一つ二つ目立つた曲を紹介すれば——

原みち子のピアノ（シュルツオ）、齡の弱ないにしては却々の出來、曾て本紙に記した山根醫學士の改良服を着てピアノに向つた姿は如何にも可愛い、室田きを子のヴァヰオリン、三人連奏の筈なのを俄に獨奏となつて、難しい曲を美事に演つて除けた手腕は確かだ、青木しげ子、上原みゑ子兩孃の箏（吾妻獅子）、是は同校獨得の西洋樂譜に據つての調で、掛合の處などが如何にも熟く出來たのは、遠山教授の勞多きに居る事であらう、長谷川たよ子、上野靜子兩孃の箏（みだれ）、是には今井教授の替手が入つて、頗る面白かつた、教授と共に箏に向つて毫しも憶する處なく、立派に彈つて除けた兩孃の伎倆も亦感心するに足る、上原きせ子のピアノ（ロンド）は例に據つて大喝采、有繋に音樂家の令孃たるに恥ぢない、最後に現はれたのは金澤やすの子、青木しげ子兩孃の箏（さらし）で、是には今井教授が「立」を彈かれた、金澤孃は本校に於ける唯一の箏科生、青木孃も亦之に讓らない分教場の箏科專門生で、自体質の好い處へ多年の練習を積んだのだから、妙齡の淑女としては他に比べる者の尠い位、音色も好く「左手」も確で、終の手事などの面白さは、殆ど息も吐けない程であつた、之を率ゐる今井教授の妙伎と來ては、勿論素人の一句を挿む事能はざるもの、抑も當今の箏曲界に於て、最も好く箏の音色を出し、斯道の學問に達して居るのは、若手の中では同師を第一とするので、山勢、山登、山木等の諸老輩の亡つた後、斯社會の牛耳を取る者は必ず斯人であらうとは、其道の人の定評であるさうだ、殊に生徒を取立る事が上手で、西洋の音樂にまで通じて居るとは益す頼しい、山勢を失つた音樂學校も、斯人のあるが爲に其聲價を落さないのは喜ばしい事である。（五線子）

（『中央新聞』明治三十四年十一月二十二日）

**明治三十四年十二月七日、八日　第六回定期演奏会**

明治三十四年十二月八日午後一時半開會

秋季音樂演奏會曲目

東京音樂學校

第一部

一　箏　晒……器樂部一年生撰科生　金澤柔能　青木しげ　北澤勾當作曲

一　ピアノ獨奏　ソナチネ……器樂部一年生　吉澤重夫　ヂュセック作曲

一　オルガン獨奏　エーア……甲種師範科三年生　志水操　バハ作曲

一　ピアノ獨奏　ソナタ……甲種師範科三年生　加藤カネ　クレメンチー作曲

一　ヴアイオリン獨奏　クレードル、ソング……研究科一年生　前田じやう　ゴダー作曲

第二部

一　合唱　甲、宇佐神託……生徒（バ作曲　鳥居忱作歌）

乙　霜の旦……（ボヘミア民歌　旗野十一郎作歌）

一　ヴアイオリン獨奏　コル、ニドライ……助教授　頼母木こま　ブルッフ作曲

一　オルガン獨奏　ソナタ第四……講師　島崎赤太郎　メンデルスゾーン作曲

一　ピアノ獨奏　コンセルト……教授　幸田延　フンメル作曲

一　ヴアイオリン、ピアノ　ソナタ……教師　教師　アウグスト、ユンケル　ラフェール、フォン、コイベル　バハ作曲

一　合唱（管絃及オルガン合奏）　橘の薫……職員及生徒（ケルビニー作曲　鳥居忱作歌）

AUTUMN CONCERT
OF THE
Tokio Academy of Music,
TO BE HELD AT
UYENO PARK
ON
Sunday, December 8th
34 Meiji (1901)
AT 1.30 P.M.

PART I.
(*by students*)

I. KOTO:
Sarashi……Kitasawa.
*Miss Kanasawa.* (*First year in Instrumental*

*Department) Miss Aoki. (Elective)*

II. PIANO SOLO:

Sonatine. .....Dussek.

*Mr. Yoshizawa. (First year in Instrumental Department)*

III. ORGAN SOLO:

Air. .....Bach.

*Miss Shimizu. (Third year in Normal Course)*

IV. PIANO SOLO:

Sonata.....Clementy.

*Miss Kato. (Third year in Normal Course)*

V. VIOLIN SOLO:

Berceuse. .....Godard.

*Miss Mayeda. (First year in Graduate course)*

PART II.

*(by Teachers)*

I. CHORUS:

a. Choral. .....Bach.

b. Bohemian Folks Song.

*Students of the Academy.*

*Conducted by Prof. Aug. Junker.*

II. VIOLIN SOLO:

Kol Nidrei. (Hebrew melody).....Bruch.

*Mrs. Tanomogi.*

III. ORGAN SOLO:

Sonata, IV. .....Mendelssohn.

(B flat major)

*Mr. Shimazaki.*

IV. PIANO SOLO:

Concerto. .....Hummel.

(A minor)

*Miss Koda.*

V. SONATA FOR PIANO AND VIOLIN. .....Bach.

(E major)

*Prof. Aug. Junker and Dr. R. Von Koeber.*

VI. REQUIEM FOR CHORUS, ORCHESTRA AND ORGAN. .....Cherubini.

Introitus.

Graduale.

Pie Jesu.

Dies Irae.

*Instructors and Students of the Academy.*

*Conducted by Prof. Aug. Junker.*

## ○東京音樂學校秋季演奏會（上）

五線子

忍ヶ岡の紅葉(もみぢば)空しく地に塗(まみ)れ、辨天祠の畔(ほとり)枯蓮(かれはす)に風に戰(そよ)ぐの頃、上野公園の風光は滿目蕭條(まんもくしやうでうとして)、天然の景色(けいしよく)の殆ど人を牽く力なき時に當り、美術、繪畫、彫刻等の展覽會が、交(かは)るゝ開かれて人の趣味を養ひ、東京音樂學校の秋季演奏會が亦此時に催されて、寂しい現時(いまのよ)の人心(ひとごころ)を慰むるは、實に天の御心に叶つたもの！七日八日兩日の演奏會が、立錐の地も剩さない程の盛況を呈し、滿都好樂家の心を喜ばしたのも無理でない、他の美術に關しては別に專門の記者に依て度々紹介されて居る、我輩は此珍らしい音樂會を傍聽して、聊か感じた處を記して見やう。

我國唯一の東京音樂學校が、全力を盡して催した音樂會が、日本の音樂を代表すべ〔き〕ものである事は、素より斷言して憚(はばか)らない然しながら當日

列席した數千人の傍聽者は此音樂會が日本唯一の音樂學校の大演奏會として、果して如何なる特質を有するかを認めたであらうか、極端に云へば此の會は――此學校は、只歐羅巴の音樂學校の少さな出店に過ぎない、那邊の音樂會は、這個の更に立派なので御座いますと云ふ事を、示すに過ぎない、日本人の手に據つて設立せられた音樂學校が、如何に斯道の爲に特別の研究を爲して居るかと云ふ事は、殆ど認むるに苦むのは殘念ではないか、箏の一曲を以て僅かに之を代表せしむるのは餘りに大膽ではないか、お雇教師の意見は如何か知らないが、我輩は斯學校が純粹に學理に基く西洋樂を研究する傍ら、更に今一層我國――廣く云へば東洋の樂を調査研究せられん事を深く希望する、委細の議論は後日の事として、是から當日の曲目に就て聊か概評を試みやう。

一箏　『晒』　金澤　柔能子　青木　しげ子

此曲は曩日の分校の演奏會でも彈かれたもの、今度は今井教授が加はらないから、甚麽であらうかと心配した處が、如何して！有繋は斯道の專門科生たる兩孃、細い曲を些の間違もなく立派に演つて除けたには感心した、殊に兩孃替るゞ〳〵替手を入れての彈き方は巧者なもの、今井教授の滿足左こそと察せられる。

一ピアノ獨奏　ヂユセツク作曲　吉澤重夫氏

平易しい曲とは云ひながら、可なりに彈かれた、聞けば奏者はピアノに向つてから未一年餘りにしか成ない由だ、萬望此勢で勉强して貰ひ度い。

一オルガン獨奏　ヱーア。バヽ作曲　清水　操子

曲は立派なものであるし、演奏者の手腕も相當である由だが、何分場所慣れないと見えて、七日には甚く臆して居た樣子だ、但し八日には大分な元氣も出て見事な出來であつた。

一ピアノ獨奏　ソナチ〔ママ〕。クレメンチー　加藤　かね子

七日の上出來なりしに比して、八日には少し怪しい所があつたのは何故か、但しエキスプレツションも巧みに、安心な奏し方は熟練な結果であらう。

一ヴァヰオリン獨奏　クレードル、ソング。ゴダー作曲　前田じやう子

奏者は他の天野、安井、櫻井の三孃と共に近年出色の聞えある本年度專修部卒業生の一人で、將來ヰオリニストとして立たうとする者、但し感情よりは手の利く質だから、這樣曲を演るのは損ではあるまいか、七日には尠し熱情が足りなかつたが、八日には却々の上出來、殊にG線を以て、最初のメロヂーを反覆奏された時には聽衆の多くは一種の感情に打たれた、カデンスは兩日とも無難、伴奏はユンケル教授、能く奏者の美を成さして居た。

（『中央新聞』明治三十四年十二月十二日）

## ○東京音樂學校　秋季演奏會（下）

五線子

以上で「第一部」を終つて是から「第二部」に入る。

一合唱　甲　宇佐神託　バヽ作曲、鳥居忱氏作歌
　　乙　霜の旦　ボヘミア民歌、旗野十一郎氏作歌

兩曲とも研究科一年から本科一年までの生徒で唱はれた、有繋に十分の練習を積んだ人許りだから、四部の音が好く調和して快く耳に入つた、但し「甲」は少しくエキスプレシヨンに乏しかつた、「乙」は去年の秋季も唱はれたもの、今年は一層の出來であつた。

一ヴァヰオリン獨奏　頼母木こま子

曲はブルッフのコル、ニドライ、感情の高い立派な曲で、奏者も十分の熱情を以て奏したが、惜い事にはアップ、ゴウの時バウを手暴に絃に當てる爲め、時々厭な感じを聽衆に與へる、但し左指の綺麗な事、壇に上つて極めて沈着なる態度など、多年熟練の効は爭はれない。

一オルガン獨奏　ソナタ第四。メンデルゾン　島崎赤太郎氏

オルガンを以て演奏會に適せぬなどゝ云ふ者は、須らく氏のオルガンに耳を貸すべしである、何の點から見ても一言の非を打つべきなき老熟の手腕、日本第一のオルガニストと云はれるも無理でない、殊にアレグレツトに至り、足を以つて巧に最低音部の八分音符を奏した時などは、只感嘆の外はない、氏はオルガン及び作曲研究の爲め、明春二月歐行の途に上られ

る由だから、向後數年間其妙技を聞く事が出來ないのは遺憾である。

一ヴァヰオリン、ピアノ合奏　コイベル氏　ユンケル氏

番組では幸田孃のピアノが此前にある筈だが、ユンケル氏の管絃合奏指揮上の都合から、八日には此方を前に改めた。偖兩氏合奏の曲は有名なバヽのソナタ、誰やらが兩氏を春の花と秋の月に比したのは實に面白い比喩で、ユンケル氏の華美なる彈き方と、コイベル氏の幽雅なる奏し方とは極めて好く調和して云ひ樣のない面白味がある第一のフーガが終つてアンダンテの部に入りし時、ユンケル氏の熱情ある妙音は確かに一種悲哀な感じを與へた、第二のフーガとなつて、コイベル氏の輕妙なるピアノは眞に水晶盤上珊瑚の珠を轉すが如きものである、又ユンケル氏がダウン、ゴウのバウで、迅速なる十六音符を奏したのは所謂息も吐けない巧妙と云ふもの、外の資格は知らない、ヴァヰオリンを持たしては、渠は確かに天才である。

一ピアノ獨奏　コンセルト。フンメル作曲　幸田　延子

有名なる難曲、元來管絃樂の曲である、橘絲重子のインターゲーションの伴奏終るや孃の手は徐ろにキイに觸れて起すや金石の響、或時は春風輕く花唇を嘗めて黃鳥その間に囀るが如く、或時は劍戟鳴り、銃砲響き、千軍万馬吶喊の聲天地を震憾するが如し、此時此際聽衆なく、樂堂なく、ピアノなく、幸田孃なく、只縹渺たる神籟天の一方より來り襲ふが如し、ヰオリニストとしての幸田孃は皆知つて居る、ピアニストとしての孃は、吾等此時始めて知る事が出來た、殊に病後の身を以て、悠然として此大曲に臨み、偉大なる成功をした孃の伎倆は永く記憶さるべきものである。

一合唱（管絃及オルガン伴奏）『橘の薫』

曲はケルビニー、歌は鳥居忱氏、本校職員生徒總出の大仕掛、當日第一の呼物としてあるが、生憎十分の成績と云はれなかつたのは殘念である。先づ一段づゝ評しやう。（第一段）『櫻井驛』、度々唱ふので何れも能く曲を了解で居る、管絃も頗る好い。（第二段）『海陸寄手』、是は今度新に出來たもの、指揮者の熱心なるカンダクトと演奏者の勉强とで、極めて輕妙に唱はれた。（第三段）『持拂堂』、柴田朝夷兩孃の高音は餘り感心しない、他に聲樂家は無いのか知らん、納所君の低音部は手に入たもの。合唱は無難。（第四段）『菊水の譽』、「其一」は唱者が能く慣熟して居るから頗る面白かつたが、「其二」は管絃の繁雜なる音符と、困難なる唱ひ廻しの爲でもあるか歌は少しも分らず、只凄まじい響きが聞えたのみだ、以來管絃樂合奏は傍で聞くものでないと覺た、テナーが低り勝な爲ユンケル氏の心配一方ならずと認たは誤りか。とは云ふものゝ那樣難曲を彼程に演り得たユンケル氏始め演奏者諸氏の勞は、十分感謝して然るべきである。

是で當日の演奏を終つた、成績に從つて假りに此日の演奏に順序を附ければ、第一が島崎氏のオルガン、次が幸田孃のピアノ、次がコイベル、ユンケル兩氏の合奏、次が金澤、青木兩孃の箏、後は似たり寄つたりであらう、明春開かるべき大演奏會は、果して如何なる新面目を呈すべきか、今から待遠な事である。

（『中央新聞』明治三十四年十二月十三日）

○音樂學校の秋季演奏會　八日午後一時半より同校樂堂にて開會第一部は師範科研究科生徒の演奏にとゞまりしも第二部は其曲目が豫てより公にされしことゝて滿都の斯道者は立錐の地なき迄に集りて賴母木助教授のヴアイオリン獨奏も島崎講師のオルガン獨奏もなか〳〵に賞てられしかど中にも幸田教授が（ママ）特意のヴアイオリンを外にしピアノを獨奏して其多能を示たるとユンケル教師のヴアイオリン、コイベル教師のピアノ合奏は當日に於ける聞物として大喝采を博したり最後の合唄橘の薫は少しく調はずと評せし人もありしかど管絃とオルガンと急調子の高低中音ともにさながら樂堂も割れんばかりの勇ましさなりき來賓は外人多く菊池文相はじめ宮內官などをも見受けたり

（『國民新聞』明治三十四年十二月十日）

●上野音樂學校の秋季音樂會　昨日午後一時より開會、演奏は十一種あり。孰れも上出來なりしが殊に研究科一年生前田孃のヴアイオリン獨奏は絕妙なりき又ヴアイオリンの名手と知られたる同校教授幸田延子は珍らし

くもピアノを獨奏して其多藝に敬服せしめたり。此他ユンケル及びケーベルのヴアイオリン及びピアノの合奏の如き何時もながら感服の外なく職員生徒總出の合唱も大に喝采を博したり

（『萬朝報』明治三十四年十二月九日）

## ○東京音樂學校秋季演奏會評

樂狂生

### ◉第一部

▲一、箏曲『晒』（北澤勾當作曲）器樂部一年生金澤柔能、撰科生青木しげ

無論奥様御嬢様の御氣に召したるもの、なかくによく揃ひたり、熟練の点より考ふれば其學修されし年月十年の上に出づと思はれたり、元『晒』は今井助教授の秘曲にて誠に手のこみたるもの、兎に角歌の詞をはつきり唱はれたるは有り難し

▲二、ピアノ獨奏、ソナチネ……（ヂユセツク作曲）器樂部一年生吉澤重夫

一年生でこれだけ立派に演奏されたるは豫想の外なり、殊に强弱のつけ具合は美しかりき、迫らずして落ち付きたる態度、流石は男子なり

▲三、オルガン獨奏、エーア……（バハ作曲）甲種師範科三年生志水操

一体が演奏會には適せぬもの、兎に角オルガンは損なものなり、練習不足の故か一向に活氣無し

▲四、ピアノ獨奏、ソナタ……（クレメンチー作曲）甲種師範科三年生加藤カネ

舞踏曲の様な所もありて、何方かといへば賑やかな方ながら、終が何だか物足らぬ様にて『中途で止したのか』と聞きし人もありしが是は無理ならぬ問ひなり、日曜はどういふものか發情乏しかりし、さあれピアノは此校二なき上手の人といふ評判なれば兎や角いふ丈が野暮なり

▲五、ヴアイオリン獨奏、クレードル、ソング……（ゴター作曲）研究科一年生前田ジヤウ

まことに搖り床の歌らしく先づピアノがゆりだしそれからヴアイオリンが唱ひだして綠色濃き夏の朝そよ風さそふ木の下にゆり床して眠れる心地はさもこそと嬉しく樂しかりし、實に微妙の音を出す様なられたるは敬服殊にユンケル師と師弟の至情見えてゆかしかりし

（『讀賣新聞』明治三十四年十二月十一日）

## ○東京音樂學校秋季演奏會評（つゞき）

樂狂生

### ◉第二部

▲一、合唱、甲、宇佐神託（バハ作曲）乙、霜の旦（ボヘミア氏作民歌）（旗野十一郎歌）

古顔の生徒の演奏にて元より男女聲四部なり、男聲の引立たざりしは口惜しき事なりき、宇佐神託は失敗に終り（尤もバハの作曲は餘りに高尚なれば演奏者に理解され難き節多く、聽者の素人等には猶更の事なれば未だ不消化のものとして終りしならむ）霜の旦は去歳の色揚げにして聲調、調和共に完全無缺、土曜日は殊に最上の出來なりき

▲二、ヴアイオリン獨奏コル、ニドライ……ブルツフ作曲、助教授　頼母木コマ子

久方振りの演奏、年と共に技も進まるゝ事ながら、いかで音色の濁りたるか、幸田氏のピアノの方に聽手の耳は奪はれたり、今少し感情を現はして貰ひたく、前日の方一段の出來ばえなりし

▲三、オルガン獨奏、ソナタ第四、メンデルスゾーン作曲、講師島崎赤太郎氏

例ながら其の腕前には驚くの外なし、ソナタとあれば高尚なるは勿論ながら、其の複雜なる到底素人には理會らぬものなり、技の早きを傲らるゝ氣色見えて、只々オルガンとは種々の音がかけつくらをする恐ろしいものと思ひしのみにて、如何なる感情も起らざりし、演奏者其の人も亦然りしならん

▲四、ヴアイオリン、ピアノ、ソナタ……バハ作曲、教師アウグスト、ユンケル氏、教師ラフエール、フオン、コイベル氏

日曜日は都合上ピアノ獨奏と前後せり此演奏いふべき詞もなし、目前の両教師はありやなしやバハの面影忽ちに現はれいでゝ生きたる聲の談話神神しく、近頃に二なきよき音樂を聞きたり

▲五、ピアノ獨奏コンセルト、フンメル作曲教授幸田延子

幸田氏は我が樂界のヴァイオリニストといふよりもピアニストとして稱へらるべき傾向あり、知らずピアノの技量の上りたるにか、否な、蓋しピアノ界他に其の人なきを以てなり、元と孃はヴァイオリンの名手にして其の技は天賦と許されたる程なり、之を忽にしてピアノ界の譏を招くなからんを希ふ、但ピアノの出來榮は此上なき事なりし、橘孃の第二ピアノにては伴奏中々に骨折なり、稍もすれば音量の第一ピアノにけがされしは樂器の故なるべし、

▲六、合唱（管絃及びオルガン合奏）（鳥居忱作歌ケルビニー作曲）橘の薫

學校が最も力を用ひたりといふ呼物なり、唱影者の增加せる爲め從來の如く管絃樂の方勝ちて歌の詞不明瞭なるのみか、合唱は辛うじて聞きなさるゝと云ふ欠点は一掃されたり、然れども各部分不和合の点は餘り宜しからぬ結果を來せし原因なり、殊に高音部（ソプラノ）の區々にして一致せざりしは誠に嘆かはしき事なり、管絃樂は土曜日の方上出來にして、合唱は日曜の方よかりし、總て今一段の練習を望む者なり、（をはり）

（『讀賣新聞』明治三十四年十二月十二日）

## 東京音楽学校秋季演奏会（『音樂之友』第三号、明治三十五年一月）

東京音楽学校秋季音楽演奏会は去年十二月七八両日に於て開会せられたりいつもながら盛会にて聽者の腰を椅する場所もなくなり止むを得ず通行道に椅子を入れ是れに充てたる始末にて渡辺校長も自ら椅子を運び奔走せられたるは誠に御気の毒に見受けたり然して同演奏会は今回は殆んど独舞台者のみにて只第二部の始めに本科生諸氏の合唱最終に全校の生徒諸氏及職員諸氏の総出にて前後未曾有の管弦楽入の大合唱有りたるのみにて他は皆独奏のみ故に何かまだ少し物足らぬこゝちせり願はくば第一部の始めにも一番位は合唱のほしかりし然して今回の演奏の批評を申せば最早楽狂氏が読売新聞に評せられたる通りにて充分なれども我輩は我輩丈に少し意見も有れば極略ましを申さん（両日共拝聽の好機を得たれば其の内にて善き方を取て評す）箏（北沢勾当作曲の晒）器楽部壱年生金沢柔能撰科生青木しげ両孃にて演奏せらる最早充分腕に覚えの有る曲らしく美事に殊に音声清明にして歌詞の明亮なりしは満足の至りなりし殊に御気の毒に感ぜしは七日の演奏中ば頃糸のきれたりし故如何せらるやと手に汗を握ぎりしに極平然として換りの来る迄演奏して居られたは日頃の熟練の巧と感服せり

二　ピアノの独奏ソナチネ（ヂュセック）氏作曲奏者器楽部一年生吉沢重夫氏極落付き強弱の工合等凡て予想外の出来先年演奏せられたる小林礼氏と好一対の有望の二少年

三　オルガン独奏エーアー（バハ作曲）甲種師範科三年生志水操孃一体オルガンは大なる奏楽堂などにては引立たぬ損の楽器に（パイプヲルガンやペタルの有るものは除く）て殊に曲が日本人種の耳には極受取悪き（バハ）の作曲にて引き立たざりしは気の毒なりし

四　ピアノ独奏ソナタ（クレメンチー作曲）演奏者甲種師範科三年生加藤かね孃曲はいつ聽きてもあきのこぬ面白き者にて又同孃も慥に勉強の巧見受けたり

五　ヴァイオリン独奏クレードルソング（ゴター作曲）演奏者研究生一年生前田じよう孃演奏歌は極しぶき即黒人向きの歌物にて出来は先づ無事

六（甲）宇佐神託（バハ氏作曲鳥居忱氏作歌）（乙）霜の旦（ボヘミア作曲[ママ]旗野十一郎氏作歌）本科生徒諸氏に依て演奏せらる前にも述べたる如く兎角（バハ）氏の作曲は日本人の耳には受取悪き者多く宇佐神託は余り引立たざる様に見受けたり（乙）霜の旦は出が短調の者にて中々奇麗な曲高音部の高く上る具合など一層感を深かゝらしめたり只うらみとするは男声の少なき為稍やともすると土台が浮き上り時々かゆき処へ手のとゞかぬ心もちせり

七　ヴァイオリン独奏コル、ニドライ（ブルツフ作曲）演奏者助教授頼母木こま孃当時第弐のヴァイオリニストにてまづかろうはづはなく美事に拝聽せり只七日に比し八日は何だか活気の少し乏しかつた様見受けました

八　オルガン独奏ソナタ第四（メンデルズゾン氏作曲）奏者講師島崎赤太郎氏当時日本一のオルガニスト此度研究の為独国へ留学を命ぜられ来二三月頃出立せらるいはゞ御名残演奏にて此の際よきのあしきのと云ふべき時にあらず只三年間研究せられ無事帰朝せらるゝ迄耳の底にひめ置き目出度帰朝の暁に御披露の演奏会を催さるゝならんが故に其時迄は余輩は言はず

九　ピアノ独奏コンセルト（フンメル氏作曲）演奏者教授幸田延氏伴奏橘糸重嬢何をやられても感服

十　ヴァイオリン演奏ユンケル氏ピアノ演奏者コイベル氏（ソナタバハ作曲）曲も曲なり人も人なり我輩等の兎やかう云ふは野暮なり

十一　合唱（管絃オルガン・ピアノ）（橘の薫）音楽学校職員生徒諸氏総出本演奏会第壱の大立者其内四段に分れ曲はケルビニー氏歌は鳥居忱氏にて第一段桜井の駅二段海陸寄手三段持仏堂四段菊水の誉にして中に最早前演奏会にも唱はれしものも有りたれど此度は皆ヲルケストラを附け誠ににぎやかに奏されたり去れど人数の割合に音声弱く殊に男声の弱かりし為め満足と云ふ事能はず然し聞けば三分の二は先年九月入学せられた諸氏の由左すれは僅三ケ月計の歳月にて兎に角あれ程の大物の仲間入りの出来るは是又容易ならぬ事なり願はくば来る春季演奏会にもう一度練習し直して拝聴致し度きものにこそ

〔原資料入手不能〕（『日本の洋楽百年史』一〇九頁）

**明治三十五年二月二十三日　学友会演奏会**

明治三十五年二月二十三日午後一時開會

大會音樂演奏曲目

東京音樂學校學友會

一、合唱　第一部　會員

甲、雪中軍……〔ボルトニアンスキ作曲　武島又次郎作歌〕

乙、探梅……〔ウエベル作曲　鳥居忱作歌〕

一、ピアノ獨奏　天野あい

ソナタ……ベートーヴェン作曲

一、二部合唱　〔宮脇せや　吉川まん〕

早春の詞……〔メンデルスゾーン作曲　武島又次郎作歌〕

一、ピアノ獨奏　高橋とよ

ソナタ……モツアルト作曲

一、ヴァイオリン獨奏　天野はつ

フルーリングス、エルウァヘン……バハ作曲

一、ピアノ獨奏　小林禮

ソナチナ……クーラー作曲

一、合唱　會員

甲、戀しき母……〔ウエブスター作曲　大和田建樹作歌〕

乙、鶯宿梅……〔メンデルスゾーン作曲　鳥居忱作歌〕

第二部

一、ピアノ獨奏　堤正夫

ソナタ……ハイドン作曲

一、獨唱　青木兒

パウルス……メンデルスゾーン作曲

一、ピアノ獨奏　大石光野

甲、ソング……メンデルスゾーン作曲
乙、セルツオ〔スケルツォ〕……シュベルト作曲

一、合唱　會員

甲、牧笛……〔ベルヒ作曲　中村秋香作歌〕
乙、窓の小鳥……〔メンデルスゾーン作曲　大町芳衛作歌〕

一、オルガン獨奏　三上たけ
ガボッテ……バハ作曲

一、ヴァイオリン獨奏　安井こう
バールカロール……バハ作曲

一、ピアノ獨奏　本多かつ
ソナタ……デュセック作曲

一、合唱　全會員
橘の薫……〔ケルビニー作曲　鳥居忱作歌〕

## ○音樂學校學友會演奏會

五線子

近頃音樂の會と云へば、何れの集りも皆必ず盛會を極むるのは、實に喜ぶべき現象で確かに社會氣風の變遷と、教育の進歩とを認むる事が出來る。二十三日午後上野の奏樂堂で開かれた學友會の演奏會も、同く近來稀な盛會で、奏者も聽衆も共に滿足したのは至極結構の事、我輩は幸に當日其席末を汚すの榮を得たから、例に依て聊か見聞した處を紹介しやう、是も實は斯道に忠ならんとする爲である、但し校長の御注意も有た事だから、成るべく嚴しい批評は拔く事にする。

第一は會員の合唱、(甲)「雪中軍」、吾人の記憶に尙新なる青森の慘事を唱つたもの、加ふるにハーモニーもメロヂーも甚だ悲哀的で十分の感動を與へた、ソプラノの聲少しきたなく、テノーの調子時々上づるのを除けば概して上出來、(乙)「探梅」、伴奏のピアノと正確に合はず、調子に如何の處があつたは遺憾だ。次は天野あい嬢のピアノ獨奏、曲はベートーヴェンのソナタ、二七許りの可憐女が無邪氣に奏する態度頗る愛すべし、第一部を反覆して後は表情も十分に奏されたのは感心である。次は宮脇せん吉川やま兩嬢の二部合唱、ソプラノの宮脇嬢、當日咽喉でも痛めて居たらしかつたのは氣の毒であつた。高橋とよ嬢のピアノ獨奏、先は滯りない上出來。

此次に奏された天野はつ嬢のヴァヰオリン獨奏は確に當日中の聞ものであつた、曲はフリューリングス、エルウハヘン、バヽの作中尤も感情的で且壯大なる曲、演者は新体詩歌を能する女詩人として聞ゆる人だからよく此曲を解し十分の表情を以て奏されたのは嬉しかつた、蓋し嬢は去年の卒業生中前田嬢と共にヰオリニストとして極めて有望なる者、將來益す奮勵される事を切望に堪へぬ。次は將來のピアニストとして有名なる小林禮氏のピアノ獨奏、素より惡からう筈がない、面白つた。會員の合唱「戀しき母」、實に巧妙に唱はれた、「鶯宿梅」各部の輕妙なる、メロヂー的なる唱ひ惡き曲を、些の誤りなく美妙に唱れた。

第二部に入て、堤正夫氏のピアノ獨奏、今少し表情が付けて欲いが、先は上出來聲樂家として好評ある青木兒氏の獨唱、曲はメンデルゾンのパウルス中、コーラスのイントロダクション、スタイルもよく聲も艶麗で非常の上出來なりしは頼もしい。大石光野嬢のピアノ獨奏、(甲)メンデルゾンのソングは能く原曲の意味を發現されたが、(乙)シュベルトのセルツオは、彈方が少し遲くはなかつたか。會員の合唱、(甲)「牧笛」、(乙)「窓の小鳥」、有繋に上級生丈の事はある、兩方とも却々の上出來。三上たけ嬢のオルガン獨奏、を終へて次は、安井こう嬢のヴァヰオリン獨奏、曲はバヽのバールカロール、曲は名の如く可憐のもので、殊にソルチノーを用ゐた爲一層の妙味があつたが、前の天野嬢に比べて何となく聞劣のしたのは曲の故か、あらぬか。本多かつ嬢のピアノ獨奏、デュセックのソナ

タ、有繋に現生徒中尤もピアノに堪能なる孃の事だけあつてテーマーに十分の表情を用ゐた處などは甚く難有い、出來は無論上出來である。

偖最後は例の「橘の薫」、相替らずの大仕掛で壯觀云ふばかりなし、但し其評は春季演奏會まで預つて置く。兎に角此日の演奏が何れも却々の出來で、生徒諸子の技藝が毎會必ず多少の進歩を見るのは慶ぶべき事である、文部省の當局者も尚少し目を明いて、此學校の設備を更に完全にする工夫を願ひ度いものである。

（『中央新聞』明治三十五年二月二十七日）

## ○音樂學校演奏會

音樂學校學友會の大會音樂演奏會は、二十三日の午後一時から開かれました、例によつて概評をして見ましよう。

△第一部の一、合唱、甲　雪中軍　ボルトニアンスキ作曲　武嶋又次郎作歌

乙　探梅　ウエベル　鳥居忱作歌

會員演奏、新入の人々とは思へぬ迄に美しい聲でした、雪中軍にはげにもと暗涙を催しました、

二、ピヤノ獨奏、ソナタ、ベートーヴエン作曲

天野あい演奏、小さい方が此位彈けるんですから、此道の爲に喜ばしい事です、

三、二部合唱、早春の詞、メンデルソン　武嶋又次郎氏

宮脇せん、吉川やま演奏、ユンケル先生の伴奏でした、御両人の御心持はます〳〵であつたのではありますまいか、何だか聽いて居る中にも御氣の毒の樣に思はれました、尤も曲と歌が合はないせいもありませう、どう聽いたつて嬉しく樂しい曲とは思はれませんでした、

四、ピヤノ獨奏、ソナタ、モツアルト作曲

高橋とよ演奏、がら不相應の落付方で又割合によく響きました、

五、ヴアイオリン獨奏、フルーリングス、エルウアヘン、バハ作曲

天野はつ演奏、御氣の毒ですが曲まけがしたようです、もつと美しい鶯の初音に聞かせられんでせうかと思はれました、

六、ピアノ獨奏、ソナチナ、クーラー作曲

小林禮演奏、達者に奇麗にひかれました、氣取つた處に得ならぬ愛嬌があります、

七、合唱、甲　戀しき母　ウエブスター作曲　大和田建樹作

乙　鶯宿梅　メンデルソン　鳥居忱

會員演奏、上音部が他の部にくらべて强過まして諸重音の慣れぬ耳には結構でした、乙の方は各部まち〳〵の處もありましたが俗受けがたしかにしたようです、

第二部一、ピアノ獨奏、ソナタ、ハイドン作曲

堤正夫演奏、間違つたなんて、そんな野暮はいひませんが、いやに大家振たので一体に辻褄が合はなくなつたのではありますまいか、

二、獨唱、パウルス、メンデルゾーン作曲

青木兒演奏、英語唱歌でしたが、立派なもんです、二度三度くりかへして欲しかつたです、

三、ピアノ獨奏、甲　リング、　メンデルゾーン作曲

乙　セルツオ　シューベルト作曲

大石光野演奏、乙の方がよい出來でした、出場られてから西洋婦人の先生が飛び出してピアノの蓋をあけられたのには演奏者の本人も驚かれたでせうが聽衆は尚更驚きました、

四、合唱、甲　牧笛　ベルヒ作曲　中村秋香作歌

乙　窓の小鳥　メンデルソン作曲　大町芳衞作歌

會員演奏、舊顏揃ひでしたから一体に完備したといふ外はありませんが、次中音は不充分でした。

五、オルガン獨奏、ガボツテ、バハ作曲

此上なき演奏、オルガンには稀らしい景氣のいゝ曲です、無論完全無欠とは行きませんが、曲相應に聞かれました、」

六、ヴアイオリン獨奏、バールカロール　バハ作曲
安井こう演奏、なんといふ美しい音なんでせう、曲の小品物なのにも拘はらず、愼重に演奏されたのは感心です、實に今一度聞きたいと思ひました、
七、ピアノ獨奏、ソナタ、デユセツク作曲
本田かつ演奏、是は當日の白眉でした、曲の適不適は結果に大關係がありますが……たしかに此ソナタでよく分ります、各演奏者の技量をあらはすに適當の者でなくてはいけません、
八、合唱、橘の薫、ケルビニー　鳥居氏
全會員演奏、大變な大きな者、音樂學校名物の一ツの楠公父子の歌で（從前數回演奏されたものに猶數段を加へたるもの）實に稀有の大合唱、二時間餘もかゝるかと思はれるものですが御骨折の割合に受が惡かつたのは聽手の惡いので演奏の罪ではありません、

（『讀賣新聞』明治三十五年二月二十八日）

## 明治三十五年三月二日　試業演奏会

第十回試業總會順序（明治三十五年三月二日午後一時開會）

一唱　歌（三重音）（岡野氏受持）女生徒
甲 夜の春雨
乙 潮干狩（アプト氏曲、鳥居氏歌）
一ヴァイオリン（石野氏受持）澤村寅次郎
甲對月（ブルーメンステンゲル氏作）
乙歌調（ボアルデユー氏作）
一箏（高橋氏受持）石田すゞ　角倉あい　春山とみ
野遊（本校調）
一オルガン（田村氏受持）木田アドルフ
甲練習曲
乙進行曲
一ピアノ（神戸氏受持）原みち
ソナテヰナ（クレメンテヰー氏作）
一ヴァイオリン（村松氏受持）淺羽ひで　室田きを
甲レンドレル
乙ポロネーズ（アルマンド氏作）
一箏（高橋氏受持）春山しづ　青木すゞ
かざしの雪（初代山勢撿校作）
一箏（今井氏受持）山本富三郎　今井とし
櫻狩（山田撿校作）
一ピアノ（杉浦氏受持）内田ふみ
歌調（ラング氏作）
一ヴァイオリン（賴母木氏受持）角倉正道
ソナタ（ウオールファールト氏作）
一唱　歌（三重音）（岡野氏受持）男生徒
春曉（アプト氏曲、旗野氏歌）
一オルガン（島崎氏受持）辻美亞
練習曲
一ヴァイオリン（村松氏受持）淺羽ひで　室田きを
ガボット（シット氏作）
一オルガン（田村氏受持）石原傳枝
進行曲（バットマン氏作）

一箏　越後獅子（峯崎勾當調本校歌章修正）（今井氏受持）（奥山とし　東條こう）
一ピアノ　ソナテキナ（クーラウ氏作）（橘氏受持）吉原ちよ
一オルガン　朝の曲（クロイツエル氏作）（天谷氏受持）堀しん
一ヴァイオリン　ミニュエット（モツアート氏作）（村松氏受持）（島川のゑ　守屋あづま）
一ピアノ　晩鐘（メンデルスゾーン氏作）（神戸氏受持）柳田こう
一箏　都の春（鍋島侯作歌山勢氏作曲）（今井氏受持）（金澤やすの　青木しげ）
一オルガン　薔薇（ラインハルト氏作）（島崎氏受持）島地あつ
一ヴァイオリン　タランテラー（シット氏作）（賴母木氏受持）（樫村たけ　細谷やい）
一ピアノ　ソナタ（モツアート氏作）（橘氏受持）上原きせ
一唱歌（四重音）（岡野氏受持）生徒
甲　團欒（クロツス氏曲）
乙　鶯の初音（ロシニー氏曲）（武島氏歌）

神田區一ツ橋通町　東京音樂學校分教場

## ○音樂學校分教場演奏會評判

澁谷馬頭

◎演奏會は本月初旬にあつたので大分日數もたつた事だから其時には成程と聞き取つたものも今は大方忘れてしまつたやうだが我輩の耳に深く感じたのは山本富三郎子の琴のしらべと、上原きせ孃のピヤノのひゞきだ。此両子の如きは誠に天禀（てんりん）があつて他のものは及びかねる趣がある。

◎山本富三郎と云ふはまだ十歳の上に出るか出ないばかりの小わらべなれども琴に向つて彈き出す其手ぶりは幾十年の稽古をつんだ老成人だ。其師匠なる今井君と新作段物を合奏して負けぬ氣にやつたあんばいは凄い腕前とは云はれないにしても、感心だと云ふだけの値打は充分にある。しかし歌に於て、あまり無遠慮に聲を張りあげて人をビツクリさせるやうな事があるが、いづれ修業をかさねた上になほるであらう。

◎ピヤノの妙手上原きせ子と聞いて、年たけたる音樂家と早のみこみする勿れ。これも亦まだうら若き令孃。演奏の曲はモザール氏作のソナタ。作者も作者。奏者も奏者。誠に我輩俗人の魂をして暫く塵界を離れしめてなごりが惜かつた。元來モザール氏の作曲は西洋にても甚だ持て囃されるとは聞いて居るが殊に我國人の耳によく適するやうだ。

◎最も我輩の耳にいやな響を殘したのは男生徒の唱歌である。及びバツトマン氏の進行曲である。しかし我輩の如き素人だから我輩の評判は君等が腕前の價を上下（あげさげ）しない。

◎男生徒四人場に列つて歌ひ始めた其態度は目の領分で耳の知らない事で。元來日本の男子には美聲の者が少いと西洋人が云ふやうだが、それでも若い時から修業させたら、うまく行かない事もあるまいが、三十四十、頭が禿げる頃になつて稽古し始めて作り聲でしぼり出す所などはきかれたものでない。

◎バツトマン氏の進行曲の演奏者石原君をとがめるは可愛さうだ。此曲は元來進行曲中の拙劣なるもの、おまけにピヤノのあとのオルガンと來ては聞き劣りするのも無理はない。此曲は此樣なはれの場所には持ち出してもらひたくない。

◎此他は云ふべき事もなかつたやうだ。無理に記憶を呼び出して云ふならば、六つか七つかの三人のむすめ兒たち打ち連れて琴をあはせたのは可愛らしかつた。原みち子のピヤノも。淺羽室田二孃のヴワイオリンも出來がよかつた。春山、青木二孃の琴もわるくなかつた。內田ふみ子のピヤノも相當の出來榮であつた。角倉正道君のヴワイオリンは耳よりも目に入つた。奧山とし東條こう二孃の越後獅子の箏曲中々よくやつた金澤やす青木しげ二孃の琴「都の春」は此度(こんど)の琴の中でのきゝもの。島地あつ孃の風琴ラインハルト氏作曲の薔薇は此度の風琴の中でのきゝもの。樫村細谷二孃のヴワイオリンまたよく出來た。

(『讀賣新聞』明治三十五年三月二十五日)

## 明治三十五年三月十五日

### 演奏曲目

一 合唱

(イ)樂徳……(バッハ作曲 旗野十一郎作歌)

(ロ)形見の刀……(グリュック作曲 鳥居忱作歌)

一 ヴァイオリン、オルガン、ピアノ……(幸田延 橘絲重 ハイドリッヒ)

メジタシオン、レリギアース……マッセニー作曲

一 ピアノ獨奏……ハイドリッヒ

カプリス……メンデルスゾーン作曲

一 ヴァイオリン、ピアノ……(ユンケル ケーベル)

ソナタ……ベートーヴェン作曲

休憩

一 合唱(管絃伴奏)

橘の薫……(ケルビニー作曲 鳥居忱作歌)

第一段 櫻井の驛

第二段 海陸寄手

第三段 菊水の譽

第四段 湊川合戰

(イ)和田の岬遠矢

(ロ)賊軍上陸

(ハ)陸上戰鬪

(ニ)楠公最後

(ホ)新田足利決戰

第五段 持佛堂

第六段 少時の遊戯

第七段 四條畷

〔プログラムの扉に「明治三十五年三月十五日」、中に「三十五年三月十五日午後二時半曲目(皇后陛下御前演奏曲目と同一)」という書きこみがある。〕

A CONCERT
TO BE HELD AT THE
Tokio Academy of Music,
UYENO PARK
ON
SATURDAY
*March 15th, 35 Meiji (1902)*
AT 2. 30 p.m.

## PROGRAMME.

I. CHORUS:
  A. Choral: If I should ever forsake thee ...*Bach.*
  B. Oh! in the woods so sad and sombre ...*Gluck.*
  *Students of the Academy.*

II. THAIS, *MEDITATION RELIGIEUSE* for Violin, Organ, Piano .....*Massenet.*
  *Misses Koda, Tachibana and Mr. Heydrich.*

III. PIANO SOLO:
  Caprice in E Major .....*Mendelssohn.*
  *Mr. Heydrich.*

IV. SONATA FOR PIANO AND VIOLIN...*Beethoven.*
  (Dedicated to Rud. Kreutzer) first movement.
  *Mr. Junker and Dr. von Koeber.*

Intermission.

V. REQUIEM for Chorus and Orchestra.....*Cherubini.*
  *Introitus*
  *Graduale*
  *Dies Irae*
  *Offertorium*
  *Sanctus*
  *Pie Jesu*
  *Agnus Dei*
  *Members of the Academy,*
  *conducted by Mr. JUNKER.*

## 明治三十五年三月二十九日　甲種師範科卒業式

東京音樂學校甲種師範科卒業式順序

明治三十五年三月廿九日
(土曜日)午後二時ヨリ施行

### 第一部

一　卒業生二部合唱
一　卒業証書授與
一　校長告辭
一　文部大臣演說
一　卒業生總代謝辭

### 第二部

一　合唱　豫科
　甲　舊友舊時……黒川眞頼　作歌曲
　乙　吉野の花見……ハイドリッヒ　作歌曲
　　鳥居忱　作歌曲
一　ピアノ　甲種師範科卒業生　林タケ　ヨ作曲
　ソナチナ……ベートーヴェン作曲
一　合唱　甲種師範科一年生
　甲　二見が浦……ロー本豐頼　作歌曲
　　居レ　作歌曲
　乙　海……佐藤誠實　作歌
一　オルガン　甲種師範科卒業生　志水操

ソナチナ……ラインハルト作曲
一　二部合唱　聲樂部一年女生徒
甲　我宿の燕……（ルービンスタイン作曲　鳥居忱作歌）
乙　春風吟……（シューマン作曲　武島又次郎作歌）
一　ピアノ　甲種師範科卒業生　福井直秋
エテューデ……ヘルレル作曲
一　ヴァイオリン　ヴァイオリン選科卒業生　樫村タマ
甲　シシリアノ……ヘンデル作曲
乙　ガヴォット……バッハ作曲
一　合唱
賤の苧環……（メンデルスゾーン作曲　佐藤誠實作歌）
一　ピアノ聯彈　甲種師範科卒業生（荒島スエ　甲斐蝶）
ソナタ……クラウゼ作曲
一　合唱（絃樂伴奏）　生徒
別情……（ベートーヴェン作曲　旗野十一郎作歌）
一　ピアノ　甲種師範科卒業生　加藤カネ
ソナタ……ハイデン作曲
一　合唱　本科生及甲種師範科生
薩摩潟……（シューマン作曲　鳥居忱作歌）

◉音樂學校甲種師範科卒業式　二十九日午後二時より同校樂堂にて擧行福井直秋外五名の女生及び撰科女生一名に卒業證を授與したる後渡邊校長は告辭を朗讀し菊地文部大臣は吾邦音樂の卑賤なること歳久しく文部省是に見るありて學校の課目中に音樂を採用せしかば稍々面目を改めたりと雖も未だ其の普及を見ず今回業を卒へて此處を去る人は新制度發布以來第一回の卒業生にして從つて其の責任も重し音樂を學校教授課目に入れしは强ち音樂を教ゆるに非ずして之によりて人間を造出すにあり況して其の名稱も師範科と呼ぶ程なれば希ふところは音樂者たらずして教育者たれとの意にて演說を試み斯くて卒業生總代福井直秋氏の答辭ありし後豫定の演奏に移りて在校生の合唱各卒業生が名殘の單獨演奏あり來賓は山川帝國大學總長外內外紳士貴婦人等樂堂も溢れんばかりにて四時半『薩摩潟』の絃樂伴奏にて式を畢れり卒業生は左の如し

福井直秋、加藤カネ、志水操、林タケエ、荒島スエ、甲斐エウ
ヴァイオリン撰科樫村タマ

（『國民新聞』明治三十五年三月三十日）

## ○東京音樂學校卒業式　演奏概評

（向窪生）

之を某音樂通に聞く、近頃聽衆の品下れるを以て演奏者の心意氣も自ら昂らざるが如しと。實に此の如きは多くの演奏會に於て見る所、殊に去る二月の某慈善音樂會に於て殊に其然るを覺る然るに去る廿九日東京音樂學校甲種師範科卒業式後の餘興演奏に列れる聽衆諸君が某氏の所謂品下れる人々ならざりしは嬉しかりき。演奏者諸君も亦滿足なりしと察せらるゝな

り。

總じて合唱の方が獨奏の方よりも上出來に聞えしは吾が耳慣れざる故にやあらむ、されど吾が隣席の人が合唱別情の折に、次なる薩摩潟と見誤りて、終まで何の歌なるやを聞き定め得で、頻りに當惑顏なるは可笑かりき、之れ等は管絃樂の賑かなる伴奏に、耳鈍りし人の類なるべし。

林タケエ孃ピアノ獨奏（ベートーヴエン作曲ソナチナ）、は相當の出來。福井直秋氏ピアノ獨奏（ヘルレル作曲エテユーデ）、師範的技能は認め得るとも、他の曲目にて御手際を聞き得ざりしを憾とす。荒島すゑ、甲斐蝶孃ピアノ聯彈（クラウゼ作曲ソナタ）、相當の出來、惜哉荒島孃をして某高等學校の校歌を奏せしめば、錦上花を添ふるの觀ありしならんに。

樫村タマ孃、ヴアイオリン獨奏（甲、ヘンデル作曲シシリアノ、乙、バツハ作曲ガヴオツト）、去年の夏故あり聞き得ざりしを以て大に憾としき、今や勇ましくも相次で二曲を奏せられたる御手際感服々々撰科生の代表者として能く其の任に負かざる者と云ふべし、滿場の拍手宜なるかな。曩に前田孃あり、今樫村孃あり、ヴアイオリン側の勢旺なるかな。樫村孃の令妹たけ孃又斯の技に長ず幸田氏の二姉妹、上原氏の二姉妹と鼎立して、連璧の名を成すは、夫れだけ孃にあるか。之に反してピヤノ側の氣焰頗る擧らざるが如し、然れど加藤カネ孃のピアノ獨奏（ハイデン作曲ソナタ）こそこの日の聞きものなりき。去年の秋季音樂會にクレメンチーのソナタに技量を示されしが、今日一段の進境に入る、大に賀すべし百の拍手よりも、某學士の稱賛こそ孃の面目此の上なけれ。最後の合唱は鳥居忱氏作歌薩摩潟なりき。久ぶりの出し物、此の學校の名物として、此の賜物を謝し、其上出來なりしを喜ぶ。當日校長の御斷なくば誤解は免れざりしならん、曲目の撰擇技術の細評に及ばざるは之が爲めなり、啻吾は某學士に問はん、當日聽衆の滿足は夫れ如何なりしと。

（『讀賣新聞』明治三十五年四月五日）

## 明治三十五年五月六日　第三回皇后行啓演奏会

演奏曲目

### 第一部

一　女聲合唱　生徒

甲　賤の苧環……（メンデルスゾーン作曲）

乙　清流……（佐藤誠實作歌）

一　オルガン獨奏　撰科生　島地あつ

ビルド、デル、ローゼ……ライヒハルト作曲

一　ピアノ聯彈　撰科生（原上ミセツチ）

ソナタ……クラウゼ作曲

一　ヴァイオリン獨奏　撰科卒業生　樫村タマ

甲　シシリアノ……ヘンデル作曲

乙　ガヴォツト……バッハ作曲

一　ピアノ獨奏

ソナティナ　甲……器樂部一年生　鈴木淑

乙……器樂部一年生　高橋クレメンティ作曲

一　ヴァイオリン二部　研究生（前田安井ジヤコウ）

シンフオニー、コンセルタント……ダンクラ作曲

一　ピアノ獨奏　器樂部二年生　本田カツ

ソナタ……デュセック作曲

一　箏　　助教授　今井新太郎
　　器楽部一年生　金澤柔能
　　撰科生　青木茂
　　新晒……深草検校作

第二部

一　ヴァイオリン及ピアノ　教師　ユンケル
　　教授　幸田延
　　教師　ハイドリッヒ
　　ソナタ……ヘンデル作曲
一　ピアノ獨奏……教師　フォン、コイーベル
　　ムーンライト、ソナタ……ベートーヴェン作曲
一　合唱（管絃伴奏）……職員生徒
　　橘の薫……（ケルビニー作曲／鳥居忱作歌）

## 明治三十五年六月一日　試業演奏会

### 音樂學校分教場試業總會

畏頭巨眼生

去る一日音樂學校分教場創立第四周年紀念日に際して、第十一回試業總會を催されたので、半日の閑を此所に樂まんと僕の馳せ付けた時は、男子部の方既に五人を終へた後で、本居長生君のピヤノ、角倉正道君のヴアイオリンを聽き落したのは殘念であつた、偖菊池盛太郎君のピヤノ（ソナテキナ、クーラウ氏作）、前田氏受持で演奏の間折々手に休みが見えたのは聽きにくかつた、今一層の御熟練あらまほし、此の如き有樣ではまだ男子部の氣焰は擧り兼ねる

女子部の先鋒として唱歌（夜、驟雨）あり、共に難はないが、啻其の一人が天上を瞰みて吾れ獨り歌へりの態度を採つたのは眞面目な全体の調和を缺いた、この人兎角此癖あり注意が肝要

目賀田正代孃木村ます孃ピアノ連彈（ポルカフオスター氏作）杉浦氏受持、久しく試業會に面が見えなかつたが今回この人に依てこの滑稽曲が彈ぜられた、樂の性質にもよらうが孃の手腕には少しあり餘る、今後一層の奮發を望む

石田すゞ孃、角倉あい孃、成澤柳孃の連奏箏（榮ゆる御代）執れも八九歳の方です、之は高橋氏受持で、氏が御骨折が能く見えた

次は細谷八五孃、萩原愛孃、伊井里孃三人連奏ヴアイオリン（歌調）頼母木氏受持で、評なし

川久保美須々孃ピヤノ（ソナテキナ、クレメンテキー氏作）櫻井氏受持、これには難がある、全くスタカツトが足りぬ、孃には稍重荷であつたらう、孃は由來器用の方だから、愈々勉めたならば進歩するは申すまでもない只今の所では何分持ち堪へ兼ねる、演奏者は成るべく聽きばえのするものを彈じたいであらうが、其の宜しきを撰ぶのは全く受持先生の任だ

上原せつ孃、渡邊きみよ孃ピヤノ連彈（ソナタ、クラウゼ氏作）橘氏受持、毎度御両人のお揃で又能く手も揃ふが、受持先生のお骨折の結果、御両人の御勉强が積むからだらう、年齢凡十一二、せつ孃は有名なるきせ孃の令妹だ

（つゞく）

（『讀賣新聞』明治三十五年六月四日）

### 音樂學校分教場試業總會

長頭巨眼生

春山靜孃、青木すゞ孃箏の連奏（玉川富士谷撿校作）高橋氏受持、是れも十三四歳の方で少し位の過はビクトモせず、サツサとやりのけらるゝは寧ろ愛嬌がある、これも高橋氏のお骨折だ、すゞ孃は今井氏門下其人ありと知られたる、しげ孃の令妹だそうで令姉に負けないように勉强が肝腎だ

内田ふみ孃ピヤノ（薔薇ラング氏作）杉浦氏受持、去年の今日彈ぜられたソナテキナ、（クレメチノ氏作）に比しては一層進歩した抑揚の判明であつたのは曲の性質でもあらうが、此の曲に對しては餘裕があつたからこれも受持の先生杉浦氏の獨吟を添えたかつた、

石神よし孃ピヤノ（水車エンセン氏作）神戸氏受持、曲の短にも拘らず、面白く又判明であつた、從來の御修業が積んで居らるゝと見受けたが殊更其れに安んじないように願ひたい、

柳田かう孃ピヤノ（幻想曲メンデルスゾーン氏作）神戸氏受持、御骨折の割合に聞きばえがしないのは御氣の毒だが樂の性質は致方がない、併し流石に之をやつてのけたのは孃の手腕だ、上原孃と俱に分教場に於る名手である、

金澤柔能孃、青木茂孃箏の連奏（岡安砧）共に今井氏門下の名手だ、兎角の評は吾人の及ぶ所でない、

上原きせ孃ピヤノ（ソナタ、モツアルト氏作）橘氏受持此曲は既に屢々彈ぜられたので練習の効は勿論あるが、吾人は樂石君と共に天才の賞讃を吝まぬ、

樫村たま孃（サラバンデ、ガボツト倶にバツハ氏作）撰科卒業生だ、先日卒業式の際奏せられた時には撰科生代表者たるに恥ぢずと譽められたが、此の日は少々聽衆を呑んでかゝられたやうな態度は大にアンチパシイを惹起した、

要するに今回は諸種の方面から演奏者が出て唱歌の外に三十番四十三人の演奏者のあつたのは空前の盛事だ、斯樣に大勢を出して試業會を公にされたのは分教場主事並に教授諸先生の苦心の結果で感服の至りだ。

（『讀賣新聞』明治三十五年六月五日）

## 第十一回試業總會短評

桔梗生

六月一日午後一時より神田一ツ橋東京音樂學校分教場に於て第十一回の試業總會は開かれたり男子部八番女子部二十五番總計三十三番別に番外として一番の女子唱歌を加へたり斯樣な多數の演奏故順序のみ記するも容易の事にあらず況んや細評をや、いでや之より短評を試みむ

◎序開きとして男生單音唱歌の突貫は始まれり原歌ソルダーニ替ふるに突貫を以てす稍ゝ正鵠を得たりと雖も唱者に今一層の活氣ありしならばと思はれたり

◎ピアノ獨彈ソナテキナ、クレメンテキ氏作は原馨氏に因で演奏せられたり氏は可なり長年月間のピアノ選科生と聞きしが此のお面白き曲をミステーク澤山は苦しかりき

◎ヴアイオリン甲小幻想曲乙舞踊曲は澤村寅次郎氏の獨奏にして將來有望のヴアキオリニスト唯此の日の演奏は甲乙二つ共拍子の餘りに緩徐なりしと伴奏の拙なりしを憾む。

◎赤星國清氏のオルガン春の歌獨奏稍ゝ老熟の域に達せんとして未なり當日の曲は高尚に過ぎ趣味を解するに難なり兎に角分教場中選手の一人たるを見留む勉强せよ。

◎本居長世氏ピアノソナテキナ、クレメンチー氏の獨彈にして比較的彼の如き難曲を容易に演じ了りたりし氏は確に樂才ある前途有望の一少年なり唯だ一つの非難を重言せば氣取癖有るは最も注意すべき所なり

◎角倉正道氏のヴアイオリン別れの歌獨奏EA二絃のアウトチユンはありたれど又伴奏と遇はざる處もありたれど意氣揚々とやつてのけたるには感服唯歌意不現を惜む

◎箏曲千鳥は例の年の頃十一二のいたづら盛の山本富三郎氏出場と共に拍手を以て向へられぬ怖れず臆せず老練にして而かも大人的に所謂ノドを廻すことの巧みさよ

◎男子部殿りとしてのソロイスト菊池盛太郎氏はピアノソナチナ、クーラウ氏を獨彈せられたり。氏は聲樂に巧みにして最高G音を樂に出し聽官の英敏（ママ）を以て鳴ると聞たりボーカル以上八番何れも確に諸氏の勉强の結果は顯はれたり次で直に女子部の演奏は始れり

◎ピアノポルカ二人連彈は目賀田正代木村ます子の二小令孃演奏拍子の餘

りに遲かりしを遺憾とすれど選曲其當を得たるを謝す
◎オルガン獨奏は計七番中生の最も感服したるは古澤きみ子のアンダンテーなり。發想法姿勢ペダル等の他生よりは遙に一頭地を擢出せるを見留めたり孃に次では堀しん子あり下て須貝八重子秋元さく子等先づ未來のオルガニストなるべし
◎ヴアイオリンは獨奏一連奏三にして島川のゑ子守屋あづま子二人のミニユエツト最も良し選科卒業生といふ樫村たま子幸田教授の伴奏にて既に一二回耳にせしガボツテとサラバンデ二曲を演ぜしがいつもながらあざやかなりと言て置くべし
◎ピアノにて上原せつ渡邊きみよのソナタ二人連彈一の瑕瑾無く発想も充分にして能くクラウゼを表現せり而してこの校の選手なる上原きせ柳田かう等も各々腕を振はれたるが分けて石神よし子のエンセン作水車の曲は滿堂拍手雷の如かりし。
◎箏は五番の中石田すゞ角倉あい成澤柳見るから可愛らしき花の如き三少女未だ羞かしさも氣臆れも知らぬらしきが無邪氣に音樂取調掛調なる榮ゆる御代といふ稍々短き一節を連奏せしには聽衆唯にこ々然たりしといへども金澤柔能孃と青木しげ子の岡安砧は流石は老練なりき
◎唱歌四重音甲綠陰吟リウベル氏作曲武島氏歌優美にして高尚而かも俗耳に通じ其間塵界を遠ざからしむ乙音樂ベリニー氏作曲旗野氏作歌曲想壯麗にして又歡喜の狀を顯はす唯惜むらくは歌詞の明瞭ならざりしことなり。かくて。午後五時主任小山氏は立て閉會を告げぬ

余は此處に擱筆するに當り一二の希望を述べん其は各講師諸君の勞を謝すると同時に以後各科樂曲の撰定に充分の意を用ゐられんことを然らざれば演者の折角の勉强も聽者には樂曲の趣味餘りに高ければ之を解するに困難にして其の勞に酬ゆる感謝を表し能はざればなり

次は奏樂室なり斯の如き盛なる演奏會を開くにしては餘り室の狹隘にして聽き難く聲音の響きよろしからず折角招待に應じて來て見れば室は滿ちて溢れんばかり怨をのんで空しく歸る有樣なりそれのみならず衛生上にも少なからざる害ありと思ふ當局者よ以後此の會を催さんとならば上野なる本校奏樂堂に於てか或は教育會堂等他附近に廣大なる會堂は數多あるべし

此等專門學者に非さる所謂アマチユーア的の音樂會は獨り其の生徒或は關係者のみに限らず擴く社會一般の人にも聽かせ度思ふなり上野音樂學校に於ける演奏は各專門家が各自敏腕を振て近代歐洲樂の粹を採て以て其の伎を競ふ所故稍々偏の嫌なき能はずと雖も之に反して分教場の試業會は音樂普及策の上乘なるものと思ふ

（『音樂之友』第二巻第三号、明治三十五年七月、二七～二八頁）

## 明治三十五年七月五日　卒業式

東京音樂學校生徒卒業式順序

明治三十五年七月五日
（土曜日）午後三時ヨリ施行

### 卒業式

一　報告
一　卒業證書授與
一　校長告辭
一　文部大臣演說
一　卒業生總代謝辭

### 曲目

一　合唱　　豫科修了生其他

甲　歸　國……（アプト作曲　本居豐穎作歌）
乙　きらめく星……（國風　武島又次郎作歌）

一　ピアノ獨奏……豫科修了生　東儀哲三郎
　ソナティネ……クーラウ作曲
一　クラリネット獨奏（絃樂伴奏）専修部卒業生　中村忠雄
　カンタビレ……ロッシニ作曲
一　合唱（管絃伴奏）……職員及生徒
　海上朝暾……（キール作曲　鳥居忱作歌）
一　オルガン獨奏……専修部卒業生　三上タケ
　ファンタジー……フランク作曲
一　ヴァイオリン獨奏……研究生　安井コウ
　ソナタ……ヘンデル作曲
一　獨唱（管絃伴奏）……選科生　青木兒
　アリア（パウルス）……メンデルソン作曲
一　合唱（管絃伴奏）……職員及生徒
　愉快……（ハイドン作曲　旗野十一郎作歌）

◉東京音樂學校卒業式　七月五日午後三時より執行せり、文部大臣以下の臨場あり、證書を授與せられたるは專修部卒業生中村忠雄氏三上タケ氏二名を初めとして乙種師範科卒業生十四名豫科修了生二十四名撰科修業證明書各種合計三十八名にして式終りて直ちに演奏會を開き續きて茶話會を催し今學年の修りを告げて午後六時頃散會せり會場は貴紳淑女を以て充滿したりき。

（『音樂之友』第二巻第四号、明治三十五年八月、三四頁）

## 明治三十五年十一月九日　試業演奏会

第十二回試業總會順序（明治三十五年十一月九日午後一時開會）

一唱歌（三重音）（田村助教授受持）女生徒
　甲　なき友（スポアブ作曲）
　乙　漁夫（メロデー作曲）
一ピアノ小品（櫻井氏受持）高折宮次
一オルガン（三上氏受持）岩井なみ
　モルソー、リリック第九番（メルケル作曲）
一ヴァイオリン（村松氏受持）淺羽千代
　ワルツエル（ショパン作曲）
一ピアノ（櫻井氏受持）寺田薫
　ソナテイナ（クーラウ作曲）
一箏（高橋氏受持）（角倉アイ　石田スヽ）
　松虫
一ピアノ連彈（杉浦助教授受持）（瀧野たきゑ　星野つね）
　ソナタ（デアベリ作曲）
一ヴァイオリン（村松氏受持）室田きを
　ウンガリッシュ（アルマンド作曲）

一オルガン　進行曲　（田村助教授受持）木田アドルフ
一ピアノ　ソナテイナ（クレメンチ作曲）　（能勢氏受持）角倉アイ
一ヴァイオリン　スウィートホープ（ゴルトスタイン作曲）　（頼母木助教授受持）細谷八五・井伊里・萩原愛
一箏　千鳥の曲　（今井教授受持）山本富三郎・今井トシ
一ピアノ　ソナテイナ（クーラウ作曲）　（神戸助教授受持）原みち
一オルガン　一練習曲・二墺國々風（ハイドン作曲）　（天谷氏受持）秋元きく
一ヴァイオリン　アンダンテ（モツアルト作曲）　（村松氏受持）淺羽英
一ピアノ連彈　ソナタ（クラウゼ作曲）　（橘教授受持）上原せつ・渡部君代
一オルガン　リリッシエ、ブレテル第一番（メルケル作曲）　（三上氏受持）島地あつ
一ピアノ　ソナテイナ（クレメンチ作曲）　（前田氏受持）菊池盛太郎
一箏　四段砧　（今井教授受持）青木しげ・奥山とし・横山千代き
一ピアノ　ソナテイナ（クーラウ作曲）　（前田氏受持）山崎普立
一ヴァイオリン　アイン、メルヘン（グスタフ、ヒルレ作曲）　（頼母木助教授受持）角倉正道
一オルガン　レ、タンボリン（ラモー作曲）　（天谷氏受持）堀しん
一ピアノ　ソナテイナ（クーラウ作曲）　（橘教授受持）吉原千代
一唱歌　夕照（レンツ作曲・旗野十一郎作歌）　（杉浦助教授受持）女生徒

神田區一ツ橋通町　東京音樂學校分教場

東京音樂學校分教場試業會批評（音樂の友）

十一月九日午後一時開會、第一には唱歌なき友と漁夫とは女生徒に歌はれましたが前座の屑物中にも稍ましなのが無いとも限らない位の評しか出來ますまい。次ぎに櫻井ふき子門下の高折宮次といふ十ばかりの黑いジャケットを着た少年が平臺ピアノにかゝり小品を滯りなく奏したのは感ずべく又愛らしくありました。淺羽千代子は洋服粉裝にてヴァイオリンを奏したるが音律正確にしてスタイルよく十二三歳の愛らしき少女なるが大に有望なり、角倉あい、石田すゞ子にて箏曲松虫の連彈あり、原みちといふ人は、山根醫學士考案の改良服を着た少女でソナテイナ（クウラウ作）を巧

みにやってのけました。山本富三郎は今井教授の妹とし子と箏曲（千鳥）を合奏しました。この日オルガンは五回ほど出ましたが、趣味の分らぬ野生にも木田アドルフの、進行曲と堀しん子のレ、タボリン（ラモー作）の二つは面白く聞きましたよ、吉原のピアノソナテイナ（クウラウ作）青木、奥山、横山三名の箏曲四段砧、最後の唱歌、夕照（レンツ作）これはこの日の大失敗もので、天狗の鼻柱を叩き折られたやうなものでありましたらう。こんなものばかり聞かされた日にや吾人はいくら素人だツておたまりこぼしも無いことですとよ。

（『本邦洋樂變遷史』四二九頁）

## 明治三十五年十一月十六日　第七回定期演奏会

明治三十五年十一月十六日午後一時半開會

秋季音樂演奏會曲目

東京音樂學校

### 第一部

一合唱　生徒

甲　秋の夜……（クオータル作曲）佐藤誠實作歌

乙　觀菊宴……（シューマン作曲）佐藤誠實作歌

一ピアノ獨奏　器樂部二年生徒　小林禮

ゼクス、ヴァリアチオネン……ベートーヴェン作曲

一合唱　生徒

甲　霜の旦……（露西亞民歌）旗野十一郎作歌

乙　人生……（シューマン作曲）武島又次郎作歌

一ヴァイオリン（ピアノ及オルガン伴奏）教授　幸田延

ヒムネ……グーノー作曲

一オルガン獨奏　講師　天谷秀

甲　アダジオ……メンデルスゾーン作曲

乙　モデラート……リンク作曲

一獨唱、合唱、管絃合奏　選科生徒　青木兒

廿一回猛士……（メンデルスゾーン作曲）鳥居忱作歌

### 第二部

一管絃合奏　職員生徒

シンフォニー……シューベルト作曲

一ピアノ獨奏　教授　橘絲重

バラーデ……ショパン作曲

一獨唱、管絃合奏　聲樂部二年生徒　柴田環

パウルス……メンデルスゾーン作曲

一ピアノ獨奏　教師　ハイドリッヒ

ファンタジー……ヘルレル作曲

一合唱（管絃及オルガン伴奏）　職員生徒

愉快……（ハイドン作曲）旗野十一郎作歌

AUTUMN CONCERT
OF THE
Tokio Academy of Music,
TO BE HELD AT
Uyeno Park
ON
Sunday November 16th
35 Meiji (1902)
AT 1. 30 P. M.

## PART I.

I. CHORUS:
*a.* Night, O Sacred Night. .....Chwatal.
*b.* Gruss a. d. Frühling. .....Schumann.
*Students of the Academy.*
*Conducted by Mr. Ono.*

II. PIANO SOLO:
Sechs Variationen in G dur. .....Beethoven.
*Mr. Kobayashi (II. year in Instrumental Department).*

III. CHORUS:
*a.* Russian Folks Song.
*b.* Beim Abschied zu Singen. .....Schumann.
*Students of the Academy.*

IV. VIOLIN WITH PIANO AND ORGAN:
Hymne an die heilige Cäcilia. .....Gounod.
*Miss Koda.*

V. ORGAN SOLO:
*a.* Adagio. .....Mendelssohn.
*b.* Moderato. .....Rinck.
*Mr. Amaya.*

VI. BARITONE SOLO, CHORUS AND ORCHESTRA:
From "St. Paul." .....Mendelssohn.
*Mr. Aoki, (Elective) Instructors and Students of the Academy.*

## PART II.

I. ORCHESTRA:
Symphonie in H moll. (Unvollendet). ...Schubert.
*Instructors and Students of the Academy.*

II. PIANO SOLO:
Ballade in As dur. .....Chopin.
*Miss Tachibana.*

III. MEZZO SOPRANO SOLO WITH ORCHESTRA:
From "St. Paul." .....Mendelssohn.
*Miss Shibata, (II. year in Vocal Department).*
*Instructors and Students of the Academy.*

IV. PIANO SOLO:
Fantasie. .....Stephen Heller.
*Prof. Heydrich.*

V. CHORUS WITH ORCHESTRA AND ORGAN:
From" Schöpfung." .....Haydn.
*Instructors and Students of the Academy.*
*Conductor: Prof. A. Junker.*

## ▲音樂學校秋季演奏會のぞき

澁谷馬頭

◎音樂學校の秋季演奏會は十六日午後一時半から、大した人氣で開かれた。滿員の爲め玄關からたゞ戻りの人も大分あつた。場内は立錐の地なくつめかけたが、市の某中學校の某氏が、我輩の耳に口をよせて『音樂會を見に來たのサ』とさゝやいた通り、見に來た連中が多數なのだらう。我輩を始めとしてだ。

◎大島新校長は、確かに渡邊前校長よりはトロンペットの吹きやうが下手だ。アレも一ト景氣を付けるぢやないか。

◎青木チャイルド君（日本人だよ）のソロは學校で有名なものなさうだが、今度の出來は前回いつぞやのそれよりは引立たなかつた。次に柴田環の君と聞ゆるは自轉車乘りで名を得たる美人（男子ぢやないよ）のソロは其聲も其態度も無難と云ふべしだ。これより上に譽ない方が御當人のおためです。

◎天谷講師のオルガン、腕は見ゆるが、イヤ聞えるが、例によりて引立ない。幸田教授のウイオロンは簡潔。

◎橘孃のピヤノ獨奏をハイドリヒ翁のそれに較べるのは甚だ酷だ。翁の妙手は感心の他はないとして、例の目の領分から攻め立てれば、矢張すきまがある。顏を近く鍵盤の上に載せて、左から右へ、右から左へ、忙しげに蚤とり眼で見廻すのは近視眼の故でもあらうが、餘程變だ。翁の演奏中に一人うしろの小洋琴に腰うちかけて、餘念もなく聞て居たのはユンケル君、無作法も心づかないこそ、めでたけれだ。

◎シンフオニは結構な出來。『廿一回猛士』の合奏はまづい出來。最後の合奏『愉快』はまづ宜しい方であらう。前回の演奏會の最後の管絃樂は折角の珍客吳汝綸先生に對して氣の毒に感ぜられたが、併し段々上達して行くのだらう。

◎どうも、折角の名家の傑作の曲も、調和しない歌詞をつけて歌つては、値打がなくなる。鳥居、旗野、武島諸先生の金玉の詞も、徒に瓦礫をころがすやうなひゞきを發して曲にあはない、此点は我國の音樂會の缺点で、西洋人に、singe の人まねするのだと嘲られる原因は、主としてこゝにあるのだと我輩は信ずる。或る西洋人が我國の歌として『高い山から谷底見れば』『宮さん宮さん』等の俗歌を紹介した。此記事を讀んだ我輩は不快の念を起したけれども、實際、歌詞と歌曲と調和して、人の耳に深い印象を與へることは『高い山から』『宮さん』乃至『シノノメノ、ストライキ』等が『廿一回猛士』『愉快』等の上に出づること數十等であると云はねばならぬではないか。『局に當る者は迷ふ』謹んで、くろうと諸君の御一考を煩はす。（十六日夜）

（『讀賣新聞』明治三十五年十一月十九日）

## 東京音樂學校秋季音樂演奏會批評（音樂の友）

十一月十五、十六日兩日午後一時半開會にて滿員の盛況は例年を優ること幾十等、今その演奏曲目の順序によつて一般の評判を記さんとはするなり。

合唱、甲種師範科第二年生と本科第一年生との聯合にして去年九月入學の學生、それを指揮せしは同じく去年九月より本校に教鞭を振らるゝ多梅稚なりいでや惡評を聞かさむ、元來この曲は既に聞き古したる舊式の燒きも直さぬそのまゝにて作者クオータルとありしは恐らくシユアタルの誤りなるべし、その演奏は如何に熟達したりや定めて御手のものならんと思ひしが古き曲といへ極めて容易ならざる曲と見えて隨分聽者の耳を苦しめたりき、去年新參の學生としては或は重荷に過ぐるには非ざりしか就中ソプラノの哀れなる聲は如何に聽者の手に汗を握らせしか、さてもあらん之れは前座にて候ふものをと誰やらの小聲。

次に可愛らしき小ピアニストの獨奏ゼクスバリアチオネンといふ曲にて作者は本誌口繪にて御名じみのベートーヴエンといふ名家、而して小ピアニストは例の小林禮なり。相變らず小さきが故に可愛らしく見ゆるその柔かなる手にて例の自由自在なる演奏の妙味は蓋し校中の呼びものなるべし

幸田延子の門下にはたしてこの怜才あり、小林！は今瀧も聞きつ見つその發達の著しきには感服の筈にて將來大に有望の評多し、幸に自愛していよいよ怠ることある可らずとなん、次は合唱霜のあした、これは毎年必ず聞かさるゝ曲なり或は會歌ともいふのにや、流石上出來にて難ずるところを知らざりき人生といふ歌は新曲なるべしとはいへ素人は先つ感服せざらん、隨分困難なるべき筈の曲なるを必死と勉めたる者もありしと見えて吾人は左のみ不可の點を聞き出し得ざりき、次は大變なるものなり、ヴァイオリン幸田延子、ピアノはユンケル教師、オルガンはペリー教師の伴奏にこれには只感服の外にいふ處を知らず、或人口に袖を當て微かに曰くお延様にはお茶の子賽々の曲ですものを難くせのつけやうが無い筈です今度はコンサルトか何か久しぶりで大物に力瘤入れて聽かして戴き度いのよ待ってますからね、時にその聲を制していふ者あり、兎角大家は聽衆を安く見積って易きものの骨の折れないものでまけといて呉れるからひどい。

次はオルガン獨奏にてメンデルゾーンのアダヂオトリンクのモデラート二曲なり。奏者は有名なる、天谷秀にて音のひき立たざるはオルガンの常ながら、兎角聞きばえのせざるは、あたら骨折る甲斐の知られざるこそ返すく〳〵も口惜しけれ、次は第一部の終りの獨奏合唱管絃合奏と仰々しき見出しにて廿一回猛士とても鹿爪らしく看板を掲げられたるまでは實に立派なり、一歩進んで伴奏の樂士におツ取り捲かれて一人ツクネンと屹立する不動尊は例の青木はじめにてすべての出で立ち道具建では甚豪壯にして先づ人目を驚かしめたりき、然るに之れは音樂の發達したる故か、音樂を聞くにはあらで見るといふものなりといふ人あり、そは何故ぞとなじれは乃ち答へて曰くが妙なればこゝに紹介せんに、ソロは本校にて名高き病人では無い、名人なる青木兒が層一層の勉强を以て、流暢優麗なる聲にて先づ歌ひ出でしが、如何にせん曲と歌とは全然絶對的に一致せず、これは作者があまり吾が田の水をのみ澄まして增さんとせし故にや吾が身をのみ飾らんとせしにや立派なるべき曲にて不立派なる釣り合ひの歌詞にて聽衆の退屈するよりは之を立派に聽かしめんと勉めし青木兒の身より萬斛の熱汗の流れたる氣の毒さには轉た同情を寄せし人もありつらん、しかも其歌たるや演奏時日に接迫して初めて見るを得たる俄作りの責め塞げ然たりしは獨りこの作者の持病として人々の大に氣遣ふところなりといふ。

ユンケル曰くソロのところだけは英語のまゝにせばや、傍より或人口をさしはさんで如何に内地雜居の世なればとてそればかりはなどといふ人ありしもことにおかしかりきとぞ。

第二部　管絃合奏シンフオニーにしてシューベルトといはれし人の作なり、これは本會當日の呼び物にして指揮者たるユンケル教師は平素より既に全力を集中して教導したるものなりといはれしが、成る程これは立派なる演奏なりき、例の舞踏的コンタクトに一層の興味添へて聽衆は思はず微笑を洩らして滿足の意を表はしぬ、平素の練習研鑽その苦勞察するに餘りあり當日諸氏が背上に出でし汗の量と熱とをばかり度かりしが如し、此曲は作者が中途まで作りて未だ充分の成功を見ざるに三十餘歳の身を以て世を早うしたるものその傑作中の一節なるべし、されば曲のよきところへ搗て加へて當日の全力を集中したることなれば恐らくは完全に近かるべし。

次には竹柏園の八佳人の中のひとりといふなる橘の絲重子が日頃埋木のかひなき名をば今日こそ知らさめとの出で立ちけなげに、腕に捻りかけて、身はかよはき婦人にてありながら此の難曲を奏すること元より彼の御手なみには左ほどにも覺し召されざらんなれど吾人の目よりは稍々重荷の感無きこと能はず、彼が苦しんでこの難曲に献じられたる精神は吾人の等しく謝意を表すべきところなり、實は吾人はかゝる大曲を褒貶するの眼識なきを耻づるのみ徒らに文筆を弄して名玉に瑾を附くるは本意に非ず、おほけなくも拜聽したる嬉しさは、返すく〳〵も吾人を完全なる聽衆と見上げて自ら苦しんで貢献せられしその誠意を謝するのみ一點の欠處を摘むことも能はざるなり、かゝる難曲を難とせずして發想も頗る當を得、極めて巧妙に、行く雲も足を停めつべく梁の塵も動きぬらん、ピアノのわたりに小さき羽のそびらに生ひたる稚兒が上に下にさまよひいざよひ、あこがれて聞き恍る、ミューズの神の今は何處にかなど思はれていとあでやかにたふ

としとこそ思ひつれ、まことに師匠ケーベル博士的の撰曲にして指づかひも發想も頗る髣髴たるものあり、吾人は彼に安く見積られずして此大曲に拜聽し得たるを喜ぶの餘りに只だ賞讃の言葉のみを竝べぬ、されど物皆一得一失一長一短あるは免れ難き習ひにして一言注意したきことあり、他の義にあらず演奏終りて樂屋へ退く時に譜まくりに雇はれたりし人と共にチョコ〳〵と小走りして入られたるは稍々人格に障ることかと思ふは酷か、彼は既に吾人が大家として竝べ立てたる一人にておはしまけるに、大家ともいはるゝ程の人が身の動作をも可愛らしき乙女ごゝろにまかせて安うも保ち給ふとては其の聞こえ必ずよろしからざることにて候ふよ但し曲はバラーデと名つけられぬ、次は獨唱管絃合奏パウルスといふ曲にてメンデルゾーンの作曲なり、ソロの名手はそも誰ぞ、遠からん者は音にも聞きぬ近からん者は目にも見よ、女學生のサイクリストの元祖ともいふべき自轉車乘りの名手にて女子嗜輪會の幹事とやらに推されたる女子にして姓を柴田、名を環と呼ばるゝ佳人なり、この少女が花の如き唇を洩るゝソロのひびきに有頂天外に飛び去らんとする者幾何ぞ、青木兒は男子の看板役、柴田環の君は女子部のかゞみと人おのづから其長處に服して貶すところを辨へず、惡評好きの口わろきものも此の二人のみは番外に讓れるが如し、兎角少女は愛嬌ありて可愛がらるゝものなれば吾人はその尻について雷同せず、大に賞揚して將來有望の言を惜まざると共に氣取り方未だ子供らしき處ありて音色、發想等悉く大人らしきにひとり其身をゆすることは猶ほ名玉の瑾か、初舞臺の上出來も伴奏の爲に聲を奪ひ消さるゝの虞れありしは遺憾なりき、之れ寧ろ彼の責めに非ずして伴樂士の大に注意すべきことなるべし、さても次ぎには、ピアノの獨奏ファンタヂーこれはヘルレルといふ人の作にて此間來朝せられし教師ハイドリツヒが演奏せられたるもの、讀賣新聞に評して曰く、『翁の妙手は感心の外は無いとして例の目の領分から改め立てれば矢張り隙き間がある、顏を近く鍵盤の上に載せて左から右へ、右から左へ忙しげに蚤とり眼で見廻すのは近視眼の故でもあらうが餘程變だ翁の演奏中に一人うしろの小洋琴に腰うちかけて餘念もなく聞いて居たのはユンケル君、無作法も心づかないこそ目出度けれだ』、との言なり、彼は近視眼にあらず遠視眼なること評者の御眼鏡違ひといふべきもの也あゝ名人これ知るのみ、最後に、合唱管絃伴奏（オルガン）愉快節にあらぬ愉快といふ歌なり、ハイドンの作にて天地開闢の曲（バリエーション）の一節なり、極めて賑かなる曲にして有名のものなり、既に人のよく知れる筈にして可なりの上出來なりき。

上手にて長きはよけれども、への字にて長きはあしかりなん、へたの長談講義ほど聞き苦しきは非ずといへば先づこゝにおほかたにて筆を措くべし、生徒の增加と共に入場券の多く出つる故に滿員の窮屈なるも一入の景氣にて愈々賴母しかりけり。

（『本邦洋樂變遷史』四二五～四二九頁）

**明治三十六年三月八日　学友会演奏会**

明治三十六年三月八日午後一時開會

大會音樂演奏曲目

東京音樂學校學友會

第一部

一、合唱　會員

甲、大塔宮……Silcher.（黑川眞賴氏作曲）

乙、領巾麾嶺……Silcher.（鳥居忱氏作歌）

一、ピアノ獨奏　會員本居長世

Sonatine……Kuhlau.

一、獨唱　會員中島六郎

告げよ、何の爲めぞ、（露語）……アレクサンドル、ザンデル、

一、ピアノ獨奏　會員　天野あい
Sonata in Ema, op 14. (First movement) ..Beethoven.
一、ヴァイオリン獨奏　會員　東儀哲三郎
Sonatina ……Wohlfahrt.
一、オルガン獨奏　會員　古澤きみ
Fantaisie in E flat major ……C. Franck.
一、獨唱　會員　柴田環
Aria from Oberon. "Traue mein Herz" ……Weber.
一、ピアノ獨奏　會員　高橋とよ
Sonata in F……Mozart.
一、合唱　會員
甲、松の深雪 ……（Schubert. 作曲）
乙、嗚呼赤心愛國の士……（鳥居忱氏作歌）

## 第二部

一、箏　會員　村田みい　會員　金澤やすの
都の春 ……（山勢松韻氏作曲　鍋島侯爵氏作歌）
一、合唱　會員
甲、夢 ……（Schumann. 作曲　佐藤誠實氏作歌）
乙、吹く風 ……（Weber. 作曲　黒川眞頼氏作歌）
一、ピアノ獨奏　會員　小林禮
a. Gondellied. ……Mendelssohn.
b. Spinnlied. ……Mendelssohn.
一、獨唱　會員　中島六郎
亡友を懐ふ ……（Schumann. 作曲　鳥居忱氏作歌）
一、ヴァイオリン連奏　特別會員　前田裏子　特別會員　天野初子
Sonata ……Handel.
一、ピアノ獨奏　會員　栗原きん
Sonata in Gma, op. 19 (1. movement) ……Beethoven.
一、獨唱　會員　吉川やま
Adieu. ……Schubert.
一、ピアノ獨奏　會員　田中やそ
Sonata pathétique in Cmi, op 13.
(Last movement) ……Beethoven
一、合唱　會員
橘の薫 ……（Cherubini. 作曲　鳥居忱氏作歌）

▲日曜の音樂學校の演奏會は面白かつたのよ合唱（コーラス）は好かつたけど、時々變な所があつたの胡弓（ヴァイオリン）のソロは何だかね！獨唱も獨奏も皆よかつたわ、其内古澤きみ子さんの風琴と高橋とよ子さんの洋琴（ピアノ）はよかつたて姉さんも云つて居てよ、本居さんも近頃手を上げたのねフラウ柴田環さんも矢張りよ、前田さんもそうよ、橘の薫は相かはらず面白かつたの（くま子）

（『讀賣新聞』明治三十六年三月十一日）

［批評は一四二頁の「樂界の半歲」も參照のこと。］

**明治三十六年三月十五日　山勢松韻慰労音楽会**

演奏曲目

第一部

一 箏　會員

みやこの春……（山勢松韻作曲／侯爵鍋島直大作歌）

一 尺八　荒木古童

殘月

一 箏　箏三　今井慶松／絃三　高橋清章

新晒

一 三曲　箏三　會員／絃胡　町田杉／弓山　室保勢／山津　橋勾　當調

松竹梅……三

第二部

一 合唱

甲、霜の旦……（ボヘミヤ氏／旗野十一郎作歌）

乙、人生……（シューマン作曲／武島又次郎作歌）

丙、形見の刀……（グリュック作曲／鳥居忱作歌）

一 ピアノ獨奏　神戸絢

リゴレットー、ファンタジー……リスツ作曲

一 オルガン獨奏　齋藤左右田

プレェリユヂュム、ウント、フーガ……バハ作曲

一 ピアノ、ヴァイオリン合奏　フォン、コイベル／アウグスト、ユンケル

ソナター……ルービンスタイン作曲

一 管絃合奏

シンフオニー……シューベルト作曲

（『音樂遊戯界』第一巻第三号、明治三十六年三月、三〇頁）

◎本月十五日午后一時より上野音樂學校に於て元仝校教授山勢松韻氏の爲めに、仝校の職員生徒一同發起者となり慰勞音樂會を開かれたり、其趣意書及ひ曲目は左の如し。

趣意書

元東京音樂學校教授山勢松韻君は、山田流の大家、箏曲の名手たるは、夙に諸賢の熟知せらるゝ所なり。明治十三年文部省創めて音樂取調掛を設けられ、翌十三年春エル、ダブリユー、メーソン氏聘に應じて來朝するや、君直に氏を其官舍に訪ひ、東西の名家一堂に會し、互に胸襟を披き音樂の玄妙を談ず。爾後相訪ひ相答へ、交日に温に、情月に和き、故舊知己も亦啻ならざるの觀ありき。同年六月以來、君同掛に在りて專ら音樂の取調に從事す。其功績一々枚擧に遑あらずと雖も、試に重要の者二三を摘擧せんか、東西音律の比較、歌詞樂曲の調和、箏曲集編纂、樂譜彈奏法等是なり、明治三十三年一月君病により休職を命ぜらる。實に君の職に我が校に在ること二十有四年、又頗る久遠なりと謂ふべし、今や君の休職滿期に接す。我が校職員生徒、君が多年の功勞を欽慕し、普く江湖諸賢の賛成を得て、玆に一の音樂演奏會を催し、其收入を擧げて君に一箇の紀念品を贈らんと欲す。江湖同感の諸賢、生等の微衷を諒せられ、冀

はくは賛成の榮を賜はらんことを

明治三十六年三月

東京音樂學校職員生徒一同

（『音樂遊戯界』第一巻第三号、明治三十六年三月、二九～三〇頁）

●山勢松韻翁と紀念音樂會　元東京音樂學校教授山勢松韻翁が箏曲の名手にして山田流の大家たることは夙に世人の知る所なるが翁は二十餘年の久しき間同校の教授たりしも曩に病の爲めに休職を命ぜられ本年は其休職滿期となるに付き職員生徒一同來る十五日午後一時より同校内に紀念音樂會を催し其收入を投じて一の紀念品を翁に贈呈する筈なりと云ふ

（『毎日新聞』明治三十六年三月十一日）

●東京音樂學校音樂會　一昨日午後一時より同校箏科の教授たりし山勢松韻氏の名譽表彰の爲め開催せらる雨天に拘らず來會者は續々詰掛け滿場立錐の地なき迄の盛會にて演奏の各曲は奏手孰れも巧妙にして喝采を博したるが中にも今井慶松氏の箏（新晒）は箏曲に一新機軸を出したるが如く節調幽悠最も面白く聽かれたり

（『東京朝日新聞』明治三十六年三月十七日）

△音樂の友に掲げられた批評そのまゝを掲載する。

（甲）の霜の旦は生徒一同にも曲の趣味を了解された。（乙）の人生の曲は不感服、特に男聲の二部がフラフラしてゐる。（丙）は先づ普通の出來である。ピアノ獨奏、多少の間違ひは有つたにせよ、この大曲を女の身でとは、只管感服の外がない。音樂學校女教師中では例のない上出來である。オルガン獨奏、上出來。島崎教授の相續はこれで安心。ピアノ、ヴァイオリン合奏は批難の點を求むるに苦しむ。管絃樂合奏、時々不ぞろへの所もあつたが兎に角大仕掛のものをよく纏めた。

（『本邦洋樂變遷史』、四三五頁）

**明治三十六年三月三十日　甲種師範科卒業式**

明治三十六年三月三十日（月曜日）午後三時擧行

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

第一部

一報告

一卒業證書授與

一校長告辭

一文部大臣演說

一卒業生總代謝辭

第二部

一箏　選科卒業生　青木茂　岡康砧

一合唱　卒業生及生徒

羽衣……（ハウプトマン作曲　鳥居忱作歌）

富士の卷狩……（メンデルスゾーン作曲　鳥居忱作歌）

一ピアノ聯彈　甲種師範科卒業生（平澤カツ　牧野むめ）

ソナタ……クラウゼ作曲

一オルガン獨奏　甲種師範科卒業生　村田ミイ

ノヴェレッテ……ハッセンスタイン作曲

一、ピアノ獨奏　選科卒業生　荒川あい

タランテラ……ルレル作曲

一、合唱、管絃合奏　職員卒業生及生徒

神風……（鳥居忱作歌／ハイドン作曲）

## 明治三十六年五月一日、二日　第八回定期演奏会

第八回（春季）音樂演奏會曲目（明治三十六年五月一日）

第一部

一、管絃合奏　職員及生徒

マーチ……メンデルゾーン作曲

一、ピアノ獨奏　教授　幸田延

コンセルト第一部……モシェレス作曲

一、ヴァイオリン獨奏　教授　幸田幸

コンセルト……スポーア作曲

一、合唱　生徒

甲、此御山……（モツ野十郎作曲／ヴァール作歌）

乙、春夜曲……（ブラームス作曲／佐藤誠實作歌）

第二部

一、管絃合奏　職員及生徒

オーヴァチュア……モツアルト作曲

一、ピアノ及ヴァイオリン　教師（フォン、コイベルヴァウゲスト、ユンケル）

ソナタ……グリーグ作曲

一、合唱及管絃合奏　職員及生徒

神風……（鳥居忱作歌／ハイドン作曲）

（『東京音樂學校一覽』自大正十五年至大正十六年）

SPRING CONCERT
OF THE
Tokio Academy of Music,
TO BE HELD AT
UYENO PARK
ON
*Friday, May Ist. 36 Meiji (1903)*
AT 2.30 P.M.

PROGRAMME.

PART I.

I. ORCHESTRA:
Hochzeitsmarsch aus dem Sommernachtstraum. ... .....Mendelssohn.
*Instructors and Students of the Academy.*

II. PIANO SOLO:
Concert in G minor (Pt. I) .....Moscheles.
*Miss N. Koda.*

III. VIOLIN SOLO:
Concert No. XI in G major. .....Spohr.
*Miss K. Koda.*

IV. CHORUS:

*a. Ave verum corpus.* .....*Mozart.*
*b. Der Abend.*.....*Brahms.*

PART II.

I. ORCHESTRA :
Overture zur Oper Don Juan. .....Mozart.
*Instructors and Students of the Academy.*

II. PIANO AND VIOLIN :
Sonata in G minor. .....Grieg.
*Dr. von Koeber and Prof. August Junker.*

III. CHORUS ORCHESTRA AND ORGAN :
Der Sturm. .....Haydn.
*Instructors and Students of the Academy.*
*Conducted by Prof. August Junker.*

▲音樂學校の春季演奏會を不法にも自分の催しにした菊池文相夫妻は、案の如く當日玄關に出て客を迎へて居たが、有繋に氣が咎めると見えて開會の主旨だけは大島校長に云はした、遽かに仰せ付けられた校長が挨拶の文句にドギマギしたのは可笑しかった

（『中央新聞』明治三十六年五月四日）

○菊池文相に奉伺候（礫川生より）　左の件々奉伺候實は小生も出來るならば豚兒結婚披露かたがた一度東京音樂學校に於て演奏會を相催申度希望に有之毛頭他意なく依而乍御手數可然御示敎相被成下度候最も少々高直にても費用は決して吝む所に無之候

一、去る一日東京音樂學校に於て開會せる春季演奏會は公會に候哉將た文相閣下の私會に候や

一、學校長は開會の辭を述べしも文相夫妻が會場の入口に立て來賓に接待されしを見れば全く閣下の私會と認められ候、然らば學校長の陳述も言はゞ前坐と見做して可然候や

一、我れ〳〵平民に於て御同樣開會相叶儀に候や、又何處へ出願して可然候や

一、一回若干の費用にて御許可相成候や、又前納に候や如何

（『日本』明治三十六年五月四日）

○文相の音樂會　豫て報道したる如く菊池文相の催にて一昨日午後東京音樂學校春季演奏會を開けり當日は常宮、周宮、富美宮、泰宮四內親王殿下成らせられ芳川淸浦諸大臣其他內外貴紳淑女來會するもの無慮三百人にて非常の盛會なりしと云ふ

當日は幸田延子同幸子文科大學敎授ケーベル博士の獨奏及び同校敎職員の合奏共に聽衆の大喝采を博し特に新曲「此御山」の高尙なる「春夜曲」の幽雅なる「神風」の雄壯豪快なる聽くもの感に堪へざるの情あり演奏終りて後四內親王殿下には御機嫌麗はしく還御あそばされたりとぞ

（『東京日日新聞』明治三十六年五月三日）

## 音樂學校春季演奏會評（上）

後凋生

菊池文相の主催にかゝる春季演奏會は去一日例の樂堂に催されぬ。曲も樂師も近頃稀なる揃ひなれば、極東に故國の優雅なる樂をきく西人の悅

と、さては高潔なる詩的感興の前に立ちて、過去二世紀が示したる西樂發達の跡を探らんとする邦人の希望とにて、各名狀すべからざる滿足の眉宇に溢るゝを見たり。

第一部は「メンデルスゾーン」が沙翁の喜劇「中夏夜夢」に附したる樂中なる結婚行進曲を以て始まりぬ。先第一に眼に映じたるは各部の配置の更められたる事なり、こは現時獨乙に行はれ居る位置なりとか。此曲は千八百四十三年の作にかゝり、清新なる感情に富みて眞に管弦の精粹なりとヨアヒムの評せし曲なれば、面白からぬ筈もなけれど、わけて今日の演奏の早き「テンポー」の中にもゆかしきばかりの落着きを示し、始めの花やかなる節を享けたる二重附点の邊の輕妙も嬉しけれど、中頃に弦樂部の美しき「メロデイー」を追ひて「オーシス」に夏夜の夢を享くるが如きあたり、殊に結末の「下リラー」に吹奏器の響は近來の出色といふべし。概して今日の演奏に管樂は明かに進歩を示したるが如くなるが、さきに「木吹奏器」に一段の注意を促したる獨乙雜誌記者は如何に聞きけむ、緩急其宜を得たる「アンダンテ、ヴイヴアチエ」の精彩尚耳に殘れる心地す、數年前此曲の奏せられし時に比して多大の進歩を示したるは著しき事實なるべし

次は洋琴獨奏モシエレスの「コンチエルト」第一部なり千七百九十四年プラーグに生れて其左手に精妙なると其想像の豊富なるとによりて著れたる樂家にして、奏者は先きに「日本のテレジナ、テユア」と呼ばれたる幸田延教授なり。かばかり至難の曲にも其「テクニツク」に驚くべき精確を示し然も其解釋も亦之に讓らず、「タステン」に觸るゝ指のやさしさを味ふ間に襲ひ來る「フオルテ」の力は全く孃の婦人たる事を忘れしめぬ、樂器は孃の手に入りて全く親しき友となりたるが如く、其内在せる才能は盡きぬ泉の如く流れ出でゝ、殊に第二節の美しさは筆紙に盡すべくもあらず。弦樂に於ける孃が造詣の程は更にも云はず今又「ピアノ」に此成功を示さる、我等は嚴格なる意味に於ける音樂家を此人に得たるを祝せずんばあらず、而して之と共に此日の伴奏者たりし橘教授の信實なる助を思はざるべからず

第三は「ヴワイオリン獨奏」。新に歸朝せられし幸田幸教授なり。曲は十八世紀末の「シユポール」が十七の「コンチエルト」中第十一番「ゲー・デユーア」なり。嚴格なる「ヨアヒム」の門下に盛名を馳たる孃に「テクニツク」の精確を喋々せんは愚なるに似たれども「驚くべき早き至難の曲」とユンカー師の評せられたる此曲に於て、形式の對稱を特徴とせる此樂家の細をうがちて、高潔尊嚴なる志想と如何に彼が「テマ」の活用の自在なりしかを傳へ給ひぬ、殊に「スタカト」の精妙は生命と快疾とに對して出來得可き限りの成功といふべし。誰か孃に對して「アルテイス、ムジケエ、プレナ」の名を惜むものぞ。此曲の燃ゆるが如き熱情に醉ひ、充ち〳〵たる感情の中に夢みて只管其醒むるを恐るゝものゝ如し。其弓の用ゐ樣のことやうなるは、やがて今日の成功の主因かも知れねど、こは心ある人の注意を促したきなり。其音量や色彩に於るユンカー師との差は其体質によるものか。余は此点に於てゾボラヴイソヒ氏の夫と比較し得る機會を望む事切なり。されど此曲は素人耳には少しアツケなかりし樣なり、慾を云へば今少し大なるものをと望みしなりき。

（『讀賣新聞』明治三十六年五月七日）

## 音樂學校春季演奏會評（中）

後凋生

第四は生徒諸氏の合唱此御山、實はモツアルトの「アヴエ、ヴエルム、コルプス」なり。十八世紀の中葉チロルに生れ三才よく琴を彈じて和弦の精を誤らざりし人、南歐の艶麗を故國の端嚴に合せ、グルツクの高逸とハイデンの幽婉とを加へて寺院樂の粹をなしたる者なれば、其和聲に轉調に些の奇を弄せずして莊高の趣を傳へたる誠に死を觀じて人生唯一の慰藉とし最終目的爰にありと信じたる此樂家の風韻を忍ぶべし。本科以上の出し物なれば其演奏もさしたる批難はなき樣なれど、今日の他の精彩に比して些か聞劣りはせずや。唱歌の終に屬和弦より主和弦に轉じて靜かに結ぶあたり、常の事なれど、眞理を追ふて彼岸に達する哲人の面影も忍ぶべく

や。

次の合唱春夜曲はブラームスが夕暮歌なり原歌はシルラーが作にして其清新と幽趣とに於て此詩人が金玉の作なり、先きに賣花翁（オシアーンのフインガル）にて學びし樂家の特徴はこゝにもしるし。「暮雲靜かに動けばアポローンの駟馬は遠く去て澄める匂へる夜の靜けさ勝るものなき朧月夜」のあたりは表情に於ても申分なかるべし「ヘルデルリン」が運命歌を作曲せし作家は此詩の作曲に適せる者といふべく。和聲の少しく佶屈なるは此樂家の特徴なりといへど、われは其特種の流韻を悦ぶ。恰も色彩燃ゆるが如き一幅の畫圖に接するの思あり。「ハンスリツク」の如く「音樂に內容なし」と論斷する評家は此の如き曲に對しても「音響其者の形式美」と斷じ去るかは知らねど、余が今音樂と繪畫殊に風景畫との關係は其詩に對すると等しく親密なるものにあらずやと考ふるは、唯に音と色との用語の相關連せるの故を以てするが如き淺薄なるものには非るなり。色と音と共に意識の根底に存ずる直接自然感情より流れ出でゝ自然の明晰を被ふに興趣の面帕を以てす。新らしき理想の姿を樂家の「アテリエ」として自然對象相互の關係を調和的和聲的に追求して深く色彩陰影の神秘を探らんとする用意は此種の聲樂に於て等閑に附すべからざるものなりと信ず。

第二部第一はモツアルトが歌劇「ドン、ファン」の開場樂なり。十七世紀の中葉に當り始めてテレツの作「ゼビラの諷刺者」中に用られてより幾多詩人の改作を經たる古き西班牙說話に據りたる悲劇にして、「ドン、ファン」は懷疑と放恣との心に驅られてオクタビアの妻ドンナ、アンナを誘はんとして、其父コムテユールを殺す、憐むべしドンナ、エルビラは己が榮譽と平和とを捧げてこれを無情の人に送り其夢未だ覺めざるなり。夫よりモゼツトツエルリネが婚儀の松明、アンナ夫妻が復讐の謀、負心の人に對する怨など相重なりて第二幕に入り、彼が宮廷の宴席にドンナ、エルビラの心からなる勸告をもすてんとせる時、はるかに聞ゆる挽歌の聲に迷の雲はれて靜けき終焉に天帝が紫雲の迎接を受くるといふ悲劇なるが、元來開場樂とは音を以て言に代へたる全曲の序と見るべきものにして嚴密なるソナタ式に依據せる一種の前彈きなり。狂颸心の波をうちてファンはコムテユールを殺す、忽ち絃聲美しく聞えて抑ふべからざるエルビラの清き情にゼビラの溫柔鄕は一呼一吸戀にあらざる事なし、其聲やがて神に謝する祈禱の聲となり、忽ちにして重く忽ちにして激越悲壯なり。然し今日は寧ろ花々しく愉快に奏せられたり。これ或は一つ離したる場合には却て適切なる奏法なるべく、或は云ふ最後の十數小節を「デユール」に改めしものなりとか全体に於て決して失敗にはあらざりしが、こは人々の練習も勿論なれど一半は確にユンカー師の打拍杖より流るゝ秘力として深く感謝せざるべからざるなり。

（『讀賣新聞』明治三十六年五月八日）

## 音樂學校春季演奏會評（下）

後凋生

次は博士フオン、コエーベル。ユンカー師両氏の合奏にハイドリツヒ氏の伴奏を以てす、曲はビユーローが北方のショパンと呼びたるグリーグの「ソナタ」なり。スカンヂナビアの國民性を發揮せるもの此樂家を措きてあらずといふ。嘗て其評家が「名手の演奏をきゝて其人格や、演奏や、「テクニツク」や將た其熱情を考ふる暇あるは未だ感興其最高潮に達したるものもあらず。藝術家は一方に於て魔術家の如く全く有象以外に我等をひき批評をはなれ推理をはなれ眞に美と自由との境に憧れ自我と宇宙と融合したるかを疑はしむるもの、之彼等が最高使命なり」と。余は此の如きものを此演奏に得たるなり、「テユツテイ」の調ゆるやかに始まりてより樂堂を忘れ人を忘れ聽衆を忘れ遂には音響其者を忘れて神祕の息に吹かるるが如くなりしもの、之「バツソオ」の單調なる和弦の力なり。幽婉なる銀線の響なり。唯こゝに今日の演奏に於て博士と延教授との差とユンカー師と幸教授との差とを比する時、之實に量の差か將た質の差か、こは心ある人の一考を煩はさんと欲するなり。最後の管弦伴奏の大合唱神風はハイドウンの嵐と稱する曲なり。此曲は彼の「オラトリオ」とは全く離れて一個特別のものなれば其規模も驚くべき程にはあらざれど、少くとも壯大

なる曲にて、力ある三拍子の「アクセント」に一種の魔力を有せるが如き心地す。歌者の數と金属吹奏器との關係は暫らく問題外として、今回は前回に比して數段の進歩を示したり、されど諸所に飽きたらぬ節も聞えたれば生徒諸氏には一段の奮勵を望まざるべからず。絶妙なるは例の「ソプラニステイン」なり、かばかりの大合唱に際立ちて聞ゆる「ヂスカント」の力よ、「我等が劇の歌女(ぢょ)に見る「ソプラン」の高大は到底日本に於ては望むべからざるもの」と評して此人の爲に悲しみし某獨乙(どいつ)雑誌記者と共に、余は最高音部の大任を僅かに此一人に任すの止を得ざる現狀を憐み、併せて君が健全を祈る者なり。つけても欲しきは尚二三の「ソプラニスト」と望蜀かは知ねど數人の「テノーレ」うたひとなり。

端嚴なる大合唱に送られ、四殿下の御退出を送り奉りて樂堂を出でし頃は小雨そぼふりて森の若葉一入(ひとしほ)美しかりき。

(『讀賣新聞』明治三十六年五月九日)

**明治三十六年五月三十日　試業演奏会**

又分教場選科生徒ノ技術成績ヲ報告センガ爲メ五月三十日及十一月十四日ノ二回本校ニ於テ音樂演奏會ヲ擧行シタル等是ナリ

〔手書き〕(『明治三十六年度東京音樂學校年報』)

**明治三十六年七月十日　卒業式**

第十四回生徒卒業證書授與式順序(明治三十六年七月十日)

第一部

一、報告
一、卒業證書授與
一、校長告辭
一、文部大臣祝辭
一、卒業生總代謝辭

第二部

一、合唱　豫科修了生
甲、螢狩……〔エッセル作曲 旗野十一郎作歌〕
乙、海邊曉望……〔ウエベル作曲 武島又次郎作歌〕
一、ピアノ獨奏　豫科修了生　本居長世
ソナタ……モツアルト作曲
一、コルネット獨奏　器樂部卒業生　渡部康三
アリア(トロンペーテル、フォン、ゼッキンゲン)……ネスレル作曲
一、オルガン獨奏　選科卒業生　堀シン
アレグレット……マエス作曲
一、ピアノ獨奏　選科卒業生　上原喜勢
ソナタ……モツアルト作曲
一、箏　〔教授 選科卒業生 今井新太郎 / 選科卒業生 上原三重 / 選科卒業生 村田ミイ〕
松竹梅……三ツ橋勾當調
一、ヴァイオリン獨奏　選科卒業生　鈴木保羅
甲、アダジオ、カンタビレ……タルチニ作曲
乙、ルーレ……バハ作曲
一、ピアノ獨奏　器樂部卒業生　本多かつ
アダジオ……モツアルト作曲
一、獨唱　聲樂部卒業生　吉川やま

瀧の宮……〔メンデルゾーン作曲
鳥居忱作歌

一、ピアノ獨奏　器樂部卒業生　田中ヤソ
アムプロプデュアー〔ママ〕……シューベルト作曲

一、合唱　生徒
神風……〔ハイドン作曲
鳥居忱作歌

（『東京音樂學校一覽』自大正十五年至大正十六年、一二～一三頁）

**明治三十六年七月二十三日　オルフォイス演奏会**(1)

（1）曲目、批評等に関しては、『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇』第一巻の五四一～五五二頁を参照のこと。

**明治三十六年十月五日　東京音楽学校設立紀念会**

○東京音樂學校設立紀念會、同校は例年の通り設立紀念會を本月五日同校内に開かれたり

儀式次第

一、午前十時生徒職員并に來賓順次着席
一、校長儀式擧行の趣旨を告ぐ、此間參列員一同起立
一、合唱（君が代の重音）　伴奏技術監
一、御眞影（御眞影開扉）に對し拜禮　校長最敬禮修て職員來賓一同最敬禮次に生徒一同最敬禮ピアノにて指揮す
一、勅語奉讀　校長
一、合唱（勅語奉讀）　伴奏技術監
一、御眞影閉扉　比間參列員一同最敬禮
一、式言　終て着席
一、音樂　校長
一、祝辭、演說　職員
一、合唱、紀念日唱歌　來賓
附言　開扉より閉扉して參列員一同起立のこと

○午後は在校生の演奏、餘興等ありし乃ち其順序左に

第一部　音樂演奏

一、ピアノ獨奏（ソナタクラウス作曲）　本居長世
二、オルガン獨奏（Voluntary 1. 2.）　釜萢善作
三、獨唱（コンコーニー十二、十四）　外山國彦
四、オルガン獨奏（ベンダー二十）　吉村リウ
五、ヴイオリン獨奏（Nocturne Rieding 作曲）　吉澤重夫
六、ピアノ獨奏（ソナタモフルト〔ママ〕作曲）　成田藏己
七、二部合唱（歸　外一曲メンデルソーン作曲）　柴田環　横山糸
八、オルガン獨奏（Voluntary 6. 14）　江澤清太郎
九、ピアノ獨奏（ソナタベトーヴェン作曲）　天野アイ
十、ヴワイオリン獨奏（祭禮タンバル作曲）　平井チヨ
十二〔ママ〕、ピアノ獨奏（フアンタジーメンデルソーン作曲）　小林禮
十三、合唱　山中幽閑菌狩

第二部　舞踏

一、舞踏　女會員有志
二、西洋手品　會員有志
三、當世歌會　甲種師範一年女子
四、鞍馬山音樂隊　乙種師範有志
五、空涙　甲種師範某
六、舞踏　男會員有志

（『音樂遊戯界』第一巻第十号、明治三十六年十月、四四～四五頁）

## 明治三十六年十一月十四日　試業演奏会

第十四回選科生徒試業會順序（明治三十六年十一月十四日午後一時開會）

第一部

一唱歌（三重音）　女生徒
賤の苧環（メンデルスゾーン作曲　佐藤誠實作歌）
一ヴァイオリン　甲斐秀雄
ノクツルネ　フイールド作曲
一オルガン　木田アドルフ
フュネラル、マーチ　ベートーヴエン作曲
一箏　（山本富三郎　角倉あい　石田すゞ）
椿づくし（松島検校調　中村秋香改作歌）　渡部君代
一ピアノ　ソナチナ　クンメンテイ作曲　萩原愛
一ヴァイオリン　ローマンツェ　ヘッスネル作曲
一オルガン　ポストルヂユーム　岩井のぶ　フランク作曲
一箏　松島八景　山勢松韻作曲　（木曾東　横山　たね　ちよき　幸）

第二部

一ピアノ　ソナチナ　ヂユセク作曲　寺田薫
一ヴァイオリン　甲ラルゴー　ヘンデル作曲　（島川　室田　のゑ　きを）
乙ルーレ　バッハ作曲　島地あつ
一オルガン　アンテム　フランク作曲　（山本富三郎　今井とし）
一箏　さらし　深草検校調　秋元きく
一オルガン　プレルヂユーム　メンデルスゾーン作曲　原みち
一ピアノ　ソナタ　ハイドン作曲　生徒
一唱歌（四重音）　秋の夜（クォータル作曲　佐藤誠實作歌）

**明治三十六年十二月五日、六日　第九回定期演奏会**

明治三十六年十二月五日午後一時半

秋季音樂演奏會曲目

東京音樂學校

## 第一部

一合唱　生徒

甲　天の浮橋……（カシオリニー作曲　鳥居忱作歌）

乙　秋風吟……（ハイドン作曲　武島又次郎作歌）

二ピアノ獨奏　器樂部一年生徒　本居長世

ソナタ……ハイドン作曲

三二部合唱　（聲樂部三年生徒　研究生）　柴田環　吉川やま

甲　暮秋……（シューマン作曲　武島又次郎作歌）

乙　月前郭公……（シューマン作曲　旗野十一郎作歌）

四ヴァイオリン獨奏　研究生　前田襄

アダジオ……タルチニー作曲

五ピアノ獨奏　豫科生徒　上原喜勢

ソナタ……ベートーヴェン作曲

六管絃合奏　職員及生徒

舞踏曲……ジアーマン作曲

モリス、ダンス

シエファーヅ、ダンス

トーチ、ダンス

## 第二部

一合唱　生徒

甲　雁叫……（露西亞民歌　旗野十一郎作歌）

乙　雲雀……（フレミッシ古歌　小野竹三作歌）

二ピアノ獨奏　助教授　神戸絢

ソナタ……ベートーヴェン作曲

三管絃合奏　職員及生徒

スート、カルメン……ビツエー作曲

プレリユード

アラゴネーゼ

インテルメツオー

フイナーレ

四ヴァイオリン、ヴィオラ合奏　教授　幸田幸　助教授　頼母木コマ

シンフオニー、コンセルタンテ……モツアルト作曲

五管絃合奏、合唱　職員及生徒

聖壽無窮（タンホイゼル進行曲）……（ワグネル作曲　鳥居忱作歌）

AUTUMN CONCERT
OF THE

Tokio Academy of Music
TO BE HELD AT
UYENO PARK
ON
Saturday December 5th 36 Meiji (1903)
AT 1. 30 P.M.

PROGRAMME.

PART I.

I. Chorus:
  *a.* Veni creator spiritus.....*Casciolini.*
  *b.* Tenebræ factæ sunt .....*Michael Haydn.*
  *Students of the Academy.*
II. Piano Solo:
  Sonata .....*Haydn.*
  *Mr. Motoori.*
III. Vocal Duet:
  *a.* Schön Blümelein .....*Schumann.*
  *b.* Wenn ich ein Vöglein wär ..... "
  *Misses Shibata and Kikkawa.*
IV. Violin Solo:
  Adagio .....*Tartini.*
  *Miss Maeda.*
V. Piano Solo:
  Sonata.....*Beethoven.*
  *Miss Uyehara*
VI. Orchestra:
  Three Dances from Henry VIII.....*German.*
  1. Morris Dance. 2. Shephards' Dance.
  3. Torch Dance.
  *Instructors and Students of the Academy.*

PART II.

I. Chorus:
  *a.* Russian Folks song. (from the Wolga).
  *b.* Old Flemish song.
  *Students of the Academy.*
II. Piano Solo:
  Sonata ("appassionata").....*Beethoven.*
  *Mrs. Kambe.*
III. Orchestra:
  Suite Carmen.....*Bizet.*
  1. Prélude. 2. Aragonaise. 3. Intermezzo.
  4. Finale (les Toréadors).
  *Instructors and Students of the Academy.*
IV. Violin and Viola:
  Symphonie Concertante .....*Mozart.*
  *Miss K. Koda and Mrs. Tanomogi.*
V. Orchestra, Chorus and Organ:
  March from Tannhäuser .....*Wagner.*
  *Instructors and Students of the Academy.*
  *Conductor: Prof. A. Junker.*

樂界の一瞥

近時新紙の上に樂會品隲の文字を見る事少からず。鵠を得たりや否やを知らずと雖も、『わが經驗によれば公衆の聲は其正

た正しきものなり。』と云ひしウエーバーの見地よりすれば、これ未た樂界の爲に慶すべき事なるべし。人々の趣味好尚によりて其判斷に著しき差異あるは、藝術品隲に於て免るべからざる事にして、余か常に技術其ものの月旦にたつさはらざるもヒルレルがいひけむ『成熟せる技術家のみ眞正なる判定を下し得べし。』との箴言を思ふと共に、一には『批評は動搖す、時代及人類の見解より生じて、之に對してのみ其意義を有す。』といへるハイネの言に於て殊に當れるを覺ゆればなり。而して余が常にあまりに客觀的叙述に走り、標題樂的解說に陷るが如きをさへ敢てなすも亦所以なしとせず。そは『公衆の多くが思惟の人或は行爲の人なる限り、樂曲を通有ならしめ、解し易からしめんが爲の手段として、プログラムは必要なり。』と云へるリストが宣言の暫く我樂壇に移し得べきを信ずればなり。

十一月廿八廿九兩日上野に開かれし公益音樂會と、十二月五、六兩日の音樂學校秋季演奏會とは、今年掉尾の二偉觀をなしぬ。

〔中略〕

十二月六日に開かれし音樂學校秋季演奏會に於て、最も注意すへきは幸田、賴母木二氏の合奏なり。余はこゝにユンカー、賴母木二氏の優劣を論ずるの愚を學ぶ者に非ずと雖も、同氏が〔ママ〕しろ面白くきかれたり。東洋のテレジナ、テュアとやらんいふ名は、幸孃の讓りうけ給ふべきものか。

ペーン夫人の獨唱。かゝる性質の聲を好まぬといふ余か一個の私見は別として、少くともカイゼル孃と相待て聲樂界の花と稱すべきなり。「ザバの王」中のアリアは英語にて歌ひしにや、歌詞きゝわけ難かりしが、或は第四幕の大なる獨唱の場にや、盡きぬなやみの聲ともきこえぬ。此劇によりてウンガルン生れの樂家は、全く歐洲的となりしといふ、新獨逸派の作家として成功せるものゝ一人なり。形式の美と秀麗なる響とは此樂家の特徴なるべし。其外コルネリウスの曲を面白しときゝたる人多かりし樣なり。この人はビユウロオ等と相並て、リストが直接の指導をうけたるもの一方に於てヘルダーのシッドによりたる歌劇には、其歌詞をさへ自らものしたれば、ワグネルの衣鉢を傳へたるものとして、ワイマー藝花の一明星なりきといふ。夫人は純粹なるアルトにて、發聲の正しきを得たると、クレシエンドーの巧妙とは、深く感する所なりとす。

ケーベル博士の洋琴獨奏。さきの曲、カウカススの作者は露國民謠を以て名高きバラキエフにして、ベリオ。リストの流を汲みし者なれば、いづれ露國の傳說か、バラッドなどによりし標題樂なるべけれど、そを知らねば全く解する能はざりき。次のケーニッヒ、イン、テューレ、はリストの作なり。彼か歌謠中に此作あれば、それより脫化せるものなるべきか。世を終るまで、逝きし妻に誠なりし胡國の王が淸愁は、天來の響を以て傳へられぬ。元來リストの歌曲は、感情の深遠なるとメロデイーの瀟洒なるとによりて著しく、大膽なるリズムの用法も、自らよく詩の脚節にかなへりといふ。ギョーテの「夜のさまよひ」の如き其終りにGデュールよりEデュールにかへる技巧は、即彼を以て獨逸歌謠界の一位を占めしむる所以なるが、之に反してローレライやケーニッヒ、イン、テューレに見る如き劇的分子は、むしろ彼が不得意とする所にして、メロディーもまゝ朗誦的分子の犧牲となりたる樣の節多く、それさへまゝ誤なきにあらず。と近來多大の進步を示し、殊に今まで例なかりし樂器に這般の成功を示されたるは、誠に樂界の爲め慶すべきなり。半時間にもあまる長曲、われ等をして神往するの概あらしむ。『詩人の靈句、よくわれ等をして現世の大氣中に舟行するを得しめば、シンフォニー作家の妙音は、はて知らぬ高き極み、エーテルの中につき入る力を與ふべし。』といふシンフオニー讃歎の聲には俄に同し難けれど、クラシツク器樂の妙趣は、遺憾なく發揮せられしならむ。

神戸氏の洋琴獨奏、曲は曠世の樂匠ベートホッフェンが血をもて記したるてふアパシオナータなり。「素人らしからぬ」態度は、强き響きと熱烈の情とをよびて、其壯大なるコードの響は、フルューゲル、ピアノこそ絃の妙趣には適すべけれという誠なるを思はしめぬ。『指の用ゐ樣にはさしたる困難もなけれど、――トリオヤパッサノジュ〔ママ〕裝飾音は、少しく學習せる者のなし得べき事ながら、――されど其演奏の難きは罕に見るところ。』とホッフマンは評せしが、此日の演奏には略ぼ其遺憾もなかりしならむ。『彼が樂は、はてしも知らぬ渺邈の國、天邊の微光黃金の波を送れば、冪

羃の雲間に巨人のかけの浮遊せるがわれを被ひ包まんず。』とこれも此詩人か評言なり。今余をして暫く此曲のなりし折を忍ばしめよ。アパシオナタの名は後人の添えし名なれど、此曲の興趣のあらましを盡したる有趣なる語ならずや。獨り寂しく世を終へし樂家の半生を察すればわりなき戀の聯續に世をうらめしのあはれに泣きしも幾度そや。當時の冷酷なる社會思想が、布衣の伶人には及びもあへぬと定めけむ、貴人をのみ思ひ慕ひて最も痛切悲愁なる愛の活動を現じたるは、近頃ノール氏の蒐集せし彼か斷論零墨に現れたり。斯て折々の作品のデディケーションに、半生のあはれを止めぬ。此曲は一千八百六年の夏になりて、ブルンスウィク伯に敵したるもの。己が心の樣を『巨人の如き思想の狂飈』と述べたる手書をあてし、『不朽の愛人』とは、これ伯か妹テレーゼ姫に外ならず。『なやみは治まり情焰は消えぬ』と云ひし彼はアパシオナタにまた熱烈の思を寓しぬ。『御身にも我にも愛は正しく凡てを求む、我は唯御身の爲に、御身はまたわが爲に、生けるを忘れはし給はじ、御身なき我か一生はそも如何なるべき。』『かくも近く、かくも遠きあはれ神よ、われ等か愛はまことの天堂にあらずや、フィルマンの如く確固なるにあらずや。』『またく御身を持ちてか、或はまたく失ひてか、此二樣もてわれは生を享くるを得べし、――安かれ、我を愛してよ――昨日も――今日も――涙交ふる憧憬の情――あはれ、親しきルトウキツヒがまことの情をあやまたで、とはに我を愛してよ、永劫に御身の、永劫にわが、永劫に我等の。』これ同じき七月の彼が手書なり。沈愁の怨卒讀するに堪へざらんとす。

上原氏のソナタ。獨特なる纖麗と輕妙とを以てアレグローの一節を終へぬ。豫科にかゝる俊才を得たるは、蓋し未曾有の事實なるべし、幸に健全なれ。管絃樂に於ては、ビゼーのカルメンは再度の演奏なれども、一段の進歩を示せり。アラゴネーズ、インテルメッツオのオブ、フレーテの幽婉の響は、後のヴィオロンの悲愁の調と相待つて、艶なる色と光とを添えぬ。

聲樂に於て、敬虔深重なる宗教樂と幽婉なる民謠風の樂との面白き對比を得たるは、深く我等の賛同する所なり。されど女聲二部合唱のシューマン抒情歌は、果して其本質を傳へしや、歌詞に奔放なる熱憤を寓する能はざるは、止むを得ざる事實ながら、こゝにも誠の情のあはれは消え失せし故にや、これをさきのオルフォイスの折に比すれば、熱誠の度に於ても劣る所ありと思ふ。ソプラニストの音量にのみ就て云ふも、成功に非ざりし事は、さきのパウルのアリアに比しても明なり。（此度は伴奏の强かりしとの事はあれど）、忍びに忍びし愛情を吐露する事も叶はで、またも冥界に別れ行かむといふ怨嗟の聲も、後には神惠に入る始なるをほのめかしたる、悲くも甘き抒情の響には、エキスプレッションの强かりしもさる事ながら、今日の天眞素朴の愛を歌へる民謠の、さりとはあまりに枯淡に流れしかな、『我思ふ人いづち、われ若し翼もてる鳥ならば』といふ至情は、シューマンか奔放なる響と相合して、殊に此ソプラニストの至醇なる聲には適せしならんを、惜むべし。

更に歌詞の側より論ぜんに、聖樂の雅醇はうれしけれど、また難きはこれが歌詞の新作なり。そは此種のものは殊に歌詞と樂曲との嚴格（シュトレンゲス）なる貫通（デュルヒドリンゲン）を要すればなり。第二部の雁叫雲雀等の比較的成功したるも、その彼に比して幾分か易きが爲なるべし、そは興趣の捕捉にさしたる困難を感ずる事もなく、また一たび捕捉し終れば取材の自由もありて容易なるべし。シエレーより脱化しけんと思はるゝ雲雀の歌、母韻の配置も其當を得たるが如し。されどはじめの秋風吟とテネブレ（ママ）ニの歌と何等興趣の相通ずるありや。彌生の春の復活祭に先だつ週間の夕暮カトリツク精舍の聖壇にかゞやく法燈十五、尖頭形に置かれたるを唯一つ殘して、つきぐにけし行くフィンステル、メッテの莊嚴なる典禮も忍ぶに由なく、こゝには唯兄妹を忍ぶ遊子の情と化し了んぬ。さりとて、一般民衆に親しからざる聖教の儀典を、其儘に譯さむも如何かと思へば、余は此點に就て深く諸賢士の研鑽を乞はんと欲するなり。また此歌に多く見えし「旅愁」「一千里」「ゆめさへさわぐ」等のスピランテスも、歌ひものとしては尙一層の研究を要すべきものなりと信ず。

（後凋）

（『帝國文學』第十巻第一号、明治三十七年一月、二五二～二六〇頁）

## 明治三十六年〔十二月〕　学友会演奏会

◎音樂學校學友會　過日多氏能勢氏送別會を兼ねて音樂會ありき其目次左の如し

第一部　送別式

一開會之辭　大島會長
一送別之辭　男會員總代
一同　上　女會員總代

第二部　演奏

一ピアノ獨奏　上原幾世
ソナタ　ベートーヴェン作曲
一オルガン獨奏　大熊しん
アダヂオ　ベルラニー作曲
一ピアノ獨奏　川久保みすゞ
ソナタ　クーラウ作曲
一獨唱　小室千笑
コンコニー　一八、一九
一オルガン獨奏　赤尾寅吉
甲、イントロダクション　グーノー作曲
乙、ローマンツ　マイエルベール作曲
一箏　金澤柔能　河野ひで
雲居の四段砧
一ピアノ獨奏　天野あい
ローマンス　ハイドリッヒ先生作曲
一オルガン獨奏　松井壯六
フーガー　レメンス作曲
一ピアノ獨奏　瀧川英一
ソナタ　モツアルト作曲
一ピアノ獨奏　横田三郎
ソナタ　モツアルト作曲
一獨唱　横山糸
コンコニー　一一、一六
一オルガン獨奏　三浦とめ
ソールテ　レメンス作曲
一ピアノ獨奏　高橋とよ
ソナタ　ベートーヴェン作曲
一合唱　甲師二、三年
甲、得渦江
乙、百舌鳥之歌
第三部　餘興
一歸る燕　本科一年女子
一劒舞　男會員有志
一ハイカラー　甲師二年女子
一運命　本科二、三、男
一大禮服　本科一年男

（『音樂之友』樂友社、第五巻第二号、明治三十六年十二月、五八頁）

## 明治三十六年の概評

## ○樂界の半歳

今年のシイゾンは餘りに寂しかりき、勿論形式と分量とに於ては寧ろ盛觀を呈したるが如きも、衆人の耳目漸く音樂に及ばんとせる今日に於て、樂界其ものゝ形勢比較的に沈滞せるは余が專門家諸氏に對して聊か苦言なき能はざるなり。

本年に於ける最初の音樂會は三月上旬上野に開かれし學友會大會なりき、此會に於ては生徒諸氏が着實なる勉强の跡を示されたれど其中樞を作れるは僅に數名に定まりて俄に其進歩をたゝえ難きものあり。畢竟は前田、小林、柴田、金澤四氏の特技を紹介したるに過ぎざりき。此日柴田孃の獨唱、オベロン中のアリア、カバチナはロマンチツクの鼻祖たるウエーバーの特趣を發揮して幽趣掬すべきものあり、之を昨年末の某孃の演唱に比して其老巧の點に於ては或は彼に一歩を讓ることあるも其音量に於てコロラテュールに於て獨得の技量を示し、獨語の發音にもさしたる批難なかりき。テュニスなるアルマンゾールの宮廷にたちて「悲しや我が心、今はあだなる希望を戀ふる涙にくれて、惱みこそわが唯一の寶なれ。ペリスか御空に漂ふ如くわれはたゞためいきにのみぞ住むなる」と訴ふるレチアか清怨は幾分發揮せられたるならん。次で同しき十五日に開かれし山勢氏の爲めの慈善音樂會の管絃樂は本校にて昨年來苦心せられしシユーベルトがハー、モール、シンフォニーなれば其の成功はいふまでもなけれど箏曲に於て今井氏の技量は確かに箏曲界の重鎮たるを示したりき、されど合唱形見の刃などの全く失敗に終りしは遺憾なりき。月の末日に開かれし師範科卒業式には撰科卒業生に荒川孃あるを紹介したるのみ、其の師範科卒業生の技倆に就ては聊か苦言なき能はざるなり、諸氏にして若し地方師範學校の唱歌數員たるを以て甘んずれは止む、苛くも西樂の行き渡らざる社會に出でゝ一般趣味の助長に盡すあらんとせば如何ぞかゝる技術を以て其大任を果し得べき、否卒業生自身か幾何の趣味と理解力とを得たるかは當日の平凡なる技術を以て卜するに難からざるなり。其修業年限の本科のそれに比して短かき其贖償は之を所謂音樂文學（ムジーク、リテラツール）音樂科學（ムジーク、ウイツセンシヤフト）の造詣に求むべきなるも、諸氏にして誰れかよく之を得るの途を有せる、形式的なる音響學、人生内部の發展を省みざる音樂史何かあらん、和聲の美趣は遂に不可解に終るべけむ、然らは諸君か勉むべきは唯技術の修練のみ、多數の曲に當りて漸次に旋律和聲の妙を解せんのみ、唱歌にさへさしたる成功を示す事なきに、なほ樂器の練習には御役目的に從事せるが如きは諸君か大謬見なりと云はざるべからず。四月初旬に開かれたる明治音樂會は例によりて例の如く五月に入りては一日の春季演奏會外に慈善音樂會の開かるゝもの三度、四月三十日の分教場試業會は一段の進歩を示して斯道普及の上に其力少からざるを證しぬ、〔中略〕

七月に開かるべき卒業式音樂會は客年に比して盛なるべき成算なれども、管絃樂なくては割合に寂寥に終るべきか。これを終りては秋風たちて再びシーゾンのめぐり來るまではさしたる事もなかるべければとて、聊か半歳の狀況を記しおきぬ。

（後　凋）

（『帝國文學』第九巻第七号、明治三十六年七月、一一二～一一五頁）

## 明治三十七年二月二十日、二十一日　学友会演奏会

明治三十七年二月廿日、二十一日午後一時

東京音樂學校學友會大會、於同校奏樂堂

一、合　唱　　天安河　Seruff　鳥居忱作歌　會　員
一、ピアノ獨奏　Sonatine. Clementi.　田中ロク
一、ヴァイオリン獨奏　Gavotto. Bach.　吉澤重夫
一、オルガン獨奏　釜范善作
　1. Largo. Handel. 2. Gavotto. Bach.
一、ピアノ獨奏　Romance. Heydrich.　天野アイ
一、獨　唱　Aria. Mendelssohn.　小室千笑
一、オルガン獨奏　Don Juan. Mozart.　江澤清太郎
一、ピアノ獨奏　Sonate. Mozart.　横田三郎

一、合唱　會員
一、雁之叫　旗野十一郎作歌　二、雲雀　小野竹三作歌
一、オルガン獨奏　Fuga. Eberlin.　布村ウタ
一、ピアノ獨奏　Sonate. Beethoven.　栗原欣
一、獨唱　柴田環
Penlape weaviwg Garment. (from Odyssy) Bruch.
一、オルガン獨奏　赤尾寅吉
1. Fuga. Bach. 2. Praeludium. Bach.
一、ヴァイオリン獨奏　幸田幸子
Fantasia appassionata. Vieuxtemps.
一、ピアノ獨奏　ハイドリッヒ
Valse Impromptu for piano. H. Heydrich.
一、合唱　黑龍江　Schumann　鳥居忱作歌　會員

（『本邦洋樂變遷史』四五〇～四五一頁）

**明治三十七年三月二十九日　甲種師範科卒業式**

第三回甲種師範科生徒卒業書授與式順序
（明治三十七年三月二十九日）
一、報告
一、卒業證書授與
一、校長告辭
一、文部大臣祝辭
一、卒業生總代謝辭

第二部
一、箏　（選科卒業生）東條幸子　（選科生）山本富三郎
近江八景……山登萬和作曲
一、合唱　卒業生及生徒
天の安河……（セルッフ作曲）（鳥居忱作歌）
里祭……（露西亞民歌）（旗野十一郎作歌）
一、オルガン合奏……甲種師範科卒業生（大熊しん）（岩倉一野）
オルガン、ソナタ四番（フヰナーレ）……メンデルゾーン作曲
一、ピアノ獨奏……器樂部一年生　久野ひさ
ソナティナ……クーラウ作曲
一、女聲二部合唱　甲種師範科卒業生
良友……（メンデルゾーン作曲）（旗野十一郎作歌）
國民……（メンデルゾーン作曲）（旗野十一郎作歌）
一、オルガン合奏……甲種師範科卒業生（南能衞）（赤尾寅吉）
シェルソ、シンフォニック……レムメンス作曲
一、合唱　卒業生及生徒
橘の薫……（ケルビニ作曲）（鳥居忱作歌）

（『東京音樂學校一覽』自大正十五年至大正十六年、一四頁）

## 明治三十七年五月二十八日　試業演奏会

第十五回選科生徒試業會順序（明治三十七年五月二十八日午後二時開會）

第一部

一唱歌（四重音）　生徒

甲、子守歌（佐藤誠實作歌　作曲者未詳）

乙、進軍歌（大和田建樹作歌　ベニケ作曲）

一ヴァイオリン　田邊尚雄

ローマンス　リーデイング作曲

一オルガン　岩井なみ

甲、リーリッシエ、ステュツケ　メルケル作曲

乙、メヌエット

一ピアノ連彈　（仝）渡部君栞

練習曲　デァベリ作曲

一箏　（仝）熊田豐子　（中村）角田遜子　（倉）タアミイ

早春興（中村秋香作歌　今井慶松作曲）

一ヴァイオリン連奏　（仝）神田百合芝　（木）村雅英子

甲、リーブリヒ　シユレーデル作曲

乙、フロイデイヒ　仝　上

一オルガン連奏　（三）辻須美亞　（須）きく

タンボリン　ラモー作曲

一ピアノ　石川しづ

甲、メロデー　シューマン作曲

乙、ソルヂァースマーチ　仝　上

一ヴァイオリン　菊地みさを

タランテラ　シット作曲

第二部

一唱歌（二重音）　女生徒

甲、夏の園（旗野十一郎作歌　レンツ作曲）

乙、樂しき今日（某作歌　レンツ作曲）

一、ピアノ　高折宮次

ソナタ　モツアルト作曲

一ヴァイオリン連奏　（淺）羽千代　（内）田うめ

甲、ランドラ　アーマンド作曲

乙、ポロネーズ　仝　上

一オルガン　岩井のぶ

プレルヂューム　メンデルスゾーン作曲

一箏　（仝）奥山と　（箏）三し　（仝）今井新太郎　（山）本富三郎

岡康砧

一ピアノ　前田滋樹

ソナタ　ベートーヴエン作曲

一ヴァイオリン　萩原愛

六、管絃合奏　職員及生徒
ラルレジエヌ……ビゼー作曲

第二部

一、合唱　職員及生徒
オルフォイス……グルック作曲

バラデ　シット作曲

一　唱歌（四重音）　生徒
我國（大和田建樹作歌　ハイルト作曲）

**明治三十七年六月四日、五日　第十回定期演奏会**

明治三十七年六月五日午後二時半

春季音樂演奏會曲目

東京音樂學校

第一部

一、管絃合奏　職員及生徒
オーヴァチュア……シューベルト作曲

二、合唱　生徒
甲　新緑の賦……（武島又次郎作歌　モツアルト作曲）
乙　鴨緑江……（ヘンデル作歌　居忱作曲）

三、ピアノ獨奏　助教授　神戸絢
コンセルト……モツアルト作曲

四、ヴイオラ獨奏　教師　アウグスト、ユンケル
コンセルト……ジット作曲

五、三部合唱　生徒（小柴鈴　木室田　の千　ぶ笑環）
リフト、ザイン、アイス……メンデルスゾーン作曲

SPRING CONCERT
OF THE
Tokio Academy of Music
TO BE HELD AT
UYENO PARK
ON
Sunday June 5th 37 Meiji (1904)
AT 2. 30 P.M.

PROGRAMME.

PART I.

I. Orchestra :
Overture zur Oper Rosamunde .....*Schubert.*
*Instructors and Students of the Academy.*

II. Chorus :
*a.* Agnus Dei .....*Mozart.*
*b.* Siegeschor aus Judas Maccabäus .....*Händel.*
*Students of the Academy.*

III. Piano Solo :
Concert. D Moll .....*Mozart.*
*Mrs. Kambe.*

IV. Vocal Trio :
"Lift Thine Eyes" from the Elijah...*Mendelssohn.*
*Misses Shibata, Komuro and Suzuki.*

V. Viola Solo :
Concert .....*Sitt.*
*Prof. A. Junker.*

VI. Orchestra :
L'Arlésienne 1re Suite .....*Bizet.*
1. Prélude.
2. Minuetto.
3. Adagietto.
4. Carillon.
*Instructors and Students of the Academy.*

PART II.

I. Selections from the Opera Orpheus .....*Gluck.*
(for Soli, Chorus, Organ and Piano accompaniment). *Soprano Miss Shibata, Alto Miss Kikkawa.*
*Instructors and Students of the Academy.*
*Conductor: Prof. A. Juncker.*

第十回春季音楽演奏会批評

（『音樂之友』第五巻第二号、明治三十七年六月）

第一部管絃楽合奏オーヴァチューアは腕揃の合奏故悪るかろう筈なく、殊に曲風が日本人向の撰曲で聴者は大満足只四日は初日の勢か時々工合の悪ひ処が有った。合唱甲新緑の賦は結構で、鴨緑江は共にきは者の表題の如き歌詞を附したので其出来ばへは余り感心出来ない。神戸助教授のピアノ独奏独特の妙技聴者には大物過ぎて高襟連すら只うまいと評する外なし。三部合唱柴田、小室、鈴木三人日頃の御勉強の程慥に拝聴した。ヴィオラ独奏ユンケル教師聴く度毎に感服して演奏中は呼吸も出来ぬ位殊に五日は前日に比して層一層の出来。管絃楽是等の合奏は音楽学校特有でも只感服の外評なし。第二部オルフォイスの合唱は一時間半位に渡る大合唱で是れが当日の大呼物丈に又一しほ面白く殊に曲中高音、中音の独唱有って各自特意の妙技を充分に拝聴する事を得た。柴田環の百合姫、吉川のオルフォイス音調麗明室内の紳士淑女恍惚殆ど天界に遊ぶの感あらしめた。概して今回の演奏会は其撰曲宜しきを得たる為非常の高評であった。

〔原資料入手不能〕（『日本の洋楽百年史』一三一頁）

**明治三十七年七月十日　卒業式**

東京音樂學校生徒卒業式順序

明治三十七年七月十日（日曜日）
午後二時半ヨリ擧行

第一部

一 報告
一 卒業證書授與
一 校長告辭
一 文部大臣祝辭
一 卒業生總代謝辭

第二部

一 箏　〔器樂部卒業生〕〔選科卒業生〕金澤柔能　奥山とし
春の曲……
一 管絃合奏　職員生徒

オーヴァチュア……モツアルト作曲
一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　横田三郎
ソナタ……モツアルト作曲
一獨唱　聲樂部卒業生　柴田環
レシタチーフ……マックス、ブルッフ作曲
一オルガン獨奏　器樂部卒業生　三浦トメ
ファンタジー……セザー、フランク作曲
一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　栗原キン
ソナタ……ベートーヴェン作曲
一合唱（管絃及オルガン合奏）　職員生徒
神武東征……｛鳥居忱作作歌曲

## GRADUATION EXERCISES
of the
Tokyo Academy of Music,
UENO PARK.
*Sunday July 10th, Meiji 37, (1904).*
2. 30. P.M.

## PROGRAMME.

### PART I.

I. Report.
II. Presentation of Diplomas.
III. Address to the graduating class by the Director.
IV. Address by His Excellency Mr. Kubota, Minister of State for Education.
V. Response by the Representative of the Graduating Class.

### PART II.

I. Koto:
Harunokyoku .....
*Miss Kanazawa. (Graduate.)*
*Miss Okuyama. (Elective Graduate.)*

II. Orchestra:
Ouverture zur Oper "Don Juan."..... *Mozart.*
*Instructors and Students of the Academy.*

III. Piano Solo:
Sonata B dur. ..... *Mozart.*
*Mr. Yokota. (Graduate.)*

IV. Vocal Solo:
Recitativ and Prayer from Odysseus... *Max Bruch.*
*Miss Shibata. (Graduate.)*

V. Organ Solo:
Fantasie H dur ..... *Cesar Franck.*
*Miss Miura. (Graduate.)*

VI. Piano Solo:
Sonata C moll, (finale.)..... *Beethoven.*
*Miss Kurihara. (Graduate.)*

VII. Halleluya from the Messiah for Chorus,
Orchestra and Organ ..... *Händel.*
*Instructors and Students of the Academy.*

**明治三十七年十月二十九日、三十日　学友会恤兵音楽会**

明治三十七年十月廿九日三十日午後一時半

恤兵音樂會曲目

東京音樂學校學友會

第一部

一箏　參與員　麻生富久子

外會員

旅順のほまれ……（旗野十一郎作歌　麻生富久作曲）

二管絃合奏（ヴァイオリン獨奏幸田參與員）　參與員及會員

ラーゴー……ヘンデル作曲

三ピアノ獨奏　會員　天野あい

ソナタ……ベートーヴェン作曲

四ハルモニユム獨奏　會員　古澤きみ

プリエール、エ、ベルソース……ギルマン作曲

五ヴァイオリン獨奏　會員　多久寅

コンセルティノ……シット作曲

六合唱　會員

甲　霜の旦……（ボヘミヤ民歌　旗野十一郎作歌）

乙　鴨綠江……（ヘンデル作曲　鳥居忱作歌）

第二部

一管絃合奏　參與員及會員

シンフオニー……シューベルト作曲

二ピアノ、ヴァイオリン合奏　參與員　橘絲重　仝　賴母木こま

ソナタ……ルビンスタイン作曲

三獨唱　參與員　杉浦ちか

デル、ネック、バラーデ……レーヴエ作曲

四ピアノ獨奏　參與員　ハイドリッヒ

フワンタジー……ショパン作曲

ミル（風車）……ハイドリッヒ作曲

五管絃合奏、合唱　參與員及會員

聖壽無窮……（ワグネル作曲　鳥居忱作歌）

ORCHESTRAL AND CHORAL CONCERT
FOR THE
Relief Fund for Soldiers and Sailors
BY
THE STUDENTS AND INSTRUCTORS
OF
TOKIO ACADEMY OF MUSIC.
TO BE HELD AT
UYENO PARK
ON
SATURDAY, OCTOBER, 29th,
SUNDAY, 〃 30th,
AT 1.30 p.m.

PROGRAMME.

## PART I

I. Ryojun no Homare for Koto .....*Asō.*
*Mrs. Asō and others.*

II. Largo for Orchestra .....*Händel.*
(Violin Solo, *Miss Koda*).

III. Sonata for Piano in C major (1st Part) ...*Beethoven.*
*Miss Amano.*

IV. Prière et Berceuse for Harmonium.....*Guilmant.*
*Miss Furusawa.*

V. Concertino for Violin .....*Sitt.*
*Mr. Ono.*

VI. Choruses.
a. Bohemian Folks Song.
b. Sieges chor .....*Händel.*

## PART II

I. Symphony (unfinished) .....*Schubert.*

II. Sonata for Piano and Violin .....*Rubinstein.*
*Miss Tachibana and Mrs. Tanomogi.*

III. Der Nöck Ballade for Alto .....*Löwe.*
*Mrs. Sugiura.*

IV. a. Fantasia Impromptu in C. sharp for Piano ...*Chopin.*
b. The Mill (a characteristic piece)
for Piano .....*Heydrich.*
*Prof. Heydrich.*

V. March from "Tannhäuser" for Chorus, Orchestra and Organ.

*Conductor*: *Prof. Junker.*



○宵の灯　◀音樂學校に開かれた恤兵音樂會は今春の恤兵音樂會に劣らない大盛會であつた優しき箏の音に勇ましき歌を載せた「旅順のほまれ」を以て會は初められた◀樂の天地　斯くて豫定の如く西洋樂は引續いて演奏せられた、樂友會々員即ち生徒中にも前途望みのある人も少からぬやうだ◀高調　終りにはワグネルの曲、歌は聖壽無窮、殆んど百人内外の奏者唱者が一高一低、音調愈よ高く高く樂の最高調に達した時には情激し血沸き三軍堂々大森林を進むの趣があつた◀西洋人　其前にハイドリッヒ氏のピアノがあつた、予の何より感じた處は氏自身が如何にも愉快らしくピアノの外何者もないと云ふやうな態度であつた、樂座に立つ者、往々澄し込んだり意氣込んだり上手に彈じて見せやうと云ふ顏色をして居る者が多いのに氏のみは獨興獨奏、悠然として樂に遊んだ◀樂界の缺點　吾人をして遠慮なく言はしむれば今の音樂界には聲の人もある手の人もある只歌の人に於ては殆んど無い、彼の聲、彼の手あつて、而して其新作の歌たるや此の如し、日本の音樂界は確かに進歩した、只歌に於て一世紀を後れて居るのである

（『電報新聞』明治三十七年十月三十一日）

●雜記帳　今度東京音樂學校學友會が催した恤兵音樂會は、近年稀なる盛會であつた◀さしも廣々とした同校の奏樂堂も、殆んど立錐の餘地がない位で、見渡す限り綺麗星のやうに、着飾れる貴婦人令孃や、コスメチックをこてくと塗り固めた高襟男ばかりで、丁度衣裝と髮飾りとの共進會を見るやうで、斯かる盛會を見たのも発起の趣旨が恤兵であつた爲であらう◀そこで、其演奏は年一年益進境を示して來たのは、斯界の爲めに喜ばしいことである◀幸田幸子女史のヴイオリン獨奏と來ては流石にお手のもので、固より許す迄もなく巧なものだが、天野愛子孃のピアノ獨奏は、最も滿場の喝采を博したやうだ◀孃は十六七歳の少女であるのに、ベートーヴエン作曲のソナタといふ長曲を恰かも蝶の飛び交ふやうに、纖弱な手指を動かして何の苦もなく遣つてのけたのは、餘程の手腕で將來畏るべきものである◀又杉浦ちか子女史の獨唱は、亦滿場の喝采を博した一

で、參會者の拍手は暫ばし止まなかつた▲其他演奏者の手腕は、大したものであつたが、兎に角近頃にない大成効であつた（介）

（『日出國新聞』明治三十七年十一月一日）

○恤兵音樂會の献金　東京音樂學校々友（ママ）會の發起にて頃日同講堂内に催せる恤兵音樂會は總收入金千三百六十二圓三十錢（内金千二百八十二圓六十錢、入場料二十七圓、寄附金五十二圓七十錢會員支出會費）に達したるを以て雜費を差引て之を兩分し八百五十六圓を陸軍恤兵部へ三百六十七圓を海軍恤兵部へ献納の手續を了したり

（『都新聞』明治三十七年十一月十六日）

◉東京音樂學校學友會恤兵音樂會　東京音樂學校學友會は既報の如く、去る十月二十九、三十の兩日恤兵音樂會を開きたるが、兩日とも晴快の天氣なりしかば、來會者豫想外に多く、二日ながら開會前既に立錐の餘地なき程にて入場人員無慮二千五百餘人に達し、實に近來稀なる盛會なりき演奏は前號に掲げし曲目の順序に依り、午後一時半開會何れも上出來なりしが、特に多久寅氏のヴアヰオリン及びハイドリツヒ氏のピアノはそが巧妙の手腕に加ふるに曲の選擇甚だ宜きを得たれば、實に得も云はれぬ出來にて聽衆が湧くが如き喝采を拂ひしも宜なり。管絃合奏及び合唱の聖壽無窮はワグネルの畢生の名作オペラ、タンホイゼル中の一節にしてタンホイゼルが將に天に昇らんとする際衆人が狂喜亂舞せる樣を寫せるものにして曲想の活發勇壯なるに反して歌詞の壯嚴沈靜に失したるは誠に惜むべき限りなり若し鳥居氏が得意の快筆を以て遼陽陷落又は皇軍大捷の樣を寫したらんには今數段の聞き榮えありしなるべし。午後五時閉會せり。兩日の總收入は千三百五十餘圓にして支出は僅に百四十餘圓なれば殘額千二百十三圓を獻金したる由。

（『音樂之友』樂友社、第七巻第二号、明治三十七年十二月、三四頁）

◉東京音樂學校學友會恤兵音樂會略評　暫く音樂會に餓えて居た爲と會員諸氏が金のわらじで運動の結果大々的成巧で二日とも大々的の滿員で諸氏も定めて滿足で有つたでしようそして余輩は兩日の中の出來の好き方を模準（ママ）として愚評を試みるならば第一の箏（旅順のほまれ）きわ者と云ふ丈にて別に曲節に左程感心する處もなし出來はまづの方なるべし第二管絃合奏（ラーゴー）は中間ヴアイオリン獨奏の處少しぜいたく申せばカイゼル孃の獨吟は幸田幸子孃のヴアイオリン伴奏位で願ひたかつたです出來は普通第三ピアノ獨奏（ベートヴエンソナタ）天野あい子孃の獨奏もう一息き願ひたき者第四ハルモニユム獨奏（ギルマン作曲のプリエール、エ、ベルソース）古澤きみ孃是迄余の獨奏等を拜聽した事はなかりし爲か余は一驚をきつしたり今回の演奏中の最上出來にて發想の工合感服の外なし孃にして勵げめば近き將來に於て其薀奥を極はむる事又難らず幸に孃勉めよや第五ヴアイオリン獨奏シツト作曲（コンセルチイノ）多久寅氏、氏は幼少より式部雅樂所に於てヴアイオリンの教授を受けられ去年音樂學校に入學今は器樂部一年に在學せられ公衆の會にて演奏は今回を以て始めなるを以て聽衆の多くは氏の技術如何と待ちもうけられたる丈ありて中々巧妙に演奏せられたり然し未だ場所馴れざる爲か時々急く氣味有りて貫目にとぼしき處有りたり第六合唱（霜の旦、鴨綠江）前者は最早幾度も聽き覺えのある曲とて益ゝ其妙味に感じたり後者は歌曲の面白からざる爲何だか前者に比して面黑き感情を起す事は前演奏會の時と同感第七管絃合奏（シユベルト作曲シンホニー）こんな曲なら何百遍も聽くも未だ聽きたらぬ心持がします出來は上出來第八ヴアイオリンピアノ合奏（ルービンスタイン作曲ソナタ）橘絲重孃賴母木こま夫人上出來第九獨唱（デルネツク、バラーデ）杉浦ちか子孃、孃は近來餘程うまくなられました當日の矢張り呼び物の一つでした出來は少々工合の惡い處も有つた樣に拜聽したがまづ結構第十ピアノ獨奏（フワンタジー及ミル）ハイドリツヒ教師實に是れで見ると日本人は外國人に馬鹿にされても致し方なし嗚呼、第十一管絃合奏合唱前者のハイドリツヒ氏獨奏できもつぶして居る間もなく此の合奏合唱濟んだらみんな目をぱちくりする計り余輩も又たましいを奪われ無我夢中で上野公園の出口で電車を見て始めて氣が付き只胸中の一聲嗚呼面白かつた。

（『音樂之友』樂友社、第七巻第二号、明治三十七年十二月、三五頁）

## ○樂界時言

樂界の活動を錄し、曲目の撰擇に樂界思潮の歸傾する方向を索め、時に其貧寒なる見聞に據りて粗莽なる推考を試み、月旦の筆をとる事、わが此頃の習となりぬ。年改まりてこゝに昨年後半のシーズンを回想すれば、また云はんと欲する事なきにあらすと雖も、飜て思ふ、われに趣味ありと雖も、之を世に號叫して其福音を宣傳すべくしかく精錬を經たるものに非す。われに常住の把執ありと雖も、未た雄大莊重の論議を上下する能はす。余が音樂科學の研鑽未た到らすして、樂受の規準を得る能はざるは深く遺憾とする處なれど、一面には牢乎たる興味を修得すべくあまりに材料の乏しきを慨く者なり。靈氣ある樂會は横濱外人のそれを合して年僅かに三四に過ぎず。時に諸家の門を叩きて、基肄習する所を窺ふと雖も、わが寄與する感想は茫々また混沌。遂に思ふ、樂壇當面の欠陥は樂家と公衆と當然其責を分つべきにあらずや。遮莫余は小數の樂會に比して、小批評家の多きに堪えず。あゝ彼等は遂に斯術の尊威を凌辱する者あらざるなきを得んや。靈氣一閃樂趣の根底を透徹する眼光の燃犀あらばよし、自己の狹小なる好惡に依據する者は遂に藝術の尊威を語るに足らさるなり。余か屢云ふ所、要は樂家と公衆とに其反省と活動とを請はんか爲めのみ。

昨年の後半に於て注意すべき會合の開かれしもの僅かに、學友會恤兵音樂會と音樂學校演奏會となり、外人の演奏は暫く問はず、他には明治音樂會にはゾヴォラウィツヒ氏の新作出でたりといへど聞き洩らしたれば知らず。しかもさきの二つは遂に昨の樂壇に萎靡沈滯の評語を免れしめたり。よりて爰には主として同校活動の狀態を窺はむ。

十月廿九日の恤兵音樂會に於ける幸田幸氏のラルゴオの妙は云はずもかな、橘、賴母木二氏はピアノ、ヴァイオリン合奏にてルビンスタインのソナタの華美幽婉なる趣に稀世の技術を示されぬ。杉浦氏の獨唱デル、ネック（バラーデ）は聲も節まはしも現時聲樂の隨一となすに足る。作家レーウェはバラーデといふ一範疇に特異の見解を與へたる事を以て史上に名高し。先づ短き主調をとり、之を自由に變して或は他の音階にうつり他の拍子を入れ、調を變しリズムをかへて、所作の進行に一致せしめんとしたる、所謂抒事の音樂的均重 musikalisches Aequivalent des Epischen の思想此種の樂に不朽の範を垂れたるものなり。われは杉浦氏の進歩を悅ぶと共にカイゼル氏の功績の鮮少にあらさるを思ふ。カイゼル氏幼にしてウユルツベルグ音樂學校に敎を受け、ワグネルの姪ヤハマン夫人の指導を以て歌劇の敎を受け、遂にバイロイトの舞臺に獨唱花孃として上り、更にミユンヘンよりワィマーに入り、リヒヤルド、シュトラウスに從て其歌劇へンゼルとグレテルに少女グレテルに扮して名媛の名を博し、後コブルグゴタの廷にあるや絕へず諸大市の歌劇堂に出入し伯林歌劇場にフライシュツツのエーンヘンを演じて其名更に高し、其性快活にして謹直また良敎師たるを失はず。同校音樂部の不備は洽く世の認むる所、今回の擧は實に同校の一新時期を劃し得べきを信ず。管弦樂のシューベルト交響體はいつもながら美し、曲目に未完と附記したるは史的正確を得て殊にうれし、其跙踏逡巡次にスケルツォの輕快を欲するあたりにてきるゝは物足らぬ思すれど、こはこれぎりの曲なりといふ。

ケーベル博士の精到なる奏法、絢爛なる奏法はこゝに云爲するの要なし。さきに某の會にリストのシンフォニー歌曲を奏せられ今は其トランスクリプチオーンを演せらる。リストの眞隨を傳ふるは目下博士を措て他に求むへからさる點に於て、此撰擇に對して心から歡喜の情を捧くるを禁する能はず。此二種の曲の本性を研究して其樂家の一生に於ける兩者の關係を求むるは頗る快心の業に屬す。彼が獨立なる作曲家として立ちたるは比較的後年の事にして其當初に於ては主としてシユウベルト歌曲又はワグネル劇等の飜案を事とせり。受容性か第二の創作性として注意せらるべき事は美學者の等しく認容する所なるが、われは此樂家に於て最高尙なる意義に於ける受容性が著しく發展せるを見る。リナラマンが彼を傳ぜる中に此飜譯家的性格を論して彼か詩的宗敎的情操を音樂に轉換せんとする傾向を明らめたるは卓見と云ふべし。他人の作に深く感與し、自ら其個性の深奥に透徹し、些か猜忌の情なく他の長を觀取するは此樂家の特性なり。藝術

に於ける説明的技術の能力と價値とを論斷する上に多大の寄與する所あるを疑はす。

唱歌に於ける歌詞新作の批難は古き事なるが、余は他の人々の如く綴音の拘束や諸般の事情をも顧みずして立言する者には非ずと雖も、旗野氏がウィーゲンリードに俗躰の歌詞を附したるに附きては多少の疑なき能はず。ウィーゲンリードに子守歌はよけれどブラームスの曲に俗躰を附したるは如何に。余は此譜を精査せされば確論はし難きも兎に角此樂家は現代の最も難解なる者、此曲の如きは割合に佶屈なる曲調はなき樣なれど、決して低き自然兒の聲に非す、否渾然たる藝術品 Knnstwerk なり。またウィーゲンリードとて必すしも「ねんねこ的」にはあらずベルシューズ弦樂の精粹たるは屢耳にする處。多年これにたづさはれる作歌者が此邊の消息を解せさるにはあらざるべけれど、かくの如きは或は一般の衆をして此樂家の眞趣を誤解せしむる事なきを保せず。一層の注意を得たきなり。(後 凋)

(『帝國文學』第十一巻第一号、明治三十八年一月、一二六～一二八頁)

**明治三十七年十一月十二日　試業演奏会**

◉東京音樂學校分教場試業會　同會は去る十一月十二日午後一時より神田一ツ橋分教場に於て表題の如き演奏會を開會せり。

(『音樂之友』樂友社、第七巻第二号、明治三十七年十二月、三六頁)

**明治三十七年十二月三日、四日　第十一回定期演奏会**

第十一回(秋季)音樂演奏會曲目(明治三十七年十二月四日)

第一部

一、合唱

甲、かちどき……(フリューゲル作曲 武島又次郎作歌)

乙、年の別れ……(ガルツ作曲 武島又次郎作歌)

一、管絃合奏

プレルヂューム
ローラ
フーゲ……バハ作曲

一、獨唱(ヴァイオリン オブリガート)　教師　マリー、カイゼル

甲、カーロ、ミオ、ベン……ジョオルダニ作曲

乙、ウンゲヅルド……シューベルト作曲

一、ヴァイオリン、ピアノ(ハーモニューム合奏)　教師 教授 幸田延幸、教授 幸田アウグスト、教師 ユンケル

ル、デリージュ……センサン作曲

第二部

一、合唱

甲、子守歌……(ブラームス作曲 旗野十一郎作歌)

乙、雲雀……(フレミッシュ古歌 小野竹三作歌)

一、ピアノ獨奏　教師　フォン、コイベル

甲、フリューリン……シューベルト
グスグラウベ
乙、クレルヘンスリート……ベートーヴェン　リスト調

一、獨唱及管絃　教師 マリー、カイゼル　助教授 杉浦チカ

フォルデル、クロステルフォルテ　グリーグ作曲

一、管絃合奏

クローヌングスマルシュ……マイエルベール作曲

(『東京音樂學校一覽』自大正十五年至大正十六年、一五～一六頁)

○一昨日の音樂演奏會　上野公園東京音樂學校にては三、四の兩日午後二時より同校奏樂堂に於て演奏會を催したるが一昨日は北白川宮殿下を初め奉り獨逸公使等も來聽し定刻過ぎには既に滿場の盛況なりき扨て演奏は合唱、管絃合奏、教師マリカイゼルの獨唱、ヴアイオリン、ピアノ、ハーモニユーム合奏、合唱、ケーベル博士のピアノ獨奏、獨唱合唱管絃、管絃合奏にて散會したるは三時四十分なりき

（『時事新報』明治三十七年十二月六日）

## 故國の音樂

有樂生

▲去三日上野の音樂學校で演奏會があつた、予は開會の定刻、二時に後るること十三分に着いた爲、聽衆堂に溢れて半分の空席も得る事が出來なかつた。如何に音樂好でも立詰は閉口する、良い工夫はあるまいかと見廻すと、是も後れて入場した一人であらう、カーテン垂るゝ窓側に形ばかり腰を下して居る男がある、それは外國人であつた。

▲尻の痛い位は辛抱すべしど、予も其外國人と並んだが、彼は英國人と見える、一体音樂會には聽衆に外國人の多いのが特色で、殊に當日の演奏者は當代の名流、曲は西ぶりの優しきもの勇ましきものを選んだのであるから、彼等本國を離れて波濤幾千里、茲に故山の樂曲を聽くは何んなに愉快であらうと思つて今しも合奏の濟んだ後、拍手の音霰の如き中に、余は再び彼を顧盻つた。

▲見た處、然も身分のある人とは思はれぬ、普通の鳥打帽を膝の上に載せて手を組んで、樂が終ると靜かに俛首いて、動くか動かぬ程に其唇の動搖が見える、恐らく故國の歌を想ひ浮べたのであらう。樂を聽く時の熱心と樂が歇んだ後の聯想との外に彼は何事も思つて居ない、今音樂堂には日本の令孃、令夫人の衣の香、外國婦人の花の冠、滿堂醉ふが如く、胸は樂の響の高く低く、我を忘るゝ者は單り此一人の外國人に止らぬが併し予は此老いて可憐なる一外人に少からぬ同情を持つた。

▲然り、彼は齡五十を過ぎてるかも知れぬ、西洋人は一体若く見えるけれど確かに其位は行つて居る。皮膚の色も餘程日本化して居る處を見ると彼は極東の天に幾年の夢を結んだであらう、然して彼は自らの事業に成功したであらうか、今の自分の境遇は幸福であらうか、それは知らぬ、只彼は故國の音樂に聞惚れて居る。

▲ヴアイオリンの連奏、ピアノの獨奏、軍樂の合奏、聽衆は樂に十二分の感興を覺えた時、會は終つた、聽衆は樂堂を去る事を惜むかの如く跫音も靜かに扉の外に一人〳〵出るのである、彼外國人は何うしたであらう、彼は起つて今まで組合せて居た手を衣嚢へ收めて悠然と立去つた、其跡に彼の持つて居た今日の會の目錄が落てあつた、予は彼の爲によし曲の名は忘れ樂師の顏の見覺が消ゆるとも、今日の感興は永久に忘れざらん事を祈つた。

（『電報新聞』明治三十七年十二月九日）

## ●音樂學校演奏會

十二月四日天清く風和かなる日、東台山中音樂學校に於て開かれたる演奏會は、例もながらの盛會、日本貴女の衣の薫、外國婦人の花の冠、蘭菊美を競ふ滿堂の聽衆は肅として西洋音樂の響に醉ひ、一堂宛なから水を打たるが如し、想ひ起す、今を去る十年、此月の此會の際、一部の曲終りて將に二部の曲に移らんとするや旅順陷落の報至る、校長乃ち演奏臺に上りて滿堂の聽衆に之を報じ直に君ケ代を合唱す、此日亦此の吉報あらんかと聽衆中窃かに期するものありたるもそは空頼みに終りき、記者の耳に響きしもの次の如し

一、合唱（甲、かちどき、乙、年の別れ）　各音部とも善く均齊を保ち殊にエキスプレツションの充分なりしば喜ぶべし、唯た惜むらくは歌詞曲に添はす、殊に甲のかちどきの如きに至つては曲の流麗圓轉して平和の感謝を傳ふるにも係らず、歌詞は戰勝の狂喜を叙するが如き、爲に曲と歌詞と相突擊してその趣味を損じ曲を害ふこと甚し、洋樂の不可解とし

て世人の忌彈する又故なしとせず、忌彈するもの惡きにあらずしてかゝる不調和のものを紹介するものゝ過ちにあり、此の如き歌詞はこれなきの勝れること遙なり

二、管絃合奏（プレルヂユーム、コーラル、ウンド、フーゲ……バッハ作曲）　バハ家十一代ジアン、セハスチアン、バハの作曲なり、バハは千六百八十五年に生る、此曲はバハが有名の作にして先きにライプチツヒに於て演奏せられしもの、當日の演奏は、フーゲに入りてより各部の不均齊なる邊もありしやふに覺えしも美事の演奏なりき

三、獨唱　マリー、カイゼル孃の演奏にして甲、カーロ、ミオ、ベン。ジョオルダニ作曲、乙、ウンゲヅルド。シューベルト作曲、共に好く演奏せられぬ、當日來聽せし某新歸朝者、音量の少なきを說げりしも果して然るべきか

四、ヴアイオリン、ピアノ、ハーモニユーム合奏　幸田兩教授並にユンケル氏の演奏にしてユンケル氏のオルガンは頗る珍らしきものなり、曲はセント、セーンのル、デリユージユ、の黑人向の曲にして、當日の聽衆に向ひては榮へざりしが如し

五、合唱（甲子守唄、乙雲雀）　甲の子守唄とは朗々として和聲の美しきに勝り、乙の雲雀は轉々としてメロジーの艶麗に勝れり、子守唄はジョン、フラームスのウイゲンリードなり作者の和聲は拮倔の僻を以て鳴れるもの又此の美しきものあり、先年演奏せし春花の曲（原名はアーベンド。シルラーの傑作にフラームスの作曲せるもの）の如きは明かにこの癖を認め得べし甲乙ともに感興に値せり

六、ピアノ獨奏　フオン、ケーベル氏の演奏にかゝり曲はリードの小なるものなるもアツコンパニメントの複雜せること甚しく共に聽衆の感興をひき難かりし

七、獨唱、合唱及管絃　エドワード、グリーグの作曲にして、グリーグは一千八百四十三年、諾威のバーゲンに生る、專ぱらメンデルソーン、シューマン、ショッパン等ロマンチツクの樂風を學び、その作曲はショッパン以外にかくの如くその地方的樂僻を美しく表はせるものなしと稱へらる、精舍の門邊は、オパス二十番なるソロー、コーラス、オーケストラに向ての曲の第二番目なり、聞くからに、深刻なる憂欝なる作情を起さしむるもの當日の演奏はいづれも美事なりき、杉浦氏のアルト、ソロー、惡きにあらねども、ソプラと並べては壓さるゝも無理なき事といふべし

八、管絃合奏　ジヤコモ、マイエルベールの作曲なり、作者は有名なる劇樂作者にして一千七百九十一年ベルリンに生る、七歳にしてモザートのデー、モール、コンセルテイノを演奏し後二年にして已に伯林第一のピアニストとして知られしほどの天才なり、當日の演奏中素人受けのよかりしもの是を以て第一とす（鐵）

（『日本』明治三十七年十二月十一日）

## ●音樂雜感

あかざ生

〔前略〕

▼音樂學校演奏會に於けるマリ、カイゼル氏、杉浦ちか子兩氏の獨唱は極めて崇高なるものにてありき、而して卒業生諸氏研究生諸氏の合唱並に管絃も實に唯一なる音樂學校流の妙所を發展して遺憾なかりき。たゞ吾れをして不足を感ぜしむるものは鳥居旗野一派の惡作歌にして語調澁晦尤も音樂美を殺ぐの感ありこれ修養なき作歌者なる事を證明するに餘りある事なり日本唯一の大樂堂に用ふべきものとしては大なる恥辱なり

（『東京朝日新聞』明治三十七年十二月十三日）

●音樂演奏會　舊臘三四の兩日午後二時より東京音樂學校奏樂堂に於て音樂演奏會を催せり元來純粹の西洋樂としては此演奏會の外には滅多に聽くこと叶はざる故何時の會も毎に參會者非常に多くあれ程の奏樂堂も立錐の地なきまでに詰め込み溢れて室外に立往生を遂ぐる人も少からざるが例なり此兩日の如きも矢張り同斷にて殊に目立ちて見えたるは花と飾りし外國婦人の常よりも夥しく來聽したることなり當日の曲目は左の如し〔曲目省略〕

（『音樂新報』第一巻第七号、明治三十八年一月、三四頁）

## 東京音樂學校 音樂演奏會合評

頭取、學生、文學者、娘、
考古者、新歸朝者、

（頭取）是れから皆様の合評を願ひます、先つ第一部の合唱から始めましよう。（學生）此の度の合唱はいつもよりは詞がわかる様だ、かちどきの方は壯嚴で、年の別れは輕く花やかで、先づ曲の撰擇は甚だ當を得てると思ふ。（文學者）僕は甲のかちどきは曲譜と歌詞と調和がとれて居らぬと思ふ、なるほど Sei getrost などゝ云ふ原曲だからかちどきなどと云ふ歌を付け度い様に思ふだらうがしかし如斯嚴肅なる和法の進行に、あの様な歌詞は全然不調和だと思ふ、若し强てあの種の歌詞を附し度いなら使命とでもして國民の抱負を歌た方がいゝでは無いか。今や國民皆劔を腰にして文明と人道との爲に戰へるのとき僅に我等が有する使命を歌ふは實に善い事ではないか。そうすると幾分か原曲の意に協ひ、歌詞に曲風にも合するだらうと思ふ。（娘）武島さんはキツト合唱を聽かないでお歌をこしらつたのよ。でも次の年の別れは大變いゝと思てよ奇麗でしたワネー。

（頭取）余り時間が立ちますから次の管絃合奏にうつります。（考古家）バツハ氏はヨハン、セバスチヤン、バツハと云ひ紀元千六百八十五年三月二十一日アイゼナハに生れ千七百五十年七月二十八日ライプチヒに死なれました、十八世紀の音樂家中には最も傑出せし人で、獨逸の所謂音樂史上天才時期と稱せらるゝ時代の前驅を成した人であります。作曲は最もフーゲに長じ、ピヤノ、オルガン、オールケストラ等の作曲が澤山遺されてあります。（學生）僕は始めてフーゲていふ形式の作曲を聽た、バツハ氏の音樂は大建築の様だとよく人が云ふが、是を聽て成程と思つた、先づプレリユヂユームとコーラルの土臺の上に、あの輕妙なフーゲのモテーブ！始めは最高音部から漸次次高音、中音、次中音、低音とくり返し、輕きうちに莊重を失せず、莊重にして而かも輕妙、四聲八調、亂れず噪がず、次第に築かれゆく大建築の柱梁にも譬へることが出來よう、總て工事益々進行して調益々複雜に轉變轉化、時に奇音天外より來りて時ならぬ花を飾り、鳥と鳴き、水と響き、轉變縱横底止する處を知らず、終に中程に至りて曲調一變トロンボンとバスとの破格的音調に加ふるに花やかなるフリユートとバスト（ママ）キオリン、曲漸く終局に近かづきてテンパニーの鏗々たる音、而して此の間を陰に匿れ陽に顯はれ、絕えんとして絕えず、消えんとして消えず、始めのメロデーは縷の如く此の間を縫ふ、今や大建築は方に竣功せむとして柱梁既に成り窓を穿ち月を加へ、紅に塗り青に彩どり五層八層既に成りて今や最後の十層を竣へんとする一刹那、嗚呼何たる莊觀ぞ、あらゆる器樂の聲は此處にあつまり、あらゆる和弦の進行は此處に合し、鏗々たる太鼓の音と共に曲將に止まんとする時、假令ば暗夜に光るダイヤモンドの如く、凡ての音の上に明に聽ゆるピコロの響―、高く高く遠く遠く、雲に入り空に上り、此の建築の靈となり神となり、永く空中に止まるべく覺えた、僕は此の時魏然として雲を衝く大建築の目の前に幻の如く築かれたるを認めた、僕は實に云ひ知らぬ立派さと莊嚴とに向て滿腔の拍手をさゝげた。バツハ氏は實に大音樂家だ。而かも氏の樂風は全く大建築の如しである。（娘）バツハさんの建築は純粹のゴシツク風ですネー。（文學者）學生君非常の賞贊だが是は主にバツハ氏に向ての様じやネ。僕は始めから能く拍子を數へたら中途から段々早く成て仕舞にはどんなに成るだらうと心配してたが幸ひ學生君の熱心の爲に此の大建築も見んことヒツクリ返へらずにすんだが何よりだ。とにかく近頃のオーケストラの内では大物だ。

（頭取）第三獨唱にうつります。是は近頃音樂學校の教師となられ、學校の音樂會には始めて出られたのですから其お積りで願ます。（考古家）甲の作曲者ジョオルダニ氏は一寸わかりません、乙のシューベルト氏はフランツ、シューベルトと云ひ、紀元千七百九十七年一月卅一日ヴインに生れ千八百二十八年十一月十九日に死なれました。十九世紀前半に於ける音樂家として有名な人です。（學生）カイゼル孃の喉は聽て居るが、其度に感服してるのだ、なにしろ僕等は悲しいことには是れ以上のソロイストを聽たことが無いのだから、唯もう一々感服する外はないのである。甲のカーロ、ミオ、ベンは大變奇麗なメロデーで有た。すこし麽う悲しみを帶た聲で、ゆつくりと歌ひ出でしメロデー、まづ場内が何と無くシンとして仕

舞ふ、極めて單純な旋法ではあるが、孃の口から謠ひ出されると何とも云へぬ尊き感情が湧き上てくる、此のメロデーが一寸すむと直ぐケイベル氏とユンケル氏の伴奏、其が又前の歌と同じメロデーを繰り返すのだ、前よりは猶一段のアクセントを付けて此の伴奏が奏さるゝのであるから前のモテーフが最も明に此の時頭に印象される、开して此のメロデーが終りまで色々と繰り返されて曲を終へるのである、乙の方のウンゲヅルドは孃の最も得意とされる謠方、所謂オベム[ママ]的スタイルなのである、あれは一寸日本人には眞似の出來ない唱歌なので、又最も困難な者である相な、あの拍子(タイム)の早いのに變化極まりなき音程の强弱、中々素人の企て及ばざる處、其に驚ろくほど高いソプラノの聲を出される、ナンデモBかCかで有た樣だ、日本人でも出ぬことは無からうがアンナニ苦が無く美くしくは到底出ないたらうと思た、曲も一体に華麗で、まだ聽たことが無いが、本場のオペラホールへ行た樣な氣がした。兎に角僕は音樂學校がボーカルの良教師を迎えられたことを喜ぶ。(娘)アノー、氣のせいなんで御座いましようか、カイゼルさんは以前より音量が無くなられた樣に思はれますワ、矢張り度度聽き馴れたからなんで御座いましようネー!?(學者)讀賣新聞の菱とかと云ふ先生がヤレユンケルのヰオリンが唯お愛嬌に過ぬとかなんとか云てるがアノ曲はヰオリンが附さるべき筈のもんで附されんだから、よくも知らんくせにあんなことを云はぬがいゝ。(新歸朝者)カイゼル孃は中々よく謠はれるがドーモまだあちらのソロイストなどゝ比べると音量が劣る樣だ。

(頭取)次はル、デリユージュ、なるヰオリン、ピヤノ、ハーモニユームの合奏にうつります。(學生)是が所謂黑人向きとでも云ふのかしらん、あんまり澁くて面白く無い、唯和絃が奇麗だと聞たばかりだ。あれは一体あの樣に三部合奏の目的を以て作曲されたものかしらん。幸田幸子孃のヰオリンはいつもながら美くしく奏せられた、殊に後半、迫まらず、いそがず、のんびり奏せられしはいつもながら感服。(娘)ユンケルさんのハーモニユームはなんだかものたりぬ樣でしたネー、矢張りあんなことは他の人にまかして、幸田さんと一處にヰオリンの合奏でもしてくだされば

のに。

(頭取)是にて一部の評を終り第二部にうつります。先つ第五の合唱から。

(考古者)甲のウヰゲンリードの作者フラーム[ママ]氏は極めて近代の人で即ち紀元千八百三十三年五月七日ハンブルヒに生れ、千八百九十七年四月三日に死なれました以前音樂學校で演奏された春の夜(佐藤誠實氏歌)の曲も矢張り同氏の作曲です、一般に花やかな曲風です。乙の方の雲雀の歌は古いフレミツシュの民歌です。(學生)二つとも面白い、雲雀は以前も聽たことがあるが子守歌は始めてだ、歌は俚謠体を取たの、が不調和だと云ふ人もあるけれど、矢張りあれでいゝと思ふ、(娘)あたしこう思てよ、あんなに大勢で謠てはネ、子供が目を覺まして仕舞ます、それよりか、一部から一人か二人づゝ出てネ、多くて八人位で歌たらキットもつと奇麗に出來たんだわ。アノ「ねむる子こそ可愛いお子よ」と云て直ぐ「ねむる子こそえらいお子よ」とピヤニシモで謠ふ處、まだ耳に殘てる樣な氣がするわ。(文學者)此の合唱は二つとも比較的歌、曲の調和が取れてる樣だ、今の所時々この樣な少さき合唱を澤山出して一般の聽衆に曲と歌と兩方より趣味を感じさせる樣にするがいゝと思ふ。

(頭取)第六ケーベル氏のピヤノ獨彈にうつります。(考古者)甲の作者シューベルトは第一部の第三の處に說た、乙のベトーフエン氏は少し音樂に志ある人は殆んど知らぬ人は無い位有名な作曲家である、今初學者の爲に一寸紹介して置ふ、氏はルードウイヒ、ヴアン、ベートーフエンと云ひ、紀元千七百七十年十二月十七日ボンに生れ千八百二十七年三月廿六(七)日ヴインに死なれた、氏は音樂家の內にても最も天才的に且つ最も詩人的なる音樂家として殆んど比肩するものなきほど榮譽を荷はれた人だ、最も器樂の作曲に長じ中にもピヤノの作曲は最も多い、彼の詩的物語と共に有名なるムンライト、ソナタの如きも氏の作物であるのです、次に此のリスト調と云ふのは、一体此の曲は二つとも元はピヤノの曲で無かつたのを、リストは其等のメロデーを取りてピヤノの曲に作り變へたからである、リスト氏も有名なるピヤニストで、其名をフランツ、リストと云ひ、

紀元千八百十一年十月二十二日ハンガリーのライデングに生れ千八百八十六年に死なれた。（學生）不相變達者に彈ぜられた、ケーベル氏位になると所謂ピヤノを彈くと云ふのだらふ、日本にもピヤノを彈ずる人か大勢あるが、まだピヤノと相撲のお稽古だ、見てる方、イヤ聽てる方でヒヤ〳〵して仕舞ふ。二曲とも誠に奇麗だが殊に乙の方はメロデー何となく東洋的で面白く聽た、ピヤノはピヤノ其れ自身が歌ふ樣にならなければならぬのじや、聽てゝいかにもピヤノをたゝいて居そふなのはまだ〳〵お話しにならぬ、ケーベル氏のは所謂歌へる、何とは無くピヤノの鍵盤から凡ての音がぬけ出て、どつかの空中でフーハリと歌てる樣に聽える、（文學者）ケーベル氏のピヤノはいつも大學の講座で哲學の講義を聞さる樣で、常に淋しい彈風（ひきぶり）であるが此の度は誠に花やかな曲を奏せられた、氏のピヤノはある度まで氏自身の哲學が流れ出るので幽玄に傾くのは止むを得んか、時々は其半面を現はされて少しは若い〳〵血の燃えたつ樣な曲を奏せられてほしいものだ。氏は勿論プレーヤでは無いであらうが、あれ程の造詣と手腕とを有してゐらるゝからは一つ藝術家としての氏の手腕も示して貰ひ度いと思ふ。（娘）ケーベルさんと若い血― ケーベルさんは果して其を奏するに堪え得るでしようか、若い〳〵花の樣な血― それがケーベルさんに向てはどんな記憶を呼び起すでしよう。矢張り歴史は人を造るのですわネ。

（頭取）第七、管絃合奏及合唱獨唱、フオル、デル、クロステルフオルテに移ります。（考古者）作曲者グリーグ氏は極めて近代の人で多分また生きて居らるゝ方だらうと思ふ、即ち紀元千八百三十四年六月十五日ノールウエーのベルゲンに生れられた人である。（學生）本文（テクスト）は意譯され、獨唱は原語で合唱はドレミで歌はれた唱歌が其が抑もの始めてだらう、下手に歌詞を譯して付けるよりは新曲を日本に紹介するとしては却りて是が好き方法だらうと思はれる、しかし日本人は、まだ〳〵本文（テクスト）の無き獨唱音樂は聽く耳が無い樣だから困る、始めのオーケストラがいかにも幽靜なるメロデーに始まりて、なにとなく物がなしく中程のアテンポの處より悲調益々せまりて哀音紛糾、クロマテツクスケールの進行、譬へん方なく淋しい、而して又一段器樂の聲靜まりし時、アルトの獨唱、即ち「精舍の扉、漏開けて敲くは誰ぞや」の所に至りて身は宛然、木立深き小徑をわけて、月無く星まばらなる、秋の夜にものふりた精舍の前に立たる心地がする、此の時ソプラノの聲「流離（さすら）へる哀の乙女ぞ」と歌ひ出し時、今少し聲が顫へたらモットよかつたらうと思つた、かくして合唱に移つた、盛なる器樂、盛なる合唱、「平和の樂園に永久の生命の靈力（ちから）をば得ん」に至りて僕等も此の哀の乙女と一處に漸く安心した、此の曲は一体に東洋的のメロデーが用ひられてる樣だ、しかも非常に作曲者の鄕土的空氣が含まれてる樣である、恰もノールウエーでも旅行してるかの樣だ、（文學者）安藤君の意譯の詩は大体に於て能く出來てるが、あまり原詩に制せられたせいか、處々意味の要領を得ぬ處がある樣である、例せば四章の「無下に捉へぬ涙のわれを、悶えて泣きて儂（わ）は逃れきつ」のあたりどうしても字句が不明瞭だ、要するに此の邊はあまり字句を節儉し過た爲だらうと思ふ、既に意譯と云ふのだから何もそんなに字句を節する必要が無い、もつと十分明白に譯したらよかつたらうと思ふ、（娘）杉浦さんは可愛想よ、だつてカイゼルさんと一處に歌はせるんだもの、引立ないのはあたり前だわ。日本人は勉强してもソロはだめでしせうかネー。

（頭取）第八管弦合奏、クローヌングス、マールシュにうつります。（考古家）マイエルベル氏はヤコブ、マイエルベールと云ひ、紀元千七百九十一年九月五日伯林に生れ、千八百六十四年五月二日巴里に死なれました。此のマーチは豫言者（プロヘット）と云ふオペラの中にあるものです。此のオペラは有名なもので此のマーチの如き正式に演奏するとすると大變な人數を要するので、とてもあればかりの人では足りぬものだ相です。（學生）實に盛な曲だ、實僕は盛だと云ふより外評言を知らない、以前のタンホイゼルマーチも盛だつたが、是は又あれと違た盛な處がある、彼は春の花ならば是は正に首夏の若葉のしたゝらむばかりの色にも比すべきである、先づ始の出は何たる破天荒な響であるであらうか怒濤かあらず、狂風かあらず天の歡ひ地の喜ひ、合してあの響と成たのであらふ、靜まりては岩間流るゝいさゝ小川の呟の如く、フアストヰオリンの奇麗な〳〵調べ、今までの嵐はいづれへやら、まるで春の野に胡蝶追ふ樣、又次第に曲調急となりてはシ

ンバル響き大太鼓轟き、トロンボン叶び、バス唸り、トランペット、フリユート、コルネット、嘻、何と云ふ和絃の壯大であるであらうか、コンダクターの鞭は狂はんばかり、歡喜の聲堂内に溢れて、人もわれも椅子も床も皆もう喜びの空氣に滿てる樣に思はれた。（文學者）私も同感です、あの樣な盛な曲が日本人の手によりて出來、日本人の鞭のもとに演奏されたら又どんなに喜こばしいだらうかと思た、とにかく音樂學校も追々進境を示したのは何より結構のことだと思ふ、此の度の演奏の如きは生徒のソロが一つも見えぬ樣だが、あれ丈のものが今に在學の生徒の手によりて演奏される樣になるだらうと思ふと歡喜に堪えんのである。（娘）わたし夢中で聽て、あとで氣が付たら椅子のうしろとつかみつくらよ。

（頭取）皆さん御苦勞樣、是で閉會とします。（了）

（『音樂新報』第一巻第七号、明治三十八年一月、二六～二九頁）

**明治三十七年十二月　学友会吊祭会**

▲吊祭會同校學友會にては客臘未亡友諸氏の吊祭式を擧行したり其順序は左の如し。

吊祭會兼月次演奏會順序

第一部　吊祭式

一、開會の辭　高嶺會長
二、亡友に對する敬禮　一、會長　二、會員一同（ピアノ合圖）
三、亡友諸氏履歴　鳥居參與員
四、吊祭文朗讀　外山國彦
五、吊祭唱歌　會員一同

第二部　演奏

一、ハルモニユーム獨奏　吉田マキ　木村雅子
二、ヴアイオリン聯奏　神田英芝
　ガボツト　バヽ作曲　神田百合子
三、ハルモニユーム獨奏　草川宣雄
　フーガー　バヽ作曲
四、ピアノ獨奏　川久保美須々
　ソナタ　モツアルト作曲
五、ヴアイオリン獨奏　永井漸
　ソナタ　ヴオルフアート作曲
六、ハルモニユーム獨奏　君塚正志
　ソルチニー　レメンス作曲〔ソナチネ　クレメンティー作曲〕
七、獨唱　柴田環
　カンソーネ　モツアルト作曲

第三部　演奏

八、ヴアイオリン聯奏　鳥居ツナ子
　a ビーゲンリード　シツト作曲　多久寅
　b マツルカ　同前　鎗田倉之助
九、ハルモニユーム獨奏　松井壯吉
　ソナチネ　ラインハード作曲
一〇、ピアノ獨奏　木村マヽス
　ソナチネ　クレメンス〔クレメンティー〕作曲
一一、二部合唱　鈴木信　小室千笑
一二、コルネツト獨奏　渡邊康三
　エグモントの一節　ベートーフエン作曲
一三、ヴアイオリン獨奏　前田襄子

コンセルト　ベリオ作曲

一四、合　唱　　甲師二、三年生

aスピン〳〵　bマドリカ　サリバン作曲

コンダクター　　田口隆治、若林孫二

（『音樂之友』樂友社、第七巻第四号、明治三十八年二月、三八頁）

○東京音樂學校の演奏會での呼物は誰れも先づ合奏、合唱に指を折るであらふ、ケーベル、ハイドリツヒ氏のピアノ、幸田教授、ユンケル氏のヴアイオリン共に屈指のものには相違ないが、音樂會を見物に行く連中にはその妙味か分らないのは勿論、ただ欠伸を催させるのみである、加之これは音樂學校の演奏會に限らず、他の會にもきかれぬ事はないのである、それで合奏、及合唱は音樂學校の特産物とも云へるものであらう、その合唱はいつもアウガスト、ユンケル氏のコンダクトの下に同校の生徒が演奏するので、合奏も同じタクトの下に同校の職員及研究生在校生の演奏にかかるものである、此合奏の中で、絃の部は全然同校の職員生徒連中であるも、その管の部には雅樂部の伶人が少からず交つて居るので、尤も此人等は同校の囑托教授になつて居つて平常管樂を生徒に教授して居るのである、此等の管絃合せて最も近き音樂會に於ける人數が四十五六人、樂器が二十近くあるのである、その多人數の彈奏、吹奏等を統轄調和を保たせ、感情を籠らせる樣にするのがコンダクターその人の役目なので、これはなか〳〵に骨の折れる仕事で、ユンケル氏の勞想ふべしである、〔後略〕

（『日本』明治三十七年十二月二十五日）

▲音樂學校演奏會　音樂を普及し音樂を發達せしめんと欲せば先づ其實物の實價たる音樂の功德と音樂の面白味を社會に知らしめること一番肝要にして是が普及の方法是れよりよきはなし、近頃音樂學校が頻りと門口閉鎖、と言ふか技術高振りと言ふか音樂の公開を好まず變つて地方に斯種の盛況を見るに至つては、首都の樂壇をして浦恥しき所爲に至らしめたるものと申すべく候、何卒同聲會にしろ、學友會にしろ、學校夫れ自らに於ても此際斯種の公會を盛んにして內外諸種の音樂を社會に紹介し以て何んでも音樂學校の先生方等が今少しく大膽と熱誠との氣象を振はれんことを望むものにして、首都の樂壇が盛況を呈し中央の舞臺面が社會に持囃さるだけ夫丈け自然地方の同業者も有難き仕合せを蒙るもの故御互樣に力を合せ腕を磨きて一層斯種の公開的音樂會に意をそゝぎ力を盡して度々音樂の演奏を音樂學校の教授諸君に望むものなり（歌姫山人）

（『音樂之友』樂友社、第六巻第一号、明治三十七年五月、四〇頁）

**明治三十八年二月二十五日、二十六日　学友会祝捷音楽会**

▲同校學友會は客月二十五、二十六の兩日祝捷音樂會を聞きしが、兩日とも千餘名の來會者ありて非常の盛會なりし、今回は通常會員（同校生徒）のみの演奏にて「オールケスト」の如きも少しも職員の手を煩はさず、コンダクトルさへ生徒になさしめしこと前例に見ざる處なり、當日演奏の曲目順序は次の如し。

第一部

一、オーケストラコーラス　　會　員

君が代　　林廣守作曲

二、ハルモニユーム獨奏　　ノエルペリー和聲

マーチ　　藤田コト

三、ヴワイオリン獨奏　　ギルマン作曲

ソナタ　　西村甫也

四、ピアノ獨奏　　ヴオールフアールト作曲

ソナタ　　本居長世

五、女聲三部合唱　　モツアルト作曲

會　員

賤の苧環　メンデルソーン作曲
六、ハルモニユーム獨奏　佐藤誠實作歌
ファンタヂー　松本德藏
七、ヴワイオリン獨奏　フランク作曲
ベルソース　東儀哲三郎
八、ピアノ獨奏　ゴダールド作曲
ソナタ　久野ヒサ
クレメンテ作曲

第二部

一、合奏　會員
甲、別れ　クレムゼル作曲
犬童信藏作歌
乙、松浦佐保姫　ワインブルム作曲
武島羽衣作歌
二、ピアノ獨奏　坂本ソノ
ソナタ　モツアルト作曲
三、ヴワイオリン獨奏　前田襄
コルニドライ（ヘブリユーメロデイー）ブルツフ作曲
四、ハルモニユーム獨奏　松井壯吉
マドリガル　ギルマン作曲
五、獨唱　小室千笑
フエースフルヂヨンニー　ベートーヴエン作曲
〔忠実なるジョニー Faithfu' Johnie
スコットランド民謡のベートーヴェンによる編曲〕
六、ピアノ獨奏　上原喜勢
ソナタ　フンメル作曲
七、オーケストラ、コーラス　會員
君は神　ベートーヴエン作曲
東京音樂學校作歌

（『音樂之友』樂友社、第七巻第五号、明治三十八年三月、三九頁）

●祝捷音樂會漫評

戰捷の祝意を表はすため二三の音樂會は、國家の祝福を謠ふべく已に開催せられたり。

こゝに於て歡樂の波動は渦線を作りて漸次中心點に集合し、斯道の主腦たる音樂學校學友會を動かして比しく祝捷會開催せしめぬ、こゝに於て吾人は密かに望むに、大家集合の一大音樂會ならんことを以てせり。

然るに曲目を手するに當つて、希望は全く失はれ、單に學友會會員諸君の演奏たるに止まるを知れり、吾人の如き素人觀を以てすれば、一に大家二に大家、飽くまでも大家以外の上手を認めざる者が、其希望を失ふに至つては、小癪ながらも此演奏をして何程の事かあらんと迄蔑視せしめたり。

オーケストラ、コーラス（君ケ代）より始めてハルモニユーム、ヴアヰオリン、ピアノ、各樂器は亮々として響き出でぬ嗚呼不可思議、吾人は正しく魅せられたり、否々、遂に其天樂の如き妙趣に醉へるなり、こゝに於て曩に蔑視の念を動かしたる吾人は、甚だしき慚愧の境に陷らざるを得ざりき、而して覺れり、大家以外の妙は實に大家以外の妙手より發せらるゝ事を

今少しく各演奏に就ての所感を記さんか、

當日演奏中第一部第二部に於けるハルモニユームの演奏は甲種師範科生松本德藏氏同藤田こと子孃、本科三年生松井壯吉氏三者の手に依つて彈ぜられしが何れも無難の出來、特に優劣を評すれば松井氏を以て第一位に推さゝるべからず次にヴワイオリン獨奏、演奏者は甲種師範科生西村甫也氏、本科三年生東儀哲三郎氏、研究科生前田襄子孃なりき、西村氏は可もなく不可もなく、前田氏は音調美しかりしに對して其スタイルに缺點ありき、はくは今一段の注意を此邊に加へられん事を、而して東儀氏のスラ

スラと奏し終つて、絃聲嚠朗と四隣に反響し、恰も天樂を聞くが如き感深かりしは三者中の榮位を占めたるものと信ず、次にピアノ獨奏に就ては本科三年生本居長世氏同二年生久野ひさ子孃、同坂本その子孃、同三年生上原喜勢氏何れも達者なる演奏者として聽衆の拍手に迎へられたり、殊に久野孃がソナタの輕快なる一曲は、其雙手の運用巧妙にして、飛燕の中空に翻翻たるが如く、一高一低の妙音は急雨の軒頭を叩くに似て迅く、春風の花間を吹くに似て緩かなり、要するに其ピアニストとしての光榮は孃の頭上に王冠の如く輝きしのみならず、兩日演奏の凡てを通じて、最後の勝利者たりし事疑ひなし。これに次いでは上原氏も其名譽を擔ふべき資格ありしかど、惜むべきは此ソナタの彼ソナタよりも艶沃ならずして、聽衆の感を惹かざりし事是也、次に第一部に於ける女聲三部合唱の賤の苧環、本科二三年生並に甲種師範科全體の出演はソプラノに金鈴を振るが如き美音ありて、アルト、テナー共に氣壓るゝの感ありしは如何、第二部合唱の別れ、並に松浦佐用姫、二歌何れも歌詞調ひて、前の賤の苧環の四離滅裂なる惡歌に優る事數等なりしが、これもソプラノの優勢に歸したるは名手の此中に潜むらんと思ふにいとも床し、又佐用姫の結末「見捨て〳〵行くか」の邊、急昂したる曲の悲哀なる切情を表せるは樂通の歎賞する聲、吾人が耳に多く入れり、次に本科二年生小室千笑氏のフェースフルヂョンニーの獨唱、音量充分なれども其割に引立たず又表情に乏しきの非難ありて、これも優勝者の地位に推す事を得ざりしは口惜し、斯くて結局のオーケストラ、コーラス（君は神）の崇高なる曲は能く祝捷の意に應じて、此會の精神を遺憾なく發揮せしが、校長が演奏前に當つての演説によれば、此會は甲種師範生（來四月卒業）が告別の意をも併せたるものなりと謂へば、彼の別れの一曲もまた此會の精神に協へるものと謂はざるべからず。要するに廿五六兩日間に於ける此演奏に、一人の大家を交へずして尤も立派に局を結びたるは、學友會會員諸君の大手柄也（あかざ生）

（『東京朝日新聞』明治三十八年二月二十八日）

## ●學友會の音樂會（上）

てつちやう

○東京音樂學校學友會の音樂會は去る廿五廿六の兩日上野の樂堂に催されぬ、例年は大會といふ所を今年は誰れに憚りてか祝捷といふ字を冠らせぬ、藝術に身を委ねて國を耕すもの、其道に勵精なるに何の憚る所ぞ、要なき名つけたるこそまことにミツトモなき事といふべし、演奏何れも美事の出來なりしも殊に廿六日は一体に出來よく、聽衆も折からの雪空にも係らず、滿場立錐の地なきまでにして、なか〳〵の盛大なりき、

○第一部の中指を屈すべきは、久野孃のピアノ東儀氏のヴアイオリン及び女聲三部などなるべきか、久野孃の演奏はその音量の强大と、運指の迅速の目覺しさ、轉た聽衆をして欝積したる思ひを霽さしむる感ありぬ、孃のピアノはその音の强大なるに於て校中の名物なりとか、兩日の演奏眞にその名にはぢずといふべし、されどそはたゞその音量の大と、運指の自由とのみ、音樂はたゞ是れに依て成れりと思はゞ、早合點も甚だしいといふべし運指の妙、音量の强大、元よりピアニストたるの要素なるも、音樂の意義はそこに盡くるものにあらず、藝術の妙味は巧なる要素の排列の外に存するものなり孃にして幸に撓まざらば達するの日或は期すべきか、されど望むらくは今少し自由に、感情に訴へて、演奏せられん事を、換言すれば徒らに樂譜にのみに拘束せらるゝ事なく奏者自らその曲に犯されて醉ひつつ演奏せられむ事を望む然らざれば演奏する所遂にピアノラと何の異るなきに至らむ、之れ孃の爲めに切望する所なり孃は本科二年生にして幸田教授に就て其技を修む、

○東儀氏のヴアイオリン、是れ亦校中の一名物同校生徒にして氏の右に出づるもの一もあることなし、演奏せし曲は、ゴツダードの作曲にかゝるオペラ、ジョセリンの、レシテーテイブにして、始め一半は弱聲器を以て奏せられ啾々として哭する如く、訴ふる如く、そのエフ、ドアーに移りてよりは、之に反して男性的の感情横溢して聞へ又再び元の沈痛に戻りて終りぬ、兩日共に美事の演奏なりしも殊に廿六日の演奏は際立ちて感情的にして促々人に迫るの慨ありといふべし、氏のヴアイオリンは、その音に力あることユンケル氏に似て頗る妙味掬すべきものあり、兩日の演奏共に樂譜

なしにてなしたる事とてエキスプレッションも思ひのまゝなりき氏は本科三年生にしてユンケル氏に就て學べる人なり、

○女聲三部賤の苧環の合唱はメンデルソンの曲にして美しき事此上もなきものなり兩日とも美事の演奏なりしも、惜しい哉コンダクターは生人形同然更にその指揮より表情の魔力を以て合唱組を導くもの逆り出でぬ事とて、たゞ美しいばかり、雛人形見る如くにして何の感興にも價せざりしは殊に惜しかりし、概して多數の演奏、ユンケル氏のコンダクトの下に出づるものゝ外は獨奏、合奏の別なく、いつも人形を見る如き感あるは恨むべし、かくては音樂の眞生命藝術の眞價値は遂に失はるゝに至らんか、殊にメンデルソンの曲に至つては、たゞその表情のみに依て價値あるもの、之れなくは寧ろ唱はざるの勝れること萬々なり、

○その他ピアノに本科一年生本居氏の獨奏あり曲はモザートのソナタ、エフ、ドアーのものゝ中アレグロの部なり廿六日には一二ケ所さゝやかの耳障りありしも兩日とも先づ美しき演奏なりきされど此人のピアノも亦前述の弊風を受けて無味乾燥、たゞ奇麗に彈いたといふ外、何のトリエなく感興なし、その風に感ずる事甚しければ今より警戒するも已に遲からんか、憫むべし、松本氏のハーモニューム、フランクのファンタジーにして曲はなか〳〵に趣味あるものなりしも廿五日の演奏にはやゝ聞き苦しき音のありし樣に覺えぬ、廿六日は大出來、同じハーモニユームの獨奏なる藤田孃の出來に比して甚だ上れりといふべし、藤田氏の獨奏も、廿五日は出來よろしからざりし樣に覺えぬ、

○西村氏のヴアイオリン可もなく不可もなけれど、元より感興に價するでもなし氏としては上出來なるべけれども畢竟露拂ひたるは免れず、されどその前に尙褌かつぎあるを忘るゝ勿れそはオーケストラ、コーラスなり、たゞ多くの樂器を持ち出したといふばかり、タクトと演奏とは二日ながら合はず、いつもタクトは演奏を引摺りて導くのみにして更にタクトの鞭より表情の溢るゝなくたゞ器械的にその音符を歌ひ、彈きしといふに止まりて、何等掬すべき趣きなかりしは恨むべし、此君ケ代の和聲は新たに同校講師たりしノエル、ペリー氏の附せしものにして、在來のエツケルト氏の和聲に比して妙味津々といふべし、殊に各部に同一リズムの旋轉して動き行くと、音域の廣きとはこの和聲の特長といふべきか、

（『日本』明治三十八年三月一日）

（1）末広重恭の雅号

## ●學友會の音樂會（中）

てつちやう

○第二部に入りては小室千笑子の獨唱を以て白眉とす、獨り二部に於けるのみならずして兩日の全演奏を通じての白眉なるべきか、小室孃の聲は頗る流麗にして獨唱家として已に定評ある柴田孃の聲もこの孃の聲に比しては遜色あるを免かれず、元來柴田孃の聲は肉なく、艶なく濕ひなく、生硬にして且つ薄く、聲としては味も甘味もすつぱけもなきものにして、寧ろ吉川孃の方勝れる事萬々なり、されどその唱ひまはしと表情とは眞にその特長にして、その特長は欠點を補ひて遂にその盛名をなせしものなり、小室孃の音色の美しきと、その音に肉あり、艶あり、味ある事は多く他に求め得べからざるものにして、その圓く軟かき響の然も豊かにして表情明なる眞に人を狂はしむといふべし、宜なる哉、同校第一とし未曾有として喧傳せらるる事、孃は本科三年生、マリー、ガイゼル氏に就てその道を修めつゝあり、

○廿五、廿六日演奏せし曲はビートベンのオパス百〇八の第十七番フエースフル、ジョンニーなり兩日ともに申分なき出來榮えなれとも素人には向かざる曲なれば大方の聽衆は多く喜ばざりしが如し、ピアノの伴奏は靜かに心絃の波動を起して漸く高く遂に獨唱を誘ふて起さしめ、や、波紋は波紋を生んでいよ〳〵高く、獨唱は切々たる情の促迫に入り來り、玉盤石を轉ずるがと如き、否、水晶融けて流るゝが如き、音色に多恨の表情を空に漂して、此演奏は終りは、終れども魂は音を逐ふて身に返り來ず自失して喝采を忘るゝこと多時なりき、

○然るにこゝに一人あり、之を評して曰く『音量充分なれども其割に引き立たず、又表情に乏しきの非難あつて之れも優勝者の地位に推すことを得ざりしは口惜し』と、引き立たざりしと思ふも無理なき事にして、ビート

ベンの作曲に至つては、とても何の素養なきものゝ能く解する所にあらざればなり、かゝる向きにはやはりクレメンテイ。クーラー。デユセツク。などの淺薄なる作曲か、然らざればマーチの獨奏、獨唱などこそ適當ならむか、宜なり、其人久野孃のクレメンテイのソナタは大に其意を得たることゝて『最後の勝利者』といふ有りがたき名を久野孃に冠せぬ然もその表情等に就ては何の云ふ所あらざるなりされど小室孃の獨唱に對して表情に乏しき非難ありとせし人が久野孃のピアノに對して表情に富めるといふを得るか、今この獨唱といづれが表情に富めりしやを問はゞ、そは最もやさしき問題にして、誰れも小室孃の表情に富めるをいはむのみ、然るに小室孃の獨唱すら尚以て表情乏しきを難ぜし此人恐らく聽く耳ある者より一般に富まずと目せらるゝ久野孃のピアノを以て表情に富めりとはよも言はれまじ而して之に最後の勝利者の名を與ふる抑も滑稽の極にあらずや、與ふべくんば小室孃の獨唱にこそ眞に與ふべかりしに

（『日本』明治三十八年三月二日）

## ●學友會の音樂會（下）

てつちやう

○獨唱に次で好かりしは、松井氏のハーモニユーム、前田孃のヴアイオリンなどならむか、松井氏は本科三年生、曾てペリー氏に就て其業を修め、今はユンケル氏に習へり、曲のマドリガルは古は多く戀愛を歌ひしものにして時には又望み、祈り、失意、決意等をも歌ひし歌曲なりしが、其後發達して一の形式となりしもの、作曲者はギルマン、兩日ともに演奏殊に美事にして、他のハーモニユーム獨奏に比して一段の光彩ありき、前田孃のヴアイオリン、さすがに熟練の効見えて、殊にその曲のチヤーミングなりし爲、大に俗受けせし樣子なりき、東儀氏、久野孃、小室孃、松井氏、前田孃の演奏は眞に當日の聞きものなりき、

○尚他に上原喜勢子孃のピアノ、及坂本ソノ子孃のピアノあり上原孃は本科一年にしてケーベル博士の門弟、坂本孃は本科三年にしてハイドリツヒ氏の門弟、坂本孃の演奏せし曲はモザートのソナタにして本居長世氏の演奏せしと同一のソナタなるも本居氏は第一ムーブメント、これはその中第三ムーブメントアツサイ、アレグロの一段を演奏せしものなり、兩日の演奏中土曜日の方演奏澁滯なく美しかりし、日曜にはやゝその後半部に於てあやまりありし樣に覺えぬされど、最も迅速なる拍子に演奏すべき曲の事なれば他の曲に比してむづかしき事とて演奏者の苦心想ふべきなり、上原氏のピアノ兩日ともにまことに美しく此上なき流暢なりしも、一部の本居氏と同じく、たゞ美しきばかり、表情とても、その樂譜にあるまゝの描寫にて、活動せざるが故に、些の面白味なきを遺憾とす、運指の事、强弱の度合、ペダルの使ひ方、表情の事いづれより見るも美事にして完全なるもたゞ一つ自らその樂に犯され、その音に醉はざるが故に、無味乾燥、音樂としては之を取つて上出來の演奏となす能はざる所以、之れ甚だ孃の爲に惜む處なりとす、

○合唱、甲別れ、乙松浦佐用姫、『別れ』は先づ上出來なりき、合唱の中にては第一等の出來なり、唯テノルの音量の少なきは甚だ恨むべし、ベースは音量大に過ぎたり、アルト最も好く唱ひぬ、とにかく此コーラスは當日合唱中第一の出來なりき、田口氏のタクトも甚だ好く相應に表情も迸りて合唱を導くに足りぬ、乙の松浦佐用姫は出來よろしからず、殊に第二日目は不出來なりき、各部不均齊にして雜然として響くところ頗る心地惡し、そのゲーモールに戻りて急迫したる叙情の邊よりは甚だしく不整齊なりき、釜蒲〔ママ〕氏のコンダクトは、甚だ宜しきを得たり、タクトとしては第一なるべきか、

○オーケストラコーラス、君は神、何らおもしろみもなくて過ぎぬ、上原氏のピアノと同じく各部各部、各樂器に渡りて惡き邊はなきなるべけれど、さて佛作つて魂入れずといふ工合でさらに面白くも何ともなし、會員のみにしてオーケストラをやること、善き考へなれども、やる位ならばもつと熱心に練習して、美事なるものを出すべかりしに、太夫未熟に候へば、といふ遠慮であまりやさしいものをやると、反つて聽衆の方からは滑稽に見えもするし、馬鹿にされた樣な氣もするものなり、實際の處會員達の實力よりいへばもつと立派な仕事が出來る筈なるに、こんな急ごしらへ

のお茶番は人笑せに過ぎず、今後とも益々此會員のオーケストラを盛にすると同時に一層の練習と骨折とを希望するものなり、彼れ此れとは言ふものゝ、概して今回の學友會の演奏は皆望外の上出來なりといふを得んか、

（『日本』明治三十八年三月三日）

**明治三十八年三月十八日、十九日　第十二回定期演奏会**

明治三十八年三月十九日午後二時半

音樂演奏會曲目

東京音樂學校

一、合唱

甲　かちどき……（フリューゲル作曲／武島又次郎作歌）

乙　燕……（シューマン作曲／鳥居忱作歌）

二、管絃合奏

ラルレジエンヌ……ビゼー作曲

甲　プレリユード

乙　ミニユエット

丙　アダジエット

丁　カリロン

三、ヴァイオリン、管絃伴奏　　教授　幸田幸

ロマンツヨ……ヨンゼン作曲

四、獨唱　　研究生　柴田環

カンツオネ……モツアルト作曲

五、ピアノ、管絃伴奏　　教師　フォン、コイベル

コンセルト……メンデルゾーン作曲

六、合唱及管絃合奏

レクイム……ケルビニ作曲

七、管絃合奏及合唱

我武惟揚……（ワグネル作曲／鳥居忱作歌）

Orchestral and Choral Concert
OF THE
Tokio Academy of Music
TO BE HELD AT
UYENO PARK
ON
Sunday March 19th 38 Meiji (1905)
AT 2.30 P.M.

PROGRAMME.

I. Choruses:

*a.* Sei getrost……*Flügel.*

*b.* Wenn ich ein Vöglein wär ……*Schumann.*

II. 1re Suite, l'Arlésienne for Orchestra……*Bizet.*

No. 1. Prélude.

No. 2. Minuetto.

No. 3. Adagietto.

No. 4. Carillon.

III. Romanze for Violin and Orchestra .....G. Jensen.
Miss K. Kōda.
IV. Canzone. Ihr, die Ihr die Triebe des Herzens kennt, für Sopran aus „Die Hochzeit des Figaro" .....
..... Mozart.
Miss Shibata.
V. Concert for Piano-forte and Orchestra in g minor...
..... Mendelssohn.
Prof. Dr. von Koeber.
VI. Requiem for Chorus and Orchestra.....Cherubini.
1. Introitus.
2. Dies Irae.
VII. Kaiser-Marsch für grosses Fest-Orchester und Chor...
..... Richard Wagner.
Conductor: Prof. A. Junker.

## ●本日の音樂學校演奏會に就て（上）

○待ちに待ちたる音樂學校の音樂會は今明兩日午後同校奏樂堂に於て開催せらるゝ筈なり、今回の音樂會はその配付せるプログラムの頭書にもある如く、合奏及合唱の音樂會にして、昨秋の恤兵音樂會及昨冬の同校音樂會皆此の種の音樂會なり、こは他に屢々見る如き獨奏又は連奏のみの音樂會と差別したる名稱にして、同校の音樂會の如きは常に此の名稱を冠せしむるを得べし。殊に今回は演奏七つの中、五つまではオーケストラを有するものにして、内一つは純然たる合奏樂、二つはオーケストラ、コーラス、二つは伴奏としての、オーケストラにして殘る一つは合唱、一つは獨唱なり。

○第一の合唱「甲、かちどき」は昨冬十二月の同校音樂會に、矢張り第一番目の合唱に出でしものにして、その折委しく述べし事なれば今又此に贅せず、「乙、燕」は新たに習練し作歌せしものにして原曲はシューマンの作なるウエン、イヒ、アイン、フエグライン、ヴエールといふものにて、即ち「若し我れ鳥ならんには」といふ主題の下に作曲せしもの、燕といふ歌は鳥居忱氏の新たに附せしものにして、此意味に依る處多しといふ事なり。

○二は管絃合奏、ラルレジエンヌといふ曲にして佛國近代の名家ジョージー・ビゼーの作曲なり、此ラルレジエンヌは、アルホンス・ダウデといふ人の三幕の戯曲ラルレジエンヌに附せし曲にして、曲の形式よりいへば、オーケストラに向つてのスートなり、スートは十六世紀の末葉より十八世紀の始めの間に於て歐州各國に最も舞踏の流行せし折に根原せしものにして、その樂の特色としては各國民の種々なるダンス、ミュジックを含む事及び種々の拍子のものが錯雜して奏せらるゝ事なりしが漸次進んで單に舞踏にあはするのみならずして、それに藝術的の配合等を加味し來りて以て今日になれるものなり殊にプレリユーデの添加せられたる如きはその發達を促したるものなりとす、如斯きものなるが故に常に此スートは數部分に分れたるものにて多くは四部に分れたるものなり、即ち今日に於けるスートの形式としては四部を普通とせるものなり、同校得意の合奏カーメンの如きも此スートにして矢張り四部分より成立せるものなりとす。

○扨て此のラルレジエンヌはプレリユーデ。ミニユエット。アダジエット。カリロンの四より成るものにして、プレリユーデは四拍子ゲーモール・ミニユエットは三拍子にして最も輕快なるもの、アダジエットは絃樂四部合奏にして三拍子、カリロンは三拍子にしてその主たる、メロディー、即ち始めにポザウネ等の管樂に依て唱はるゝは、チアーチの鐘をあらはすものなる由言ひ傳へられたり、此演奏は純然たる管絃樂のみの合奏なりとす。

○第三は幸田幸敎授のヴアイオリン獨奏にして管絃樂はその伴奏なり、曲はローマンス、紀元節の義捐音樂會にユンケル氏の獨奏せしものと全く同じ、作曲者はグスタヴ・エンセンにしてオパス十五。アー・モールのものなりとす、ローマンスは甚だ定まらざる意義の形式にして、詩に於けるローマンスに連れて勃興せしものなり「、」ローマンスとしてはモザートのデー・モール・コンセルトに於けるローマンス及ビートベンのオパス四十及

五十のヴアイオリンに向つてのローマンス、幷にシューマンのオパス廿八、ドライ・ローマンス等は名高きものにして、ローマンスの形式としては定まりたるもの一もなし、たゞモザート及ビートベンのローマンス、何れも極めてやさしく纖細なる表情を持つといふ事の歸納せらるゝのみなり、此ローマンスも頗る流麗にして且つ纖細なるは先人の作に劣らざるべし。

○第四は獨唱にして柴田環孃の演奏なり、曲はカンツオネ、作曲はモザートなり、此カンツオネは、ウオルフアング・モザートが傑作、オペラ『フイガロの結婚』の第一幕第十一齣にして、ケルビノといふ女性がその愛する人の窓下に立ちてギターを奏でつゝ唱ふ戀歌なり、カンツオネは伊太利のセネレータにして戸外に於ける夕暮の歌なりとす、始めは唱ふものゝみなりしが後に至つては器樂作曲に於て發達せり、モザートがオペラ、ドン・フアンは更に溺愛せしむべきカンツオネに富めるものなり。

---

音樂學校の演奏會　東京音樂學校に於ては明十九日午後二時より演奏會を開く由にて曲目次の如し

一、合唱（甲、かちどき。乙、燕）二、管絃合奏（ラルレジエンヌ……ビゼー作曲）三、ヴアイオリン、管絃伴奏（教授幸田幸）、四、獨唱（研究生柴田環）、五、ピアノ、管絃伴奏（教師フオン、コイベル）、六、合唱及管絃合奏（レクイム……ケルビニ作曲）七、管絃合奏及合唱（我武惟揚）

（『日本』明治三十八年三月十八日）

## ●本日の音樂學校演奏會に就て（下）

○第五のピアノ獨奏はケーベル博士の演奏にして、曲はコンセルト、メンデルソン作曲、管絃はその伴奏なり、コンセルトの事に就きては先きに詳しく述べたれば今は云はず此メンデルソンのコンセルトは千八百三十五年の作曲にしてオパス二十五、ゲー・モールのものなり、凡そコンセルトは先きに詳述せし時に云ひし如く管絃伴奏を有するを以つて通例とするものなるも今日まで未だ曾て管絃樂を以て伴奏せしものあらざりしなり、今回の如く管絃樂の伴奏を有してこそコンセルトは愈々面白くきかるゝなれ。

○第六は合唱及合奏、曲はレクイム、ケルビニーの作曲なり、これは屢々同校に於て是迄演奏したる『橘の薫』の原曲にして今回も同じく同歌詞を以て唱ふことならん、レクイムは輓歌或は聖餐樂ともいはる、聖餐樂といはるゝは此樂が多くカソリツク教徒の用うる意義より起りし名にして、輓歌といふ方廣き意味にして可ならんか、レクイムは九部分より成立つものにして即ち第一イントロイト、第二、ギリー、第三、グラデユアル、四、セクエンス、（即ちデイス・イヤー）五、オツフエルトリユーム、六、サンクタス、七、ベネヂクト、八、アグナス・ダイ、九、コンミユニオ、にして時としては、十、レスポンソリユーム、を添加する事あり、而してレクイムは合唱に向つて作曲せられしを根元とするものにして、十五世紀の頃より已に盛んに勃興せしものなり、近世に於けるレクイムとしてはモザートの最後の作曲たるもの最も有名にして此作曲に就ては頗る名高き神秘的の傳話あるものなり、之に次で名高きはケルビニのレクイムにして、此れに二あり、今回演奏せらるゝはその第一の方にして一千七百九十三年一月二十一日、ルイ十六世の死去したる折に書いたものでチエー・モールのものにして、セン・テニスのアベイ・チヤーチに於て、一千八百十七年に始めて唱はれぬ、爾後一千八百二十年の二月十四日同寺に於て再び唱はれぬ、此レクイムはイントロイト。グラヂユアル。デイス・イヤー。オツフルトリユーム。サンクタス。ベネヂクト。アグナス・ダイ。の七節より成り立つものにして此度の演奏は其一と三とを演奏するものなり。

○第七は管絃合奏及合唱、曲はカイゼル・マーチにしてワグネルの作曲のオーケストラ及コーラスに向つてのものにして同校のオーケストラが之に用うる樂器及奏者の數は左の如し、一番ヴアイオリン、六。二番ヴアイオリン、六。ヴオラ、三。セロ、三。ベス、二。フルート、三。オーボー、二。クラリネツト、二。トロンペツト、三。ホルン、二。ポザウネ、三。バステユバ、一。ベツケン、一。ミリタイル・トロンメル、一。グロツス・トロンメル一。パウケン、三。トライアングル、一。にしてホルンの代りに他のブラツスを以て奏し、フアゴツトを省きてその音部をオルガンを以て

奏する由その壯觀想ふべきなり。

○同校の管絃合奏が僅々二三年の間に長足の進歩をなして如斯きの演奏をなし得るは眞に喜ぶところ、讀者と共に一刻も早く此壯なる音樂を聞かんことを欲するの念切なり。

（『日本』明治三十八年三月十九日）

◉音樂學校演奏會　一昨日午後二時半より開かれしが立錐の地なき聽衆にて入場を拒絶されし者も多かりし西洋人の來會も從來例なき程管絃樂甚だ多く演奏は一會毎に進歩の跡を見るとの評

（『讀賣新聞』明治三十八年三月二十一日）

## ●音樂學校春季演奏會

（三月十九日催）　無耳生寄

▲唱歌の部

一、合唱、甲、かちどき……武島氏作歌

秋季音樂會にも演ぜられし者、曲と歌との調和を欠けり、今少し神々しき歌詞ならんにはと思はれたり、勿論プログラムの獨逸語 sei getrost（なぐさめられよ）を見ては原歌を聞きたかりし、高音部の聲の不統一なりしは誰の罪か、後列の女生徒、小心翼々不安心らしき、實に不愉快なり、且拍子を後れては、きたなき聲を殘したる餘りに聞き苦し、

乙、燕は面白く聞かれたり、西洋の曲に歌詞を附すること、猶鳥居氏の專有たらざる可らざるか……、演奏は無難なるも、望むらくは今少し拍子の速急ならんことなり

二、合唱及管絃合奏、レクイム……ケルビニ作曲

渡邊校長時代の名物として斯界に喧傳せられたる遺物、橘の薫の覆面せるものなり、原語にて歌はるゝものかと思ひたるに、入口にて頂戴せる印刷物には橘の薫の歌詞は勿論其題名をも記されたり、何となく現校長、否現當事者の卑劣心事！と澁面作られたり、管絃合奏の進歩に對し合唱の相伴はざるは如何、幸田技術主任の一考を俟つ

三、管絃合奏及合唱、我武惟揚……ワグネル作曲

ワグネルのKaiser-Marsch、素より管絃を主とせるもの、合唱を非難するも如何なれど、聲の打負かされし傾きあるは遺憾なり、斯の如きものは到底、歌詞の判然聽取さるべきものならねば、寧ろ do re mi にて可なり、只其聲量の多大ならんを要す

四、柴田研究生の獨唱、カンツヲネ……モザート作曲

其聲量を、カイゼル孃に比するは酷なり、發音發聲も、美しく表情も申分なかりしは大に其進歩せられたるを証するものなり〔、〕實に我國唯一の唱歌者として敬愛すべきの人なり（邦人中）其歌詞の獨逸語たりしは、孃の爲否、學校長の爲、多大の幸福にして、若し其邦語なりしならんには、現今道學先生社會の教育界、大に喧搖を極むるものならん

▲管絃合奏の部

二、ラルレジアンヌ……、ビゼー作曲

其中々の長曲なるにも拘はらず人をして倦厭たらしめざるは、單に其旋律の我國振に近きものあるによるか、或は又其國民歌を基礎に採りたるによるか、其何れなるを知らずと雖も、慥に聽衆の多くが之に依て大に喜ばされたるは、實に疑を容れざる所也

三、幸田幸教授のヴァイオリン、ロマンツエ

御骨折の割に引立てざりしは御氣の毒なりフオルテは今少し力を込められたきものなり、其奏者のユンケル氏なりしならんには……との某氏の言なり

五、ケーベル博士のピアノ、コンセルト

メルデルゾーン作曲は何とも申上樣なし、全く滿堂の聽衆、盡く醉はされたり、管絃樂亦、當日の最たり

終に臨み、ケーベル博士及び音樂學校諸氏の勞を多謝す實に、生等井蛙輩は其天地を擴張せられたるの感あり即ち茲にコンセルトの一端を教示せられたればなり、希くは今後益々此種の演奏を多くし、以て洋樂の眞髄を發輝せしめられんことを——妄評多罪

（『讀賣新聞』明治三十八年三月二十三日）

## ●音樂學校演奏會

近來樂界の風潮一變して管絃樂の流行を見るに至つた、音樂學校の演奏會また管絃を主とすることになつて、この春季の會は有繋に演奏曲目の上から慥かに伯林、倫敦あたりのに比べても劣らぬであらう程の立派なものづくめで其の演奏者も兎も角も吾樂界での腕こきを集めたから他の會では迚もこれ丈のものは聽かれぬ、然るにその出來は樂趣を發揮するに充分であつたとはいへぬ(十八日の會では)概して樂人の意氣が投合して居ない、ビーゼ氏作のラルレジエンヌに於ても既にケーベル博士の伴奏（ピアノ）とユンケル氏の指揮とは拍子が揃つて居ないところが屢々あり且つ各部の疵は甚だ多い、それからユンケル氏の指揮が始めは非常な力を持つて起るも半途から段々弛んで來る、これは演奏者がよく指揮者の思ひ通りにならぬから骨折損に了る、アダジエットになつてからは實にお麁末なものだ、橘の薫でも其次の我武惟揚でも聲が不足で管絃が勝つたゝめ折角の歌曲の趣味は皆無だ、橘の薫の方はまだよいが我武惟揚の方は殆んど聲音部は全滅だ、ことに管の吹樣が全体絃に對して餘り大き過ぎはせぬかと思はれた、故にバイオリンに於る旋律は屢々打消れ、譬へば咲き亂れた秋野の花を暴風の一時に仆し去るが如き感がある、惜むべきではないか、要するに管絃の配合が宜しからぬから生じた弊であらう、また練習の不充分なのにもよろう、曲は概して粗大に聞え纎巧なる旋律は一つも聞き取られぬ、恐らく組織の不完全なのであらう、絃器の人數及び伎倆が不足なものへ諸種の管樂器を無理に加へ其釣合を失して居るのと、曲の大物過ぎて演奏者の腕に不相應なものを選んだのと、何んでも立派に大きくとのみ考へたのは相集まつてかゝる粗笨なものが出來上つたとしか思へぬ、

柴田環子の獨唱、モツアルト作のカンツオネは曲柄といひ唱ひ振といひ誠に申分ない、これはたしかに當日中の大出來で、女史の伎倆はよく進歩した、かのオルフオイスの百合姫とは格段に聞かれた、

幸田幸子のバイオリン獨奏、エンゼン作ロマンツエは管絃伴奏でこれも立派な出來、女史の藝風は誠に温和な、高尚奏し方である、

ケーベル博士のピアノ、曲はメンデルソンのコンセルト、博士の靈妙なる伎倆は今更にいふまでもないがいつもの活氣は見えなかつた、管絃伴奏で多少破壞された氣味がある、

（『都新聞』明治三十八年三月二十四日）

## ●音樂學校演奏會評（上）

○一、合唱『かちどき』はフリューゲルが作曲にして其清新と莊重とは此曲の特調とも稱すべく殊にユンケル氏が指揮の深刻なる表情は、實に心地よく樂の妙趣は我を誘ひて、紫雲堂に降りて天使空に馳するを見るが如く、能く永遠の光をあこがるゝ情緒を滿足せしめたり、『永久に汚さゞらむ、清きこの名』といふあたり、殊に遠大の調ありてソプラノーが金鈴の聲は遙かに雲を分けて入り、バスがレガートに旋轉せしむるメロヂーは、萬人が渴仰の聲とも聞くを得べし〔、〕唯原曲は宗教音樂なるべきに歌詞の『かちどき』は不釣合千萬といふべし、如何に聞き上手の人といへども、此曲を以て此に附せし歌詞の意味に解するは困難なるべし、歌詞武島又次郎の作なり。

○『燕』はシューマンの作曲　オパス三十三の中にあるものにして、原歌は『我れ若し鳥ならんには』といふものなり、曲はエフ、モールにして、圓滑なる三拍子のメロヂー頗る流麗なり、『翅は輕氣に軒端近くとび交ふ』燕の見るが如くにして、そのテンポー緩急定らず、迫りては又靜かに、さながら『つがひの燕ひねもす睦び語れる』が如し、歌詞は鳥居忱氏の作、他の作に此して曲と相適へるは喜ぶべし。

○二、管絃合奏、ラルレジエンヌ、ビゼー作曲　花やかなる前彈曲はヴアイオリン、ヴイオラ、セロの絃樂及オーボー、ホルンを以て賑かにはじまりぬ、沃艶なる旋律は最も人心を動かし、花間を吹く春風の緩々徐々として、落花吹面轉た快きを覺えしむ、次で同じメロヂーは吹奏樂に遷りて、フルート、オボー、フアゴットを伴奏としてクラリネットが嘲喨たる響に繰り返へされ、漸く興深く、情迫りて、吹奏樂、絃樂共に强聲に同じ旋律を繰返し、トロンメルには重き眠れる胸を抓き亂すが如く、拍子とりて、聽衆の心漸く若やぎ、覺えず、起つて舞はんと欲せり、かくて前彈は過ぎて、ミニユエットに入る。

○ミニユエツトは三拍子の舞踏曲にして、今日に於ては必ずしも舞踏にあはするものにあらざるも、又その名殘を止めて、輕快、花前に麗人裳を揭げて跳舞するが如き轉々たるメロヂーは絃樂四部及ウツド・ワインドに依て奏せられ、次でワインド及ブラツスのやさしきクエツション、とストリングの物靜かなるアンサーとは、轉た佳人才子花下に物語るが如く忽ちにしてピアノ及フルートが急霰の如きアツコードの調べは、例へば狂風花を吹くが如く、痴雲明月を掩ふが如く、花下の宴興未だ壯んにして黄昏の恨みに逢へるが如し、風止んで落花池にあり、オーボーの快よきメロヂーと、ストリングのピチカード（ママ）とは僅かに美しきものゝ名殘止めて、コダに入り、輕快なる旋律は再びありし快樂の日を語るが如く、ワインドのクエツション、ストリングのアンサーいよ〳〵輕妙に滿場の喝采を以てミニユエツトは終りぬ。

○次でアダジエツトは絃樂四部合奏を以て奏せらる、佛國流の輕味ある旋律徐々として第一ヴアイオリンが微妙の音に出でつゝ、セロ、及びヴイオラが高まり來ては、その高く細く嚠朗たる右ヂーと相爭ひ此短かきムーブメントは終りぬ。

○次はカリロン、銅樂器、及、二番ヴアイオリン、ヴイオラ、セロのピチカードに依て先づ始め伴奏あらはれぬ、此單純なる調べは、チアーチの鐘とはいはるゝものにして、二つ鳴り、三つ鳴り、四つ鳴る頃よりして一番ヴアイオリンの心急かるゝが如き、然も頗る輕くして變拍子を有せるメロヂイ幾回となく繰り返へされつゝ何となく四邊蒼茫として遠く近く寺院の鐘聞ゆる頃、春日の郊行に倦みて町に近よる人の心急かるゝ樣にも似、又は老年已に傾きて、ありし昔の若かりし樂しき日の徒らに過ぎしを悔ゆるにも似て、旋律徒らに樂しからず、輕からず、ワインドの獨り他の樂器に殘りて心細う響くなど轉た心を痛ましむ、次で拍子は一變して八分の六拍子となり、ヴアイオリン一番、二番、ヴイオラの三部にして、新なるメロヂーは、此沈める時に一道の生命を與ふ、かくて又ウツド・ワインド、之を繰り返しつゝ、やがて又ピアノは日本旋律に酷似せる旋律を唱ひつゝ、その消えて、雲間に入ると見る頃、ブラツスは又チアーチの鐘を遠く〳〵之を聞かせつゝ、三拍子に戻りて再び第一のメロヂーに戻りて、ヴアイオリンの絃聲高く〳〵いよ〳〵高く、オーボーの閑靜なる響に反響して、他のブラツスと共にポザウネはその神聖なる特色の響をなしつゝ此曲を終りぬ、兩日共にその出來最も美事にして、殊に日曜日は大出來なりき、全演奏を通じて第一の出來ともいふを得べきか。（鐵腸）

（『日本』明治三十八年三月二十二日）

## ●音樂學校演奏會評（二）

三、ヴアイオリン、管絃伴奏、ローマンス、エンセン氏の作曲なり、演奏は教授幸田幸子孃にして殷艶最も人意を快くするものなりき、フアゴツト及セロのピチカードを伴奏としてクラリネツトの悠長たるメロヂーの高く奏せらるゝに次で搖々たるソローは始まり漸くにして妙境に入りては譎奇變幻實に其狀を具すべからず、然も蕩漾たる管絃の伴奏を超えて高く灑然として響く妙音は愈ゝ濃かにして心耳を洗ふの概あり〔、〕その忽ちにして施々横流の清駛するが如く、漸くにして淡々安流の如く、更に變じて漫々平流を爲すが如きメロヂーの參差斷續、應接の暇なきに至つては感興飛動して遏むる事能はざるなり伴奏は淙々として水の行くが如きに二絃合せ奏する獨奏の曲調漸く纖細に、纒綿の情緒語るが如く、恨むが如きに、ホルンのアンサー、低く濃かに男性的の音調は、ソローの女性的なる音調に美しきコントラストをなし、更に進んで沈々として管絃樂の聲なきに、獨奏とヴイオラの二部に入りては一層清怨の聲を爲して轉た音調以上の天籟を忍ばしむ、ヴイオラは助教授頼母木コマ子氏、その技又偲ぶべきものあり。

○次で曲節は激しきコントラストを起して風帆の迅駛するが如く美しきライブリー・ムーブメントに入り、管絃の伴奏は濤瀾の洶涌するが如く、獨奏は上下する舟帆にも似たり、忽ち聞ゆるホルンの二部は廻瀾を挽回して、清絶なる絃樂四部合奏に入りて、ホルン及オーボーが清麗なる伴奏に靜かに此曲の終りを告げぬ、その幸子孃が纖麗なる細軀、蹇然たる衣袂を翻して爲す妙音は滿場をして恍として樂堂にあるを忘れしむるものといふべし、されど去る紀元節の義捐音樂會にユンケル氏の演奏せし折といかに

ぞや、我れは寧ろ纎細なる同孃の音色よりも豪宕なるユンケル氏の音色に與するものなり（鐵腸）

（『日本』明治三十八年三月二十三日）

●音樂學校演奏會評（三）

○四、獨唱。カンツオネ、『フイガロの結婚』の一節。此『フイガロの結婚』はモザートの作曲なる四幕のコミツク・オペラにしてロツシニのオペラ、バルビエル・デイ・セヴイグリアの續きと云はるゝものなり。その主なる人々の如きも同じくビユーマーチヤイスの『フイガロスの機智』に依るものにして。アルマヴイヴア伯爵がロシナに結婚せし事、狡猾なる理髪師フイガロが伯爵に仕へたりし事、そしてロシナの侍女スサンナと結婚せんとしつゝある事等。皆悉く同一なるのみならず、その一篇の構想に於ても音樂に於ても尚幾分か類似する所ありといふ。然して此『フイガロの結婚』は一篇を通じて何の暴風も雲影もなく、唯美しき日の光りとその輝きのみなる雰囲氣を通じ嬉しげなる悦樂の詩趣を有するものにして、實にドンファンの以後に於けるモザートが最も鍾愛したる作物なり、此一篇に依てモザートが名聲の冠は更に幾層の光輝を增したるものにして、從來のオペラ作者オツフエンバハ及他の者のコミツク・オペラの多くに於ける最大缺點たる平凡野卑の域を超越し各部に於て常に多趣にして然も上品なる特性を有せるものなり

○此カンツオネは此オペラの第二幕第十一齣にして、アルマヴイヴア伯夫人ロシナが籠愛せる小姓ケルビノの唱ふものなりとす、アルマヴイヴア伯が放恣にして然も猜疑の性は、貞操從順なる夫人ロシナがその小姓ケルビノの寵遇するを訝かるを以て、夫人はその侍女スサンナと計り之を女裝せしめて室に置く、然るにケルビノは情に動き易き性にして夫人に愛着せりき。

○此カンツオネは卽ち此ケルビノの夫人に對する戀情を唱へるものにして、ピアノの伴奏の濃艶なるメロヂーは、ケルビノが手にして彈ぜるギターの音なり。之に和して喃々語るが如く、怨ずるが如き獨唱はケルビノの心情を移してあまりなしといふべきか。その溶漾紆餘として曲調の屈折頗るやさしきに、柴田孃の唱ひまはし更に一層の婉艶を增し、轉たその情の切なるを覺えしむ、殊に後半再び同一メロヂーの顯はれしあたり、濃艶を極めたりといふべし、されども其生硬なる聲音と澄ましたる表情とは感興の一半を削り終りぬ。若し之に豊かなる味ある聲音と純潔なる感情的態度及頭腦を與へたらむには、眞に感嘆に値するものといふべきも、このまゝにしては尚遠しといふべきか。冷靜なる頭腦、小賢しき思想は到底音樂家の資料たるべきものにあらざるなり。

（『日本』明治三十八年三月二十四日）

●音樂學校演奏會評（四）

○五、ピアノ、管絃伴奏、コンセルト。メンデルソーンが第一コンセルトにして、快活なる管絃の伴奏を以て始めらる、ブラツスが花やかにストリングを拔けて響かす快き音に連れて奔馳するメロヂーは、爛然として人目を眩ます花にも似て、メンデルソーンが特殊の流韻はここにも認め得べし。その忽ちにして一轉、緩々として唱ふが如き單純なるメロヂーの獨り伴奏を超越して去來する處、恰も胡蝶の片々として唱ふが如し。やがて、第二ムーブメントに入りて緩調となり、その美しきメロヂーと輕妙なる樂趣とは能く人を醉はしめ、忽ち變じて最急調を以てエー・モールに移る、オーケストラは更に華美にして愉快なる新旋律を興して之を獨奏に傳へ、獨奏は更に之をオーボーに讓りて最終のムーブメントに入る。此演奏は日曜日の方は相當の出來なりしも土曜日には、タクトと獨奏と合一せず、爲にオーケストラも不揃の個所ありしは惜かりし。

○ケーベル氏の獨奏は兩日ともに申分なかりし殊にその音色の如きも飄韻眞に掬すべきものありて到底之を他の樂家に求むべからざるものなり。その一種の飄韻は崇嚴を意味するといはんか、將た飄逸を含むといはんか、氏をして演ぜしむべきはビートベン、バハの莊嚴なるもの、ハイドン、ヘンデルが莊重なるものにして、メンデルソーン以下の輕妙なるものは全く氏の頭腦感情及びその音色の飄韻ある事とは相突擊して遂にその技を振ふの所にあらざるべきなり。

○六、管絃合奏及合唱、橘の薫、第一、『櫻井の驛』の窈然たる自ら瞑色四合して悲啾の氣肌を襲ふが如し『漏れや聞きけむ猛き兵士』とアルトの唱ひ出すあたり殊に暗澹として咽ぶが如し、第二、『菊水の譽れ』は第一の幽婉なる曲節に對して頗る豪莊なるものにして、此ケルビニーのレクエムが幽艶の譽れを恣にする中に於いて此一節と、サンクタスの一節とは又豪莊を以て鳴るものなり。殊にその第一ムーブメントは最も妙を極めたるものにして覺えず肉動き骨鳴るを覺しむ、歌詞もその原曲の意味との調和に於てはいふ所なきにあらざるも、此又一種のレクエムとしても見るを得べく、殊にその曲節との調和全くなきにあらず、成効したるものとして數ふべきか。されどもその第二以下の歌詞に至っては未だ首肯する能はざるものあり。

○此演奏は合唱を主とするものにして管絃は伴奏の性質を帶ぶるものなりとす、その合唱に就ては、同校の名物として多年の研鑽を經たるものなれば申分なしと云べきか、唯望しきは尚多くの合唱の人數にして、此まゝにしては尚少なきをかこたしむるものなり。

○管絃合奏及合唱、我武惟揚、原曲はワクネルのカイザー・マーチにして、此カイゼル・マーチは普佛戰爭凱旋の折ワクネル作曲せしものにして、ワクネルの傑作として世に迎へらる。その雄大なる樂趣は古來未だ曾て想像せられし事なきほどのものにして、單に優美をのみ望みし古來の樂家の作曲に對してその古慣を破りて豫期せぬデース、コードの破るゝが如き響きに莊大の想を乘せて一世の樂風を風靡したる、ニューロマンテイシズムの樂趣は名殘なく顯はされて豪宕限りなしといふべきか。殊に此演奏にはブラツスの數甚だ多かりし爲、ストリングの辛うじて聞かれ得るのみ、そのコーラスの如きは所によりては全く聞く事を得ざりき、元來此の合唱は聽衆がオーケストラの興に乘じて唱ふ爲に作られしものなり。此合唱が單音なるは蓋し此用意に向っての爲ならんか。演奏兩日とも申分なく、殊に日曜日は美事なりき、唯だ此大合奏にしてはそのホール狹くして爲にやゝもすれば雜然の響を爲すは頗る惜しかりし。その歌詞我武惟揚は今回の戰勝を唱へるものなるもたゞ無意味に近き文字を并べしといふに過ぎざるは惜しむべし。戰勝そのものを叙說せんとするが如きは詩としては無用の事に屬す。たゞ國民の歡喜の情緒を寫さば以って足れるにあらずや。『橘の薫』と共に此の歌詞の作者は鳥居忱氏なり（完）（鐵腸〔末広重恭〕）

（『日本』明治三十八年三月二十五日）

## 東京音樂學校春季音樂會概評

つゆまろ

待れつる同校春季の音樂會は去る三月十八十九の兩日、例の如く上野の樂堂に開かれたのである。前の日は少し曇ったが幸に雨とはならず、十九日は稀なる晴天で、さらでだに麗な春の日、長閑けき日光は葡萄色のカーテンを透して、滿堂は紅白の人の波、立錐の地もなきほどで有った。予は今兩日を參酌して次に概評を試みて見ようと思ふ。

㈠、合唱。（甲）かちどき、（乙）燕。甲のかちどきは去歲秋季音樂會に矢張り同校に於て演奏せられたもので、フリューゲン作曲、武島羽衣氏の作歌である。土曜（十八日）の方は大變聞き劣りがしたが日曜は可なりの出來である。曲は何時聽ても嚴肅の氣に撲るゝが、歌はあまりに生硬で且つ聲調合一の點に於て頗る慊らぬ感がある。又歌詞の內容も余りに單純では無いか。（乙）の燕はシュウマンの作曲、ヴエン・イヒ・アイン・フェグライン・ヴェール、即ち『若しも我れ鳥にありせば—』と云ふ意味の戀歌である。作歌は鳥居忱氏、燕とは多少原曲にあやかったのでもあらふが、原歌とは全く違たものである。然れども一体の歌詞の工合が能く曲意と調和してゐるので、先づ比較的成功したものと云て宜しい。演奏も可なりの出來、然れども土曜などは隨分如何はしい處も無いのでは無かった。歌詞の明瞭に聽えなかったのは遺憾であった。多分練習が不十分で在たからであらふ。曲はどこまでもシュウマン張り、實に輕妙にしかも瑰麗。濃艶で無くて寧ろ淡泊なのは氏の特長である。深遠で無い代り、宏大で無い代り、一種他の模す可らざる瀟洒たる俳趣を含で居るのは實に氏獨特の點であるであらふ。

㈡、管絃合奏。ラルレジエン。佛のジョルジイ・ビゼー氏の手に成るもので、實はドウデイ氏の三幕戯曲に付して作曲せしものである。此の戯曲は日本などでは誰も紹介したものが無いが、近代の産物としては中々有名なもので主人公を詩人にとり、其一生の變化を書いたものである。部分は四つよりなり、第一プレリュウデ、第二ミニュエット、第三アダジエット、第四カリロンである。内第一第三は四拍子、第二第四は三拍子である。始め單純なるしかも力ある單音に出でゝ、漸次交響樂の本体を顯はし和聲の進行極めて錯雜す。想ふに詩人の此の世に生るゝや、もとこれ多感の士、當るものとして渠が靈懐に觸れざるものなく、青春の美はしき血は終に渠を驅りて人世の更に美はしきものに觸れしめんとす。然れども世には終に渠の覓むるが如きものは非ざりき。四顧茫々、綠樹蔭したたらんばかりの景色は何地へやら。渠今茫然として懐疑てふ關門の前に佇立するに似たらずや。是れ第一プレリュウデに顯はるゝ音樂の内容である。而して第二のミニュエットに移る、ミニュエットは知れるが如く、輕快なる拍子なり。もとは舞踏の伴奏に用ゐられしものなるが、後此の形式大に發達し今では獨立して立派なる一の樂式と成て居るのである。故に此の種の形式に含まれてる内容は常に愉樂、快恬、樂天、凡てプレジュアの分子である、今回の如きも始めは極めて輕き快闊な旋律、そゞろに天女の舞踏をも想像せしむるので、つまり生々した歡喜に滿た血液の循環してるのを思ひ出すのである、しかも輕妙純潔と云ふのが全体の生命である。故に第一の曲調とは丸で違た曲風なので有る。想ふ可し、懐疑と煩悶とに懊悩して悶々の情やるに處なき若き詩人は、今幽かに一點の曙光を認めしことを。即ち美とは幻影―美くしきものとは己れが胸に輝く現の影なりき、渠は外に覓むるの愚なるを覺たのである。而して渠は内に覓むるの人と成たのである。今や渠の眼界は頓に廣くなりぬ、然り天には鳥謠ひ地には花咲く、春來りて霞を生じ、秋來りて月光の明朗なるを望視するに至た、今は渠前の小なる「我」を顧みて嫣然として微笑するに至たのである、渠は天に歌ひ地に謝し、友を愛し我を愛し、『自我』なる一小天地に立脚して、恣ままに歡樂の人と成た。似たらずや第二の音樂の這箇詩人の境遇に！

第三はアダジエット絃樂四部の合奏である。一体は弱音器を用ゐて演奏するべきだが今回は用ゐぬ様で有た。是は又四拍子である、極めて落付た、沈欝な調である、タイムも急に遲くアダヂオの調となるので、第二の花やかな華麗なる風趣は攸ち消えて、極めて悲愁の調と化したのである。人世の歡樂は決してしかく永續すべきものではない。歡樂は譬へば朝の露の如し、地に零れて始めて如何に其儚きかを知るべし。詩人の胸に宿る「詩の影」も亦如斯し微妙きものは常に果敢なく詩人の幻想壞れては猶一層人の味ひ得ぬ悲痛の針に抉らるゝのである。昨日の歡樂、昨日の希望、美くしきもの、尊嚴なるもの、今日は早や消えて、顧眄すれば何事ぞ身は獨り際涯しらぬ砂漠の地に伏す。似たらずや第三の調の是等失望の若き詩人の想に！

第四はカリロンである。是は又三拍子アレグレットに歸るので、曲調一變、大に尊嚴なる調となるのである。力に富める管樂器の音、嚴肅なる低音絃器の進行、然れども猶其内フリュート、ギオリンの輕妙なる風趣を混じて、寧ろ慰安と信仰とに充ちたる和絃の進行である。聽かずや其内に籠れる篤き厚き慈悲に充ちたる至聖の福音をしさなり惱めるものは來れと―偉大なる御手あげ給ひて招き給ふを聽かずや。又聽け、年若く疲れたるもの、形容稍衰へ、紅漲るべき雙頰はいぢらしくも肉落ちくぼみ、手には一卷の羊皮にて表裝せし書を手にし、恭しく至聖の御座に平伏して、『然り我の覓むるものは信仰なりき』と云ふ聲をし、惱める詩人は終に信仰もて救はれぬ、信仰は能く我を知り、人を知り、天を知り、至聖を知るに至るのである。而して渠は再び光明ある渠の詩に生活することが出來たのである。似たらずや第四の音樂の是等信仰に依りて新しき光明を認めたる詩人の生涯に！

是にてラルレジエンを了るのであるが、演奏も一体に能く出來た、殊にミニュエットの如きは珍らしき出來である土曜よりは日曜の方一層に奇麗であつた。

㈢、ギオリン獨奏（管絃伴奏）。曲はエンセンのオパアス十五、ア・モールのロマンツである奏者は幸田幸子孃、エンセン氏は十九世期前半に於

ける新ロマンチシズムに屬する有名なる作曲家で、ギオリンに向ての作曲は殊に多い、此のア・モールのロマンツは其内有名なるものゝ一である、しかも難解の故を以て名高いので、中々一通りでは完全に演奏することが六つかしい想な、予は二日とも熱心に聽た、遺に例に依りてギオリンは甘いと思た、又泣き度いほど沈痛な思想の込み上げて來る場合もある、假令ば、始めのクラリネットが出て、直ちにオーボーに移り其の次に出で來るギオリンのモールのコルドの如きは、全く泣くほど悲痛の感に撲れる、又中程、伴奏は全く止んでギオリンのみとなり、其内ビオラの力ある音と調和する所の如き、仄かに其俤ば忍ばれるが、全曲の上を統一した全曲の生命、形式等はどうもわからぬ。尤もロマンツなる形式は一番に要領を得ないもので殊に作者はロマンチシズムに屬して居るから猶わからなくなる。幸子孃の演奏も能くは奏せられたが、同孃の得意アパショナタ等に比しては遙に聽き劣りがせられた、一体にあの様な神秘的な曲よりは寧ろ感情的な熱情的なものが一層孃に適するではあるまい乎（アパショナタのことは音樂新報一ノ八に詳しく評せり）從て管絃伴奏の方も皆なわからな相な、覺束な相な顏して演奏せられた様であつたが、要するに予の了解に苦しんだのも啻に曲意が朦朧なばかりで無く、矢張り十分消化せられざる演奏を聽されたのも一原因を成してるではあるまいか。

㈣、獨唱、唱歌者、柴田環孃。曲はモツアルトのデ・ホホツアイト・デス・フイガロ、即ち『フイガロの結婚』なるオペラの第一幕の十一齣にある、カンツォネてふ戀歌である。カンツォネは音樂上一の形式で、モザアトは特に此の形式に秀でた所がある。今回のは、アンダンテ・コン・モト、Bドウアのものである。フィガロなるオペラはコミッカルに屬するもので、モザアト氏の傑作の一である。此のカンツォネは即ち月明き夜戀人を思ふの情に堪えず、風靜なる窓の戸を排し滿身に月光を浴びて、靜にギタアを伴奏に歌ひ出す歌の一節を描いたものである。モツァルトの曲は人も知る如く一体に濃艶な、蜜を口にする如き風趣を具へてるものが多いので、其流麗なことと、攸ちにして人を醉はしむるが如き力强き美趣とは其獨特の生命である、此の人を魔醉せしむるが如き靈妙なる力は、到底他の如何なる美術に於ても見ることが出來ぬ、如何なる詩でも繪畫でも到底對比すべきものは無い、恰も―よく話しで聞くが―精練せられたる阿片の如きものででもあらうか、一度渠の洋々たる樂に醉はされては、其儘に永遠覺めず、其甘露の如き大氣を呼吸して居たき心地になるのである。此のカンツォネも其の如く、先づ聽くものをして恍惚、愛戀の渦中に彷徨せしむるのである。演奏も可なりの出來、殊に中程、情迫りてスピイキングになる處などは大によし。猶怠りなく一層研究の上益々上達せられんことを望む。伴奏はユンケル氏なりしが、今少し完全に彈じてほしきものなり、兎に角獨唱などは半ば伴奏によるものなれば亂暴に彈ぜられてはチト閉口するものである。矢張り伴奏でも一通りは練習して置いて欲しいと思ふ、あの日はクエーベル博士も、ハイドリヒ氏も席にあることなれば、共等の士に一任しては如何のものなりしか。

㈤、ピアノ獨彈（管絃伴奏）。奏者クエーベル博士。曲はメンデルスゾンのコンセルト、オパァス二十五、Gモオレ（一、八三五作曲）のものである、曲はアンダンテとプレストの二部分よりなり中々の大曲である。コンセルトは器樂の上にては最も發達せし形式の一で、メンデルスゾンには猶ほ此の種の作曲が多い。予の此曲を聽て一番に感じたのは、其極めてオペラミユウジクに近きことである。何故に氏は斯く迄に劇樂的才能あるにも關はらず、一のオペラをも遺さなんだであらふか、殆んど怪訝に堪えんのである、乞ふ予をして少しく其内容的解剖を許さしめよ。

始めの部分はアンダンテではあるが極めてテンポが早い、先づ突如としてオルケストラの進行が始まり、續いて恰も急霰の地に下るが如く、或は又疾風の烈々として曠野を吹くが如くピアノの獨彈が始まる、此處に管絃樂の音とピアノの强音と合して、すさまじき婕惨の感を起さしむるのである。恰も是れ名も知らぬ人の國。嵐は限なき海上より吹き來りて、野も山も果しなく暮れ、人の宿りは何地ぞ、聞ゆるものは怒濤と狂嵐！獨り飄々として彼の地の陸を遁れ出でしは、抑も何日の夕なりけん、不幸にも途中風加はり、乘りし舟は昨日の夕暮に碎れ、辛くも一枚の板子にとり付きて、暫く波に漂ひしが其後は知らず、われかの心に夢さめ見れば、今われ

は此の見も知らぬ荒磯邊に立てり。人も無く家も無く！げに想へば愚なりけるよ、戀しき人は唯此の濱出でゝ西の方とは聞けど、もとより何れの國なるやを知らず、女心の淺墓にも行かば尋ねられぬことやあると、ひとり守衛の目を竊み戀しき父の城を舍て、私かに海に出でゝ、唯風の吹くに任せて舟をやりしことのわれながらさてもおぞましの業なりしよ、さるにても戀しき人は何地にましますぞ、若しもや、この荒磯は其の戀しき人の御國にはあらざるか。嵐は依然として吹けり、されども彼女の目には生々しき望の光顯はれぬ。始めの音樂の光景は、恰も此の少女の行末さだめず徨へるに似たらずや、乞ふ此の次に來たるべき音樂を聽け。

管絃伴奏は今や漸く靜まりて、ピアノは狂嵐の如き響をひそめ、恰も少女が追想の迷にふくる如く、又は望なき戀を訴ふるにも似て、怨語切々、聽くものをして腸を斷たしむるでは無いか。其の悲しむが如き高音の調べ、訴ふが如き低音の音此の時伴奏は恰もなでみつゝある怒濤のさまを序するものゝ如く、靜に遠く響くを聽くであらふ、彼女は今、少しく和める海を仰ぎ、すさまじかりし嵐のゆくゑを思て、獨り岩に座しぬ。人を戀ふ時の人の心は、戀しさの情の外は、何物をも容るゝの余地なし。彼の女は今恐怖の情の稍々去ると同時に、人戀しき情は堤切れし流の如く彼の胸に集まれり。聽かずや唇をもる彼女の戀の歌を！

ピアノは今狂せんばかりの熱情こもれる音となりぬ。樂士の頰には若き若き血潮は上れり、感に震ふ唇よ！輕ふうつむく目の色よ！右脚には靜にペダルを踏みて十指は語るが如く鍵盤に觸るゝのである。ピアノの高音部は恰もソプラノの獨唱を聽く如く、低音部は恰も是に附されたる伴奏の如くに聽ゆる、一々明かに、しかも感に充ちたる音、到底われはピアノより出る音では無いと思った、低音のよく高音に階和する如きは何等の妙手ぞ（われは此の音を形容し出し能はざるを悲しむ）。曲調全くのアンダンテとなりて、伴奏此處に絶え、此の歌終局に近かんとして、今現はるゝトレルの音を聽かずや、始は遲く漸次速さをまして、嗚呼清麗銀鈴を振る如き其音！此の時默せし管絃伴奏再び靜に起り洋々として響く、トレルの余韻は遠く此の伴奏に和して消え去るのである。戀の大波胸にあふれて、やらんに處なく終に少女の聲に表はれし想の至情に是や比すべき。われは我身の溶けもはてゝトレルの余韻の其と共に海原深くも沈みゆき度き心地せり。斯くしてピアノも伴奏も漸次靜平に歸し第一のアンダンテを終るのである。（われは愁然たる少女の稍々の曙光の色を帶び來りし海上を眺め情然として岩に座せるを思ふ）。

夜は明けたり、深き恐れより夜は明けたり。聽け嚠喨と響く喇叭の音、恰も東天一抹の雲を排して、旭光の第一線の現はれしにも似て亮々と響き渡る喇叭の響。少女は岸に下りぬ、夜來の雲は殘りなく拂はれて、漾々として堪えたる浪は、旭光を受けてキラ〳〵と光る、海鳥は遠く近く飛びて、霞うすく閉ぢ罩めたり。夜來の嵐は何地ぞ、今はあとだに無し、天も地も歡喜の聲に滿ちて、岸うつ波も青海波、實に自然は偉大なる哉。少女も今は稍々安かり、憂はしの胸にも有繋嬉しさの情あふれて。そゞろにも岸をさまよひぬ。此の時いづことは無く漁師の謠の耳に入り來ぬ。乞ふ此の時のピアノを聽け。メロデイは輕く〳〵樂しさ充ちたる音して素朴簡古なる調を成すに非ずや、（5・3 2・1 | 3 2 1 6 5 | ）。是れ抑も漁師の口より出る謠にあらずして何ぞ。少女はいそ〳〵として聲する方に行きぬ。見れば十人ばかりの漁師、美くしき小舟に艫を押して、靜に朝の漁にと漕いであり、少女は恐るゝ色もなく人なつかしさに近より見れば……驚ろけり、後への方に乘れる氣高き一人はそも、尋ぬる人の其れなりけり、少女はわれにも非ず聲高く『舵とる君、しばし其舟とゝめて』と、乘りし人は一整に驚ろきてこちら見ぬ＝戀しき人もおなしく＝乘りける人もなどてかわすれん、始は怪しみ次に疑ひ、終にかれは舟より飛び下りて岸を目掛けて泳き出しぬ。少女の目は燃ゆる如く、近づく人の顏を睽めつ、此の間數秒！見ずや神のみ情に、今觸るゝ接吻！兩人は手に手をとりて漁師の近づくを待てり、總て漁師は短き話に兩人の間を諒しぬ。見よ東に今煌々と輝き渡れる旭日の光、海は朗かになぎて、深紫に染めたる水は限りなく湛えたり、戀の女神は今微笑して兩人の間に立てり、總て此の群より起る讃美の歌を聽け、永遠に二人は惠み深き戀の御園に長らふべく、あゝ此の時よ！ピアノの音は嬉しさの情に滿ち滿ち、伴奏は猶も遽しく是

を助け、讃美、歡喜の聲は堂をゆすりて響けり。是にて全くプレストの部分を了り全曲を終えたのである。此の曲□唯一のコンセルトではあるが、予は實に完全した一のオペラを見るの感がある。一々の曲律の間には瞭然と其等の劇的所作が伴ふてる様で、予には舞臺の配景までが歴然として眼睫に迫るの感がするのである。予は實に今回のクエーベル氏のピアノは感服して聽た、其アンダンテの所に於て、プレストの點に於て、特にトレルの如きは何たる美くしさぞ、フルートでさへあんな奇麗な音は到底出でまいと思た、予は今回の博士の音樂を聽て、其大なる藝術に向て、尊敬—否や寧ろ多大の畏崇を感じたのである。又今回の曲の如きは最も能く博士に適して居ると思ふ。管絃の伴奏も大によし、當日を通じて第一の出來である。此のピアノソロは實に當日の白眉である。否な近頃の音樂會に於ては、是に越えた演奏は無かつた。

(六)、合唱及管絃合奏。作曲はケルビニイ氏、Cモオルのレクエム（一八一〇作曲）である。此の曲は屢々「橘の薫」と云ふ題目のもとに同校に於て奏せられたものである、今回も同前、「橘の薫」の歌詞にて歌はれた様である。元來レクエムの形式は九或は十の部分よりなれるが多く、然れども是は僅に七つの部分より成立して居る、今回の演奏は其の一と三とであるケルビニイ氏のレクエムは是の外今一つ有名のものがある（一、八三五出版。男聲のみにて歌ふもの）此の外尚ほレクエムとして有名なものはモツアルトの晩年（公園のベンチに記譜せりと傳へらるゝもの）の作、又近代のものではブラハム〔ブラームス〕氏のもの等である。演奏は無難の出來、土曜より日曜の方よかりき。歌詞も比較的明瞭で在た。

(七)、管絃合奏及合唱、曲はワグネル氏のアレグロ・マイストスソ、Bドウアのカイゼル・マアチである。此のマアチは其大なることに於て世界一だと云はれて居る。曾て伯林の樂堂で奏せられた時は四百人の管絃樂人と六百人の合唱隊とより組織せられた相である、即ち合計して一千人の人員を要したわけである。若し完全に演奏するとすれば此の位の人員は是非共要するとのことである。今回の演奏人員は總計彼れこれ百四五十人もあつたであらふか、其れにしても規定の人員に比しては十分の一ほどしか居らぬ、それでもあの奏樂堂ではチト囂し過る様で在た、あの様な大曲はどうしてもモツト大きな樂堂で聽かなければ面白く無い、東洋無双とかと云てる樂堂がこう云ふわけだから情無いではないか、あの樂堂に千人も樂人を入れたら、其れこそ大變、お客さんは天井へでも上って居なければならんだらふ。どうか一日も早く改築してほしいものだ。露西亞などは戰ではまけるが、流石は大國去年も一つ大きな樂堂を露京に造た相だ。我國でも早速其様な運にし度きものである。

作歌は鳥居忱氏「我武惟揚」例に依りてキワモノ、嗚呼万歳てな口調である、歌は札張り聽えなかつた。演奏は余り上出來とは云はれぬが、土曜の方は日曜に比してよし。曲趣も大きいと云ふのみで、内容等は同氏のタンホイゼル・マアチなどよりは數等趣味に乏しい。然しながら即興的國民の音樂はどこか別である。實に威力に富だ、宏大なものでは無いか、其音域の廣いこと樂器の多様なる、有繋は大家の作曲に背か無い、今一層の熟練を經て予は再び此の宏大なる音樂に接し度と思ふのである。（完）

（『音樂新報』第二巻第二号、明治三十八年四月、三〇～三三頁）

## ◉音樂學校春季演奏會

三月十八日十九日は音樂學校本年の春季演奏會の當日なり。共に晴天にして温氣身に適し暑からず寒からず、音樂會としては理想の日なりき。

會場は例に依て奏樂堂、狹しとは云へ千人を容れ得べく、完全とは云ふ能はざれど、是に近しとは云ひ得べし。曲目の數少なけれど、各有名なる大作なりしは、さすがに本校の技藝發表に價するものと思はれぬ。いできし儘をかゝなむ

最初の合唱はフリユーゲルの宗教歌にしてかちどきてふ歌詞を配せられたり。其配詞の適否はともかく、最も巧妙に謠はれしが、惜むべし女聲に曖昧なる聲の聞えて多少感興を殺ぎぬ却て「燕」は誠によく聽えぬ。原曲はシユウマンのOP 33にして「我若し鳥ならんには」との題により作曲せしものなるが直譯ならで曲詞相適へりしは愛でたきことなり。次は管絃合奏のラルレジエンヌとて佛國近代の名家ビゼエの作なり此ラルレジエンヌ

は、アルホンスダウデといふ人の三幕の戯曲ラルレジエンヌに附せし曲にして、曲の形式よりいへば、オーケストラに向つてのシュイトなりシュイトとは十六世紀の末より十八世紀の始めの間に於て歐洲各國に舞踏の流行せし折に根原せしものにして、その樂の特色は各國民の種々なるダンス、ミユジツクを含む事及び種々の拍子の錯雜して奏せらるゝ事なりしが漸次進んで單に舞踏にあはするのみならず、それに藝術的の配合等を加味し來りて以て今日になれるものなり殊にプレリエフドの添加せられたる如きはその發達を促したるものなりとす、故に常に此シュイトは數部分に分れたるものにて多くは四部に分れたるものなり、即ち今日に於けるシュイトの形式としては四部を普通とせるものなり、同校得意の合奏カルメン（オペラ）の如きも此シュイトにして矢張り四部分より成立せるものなりとす。

○前奏は三音部の絃樂及びオボーとホルンを以て始まり、婉麗流暢なる旋律を繰返し、佛蘭西音樂の特徴とも云ふべき婉美の感興を殘して、ミニユットにうつる。輕快麗美なる舞踏調の中劇かに强聲の和絃によりて驚かされしが、再び元に歸りて、輕快なるコダに終りしさま、例えば雨後の明月。次には弦樂四部（オクルテット）を以て成る、アダジエットを經て、カリロンに入る。

銅器及第二提琴（バイオリン）以下の絃樂器の伴奏より起りて第一提琴の旋律を引き出すが如き組織なりき出來榮えは殆んど間然する處なかりき强て云へば銅樂器の音の出でがたき位のものなるべし。

次は管絃樂の伴奏を持てる幸田幸孃のバイオリンソロ也曲はロオマンス、紀元節の義捐音樂會にユンケル氏の獨奏せしものと全く同じ、作曲者はグスタヴ・エンセンにしてイ短調のものなりとす、ロオマンスは定まれる形式なし。詩に於けるローマンスに連れて勃興せしものなり。蕩漾たる管絃の□□を超えて高く灑然として響く妙音は、愈〻濃かにして聽衆□□軀は全身耳となりて傾聽しぬ。但今少し强聲（フォルテイ）なりせばと□□しは吾等の增長慢ならむか。

次は柴田孃の獨唱にしてモザアトの傑作カンツオネと□オペラ「フイガロ」ス・ホオヘツァイトの第一幕第十一齣に□□□人の窓下に立ちてギタを奏でゝ唱ふ戀歌なり。孃の演奏□□も婉麗美妙なりしが、音量は尙ほ不及の感あり。さて□□□疑はしきは、戀歌に對する音樂學校の解釋にして、國語□□ざらば、毫も妨げなしとせるにか。次はケエベル博士のピアノ獨奏にして、メンデルソンのコンセルト也。凡そコンセルトは管絃伴奏を有するを以つて通例とするものなるも今日まで未だ曾て管絃樂を以て伴奏せしものなく始めて耳にせしものなるが過不及の感ありしは吾耳の幼稚なる爲めならむ。

次は橘の薫の歌詞を有てる合唱、ケルビニイのレクイエム也。幾度となく聽きたる曲ながら。一向進歩を認め得ず。不釣合の管絃伴奏を附するより、渡邊校長時代の如く、風琴洋琴の伴奏にて聽かされし方、却て感興ありしと追想しぬ、いかに。最後は聲器合奏のカイゼルマルシユなり。ワグネルの大作にして、壯大無比の曲なり。當日は次の如き、樂器を以て編制せられたり。

絃樂器第一ヴアイオリン、六。第二ヴアイオリン、六。ヴオラ、三、セロ、三。バス、二。

管樂器フルート、三。オーボー、二。クラリネツト、二。トロンペツト、三。ホルン、二。ポザウネ、三。バステユバ、一。

鼓器其他ベツケン、一。ミリタイル・トロンメル、一。グロツス・トロンメル、一。パウケン、三、トライアングル、一。

而して、ホルンの代りに他のブラツスを以て奏し、フアゴットを省きてその音部をオルガンを以て奏すと云ふ當日の出來榮えは、管絃の比較的完全なりしに拘はらず、聲音樂の一向無意味に終りしは遺憾のことなり。

我武惟揚の歌詞は、言葉に於ては至極適切ならむも、如何にも歌謠困難の虞あるが如し。又如斯大音樂には强て歌詞を要せず。

到底聽取り得ざれば、寧ろ無言歌として、階名を以て謠ひたらむ方、一層の成功なりしならむと信ず。

さて今回の演奏會は、空前の大音樂會にして、恐らく先進の大都會に出すとも、少しも恥かしからざるものと信ず。

時は軍國多事に際し百般の文藝其門を鎖すとき特に此慶事あり。國民意

を強ふして可也。外には吾師の速捷あり、內には藝術の進運に向ふあり、誇らざらむと欲するも、能はず吾は熱誠を以て當局者の多功を稱す。

⊙當日　演奏者の役割及び氏名は

△第一バイオリン。幸田延子、幸田幸子、天野はつ子、中村こう子、鈴木保羅、前田襄子。

△第二バイオリン。多久寅、山井基清、吉澤重夫、西村甫也、鎗田倉之助、鳥居つな子。

△クラリネット。多忠龍、高津環。

△フリユウト。大村恕三郎、多、鈴木毅一。

△オボオ。芝、島田英雄。

△トロンペット。東儀俊龍、渡部康三、外山國彦。

△ビオラ。賴母木こま子、東儀哲三郎、永井漸。

△セロ。岡野貞一、三宅延齡、幸田修三。

△バス。薗廣虎、石野巍。

△トロンボロン。多忠基、多忠行、多久每。

△ホルン。薗十一郎、岡彥六郎。

△テインパニイ。東儀民四郎。

△（未詳）。多忠保、原田潤。

△トライアングル。久保哲。

△シンバル。成田藏巳。

△ピアノ。ケエベル。

△オルガン。ハイドリツヒ。

△テユウバ。豐時義。

⊙樂器の配列を揭ぐれば左の如し

第一バイオリン　同
第二バイオリン　同
第三バイオリン　同
第一バイオリン　同
第二バイオリン　同
第三バイオリン　同

（前）

指揮者　セロ　ヒロ　バス　木鼓　ピアノ
　　セロ　ヒロ　ヒラム　シンバル　ピアノ

（後）

第一バイオリン　同　トロムペット　ホルン
第二バイオリン　同　トロムペット　トロムボロン
第三バイオリン　同　トロムペット　テヨウバ
フリユウト　同　ホルン
クラリネット　同

（『音樂』樂友社、第七巻第六号、明治三十八年四月、三七～三九頁）

## 明治三十八年三月二十七日　甲種師範科卒業式

明治三十八年三月二十七日（月曜日）午後三時

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

第一部

一報告
一卒業證書授與
一校長告辭
一文部大臣祝辭
一卒業生總代謝辭

第二部

一箏　選科卒業生　山本富三郎
　四季の眺　教授　今井新太郎

一合唱　卒業生及生徒
　羽衣……（ハウプトマン作曲 鳥居忱作歌）

一ハーモニユーム獨奏　甲種師範科卒業生　青木シノ
　ミニュエット……ワグネル作曲

一ヴァイオリン獨奏　甲種師範科卒業生　西村甫也
　ソナタ……ウォールファール作曲

一ピアノ獨奏　甲種師範科卒業生　犬童信藏
　ソナタ……ハイドン作曲

一オルガン獨奏　甲種師範科卒業生　吉村リウ
　ファンタジー……フランク作曲

一合唱　卒業生及生徒
　愉快……（ハイドン作曲 旗野十一郎作歌）

●東京音樂學校卒業式（廿七日）　▲定刻より十五分前案内につれられて式場に這入ると、さすがに第二部の演奏を當込みに、ピシ〳〵積めかけて餘り廣くもない音樂堂のことであるから、殆ど一脚の椅子も明いて居るのはない程であつた▲やがて高嶺校長は久保田文相を導きて式場に入り、先づ一般の報告をしたその報告によると今回のが現行の新規則で養成した初回の甲種師範科卒業生だそうで、それが二十人と外に舊甲種師範科が三人選科四人の卒業生が出るわけであつて▲特に新甲種師範科に於ては、三年の課程で一般音樂の外國語漢文をも——或者は英語をも、師範學校高等女學校に於て教授し得るだけの學力が與へてあるそうだ▲僅か三ケ年の間に一と通りの外國音樂を修業するさへあるに、國語漢文の教師まで出來るとは所詮人間業とは思へない、こんな重寶な教師は雇う方では便利で結構だと見えて、「時局にも拘らず卒業生は各府縣よりの需要に應じきれない程だ」と校長は披露して居たが、實はこんな萬屋流の教師こそ所謂時局向きなのかも知れない▲さて校長の報告が濟むと、卒業生一同は校長に面して演奏臺の下に整列し、證書は一括してそれ〴〵の代表者に授與された▲此時つく〴〵僕は今の學校に卒業證書授與の方法が餘りに冷かに餘りに無趣味であることを感じたのである、是れは一般の學校に於ても矢張り一人一人に與ふることにして、其際には校長は一々握手し、其知己友人にして式に列して居る者は、式場の神聖を害せざる範圍内に於て、大に拍手し盛に花でもなげる樣な活々したことにしたい、今のやり方は餘り嚴肅に過ぎて、まるで法廷の宣告見た樣な心持がするのである▲かくて平和なるこゝ上野の森の音樂堂にも、あはれ戰爭風は吹き來り、時局千載一遇で持切つた校長の告辭が濟と、久保田文相は最も冷靜に三行半の祝辭——まさか學校を離緣するとの惡洒落でもあるまい——を讀上げ、續て卒業生總代謝辭を朗讀しそれで式は濟んだ▲直にそれから演奏に移つたのであるが、何れを聽いても惡い心持はしなかつた、生兵法は大疵の原、先づ餘興の方は御免を蒙るとして置かう、終りに臨み僕は國家より多大なる任務を期待されて居る卒業生諸氏の健康を祈るのである（一記者）

（『讀賣新聞』明治三十八年三月二十九日）

●卒業式の音樂會　東京音樂學校にては一昨二十七日午後三時甲種師範科の卒業式を擧行し、學年の報告に次で卒業證書の授與、校長の告辭、文部大臣の祝辭等の後二部に移りて卒業生が訣別の演奏五六あり、元より今回の卒業式は同校本科生の卒業にあらずして同校内に設けられある師範科の卒業式の事とて是を技術の上より品評するときは何等秀でたる價値あるにあらざるも、音樂教員としては現時の我國に於て優に勝れたるものなるべし▲一、箏、選科卒業生山本富三郎の演奏に係る、我國琴曲界の雄と

して名ある同校教授今井慶松氏の指導を受けたることゝて申分なし、曲は四季の眺、今井氏の三絃と共に誠に美事なりしも唯その謠聲の美しからざりしは惜しむべし▲合唱、羽衣、ハウプトマンの作曲にして、歌詞は鳥居忱氏、演奏は卒業生及師範科生徒一同なり。ソプラノー及アルトが鏘々たるメロヂーは松風の颯々たるにも似、バス及テナーが濤々たるメロヂーは怒濤の狂湧するにも似たり、否實に此原曲は波浪の淘々、漣波の唧々、松風の颯々たるを寫したる曲に外ならざるものなれば、その趣あると聞くは自然の事といふべし、唯ソプラノーの音量に申分あると、テナーの音色の汚濁なりしとは頗る美感を損ひたりき、コンダクターは卒業生田口氏、又た申分なしと云ふべきか、▲青木孃のハーモニユーム、西村氏のヴアイオリン、共に相應の出來なりしもハーモニユームの方は場ウラの爲と音量小さかりし爲に聞き劣りし、ヴアイオリンの方は作曲の平凡にして趣味の掬すべきもの少なかりし爲面白く聞かれざりき▲犬童氏のピヤノ、ハイドン作曲のソナタにして當日演奏中次のオルガン獨奏を措きては第一なりき、吉村孃のオルガン獨奏、曲はフランクのファンタジーにして、先日學友會に松本氏のハーモニユームにて演奏せしものと同一なり當日第一等の出來にして最も感興に價へしたり、▲合唱、愉快はハイドンの大傑作として有名なるオラトリオ・クリエーションの中第二部第十四齣の合唱にして、ゼ・ヘブン・アール・テルリングといふ一節なり、當日の演奏は之れ亦ソプラノーの音量の不足なるの恨みありき、男聲は例に比して甚だ好く結末に近き邊殊に面白く聞かれたりき、▲例によつて聽衆滿堂、雲の鬢、花の顏、樂の音と共に美し。

（『日本』明治三十八年三月二十九日）

## ●上野の卒業演奏會

假し其演奏は特有の伎を發揮したもので無くつても、兎に角日本に唯一の官立音樂學校が其卒業生を社會に紹介する爲めの演奏會は好樂者の聞逃すべからざるもの、一昨日午後三時から開かれた上野の音樂學校の卒業式及び式後の演奏會は、例に據て却々の盛會であつた。

卒業式は例に據て例の通り、久保田文相の祝辭は餘り呆氣なさ過ぎた、證書授與の總代も、謝辭も、優等賞品の受領も悉く一人で勤めたのは感心しない。

演奏の一番最初は箏であつた、演者は山本富三郎の琴に今井教授の三絃の伴奏、曲は「四季の眺」、是は拍子が頗る難しく、調子が又十度も變はる難曲中の難曲で今日餘り彈く人が無い、其を些の誤過なく彈いた伎倆に據ても斯道に於ける同校の教訓の頗る行届けるを知るに足る、由來同校の方針は一にも二にも西洋音樂で、箏曲の如きは眞の景物に過ぎない樣だが、何と云つても多數の人に歡迎される箏曲の如きは、更に一層の奬勵を要する事と思ふ、今井教授の三絃の鮮かさは今更云ふ迄も無い、次は合唱「羽衣」、指揮は同校生徒が勤めた。青木しの子のハーモニユーム獨奏は此器の目新しい丈人の感を牽いた、西村甫也氏のヴアヰオリン獨奏はウオルファルト氏のソナタ、幸田教授の伴奏まであつたが、惜しいかな初めから調子が整はなくつて聞苦しかつた〔、〕犬童信藏氏のピアノ獨奏ハイドン氏のソナタは先づ無難の出來と云つて宜しい、吉村りう子のオルガン獨奏はフランクのファンタジーであつたが、エキスプレツションもあり當日中の上出來であつたらう、最後はユンケル教授指揮の下に合唱「愉快」、愉快愉快と面白く唱はれて、何れも愉快に感じながら面白く樂堂を出たのは、夕鴉上野の森に塒を求むる頃であつた。（五線子）

（『中央新聞』明治三十八年三月二十九日）

## ▲音樂學校甲種師範科卒業式演奏

一、箏……選科卒業生　山本富三郎　生寄
聽きもらせり、
二、羽衣（合唱）　教授　今井新太郎

は隨分古くさきものなれども、何度聽いても、又誰が聞いても厭氣を生ぜざるは、其曲の婉麗にして其結構の複雜ならざるに基因すると雖も、一

は歌詞のよく適合して其意味亦誰人にも入り易きが爲なり、初めの女聲二部に次いで男聲二部までは無難なりしが、四部となるあたりは、どうやら不安心らしく思はれたり。

三、ハーモニユーム……卒業生　青木しの
　　ミニユエット　　ワグネル作曲

今少し拍子を速めたかりし、敢て難曲とは聽かれざりしも、奏者には荷が勝ちたり、

四、ヴアイオリン……卒業生　西村甫也
　　ソナタ　　ウオールファールト作曲

師範科卒業生にして是丈けヴアイオリンが彈けるには、余程の機智と勉強とに因らざる可らず、第一の曲は少し雜音の伴ふものありて、未た練習の足らざるには非ずやと思はれしが、第二の急速なる曲に至りては、音色も調ひ姿勢亦調ひて、ピアノの伴奏と旋律を互に應對するあたり、確かに其腕前は表はれたり、惟ふに氏は小心の人にして、第一曲の不出來は其臆病より來りしものならん

五、ピアノ……卒業生　犬童信藏
　　ソナタ　　ハイドン作曲

ペダルの使用法の未巧きを論ずるは酷なりと雖も、拍子を少し宛逐次に速むる傾きありしは遺憾なり、其奏法はよく奏者を紹介して、師範科らしき人たることを現はしぬ

六、オルガン……卒業生　吉村りう
　　フアンタジー　　フランク作曲

當日第一の聽き物にして隨分しつかりした奏き振り總体よりいふ時は、先づ無難なるべしと雖も、此曲を理解せるものとは如何にしても見る能はざりし、前きに祝捷音樂會に於て某氏、ハーモニユームにて同曲を演奏せり、感服の餘り其樂譜借覽の便もがなと切望せし程なりしが、之をオルガンにて奏するときは、大に結果の異なるものあり中間（曲の）に於て孃は無暗に拍子を長くし氣取る所ありしが却て重くなりて惡し、初めの所にて左指の活動するあたり、ゴマカシを以て瞭然たらざらしめしは遺憾なり音色に於てはオルガンの方人好きすべけれど、曲の意味を發揚するは、ハーモニユームにあり、且つハーモニユームの爲に成れる樂曲にして、前に之を演奏せるものあるに拘はらず、更に又之をオルガンに奏すべく聽許せる技術主任の樂才を疑ふ

七、愉快（合唱）

は有名なるハイドンのクリエーションに旗野氏の作歌せるもの、如何にも愉快に拜聽せり、獨唱の部は猶前年の如く一人〻なるを可とす、即ち其區々にして一致なき獨高音獨唱は大に其題號「愉快」に影響したればなり。

（『讀賣新聞』明治三十八年三月三十日）

◉甲種師範科卒業證書授與式　音樂演奏會

これは卒業證書の授與を眼目として、音樂演奏は其成蹟の披露に止まり、演奏者も主として、卒業生中より撰ぶものなればこれを、音樂演奏會として批評するが如きは、心なき業なりと信ず、殊に今回の如き師範科等に於ては、音樂者を以て理想とするにあらで、寧ろ善良なる教育家を以て目すべきなり。評する人にして、もしこゝに思ひ至らば、當日の成功は實に感歎を過ぎて、感謝の價ありしと云ふべきなり。

曲の第一は

◉箏に始まれり題目は　四季の眺。彈き手は山本氏とて十二三歳の男の兒ながら、六尺の男兒に舌捲かしたる腕前は、流石に今井師の寵弟とぞ思はせける。されど悠長、寧ろ呑氣なる箏歌とて、とかく終りの待たるゝ心地の起ると、無理に高調を絞りて圓滿ならぬ節々きこえぬ。聲音の美につきては、更に頓着なきが如きは、これ邦樂の缺點とは云へ、あはれこれなかりせばと思はせたり。代て出でしは

◉四部合唱　のハウプトマンの曲なり。鳥居師の作歌羽衣を配せり。師範科卒業生には、幾度となく聞きし曲なり。幾度きゝても拍子の缺點ありて、謠ひ出しのアヤフヤなるは免かれぬ曲なり。殊に次中音のイヤに耳立ちしは、何とか良案なきものにかと思ひぬ。但田口氏の指揮は相當以上の

出來なりき。代つて出でしは

⊙青木孃　のハアモニユウム獨奏なり。ワグネルの作程ありて、壯大なる曲なりし。孃の熟練なる輕き手指は、大成の望を見能ひし。アハレ今一と入のエキスプレツションもがなと思ひしが如何に?、次に出でたるは、珍らしくも師範科生の、

⊙ヴアイオリン　獨奏にて、ウオールフアールトのソナアタとは天晴れの大曲ならずや、但特殊の趣味を見出し得ざりしは遺憾なりし、其の音の劣り氣味ありしは、樂器の加減にや、二部となれる所の、如何にも曖昧に聞えしは、吾が僻耳か。何はともあれ西村氏は、同科出身空前のヰオリニストなりとの世評に價ひするは、疑ひなき事實なり。結構々々、代つて出でしは、詩文の趣味に富める。

⊙犬童氏　のピアノの獨奏なりしかば、如何にと注意しぬ。曲はハイドンのソナアタにして、熟練巧妙に彈き終へ玉ひき、眞に申分なし、但次に學び玉ふことは、音に色艶をつくる工風なり。好男兒それ勉めよ！新内に出でしは。

⊙吉村孃　のオルガン獨奏にして、是ぞ當日の獨奏中の聽きもの、立ち出で玉ふ有樣より、はや人の待受けを强めき。果してフランクのフアンタアジイは、遺憾なく形はれたりと受取られぬ。假令師の君の耳に、一指の過ちを見出し玉ひしとするも、其巧みなりしエキスプレツションは、殘りなく償却して、尙ほ餘りありと云ひつべきなり。終りは有名なる。

⊙ハイドン　の創造曲の合唱もて結ばれぬ混沌なる現世の創じめを謠へる、宏壯無比の曲にて、「愉快」てふ題目の下に、旗野師の配句あり、無論些の缺點なく、評せば賞贊の價溢れしならむ。されど忌憚なく云へば、三四年前の管絃伴奏ありし其上を追慕して禁じがたかりしは贅澤か。今一つは有名なるソリスト等の獨唱ながら、皆々曲譜に嚙りつきて、後生大事に拾ひ讀みして、ユンケル師の價値あるタクトを見むともせざりしは、練習不足の疑見えて、いさゝか滿足の度を薄すめき。要するに當日の演奏は悉く成功なり。曲目の數も適度にして、合唱隊の登壇退壇も混雜せずして、秩序整頓し居たりしは、演奏者の外に事務者の苦心も察せられぬ。

（『音樂』樂友社、第七巻第六号、明治三十八年四月、三七～四一頁）

## 明治三十八年四月三十日　箏演奏会

明治三十八年四月三十日午後二時開會

箏演奏會曲目

東京音樂學校

### 第一部

一　薄霞　角村倉愛子／中田民子／小熊豊子／金井鶴子

一　七段調　村田ミイ／奥山とし／長谷川代子／赤峰玉子／兒太芳子

一　羽衣曲　飯田富子／山本松三郎

一　櫻花譜　今井新太郎作曲　麻生富久／北川幸／萩原重／關ソノ八／飯田ヤ／山本松／今井富三郎

三味線

### 第二部

一　椿づくし　松島檢校調　關島ソ／小村ハ／古池スヤ／筆季子

一　新　晒　深草檢校調　（今井新太郎　河野富ヒデ郎）

一　嵯峨の秋　菊末調　（今井新太郎　山本富三郎　飯田生松　麻川ヒトミ　村山イ久蓮郎　奥野幸デ　河北）

**明治三十八年六月三日　試業演奏会**

●試業會　東京音樂學校にては本月三日午後同校に於て第十七回試業會を開き同校選科生徒の演奏數番ある由。

（『音樂新報』第二巻第四号、明治三十八年六月、四一頁）

**明治三十八年七月八日　卒業式**

明治三十八年七月八日（土曜日）午後三時

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

第一部

一　報告

一　卒業證書授與

一　校長告辭

一　文部大臣祝辭

一　卒業生總代謝辭

第二部

一　合唱

甲　早起……（ニコラウス、デシュース作曲　旗野十一郎作歌）

乙　常夏姫……（ヘンデル作曲　武島又次郎作歌）

一　ピアノ獨奏　器樂部卒業生　成田藏己

アムプロムチュ……シューベルト作曲

一　クラリネット獨奏　聲樂部卒業生　高津環

アヴエ、ヴエルム……モツアルト作曲

一　獨唱　聲樂部卒業生　外山國彦

エライジヤ……メンデルスゾーン作曲

一　オルガン獨奏　器樂部卒業生　古澤きみ

カンツォナ……ギルマン作曲

一　ヴアイオリン獨奏　器樂部卒業生　東儀哲三郎

フリユーリングスエルウアッヘン……バハ作曲

一　オーボー獨奏　聲樂部卒業生　島田英雄

ロマンツエ……メンデルスゾーン作曲

一　獨唱　聲樂部卒業生　小室千笑

カンツォナ……モツアルト作曲

一　ピアノ獨奏　器樂部卒業生　天野アイ

ソナタ……ベートーヴエン作曲

一　合唱

甲　稜威耀乎……（パレストリナ作曲　鳥居忱作歌）

III. Clarinet Solo:
Ave verum. .....*Mozart.*
*Mr. Takatsu.* (*Graduate.*)

IV. Baritone Solo from the Elijah .....*Mendelssohn.*
*Mr. Toyama.* (*Graduate.*)

V. Organ Solo:
Canzona in F mi.....*Guilmant.*
*Miss Furusawa.* (*Graduate.*)

VI. Violin Solo:
Frühlingserwachen.....*E. Bach.*
*Mr. Togi.* (*Graduate.*)

VII. Oboe Solo:
Romanze. .....*Mendelssohn.*
*Mr. Shimada.* (*Graduate.*)

VIII. Soprano Solo:
Canzona from the Figaro. .....*Mozart.*
*Miss Komuro.* (*Graduate.*)

IX. Piano Solo:
Sonata Pathetic in C mi. 1st. mov....*Beethoven.*
*Miss Amano.* (*Graduate.*)

X. Choruses:
*a.* Adoramus. .....*Palestrina.*
*b.* Heimweh. .....*E. Jork.*

●東京音樂學校卒業式演奏會　同校卒業式演奏會は一昨日午後三時開會式の如く卒業證書の授與あり續で校長の式辭文部大臣の祝辭卒業生總代の答辭あり午後四時愈よ演奏會に入りしが卒業生諸氏の曠れの場所として何れも喝采を博したる中に殊に目立ちし出來は聲樂部卒業生外山氏の獨唱メン

GRADUATION EXERCISES
of the
Tokyo Academy of Music,
UENO PARK.
*Saturday July 8th, Meiji 38, (1905).*
3. P.M.

PROGRAMME.

PART I.

I. Report.
II. Presentation of Diplomas.
III. Address to the Graduating Class by the Director.
IV. Address by His Excellency Mr. Kubota, Minister of State for Education.
V. Response by the Representative of the Graduating Class.

PART II.

I. Choruses:
*a.* Lobgesang. .....*Nicolaus Decius*(1524.)
*b.* Laszt mir die Klage. .....*Händel.*

II. Piano Solo:
Impromptu in E flat ma. .....*Schubert.*
*Mr. Narita.* (*Graduate.*)

歌曲作ク作ルヨ枕居ヨ鳥エ〜……乙征途の夢

デルソーンのエリジヤなりき之に次ぎては成田氏及び天野氏のピヤノ獨奏皆其手腕に感服したり殊に天野氏はベートーベンのソナタにして此大作を女性の氏にして斯く迄完全明瞭に彈奏されたる手腕は確かに人をして羨望に堪ざらしむるものあり又最後の合唱征途の夢は當日の合唱中第一の出來として聞かれたりき

（『毎日新聞』明治三十八年七月十日）

## ●音樂學校卒業式に臨んで

一昨日午後三時より開會せられ、報告、卒業証書授與、文部大臣代理の祝辭、卒業生總代謝辭等例の如くなりしが、校長代理富尾木氏の告辭中、音樂學校も洋樂のみならず日本の俗曲を教課目に加ふる必要あり、從つて經費を増加するに至らんことを望むとありしは、時勢の風潮を察すべし。此頃各所に能樂とか俗曲とか前代藝術の研究會の起り、通人的翫賞を離れ、審美的科學的に此れを研究して、其の長所短所を明瞭にせんとするは、將來新時代の音樂の勃興を催がす基礎ともなるべく、喜ぶべき現象なるが、音樂學校の如きは疾くよりこの點に意を致すべき筈なりし也。卒業生の演奏について最も感じたるは十三人の卒業生中八名も各獨奏獨唱をなしたることにて、同校の進歩の著るしきを稱するに足る。しかも概して出來のよく、諸氏の前途に多くの望を囑せしめたり。中にも小室千笑の獨唱は拔群とも云ふべく、外山國彦のも結構なりしが、只至低音の音量の稍々乏しかりしやう覺えたり。天野アイのピアノは音譜を辿れるのみとは思はれぬ程の味ありしは大手柄。古澤きみのオルガンも他と劣るとは覺えざりしが聽衆受の左程ならざりし。成田藏己のピアノ、東儀哲三郎のヴアイオリンもよく彈じこなしたり。高津環のクラリネツト、島田英雄のオーボーは聲樂部出身としては餘技に過ぎざるべし。（劍菱〔正宗白鳥〕）

（『讀賣新聞』明治三十八年七月十日）

## ●音樂學校卒業式音樂會評（上）

○一合唱　是非するほどの出來榮えにもあらず、たゞ無難なりといはゞ適評ならんか音量も近來は著しき増加を示し、表情法に就てもテクニツクに就ても頗る練熟の樣子ありしは喜ばしかりし。兩曲ともにハーモニーの妙を味ふべく素人向きはせざりしなるべし、歌詞甲の『早起』は旗野十一郎氏の作歌にして、乙の『常夏姫』は武島又次郎氏の作にかゝる、旗野氏の作は例に依りて自からその諧調、曲のリズムに適合して頗るきゝよかりき、武島氏の常夏姫亦大に曲のリズムに注意する所ありしか〔。〕例に似ず頗ぶるその結果よかりき、此上はたゞその取材を精選したらむにはその成功邇きに在りといふべきか。

○二ピアノ獨奏　イムプロムプテユー、シューベルト作曲、器樂部卒業生成田藏己氏、此イムプロムプテユーと稱する樂は嘗つて云へりし如く即興の樂にして、此形式の樂を作りしもの、シューベルト、シューマン、ショツパン等たゞ數名の樂人に止まりて他にあることなし、シューベルトはロマンチシズムの巨擘にして、その作曲の大部はバイロン、ゲーテ等の當代に於ける偉大なる詩想を享けて直ちに之れを音樂に譯せるものと稱するを得べく、その樂風殊にリリカルにして、聲音に向つての作曲に至りては殆んど詩文を味ふが如し。此イムプロムプテユーの如きも又頗る此種の風に富むを以て、之を前代の形式的にして且客觀的なる作曲の演奏に比するに、その難易決して同日の談にあらず、加之此曲の結構頗る纖細にして、然も運指の法又容易ならざるものあり、演奏者の苦心察するに餘りありといふべし、當日の演奏その第一段落に於て二三の誤謬、運指の至らざるを聞き得しも第二段落に入りては出來頗るよろしかりき、且つ表情に於ても決して不穩當なることなく、殊にその曲のゼネラル・アイデアを表はし得たりしは、頗る注意すべき點なりとす。氏はヘルマン、ハイドリツヒ氏に就てピアノを專攻したる人なり。

○三クラリネツト獨奏　アヴエ・ヴエルム　モツアルト曲、聲樂部卒業生高津環氏、曲はモツアルトの名曲にして合唱『此の御山』と同一のメロヂーなり、氏は聲樂を專攻せし人にして、クラリネツトはその餘暇オーケストラの爲に修めしもの、クラリネツトは吹奏樂器にして、管樂の合奏にありてはフルート、オーボー等と共に主なるメロヂーを吹奏するものなり、

此演奏可もなく不可もなし、元より専門に修めし技術にあらざれば、從つて他の專門に修めしものと相並べて評すべきにあらず。

○四獨奏、（バリトン）　エライジヤの一節〔、〕メンデルゾーン作曲、聲樂部卒業生、外山國彦、エライジヤはメンデルゾーン作曲のオラトリオにして、此一節はアリアなりとす、先きに卅五年の七月青木兒氏同一の曲を管絃伴奏を以て歌ひし事ありき、今又此れを聞くに及んで當年を想起し、前人を思ふこと深し、當時否今に至るまでも青木兒氏ほどの男聲はあらざりき、納所氏の若き折は知らざれど今は已に老いたり、然るに今茲に此新進を得、道の爲に賀すべき哉、元より當日の演奏より推すも卅五年時代の青木氏には勝るべくもあらねど、今の納所氏よりはましならんか。音量も特に多きにはあらねど相應にあり、音色の少しナマなるが氣障なれども尙修練せばこの上の進歩もあるべし。當日の演奏相應の出來なりしも表情に就ては尙言ふ所なしとせず。

○全体聲樂は器樂と異なりて個性的のものなれば、その表情の如きも一見頗る困難の如き感あるも、そのテツキストを味ひ、その緣由するレゼントを知るに於ては、反つて器樂に於るエキスプレツションよりも數段の易きものたらざるべからず、詩歌が最も高尙の藝術たるにも拘らず、最も多くの人に解せられ味はるゝと同時に、一面この解し易き藝術と伴はれる聲樂曲のゼネラル・アイデアを知るは、全く孤立せる器樂曲の如きものゝゼネラル・アイデアを解するよりは容易しと云ふを得べし。勿論演奏者が全く藝術的傾向を有せざること蓄音器に過ぎざるに於ては到底之を望むべからざるも苟も東洋唯一の音樂學校の演奏たる以上は、一段とエキスプレツションの事に心を傾けざるべからず、されども以上言ふ所は此演奏のみに就ていふにあらず、東洋樂界の指導たるべき東京音樂學校が憫むべき蓄音器を多く產出するを以て茲に機を捕へて言を弄するのみ、外山氏當日の演奏は久しく聞かざりし男聲の獨唱の事とて、たゞさへ俗受する聲樂の一層の喝采なりき。（てつ）

（『日本』明治三十八年七月十二日）

## ●音樂學校卒業式音樂會評（中）

○五、オルガン獨奏　カンツオナ・ギルマン作曲器樂部卒業生古澤きみ子孃、當日の演奏中に於ける白眉は聲樂に於て小室孃の獨唱、器樂に於て此オルガン獨奏なるべきか、然も聽衆の此演奏を迎ふるや頗る冷々淡々、ただ義理一遍の喝采を贈りしのみ、元よりオルガンの音色の鬱黑にして派手ならざるが故に一般に迎へられざる傾向あるは不得止次第なるも、此曲の如きは、此鬱黑なる音色を以てのみ表はさるべきアイデアを有するものにして、悽慘たる悲愁の情促々として人に迫るものあるを覺えしむ。蒼茫の感、陰鬱の情、恰も樂堂内の空氣は低く重く吾人の上に壓するが如く、四顧溟茫の間に在りて遙かに細く微かに聞ゆるはそも何の響ぞ、湖畔をかへる牧童が無心の笛か、溟々に迷へる行人の悲叫か。蒼茫の荒野、荒れに荒れて暮靄深く四邊を鎖すとき憂愁憂思相抱いて沈吟す、野廣うして限界なく、目に入るものは悉く陰鬱、耳に來るものは衷心の悲叫、重く潤へる空氣はたゞ悲愁の袖を濕すのみにして一樹の秀でたるなく、一道の天に冲するものなく、一閃の以て此寂寞を破るものなし、忽ち聞ゆるメロヂーの細く短く、斷續隱顯するものは愈々以て寂寞の思ひを凝らしめ、悲憂の情を鍾めしむ、その演奏に就ても勿論、その曲趣に至つては實に泣かずんばあるべからざるものなりき、されど世は決して善の必ずしも賞せられ、美の必ずしも喜ばれざるが如く、此白眉とも云ふべき演奏の「ツマラナイ」「ワカラナイ」の二語の下に葬り去られしは眞に氣の毒の至りといふべし。

○六、ヴアイオリン獨奏　フリユーリングスエルウアツヘン・バハ作曲、器樂部卒業生東儀哲三郎氏、已に氏の技術に就ては今日迄幾回も紹介したる事あるを以て多言するの要なかるべし、現在音樂學校に在校せる生徒にては氏と、多久寅氏、とは兩大關とも稱せらるゝものにして、多氏のヴアイオリンは女性的、東儀氏のヴアイオリンは男性的なりともいふを得んか、されば寧ろ此曲の如きは氏の特性に對しては選曲の適當を得ざるものといふを得べし、勿論明治音樂會評にもいへる如く、之を演奏するに就ても、燃えたつ如き青春の情趣を持たしむるときは曲に活氣を帶びて女性的流麗

の域を脱し、男性的活躍を有するを得べきも尚選曲の當時より演奏者の特性に適したる曲を選ぶは最も必要なるべきか、今回の演奏の如きも古澤孃の如きは其處を得、東儀氏の如きは其處を得ざりしに依りて其演奏に優劣を生せしものなるべし。例の暗符にてエキスプレッションも相應なりしも、我は古澤孃の演奏を以て當日に於ける器樂の第一に推すものなり。

○七、オーボー獨奏　ローマンツエ、メンデルソーン作曲、聲樂部卒業生、島田英雄氏、氏も又聲樂を專攻せし人にして、オーボーは餘暇兼修せる所なり、オーボーも亦吹奏樂器の一、閑靜より音色を有するものにして古代より人に愛玩せられしものなり〔、〕オーケストラに於て、トロンペットの花やかなるに對照(ママ)して頗る目立つ樂器なりとす。當日演奏の曲はメンデルソーンのオラトラリオ、パウルスの中のアリアにして『エルサレムよ、エルサレムよ、豫言者を殺せし汝』とエルサレムの神殿、金堂銀屏夕陽に反映するを眺めて叫哭(きうこく)したる聖者の語を取りて歌詞(うたことば)としたる獨唱のメロヂーなりとす、當日の演奏殊に取り立てゝ云ふべなきも、又以て難ずべきなし、殊に專攻したる樂器にあらざれば些末に渉りて彼此(かれこれ)言ふべきにもあらざるべし。（てつ）

（『日本』明治三十八年七月十三日）

## ●音樂學校卒業式音樂會評（下）

○八獨唱　カンツオナ、モザート作曲、聲樂部卒業生小室千笑子(ちゑこ)孃　此カンツオナはオペラ・『フイガロの結婚』中の一節にして此春期に於て藤井夫人の諸方に演奏せられしものと同一なり、當日の演奏頗る上出來にして優に當日の月桂冠に價すべきか、孃の技術に就ては屢々說きし處又新らしく之を賛するに及ばざるべきも、その音色の優秀なると、その音量の大とは演奏の度毎新たに之を感せしむ、その聲の豐沃、その多恨なるシンボル、そのグラデーションの强さ、何れか、吾人の意に適せざるものあるべき。訴ふるが如く、恨むが如く咽(むせ)ぶが如く、喞(かこ)つが如き、その聲は眞に曲の有無優劣に係らず、只單に聲そのものゝみにして、已に情あり、生命あり、以て最上音樂(ベスト・ミュージック)を爲し得べきものなり、吉川孃の聲はアルトとして、孃の聲はサプ(ママ)ラノーとして、此兩孃のみは現今に於ける聲樂界の明星といふべし。此カンツオナに就ては春季音樂會の折にも言ひしが如く此曲は伯爵夫人ロシナに對して小姓ケルビノが思慕の情を歌へるものなり、されば曲も亦生命を賭したる女性的戀愛のデリケートなるよりは、寧ろ放逸なる男性的戀愛に傾けるものなることは、我が感ぜし處にして、その愛の切なるも亦ドン・ファン的の放逸の情を含(ふく)めるものにして、少なくとも此小姓ケルビノがドン・ファン的の性格なることは明かなり。されども果して當日の演奏に於てかゝる情趣を發揮し得たりしや否やは未だ疑問に屬せざるを得ず、若し小室孃がその美しき聲を以てして充分その曲の感情に就て研究せられんには一層の成効は期して待つべきものならん。

○九ピアノ獨奏　パセチツク・ソナタ、ビートヴエン作曲、器樂部卒業生、天野アイ子孃、パセチツク・ソナタはビートベンの傑作にしてムーンライト・ソナタと並稱せらるゝもの、當日の演奏はその第一段落(ファースト・ムーブメント)なりとす。その結果はさておきとにもかくにも卒業生にして如此(このごとき)大曲を演奏せしは開校以來始めての事にして、偏へに孃の勉勵と才能と、師ハイドリツヒ氏の薫陶に熱心なるとに依らざるべからず。孃はハイドリツヒ氏の高弟にして幼きよりピアノを修め、音樂學校の演奏會毎にプログラムにその名を見ざることなし、又以てその技術の如何を知るに足るべし、當日の演奏は可もなく不可もなし。その運指の如き、音色の如きは之を稱揚するまでもなく、グラデーションの如き、フレージングの如き何れも皆完全なりしも、たゞそのアイデアに至りては果して之を名殘なく傳へ得たりしや否や、未だ遽(にはか)に決すべからざるものあり、之れ可もなく不可もなき所以にして「ハンスリツク」の如く音樂に內容なしとするものならんには、此演奏は充分可なるものなるべけれど、若し音樂の表情といふ事が可能なりとせんには、此演奏は不可と斷ずるを得べし、獨り天野孃にのみ限らず、當日の全演奏を通じて、否現今の音樂界を通じて警(いまし)むべきは此所(ここ)にして、可もなく不可もなしの語は轉じて以て現代の音樂に對する全体の評語ともなすを得べし、然れども記憶せよ本日の卒業生諸君は吾が見る處にありては是等混沌たる

樂界の中に於て、最も上乘の位にある藝術家にして諸君の先輩よりも諸君の後輩よりも獨り諸君は卓越したる藝術的音樂を爲す人なるは、本日の演奏會が他の演奏會に勝りてその演奏する音樂にやゝ統一なるを見るに依りて知られ得べし

（『日本』明治三十八年七月十四日）

樂界時報

◉東京音樂學校彙報　卒業式七月八日講和全權大使出發と云ふ注意すべき日を以て本校第三回本科卒業證書授與式は行はれぬ。炎熱燃が如きときにも劉喨たる樂音堂に滿ちて天國の空氣は人をして醉はしめぬ。

當日の順序左の如し

〔曲目省略〕

第一部に於てはこれぞと云ふこともなく「人はどこ迄形式を尙ぶものか」とさゝやきしをきゝしのみ。又校長代理の告辭中本校の研究課目中に日本俗曲も加えたきにつき經費增加を望む云々と述べしはこれ同校として至當の着眼なるべし。又演奏につきては唯其技術の進歩の著しきを稱すべきのみにして何れ劣らぬ出來榮えなりき、殊に此度は專門の科目に又兼修の科目に種類多くしてプログラムに光彩を放ちしは又空前のことと云ふべし思ふに中央樂壇是より賑はむか。

（『音樂』樂友社、第八巻第四号、明治三十八年八月、六二～六三頁）

**明治三十八年十月二十八日、二十九日　第十三回定期演奏会**

明治三十八年十月二十九日

（日曜日）午後二時半開會

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一　管絃合奏

オーヴァチュア……グルック作曲

二　合唱

甲　光は東方より……〔プレトリユウス作曲 安藤勝一郎作歌〕

乙　墓前の母……〔ナニニ 安藤勝一郎作曲〕

丙　菊の盃……〔ベートーフェン作曲 武島又次郎作歌〕

三　甲　管絃合奏

メニユエット……モツァルト作曲

乙　絃樂合奏

セレネード……ハイドン作曲

四　獨唱　研究生　小室千笑

アリア……ウェーベル作曲

五　ピアノ管絃合奏　教師　ヘルマン、ハイドリッヒ

コンセルトー……モツァルト作曲

六　管絃合奏

甲　マルシユ、フュネーブル……ショパン、トーマス作曲

乙　ローヘングリン……ワグネル作曲

七　唱歌、管絃合奏

鞭聲肅々……〔メンデルゾーン作曲 鳥居忱作歌〕

Orchestral and Choral Concert
OF THE
Tokio Academy of Music
Uyeno

Sunday October 29th 1905
AT 2. 30 P.M.

## PROGRAMME.

I. Ouverture "Iphigenia in Aulis" .....*Gluck.*
(*For concert use arranged by Richard Wagner*)

II. Choruses:
*a.* Es ist ein Reis entsprungen.....*M. Prätorius.*
(*1571-1621*)
*b.* Stabat mater dolorosa.....*G. M. Nanini.*
(*1545-1607*)
*c.* Nun bricht aus allen zweigen .....*Beethoven.*

III. *a.* Menuett from the E flat major Symphonie .....
..... *Mozart.*
*b.* Serenade for string orchestra .....*Haydn.*

IV. Aria for Sopran from Oberon .....*Weber.*
*Trauere mein Herz.*
*Miss Komuro.*

V. Concerto for Piano with Orchestra in E flat major
..... *Mozart.*
(*Cadenza by H. Heydrich*)
*Prof. H. Heydrich.*

VI. *a.* Marche funèbre .....*Chopin-Thomas.*
*b.* Vorspiel: Lohengrin.....*Wagner.*

VII. "Yet doth the Lord see it not."
from the Elijah .....*Mendelssohn.*
*For Chorus, Orchestra and Organ.*

*Conductor: Prof. A. Junker.*

### 音樂演奏曲目梗概　第一

#### 一、管絃合奏

序曲（オーケストラ）

グルック

グルックは、一七一四年七月二日ワイデンワングに生れ、一七八七年十一月十五日歿す。尚ぷラーグ及維納に在りて音樂の教養を受けしが、ミルツイ公に陪してミランに遊ぶに及び、サマルテイニに參して以太利歌劇の奥底を叩き、一七四一年處女作「アルタクセルクセス」（"*Artaxerxes*"）を公にしぬ。越えて四年、招かれて英京倫敦に遊びぬ、有名なるヘンデルが酷評を耳にしつゝ、冷かに其樂風を觀察したるは方に此時也。尋で二たび巴里に遊び、故國に歸りて逝けり。前後創作する所の曲目鮮からず。然りと雖彼れが音樂史上獨特の壇場は歌劇作家たるに在り、而して彼が歌劇作家として將た歌劇革新家として特筆大書すべき活動を拔めたるは、之を其作「オルフオイス」（"*Orpheus*"）に見る、是れ實に一七六二年十月也。

斯「イフイゲニア・イン・アウリス」は、一七七四年、第二次巴里遊程中の作に係り、一時佛蘭西の音樂界を風靡し其結果延きてピシニ及グルック兩樂派の爭鬪を釀したる者にして、寔に音樂史上の一偉觀なり。

今該曲の大要を提說せんに、事は古代希臘トロイ戰爭時代に屬し、希臘軍の總督アガメムノン王、デイアナ神の怒に觸れ、逆風の爲めアウリスより其軍船を行ること能はざるを以て、宣託に據り王女イフイゲニアを犧牲に供せりとの傳說に基けり。

平明なる緒曲は、先づイフイゲニア及其兩親朋友が悲痛哀惋を寫象し來り、一轉して、其犧牲を要請するに急なる戰士が狂暴的態度を描ける主題に入る。第二の主題は、全然淳樸安靖なる牧歌的性質の韻律を倩ひて、前曲の殺伐麤野なる主題と繼照せしめぬ、是れ明かに聽衆の心をして、イフイゲニアが平素の靜安圓滿なる生涯を回想襯貼せしめ、職として酷薄なる運命に對する觀念を一層深刻ならしむる手段也。然りと雖、聽衆の圓けき幻夢は、倏忽として犧牲を要請するに急なる主題に依り、屢次破壞せらる、

イフィゲニアの將に其祭壇に牽かれんとする刹那を吹奏するホルンの獨調は、オーボーの泣くが如く訴うるが如き不諧音と相待ちて、全曲美を發揮するに與りて大に力有りとす。序樂の原形式は、特殊の段落なくして自ら歌劇の第一齣に聯接す、然れども、之に演奏的可能性を與へんが爲に、ワグネルは其終尾を變竄し、緒曲の平明なる主題を以て之を結びぬ。

斯序曲は、徹頭徹尾古代的風韻横逸して、永へに大傑作として範を後世に垂るゝに足る。（あ、と）

## 二、合唱

### 甲　『光は東方より』　プレトリウス

プレトリウスは、一五七一年二月十五日クロイツベルグに生れ、一六二一年同月同日を以て歿す。生涯の經歴及性行に就きては、文獻の徵すべき者太だ匱しく、斯曲の如きも、其果して何年の作に繫るやを詳にせず、然りと雖、世其作を傳ふる者極めて多きを以て推するに、決して尋常一樣の庸手に非りしならん歟。彼れ天稟の樂才を有し、作家として且樂家として一代に名あり、主として器樂の發達、殊に器樂伴奏に於ける新形式の建設に對して、多大の貢獻を成せりと謂ふ。彼が畢生の大作、シンタグマ、ムジクム（"*Syntagma Musicum*"）は、十七世紀初葉に於ける音樂演奏上の概念を獲んと欲する者には缺くべからざる實典なりとす。

斯曲の原表題は『基督降誕歌』にして、其歌詞はペーテルス(A. Peters)の手に成る。（あ、と）

### 乙　墓前の母　ナニニ

ナニニは、一五七〇年ヴレラノに生れ、一六〇七年三月十一日歿す。所謂ローマ樂派の作家なり。彼はパレストリナの門に出で、幾もなくして遂に師の箕裘を嗣ぎぬ、其門亦た多く儁秀を出だす。就中アレグリの如きは鐵中の錚々たる者也。史家或は彼を稱してパレストリナ樂派の代表者と爲す。蓋、其然る所以の者は、決してパ樂派を創立したりと云ふ意義に非ずして、寧ろ當時既に模倣的技巧にのみ流れしネザランド樂派の對位法を執りて、之を自派の焙爐に融化したる點に在つて存す。

斯曲の原表題は「歎ける母」にして、其歌詞の作家はトディ（G. da Todi）也。（あ、と）

### 丙　菊の盃　ベートーフェン

ベートーフェンは、一七七〇年十二月十六日維納〔ボン〕に生れ、一八二七年三月二十六日歿す。合奏曲司伴樂及び室内樂の名家たり。斯曲の原表題は「宇宙の美」、其歌詞はローデンベルグ(I. v. Rodenberg)の屬する所なり。（あ、と）

## 三、甲　管絃合奏

### 么踊樂　モツアルト

モツアルトは、一七五六年一月二十七日ザルツブルグに生れ、一七九一年十二月五日歿す。十八世紀に於ける有數の合奏曲作家なり。斯曲は、彼が晩年の作に繫かり、極めて幽雅なる進行の古舞蹈曲にして、各小節は三拍子より成る。其原形式は、固と二部を以て組織せらると雖、奏鳴樂（ソナタ）、合奏曲等に用ひらるゝ發達せる形式に於ては、之に第三部を加ふ、此を三部（トリオ）と稱し、斯三部は復た二部より成れり。斯曲に於ける三部が、么踊樂（メニユエット）固有の者と其性質を異にする所以は、由つて以て其曲趣を精彩あり優雅ならしめんが爲めにして、斯曲は其點に於て優に典型を推すに堪ふ。（あ、と）

### 乙　弦樂合奏　小夜（さよ）樂　ハイドン

ハイドンは、一七三二年四月一日ローラウに生れ、一八〇九年五月三十一日歿す。彼が作は、聲樂及器樂の殆ど所有形式を網羅し、之く所辨せざる無し、亦以て其多角的樂才を想見するに足る。然れども彼は特に器樂作家として、音樂史上所謂「合奏曲祖」の名を不朽に傳ふる者也。

小夜樂（セレナード）（黄昏樂）は、原と聲樂及器樂兩用の形式なれども、後世多く器樂にのみ用ひらる。夫の現今用ひらるゝ器樂的形式に屬する小夜樂は、其根本的語義と全く沒交渉に發展せる者也。古風の小夜樂に在ては、野外樂として恰當なる範圍に於て、（ハイドン或はモツアルトの作に見るが如く）、往々オーボー・バスーン・ホルン・クラリネットの管樂器を加へて演奏せしこと有り、然りと雖、樂堂に於て演奏する場合には、弦樂を主と

するを常規とす。但だ古より今に亘り渝らざる唯一の特調を擧ぐれば、小夜樂は、奏鳴樂合奏曲に於けるよりも多大の進行を有し、而かも其進行は、奏鳴樂合奏曲の夫れに比較すれば、輕少にして複雜煩瑣ならざるの點に存す。之を要するに、小夜樂は么踊樂に類する進行を備へ、殊に一二の遲緩進行を交うるを必とす。原來首尾の進行は、形式上進行曲に似たるを以て其本質とす。（あ、と）

### 四、歌　旋　ウェーベル

ウェーベルは、一七八六年八月六日オイティンに生れ、一八二六年六月五日歿す。彼は作家として、所謂ロマンティツク樂派の代表者中、其首位を占む、斯曲が倫敦劇場に於て演奏に上りたるは、實に一八二五年四月十二日にして、彼れ夙に該作曲の完成に從事せしが、肺を患ひ、屢中絶するの已むなきに陷り、困憊苦闘遂に其業を遂げ、宿志報ひらるゝの後纔かに五旬、眠るが如く英京の逆旅に逝きぬ。洵に彼が半生の心血を注ぎたる大作にして其三大戯曲的傑作の掉尾たり。

歌旋（アリア）とは、原と一定の形式を有する調諧旋律を謂ふ。昔者只だ聲樂にのみ限られたれども、後世（ヘンデル・バッハの若く）器樂の旋律的演奏にも用うる者有るに至れり。又十六・十七世紀に於ては、一般に歡樂歌として適用せられたる者なるも、狹義に於ては抒情的戯曲的樂式として解釋せらる。其蹈歌（バラード）と差異ある點は、俱に齊しく抒情的管弦樂の伴奏を有すと雖、蹈歌は寧ろ敍事的にして、歌旋は全然自敍的なるを特色とす。（あ、と）

## 五、ピアノ管弦合奏

### 司　伴　樂　モツアルト

司伴樂（コンセルト）は、獨奏器樂の主要なる一形式にして、常に管弦樂の伴奏を有し、名家たるの大技倆を具備するに非ずんば能くし得ざる所也。

斯曲は、特にピアノ演奏のため作爲せる有數の司伴樂として、古典的音樂を脩むるピアノ專門家の、伴しく仰視する所の作たり。啻だ時代の推移變遷は、彼を驅つて舊式の作家たらしむ。其全奏（チュッティ）は、殆ど第一進行に屬する主要なる旋律の全部を含蓄し、聽者のため、應に現るべき獨奏の路を廓清する者なり。典雅威嚴該ね備はれる絶美精錬の旋律と、完全なる形式と、ピアノ司伴樂として優に光彩ある獨奏は、曲の到處に充盈して、僂指するに勝へず、現下全く廢絶に歸したるには非ざるも、殊に當年の風習として、進行の結尾に近く疊韻の餘地を保留せり、是れ、神興を感ずる獨奏者をして、面り傾聽せし旋律に關し、單簡なる幻樂的表現を記るさしめ、以て大に其藝術的技能を發揮するに便ならしむ。（あ、と）

## 六、管弦合奏

### 甲　送葬進行曲　ショパン——トーマス

ショパンは、一八一〇年二月廿二日ツエラツオラ・フオラに生れ、一八四九年十月十七日歿す。巧妙なる創設的ピアノ作家也。殊にピアノ演奏に關しては新時代を劃すべき斯道の一大家とす。斯曲は、此種形式中尤も卓絶せる一傑作として、ベートーフェンの「エロイカ」變Aの奏鳴樂送葬進行曲、及びワグネルのジーグフリード送葬進行曲と鼎足の勢を成せる者なり。以上三曲の優劣に至ては、丞かに軒輊し易からずと雖も、ショパンの作は汎く世人の耳朶に洽き點に於て有名なり。

（『シカゴ・シンフオニー・コンサーツ』抄錄）

### 乙　前奏『ローヘングリン』　ワクネル

ワクネルが經歷功過に關しては、其紹述に註釋に或は評隲に業に略々世の知悉する所なるを以て、今故らに贅せず。「ローヘングリン」の作は、一八五〇年八月二十八日ヴイマールに於て、リスト撕掖の下に始めて演奏せられたる、近世歌劇界の新聲也。

歌劇「ローヘングリン」全曲の特色美を結晶したる小天地、是を其前奏と爲す。曲は、先づヴイオリン・フリュートの幽婉神祕なる和弦に起りて、ヴイオリンの單奏に入り、或は壓調し、或は移調し、和弦は高く高調に達し、而して緩調に入る。是を救世主磔殺の神血を湛へし聖盃の主題とす。彼此交互參差錯落として、彈じ去り奏し來る樂の音波は一揚一抑一昂一低、基調稍々に下り、須臾にして聖盃の主題は、翺翔せるヴイオリンの高音を背景とする、フリユート・オーボー・クラリネットの吹奏を藉り、餘蘊なく發揚し盡さる。斯の特性的調音は、霎時の後、トロンボー・ギオ

ロンセロ・ホルン・バスーンの吹彈に由りて復た起る、高調の弦樂依然たり。奏樂は斯くて逶迤旋行する也。聖盃の聲は、稍々に近く逼り來ると雖、常に他の高調の旋律のため銷沈せらるゝ所と爲りしが、遂に嚴爾として聲あり、テイムパニーとバスとトラムペットとトロンボーと光彩ある樂音とは、神彩赫奕、一時斯聲を顫らにす。是れを前奏に於ける高潮とな す。傾刻の間、奏樂は猶搖曳し、力ある樂音遞次再むに隨ひ、次を逐うて終局に向ふ。幽婉なるヴイオリンの和弦は劈頭と相呼應して、結末に於て再び神嚴なる主題を調奏し、變格的圓結を以て「アーメン」の一語全曲を攝す。（「シカゴ・シンフォニー・コンサーツ」抄錄）

七、合　唱

エライヂャー　　メンデルスゾーン

メンデルスゾーンは一八〇九年二月三日ハムブルグに生れ、一八四七年十一月四日歿す。彼は年少にして夙く其樂才を現しぬ。

斯曲は一八四六年八月バーミングハムに於て始めて演奏せられたるものなり。斯合唱は、之を始むるに、其歌詞と相待て、懲罰應報苟も假さゞる大斷行の主題を以てし、直に展ぶるに追覆樂を以てし、更に之を承くるに美妙なる聖歌を以てし、而して之を收拾するに、靈驗嚴肅の雄渾なる主題を以てす。　（あ、と）

Programme
OF
Orchestral and Choral Concert
BOOK No. 1
Sunday October 29th
1905
Tokyo Academy of Music
Uyeno

## Overture "Iphigenia in Aulis."

Gluck.

This Overture takes us right back to the earliest times of ancient Greece to the time just before the war against the Troyans. The King of Greece has offended the Goddess and she in revenge prevents the Greek warriors from embarking by causing unfavourable winds. The Augures are consulted and they predict as the only way to propitiate the Goddess for the King to sacrifice his daughter Iphigenia.

The Composer gives the situation at once. The plaintive subject of the introduction expresses nobly the sorrow and grief of Iphigenia and her parents and friends but soon a new subject of a demanding character almost of roughness appears (the real commencement)—the impatient Greek warriors demanding the sacrifice. The second subject is of quite an idyllic character and gives the necessary contrast. It is evidently meant to remind the hearer of the peaceful happiness Iphigenia had always been surrounded by which makes her cruel fate more cruel, but it is soon and again and again interrupted by the subject demanding the sacrifice. Very fine are certain single notes by the Horn, as calling Iphigenia to her duty, together with an almost crying dissonance of the Oboe, praying to be spared.

The Overture in its original form has no ending but leads right into the first Act of the Opera, but to make a performance at a Concert possible, Wagner has altered the ending accordingly. He finishes with the plaintive subject of the introduction. This Overture is pervaded throughout with an antique atmosphere and has at all times been admired as a great masterpiece and rightly so.

H. H.

## Menuett from the e Flat Major Symphonie.

Mozart.

A Menuett is an old Dance of graceful movements and

three beats in the bar. In its original form it consisted only of two parts, but in its more developed form such as used in Sonatas, Symphonies, etc. a third part called Trio, consisting again of two Parts, is added. This Trio should be of a different character as the Menuett proper to give relief and this Menuett by Mozart is an excellent specimen in this respect.

H. H.

## Concerto for Piano with Orchestra in e Flat Major.

(Cadenza by H. Heydrich) Mozart.

This is one of the beautiful Concertos written for the Piano by Mozart and is still played by nearly all Piano-Virtuosos who cultivate classical Music. It is of course in the old style—a "Tutti" bringing nearly all the principal melodies of the first movement in short, preparing the listener for the Solo. It is full of melodies of the greatest beauty and refinement, with grace and dignity (mit Aumuth und Wuerde), of the form perfect and the Solo Part sufficiently brilliant for a Piano-Concerto. As was the custom then and to some extent is still, a place is left open towards the end of the movement for the "Cadenza" which is meant for the inspired Soloist to write a short Fantasy on some of the just heard melodies and if he so chooses to give some higher display of his technical capabilities.

H. H.

## Marche Funèbre.

Chopin-Thomas.

Funeral March of Chopin is one of the few and most celebrated compositions of this class, standing in that pre-eminent hierarchy which includes the funeral march in Beethoven's *Eroica*, the Sonata in A flat, and (greater than either, of course) the Siegfried Funeral March. Among these there is no question of pre-eminence; each is greatest. And Chopin's work stands clear in the world's view.

(*From "Chicago Symphony Concerts."*)

## Prelude "Lohengrin."

Wagner.

All the beauty and characteristics of the Opera "Lohengrin" we have in the Prelude, but in the little. It is the microcosm of the opera. After certain sweet and mysterious chords of the violins and flutes, the violins alone are playing, muted, divided, the chords high up in the treble, and very softly. It is the motive of the Grail—that holy cup in which was caught the sacred blood profanely shed upon Calvary. The music swells, diminishes, gradually descends in pitch, involving one instrument after another, until after some periods we have the Grail motive given out by the flutes, oboes and clarinets, while the violins still soar above. After some time, again comes this characteristic intonation, the trombones, 'cellos, horns and bassoons playing it, but still with the strings in the higher regions. Onwards meanders the music. The sound of the Grail comes nearer and nearer, but always subjected to some other melody which sounds above it. At last with grand clash all the trumpets, trombones and brilliant voices intone this sound in full radiance of splendor, with everything which tympani and basses can do to make it more impressive. This is the climax of the prelude. The music keeps up for a little, gradually subsiding as one powerful voice after another ceases, until at last we are gradually brought down to repose. Then our sweet chords of the beginning, and finally, at the very end, again the violins intone the heavenly motive, just as at the beginning, and the whole closes with the sound of a sweet "Amen," for such is the plagal cadence which ends the work.

(*From "Chicago Symphony Concerts."*)

## "Yet Doth the Lord See it not" from the Elijah.

Mendelssohn.

This Chorus begins with a subject of great decision, in conformity with the words and soon develops into a "fugato" which

means subject being worked out after certain rules. After that very fine a "Chorale" comes in and it finishes with a broad subject, effective and yet noble.

H. H.

〔批評および関連記事〕

●音樂演奏會　東京音樂學校音樂演奏會は本月二十九日（日曜日）午後二時半より同校奏樂堂に於て開催せらるゝ筈なり今回は從前と異なり入場券を發賣し廣く希望者を入場せしむることゝし入場券は一等二圓二等一圓の二種に分ち京橋區竹川町十三番地共益商社樂器店にて來る二十日より發賣する由その曲目は第一管絃合奏、第二合唱（甲乙丙）第三甲管絃合奏、乙絃樂合奏、第四獨唱、第五ピアノ管絃合奏、第六管絃合奏（甲乙）第七唱歌管絃合奏等なり

（『人民』明治三十八年十月十五日）

東京音樂學校音樂演奏會入場券發賣廣告

本月廿九日午後二時半ヨリ御開催ノ東京音樂學校音樂演奏會入場券ノ發賣方ヲ今般弊社ニ命ゼラレ候ニ付來ル廿日ヨリ右發賣可致曲目及入場料等ハ左ノ通リニ候間何卒陸續御購求アラン事ヲ奉希上候

曲目

（一）管絃合奏、（二）合唱

（三）甲、管絃合奏、乙、絃樂合奏

（四）獨唱（小室千笑子）

（五）ピアノ管絃伴奏（ハイドリヒ氏）

（『日本』明治三十八年十月十七日）

音樂學校演奏會評

一昨日午後二時半より上野の音樂學校にて秋季演奏會催されたり。從來同校の演奏會は嘗て入場料を取ることなく、切符を賣付けるは今回を以て始めとなすゆゑ、常に立錐の地なきを例とする同會も如何あらんかと氣遣ひしが、九分通りは聽衆席も塞がり、慈善會の景物とならずとも、西洋樂其物に餘程興味を有する人の多くなりしを認めたり、一等席は大半外國人二等席は殆んど學生にて、長唄研究會や歌澤温習會への出席者とは全く異なるやうなるは、以て將來の隆盛を卜すべし。今回演奏曲目の梗概を作りて、聽衆に配りしは、邦人の洋樂智識の乏しき今日甚だ賞讃すべきことにて、これによりて音樂の興味を增せし者多からん。出し物は傑作揃ひともいふべく、技藝も一回毎に進歩の跡あり、打つゞけの管絃合奏は演奏者の勞も察すべく、これ以上の洋樂は今日の日本にて、他に聽き得られざる者と思はるゝが、慾を云へば不滿足の點も一二ならず。管樂に比して絃樂器の甚しく不足せるもヲーケストラとして未だ幼稚なるを免れず「第一ヴァイオリン」の六人は何れも今日の名手ならんも、女性のみなる爲纖弱に失せざるかと思はれたり。

同校の男子卒業生は如何なる方面に向へるか、技藝に於て婦女子に劣るか、他の事情ありてか、宮內省の樂人を雇ひ來て漸く一座を組織する位なるに、同校の男子卒業生を多く見受けざるは不思議なり。兎に角日本の洋樂界も十分の發達をなす迄には幾多の波瀾を經べく、男子が女子に壓倒せらるゝ今日の情態を變じて、男子樂人の名が聽衆に喋々せらるゝやうになり、又演奏者の多くが（聽衆と共に）其の演奏せる曲の精神を解するに至らざるべからず。今日の大物たるワグネルの「ローヘングリン」の如きも、この全曲の內容を味ひなば、前奏に對する興味深かるべく、吾人はこの前奏のみを聽きて、これが發展して如何なる劇曲をなすか全曲を知りたく思はれ、又全部を見し上ならでは、前奏をも十分に味ひがたきやうに感ぜられたり。されど一昂一低大波小波の寄てはかへす變化縱橫の妙の朧ろげながらも解せられたるはうれしかりしが、ヴァイヲリンの不足は玆に於ても認むべく、最高潮に於てベツケンの蠻音を用うる必要ある程なるに絃

樂器の音量が、未だ其れ程の高潮に達せざるやうに思はる。それに樂人等は只コンダクターに一任して、この曲に對しどれ丈の情味を有せしかは疑はれたるが、兎に角かゝる音曲を、聽衆の大喝采を得て二度くりかへすやうになりしは洋樂界の進歩推して知るべし。ハイドリツヒ氏のピアノとの管絃合奏「モツアルトの司伴樂」も今日の聽物にて、この前のケーベル氏のピアノにての合奏に比して一層技工すぐれしやうなるが、ケーベル氏の時は管絃樂の指揮者が後より追驅けて行く如かりしが、ハイドリツヒ氏のはさながら自分も伴奏指揮者の掌中にありて、それを逸し去ることなかりき。「ショパンの送葬進行曲」は哀れを感ずるよりも寧ろ睡氣さしたり。小室千笑孃の獨唱は、音聲奇麗にして、女としては音量もある方なり。裏聲にうつる所滑かにして、日本人の耳にも最快く感ぜらる。合唱は日本語を當嵌めたるが、十年一日の如く不調和甚だしく、殊に「鞭聲肅々」は劍舞の文句の如く、宗教的要素ある原作とは雲泥の相違にて、歌曲相伴はず、かゝる和洋折衷は音樂進歩の上に何等の効果なかるべし。「墓前の母」は比較的に勝れり。「小夜樂」は聽く度に三味線樂に近きやう素人耳には感ぜらるゝ。今回のはこれ迄の中最も艶に聽かれたり。「モツアルトの么踊樂」は稍活氣なく演奏者も上の空に思はれたり。「グルツクの序曲」は大作の割合に感興を惹くこと少かりし（菱生）

（『讀賣新聞』明治三十八年十月三十一日）

## ●音樂學校秋季演奏會樂評（一）

○一、管絃合奏（イフイゲニア・イン・アウリス）獨逸の音樂家グルツクの作曲、イフイゲニア・イン・アウリスといふ三幕のオペラのオヴアーチユアーで、從來大劇場で屢々興行し、興行毎に常に大喝采を受くる有名の曲である、この曲の大要を言へば古代希臘トロイ戰爭時代の事で、希臘軍の總督アガメムノン王がデイアナ神の怒に觸れて逆風の爲めアウリスより其の軍船を行ることが出來なくなつたため、豫言者の說に隨ひて王女イフイゲニアを犧牲に供せりといふ筋で、序幕は父王アガメムノンが無垢最愛のイフイゲニアを犧牲とせんか、幾萬の勇士を海底の藻屑とせんかと、とつおいつ悶々の情堪へざる處に、丁度其時王女イフイゲニアは、母のクリテムネストラと共に顯はれてその約婚のアキルレスと結婚披露の準備にかゝる、かくて第二幕に入り、イフイゲニアは愈々結婚の式を行なはんため盛裝して婿のアキルレスと共に祭壇に立つ其時父王の使者來て、イフイゲニアを犧牲に供したことを告げたれば、母のクリテムネストラは婿のアキルレスと共にイフイゲニアを保護し、且つ神の宥恕を願ども、イフイゲニアは獨り覺悟を定めて少しも騷がぬところで此の幕は終り、次で第三幕に入し、アガメムノン王の前に多くの人が群集して犧牲を求むる聲喧しく、一方にはアキルレスが母と共にイフイゲニアの決心を翻へさせんと百方苦心し、又一方にはイフイゲニアの体に指でも染めるものがあれば直に刃を拔かんと身構へる、母は終に己れ其の身代りとならんとしたが、遂に叶はずして悶絕する、かくてイフイゲニアは別を告げて犧牲となつてゆく、こゝで場が變つて高僧は犧牲を捧ぐ可く用意をして居る此時アキルレスはデイアナ女神の助けを乞ふてこゝに來り、イフイゲニアを助けんとする、霹靂一聲、天地爲に暗黑、群がるもの何れも懼れをいだく、デイアナ神、イフイゲニアの殊勝の決心と清淨なる精神とに感じて、これを犧牲とするに忍びず、即ち之を助けて外國に伴ふ、その跡で衆人デイアナ神の德を贊し、イフイゲニアを追憶するので此のオペラは終るのである、本曲は此の序樂であるから、從て清雅、高逸、聽きゆく內、イフイゲニアの美しき德を偲ばるゝのである、演奏者は何れも現今我邦第一流の音樂家、わるからう筈なく、開會先づ何ともいへぬ妙なる感に打たれた。

○二、合唱（甲、乙、丙）　甲は光は東方より、乙は墓前の母、丙は菊の盃で、此の中甲と乙とは共に千五百年代の作家、甲はプレトリウス、乙はナニニの作曲で兩氏共に音樂史上忽にす可らざる有名の人である、丙は一千七百年の末葉に生れたビートベンの作曲で、甲乙の二曲は幽婉であるが、丙の一曲は甚だ華美である、抑々合唱は此校の特色で、我邦の現今では、未だ此に匹儔するものはない、合奏は此校ほどの者は、まだ外に見ることが出來ぬが、合唱もまたなか〳〵美事である。

●音樂學校秋季演奏會樂評（二）

（『日本』明治三十八年十月三十一日）

○三、合奏　甲は么踊樂（メニュエット）、乙は小夜樂（セレネード）、メニュエットは昔の佛蘭西（ふらんす）の舞踏で三拍子のものであるが、今は其の舞踏は廢絶して、それに附けて奏した音樂のみ殘つて居る、一體メニュエットは高雅のものだが、モツアルトのメニュエットは高雅といふよりも寧ろ華麗といふ方である。隨（したがつ）て幾分か浮華な分子があるやうにもきこえる。尤もモツアルトのものは何れにもこの調子があるやうである、小夜樂（セレネード）は一名黄昏樂（たそがれがく）ともいつて、黄昏野外にて唱つたものだが、後代其意味を失つて器樂にばかり用るやうになつた、しかし現代のセレネードも靜寂、平安の意を含んで居る所は、即原樂の意を傳へたものといふてよい、此セレネードは近世ショッパン等によつてノクターンとなつたが、矢張り靜寂の意を傳へて居て、一体に輕少で煩雜でないのが此の曲の特色で又よい所である、凡て弱聲器で演奏し、二番ヴァイオリン以下は彈音（ピチカート）であつた。甲は管絃合奏で乙は絃樂合奏、何れもよかつたが、殊にセレネードは一般に頗る受けたやうである。

○四　獨唱（アリア）　オペラ『オベロン』中の歌旋（アリア）で、ウエーベル氏が最後の作曲である、此の曲は千八百二十四年、カーヴエント・ガーデン劇場の依頼によりて着手し、中途肺患に罹りて、千八百二十六年即ち彼れが死去の年の春に完成したのである、此曲が倫敦（ろんどん）の劇場で始めて演奏に上つたのは千八百二十六年の四月で、彼は此時倫敦に旅行し、衆人が此曲に就て大歡迎しつゝあるのを目擊したが、病は此時より益々重く、遂に其の滯在中に死去したのである、この『オベロン』といふのは三幕のオペラで、近世文學の精華たるギーラントの叙事詩『オベロン』より樂材を取り、全体の構想が、ローマンテツクであつて、『オベロン』といふは篇中の小鬼王の名である、この日の演奏の歌旋（アリア）はこの曲の中にあるマホメツド教主たるカリフの娘レヂアの悲哀なる心情をうたふたものである、演奏者小室千笑孃は本年の卒業生で目下研究生として引きつゞき在學する、音量といひ、音色といひ、テクニツクといひ、エキスプレツションといひ細かく批評眼を角ど立てつれば言ふべき節もないではなからうが、現今の聲樂家に乏しき我邦の音樂界にては、先づ申分がないと言ふてよからう、殊に同孃は演奏のたび毎に其の技倆が上達するのは何より慶ばしきことで、この上奮勵怠らずんば前途の進境は十分であらう。

（『日本』明治三十八年十一月一日）

●東京音樂學校演奏會　十月廿八日及廿九日秋季演奏會を開會す初めて入場料を徴收して一般希望者に弘く參聽を許したるは本校としての新發展を慶賀すべきことなり。且曲目の梗概を出版して配付せし等は誠に感謝すべきことにして今後は尚ほ委しく記述して目に於ける音樂の教養をも授けられむことを祈るものなり

（『音樂』樂友社、第九巻第二号、明治三十八年十二月、五三頁）

## 明治三十八年十一月十八日　試業演奏会

樂　會

◉第十八回撰科生徒試業會　東京音樂學校にては去月十八日午後一時より上野樂堂に於て同校撰料の試業會を開かれたり。年を逐ひて技藝進歩のあとあるは喜ぶべく、特に女聲二部の如きは撰科としては豫想外の好成績なりしと云ふべし。

當日のプログラムは次の如し

第一部

一唱　歌（二重音）　男生徒

亡き妻　（作曲者未詳　安藤勝一郎作歌）

一ピアノ　石川しづ子

ソナチナ　クーラウ作曲

一ヴァイオリン　伊藤多津
ガボット　バハ作曲
一オルガン　三須きく
ガボット　バハ作曲
一ピアノ　鹿島辰司
ソナチナ　クーラウ作曲
一ヴァイオリン　浅羽千代
甲ウンガリッシ　アーマンド作曲
乙デュエット　モツアルト作曲
一箏　角倉愛子
朧月　熊田豊子
一ピアノ　中村たみ
ロンデノ　岡見メレ
一オルガン　スチヤルウェンカ作曲
エーア（ドンファン歌抜萃）　飯田隆健
一ヴァイオリン　モツアルト作曲
ソナタ　丹波ノブ
菊地みさを
一ピアノ　ウェルファールト作曲
ソナチナ　蕭思鶴
一唱歌（二重音）　ジュセツク作曲
葵の祭　女生徒
メンデルスゾーン作曲
鳥居忱作歌

第二部

一ピアノ聯彈　岸本忠雄
マツルカ　野崎貞麿
一オルガン　ウェーベル作曲
アダヂヲ　辻美亞
一ピアノ　メンデルスゾーン作曲
ソナチナ　古市喜子
一ヴァイオリン　クーラウ作曲
バルカロール　田邊尚雄
一箏　フェスカ作曲
春の曲　替手　河野ヒデ
一ピアノ　萩原八重
ソナタ　關ソノ
一ヴァイオリン　鈴木あい
スキート　ホープ　モツアルト作曲
一オルガン　丹波ノブ
アンダンテ　菊地みさを
一ピアノ　伊藤せい
ソナタ　甲斐秀雄
一唱歌（單音）　前田滋樹
凱旋紀念の歌　ゴールドスタイン作曲
山崎謙太郎
モツアルト作曲
原馨
モツアルト作曲
生徒
ライヒアルト作曲
旗野十一郎作歌

（『音樂新報』第二巻第九号、明治三十八年十二月、三八頁）

## 明治三十八年の概評

一九〇五年樂壇回顧

一般文藝の沈銷不振なりし昨年の藝苑に於て、獨り異數の活動をなせしは我樂壇なり。數年來我音樂は種々の要求に依りて進歩の氣運に向ひつゝありしが昨年に入りて急劇なる進歩の狀態を呈せり。

先つ是を音樂演奏會の方面より見れば第一其數に於て甚しく增加し、又聽衆も其れに連れて頓に其數を增したり、殊に注意すべきは、由來管絃合奏樂には最も其嗜好を欠く處の我國人士の欣で是が演奏を樂しむに至りしことなり、音樂學校演奏會の如きは最も此の管絃合奏に意を盡し、頗る成績の見るへきものありき。

〔中略〕

中央に於ける歐樂の中心は云ふ迄もなく東京音樂學校なり、故に同校の消長は一に現今我國の歐樂の衰盛に關すと云ふことを得べし、又同校演奏會は直接現今本邦の樂壇を代表せりと云ふことを得べし、同校のコンダクタアはユンケル氏なり、ユンケル氏はもと獨逸人なるを以て、同氏の撰曲は主として獨逸樂なり、而してユンケル氏は最も華麗なる、豪壯なる曲趣に趣味を有す此の故に同校の演奏は多く此の方面に偏する氣味ありしに、昨年來は多少其方針を變へたりと覺しく、大に佛國樂的の趣味を交へ、從來の單調を破り聊か澁きものを演奏するに至れり、是れ一方より云へばコンダクターの趣味の變化を意味すると同時に一方聽衆の此の方面に向へるを證するものならずや、此の故に吾は昨年の樂界は稍々古典的趣味を離れて聊か精神的の趣味に向へるには非ずやを思ふ、其證としては近時プログラムを飾るにチヤイコウイスキイ、ショパンを以てするを以ても察することを得べし、是れ確に一般本邦樂家の中世趣味を離れてセンチメンタルなる近世樂に耳かたむくるを證するものなり。

（『音樂新報』第三巻第一号、明治三十九年一月、三七～三八頁）

## 明治三十九年一月二十七日、二十八日　モツアルト誕生記念音樂会

樂　會

●モツアルト誕生紀念音樂會　豫報の如く東京音樂學校學友會にては去る一月廿七、八の兩日を卜して樂聖モツアルトの誕生紀念音樂會を同樂堂に開催せり、元來同學友會にては毎春一回大音樂會を開くを常とせしが、今回はモツアルト誕生會と兼ねたることなれば、會も一層の盛況を呈し兩日とも立錐の地もなきほどの盛觀を呈せり、演奏は年と共に進境を示し、意氣亦頗る旺盛なり。會員諸氏の前途吾人私かに意を强ふする者あり、當日のプログラム、歌詞は次の如し、但し「靈笛」「そなた懷し」は武島羽衣氏の特に同會の爲め作歌せしものにして皆モツアルトを追慕するの意に出しものなりと。

第一部

一　合唱　會員

1　靈笛……F. Händel.

2　そなた懷し……G. Neumark.

二　ピアノ獨奏　木村ます

Sonata. ……Clementi.

三　ハアモニウム獨奏　中田章

Cantabile. ……Lemmens.

四　獨唱　井村はるよ

Gute Nacht ……Franz.

五　オルガン獨奏　草川宜雄

Don Juan ……Mozart.

六　ピアノ獨奏　小松耕輔
Sonata in F dur (1st movement) ……Mozart.
七　ヴァイオリン獨奏　鳥居つな
Concertino……Sitt.
八　ピアノ獨奏　澤田柳吉
Sonata in F dur (1st movement) ……Mozart.

第二部

一　箏　麻生富久子・河野ひで
四段砧
二　獨唱　鹽濱ちか
Es hat die [R]ose [sich] beklagt ……Franz.
三　ピアノ獨奏　川久保美須々
Sonata in A dur……Beethoven.
四　ヴァイオリン二部合奏　鎗田倉之助・多久寅
Duo……Sitt.
五　ピアノ獨奏　田中ロク
Sonata in D dur……Beethoven.
六　ハアモニウム獨奏　加藤ぶん
Preludiso〔ヤ ド〕……Bach.
七　ヴァイオリン獨奏　多久寅
Concert in E moll ……Rode.
八　ピアノ獨奏　上原喜勢
Sonata in C dur ……Weber.

九　合唱會員
此御山……Mozart.
靈笛（ツアウベルフレエテ）　武島又次郎作歌

〔以下歌詞略〕

（『音樂新報』第三巻第二号、明治三十九年三月、三九～四〇頁）

●一昨日のモザルト記念音樂會

東京音樂學校學友會の催しにかゝる同會は既記の如く樂聖モザルトの誕辰日たる一昨日を以て同校のホールに開かれぬ、堂の中央には此の偉人物の肖像を飾り四邊は種々の裝飾を加へて聖靈を待つが如く聽衆も亦例より多く堂に集まり遂に立錐の餘地なきに至りて入場を謝絶されしもの多かりき扨演奏となりて、合唱の（靈笛）及び「懷し」は何れもモザルトを懷ふの意を寓したる歌にて何れも難なく美しき演奏なりし殊に澤田氏のピアノは一際引立ちて梁の塵も舞ふかと見えたり、草川氏のオルガンも亦相當の出來榮え、曲はモザルトの名曲オペラ「ドンファン」の序樂とて一層興味あるを覺えたり井村孃の獨唱、鳥居孃のヴァイオリン共に臆したる氣味の見えしは是非なし箏も面白く聞かれたれど洋樂の中に交りては引立ちの惡かりしも亦詮なし多氏のヴァイオリン獨奏は誠に見事にて聽衆皆感嘆の聲を放ちたり氏は音の優雅なるを以て得意とする人なれば曲趣よりも歌謠こそ聞物なりけれ上原孃田中孃のピアノ何れも見事に演じ終り最後に至り合唱の「此御山」はモザルトの名曲アヴエ、ヴエルムにして宗教音樂の極粹、演者は能く高遠微妙の感想を發揮し得たり尚引續き昨日も開會ありしかど左のみはとて記さず

（『東京朝日新聞』明治三十九年一月二十九日、六頁）

ここで一つ、小松先生のデビューの思い出を披露しよう。

――明治三十九年（一九〇六）一月末近く、東京音楽学校学友会の主催で、モーツァルト誕生百五十年記念音楽会がやられてね。会場は上野の奏

楽堂だった。曲はモーツァルトを主にプロを組み、まだ学生だった私も出ることになりました。ほかには沢田柳吉、鳥居つな、川久保美須々、多久寅、上原喜勢などで、私はモーツァルトのソナタを演奏したんだが、それがえらい失敗で、恥ずかしい思いをしてしまった。

当時の音楽会は、大体、みんな楽譜をもって出るのがふつうだったが、ハイドリッヒ先生が「外国では独奏の場合、楽譜を持たないのがふつうだから、そうするように……」といわれたので、やむなくそうしたところ、果して途中の転調のところでひっかかり、弾けども、弾けども、前に行かない。それでもやっとなんとかすませて、楽屋にひっこんだら幸田延先生が、心配されていて、慰めて下さり、ホッとしたが、苦い思い出で忘れられない。

（『明治は生きている――楽壇の先駆者は語る』宮沢縦一編著、昭和四十年、一八～一九頁）

**明治三十九年三月二十八日　甲種師範科卒業式**

明治三十九年三月二十八日（水曜日）午後三時

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

第一部

一報告

一卒業證書授與

一校長告辭

一文部大臣祝辭

一卒業生總代謝辭

第二部

一箏　選科卒業生〔萩原八重ノ／關ソ〕

一合唱　甲種師範科卒業生及生徒

千鳥の曲

甲、鞠場の默契……〔ノイマルク作曲／鳥居忱作歌〕

乙、早起……〔ニコラウス、デシュース作曲／旗野十一郎作歌〕

一オルガン獨奏　選科卒業生　山崎謙太郎

ミニユエット……バハ作曲

一ピアノ獨奏　本科二年生　田中ろく

アムプロムプチュ……シューベルト作曲

一女聲二部合唱　甲種師範科卒業生

甲、月前郭公……〔シューマン作曲／旗野十一郎作歌〕

乙、暮秋……〔シューマン作曲／武島又次郎作歌〕

一オルガン獨奏　甲種師範科卒業生　鈴木善野

甲　カプリチョー
乙　フィナーレ〕……レーマンス作曲

一合唱　甲種師範科卒業生及生徒

鞭聲肅々……〔メンデルゾーン作曲／鳥居忱作歌〕

**明治三十九年五月十九日、二十日　第十四回定期演奏会**

明治三十九年五月十九日

（土曜日）午後二時半開會

音樂演奏曲目

東京音樂學校

第一部

一　管絃合奏
　序曲……ケルビニ作曲
二　合唱
　甲　鞠場の默契……〔ホミリュース作曲／鳥居忱作歌〕
　乙　曙光……〔ラスス作曲／武島又次郎作歌〕
　丙　暮春……〔ベネケン作曲／武島又次郎作歌〕
三　管絃合奏
　合奏曲……ガデ作曲
四　ピアノ管絃合奏　教師　ドクトル、フォン、ケーベル
　司伴樂……ルビンスタイン作曲
五　絃樂合奏
　甲　悲情歌……チヤイコウスキー作曲
　乙　牧歌……シモネッチ作曲

第二部

六　管絃合奏
　甲乙丙〔前奏／聖唱樂／追覆樂〕……バハ作曲
七　合唱〔獨唱オルガン／管絃合奏〕
　樂頌……〔メンデルスゾーン作曲／安藤勝一郎作歌〕

Orchestral and Choral Concert
OF THE
Tokyo Academy of Music
Uyeno
Saturday May 19th 1906
AT 2. 30 P. M.

PROGRAMME.
PART I.

I. Ouverture:
　"Lodoiska"……*Cherubini.*
II. Choruses:
　*a.* Wer nur den lieben Gott lösst walten ……*Georg Homilius.* (1714-1785)
　*b.* Hymne ……*Orlandus Lassus.* (1532-1594)
　*c.* Den Entschlafenen ……*F. Beneken.* (1761-1818)
III. Andante con moto,
　from sinfonie B flat major ……*N. Gade.*
IV. Concerto for Piano and Orchestra in D minor ……
　……*A. Rubinstein.*
　*Dr. von Koeber.*

V. *a.* Chanson triste……*Tschaikowsky.*
*b.* Madrigal……*Simonetti.*

*String orchestra.*

PART II.

VI. *1.* Prelude
*2.* Choral
*3.* Fuga
……*Bach.*

*Arranged for Orchestra by Abert.*

VII. Chorus with soli, Orchestra and Organ,
from "Athalie"……*Mendelssohn.*

*Conductor : Prof. A. Junker.*

音樂演奏曲目梗概　第二　（あ、い、と）

一、管絃合奏序曲（オーヴァチュア）　ケルビニ

此歌劇は一七九一年七月十八日ケルビニ（*Maria Luigi Zenobio Carlo Salvatore Cherubini*）が作にして、其歌詞はフィリエット（ママ）、ロロー（*Fillette-Loreaux*）の作に係る。此曲成りてより須臾にして漸く世人に遺却せられ、今や人の之を知る者少しと雖も、而も其序樂のみは今尚屢演奏せらる。此曲敢て彼が管絃樂曲の最犇軼となす事能はずと雖、完成の作たるを失はず。其性質は遲緩なる起齣を以て始まり稍壯嚴の趣致を帶ぶ、急速の部分は全く古代序曲通有の形式に從ひ璀璨として生氣あり、第二齣は特に華麗、終局部は羊童樂を挿入し來り、以て劇の所作と相關聯せしむ。其精細は今之を傳ふる事難し、されば滑稽歌劇の一なれば其結尾は自ら光華錯落、快怡の趣あり。

三、管絃合奏合奏曲　ガーデ

丁抹の俊樂匠ガーデ（其主要なる諸曲は一八四一―一八八〇年の間にあり）が作る處「變ロ調合奏曲」一に或は陽春合奏曲（スプリングシンフォニー）と云ふ、蓋し全曲の趣致清新にして希望の光奕々たるものあればなり、華麗なる旋律と樂句と老ひ先きながき怡悅の情を嗜起せしむ。進行の形式はローマンスのそれと同じく、其樂器配置率ね高華溫雅なり。

四、ピアノ管絃合奏司伴樂（コンチェルト）　ルビンスタイン

近く此世を去りたるアントーン、ルビンスタインは有名なる露國の洋琴樂家にして、一世の俊才なりしが其諸作は巧拙錯然として評價し易からず。彼が「ニ短調洋琴司伴樂」は彼が作中秀逸となすに足るべく、殊に其第一進行は此曲を組成せる三進行中妙絕なるものなり。其第一齣は眞摯にして又少しく憂晦殆んど魔魅的なるさへあれど、調の速なるにつれ愁雲漸く開げ、次で絃樂器を以て導かれ來る平靜高逸なる第二齣に接する時は心自ら慰安暢達を得るの想あり。各進行の形式は概して言はゞ奏鳴樂（ソナタ）第一進行のそれと同じく、唯洋琴司伴樂の要求する所に從ひ多少の變成を許したるのみ、而して其進行は簡潔なれども樂家は特に此部に於て細心精緻なる完工を施せり。其之を被へる俊健の調は以て後世の範となすに足るべく、又たとへ所謂洞喝の嫌なきにあらずと雖、實に佳作たるを失はず。

五、絃樂合奏牧歌（マドリガル）　シモネッチ

牧歌は十四世紀の頃プロヴァンス（*Provence*）に起り延て伊獨諸國に擴がりたる四句乃至十六句より成る牧童歌なり。十五世紀に至りては此名音樂上に用ひられ三乃至七重音なる俗樂合唱歌の名となり、聖樂中嚴肅なる經文歌に對して俗的室樂の形式たりき。其最盛期は一五二〇―一六五〇年の間にあり、十九世紀に至りてレンネル（*Rennet*）の牧歌四部合奏等起りて更に一層の生氣を恢復せり。

六、管絃合奏前奏（プレルード）

聖唱樂（コラール）　追覆樂（フーガ）　バハ

此前奏（プレルード）は元來洋琴の爲に創作したるものなれど又よく管絃樂にも適當せり、其行くや安靜潤滑、以て聲樂の挿入を容すに足る。追覆樂（フーガ）はもと風琴樂として作曲せられたるものなれども是亦よく管絃樂にかなへり。此前奏、追覆兩樂の間にアベルト（*Abert*）は聖唱歌（コラール）の一節を挿入して全曲生來の趣致を害する事なかりしは幾多の變成中稀に見る所なり。此聖唱歌は後に定律（カンツス・フィルムス）として現はれ、追覆樂（フーガ）の主題は對位（コントラプンクト）となりて現はる。此曲は如上の形式に於て管絃曲に對し雄渾にして功果的作品となれり。

## 七、合唱（獨唱、オルガン、管絃合奏）

樂頌（コール）　メンデルソーン

原歌は悲劇アタリア中の合唱なり

悲劇アタリアは佛國古典的劇壇の明星ジャン、ラシーヌ（*Jean Racine*）が晩年の傑作にして一六九一年を以て世に出でたり。聖書に見えたるアタリアの物語（列王紀略下第十一章歴代史略下第二十二、二十三章）を材とし倨傲なるアタリアと沈靜にして而も宗教に熱心なる僧侶ヨード（*Jood*）と相對せしめて曠世の詩人は宗門統治と君王專制、猶太教と迷信との爭鬪を活寫せり、其詞華の正葩なるは云ふを要せざれども殊にレヴィ宗族の少女等を以て成れる其合唱は希臘古劇の範に則り溫雅にして熱誠溢れよく讃歌（ブサルメン）の高調を傳へて寔に佛文學の精華なり。今其梗概を提説せんにイスラエル王アハブの王女アタリアは猶太王ヨラム（*Johoram*）の妻なり、其子アハスア（*Ahaziah*）の死後自ら王位を奪ひ猶太王家の全門傾家を絶滅せしめしがヨアス（*Joas*）のみ僧ヨードに從ひて聖殿堂にかくれ辛ふして其毒手を逃れたり。一日アタリア此童子を見、疑惧百出心漸く穩ならず、童子の答辨の甚無心なるにも拘らず强て其交附を迫るヨード此に於て告ぐるに此童子が王家の係嗣なるを以てしレヴィ（*Levi*）宗族の救を得て之を王位に卽かしむ。アタリア彼を失はんと欲し殿堂に入らんとせしも扁關かたく鎖して開かず、遂にレヴィ宗族に捕えられ、處刑せられぬ。メンデルスゾーンは此劇の各齣に應じて序樂進行曲等數多の紹隨樂（インシデンタル・ミュージック）をものしぬ。此大なる合唱は第一齣第四場にあり。メンデルスゾーンの之を作るや忽卒稿を起しゝを以て多少其痕跡を認め得べしと雖も彼が曠世の才能は容易く之に勝つて其缺陷を補ひたり。且其効果の多少より論ずれば劇場よりは寧ろ樂堂に適せりと云ふべきなり。此合唱は概して華麗なれど其中特に彩華を極めたる諸曲部を見るべし卽略中間なる遲き同音合唱及結尾に近き女聲三部合唱等なり、總じて其純聲樂曲は小歌謳樂（カンタータ）の形式をとれり。此合唱は三段に分れ、演奏法よりすれば合唱及獨唱に分たる。ヘンデルの同名樂曲と同じく、要するに祈願をこむる一場なり其第一段は神を讃美し第二段は疑惧不安を以て問ひ第三段「オヽ聖なる神の戒律」の段は更に力を加えて感謝讃歌の調にかへる之音樂上より見て最彩華奕々たる一節なり歌詞と相叶ひて樂は更に精彩を放ち斯くて此合唱は結ぶに全く歌劇終齣（フィナール）の形式を以てせり。

Programme
OF
Orchestral and Choral Concert
BOOK No. 2
Sunday May 20th
1906
*at 2.30 p. m.*
Tokyo Academy of Music
Uyeno

Ouverture "Lodoiska."
Cherubini.

Lodoiska is a forgotten opera by Cherubini, but its Ouverture is still and even frequently played. It is not one of Cherubini's greatest works for Orchestra, but it is all the same perfect as it is. It begins with a slow introduction of somewhat

measured character. The Allegro is written quite in the usual form of an Ouverture of the classic period and is very bright and lively, the second subject being particularly fine. Towards the end a Pastorale is introduced, which must have some connection with the action of the play, any details of which the writer of this was unable to get. Lodoiska being a Comedy, the Ouverture finishes brightly and merrily.

H. H.

### Andante con moto from Symphony B flat Major.

N. Gade.

This Symphony by Gade—a most excellent Danish Composer, whose principal works date from about 1841–1880—is often called the "Spring Symphony" on account of its fresh and hopeful atmosphere, that pervades it. This name is certainly not the least appropriate to the slow movement, which is played at this Concert. The beautiful melodies and phrases all breathe that hopeful and breast-expanding sentiment, which the advent of Spring time creates within us. The form of the movement is that of a "Romance" and its instrumentation is noble and restrained.

H. H.

### Concerto for Piano and Orchestra in D minor.

A. Rubinstein.

Anton Rubinstein who died about six years ago was a Russian and a celebrated Piano-player and a very talented yet very uneven Composer. His Piano Concerto in D mi. certainly ranks with his best works and again its first movement, which is played to-day, is the best of the three movements the Concerto consists of. The first subject is serious and somewhat gloomy and there is almost something demoniac about it, but with the entrance of a quicker tempo it brightens somewhat up and the quiet and really beautiful and noble second subject, which is introduced by the String-instruments, is comforting and soothing to the mind. The form of the movement, broadly speaking, is that of the first movement of a Sonata with the necessary license to the requirements of a Piano-Concerto and although the movement is by no means too long, in fact very compact, the Composer has found time for a rather elaborate working part. There is something monumental about the movement with its commanding strength and although certainly not quite free from so-called "empty pathos" it is a really fine work.

H. H.

### Prelude, Chorale and Fugue.

Bach.

This Prelude is originally written for the Piano, but is well suited to be arranged for an Orchestra. It is of a quiet mood and runs along very smoothly, the different voices of course being masterly led. The Fugue is originally written for the Organ, but it also adapts itself well for the Orchestra. Abert introduced a "Chorale" between the Prelude and the Fugue and without hurting the original character of the piece, what can not be said of many arrangements. This Chorale becomes later on the "Cantus firmus" and the subjects of the Fugue become the Counterpoint. In this form it makes a very stately and effective work for the Orchestra.

H. H.

### Chorus with Soli, Orchestra and Organ from "Athalie."

Mendelssohn.

Athalia is a Drama by Racine, who lived from 1639–1699 and who is perhaps the greatest representative of the French classic drama. To this drama Mendelssohn has written incidental Music, as for instance an Ouverture and a march etc. This big Chorus is a sort of opening Chorus, coming directly after the Ouverture and a Dialogue. Mendelssohn had to write the Music a little hurriedly and there are certainly a few traces of that to be found, but with his great talent and with his great facility

of writing he almost overcame this drawback and this Chorus is bright and effective and many exceptionally fine parts may be found in it, as for instance the slow Chorus in unison towards the middle and the short Trio for female voices towards the end. In accordance with the work the Music is brilliant and the Chorus finishes quite in the style of a finale of an opera.

H. H.

〔批評および関連記事〕

樂　會

●東京音樂學校音樂演奏會　同會は去月十九二十の兩日に上野なる同樂堂に開かれぬ、本年春季樂界の趨勢は略此の會によりて察知するを得べく年を逐ふて發達しゆく同校の音樂は吾人の欣喜に堪えざる所なり。ピヤノに於けるケーベル博士の妙技は云はすもがな、絃に於けるチヤイコヴイスキイの悲情樂、ガーデのシンフオニイの流麗典雅なる、合唱に於ける暮春の感深き、平日の練習も忍ばれて同校職員生徒諸氏の勞を多とするものなり。

（『音樂新報』第三巻第五号、明治三十九年六月、三三頁）

**明治三十九年六月九日　試業演奏会**

第十九回選科生徒試業會順序（明治三十九年六月九日午後二時開會）

第一部

一　唱歌（單音）　男生徒

甲、子を思ふ母（フランツ作曲　黒川眞頼作歌）

乙、勇士（モツアルト作曲　旗野十一郎作歌）

一　ピアノ聯彈　〔鹿島辰司　河合正雄〕

マーチ　デヤベリー作曲

一　オルガン　宇津木喬子

甲、アンダンテ　メルケル作曲

乙、ガボット　バハ作曲

一　唱歌　女生徒

甲、春の心（ライネッケー作曲　白菊庵作歌）

乙、農家（作曲者未詳　大和田建樹作歌）

一　箏　〔中下小　村勝金　和子井　嘉子精　子子〕

秋の七草

一　ピアノ　山田きよ

ソナチナ　クーラウ作曲

一　ヴァイオリン　〔甲斐秀田　邊尚雄〕

二部合奏　プレエル作曲

一　オルガン　稲澤りう

アダジオ　ベートーフェン作曲

一　ピアノ　野崎貞麿

スピンネルリードヘン　エルメンライヒ作曲

第二部

一　唱歌（二重音）　男生徒

亡き友（メンデルスゾーン作曲　中村秋香作歌）

一ピアノ　角倉愛子
ソナチナ　クーラウ作曲
一箏　猿渡久子・文倉スヾ・榎本直
八段
一ピアノ　高折宮次
ヴァリエーション　ベートーフェン作曲
一唱歌（單音）　女生徒
天津乙女（メンデルスゾーン作曲　中村秋香作歌）
一ヴァイオリン合奏　生徒
ウェデングマーチ　メンデルスゾーン作曲
一オルガン　飯田隆健
アダジオ　ベートーフェン作曲
一ピアノ　岸本忠雄
ソナタハイドン作曲
一唱歌（二重音）　男生徒
甲、旅の夜（ルビンスタイン作曲　旗野十一郎作歌）
乙、春夜の夢（メンデルスゾーン作曲　作歌者未詳）

**明治三十九年七月七日　卒業式**

明治三十九年七月七日（土曜日）午後三時

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

第一部

一報告
一卒業證書授與
一校長告辭
一文部大臣祝辭
一卒業生總代謝辭

第二部

一箏　器樂部卒業生　河野ヒデ
嵯峨の秋……菊末調
一合唱
甲　玉匣……（バハ作曲　鳥居忱作歌）
乙　霜の旦……（ボヘミヤ民歌　旗野十一郎作歌）
丙　征途の夢……（エーヨルク作曲　鳥居忱作歌）
一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　川久保美須々
ソナタ……ベートーフェン作曲
一ヴァイオリン獨奏　器樂部卒業生　鳥居つな
ベルソイス……ゴダール作曲
一オルガン獨奏　器樂部卒業生　加藤ブン
アレグロ……ギルマン作曲
一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　澤田柳吉
ソナタ……ベートーフェン作曲

一 ヴァイオリン獨奏　器樂部卒業生　吉澤重夫

甲 サラバンデ
乙 ルーラ } ……バッハ作曲

一 ピアノ獨奏　器樂部卒業生　久野ひさ

コンセルト ……ベートーフェン作曲

一 合唱

神武東征 ……{ 鳥居へ / 枕ンデル 作歌曲

## GRADUATION EXERCISES
of the
Tokyo Academy of Music,
UENO PARK.
*Saturday July 7th, Meiji 39, (1906).*
3. P.M.

## PROGRAMME.

### PART I.

I. Report.
II. Presentation of Diplomas.
III. Address to the Graduating Class by the Director.
IV. Address by His Excellency Mr. Makino, Minister of State for Education.
V. Response by the Representative of the Graduating Class.

### PART II.

I. Koto:
Saganoaki.
*Miss Kono.* (*Graduate.*)

II. Chorus:
*a.* If I shall e'er forsake Thee. .....*Bach.*
*b.* Bohemian folks song. .....
*c.* Heimweh. .....*E. Jork.*

III. Piano Solo:
Sonata in A Major. .....*Beethoven.*
*Miss Kawakubo.* (*Graduate.*)

IV. Violin Solo:
Berceuse. .....*Godard.*
*Miss Torii.* (*Graduate.*)

V. Organ Solo:
Allegro Maestoso. .....*Guilmant.*
*Miss Kato.* (*Graduate.*)

VI. Piano Solo:
Sonata in E major op. 14. .....*Beethoven.*
*Mr. Sawada.* (*Graduate.*)

VII. Violin Solo:
*a.* Sarabande
*b.* Loure } .....*Bach.*
*Mr. Yoshizawa.* (*Graduate.*)

VIII. Piano Solo:
Concerto in C. Major. .....*Beethoven.*
(Cadenz by Kullak.)
*Miss Kuno.* (*Graduate.*)

IX. Chorus:
Halleluja from the Messiah. .....*Händel.*

○東京音樂學校卒業式　一昨日午後三時擧行したるが演奏會の餘興ある爲めか卒業式としては類稀なる多數の來賓式場に充ち伏見若宮妃殿下の御臨場を始とし貴婦人其過半を占め牧野文相、菊池男、山川前總長、各大學長以下教育界の名士亦た殆んど出席したるが如し富置教授は校長代理として一片の告諭をなし併せて卒業證書を授與し次に文部大臣は祝辭を朗讀し先づ我國の音樂は未だ普及の域に達せず且つ西洋音樂は未だ我國の人情風俗と相消化せざるを說き更に音樂夫れ自身に於て諄風化育の効能あるも之を敎へ之を奏する人の品性如何によりて大なる感化を與ふるものなれば卒業生諸子は品性を高尙にし技術に精練して國民感化を完うするに努よと結論し次で生徒總代の謝辭あり夫より演奏會に移り卒業生各自獨特の一曲を奏せしが最後に吉澤、久野二氏の獨奏及神武東征の合唱は最も喝采を博したるが如し散會したるは午後六時なりき

（『日本』明治三十九年七月九日）

○音樂學校卒業式　東京音樂學校にては七日午後三時より第十八回卒業證書授與式を擧行したり式に列せる紳士淑女無慮千餘名に達し他の學校には見るべからざる盛況を呈せしは第二部の演奏あるが爲なるべし定刻頃華頂宮妃殿下には淡黃色に純白の飾りある御洋裝に二種あまりの花を飾れるボンネットを召させ給ひて御臨場あり式は富尾木幹事の學事報告に依つて開始され次年度より學期及び師範科に變更を加ふる事入學志望者の近年益益增加し分けて本年は前年より百名を增したりしも入校せしめたるは僅かに其十分の一に過ぎざる事及び特待生等の披露あり次で校長病氣の爲め幹事代りて卒業生（聲樂部一、器樂部十一乙種師範科九選科唱歌二同風琴二）に證書を授與し校長告辭の代讀に次で牧野文部大臣の祝辭卒業生總代小松耕輔氏の謝辭等了りて直に第二部に移り既記の如き曲目の演奏あり何れも來會者の心耳を淸からしめたるが殊に久野久子のピアノ獨奏（コンセルト）は滿場の拍手少時は鳴りも已まざりき最後に鳥居氏作歌の神武東征の合唱高低二部の妙緩急調節の變化得も云はれず斯くて餘音の尙耳に殘れる六時過ぎ演奏を終れり來場者の重なるは土方伯、濱尾大學長、山川健次郎氏、金井、穗積兩博士、菊池男、福原專門學務局長赤司秘書官田所參事官野尻視學官等なりし

（『時事新報』明治三十九年七月九日）

## 東京音樂學校　卒業演奏短評

庭栖

再昨日に於ける同校卒業式概況は既報の如し、今左に當日の演奏に就て短評を試みむ

▲箏　彈奏者は河村ひで子にして、盲目の男子之が合奏者たり、題は『嵯峨の秋』。河村孃の態度は落付き、彈奏亦た充分、されど聲は深く廣かりし割合に量足らざりしは遺憾。これ盲目男子の声痟高く且つ錆び彈奏稍衒ふが如き故なりしか。

▲合唱　は前後二回、第一回は『玉匣』『霜の旦』『征途の夢』の三にして例により上野式の夫れ。第二回は鳥居忱氏作歌、ヘンデル作曲の『神武東征』にして極めて壯嚴なるもの。會衆をしてそゞろに神武の帝が天業建基の大業を偲はしむ『天晴れよ』

▲ヴアイオリン獨奏　こも亦た二回、鳥居つな子はゴダール作『ベルソイス』先づ無難。吉澤重夫氏はバハ作にして幽麗なる『サラバンデ』輕快なる『ハール』の二曲を奏しぬ弓の運、絃の調中々に聽き應へありき

▲オルガン獨奏　曲は變化少き、ギルマン作『アレグロ』奏者は加藤ぶん子、能く忠實に譜を辿り眞面目に奏せり。

▲ピアノ獨奏　川久保美須々子はベートーブエンの『ソナタ』を奏せり、是亦前同斷右の如くにして以上數番は殆ど甲乙なかりしが、獨奏の殿として登壇せし、

▲久野ひさ子　のピアノ獨奏は當日の白眉たりしは勿論、近來の同校卒業生中の稀に見る技量なるべし、孃が比較的矮少なる短軀を擡げて登壇し、悠然樂器に對するや會衆をして暗默の中に襟を正ふせしめぬ。曲はベートーブエンの作にして有名なる、『コンセルト』。伴奏者は幸田教授。斯くて試彈一響、會衆は寂然片唾を飲めり、既にして大絃小絃切々嘈々、纖

手鍵上に躍り、美妙の音機微の響、進み進んで廣き樂堂唯だ此雄大なる樂音のみの感あらしめぬ。堂を滿せる會衆は皆悉く醉はしめられ、暫し無人境の有様を呈せり、幾何のタイムも何時の間にか經過し、絃音止みて曲の終を告ぐるや急霰の如き拍手は孃を讃稱し成功を祝し、暫し止むべくもあらざりき、蓋し孃は天才なり。吾人は孃の如き妙手の出てたるを賀すると共に、益々自重し、益々研鑽に心身を砕き、斯界に貢献する所あらんことを切望するものなり。

（『毎日新聞』明治三十九年七月十日）

●東京音樂學校卒業式　東京全市寧ろ日本全國に於て卒業式の最も盛大なるは恐らくは同校なるべしこれ生徒成蹟披露の爲めに音樂演奏會の附屬せるためなるべし此度擧行せしは第四回本科卒業證書授與式なり、當日は特に伏見若宮妃經子殿下御臨場あらせられ牧野文部大臣、濱尾大學總長、土方伯等來賓三百餘名にして一同席定まるや校長は卒業生二十五名に對し卒業證書を授與し終つて校長の告辭あり次ぎに牧野文相の祝辭、生徒總代の答辭ありて第二部卒業式に入り卒業生の奏樂等あり散會せしは午後五時過なりき卒業生は原田潤（聲樂部）小松耕輔、吉澤重夫、川久保美須々、鎗田倉之助、河野ひで、木村ます、森田孝、澤田柳吉、鳥居つな、加藤ぶん、久野ひさ（器樂部）合計十二人也、演奏曲目は箏（嵯峨の秋菊末調）器樂部卒業生河野ひで、合唱（甲玉匣、乙霜、丙征途の夢）ピアノ獨奏（ソナタ）同川久保美須々、澤田柳吉（コンセルト）同久野ひさ、ヴァイオリン獨奏（ベルソイス）同鳥居つな（サラバンデ、ルール）同吉澤重夫、オルガン獨奏（アレグロ）加藤ぶん、合唱神武東征

（『音樂』樂友社、第十巻第四号、明治三十九年八月、四五頁）

●音樂學校の優等女生　七日東京音樂學校に擧行されたる第十八回卒業證書授與式の際第二部演奏の最後に於て久野久子がピアノを彈じて其技能の非凡なる事を來會者に知らしめたり實に久子は今日迄の同校卒業生中の白眉にして先輩教職員も將來に望を屬し居れりといふ同孃は滋賀縣大津市字馬場百八十一番地農久野彌助の二女にて九歳の春京都に出で土地の尋常小學校に學びつゝ傍ら同地の宗匠に就きて琴曲を學ぶ事八年、而かも不幸にして生來跛の上に體質さへ弱かりし爲め普通の學業を修むるに堪へず左らば其嗜好に投ぜし琴曲をば此上尚ほ充分に研究せんと志せし折柄兄彌太郎の勸誘もあり十八歳の春初めて音樂學校豫科に入りしが更に洋樂の趣味を解せざる事とて當初は稍や失望の様なりし矢先不幸は重ねて久子の身邊を襲ひ一年餘肋膜炎を病みたり左れど初一念を飜さず愈々ピアノの研修に精力を注ぎ本科生となりては更に熱心なる幸田女史の指導によりてピアノ專攻に勉め學校家庭の別なく一日七時間づゝは必ずピアノの温習に費したる結果驚くべき發達を示し今や巧妙なる樂手として許さるゝに至れるも久子は尚ほ飽かずして益々樂界の深秘を探らんと志し新學期よりは研究科に留る筈なりとぞ又同日最初に嵯峨野の秋を琴に彈じて均しく來會者の耳を驚かせし河野ヒデ子は幼より和樂を好みしも父存生中は嚴しく差止められ母なる人の懇望に依りて琴のみは許され七歳の時より稽古に身を入れ往々年長者を驚かせし事あり三十五年同校專科に入り本科に琴曲部の新設され教授には幼少の時の師匠なりしに心勇みて益々勉勵せる結果早くも免許皆傳となりたるなりと

（『音樂新報』第三巻第七号、明治三十九年八月、三九頁）

**明治三十九年十一月十日、十一日　第十五回定期演奏会**

明治三十九年十一月十一日午後二時開會

音樂演奏會曲目

東京音樂學校

第一部

一、オルガン獨奏　教授　島崎赤太郎
トッカータ、ウンド、フーゲ……バハ作曲

二、合唱　生徒
甲　蕎秋の杜……獨逸小唱　倉田三郎譯歌曲
乙　神官……メンデルスゾーン作曲　石倉小三郎譯歌曲

三、ピアノ獨奏　助教授　神戸絢
ラプソディー……ブラームス作曲

四、獨唱　研究生　藤井環
ファアウェイ……カリウォーダ作曲

第二部

一、絃樂四部合奏
甲　ノルディッシュ、ソング……シューマン作曲
乙　カンツォナ……ハッセ作曲

二、女聲三部合唱
甲　清流……ブラームス作曲　武島又一次郎作歌
乙　述懷……ブラームス作曲　武島又一次郎作歌

三、ピアノ、ヴァイオリン合奏……ベートヴェン、ハイドン、ヘンデル、ヘンリッヒ

ヌアー、ダンド、アンド、アレグロテ……ゴールドマルク作曲

四、合唱　生徒
甲　蕎前の母……安藤勝一郎作歌　ナニヒ作曲
乙　菊の盃……武島又一次郎作歌　ベートフェン作曲

CONCERT
OF THE
Tokio Academy of Music
UYENO PARK
Sunday November 11th 1906.
AT 2. P. M.

PROGRAMME.

PART I.

I. Organ Solo:
Toccata und Fuge.....*Bach.*
*Mr. A. Shimasaki.*

II. Choruses:
*a.* Im Herbste.....*Altdeutsche Volksweise.*
*b.* Wirf dein Anliegen.....*Mendelssohn.*
*Students of the Academy.*

III. Piano Solo:
Rhapsodie in G minor .....*Brahms.*
*Mrs. Kambe.*

IV. Soprano Solo:
Far away (with violin obligato).....*Kalliwoda.*
*Mrs. Fujii.*

PART II.

I. String Quartette:

*a.* Nordish Song .....*Schumann.*
*b.* Canzona .....*Hasse.*

II. Partsongs for Female voices:
*a.* Greetings.....*Brahms.*
*b.* Song from Ossian's Fingal..... 〃

III. Andante sostenuto and Allegro from the Suite for Piano and Violin in E major .....*Goldmark.*
*Messrs. H. Heydrich and A. Junker.*

IV. Choruses:
*a.* Stabat mater dolorosa.....*G. Nanini.*
*b.* O welt, du bist so Schön .....*Beethoven.*
*Students of the Academy.*

## 音樂演奏曲目梗概　第三　（と、い）

### 第一部

### 一、オルガン獨奏　バハ

#### トッカータ及フーゲ

トッカータは有鍵樂器曲として十六世紀頃既に用ひられたる形式にして強烈なる和絃と華美なる裝飾音とを交錯して樂器の特性を發揮せんと勗めたるもの、もと整齊に作成せる曲の前彈きとして奏したる主題變成の自由なる前奏（プレルディウム）より出でたり。現時此名の示す處は短き音符を以て作られたる有鍵樂器曲に過ぎず。

フーゲ（追覆樂）はバハの時代に於けるオルガン樂、ピアノ樂の最美なる形式なり。抑も他の音程にて一の主題に答ふるの原理は既に千六百年以前に行はれたる事なるが漸次發展してバハ時代に至り特殊顯著なる一形式となれり。其要は單音を以て奏せらるゝ主題（テマ）をうけ、通例五度の反覆を行ふ之を答（アントウオルト）といふ、其間に前主題は此答に對して對位法となりて進む、之を反主題（ゲーゲンザツツ）といふ、更に轉調して完工（デュルヒフユールング）の精微を致す、斯の如く相反對せる諸調を經過したる後遂に主調に復歸して、全曲に統一を與ふるなり。

### 二、合唱

#### 甲、暮秋の杜　獨逸古民曲

詩と曲と共に獨逸の民謠にして此民族が音樂的氣韻を窺ふによろし。ここに「秋の歌」と題せるはホフマン、フォン、ファルラースレーベンが改作にかゝる。これを意譯したるもの次の如し

一、一葉もとめずそまがた枯れ、奥都城のごと、我世靜か。
二、諸聲（もろごゑ）今は、きかぬもうべ、露霜恐れ、逃れ去りぬ。
三、渡りし小鳥、悲しと見ば、今こそ思へ、神の攝理。
四、とこしへ消えじ、長閑けき春、かはらであらむ、胸の中に。

#### 乙、神言　メンデルスゾーン

詩篇五十五章二十三節の語を藉り來り、神は正しき人の惱めるをあだには見給はじと、神惠の天地と共に窮なきを讃したるものなり。

### 三、ピアノ獨奏

#### ラプソヂー　ブラームス

古代希臘に於て長篇抒事詩斷片を稱してラプソヂーといふ、其語源を窮極すれば希臘語のパイン及オーデーより來る蓋し採擷せられたる歌曲といふ義なり。而して近代音樂に於て此名の示す處國民的旋律を採擷補綴して作成せる器樂曲ファンタジアにしてリストの匈牙利ラプソヂーの如き即之れ。ブラームスはピアノ曲ラプソヂーに於て別に自ら機抒を出たし寧ろ近く此語の原義に接觸せり。爰に演奏せらるゝものは近代樂曲の一としては出來得る限り此語の原義に適へるもの、其主題は短確又實に斷片的なり、全曲の趣致激越にしてしかも尙遒麗なり。

### 四、獨唱

#### ファー、アウエー　カリウオーダ

題して「をちかたに」といふ、山姿水容の婉麗と暮雲の搖曳とに托して憧憬の情を抒へたるもの、「遠方に心さまよふ」の一句リフレインとして

數次繰り返へさるゝ處間婉喜ふべし。之に伴ふヴァイオリンの音部は特に重要にして諧音の妙を發揮するに於て須臾も離るべからず、故にオブリガートといふ。曲はカリウオーダの作る處、十九世紀後半獨逸有數の樂家なり。

## 第二部

### 二、女聲三部合唱

甲、清流　ブラームス

乙、述懷　ブラームス

此兩合唱とも女聲三部に副ふるに二個のホルン及一個のハープを以てす這般の配合は稀に見る處なれども、此曲の如きは最成功したる例なり。前者題して園丁といふ、獨逸ロマンテイツク派の詩人アイヘンドルフの嘱する處、二個のホルンは小なる牧歌（イデユル）の趣致を與へ、之を被ふにハープの陽光耀麗たる妙音を以てす。後者は「オシアーン」が挽歌の一節なり、オシアーンは三世紀頃の蘇國の怜人なり、詩は勇士少女等が國王フィンガルの宮殿に集まり、叢雲罩めたる蒼空を照らす星斗の光淡き蘇國風物の凄惋に托し、三軍を覆して斷蓬の間に逝きし勇士を鼓琴痛哭するもの、近代に至り史上より抹殺せられんとしたれども、一度びギョーテがウェルテルの一節として傳へられたるもの激楚の悲音ながく忘るべからず。斯曲をなせる一節、また花の少女が若くして逝きし勇士を悼む詞、ハープの清商流轉を以て古代蘇國戰士の風韻を寫し得たり、こゝにはホルン音部はオルガンを以て、ハープ音部はピアノを以て奏せらる。

### 三、ヴァイオリン、ピアノ合奏

アンダンテ、ソステヌート

アンド、アレグロ　ゴルドマルク

カール、ゴルドマルクは近代獨乙樂家中の錚々たるもの、好て諸樣の樂曲を試み、室樂、管絃樂劇樂に於て特に其盛名を馳せたり。作品第十一スイトは思ふに彼か盛名を獲得せる第一の作なるべく奏演數過益其妙を覺ゆ。斯曲は五進行よりなり今日演奏せらるゝは其二進行のみ。アンダンテの主題は正葩よく法度に中り、しかも少く暗昧の趣致ありヴァイオリンの之を始むるや、カノンはオクターブに於て之を享けピアノは一小節後れて同主題を奏し倏忽として消ゆ、起句は激越の調あれども其終るや穩切涓々たり。アレグロは長からず、其構成又簡單なりされど其始は光華璀璨として氣韻多し。第二主題は平靜なる錯錯を與へ、近代の多少冗長なるスイト曲に對して巧なる進行の端緒をなせり。作者は猶太の系統に屬するか故に其感情東洋的なり。而して最よく此兩音樂器の爲にものしたりと云ふを憚らず。

### 四、合唱

甲、墓前の母　ナニニ

ナニニは、一五七〇年ワレラノに生れ、一六〇七年三月十一日歿す。所謂ローマ樂派の作家なり。彼はパレストリナの門に出で、幾もなくして遂に師の箕裘を嗣ぎぬ、其門亦た多く儁秀を出だす、就中アレグリの如きは鐵中の錚々たる者也。史家或は彼を稱してパレストリナ樂派の代表者と爲す。蓋、其然る所以の者は、決して〇パ樂派を創立したりと云ふ意義に非ずして、寧ろ當時既に模倣的技巧にのみ流れしネザランド樂派の對位法を執りて、之を自派の焙爐に融化したる點に在つて存す。

斯曲の原表題は「歎ける母」にして、其歌詞の作家はトディ（G. Da Todi）也。（あ、と）

乙、菊の盃　ベートーフェン

ベートーフェンは、一七七〇年十二月十六日維納〔ボン〕に生れ、一八二七年三月二十六日歿す。合奏曲司伴樂及び室内樂の名家たり。斯曲の原表題は「宇宙の美」、其歌詞はローデンベルグ（I. v. Rodenberg）の屬する所なり。（あ、と）

Programme
OF
CONCERT
BOOK No. 3
Sunday November 11th
1906
at 2. p. m.
Tokyo Academy of Music
Uyeno

## Rhapsody.

Brahms.

Rhapsody was the name given in ancient Greece to fragments of great epic poems. In modern music by Rhapsody is often understood an instrumental Fantasia made up of national melodies, so for instance Liszt's Hungarian Rhapsodies etc. whereas Brahms in his two Rhapsodies for the Piano adheres more closely to the original meaning of a Rhapsody, in fact the one which is played to-day is perhaps as much in conformity with the original meaning of the word as a piece of modern music possibly can be, its subjects being short and abrupt, in fact "fragmentary." The character of the piece is on the whole passionate and at the same time somewhat ponderous, the latter quality characteristic of Brahms.

H. H.

## Partsongs for Female voices.

*a. Greetings.*
*b. Song from Ossian's Fingal.* Brahms.

These two Choruses are written for female voices with accompaniment of two horns and a harp, rather an unusual combination, but in this case a most happy one. In the first Song "the Gardener" the two horns give it the character of a little "Idyl" where as the harp covers the whole scenery with sunshine. The words of the second and more important song—— a lamentation of a maiden for her youth, who has been slain in battle, are from a very old, nordish poem. The music with the help of the two horns and harp breathes the atmosphere of ancient Highland life, its folk-lore, its history and heroes. It is a highly poetical and beautiful Song. The two horns will be played on the Organ and the harp-part on the Piano on this occasion.

H. H.

## Andante sostenuto and Allegro from the Suite
*for Piano and Violin in E major. op. 11*

Carl Goldmark.

Carl Goldmark is a modern German Composer of great repute, who has tried himself in many branches of music, in three of which he made his name in particular, namely in Chamber Music, in works of some importance for Orchestra, and in Opera. The suite op. 11 in five movements, two of which will be played to-day, was—at least as far as the knowledge of the writer of these lines goes—the first work that made his name and was at once much played. The subject of the Andante is of a measured, and somewhat sombre character. When the Violin takes it up, an attempt is made of a Canon in the Octave, the piano playing the same subject one bar later, but is soon given up. The movement works up very effectively, but finishes softly and soothingly. The "Allegro" is not long and of simple construction, but it opens brightly and with much spirit—the second subject giving the necessary relief and makes an excellent opening movement for a somewhat lengthy Suite in modern style. Goldmark being of jewish parentage, the music of this work is at times decidedly oriental in sentiment. I may add, that the music is well written for both instruments.

〔批評および関連記事〕

H. H.

## 竹韻絃聲

つゆまろ

### 上野樂堂秋季演奏會

■音樂會は多し……去れど聽くべき音樂の少なきは我國の現狀にあらずや。此の時に於て唯一つ音樂會らしき音樂會は上野樂堂の其れあるのみ。秋たけし藝苑の寂寥は幾分か是れによりて色彩を添えられし心地す。さるにても

■切符を發賣せぬは何故ぞ……例の主義にて音樂家は金で演奏するのでは無いと云ふのか、其れとも入りが無くてのことか、兎に角入場券を售らぬは大なる考違なり。若し入場券を賣らぬとすれば勢ひ入場者は學校に緣故あるものゝみとなるべし、處が音樂の眞の聽衆は學校で招待する何の某などでは無し、其外の人々に多きなり、金を出しても聽こうと云ふ人でなければ、眞の愛樂者では無きなり、學校で有り難たがる古るくさき連中には全く音樂の味方は無きぞかし。歌舞伎の觀料が一寸三圓する世の中に一圓の音樂會に文句云ふ人は決して無かるべし。

■初見參は島崎氏……のオルガン。先つ第一あんな大破損のオルガンでは演奏も何も出來たもので無し。如何なる名手でもあれでは匙をなげざるべからず。

■合唱、暮秋の森に神言……土曜の無調法は日曜に稍おぎなはれたり、二つとも美くしき合唱曲なり殊に神言は美くしく聽けり、詞の不明亮なるは例に依て例の如し、どうしても演習の不充分に歸すべし。石倉氏の譯歌も道歌めかで嬉し、暮秋の杜の二節。「思へば神の攝理ぞこれ、心はいつも樂しからむ」は意味をなさずと思はる、いかゞ。神言は無難。

■神戸夫人のピヤノ……先づブラアムスを彈ぜられたるは何より嬉し、特に近代樂の特徴とも云ふべきラプソデイを彈ぜられたるは猶嬉し、曲も決して易々たるものにあらず、ひきぶりもいとめでたく、語るが如きメロデイも確に受取られたり、近來同樂堂の才媛、特に教授諸氏の獨彈あまり無き時に於て夫人の此の勤勉あるは感謝に堪えざる處なり。

■環孃のファーアウエー……美くしく歌はれたり、特にユンケル氏のオブリガート、惻々として肉聲に迫る處、一場の美くしき夢の如し、孃の聲、稍々音量を失したる如きも、從來の單調を脱せんとする努力苦心は明かに聽かる、向後必ず見るべきの一大發展あらん、切に黽勉を望む。

■二部は絃樂四部にて始まれり……シユウマンのもハツセのも凝たものなり、ユンケル氏もハイドリヒ氏も云ふ處なけれど多氏のセコンド中々確に奏されたり、唯セロは惜しきことに音程はづれたり。

■ブラアムスの女聲三節……先つ演奏の出來ばえより曲調の美々しきに恍惚せり、ハイドリヒの伴奏の自由なること、其れに曲はブラアムスなり、「花咲くあした月澄む夕」のあたり、どうしてあんな美くしき和聲が湧いてくるのか、氏の曲を聽くと、同じ流れをくむメンデルスゾオンなどは余りに幼稚に見えるなり。其上伴奏の凝てることは獨逸樂家の中では一番なるべし。而し是を紹介し得た演奏者諸孃の出來榮えも十分なり。武島氏の歌詞、清流は面白し。懷述は成功と云ふべからず、取材が既にブラアムスにはふさはしからず、又語句より云ふも「水上の沫」など云ふ處は頗る曲節を破れる如し。それに一般情熱に缺如たるは最も遺憾なる處なり。

■目覺しきは……ハイドリヒ氏とユンケル氏のピアノとバヰオリンとの合奏なり。兩雄得意の技を擁して壇上に見ることなれば、評するも愚……と云へば無責任なれど、全く當日の桂冠は兩雄の頭にかけらるべし。評者はアレグロよりもアンダンテを面白しときけり、あまり大家になると、技術がうますぎて肝甚(マヤ)の肝がお留守になるようで、其ればつかりは遺憾に思へり、特にテクニカルなアレグロの部分はそう思へり。

■最後の合唱……は墓前の母に菊の盃、以前も同校にて演奏せしもの、いつ聽ても面白い。今回の合唱は皆小さきものばかりなるが、少し纏まつた合唱も聽かせて貰ひたきものなり。

■秋更けたる上野の杜……に一點の紅花を與えしは此の音樂會なり、我

樂界を幼稚なりと云ふ勿れ、我等一夕の美しき夢を享樂したるは此の樂會を措きて果して他に何處にありや。詩と云へ、小說と云へ、劇と云へ、繪畫と云へ。噫我等一夕の美夢に恍惚たるを得るは何處にありや、木の葉散りて、評者は轉た藝苑の寂寞を感ずること甚だし。

■島崎氏の出演は……吾人をして大に意を强うせしめたり。樂苑多事、さなきだに人材なきを憂ふるときに多大の囑望を負ふて歸られたるは吾人の欣喜に堪えざるところ、我音樂學校も是に依りて大に面目を改めたる心地す望むらくは、毎會(ママ)演奏の壇上にカイゼル髯の凛々しき男績々として現はれんことを。

（『音樂新報』第三巻第十一号、明治三十九年十二月、二八～三〇頁）

## 明治三十九年十一月二十五日　試業演奏会

### 第二十回選科生徒試業會順序

（明治三十九年十一月廿五日午後一時三十分開會）

第一部

一唱歌（單音）吾大君……（メンデルスゾーン作曲　中村秋香作歌）女生徒

一ピアノ聯彈進行曲……ヘンデル作曲…（樋口ユリヤ　平田卯江　渡瀨春惠）

一ヴァイオリン（ガボッテ）……バハ作曲…菊地みさを

一ピアノ（ソナチーネ）……デュセック作曲…今村龍男

一オルガン（メヌエット）……ハイドン作曲…櫻井とみ

一ピアノ（ソナチーネ）……クレメンチ作曲…菊地つる

一箏（松虫）……（下勝子　南公子　小金井精子）

一ピアノ（メヌエット）……モツァルト作曲…鹿島辰司

一唱歌（二重音）幽棲……（バーネット編　鳥居忱作歌）男生徒

一ピアノ（ソナチーネ）……クレメンチ作曲…石川靜

第二部

一ピアノ（ソナチーネ）……クーラウ作曲…瀧野たきえ

一ヴァイオリン（コンセルチーノ）……シット作曲…田邊尚雄

一唱歌春告鳥……（ルービンスタイン作曲　鳥居忱作歌）女生徒

一ピアノ　シューマン作曲……野崎貞麿
　　甲、フレーリヒヘル、ランドマン
　　乙、ガロップルードリヒ作曲

一オルガン（ソナチーネ）……ラインハルド作曲…辻美亞

一箏（松盡し）……（藤岡美代　北村三岐　服部喜代）

一ヴァイオリン　甲、アンダンテ、カンタビーレ
　　乙、エベルハルト作曲　ターランテルレ……生徒

一ピアノ（ソナタ）……モツァルト作曲…原馨

一唱歌（都の春）……（ポーレシツ作曲　鳥居忱作歌）男生徒

（『音樂新報』第四巻第一号、明治四十年一月、四一頁）

●試業會　去る十一月廿五日上野公園東京音樂學校に開會したる同校選科生試業會は別記曲目の通演奏せられたるが出演者の伎倆益々進歩し平素の訓練の功も察せられていと目出度かりし、中にも辻美亞子のオルガン、田邊尚雄のヴァイオリンの如き素人離れしたるものにて一層の聽ごたへありき、其他の諸氏も平素熱心に練習したる功見へ上出來の方なりしが野崎氏のピアノの粗雜なるには一驚せり爾來愼重の練習を望む

（『音樂新報』第四巻第一号、明治四十年一月、四〇頁）

## 明治三十九年の概評

### 去年の洋樂界

モツアルト紀念音樂會――グリフキス氏渡來――日比谷吹奏樂――島崎氏歸朝と演奏會――樂友倶樂部の演奏

去年の洋樂界は前年に比して甚だ寂寥を感ぜしめたり、然れども其新年の劈頭（へきとう）に於て樂壇に一朶（だ）の花を飾りしはモツアルト誕生紀念音樂會なりき、モツアルトは獨逸の樂人、一世の天才を以て其名樂界の明星と輝けり、西暦一七五六年一月ザンブルグ〔ママ〕に生れ、六才にして既にヴアイオリンの小コンセルトを作りたり、長じてオペラの作に心をこめ、戀愛の神聖を謳歌して人世の慰安を一枚の譜表に求めしめぬ、其沒せしは一七九一年十二月五日齡三十五才なり、此樂星生れてより卅九年の一月は恰（あたか）も一百五十年の紀念期に相當せり、こゝに於て東京音樂學校學友會諸氏は其偉業の偉光を仰ぎ紀念音樂會の演奏を行ひしなり、此日モツアルトの手になりしものドンヂユアン、ソナタの二曲は會員諸氏の妙手に奏せられたり、〔中略〕秋より冬に入りては十一月に於ける音樂學校の演奏會あり、十二月に於ける樂友倶樂部の演奏會あり、音樂學校の演奏會には新歸朝者たる島崎氏がオルガン獨奏に依てトツカータ、ウンド、フーゲの新曲を紹介せり、又樂友倶樂部の演奏會には北村、前田、石原諸氏の管絃合奏を以て、才末樂壇を賑はしく閉づるを得たり、如上の盛況を以て去歳は長（とこしな）へに過去の夢に入りたり、之れを繼承したる本年は吾樂檀に何等かの發展を來さゞらんや、さても多望なる明治四十年！

（『音樂月刊』第二十五号、明治四十年一月、二頁）

## 明治四十年三月二十三日　卒業式

明治四十年三月二十三日（土曜日）午後二時

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

### 第一部

一　報告
一　卒業證書授與
一　校長告辭
一　文部大臣祝辭
一　卒業生總代謝辭

### 第二部

一　合唱
　甲、稜威耀乎……〔パレストリナ作曲／鳥居忱作歌〕
　乙、霜の旦……〔ボヘミヤ民歌／旗野十一郎作歌〕
一　ハーモニユーム合奏　甲種師範科卒業生〔中田章／原田彦四郎〕
　フオルスピール……リヒテル作曲
一　獨唱　聲樂部卒業生　井村はるよ
　リナルド……ヘンデル作曲
一　ピアノ獨奏　器樂部卒業生　田中ろく
　ソナタ……ウエーベル作曲
一　ヴアイオリン獨奏　器樂部卒業生　多久寅
　コンセルト……ベリオ作曲
一　ハーモニユーム獨奏　甲種師範科卒業生　中島かつ
　ファンタジー……キストレル作曲
一　獨唱　聲樂部卒業生　竹内イマコ

一 オチソイス……マックス、ブルッフ作曲
一 ピアノ獨奏　器樂部卒業生　上原喜勢
一 カプリシヲ、ブリランテ……メンデルスゾーン作曲
一 獨唱　聲樂部卒業生　鹽濱ちか
一 ショフンゲ……ハイドン作曲
一 合唱
甲、雲雀……フレッシュ作歌
　　小野竹三
乙、菊の盃……ベートフェン作歌
　　武島又二郎

## GRADUATION EXERCISES
of the
## TOKYO ACADEMY OF MUSIC,
## UENO PARK
*Saturday, March, 23th, Meiji 40, 1907.*
2. P. M.

## PROGRAMME.

### PART I.

I. Report.
II. Presentation of Diplomas.
III. Address of the graduating class by the Director.
IV. Address by His Excellency Makino, Minister of State for Education.
V. Response by the Representative of the Graduating Class.

### PART II.

I. Choruses:
  *a.* Adoramus .....*Palestrina.*
  *b.* Bohemian folks song.
II. Harmonium Duet:
  Vorspiel .....*Richter.*
    *Messrs. Nakada and Harada.* (*Graduates*)
III. Vocal Solo:
  Rinaldo .....*Händel.*
    *Miss Imura.* (*Graduate*)
IV. Piano Solo:
  Sonata .....*Weber.*
    *Miss Tanaka.* (*Graduate*)
V. Violin Solo:
  Concert .....*Bériot.*
    *Mr. Ono.* (*Graduate*)
VI. Harmonium Solo:
  Fantasie .....*Kistler.*
    *Miss Nakajima.* (*Graduate*)
VII. Vocal Solo:
  From Odysseus.....*Max Bruch.*
    *Miss Takenouchi.* (*Graduate*)
VIII. Piano Solo:
  Capriccio Brillante .....*Mendelssohn.*
    *Miss Uehara.* (*Graduate*)
IX. Vocal Solo:
  From the Schöpfung.....*Haydn.*
    *Miss Shiohama.* (*Graduate*)

X. Choruses:

*a.* Old Flemish Song.

*b.* Nun bricht aus alle zweigen .....*Beethoven.*

●東京音樂學校卒業式　三月廿三日午後二時より牧野文相臨場盛大なる卒業式を擧行したり在來は三月に師範科七月に本科と各別に卒業式を擧行したりしが本年より各科共同時に學期を始終して同時に卒業することとなれり。本學年の卒業生は本科八名、師範科甲種十三名乙種十名撰科一名にて卒業式後左の演奏あり〔曲目省略〕

（『音樂』樂友社、第十一巻第六号、明治四十年四月、二七頁）

東京音樂學校卒業式及其演奏會

朝よりの暴風雨も正午頃は全く晴れて上野の森、時を得顔小春めき渡る三月二十三日午後二時同校の卒業式は富尾木氏の報告を以て始まり申候、從來學年は九月に始まり翌年七月に終りしも四月より翌年三月迄と改め本年度の卒業生は一學期間短縮して師範科と同時に卒業する事とせり其他學課にも一二の變更を加へたり尚本年の卒業生は本科八名師範科十三名選科一名なり師範、中學及高等女學校等の教員として採用を申込み來れるもの二十四ありしも僅に其半數の求めに應ずるを得たるのみ云々と報告せられ候、次で高嶺校長より卒業生諸氏に卒業證書の授與あり續いて校長の告辭牧野文相の諭示的祝辭卒業生總代の謝辭有之候、式は之にて終り第二部としての演奏に移り候、例の如く演奏は合唱を以て始まり申候。

甲、稜威耀乎は原曲の崇嚴なるに比し歌詞其宜しきを得ざる樣覺へ候、中途より乱れしは練習の不足なりしものかと思はれ候。

乙、霜の旦、御馴（ママ）みの曲。結構と申すべきのみ

中田、原田二氏のハーモニユーム合奏は表情今少しと覺へ候、

井村孃のリナルド　表情は充分なりしも發音は如何にや少しく無鐵砲の樣感せられしは辟眼か。

田中孃のウェーベルのソナタ練習充分にて結構の出來に候、

多久寅氏のヴァイオリン獨奏　壯姿ステージに現はるゝや拍手霰の如し、蓋し本日の聞きものに候へば、幸田技術監の伴奏にて始まり申候、曲は曲なり伴奏亦可なり、氏の靈腕は更に一層の妙を加へたりと覺候、緩急强弱高低曲折其宜しきを得滿堂恍惚として醉へるが如く。天來の樂終りて自ら起る喝采に漸く醒めたる樣にて暫しはどよめき申候、モツアルトの幼時も斯くやなど私語く人も有之誠に樂界此の人を得たるを悅ぶ次第に候。

中島孃のファンタジー　亦奇麗なる演奏と申すべきか

竹内孃のヲディセー　音量あり發音又自然にて艶麗、本日聲樂中の白眉と存候、演奏毎に進歩著しと覺へ候

多氏の演奏と共に今日の聞きゝものは上原孃のピアノに候、孃は分校時代より夙に天才として許されし人、近來其演奏振り益々師ケェーベル氏に髣髴たるもの有之候、面白く聞き申候益向上せられむ事を祈り候。

鹽濱孃亦聲樂の明星音調の正確を以て聞ゆる人に候、曲は名に負ふもの骨折りもさこそと思はれ申候、過日の青年會館に於ける藤井夫人の同曲の獨奏に比して少しく遜色ある樣覺へ候、然し結構の出來に候。

最後の合唱甲、雲雀は美聲の撰り拔きの事とていつも輕快に候。

乙、菊の盃、原曲は有名なる管絃七部合奏にて目下本校オルケストラにて練習中のものに候、聞く度毎に面白く覺へ候曲目左の如し

尚本科卒業生にはヴヰヲリンセロ專修の嚆矢なる三宅延齡氏及ヴヰヲリン專修の煙山つる孃の二氏有之候其妙技に接するを得ざりしは殘念に候、煙山孃を除く外は皆本校研究生として斯道の蘊奥を究めらるべき由、漸く襁褓を脱せむとする樂界新進諸氏の努力に俟つ所大なり益協和して斯道の爲めに盡されむ事を祈り候終りに濟々たる多士を得たるを樂界の爲めに喜び多、上原の二天才を得たるを國家の爲めに悅ふ次第に候。妄評多謝。（あ、ぢ）〔曲目省略〕

（『音樂世界』第一巻第四号、明治四十年四月、八～一〇頁）

三月二十三日　午後二時より東京音樂學校卒業式ありき卒業生は本科八名、師範科十三名選科一名なり、右了つて演奏會ありき、樂界新に此の廿有餘名の樂家を得たるを喜ぶ、殊に本年は揃ひも揃ひて秀才のみなれば、演奏は宛然一大音樂會の如くなりき就中多氏のヴァイオリン上原孃のピアノは滿堂恍惚として感嘆しばしは止まざりしと、欣哉、（評前出）

（『音樂世界』第一巻第四号、明治四十年四月、一〇頁）

**明治四十年四月二十七日、二十八日　第十六回定期演奏会**

明治四十年四月二十八日
（日曜日）午後二時半開會

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一　管絃合奏　　バハ作曲
　基督降誕祭神劇
二　合唱
　甲偶成　　アルカデルト作曲
　乙みそぎ　　武島又次郎作歌
　　マックス、ブルッフ作曲
　　石倉小三郎作歌
三　管絃合奏
　合奏曲　　シューベルト作曲
四　ピアノ管絃合奏　　研究生　久野ひさ
　司伴樂　　ベートーフェン作曲
五　合唱
　甲　簸之川上　　チャイコウスキー作曲
　乙　雁　叫　　鳥居忱作歌
六　管絃合奏
　小夜樂　　モツァルト作曲
七　管絃合奏
　スラヴ舞踏曲　　ヅボールシャク作曲

GRAND ORCHESTRAL CONCERT
OF THE
Tokyo Academy of Music
Uyeno Park.
*Sunday, April 28th, 1907*
AT 2. 30 P.M.

Programme.

I. Orchestra :
　Music of the Shepherds from Christmas Oratorium ……*Bach.*
II. Choruses :
　*a.* Ave Maria……*Arcadelt.*
　*b.* Gebet ……*Max Bruch.*
III. Orchestra :
　Symphony (unfinished)……*Schubert.*
　Allegro moderato—Andante con moto.
IV. Concerto for Piano and Orchestra in

C major ……Beethoven.
Miss Kuno.

V. Choruses:
*a.* Hymn to the Trinity ……*Tschaikowsky.*
*b.* Russian Folks Song.

VI. String Orchestra:
Eine Nacht Musik (1st and 2nd movement)
……*Mozart.*

VII. Three Slavonic Dances ……*Dvorák.*

## 音樂演奏曲目梗概　第四　（と、い、）

### 一、管絃合奏　バハ

#### 基督降誕祭神劇

三十年戰爭の災害を受けて獨逸が全く萎靡沈滯の悲境に陷りたる間に於て、忽如としてアイゼナッハの小邑より崛起し、よく當年樂壇の衰運を挽回し優秀なる作品を留めたる大家あり、之をヨハン、ゼバスティアン、バハ（一六八五―一七五〇）となす。其作る處受難樂（パッシオーン）、經文歌（モテッタ）より、追覆樂（フーガ）トッカータ等の諸器樂形式に至るまで、一として偉大絶美ならざるなく、而して其數百を以て數ふべき作品中、俗的歌曲は僅に四曲あるのみ、又以て炎々たる彼が宗教的情想を推すべきか。

彼が齡四十の圓熟期に於て作り得たる三神劇あり、基督降誕、復活及昇天（Weihnachts=Oster=Himmelfahrtsoratorien）といふ、中世の神秘劇（Mysterien）の如く、宗教的莊嚴と共に俗衆的趣致を該ね備へ、更に强く抒情的方面を活現して「カンタータ」に酷似せり。就中降誕祭神劇は其最も通俗的なるもの、一七三四年の作にかゝる、華麗なる旋律に富て楚々人心を動かす事、彼が作中此曲の右に出づるものなく、而も其器樂部が語る處は敬虔畏懼の情想なり。宗教的情想の權化ともいふべき彼が特性は隨處に發露して、俗的なるべき場合にも尙且宗教的なるを免る能はざるは其作品通有の點なるが、爰に奏せらるゝもの、即ち第二部の首を飾れる牧童群集夜景の一節は、此羈絆を脱して可憐なる俗景に接せるところ、特に清新の氣胸に充つるを覺ゆ。

### 二、合唱

甲　常盤　アルカデルト
乙　みそぎ　マックス、ブルッフ

ヤコブス、アルカデルトは十六世紀に於ける聖樂界の大家なり、斯曲の原歌はアヴェ、マリアといふ、聖母マリアに捧ぐる讃美の詞にして、聖樂作歌の最も好む所の題なり。

マックス、ブルッフは十九世紀に於ける合唱樂の大家なり、原歌は祈禱（Gebet）と題す、詞は近代の詩人エドワルド、メリケの囑する所なり。

### 三、管絃合奏　合奏曲（シンフォニー）　シューベルト

フランツ、シューベルト（一七九七―一八二八）は、ベートーフェンの衣鉢をうけたるロマンチック樂派の驍將なり、殊に其の藝術歌謠曲（クンストリード）の幽婉は吾人の嘆賞する處なれど純器樂曲にも又温柔愛すべきもの少なからず。其の作る處合奏曲（シンフォニー）七、爰に演奏せらるゝ短變ロ調は一八二八年の作にかゝる、實に終焉に先だつ數月なり、僅に二部を作りたるのみにして忽然世を去りしかば、特に「未完」の字を冠するを常とす、されどもとより斷篇にして終るべきものにあらず、スケルツヲとして之に次ぐ九小節を手記せりともいふ。其の創作にとりかゝりたるは一八二二年にあり、有名なる姉妹曲長ハ調合奏曲（シンフォニー）に終るゝこと六年にして、是が形式上の缺點を脱去し、實にシューベルトが管絃樂曲中犇軼たるのみならず現存せる管絃樂曲中の優秀たるを失はず。温柔なるシューベルトは著しく此曲にあらはれ、隨處に惱める心の俤を開展せり。其の第一進行に於ては有名なる歌謠「紡車に倚れるグレチヘン」（Gretchen am Spinnrade）を思はしむる節少なからず、アレグロ、モデラートーなる第一主題が「クラリネット」と「オーボエ」を以て思ひ深き調を進む間に「ヴァイオリン」が十六分音符にて活潑に夢幻的に微搖する如き其の一例なり。之れに次ぐ第二主題は美しき田園的旋

律にして云ひ知らぬ妙音を以て始まる、此の平和なる牧歌的清趣は第一進行の特徴なるが――これやがてシューベルトの特性なり――しかも間々雅健なる節もありて殊に完工(Durchführung)の部に於て偉大なる力を現はせり。第二進行アンダンテ、コン、モト（長ホ調3/8）は粗盃に天の美酒を盛りたるもの、其の第一主題を構成せる旋律は罪なき敬神の念厚き小兒の歌にして、第二主題は之れに反して沈める情緒の疑問を提出せり、而して此の部和聲の精細多趣なる轉調の頻繁自在なる以て驚くべき表現の力を授けたり、此部は實に彼が精神の深刻なる一面卽小兒の無心と、之れと共にベートーフェンより親受せる絶偉なる感情とを併せ有せる彼が本性の豊富を明示する文憑といふべきなり。此名曲の概要だも爰に詳說せんことは難し、唯「樂的情想及管絃樂組織の醇化の萌芽」なりと讃して爰に筆を擱かん。

### 四、ピアノ管絃合奏

司伴樂　　ベートーフェン

司伴樂は獨奏器樂の主要なる一形式にして常に管絃樂の伴奏を有す、其の形式は奏鳴樂合奏曲（ソナタシンフォニー）に依據するを常とすれど時宜に應じて多少の自由を認許せり、最高尙なる室樂の一種にして最もよく古典的音樂を修めたるピアノ專門家の技倆を示すに適せり。作者ベートーフェンは一七七〇年「ボン」に生れ一八二七年に維納に死す、其の樂壇に於ける位置功績は業に世の知悉する所、今故らに之れを贅せず。

ベートーフェンの洋琴司伴樂は其の數五あり、爰に奏せらるゝは其の第一にして實に此の天才が少壯時代卽ち未だモツァルトの感化の下に立てる時代の作にかゝる、故に其の之れを學べる處聽く者又歷々考へ得べけん。されど一面に於てこは確にベートーフェンの作品なり、此の天才の俤は明明其の間に活躍せり。唯一例を以てせんか、偶的に第一主題に導きかへす幻想樂（ファンタジー）の如き節卽ちこれ。此の進行は絢爛華麗、蓋し舊派洋琴司伴樂第一章の特性なり。

### 五、合　唱

甲　簸之川上　　チャイコフスキー

乙　雁　叫　　露西亞民歌

前者は讃歌の一種にして三位一躰の教義を讃するもの、作家チャイコフスキー（一八四〇―一八九三）は最近露國樂派の一驍將なり。後者は輕快可憐なる露國民謠なり。

### 六、小夜樂

モツァルト

小夜樂（セレナード）（黃昏樂）は、原と聲樂及器樂兩用の形式なれども、後世多く器樂にのみ用ひらる。夫の現今用ひらるゝ器樂的形式に屬する小夜樂は、其根本的語義と全く沒交涉に發展せる者也。古風の小夜樂に在ては、野外樂として恰當なる範圍に於て、（ハイドン或はモツァルトの作に見るが如く）、往々オーボエ、バスーン、ホルン、クラリネットの管樂器を加へて演奏せしこと有り、然りと雖、樂堂に於て演奏する場合には、弦樂を主とするを常規とす。但だ古より今に亘り渝らざる唯一の特調を擧ぐれば、小夜樂は、奏鳴樂合奏曲に於けるよりも多大の進行を有し、而かも其進行は、奏鳴樂合奏曲の夫れに比較すれば、輕少にして複雜煩瑣ならざるの點に存す。之を要するに、小夜樂は么踊樂に類する進行を備へ、殊に一二の遲緩進行を交うるを必とす。原來首尾の進行は、形式上進行曲に似たるを以て其本質とす。（あ、と）

作者ウォルフガング、アマデウス、モツァルト（一七五六―一七九一）はハイドン、ベートーフェンと並乙古典樂派の一明星なり、三才琴を彈じて和絃の精を誤らざりし人、其樂才の絶大なりしは唯三嘆を値するのみ。器樂に於てはハイドンの簡素とベートーフェンの蒼勁との間に立ち絢爛華麗、表現と感情、官能的と精神的兩方面の均衡、稀世の創作力、此等は此樂匠の特に卓絶せる所にして又實に樂壇のラファエルと稱せらるゝ所以なり。

### 七、管絃合奏

スラヴ舞踏曲　　ヅボールシャク

スラヴ民族より出でゝ十九世紀樂壇に覇を稱へたるもの、「スメターナ」あり「チャイコフスキー」あり、ヅボールシャクも其の一人にして一八四一年「ボヘミア」の一小邑に生る、故に此の曲の如きは彼れにとりて好適

題といふべく、最もよく其長所を發揮せるものなり。長く調第一曲は清婉なるメヌエット舞樂の形式にして、中間に長變ロ調なる固有の特趣あるトリオを挿みたり。短ホ調第二曲は最も明にスラブ民族情想の特徴を發揮せるものにして、始めは篤深なる情想を以て充たされ次で忽如として春光尖々たる樂となる。ト調第三曲は神速遒頸、其第一主題の特徴は長より短に、又た短より長に忽如として相轉ずるにあり、漸く靜なる中間進行は必要なる安靜を與へ、終節（Coda）の入り來るに及び樂は甚だ粗野砿冒を極め、忽如として再び斂り又第一主題の一部を以て全曲を結ぶ。作者は此曲に於て其妙手を以て汎く近代管絃樂の源泉を採取せり。

## Orchestra: Symphony (unfinished).

Allegro moderato—Andante con moto.

*Schubert.*

This Symphony of Schubert is known as the "unfinished" because only two movements of it exist, Schubert being prevented from finishing it by his untimely death. It is not only one of Schubert's very finest works for Orchestra, but also one of the finest works ever written for the Orchestra. The first movement, although mostly "idyllic" in sentiment—which was Schubert's inmost nature—is at times hard and sombre and works up, particularly in the "working part" to a great amount of power. The second movement is almost only "idyllic" in sentiment. Very characteristic of Schubert are the many and sudden modulations in it. It is quite impossible to give in these few lines anything like an exhaustible description of this fine work, the writer of these lines can only describe it as an emblem of refinement of musical sentiment and also of Orchestration.

H. H.

## Concerto for Piano and Orchestra in C major.

*Beethoven.*

This, the first of Beethovens Piano-Concertos and altogether an early work of his (op. 15) was written, when Beethoven was still under the influence of Mozart and the listener is certainly often reminded of this. At the same time it is already decidedly "Beethoven" as for instance the Phantasy like part, that leads eventually back to the first subject, to mention only one instance. The movement is bright and brilliant, which is typical of a first movement of a Piano-Concerto of the olden school.

H. H.

## Three Slavonic Dances.

*Dvorák.*

These Slavonic Dances show Dvorák at his very best, Dvorák himself been a Slav. The first in F major is in the form of a graceful Menuett with a very original and characteristic Trio in Bfl. ma. in the middle. The second in E minor is most characteristically "Slav" in sentiment, namely full of deep sentimentality at one moment whereas at the next moment the Music suddenly changes into more hopeful and joyous strains. The third in G is quick and very decisive. A characteristic of its first subject are the rapid changes from major to minor and "Vice Versa." The much quieter middle-movement gives the necessary relief. With the entrance of the "Coda" the music becomes very wild and noisy, but soon it becomes quieter again. It finishes quickly and abruptly with a part of the first subject. Dvorák has for these Dances made use to a considerable extent of the resources of the modern Orchestra and with a masterly hand too. It should be mentioned, that the different melodies are by Dvorák himself and not old Slav melodies.

H. H.

〔批評および関連記事〕

東京音樂學校演奏會

滿山の花散りて呉れ行く春の哀を見せ綠まだ若き上野に人車馬車相次で

集りしは音樂學校の春期大演奏會なり久しく好樂家の待ち受けしものにて二時半の定刻には內外貴紳場に溢れ佛伊大使も見受けぬ、ユンケル教授の指揮にて始まる

一　バハが圓熟期に作りし三神劇の一なる基督降誕神劇中牧童群集夜景の一節にて可憐の趣致を備へたり。

二　甲は聖樂家アルカデロのアヴェマリア乙は現代合唱樂大家ブルッフの祈禱にして敬虔の趣はあれど讃美歌の常として單調なる旋律の繰返さるのみ感興深からず歌ひ方は無難なりしやうなり。

三　シューベルトが短變ロ調合奏曲、僅に二部を作りて忽然世を去りしかば特に「未完」の文字を附す一面に彼が精神の深刻なる小兒の無心と一面にはベートーフェンより親受せる絕偉の感想を合せ有せる名曲にして殊に第一主題がクラリネットとオボーを以て思深き調を進むる間にヴァイオリンの十六分音符にて活潑に夢幻的に微搖する如きロマンチック樂派の驍將にして温和なる彼が情想を思はしめ聽者の確に此音に同化するを覺ゆこれを當日第一の出來榮へとす。

四　曲はベートーフェン洋琴管絃合奏司伴樂雄大にして華麗なる旋律なりピアノは手の早きを以て有名なる研究生久野久子孃にして曲の進むに從ひ彈指彌よ冴え勝れたる技倆を發揮されたり曲終るや拍手急霰の如く指揮者ユンケル教授又衆と共に拍手し再び登壇謝意を表せしむるに至る確かに當日の花前途多大の望を囑すべき也。

五　甲また讃美歌の一にして最近露國樂界の勇將なるチャイコウスキーの作なれど歌詞の故にや曲の故にや乙の露國民謠なる雁の叫に劣るやう思はる。

六　樂壇のラファエルと稱せらるゝモツァルトの小夜樂は瀟洒なる趣を備へて頗る面白き絃樂合奏曲なりき。

七　ボヘミヤの樂匠ヅボルシャックの作にして變化極めて多く或は清婉に或は深遠に或は豪放に忽如として相轉するを見る特に終節に入るに當り樂は甚だ野趣を帶び喧騷を極め忽然歛り又第一主題の一部を以つて終る所よくスラブ民族の性質を發揮せるものといふべし。

當日は横濱に其人ありと稱せらるゝセロニストなるデビス氏を始めサリンジャー氏其他二三の外人の來り助くるありて一層盛會なるを得たり。

（『音樂世界』第一巻第五号、明治四十年五月、一〇～一一頁）

## 管絃合奏大會

浦山の花散り〴〵の中に獨り八重の櫻が遲れ顏に處々新綠の間を點綴して上野の春色漸く移らんとする月の二十八日數月來練習を積みし東京音樂學校の管絃合奏會は此日の午後二時半から其樂堂に催された▲馬車と車とで充滿せる間を潛りて門內に入れば滿堂は是れ楚々たる鳥の如く洋裝せる或は爛慢たる花の如く飾れる令孃夫人で春の山に秋の千草を散らせるに似て千紫萬紅目も覺むるばかり、やがて一齊に起る管の音絃の響に聽衆はさながら常世の樂園に在るの思ひ▲演臺を眺めると屹然と立てるは當日の指揮者ユンケル教授で其側にヴァイオリンを持てるは幸田孃に安藤夫人である又奧の方にセロイストのサレンジヤル氏が控へ當代樂界の名手は盡く此一堂に集つたやうに見受けられた▲曲目には管絃合奏が四度合唱が二度ピアノ管絃合奏が一度で管絃合奏にはバハが基督降誕祭神劇の崇高なるシューベルトがシンフオニーの複雜を揚抑自由自在なるに至つては遺ほと感嘆せられた、それよりモツアルトが小夜樂の輕快なるヅボールシヤクがスラブ舞蹈曲の靜なる時は風の死したる如く其の高まる時は濤の怒り狂へるに似て何れもとり〴〵に面白く▲合唱に至ると百人近き若き男女の中に藤井夫人小室孃の相並で在たのも外では一寸見られぬ圖である後の合唱にては簸の川上の壯大なるに次で「雁の叫」の物淋く聞へたのもよき對照であつた▲ベートーヴエンが司伴樂に望で久野ひさ子孃のピアノは其彈奏の男性的にして聽者をして殆ど迎接に遑無からしめ奏で終るや一時に起る拍手喝采は堂も裂けんばかりで孃をして當日の譽を擅にせしめた▲此日聽衆中に田中正平博士が見へたが興湧くや手を擧げ足を蹈鳴らして吾を忘れた態は演臺に於てユンケル教授が全身是れ指揮の化身であつたのに較べて極めて面白き取合せであつた斯くて四時半閉會を告げた

（『音樂世界』第一巻第五号、明治四十年五月、一一頁）

## 樂界時言

春秋二度の音樂學校演奏會は兎に角わが樂界の技倆を示すものなので、いつも自分は少なからぬ興味を以て臨むのであるが、四月の末にあつたこの春の會は全躰から云つて決して進渉を示したものとは云ひ難い。否現下わが人文の狀勢から觀て、これ以上の音樂を望むのは酷であるかも知れないが、他の文藝の向上に伴つて行くには更に一層の修練を要さねばなるまい。

第一の管絃合奏は宗教樂の純なるものとしてふさはしいバハの基督降誕祭神劇であつたが、タクトの亂れたのをみても演奏に純化が無いことが分るし、且つ演奏者に斯曲の偉大なる理想美を顯はす丈けの信念の力を欠いて居るため、敬虔壯嚴の感はもとより、自分には全く何等の感想を得なかつたと云ひたい。バハなどの曲は今の所ケエベル博士を措いてその演奏に堪へる人はあるまいと思ふ。第二は合唱(甲)の常盤は『これぞ後年三軍叱咤の聲』といふ歌詞で大概の美くしい感は破れて仕舞ふ。これに比ぶれば(乙)みそぎの方まだしも無事でよい。音樂學校の歌詞は二十年來何等の發展を見ないのであるが、近刊の詩集でも見た後この歌をきくと殆ど隔世の感にうたれる、保守も此に至つては寧ろ滑稽である。第三の管絃合奏はシウベルトが短變ロ調交響樂で、多趣精致を極めた曲、殊に前半は目も覺める麗曲であるが、管樂器の未熟なために甚しく感興を殺がれて仕舞つた。斯る大曲は十分の習練を要するのであるから、あらゆる事を犧牲として熱冲(ママ)しなければ、作曲者に對しても申譯があるまい。

第四はベエトオヴェンの司伴樂を久野女史ピアノに倚り、十餘名の管絃合奏を從へたところは若かき女王が民衆を後にしたやうであつたが、いかに女史の技巧を以てしても、運指の輕妙を以てしても、この男性的なる偉大な曲想は顯はるべくもなかつた。全躰斯樣な曲を管絃伴奏の裡の女性が彈くことが既に間違ひである上に、表情までも敎へられた型通りをゆくのであるから性格美の點に至つては遂に認めることを得なかつたのは元よりの次第、かよわい女性に重い荷を負はしたところ、思はず江川の玉乘を忍ばしめた。第五の合唱(甲)鍛の川上は矢張り斯校獨得の『あはれかなし』式歌詞で打懷はしたが、(乙)の雁叫は餘りに原曲の旋律がよいので、歌詞の粗惡を思ふ暇もなかつた。民謠のうちにも此程幽遠な可憐なうら悲しい曲は多くあるまい。第六のモツアルトが夜樂はこの日第一の出來で、管絃とも細やかに能く合つて、美と愛とみなぎれるこの夜樂の致趣を殆ど遺憾なく顯はし得たのはうれしかつた。第七のヅボルシヤツクがスラヴ舞踏曲は演奏粗雜で聞苦しかつた。斯くの如くにして春の演奏會は終つた。(幽絃郎)

(『帝國文學』第十三巻第六号、明治四十年六月、一三四～一三五頁)

## 明治四十年五月十五日　全国教育家大会参列者招待音楽会

明治四十年五月十五日

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一　管絃合奏　婚禮行進曲　研究生　藤井環　メンデルゾーン作曲

二　獨唱　フライシュッ　研究生　久野ひさ　ウェーベル作曲

三　ピアノ管絃合奏　司伴樂　ベートーフェン作曲

四　合唱　橘の薫　ケルビニ作曲

五　管絃合奏　舞踏曲　モリス、ダンス　シェパーヅ、ダンス　トーチ、ダンス　ヂャーマン作曲

PROGRAMME
OF
CONCERT
BOOK No. 5.
*Wednesday, May 15th, 1907*
AT 2 P.M.
Tokyo Academy of Music
UYENO.

Programme.

I. Orchestra:
Wedding march .....*Mendelssohn.*

II. Soprano Solo:
Freischütz .....*Weber.*
Mrs. Fujii.

III. Concerto for Piano and Orchestra in
C major .....*Beethoven.*
Miss Kuno.

IV. Chorus:
Requiem .....*Cherubini.*
1. Introitus.
2. Dies Irae.

V. Orchestra:
Three Dances From Henry VIII.....*German.*
1. Morris Dance
2. Shephards Dance.
3. Torch Dance.

音樂演奏曲目梗概　第五

一、管絃合奏

婚禮行進曲　メンデルゾーン

フェーリクス、メンデルゾーン、バルトルディー（一八〇九―一八四七）は「ハムブルグ」の人、幼にして樂を「ツェルテル」に學びオ識夙に著る、其才の絶妙なるに加ふるに人生行路の脩平を以てす蓋し多幸なる樂家の一人なりき、されば其樂自ら靜平にして拮掘の態なく纖巧華麗所謂耳に快きの類なり、其包藏する所を以てせんか或は第一流の樂家となすに足らざるが如しと雖も、其世に出つるや時恰も「ロマンチック」の新風歐洲の樂壇を風靡せしかば早く彼は此派の錚々たるものとなり器樂に歌謠に神劇に將たまた劇樂に幽婉華麗の特徴を發揮せり、かくして「クラシック」「ロマンチック」兩時代の連鎖となり橋梁となりたる又以て史上其英名を高きに置く所以なり

爰に演奏する婚禮行進曲は最も廣く世に知られたるものにして沙翁の喜劇「夏夜の夢」に副くて作れる劇曲の一節なり、此曲は劇樂に於て彼が名を不朽ならしめたるものにして一八四二年始めて「ポツタム」に演奏せられたり、「ベートーフェン」の「エグモント」と並び此種の樂曲中得易からざる逸品なり

二、獨唱

フライシュツ　ウェーベル

「モツアルト」Mozart既に世を去りて其の七大歌劇また既に前世の遺品となり、歌劇界に其の衣鉢をつぎたる兩三輩は全く先師が廣遠なる趣を脱去し、獨逸歌劇が遂に退歩の傾向を明示せし時に當り、深刻なる熱性を以て樂風を改め歌劇の材として獨逸中世を悄怳して國民性を代表し勁健なる表現を昂めたる一派あり史に之を「ロマンチック」樂派といふ、「カール、マリア、フォン、ウェーベル」（一七八六―一八二六）は其の派の代表者にしてこゝに演奏せらるゝ「フライシュツ」は又「ロマンチック」歌劇の代表的作品なり、「ワグネル」幼時大に此の曲を好み後年此曲が所謂「非ロマンチック」なる巴里に演せらるゝや自ら筆をとりて之が解說を試み

「ロマンチック」の眞義を宣傳したることあり、其の觀察の透徹、吾人が解明に資する處多大なりと雖も爰に紹述するの餘白なきを恨む。

此の曲は一八一七―二〇年即ち此の樂匠が晩年に當りて三年の星霜を費して作りたるもの、一八二一年六月始めて伯林に演せられたり、材は古き妖怪譚にして「フライシュツ」說話といふ、北歐神話の俤を寓せる重大なる民族說話なり、「サミエル」といふ獵の魔王より魔力を以て人心を惑溺す、金曜日の夜十字街頭に立ちて身邊に圈を畫して三度「サミエル」(Samiel) を呼び其の力を藉り更に月光暗き深夜其の名を呼て彈丸を鑄造し之を用ふるときは其の六は必ず目的に命中し第七は魔王の思ふ所に走るべく、かくて身を惡魔に委し此彈丸を用ひたる射手（之を Freischütz といふ）は三年毎に人を誘ふて此の彈を用ひたるを以て新き犧牲を捧げざれば其身は全く滅びんとなり、次に此劇の概要を說かん

獨逸のある伯領に「クーノー」(Cuno) といふ世襲森林官あり日頃好める若き獵夫「マックス」(Max)をば女婿として己が係嗣となさんと欲す、然るに此國の慣例により森林官たるべき者は主君の面前に試射を爲し其の妙手の之に値せるを示さゞるべからず「マックス」此頃屢々過あればこゝ明日の試射の利あらざるべきを思ひ心鬱々たり邪惡なる「カスパール」(Kaspar) は既に身を魔王に委せるもの、「マックス」を誘ふて魔彈を用ひしめ己は三年の命を延べんと欲す、「マックス」其の術中に陷り深夜月暗く梟密樹に鳴て凄慘の氣身を襲ふの時獨り狼谿 (Wolfsschlucht) に魔彈を作りて之を國君の試射に用ふ、「マックス」はもと心正しかりしかば「サミエル」は彼を如何ともなす能はず第七彈は却て「カスパール」に中る、死するに臨み彼は「マックス」を呪ひ國君は怪みて「マックス」を拷問す、「マックス」告ぐるに實を以てす衆皆驚き歎く國君怒りて之を追放せんとす、忽ち隱者あらはれ此凶事に依りて爾來試射の慣習をやめんことを勸め、一年の試練を經て「マックス」が森林官の後を襲はんことを定めて去る、

こゝに演奏せらるゝ一小歌旋は第二齣の始にあり「マックス」が相思の人「クーノー」の女「アガテ」(Agathe) が明日の試射を氣づかひて、結ばれ果てたる心をとかんとて其の友なるエーンヘン (Ännchen) が歌ひ慰むる所のものにして、よく世の少女の性質を現はしたる輕快なる一歌曲なり、

## 三、ピアノ管絃合奏

### 司伴樂　　ベートーフェン

司伴樂は獨奏器樂の主要なる一形式にして常に管絃樂の伴奏を有す、其の形式は奏鳴樂合奏曲（ソナタシンフオニー）に依據するを常とすれど時宜に應じて多少の自由を認許せり、最高尙なる室樂の一種にして最もよく古典的音樂を修めたるピアノ專門家の技倆を示すに適せり。作者「ベートーフェン」は一七七〇年「ボン」に生れ一八二七年維納に死す、其の樂壇に於ける位置功績は業に世の知悉する所、今故らに之を贅せず。

ベートーフェンの洋琴司伴樂は數五あり、爰に奏せらるゝは其の第一にして實に此の天才が少壯時代即ち未だモツァルトの感化の下に立てる時代の作にかゝる、故に其の之れを學べる處聽く者又歷々考へ得べけん。されど一面に於てこは確にベートーフェンの作品なり、此の天才の俤は明々其の間に活躍せり。唯一例を以てせんか、偶的に第一主題に導きかへす幻想樂（ファンタジー）の如き節即ちこれ。此の進行は絢爛華麗、蓋し舊派洋琴司伴樂第一章の特性なり。

## 四、合唱

### 橘の薫（安息曲）　　ケルビニ

作家「ケルビニ」(Cherubini)（一七六〇―一八四二）は「フイレンゼ」の人蓋し「バハ」の死後數十年聖樂壇上全く空しく、近世の風尙を寓して敬虔の念に滿ちたる至醇の樂聲を耳にする事難かりし時に當り斯界に不朽の名寶を與へ遂に獨佛の樂壇をまで風靡せし唯一の樂家なり彼の作に係る聖樂其の新敎的合理派的平板の趣味を免れ華麗にして風尙高きは吾人の贅言を要せざる處なれど又劇樂壇に於ても華麗なる旋律に富める歌劇數曲を世に殘せり、樂聖ベートーフェンの如きも其才を稱揚して第一流の英才となすを憚らざりき挽歌安息曲 (Requiem) は一八一六年に完成し越て一八年始めて世に公にせられたり、まことの名を「ミッサ、プロ、デフンクテイス」(Missa Pro defunctis) といふ「死者の爲の美讃（みさ）」といふ義、

其の意を汲て或は「在煉獄(Purgatory)靈魂の紀念」といふ其特に Requiem と呼ばるゝ所以は其進入誦 (Introitus)「主よ永久の安息を彼等に與へ給へ」(Requiem aeternam dona eis domine) の冒頭の一字を藉りたるに外ならず、抑も美讃は舊教典禮中の重要なる一儀禮にして就中此の安息曲を以て其の最となし葬祭日、忌命日若くは十一月二日の大弔會に演奏せらるゝを常とす、其の始は宗教典禮に伴ふに過ぎざりしが漸次寺院の殿堂を去て樂堂にうつり多くの樂家爭ふて之か作曲を試み遂に音樂上重要なる一範疇をなすに至れり、此の種曲中の尤として樂壇唯一の絶品と稱せらるゝは「モツアルト」臨終の作なるが爰に演奏せらるべき「ケルビニ」の作は之に次で有名なるものにして其の感情深遠にして不窮の趣を寓せる點に於て彼に遜らざるのみならず樂家或は兩々並駕の神品未だ輕々しく軒輊を置くべからすといふものあり、

安息曲は通例の美讃と同じく多くの段に分るれど其段落の數名稱等は自ら異り別に一殊形を構成せり、其の第一段を進入誦といふ此曲眞髓の語「主よ彼等に無窮の休憩を與へ給へ」を以て始まり「主憐み給へ」(Kyrie eleison) を以て終る、第二は昇階誦 (Graduale) 其詞は前段と略同じく司祭此の間に階を昇るを以てかく名づく、之に次で其の續 (Sequenz) なる神怒日 (Dies irae) あり此第三段は斯曲の最高潮にして樂家何れも其の絶偉なる樂才を傾注する所なり、最終裁判の震撼を叙し同しく安息祈禱及「アーメン」以て之を閉づ、第四は奉獻誦 (Offertorium) といふ、此の後司祭麵麭と葡萄酒とを捧ぐる禱を始め、また聖なる哉 (Sanctus) 神の羊 (Agnus Dei) 等美讃の數節を挿みて聖體受領の誦 (Pie Jesu) に終る、爰に演奏せらるゝものは進入誦 (櫻井驛) 及ひ神怒日 (菊水の譽) の二部なり

五、管絃合奏

モリス、ダンス

シェパーヅ、ダンス　　ヂャーマン

トーチ、ダンス

「エドワルド、ヂャーマン」は英國の樂家なり一八六二年西部の一小都市に生れ王立音樂院にオルガン及ヴァオリンを學び一八八九年倫敦なる「グローブ劇場」の樂師長となる好んで沙翁劇曲に副へたる劇樂曲を作れり爰に出せる曲は其の顯理八世中より抄拔せるもの、輕快にして華麗なる好舞樂なり

## 明治四十年六月一日　試業演奏会

第二十一回選科生徒試業會順序（明治四十年六月一日午後二時開會）

第一部

一　唱歌（二重音）　女生徒

花神（作曲者未詳　旗野十一郎作歌）　宇津木喬子

一　オルガン　薔薇　ライヒヤルト作曲　山田清子

一　ピアノ　ソナティナ　デュセック作曲　下勝公子

一　箏　秋の七草　南笠富子　向子

一　唱歌（單音）　辻本美亞　榎直

甲　古都（ケルビニ作曲　古文）　菊地みさを

乙　妾薄命（ユングスト作曲　林はる子作歌）　浅羽千代

一　ヴァイオリン

聯奏曲　プレーエル作曲
一ピアノ　永田また
ソナタ　モツアルト作曲
第二部
一唱歌（三重音）　男生徒
春暁（アプト作曲　旗野十一郎作歌）
一オルガン　稲澤りう
テマ、ウンド、ヴァリアチオネン　ハイドン作曲
一箏　角倉アイ　榎本直　松脇きみ
椿づくし
一ピアノ　古市喜子
ソナタ　ベートーフェン作曲
一ヴァイオリン　田邊尚雄
エーア、ヴァリー　ダンクラ作曲
一オルガン　水原みち
凱旋進行曲　レンマン作曲
一唱歌（三重音）　女生徒
たのしき夏（アプト作曲　武島又次郎作歌）

**明治四十年十月四日　学友会演奏会**

●東京音樂學校創立紀念日學友會演奏會

同校は明治廿年十月四日省令を以て音樂取調所を改めて現在の稱呼となせしより年を閲する事二十、音樂の存在だに認められざりし世の風潮に反抗して今日の隆盛を見るに至りし間に於ける當事者の苦心經營蓋し筆紙に盡すべからざるものありしなるべし、今や音樂は漸く世人の重要視する所となり其進歩發達の跡亦大に見るべきものあり此日校長の開會の辭に本年より日本樂の研究を起し之れか奬勵の爲時々其演奏を開き、又洋樂に於ても聲樂及低絃樂の練達の士を獨逸より聘して益々之れが研究を努むべし云云と、樂界漸く時を得たりといふべし、將に成年に達せし同校も此等斯道大家の薫陶と明敏なる新校長の指導の下に健全なる活躍をなすや期して待つべきなり本日の演奏者は凡て會員たる生徒諸氏なり特に初陣の人多數なり

第一部　一、合唱、秋の曲、凡て初めの出様少し怪し、先無難といひて可なり、二、ピアノ獨彈　香川鈴孃、初陣にしては上出來、前途洋々たり努力あれ、三、絃樂四部合奏　ベトーベンのメヌエット、多、川上、大塚、山田の諸氏、結構の出來　四、獨唱　メンデルスゾーン、アリア、フラム、エリジヤ　伊藤鈴孃　五、オルガン獨奏　カンツヲネツタ、キルマン作富岡靜女孃何れも可なり、

第二部　一、ヴヰオリンピアノ二部合奏　川上淳萩原英一兩氏モツアルトのソナタ、イン、エス、川上氏の上達大に聞くべきものあり、ピアノ亦可なり　二、オルガン獨奏　バハのプレルデイエム、ウント、フーゲ平尾勇君、フーゲは面白く　三、絃樂四部合奏甲バハのアリア、乙ハイドンのメヌエット、二者共に大に可なり、有望なる諸氏の精勵を祈る　二、ピアノ獨彈　ベトーベンのソナタ澤田柳吉君感心な出來、少し身体を振り過きずやと思はる、五、合唱、甲暮秋の杜、乙秋の山跡　乙は快活にして喜しかりき　妄評多謝

秋漸く高くして樂界又佳期に入る以後土曜日曜は諸種の演奏會を以て充さるべし其都度紙上に讀者諸氏と見えん

（『音樂世界』第一巻第十号、明治四十年十月、一〇～一一頁）

●東京音樂學校彙報　設立紀念音樂會十月四日午後二時半より上野音樂學校にて同校學友會の發起にかゝる設立紀念音樂會を催したるが狹からざる講堂に立錐の餘地なき程の來聽者ありて却々の盛會なりき

（『音樂』樂友社、第十三巻第一号、明治四十年十一月、三四頁）

**明治四十年十一月九日　試業演奏会**

第二十二回選科生徒試業會順序（明治四十年十一月九日午後二時開會）

一唱歌（二重音）　女生徒
夢（作歌者未詳　メンデルスゾーン作曲）
一箏　南向笠　公子　穂積壽賀子　富
うす霞
一ピアノ　渡瀬春惠
ソナティネ　クレメンティ作曲
一ヴァイオリン　丹波とよ
タランテレ　ヘンケル（マヽ）作曲
一箏　松崎いね　下松脇きみ　勝子
早春の興
一ピアノ　服部駟郎次
ソナティネ　クーラウ作曲
一獨唱（伊語）　辻美亞
カーロー、ミヲ、ベン　パピーニ作曲〔ジョルダーニ〕
一箏　藤岡美代　北村三岐　小池やす　服部喜代
四段砧

**明治四十年十二月七日　ルース孃音楽会**

○音樂學校音樂會　東京音樂學校にて聲樂部に招聘せる獨唱家ルース孃の爲めに催さるべき大音樂會は愈々來月七日午後六時同校奏樂堂に於て開會する事に內定し目下夫々準備中なるがルース孃の令兄なる高等商業學校教授ルース氏は孃の爲めに紹介の勞を取り且つ帝都の樂壇に豫期以上の貢献ならしめんとて熱心に盡力し居れりと

（『時事新報』明治四十年十一月二十六日）

**明治四十年十二月十四日、十五日　第十七回定期演奏会**

明治四十年十二月十五日（日曜日）午後二時開會

音樂演奏曲目　東京音樂學校

一合唱　生徒
甲　聖の御世……グルック作曲
乙　秋の夕暮……スコットランド調
丙　埔頭別離……スカンヂナヴア民謠

# CONCERT
OF THE
Tokyo Academy of Music

二　絃樂四部
教師同教師　ウエルクマイスター　幸田ハイドン　ヘルマン、ユンケル　アルヴィン、リッヒ延
甲　アレグロ、マ、ノン、タント
乙　アンダンテ
丙　ミニュエット
丁　アレグロ、ヴィヴァチエ
……ベートーフェン作曲

三　獨唱
教師　シアルロッテ、フレック

四　ピアノ獨奏
教師　ヘルマン、ハイドリッヒ

五　セロ獨奏
教師　ウェルクマイスター

六　獨唱
教師　シアルロッテ、フレック

七　ピアノ五部合奏
教師教師教師教師　ウエルクマイスター　幸田ハイドン　ヘルマン、ユンケル　アルヴィン、リッヒ延
甲　アレグロ、ブリラント
乙　イン、モド、ドナ、マルチアテ
丙　スケールツオ（ヴィヴァチエ）
丁　アレグロ、マ、ノン、トロッポ
……シューマン作曲

## UYENO PARK
*Sunday, December 15th, 1907*
AT 2 P.M.

## PROGRAMME

1. Choruses:
   *a.* Trost im Scheiden .....*W. v. Gluck.*
   *b.* .....*Schottisch Melodie.*
   *c.* Abschied .....*Skandinavisches Volkslied.*
2. String quartet in C minor, op. 18.....*L.v. Beethoven.*
   *a.* Allegro ma non tanto.
   *b.* Andante Scherzoso quasi allegretto.
   *c.* Minuetto.
   *d.* Allegro.
   I Violin: *Herr Prof. Junker.*
   II Violin: *Herr Prof. Heydrich.*
   Viola: *Miss Koda.*
   Cello: *Herr Prof. Werkmeister.*
3. Alto Solo:
   Aria from Odysseus:—Ich wob dies Gewand
   .....*Bruch.*
   *Fräulein Fleck.*
4. Piano Solo:
   Barcarolle in F minor .....*Rubinstein.*
   *Herr Prof. Heydrich.*
5. Violoncello Solo:
   Concerto in E minor .....*Lindner.*
   *Herr Prof. Werkmeister.*

6. Alto Solo:
   a. Die Rosenblühten .....*von Fielitz.*
   b. Wie wundersam.....*Schillings.*
   *Fräulein Fleck.*
7. Piano Quintet.....op. 44. .....*Schumann.*
   a. Allegro brillante.
   b. In modo d'una Marcia.
   c. Scherzo (Vivace).
   d. Allegro ma non troppo.
   Piano: *Herr Prof. Dr. R. von Koeber,*
   *Herren Prof. Junker, Prof. Heydrich,*
   *Prof. Werkmeister, Miss Koda.*

音樂演奏曲目梗概　第六　（と、お）

一、合唱

甲

原詞はアルベルト、シュナイデル（*Albert Schneider*）の作救世主に捧ぐる祈禱歌なり。作曲者グルック（*Gluck*）は一七一四年ヴァイデン、ヴァングに生れ一七八七年維也納に死す。彼が獨逸歌劇の改革者として當時の輕佻浮華なる以太利派の劇樂を殲滅したる功績は實に歌劇史上の一偉觀たり。一七六二年に公にせる歌劇「オルフォイス」を初めとし「アルチェスト」「イフィジェニー、アン、オーリード」及び「イフィジェニー、アン、トーリード」の諸歌劇は其の最も傑出せる作品なり。

聖の御世　　鳥居忱作歌

大殿破れ壞れ、漏る雨しとゞに。」
そこかしこ楓を懸け、移すや御座。」
空に盛りに、立ち昇る炊煙。」
かしこや、たふとや。」
我等は富みて、吾君は斯くぞ。」

乙

原詞はスコットランドの歌なり

秋の夕暮　　武島又次郎作歌

夕風かなしく、　蟲もなきて。
こゝろぞしほるゝ、　秋のゆふぐ。
わが身のうへのみ、　かくやと思ふに。
尾花が袖にも、　露はおきぬ。

丙

原詞はシェーネンベルゲル（*Schönenberger*）筆に成り、離別の悲を抒べたるもの、曲は北歐スカンディナヴィアの民謠なり。

埴頭別離　　旗野十一郎作歌

第一章

晴れたる海路も、　などて今日は、
別るゝたがひの、　むねに曇る、
なさけや　しらなみ、
この岸はなれて、　ゆくか船は」

第二章

互のおもひを、　結ぶ柳、
風さへあはれに、　影をうつす、
涙殘や　をしけむ、
巾振る　こなたを、　見むく旅人」

二、絃樂四部合奏

短ハ調絃樂四部合奏曲（作品第十八）

樂聖ベートーヴェン（*Beethoven* 1770—1827）は獨逸樂古典派の巨匠、ハイドン、モツァルトの後を承けて器樂の諸体を大成し併せて後世ロマンティック派の基をも開けり。其の器聲兩樂に遺せる秀什の大なる者百を以て數ふるが中にも合奏曲九篇及び室内樂數篇は爾來奏樂堂裡の王として萬

人の等しく嘆賞する所なり。こゝに奏する曲は彼が生涯に著したる絃樂四部合奏曲合計十六中の一にして、其の最も初めに出でたる者、即ち彼がハイドン、モツァルト兩家の感化を蒙れる第一期の作品中に算ふるを得べし。然れども彼の作なる多數の短ハ調作品に表はれたる眞摯、濶大、强健、急突等の特性は既に此の中にも明かに之を見るを得べし。曲は美妙高尚なる主題を以て起り暫くにして長變ホ調の第二主題に遷移す。こは首調より轉じて其の關係長音階に入るものにして、斯かる轉調は通例ソナタ曲体の第一曲部に於て第二主題を起すの際に用ひらるゝものとす。第一曲部は終始悉く正式の作法に據れり。第二曲部は其の拍子稍や緩かなれども寧ろ第三曲部よりもスケルツォの特性を帶べりと評せられ、第三曲部はスケルツォの曲体を具ふるに關せず却て其の諧謔愉樂の趣致に乏し。こは氏の作なる他のスケルツォに於ても多く見る所なり。第二曲部の主題は最も反覆摸倣を爲すに適せる旋律にして對位法(コントラプンクト)、輪唱(カノン)、追覆樂(フーゲ)等の理論に精通せるベートーヴェンは遺憾なくこゝに此の作法を應用せり。全曲部婉美可憐にして最も翫賞するに堪えたり。最終曲部は嚴密に其の形式上より觀れば、環曲(ロンド)の体に作られたる者といふべきも、其の性質の眞摯なる點より考ふれば、かく呼ぶは未だ悉く當らざるの感あり。其第一主題の主要なる特性は果斷にして稍々急突なるに存し、長變イ調なる第二主題は華麗にして前者と好個の對照を成せり。最後に全曲の特徴を概言すれば簡潔にして比較的短篇なること是なり。

## 三、獨唱

### 「オデュッソイス」中の歌旋

曲の作者マックス、ブルッフ(*Max Bruch*)は、一八三八年ライン河畔なるキョルン府に生る十一歳初めて長篇の作曲に從事し、十四歳の折作りし合奏曲(シンフォニー)は已に公會に演奏せられしと傳ふ。最近獨逸樂人中の奇才にして最も聲樂の作曲に長ず。六十二年より六十四年にかけて公にせる其の諸作中殊に合唱曲(コーラル)「フリットヨーフ」は頓に彼の聲名を高からしめたり。其の後の作なる合唱曲「オデュッソイス」(一八七三年作)も亦た之れと相並びて彼が作品中の白眉と稱せらる。

此の歌旋はオデュッソイスの妃ペネローペが衣を織りながらの獨唱なり。遠征の夫を待ち佗ぶるの情楚々として人を動かすものあり。邪まなる求婚者の手より逃れんとて晝は涙に織りし衣を夜は人知れず解きしてふ貞烈の美談は詩聖ホメーロスの歌調に傳はりて千載の今も尚ほ世の語り草となりたればことゞくしく玆に述べす。

## 四、ピアノ獨奏

### 短ヘ調バルカロール

バルカロールは南歐ヴェニスの欸乃にして憂愁熱烈の情緒を籠めたる歌曲なり。之れを取りて洋樂曲に移したる者同じく此の名を以て呼ばる。作家ルビンシタイン(*Anton Rubinstein*)は最近に於ける洋琴演奏の大家にして又最も天才ある作曲者なり。洋琴の技術に於ては嘗て師事せるリストに比肩し、作曲者としては、メンデルソーンに私淑して優に其の衣鉢を傳ふるに足れり。作る所の佳什、器聲兩樂に亘りて頗る多し。一八三〇年露國ロマノに生れ九四年聖彼得堡に歿す。

## 六、獨唱

### 甲、薔薇は開きぬ

### 乙、あな、あやし

此の二曲は共に現代名家の作曲に係れり。殊に前曲の作者マックス、シリングス(*Max Schillings*)は目下獨逸の劇樂界に於て名聲嘖々たるの人一八六八年ラインランド、デュッレン市に生る。初めボン府に學び、後バイロイト、ミュンヘンの諸市に遊歷して音樂を修むるの傍、法律、哲學の研究にも心を潜めしが、一八九〇年の頃より劇樂の作曲に身を委ね、後四年を經てカールスルーエ市に初作の歌劇「イングヴェルデ」の興行せらるるに遇へり。此の作は悉くバイロイト樂聖の作法をまねびたるものなれども、其の秀拔なる旋律法、巧妙なる樂器編成法とは、優に彼が獨創の技量を示せり。此の作の續いて諸中の劇場に演ぜらるゝに及び、彼の名聲は廣く樂壇に知らるゝに至りぬ。此の外劇樂の作品には「ファイファー」と題する歌劇あり器樂には管絃合奏曲、聲樂には短篇の唱歌曲多數を出たせり。

## 七、ピアノ五部合奏曲（作品第四十四）

作家シューマンは獨逸樂、新ロマンティック派の驍將なり。其の聲器兩樂に遺せる逸品は一々枚擧するに遑あらず。聲樂に於てはシューベルト以來の名家と呼ばれ器樂（殊に室内樂）に於てはベートーヴェンのそれにも比すべき傑作を出だせり。こゝに奏する五部合奏曲は彼が室内樂作品中の最も卓拔なる曲として普く世に翫賞せらるゝ者其の全曲の特趣を概言すれば巧妙且つ華麗なること是なり。曲は絢爛華美なる樂に始まり、第一曲部を通じて此の特性を保續す。但だ第二主題は少しく平靜の趣致を具へたり。第二曲部は遲緩陰欝なる進行曲の速度を以て進み、殆ど葬送進行曲に類す。其の主想は先づ第一ヴァイオリンに起り、次で他の諸樂器の之れを繼承するやヴァイオラ最も樞要の位置を占む。暫くにして樂は快活なる中部進行に移り、こゝに第一主題は以前よりも速度を加へて再現し、殆ど激烈の趣致を帶ぶ第二ヴァイオリンの顫音は此の趣を添ふるに與て力ありといふべし。此の進行終るや、樂は嘗て一度聞こえたる讃美歌風の旋律に進み、次で曲部の當初に表はれたる遲緩なる進行曲に遷りて曲部を終る。第三の曲部なるスケルツォは極めて神速快活なり。其の主題は殆ど旋律と名け難く或る律度に合せて奏する音階より成れり。但だ處々に休止を以て區劃を施せるが故に纔に旋律の体裁を具ふ。次でトリオ部奏曲二つを挿みたるは少しく異例なりといふべし。其の初めの者は稍遲緩なるに反して第二の者は甚だ快活且つ果斷の風あり終節の現はるゝに及び曲部は一層神速の度を加へ放縱粗暴を極むるに至て止む。

最終曲部も亦た以前の諸曲部に比して毫も遜色なし。近時諸家の作に係る最終曲部が前曲部に比して往々見劣りする者あるに反し、斯く終始を通じて絕佳なるは洵にめでたき秀什といふべく、室内樂として此れより勝れたる者を望むは不可能なりと言ふも過言に非るべし。終局に近く短少なる好個の追覆樂を挿み、第一曲部の第一主題を以て其の主題となし最終曲部の第一主題を之れに配して伴侶となせり。本曲は其の巧妙華麗なるが爲めに至る所あらゆる種類の聽衆に愛翫せらる。

# PROGRAMME
OF
# CONCERT
Book No. 6

*Sunday, December 15th, 1907*

AT 2 P.M.

TOKYO ACADEMY OF MUSIC

UYENO

## STRING QUARTETT.

*Beethoven.*

Allegro ma non tanto.
Andante Scherzoso quasi allegretto.
Minuetto.
Allegro.

Although this Quartett belongs to the earlier period of Beethoven's compositions, it has many of the characteristics of so many of his works in C minor, namely in the first place seriousness, broadness, power and abruptness. It opens with a fine and noble subject and soon introduces the second subject in E flat major, which is the relative major key of C minor. It is the usual way to bring the second subject of a first movement of a piece in form of a Sonata in the relative major key. Altogether the movement is quite in the orthodox form of a first movement of a Sonata. The second movement, which is not exactly quick, is in the opinion of the writer of these lines more of the character of a "Scherzo," than the third movement, which is called "Scherzo," being written in the form of a Scherzo, but like many Scherzi of Beethoven not prominently of a merry mood.

The principal subject is one of those which it is most natural to use for imitating purpose, of which Beethoven has

made full use of, having been master of all the more learned branches of Music, such as Counterpoint, Canon, Fugue etc. The movement is of charming amiability and most enjoyable. The last movement is strictly speaking in the form of a Rondo, although it would not be quite appropriate to call it so, being too serious for it. The principal characteristics of the first subject would be decision and a certain abruptness. The second subject in A flat major is very beautiful and gives the necessary contrast. A characteristic of the Quartett as a whole is its conciseness and comparative shortness.

H. H.

## ARIE AUS ODYSSEUS.

Penelope ein Gewand wirkend.

*Bruch.*

Ich wob dies Gewand
Mit Thränen am Tage,
Und löste es weinend
Zu nächtlicher Zeit;
So schwanden die Wochen,
So wuchs meine Klage,
So schwanden die Jahre
So wuchs mein Leid!
Wo weilst du, mein Gatte?
Hat dich die Kere des Todes
Bereits zum Hades geraubt?
Oder Schweifst du noch auf dem Meere,
Zu Sternen hebend dein leuchtendes Haupt?
O kehre, Odysseus,
Eh' meine Hände
Vollenden dies Kleid!
Mit frevelndem Muthe
Umwerben die Freier
Dein treu Gemahl.
Sie drängen den Sohn
Dir vom eigenen Gute
Und schlingen es schwelgend
Beim üppigen Mahl!
O kehre, Odysseus!
Ich wob dies Gewand
Mit Thränen am Tage,
Und löste es weinend
Zu nächtlicher Zeit;
So schwanden die Wochen,
So wuchs meine Klage,
So schwanden die Jahre,
So wuchs mein Leid!
O Kehre, Odysseus!

## "DIE ROSENBLÜHTEN."

*von Fielitz.*

Die Rosenblühten, du stilles Kind,
Zum ersten Male.
Wir waren im Garten allein,
Es spielte der Wind
Mit deinen goldbraunen Haaren.

Und eine Locke flog leicht zurück,
Ich haschte sie als wir gingen—
Da glaubt' ich hielte das Glück
Fest an den goldenen Schwingen;

Da glaubt' ich, ich würde nun immerdar
Behalten was ich genommen,
Es wäre mein Leben nun sonnenklar.
Wie ist es anders gekommen!

Es ist nun wieder ein Junitag,
Ein Tag voll Duft und voll Schimmer,

Und die Nachtigall singt mit süssem Schlag.
Du aber gingst fort für immer.
Es nahm meine Hand den Wanderstab,
Und führt ihn ohn' Glück, ohn' Frieden,
Und deine Locken schnitten sie ab
In einem Kloster im Süden.
(Prinz zu Schoenaich—Carolath.)

## "WIE WUNDERSAM."

*Schillings.*

Wie wundersam ist dies Verlorengehn
In Liebestiefen ohne Ziel und Schranken;
Die ganze Welt mit lichten Augen seh'n,
Im Sonnenschimmer klarer Freude gehn:
Eins sein, in einem tiefen Glücksgedanken!

Und wie im Leben auch die Stürme weh'n,
Da ist kein Zagen und da ist kein Schwanken,
Fest Steht die Liebe, wie die Sterne steh'n!
Wie wundersam ist dies Verlorengehn
In Liebestiefen ohne Ziel und Schranken!
(Stieler.)

## PIANO QUINTETTE.

*Schumann.*

1. Allegro brillante.
2. In modo d'una Marcia.
3. Scherzo.
4. Allegro ma non troppo.

This celebrated Quintett is one of the most effective pieces of music, Schumann has written. Its principal characteristics are ingeniousness and brillancy. It opens at once bright and brilliant, which is kept up more or less throughout the first movement, the second subject only being of a little quieter mood. The second movement is in the tempo of a slow march, sombre and almost like a Funeral-March. The "Tema" is begun by the first violin, but continued by the other instruments, the viola playing a prominent part in it. The movement is interrupted by a lively middle-movement in which the first Tema appears again, but this time quicker and even passionate, the latter quality helped on by a "tremolo" in the second violin. After this the beautiful, Hymn-like melody, which already has been heard before appears again and the movement ends with the slow march as it had begun.

The scherzo is very quick and lively. Its subject one can hardly call a melody. It consists of scales played in a certain metre with stops at certain places, which makes it appear melodious. It has two "Trios" which is a little unusual. The first is of a little quieter mood, where as the second is very lively and decisive. With the "Coda" the movement becomes quicker still and ends quite wild.

The last movement is as fine a movement as the previous ones, which can not be said of all last movements of the more modern kind of chamber-music. It is perhaps as effectively written as a piece of chamber-music possibly can be. Towards the end a short, yet well written Fugue is introduced, the first subject of the first movement forming the Tema of the Fugue with the first subject of the last movement serving as the companion. This Quintett has always been a great favourite with all kind of audiences and quite naturally so.

H. H.

〔批評および関連記事〕

音樂會　　一素人

今日は音樂會の傍聽といふよりは寧ろ或る用達の意味で上野の音樂學校に行つた。豫て紙上にも報道せられた新來音樂家披露の演奏會といふの

で、平常でさへ昨今は既手狭を感じてゐる樂堂は、餘す席もない多數の聽衆で、樂堂入口のドアの處に溢れてゐる位だ。

僕の行つた時は曲目の第五、例の新たに來朝したセロ手ウエルクマイステル氏がリンドネル作曲の司伴樂を獨奏してゐる處だつた。僕は始めてセロ獨奏を聽いたのだが、成程面白い。從來諸方の音樂會などの合奏で澤山のヴアイオリンに取卷かれ豚の如き低音を立てゝ徒らに拍子取りにグウグウ言はせてゐるとは違つて、何處か水際立つて非常に面白いと思つた。

次には是亦新たに招聘したモツオソプラノの獨唱家シアルロツテ、フレツク孃が瀟洒たる風采でフオン、フイーリツク作曲の『薔薇は開きぬ』及びシリングス作曲の『あな、あやし』を獨唱した。如何にも華麗な美しい聲で、肉聲の美は亦言ふ可からざる快味がある。滿場の喝采、暫時は鳴りも止ぬ。序でに言ふが耳に聽くべき音樂を演奏するに、衆人稠座の中で禮服で演奏するものである以上、音樂家は亦美貌な程好い。

此次にはピアノ五部合奏とある。僕の樣な素人は又、絃樂四部とあればヴアイオリン四挺で演ずるものと心得てゐる程無智なのだから、ピアノ五部とは定めてピアノを五臺も並べて五人で彈くのかと思つたら、實は然ぢやない。ユンケル、ハイドリツヒ、幸田延の三氏がヴアイオリンを、マイステル氏がヴアイオリンセロを、ケーベル博士がピアノを彈くのだつた。百聞は一見に若かずだ。

閑話休題として以上の五氏はシューマンの五部合奏曲を演奏した。流石に斯界の大家が揃つての事だから誠に結構で、聽衆醉へるが如し。僕は此曲を聽いて、曲中或る一部〳〵には然程奇峭な處もなく頗る散漫の樣でゐて、さて奏し來つて一曲を終へる頃までには何時しか渾然として或る何物かゞ聽く者の胸を厭して、理窟も何もなく直に聽衆の心耳に玄妙不可思議な感想を惹起させる。斯いふ處がシューマンが新ローマンテイツク派の驍將と稱賛せらるゝ所以かも知れぬなどゝ獨りで感心してゐた。

歸途に、上野の森を拔ける頃は、夕陽が向ケ岡に傾いて了つて、東照宮の五重の塔の邊で鴉が連りに騒いでゐる。落葉を踏んで歩いて行くと、耳の底で氣の故か夢の樣に物の音色が響く。

（『讀賣新聞』明治四十年十二月十五日）

東京音樂學校秋季演奏會は十四、十五兩日同校奏樂堂に於て開催されたり十四日は同校の校友及び職員生徒のみなりしが十五日は例の如く來賓幷に一般好樂家の來聽を求めたれば新來の二教師ジルロツテ（ママ）フレツク孃が獨唱の美音ウエルクマイステル氏が演奏の妙技を聞んとて內外紳士貴女の來會するもの頗る多く滿場殆ど一の空席をも餘さゞる盛況なりき殊に當日は常宮周宮兩內親王殿下並に伏見若宮妃同女王殿下の御臺臨あらせらるべき旨前日仰せ出されたるを以て場の中央前面には淨き白布を敷き一段高く兩殿下の御座所を調へ赤地錦の布帛を掩る御卓の上にプログラムを供へ御前には珍奇なる盆栽の數〻を配列せるなど御待受けの準備落ちなく整へり軈て定刻に至るや常宮、周宮兩殿下には薄桃色に五彩の縫ある御振袖の御襲ねに御袴を召され大前髪の御下げに白きリボンを蝶形に結ばせられたるいとも清楚なる御裝ひにて加賀美御用掛幷に侍女等を從へさせられ又伏見若宮妃殿下には御洋裝同女王には緞子刺繡ある御召に海老茶の御袴を召させられ御用掛を從へられ一同起立敬禮中にそれ〴〵御着座あらせられたり此時同校男女生徒は壇上に現はれ曲目第一の合唱あり次の絃樂四部はベートーフエン作曲中の佳品と稱せらるゝものにして滿場の喝采を博したるビオラの音殊に床しく聞えたり聲樂教師シアルロツテフレツク孃は藤色鵞絨に白の緣模樣ある服を嫂婷たる身に纏ひ莞爾たる會釋を爲しつゝ日本に於ける演奏の初舞臺には立たれたり此日孃が獨唱したるはブルツフ作曲フオンフイーリツツ作曲シリングス作曲の三なりしが孃の唄ひ振は頗る表情に富みブルツフ作曲の歌旋最も優れて喝采を博しぬハイドリツヒ氏のピアノが例に依て歡迎拍手盛なりき扨ウエルクマイステル氏には僅かに數日前長路の旅裝を解かれしのみなるが氏は眉目秀麗風采清楚たるゼントルマンにして從來樂壇にセロの獨奏を聞くは稀なることにて當日特に同氏のセロ獨奏ありしは蓋し新任の披露をも兼ねしものならんか流暢寛宏なる音律聞く耳に宜しく滿場の大喝采を博したりピアノ五部合奏（シューマン作曲）に於けるコイベル博士のピアノ又特に一段の妙技を發揮して遺憾な

し右終つて兩殿下并に伏見若宮妃殿下には退場直に御歸還あらせられ一般人も續いて散會したるは三時四十分頃なりき

（『時事新報』明治四十年十二月十七日）

## ●音樂學校秋季大音樂會

（高輪兩宮御成）

東京音樂學校にては一昨午後二時より同校奏樂堂に於て秋季大音樂會を擧行せり、當日の來賓は常宮周宮兩内親王及び伏見若宮妃殿下を初め奉り内外の紳士淑女無慮一千餘名と註せられ頗る盛觀を極めたり今其概評を試みんに「合唱」秋の夕暮は生徒一同のコーラスにて頗る上出來分けてサプラノのピアニッシモに成る一節好く悲壯の情を表し得たり「絃樂四部」四番はユンケル、ハイドリッシュ、マイステル、幸田諸教授の演奏に係り四番中アンダンテは第一の出來にて優雅の演奏振りは巧みにベートヴエンの樂風を發揮して餘りありと云ふべく「獨唱」オデユッソイズ歌施は新來朝フレツク孃の初演奏當日第一の呼び物、孃が紫地に白縫の模樣あるドレスの裳裾長く悠々と登壇するや先づ急霰の如き拍手起りぬ、孃が唄振りはピユモソなるカウエン夫人に似て彼れに優る事數倍、楚々遠征の夫を佗ぶるの表情滿堂を醉殺せしめんばかり、「セロ獨奏」司伴樂は是れも新來のマイステル氏の絃其運手法の巧妙なる岡野氏のソロのみ聞ける我々の眼を驚かしめしが殊に宮方にも日頃此道の御素養深き事とて始終御熱心に御傾聽ありしは畏し「ピアノ五部合奏」四番、演者コイベル、ユンケル、ハイドリッシュ、マイステル、幸田教授の名人揃惡しき筈なく就中コイベル博士は老て益々熾にてマエストソのメロデーはそゞろ崇高の念に打れたり、斯くて午後四時頃散會しぬ

（『毎日電報』明治四十年十二月十六日）

●東京音樂學校演奏會　同校新任教師フレツク孃及びマイステル氏の披露演奏會は一昨午後二時より同校講堂にて開催、演奏曲目中第二弦樂四部合奏はユンケル氏ハイドリッヒ氏マイステル氏幸田孃の大家揃ひとて滿場唯水を打ちたるが如く第三フレツク孃の獨唱は絶美なる肉聲人をして恍惚たらしめ第四ハイドリッヒ氏のピアノ獨彈は南歐ヴエニスの欸乃にて能く其悲調を寫し第五マイステル氏のセロ獨奏は確かに絶妙、且氏は容貌秀麗の紳士にしてさながら古代名手の青年時代を見るが如くなりし最後に賑かなるピアノ五部合奏あり午後四時散會したり此日常宮周宮兩内親王及び伏見若宮殿下等の御臨場もあり兩内親王殿下には肉色御紋付に紅葉の刺繍あるお揃の御召物に御袴を召され長時の間いと熱心に御聽聞あり其他二條德川各公爵林伯爵英獨葡蘭各國大使公使夫人等も見受けられ却々の盛會なりし

（『萬朝報』明治四十年十二月十七日）

## 東京音樂學校演奏會

上野音樂學校にては昨歳中秋季音樂會を開催の豫定なりしが新來のセロイスト、ウエルクマイステル氏の來着を待ち押しつまりて去歳十二月十四十五の兩日を以て同校樂堂に開催せり、兩日とも盛會にて、演奏も皆佳なりしがフレツク孃の獨唱、ウエルクマイステル氏のセロ共に喝采を拍せり、細詳は「藝苑評語」にあり曲目は次の如し〔曲目省略〕

（『音樂界』第一巻第二号、明治四十一年二月、四一頁）

## 東京音樂學校　演奏會評

丁　六

▲新たに少壯の獨逸二樂人を加へし音樂學校演奏會は此の十四、十五の兩日を以て上野樂堂に開かれた。上野の杜は枯木立まばらに、初冬の風身に泌み渡る頃となれば、心ゆくばかりの樂の音したはしくなるは我のみであるまい。見渡せば滿堂は花の浪、此處ばかりは常久の春である。

▲會の緒は「聖の御世」なる合唱にて始まるグルツクの曲に鳥居氏の歌を附せるものである。仁德帝の御聖德を頌せるもの歌詞はなだらかに無難に出來たと思ふ。曲調は宗教の嵩高なる曲趣なれば今少し内容の豊かな歌が

ほしいと思つた。

▲次はスコツトランドの民謡に武島氏の歌を附せる「秋の夕暮」、「尾花が袖にも露は置きぬ」と云ふような調子で、原曲の漂韻素朴の野趣を失せるは遺憾であると思ふ。演奏は日曜の方がよかつた。

▲次はスカンデイナビアの民謡へ旗野氏が歌を附たもので「埴頭別離」。歌が非常によく出來て居る、當日の秀逸であると思ふ。演奏も一番しつくりして居た。合唱は全体から評すると甚だ振つてゐない。其割に男聲のよく聞えたのは嬉しいことである。一番奮勵してほしい。

▲第二が絃樂四部、第一ヴワヰオリンをユンケル氏、第二をハイドリヒ氏、ヴイオラを幸田孃セロを新顔のウエルクマイステル氏、近頃珍らしい顔ぶれである。曲はベエトオヴエンが初期の作品なる室内樂。未だハイドンが感化を受けし頃の作品であるから、ベ氏の面目の躍如たる處は尠ないが、アンダンテ、ミニエツトには流石老手の妙趣を探ることが出來る。然れども至る處ハイドンが感化を受けし跡著しく特に最後のアレグロには確に其跡が顯はれて居る。アンダンテに於けるウ氏のセロは非常によかつた。ユンケル氏のヴワヰオリン相不變達者ではあるが、いかにもぞんざいでやりつぱなしでいやな氣持がする。

▲第三は是ぞ今回の聽者、新たに來朝せしシヤロツテ、フレツク孃の獨唱、ブルツフが思込めてものせしと云ふ史詩「オデツソイス」の歌旋、詩聖ホメエロスが筆に其貞操を歌はれし、オデツソイスが愛妃、一夜遠征の夫を想ふて衣織りながら歌ひ出す歌の一節である。

▲夫は遠征して深閨孤燈暗く、外には道ならぬ戀に婚を强ひるものあり。此の間に立ちて愛妃ペネローペの苦悶は如何ばかりであつたらふか。夫を想ふては戀々の情に堪へず、今の我身の上を省みては、身も世もあらず、人の恨めしく、紅涙潸然として衣織る指を霑はしたことであらう。此消息を歌ふて實に遺憾なきはブルツフが此曲である此曲に於けるフレツク孃の獨唱は實に入神の技であつた。僕は此演奏を以て今回の白眉となすに躊躇するものでない。僕が聽けるあらゆる獨唱家の内で今回の演奏ほど感動したことは尠かつたことを斷言する。訴ふるが如く怨むが如く、言々句々肺腑より出でゝ其音の流れが直ちに聽者の胸にひしくと刺し入る手腕に至つては、獨唱の上乘なるものと云つて宜しからう。カイゼルも、カウエン夫人も中々に巧まかつた又テヒニツクの如きに至つては或はカイゼル孃の如きは優つて居つたかも知れぬが其ゆとりのある、情味のある、切實なる、一句一節苟もせず。身宛ら其境にあつて溢るゝばかりの同情を以て其詩を歌ひ出すと云ふ點に至つては、斷じてフレツク孃の壇場である。あれほどまでに表情の切實なる獨唱ぶりは全く技術以外の入神の技であらう。孃の紅なる頰には必ず一滴の涙痕があつたことを信ぜずには居られない。僕も泣いた、二度手帕を霑ほした、西洋音樂を聽いて泣くことは無いとよく人が云ふが其れは生硬蕪雜、音の高低と長短だけを譜表と首つぴきで歌ふ人々の演奏のみを聽いて居るものの云ふことである。日本人の西洋音樂はまだものには成つて居らぬ。特に聲樂はさうである。圓熟した、醇化した西洋樂を聽けば日本人なればとて決して感ぜぬ譯はない。胸から胸へ直ちに傳はる音の波は東西洋の距りはあれど、是ばかりは隔てることが出來ぬ、感ぜぬと云ふことはあり得ない。孃は次高音（アルト）の潤澤のある、柔かな、豊麗溫雅な聲である。錐で鼓膜を刺す樣な最高音（ソプラノ）では無い。二日とも滿足の出來であつた。

▲四はハイドリヒ氏のピアノ獨彈で、曲はルビンスタインの「バルカロオル」である。バルカロオルは南歐ヴエネチヤの欵乃で、其旋律をピアノ曲に移したものである。此曲は兩三度同氏の演奏を聽いた。毎度ながら心ゆく演奏振りであるが今回は別してめでたき演奏であつた。瞑目すれば夕陽のかげ緩く流るゝヴエネチヤの河を、波にまかせて上り下る小舟の金波銀波をわけゆくさま、岸には膚清らなるヴエネチヤ乙女の衣濯げるなど、幻の如く去來するを覺ゆる。特に後半波にゆらるゝ小舟のさまを寫し出せる和絃の響は、無限の興趣を禁じ得ない直ちに是れ一幅の油繪を見るの感がある。此種の演奏は氏の最も得意とする處であらう。作者は露國ロマノの人最近に於けるピヤノ樂の大家なることは、皆人の知る處である。千八百九十四年聖彼得堡に歿した。

▲五はウエルクマイステル氏のセロ獨奏、曲はリンドネルの「コンセルト」である。ウ氏は新來のセリストで少壯二十五歳の青年樂家である。獨

逸の人、父より音樂の血統を受け若くしてベルリンに學び、セロの獨奏家として名をなして居る。中々達者の腕前である。今回の曲の如きは專門家にあらずんば到底試むべからざるものであらふ。音の柔なる運弓の自在なる始めてほんとのセロの音に接した感がある。後半オクタアヴの運指の處、二三如何はしい音もあつたが、あれほど込み入つたものをセロにて奏し得ると云ふことは非常のテヒニツクを要することであらふ。曲は云ふほどのことはない。唯セロに向つてのコンセルトとして作られたもので、輕快な曲である。

▲六はフレツク孃の獨唱、甲「薔薇は開きぬ」、乙「あな、あやし」、二者とも現代作家の作曲にかゝるものである。其内「あな、あやし」の作者シリングス氏は歌劇「イングヴエルデ」の作がある。今年三十九歳の壯年で獨逸樂壇の名星である。孰れも極めて近代的の思潮にふれたものでおぼろげながら獨逸最近樂壇の一端を窺ひ得た感がある。二つとも短篇ではあるが、可憐瀟洒かぎりなく興趣が深い。演奏は日曜の方よきように覺えた。

▲最後は前の絃四部の奏者にケーベル博士のピアノを加へて五部合奏の室内樂である曲はロマンチツク樂家の驍將ロバート、シユウマン第四十四の合奏曲で、汎く諸國に愛好せらるゝ處である。特に第二の「イン、モド、ドナ、マルチア」、第四の「アレグロ、マ、ノン、トロツポ」の如きは往往其主旋律をヴワヰオリン等にて奏するを聽くことがある。然れども斯く第五の部分共に揃へて聽くことは中々珍らしい。奏者何れも一通りの勞力では無い。我々深く感謝の意を表するものである。何れの部分も其々に美くしいが、第二の鬱幽なる、第三の輕快なる、第一の華麗絢爛なる、第四の壯大豪放なる、其に加ふるに作者の常規を逸せるかと思はるゝばかり熱烈奔放なる感情は遺憾なく發露せられた。ケーベル博士のピアノ、巧なるは云ふまでも無けれど、シウマンの此曲の如きは却つてハイドリヒ氏の方適切では無かつたらうかとも思はれる。

▲此冬の樂會の二日！僕は感謝すべき日であつたことを深く記憶する。是と同時に希望して置きたいのは音樂會は是非夜にしてほしいことである。晝の樂會は何となく騷々しい、微細なる音の波動は紙一枚動くすらも邪魔になる、特に晝の空氣は音樂會には適當しない。音樂會はどうしても夜のものである。晝の音樂會は其興の七分通りを其晝の光と四圍の騷擾とに依つて遽ひ去られる、音樂會は流るゝ如き電燈の光と、しつとりした夜の空氣とに依つて始めて甦るものではあるまいか。妄評多罪。（完）

（『日本』明治四十年十二月十八、十九、二十日）

△歐樂演奏會

東京音樂學校の歐樂演奏會は師走の十五日上野樂堂に開かれた。この日は新來の教師フレツク孃とウエルクマイステル氏とが初見參といふので人氣は一段と引立つてみえた。第一は例の合唱曲は三つ乍ら平凡なので感興を起さないし、技倆も向上の跡を認むるに難い。歌詞は旗野氏のがやゝすぐれて居たが他は例に依つて例の如く、救世主に捧ぐる祈禱歌を『聖の御世』などといふのに代へて仕舞ふのは穩やかでない、なまなかの代歌よりかそのまゝ譯歌にした方がどれ程かよからうのに。第二は絃樂四部としてベエトオヴエンが短い調の四部樂を出したが、これは樂人がロマンテイクムウブメントに入らない初期の作品だけに力はあるがどうも物足りない。ただ曲が細やかなる情趣にみなぎる底のものでないからユンケル氏が絃も切れよと彈く奏法がさまで耳立たなかつた。第三はフレツク孃がブルツフ作のオデイソイス中のアリイを獨唱したが、ありていに言ふと自分の期待が稍大であつたゝめかそれ程の感じを殘さなかつた。元より孃はアルト唄ひであるからソプラノほどヒステリツクにせまる所はなく、あくまでアルトの本領を持して居た所は感服だが、どうも小しくアカデミツクに思はれたのでそれが遺憾であつた。とは言へ孃が技巧は正しく殊に當込みの震はし方などがなかつたのはうれしい。要するに極めてなだらかではあるが、天才ではなく修練の功を積んだタレントと云ふべきだらう。第四は露國の樂人ルビンスタイン氏が南歐ヴエニスの船歌を彈く人はハイドリヒ氏、この自由なる形式のうちにつゝまれたる漁夫の想波の響の何ぞしかく心ゆくばかりなる、この曲を聞くに及んではじめて自分は蘇へる思がした。音樂の演奏はまづ深く奏者の鑑賞からして胸奥に溶けたものをあざやかなる手法

によつて再現（リプロダクト）するものでなければならぬが、ハイドリヒ氏の態度は正にそれであつて自分は幻のごとくゴンドラの波にたゞよふを見、船人が悲しげに熱き想の唄をうたふを聞くやうであつた。第五はリンドネルがコンセルトをウエルクマイステル氏が彈いた。氏が技巧は驚くべき正確を有して居るが、矢張りセロは絃樂合奏に聞く折の方がおもむろに高音を慰撫するやうで興が多い、然しこのおちついて何處となく飄逸の趣ある奏者の將來は囑目すべきものがあらう。願はくは絶東の無音島に天狗となり給はであくまで深き造詣に赴かれむことを。第五のフレツク孃が獨唱は美くしかつたが前のアリイのかた優つて居るのは言ふまでもなく、第六の五部合奏は盛んなるシユウマンが曲であつたがケエベル氏が十二分に技能を發揮する餘地のなかつたのは殘念であつた。それと斯る樂會の夜にしない事は口惜しい限で感興の一部の確かに書なるために殺がるゝことゝ思ふ。

（『帝國文學』第十四巻第一号、明治四十一年一月、一五四～一五五頁）

## 明治四十年の概評

### 今年の音樂界

▲今年の音樂界は文界美術界にもオサ〳〵劣らぬほど多事であつた。啻（たゞ）に我國に於ける馴染の音樂家に止らず、英獨兩國のヴアイオリニスト、ボカリストの前後して來朝し、又歌劇バンドマン一座の興業があつて誠に華やかであつた。然し斯くの如く幾多の演奏會中、春の音樂學校の管絃合奏大會と冬の同校新來教師の披露演奏會とは、蓋し四十年に於ける代表音樂會であるのみならず、近年に於けるきゝものであつた。

▲管絃合奏會は嘗て一度音樂學校に於て試みた經驗もあつたので、ユンケル氏がいたく熱心になつて數ケ月練習の末、漸く四月末同校樂堂で催されたのである。數番の管絃合奏、合唱何れも冴えたものであつたが、當日の壓卷は遂に研究生久野久子孃といふ妙齡のピアニストであつた。樂はベートフエンがシンフオニーで、斯くの如き複雜なる形式よりなる音樂は、眞に斯道の達人にあらずんば迚て成功し得ないものである。是れより久野久子孃の名の一時に高くなつたのも無理ならぬことである。

▲冬の演奏會ではフレツク孃のヴオーカル・マイステル氏のセロは共に我國洋樂中に人無きものであつたゞけ、二日間の演奏は幾多の演奏會に優るものがあつた。今後是等の專門家によつて開發せらるゝ我洋樂界は多望である。

▲以上二種の演奏會に次いで注目すべきは歌劇の勃興である。云ふまでも無く歌劇はあらゆる藝術の發達に待つ所が多いので、我國に於ても是れが一番遲れた。古くは音樂學校で一度あつた。それから一昨年に至つて文藝協會と樂苑會とで催された。素より成功といふことは出來ないが泰西に於ける歌劇の面影は認むことが出來た。それが因を爲し昨年に及で樂苑會では第二回を試み新作の「靈鏡」とグノーのファストを演じた處がファストは歌詞なども英譯から更に重譯したものであつたのに、却て此方に成功を得たのは斯家の注目を要すべき點であらう。更に夏になつてはバンドマン一座の來朝があつて更に油を差した。音樂學校でも來春はグルツクのオルフオイスを再び演ずる相だから、前途は益々賑なことであらう。

▲其他音樂學校卒業生の一部よりなる帝國音樂會の設立、明治音樂會の活動を始め早稻田大學、慶應義塾、明治大學、高等師範學校等各專門學校學生の素人音樂會が流行し、中にはきくに足る演奏もあつた。又學生聯合音樂會の設立も昨年であつた。尙慈善樂會は年々盛になりゆき、演奏者は常に一流の士を以てする傾向を生じて來た。

▲斯くの如く洋樂の流行は、音樂學校入學志願者の增加となり、又素人の娯樂として學ぶ者多く、漸次洋樂思想の中流社會の家庭にまで這入るやうになつて、樂器の需要は非常に多い。輸入も隨分あるが內地に於ける製造所も數ケ所あつて、風琴を第一としヴアイオリン、ピアノの製造是れに次ぎ今は支那に輸出する額だけでも少くは無い、殊に風琴は舶來品をも壓するほど精巧のものが出來るやうになつたのは何より嬉しいことである。それから昨年は價と稽古が容易であるといふ點から、マンドリンが大變流行して來た。

▲最後に忘れてはならぬことが尙二ある。一は夏に於ける全國音樂家の懇親會で、啻に技術家のみならず文學者教育家も共に會して音樂教育の改

良、將來に於ける日本樂としての洋樂など種々研究討議されて、少からぬ利益を將來に持たしめた。他の一は邦樂調査で亡びんとする邦樂中價値あるものに就ての調査であるが、明治の藝術史は一面に於ては、新時代の文明を代表するに足る藝術を入れると共に、他の一面に於ては日本國粹の藝術の保存に其光輝あるを知らば、邦樂調査の時機に適した事業であるは云ふまでも無い。冬の末其演奏會は音樂學校で開かれた。

▲要するに四十年の音樂界は過去十數年間見ざるの盛觀であつた。囑望す、四十一年の樂界の奈何に發展して行くかを。（破裂刀）

（『日本』明治四十年十二月二十八日）

## ●音樂界の過去一年

兎耳生

▲多事なりし一年間　昨年の音樂界は美術界などに劣らず頗る多事であつた、ハントマーキンス孃の來朝、バンドマン一座の興行の外音樂學校には新にフレツク孃の聲樂の教師としてマイステル氏のセロの教師として渡來された事、バンドマン一座が一部の人々に樂劇熱を傳へて、牛込に眞似事ながら靈鐘フアウスト抔が演ぜられしと共に文部省に邦樂取調掛が設けられ又音樂學校に邦樂の演奏會が開かれ顧みられる事の少かつた日本在來の音樂が少くとも發展の途に向つたる事等で混沌として居る事は勿論であらうけれども非常に多事であつた丈、又非常に多望なる年であつたと思はれる、

▲音樂學校の樂劇會　音樂學校では嘗て樂劇オルフオイスを試みた事があつたが多く設備に缺點のあつた爲め不成功に終つたので此機運に際して是非模範的と迄は行かなくつても進歩した形式に開演したいと云ふ相談が出來たのは餘程前の事であつたが幸にフレツク孃と殊にセロのマイステル氏の來朝されるので相談は愈々熟し目下頻りに準備中で今年の春櫻花爛漫の好季節には多分花々しく開演されるであらうとの事である歌詞は如何するかと云ふと今の處和洋折衷でやるそうである、夫は合唱丈は先年の試演の際に日本語に譯したのがあるので成る可くは是を用ひた方が好いのであるが、其他の分迄譯すとなるとオルフオイスの役のフレツク孃に日本語を歌はせなければならないとすると頗る面倒であるので是は獨逸語、コーラス丈日本語で演る事になつたのであると云ふ話を聞いた吾人の今から其成功を祈る處である。

（『東京日日新聞』明治四十一年一月一日）

■最も聽くべき樂會は矢張り上野である、春秋二季の此の樂會は兎に角く本邦の洋樂界を代表するもので、此の會の如何は同時に吾樂壇の消長に關する、去歳に於ける同會は其以前に比してオルケストラの稍々奮はなかつたように思はれる、春の演奏はガーデやチヤイコヴイスキイのシンフォニイなどが有つたが秋のはハツセの絃四部カンツオナとシューマンのノオルデツシュ・ソングの外は何も無かつた、吾々は大に寂寥の感に堪えなかつた、去れど生徒の成績は年一年と進でゆくのは明かで、年々有望の卒業生を出してゆくのは欣こぶべきである。又昨年の同會は聲樂の不振であつたのも遺憾の一つである。特に男の獨唱家の振はなかつたのは最も遺憾である。

（『音樂新報』第四巻第一号、明治四十年一月、三〇頁）

## 明治四十一年三月二十八日　卒業式

明治四十一年三月廿八日（土曜日）午後二時

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

第一部

一　報告
一　卒業證書授與
一　校長告辭
一　文部大臣祝辭

一卒業生總代謝辭

第二部

一箏　選科卒業生　藤岡美代子　北村三岐子　小池也壽

千鳥の曲

一合唱

鞠場の默契……（ホミリウス作曲　鳥居忱作歌）

一オルガン獨奏　甲種師範科卒業生　上野外喜尾

ソナチイネ（第一章）……ラインハルト作曲

一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　杉中薫

ワルツ……ショパン作曲

一獨唱　聲樂部卒業生　山田耕作

菩提樹……シューベルト作曲

一『ヴアイオリン、ピアノ合奏』（器樂部卒業生　教師　山井基清　ヘルマン、ハイドリッヒ）

ソナタ……ベートーフェン作曲

一オルガン獨奏　甲種師範科卒業生　大西正直

クライネ、プレリュヂウム及フーゲ……バハ作曲

一絃樂四部合奏　器樂部卒業生（山井基清　澤邊眞　大塚淳）

ヴアリエーションス……聲樂部卒業生　山田耕作

ヴアリエーションス……ハイドン作曲

一オルガン獨奏　甲種師範科卒業生　松井あい

カンツオネッタ……ギルマン作曲

一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　本居長世

ヴアリエーションス……ヘンセルト作曲

一合唱

聖の御世……（グルック作曲　鳥居忱作歌）

GRADUATION EXERCISES
OF THE
Tokyo Academy of Music,
UYENO PARK
*Saturday, March 28th, 1908.*
*2 P.M.*

Programme.

PART I.

I. Report.
II. Presentation of Diplomas.
III. Address to the graduating class by the Director.
IV. Address by His Excellency Baron Makino, Minister of State for Education.
V. Response by the Representative of the Graduating Class.

PART II.

I. Koto:
Chidori no kyoku ……
Misses Miyo Fujioka, Miki Kitamura, Yasu Koike.

II. Chorus:

Wer mir den lieben Gott lässt walten
..... *Homilius.*

III. Organ Solo:
First movement from Sonatine .....*Reinhard.*
Miss Tokio Uyeno.

IV. Piano Solo:
Waltz in E flat Major .....*Chopin.*
Miss Suginaka.

V. Bariton Solo:
Der Lindenbaum.....*Schubert.*
Mr. Yamada.

VI. Violin and Piano:
Sonata.....*Beethoven.*
Mr. Yamanoi, Prof. H. Heydrich.

VII. Organ Solo:
Kleine Präludium und Fuge .....*Bach.*
Mr. Ohnishi.

VIII. String Quartet:
Variations .....*Haydn.*
1st violin: Mr. Yamanoi, 2nd violin: Miss Sawabe, Viola: Mr. Otsuka, Cello: Mr. Yamada.

IX. Organ Solo:
Canzonetta .....*Guilmant.*
Miss Ai Matsui.

X. Piano Solo:
Variationen über ein Thema aus der Oper "Der Liebestrank" von Donizetti.....*Henselt.*
Mr. Motoori.

XI. Chorus:
Trost im Scheiden .....*Gluck.*

**明治四十一年五月　演奏旅行**

同月〔五月〕東京音樂學校音樂團體が、地方音樂を開拓せんとのもとに職員生徒五十餘名の合唱隊の編成により、山梨、長野、新潟の三縣下に演奏旅行を企てた。官立學校としては近來の壯擧として注目されたのである。

（『本邦洋樂變遷史』七〇二頁）

**明治四十一年六月六日、七日　第十八回定期演奏会**

明治四十一年六月七日

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一、管絃樂

序曲「長ニ調」（第一）……クンデル作曲

二、合唱及管絃樂

海上朝暾……〔烏キ居ト忱ル作作曲歌曲

三、管絃樂附きピアノ司伴樂「短イ調」……フムメル作曲　教授　幸田延

四、絃樂及ツェムバロ大司伴樂（第十七）……クンデル作曲

ヴァイオリン獨奏部　教授　安藤幸

ツェムバロ　教師　ハイドリッヒ

五、管絃樂

組曲『レ、ゼリニー』……マスネー作曲

一、セーン、ルリヂューズ
……セロ獨奏部　教師　ヴェルクマイステル

二、アントル、アクト

三、プレリュード

六、合唱管絃樂及オルガン

神事樂『エリアス』中の二篇……メンデルソーン作曲

Programme.
OF
Orchestral and Choral Concert
BOOK No. 7
Sunday, June 7th, 1908
*At 2. 30 p.m.*
Tokyo Academy of Music
UYENO

PROGRAMME

1. Orchestra:
   Ouverture in D major No. 1.....*Händel.*
   arranged by *Wüllner.*
2. Chorus and Orchestra:
   Fern im Osten.....*Kiel.*
3. Concerto for Piano with Orchestra in A minor
   ..... *Hummel.*
   *Miss Koda.*
4. Concerto Grosso No. 17 for String Orchestra
   and Cembalo .....*Händel.*
5. Suite for Orchestra:
   Les Erinnyes .....*Massenet.*
   1. Scène Religieuse.
      Cello Solo: *Prof. Werkmeister.*
   2. Entr' acte.
   3. Prélude.
6. Chorus, Orchestra and Organ from Elijah
   ..... *Mendelssohn.*
   1. Duet and chorus "Lord bow thine
      ear to our prayer." (German Text).
      Soli *Mrs. Fujii and Fräulein Fleck.*
   2. Chorus "Yet doth the Lord see it not."
      (Japanese Text).

Conductor: *Prof. Junker.*

音樂演奏曲目梗概　第七　（と、お）

一、管絃樂

序曲「長ニ調」（第一）　ヘンデル作曲

ヘンデル (Georg Friedrich Händel 1685–1759) はセバスチアン、バッハ (Joh. Sebastian Bach) と共に十八世紀初半の樂界に現はれ、稀有の天才を以て能く從來の音樂を大成し、其の諸方面に亘りて貢獻する所甚だ大なりき。ヘンデルの功績は主として「メシアス」等の如き神事樂（オラトリオ）の創作に在れども其他の聲樂器樂に於ても今日に傳はれる傑作少なからず。こゝに奏する序曲 (Ouverture) といふは原と或る曲を奏する前に其の序として奏する樂の義なるが、十七世紀の末に至りて其の形式二樣に分れたり。即ち一は以太利の名家スカラッティの創始せるネアペル派の序曲、他は佛の巨

匠リュリの着想に係る佛蘭西派序曲是なり。而して前者は三曲部を有するに反して後者は二曲部より成り、通常緩徐荘麗なる曲部に次ぐに神速快活なる么踊樂或は追覆樂の曲部を以てせり。而して此の形式はヘンデル、バッハ、グラウン、其他十八世紀初半の諸家の採用せる所にして此に奏する者も亦た其の好的例なり。

前奏部の特性は荘麗宏大、聽者をして覺えず襟を正さしむ。其の形式甚だ單純にして幾個の短句の相連續せる者に過きず。次の快活なる曲部も亦た短篇にして追覆樂様の曲節に始まり、終尾に至るまで多少此の作法を持續す。原作にありて樂器の編成法は現時の管絃樂に慣れたる耳には稍や單薄に過ぎて未だ幼稚の域を脱せざるが如く感ぜらる。こゝに奏するは五年以前物故せる獨の作家フランツ、ヴュルネル（Franz Wüllner）が新に吹樂器を増加して、其の缺點を補ひたる者にして此の如く改裝せる本序曲は感動力に富み、華麗にして、然かも高雅の趣致を具ふ。

## 二、合唱及管絃樂

### 「海上朝暾」

キール作曲
鳥居忱作歌

原歌詞「東遙かに明り行く」は獨の詩人ノヴァーリス（Novalis 1772–1801）の筆、曲は同國フリードリッヒ、キール（Friedrich Kiel 1821–1885）の作に係る。キールはラーン河畔プーデルバッハ（Puderbach an d. Lahn）の人、二十餘歳、伯林に遊び、此處に其の音樂研究を修了して後、教師及び作曲家として久しく該市の王立音樂院に教鞭を執れり。善く近時の對位法及び追覆樂に通曉す。

其の作品の重なる者には三部、四部合奏等の室内樂もあれども、就中合唱及管絃樂の曲即ち神事樂「基督」及び安息曲等最も人に知らる。彼の作曲は何れも正確なる古典派の作法に基きて而かも近世的傾向を斟酌したる者なり。此に奏する合唱曲は長篇にあらざれども彼が傑作の一たるを失はず。全曲を通じて内に高雅なる情操を蓄へ外に完成せる形式と技巧とを示せり。

海上朝暾

紫立ちたる青海原や、まだ夜を殘すか、横雲の空。』
わたづみの沖の方、やがて明けむとすらむ。』
東のみ空は、ほのぼの匂ふ。あゝ、あはれ。見渡ははても知らぬ、
涙よりしらみてぞ、烏羽玉の夜もあけぬ。』
芽出たき朝彦、今こそのぼれ。
芽出たき光は、今こそはなて。
差昇る朝日影、あはれ、芽出たき眺望。』
空には浮雲、たゞよふ見えず。
遠には島山、かすむも見えず。』
わだづみの海原は、きはみだに知られじな。』
雄涙のみねには、白金ながし、
雌涙のたにには、黄金を湛へ、
薄き濃き紅、みなぎらすや瑠璃の面。』
芽出たき眺望、きらめく海原。おもしろの眺望、輝く海原。
おもしろや、おもしろやな、光の海原。
芽出たしや、芽出たしや、日の出の海原。』

### 三、管絃樂附きピアノ司伴樂（短イ調）　フムメル作曲

作曲者フムメル(Joh. Nepomuk Hummel)は獨逸ヴイマルの人、其の父維納市の某劇場に樂長たりし故によりて當時の名家モツァルトと相識る。彼れ乃ち此の門下に入りて教を受く　八八年より九三年にかけて彼は既に洋琴家として諸方に遊歴せしが、後アルブレヒトベルゲル、サリエリ、及びハイドンの諸大家に就きて作曲學を修めぬ。一八〇四年より一一年に至るまで、彼はハイドンに代りてエステルハチイ侯の宮廷樂長を勤めたりしが、後、樂長としてスツットガルトに赴き、次で二〇年ヴイマルに移りてよりは終世此の地に留まりて旁ら子弟を教へぬ。ヒルレル、ヘンゼルトの諸家其の門より出でたり。彼が洋琴家としての技量は其の奏法の華麗、明瞭且つ正確なる點に於てクレメンティ、クラーメル兩家の特長を併有せりと稱せられき。殊に其の即興演奏の才能に至ては彼の以後再び其の比を見ずと傳ふ。作曲家としての彼も亦た甚だ注目に値す。彼は極めて創作力

に富み、聲器兩樂に遺せる作品多きが中にも、其の洋琴曲最も重要なり。唯だ其の曲の詩的樂趣に乏しきが爲め終にモツァルト、ベートーヴェンの諸大家と比肩し得ざるは惜むべし。こゝに奏する短イ調司伴樂は其の傑作中の一なり。

## 四、絃樂及ツェムバロ大司伴樂（第十七）

ヘンデル作曲

こゝに奏する司伴樂は前に奏したるフムメル作の者と同名なれども其の性質全く相異れり。こは舊式の司伴樂にして以語〔後〕Concerto Grosso（大司伴樂）の名を以て呼ばれ當時の Concertino（小司伴樂）と區別せられたり。即ち後者は獨奏樂器の合奏する者を指し、前者はこれに合奏樂器を加へたる者に名く。此の二種の司伴樂の區別は十七世紀の末期に起りたることにして、ヘンデル等の時代即ち十八世紀の初半に於ける大司伴樂は何れも前記の如く諸種の獨奏樂器に絃或は管絃合奏の伴へる者なり。此の種の司伴樂は四、五、或は六曲部より成り、其の中一曲部は通例、追覆樂或は追覆樂風に作られ、又た一曲部は舞踏曲に作られたり、（本曲にはミュゼット舞踏曲を採れり）されば此の司伴樂は古き組（スート）の曲の体に作られたる者なり。本曲はヘンデルが傑作中の傑作ともいふべき者にして眞正の藝術品に缺くべからざる「優雅（アンムート）と威嚴（ヴュルデ）と」の二特性を兼備せり。

## 五、管絃樂

組（スート）『レ、ゼリニー』　マスネー作曲

本曲は佛國最近の作家マスネー（Jules Emile Fréderic Massenet 1842生）が文豪ド、リール（de Lisle）の作なる古代悲劇『レ、ゼリニー』の間奏樂（インシデンタル、ムジック）として作れる者、こゝには其の五曲部中の三つを撰びて奏す。エリニーは古希臘神話中の女神、炬火を手にして不義兇惡の徒を追捕し、幽明兩界を通じて一切の有罪者を處罰すと傳ふ。作曲者は其の前奏（プレリュード）に於て簡短に這般の消息を描出せり。樂は緩徐にして節度ある進行に始まり、外に平靜を示しつゝ内に既に罪惡の自覺を包むの態を表はせり。次で破裂は來り罪有る者は飽くまでも追はれ、死後に至るも猶ほ其の窘迫に苦しむ。前奏は實に遺憾なく作家の技量を示せる者。セーン、ルリヂューズは近世管絃樂にて奏する華麗なる祈禱曲にして中に佛國固有の感情を籠めたり。セロ獨奏を含める中部進行（即ち神助祈願の段）は美妙秀拔なり。アントルアクトはヴァイオリンにて奏する秀美且つ間々激烈なる旋律より成れり。然れども特に評すべき箇處なし（本曲は原來前奏（プレリュード）を以て始むべきものなれども第四、五の二曲部を省きたるが爲めにアントルアクトを以て終る能はざるが故に殊に前奏を最後に奏して終括とせり。）

## 六、合唱管絃樂及オルガン

神事樂（オラトリオ）『エリアス』中の二篇　メンデルソーン作曲

メンデルソーン（Felix Mendelssohn-Bartholdy 1809–1847）は獨逸ハムブルグの人、幼にして神童の聞えあり。十五歳の時短ハ調合奏曲（シムフォニー）に其の天才を表はしてより以來有らゆる音樂の部門に創作して夥多の佳作逸品を遺せり。（其の筆を染めざるは唯だ歌劇（オペラ）の一方面あるのみ）彼の短生涯を以てして能く此の如き多大の貢献を爲したるを思へば其の偉才や吾人の驚嘆に値すべし。こゝに奏するは彼の神事樂『エリアス』中の聯唱（デュエット）及び合唱（コーラス）にして、此の作は他の神事樂『聖パウルス』と共に彼の聖樂作品中の白眉なり。評家或は『聖パウルス』を以て『エリアス』に勝れりと爲す者あれども其の流行の程度に至ては『エリアス』を凌ぐ者唯だヘンデルの『メシアス』あるのみ。本樂は曲趣の威嚴ありて且つ創意に富める點に於て實に完全の域に達せり。歌詞は舊約聖書中の語を撰びて用ひたる者、此に奏する二曲は神怒に觸れたるシォンの民の救助を求むる嘆聲なり。

前に奏する聯唱及び合唱は原歌詞を用ひ、彼の合唱には曲趣に適當なる邦文歌詞を附したり。

### 甲、聯唱及合唱原歌詞

Duett:

Zion streckt ihre Hände aus, und da ist Niemand der sie tröste

Chor:

Herr, höre unser Gebet!

### 乙、天ノ岩戸　乙骨三郎作歌

「御神よ　我が　嘘なり　天地暗く、
いざや、出でませ、世は邪悪なり、
いざや、祈らなば、岩は屋根なき人の戸なり、
祈らなば、照らしませ、日は荒れ狂ふ。
祈らなば、隠れの中にぞ滅びん。
闇の中に坐す、
大神よ、
夜往くべし。
すべ
ま
さ
び
ふ。』

## Ouverture.

*Händel.*

This Ouverture by Händel consists, like so many of Händel and of Händels' time, of an introduction and of an Allegro. The character of the introduction is stately and distant (maestoso) and the music looks stern into your face. The form is very simple and somewhat of a sketch only, several short sentences following each other. The Allegro begins with a "fugato" which is kept up more or less throughout. This moment is also short. The instrumentation of this Ouverture being to our ears a little thin and primitive, Wüllner, an excellent German musician and conductor (died five years ago) has added—and with excellent judgement—more wind-instruments and in this arrangement the Ouverture is most impressive, brilliant, rich and yet noble.

H. H.

## Fern im Osten.

*Kiel.*

Friedrich Kiel (born 1821 and died 1885) is a highly respected German composer and one of the most distinguished masters of counterpoint and fugue of newer date and was for many years Professor of Composition at the Royal Academy of Music at Berlin, in which capacity he was much esteemed. His principal works were pieces of chamber-music, such as Trios, Quartetts, but above all big works for Chorus and Orchestra—an Oratorio "Christus" a Requiem etc.—All his compositions are of the sound classical school, tempered with due regard for the best modern tendencies. The Chorus heard on this occasion, although not very long, is one of his finest efforts, very expressive and noble in sentiment and perfect in form and execution.

H. H.

## Concerto for Piano with Orchestra.

*Hummel.*

Hummel (born 1778 died 1837) a classic of the Pianoforte, was the most celebrated Piano-player of his time.

As a composer he has been very prolific, but he is most important as a composer for the Piano. One of the reasons why he can not rank with Mozart or Beethoven is the absence of the highest sense for musical poetry in his compositions. The Concerto in A minor is one of his finest works.

H. H.

## Concerto Grosso No. 17 for String Orchestra and Cembalo.

*Händel.*

This Concerto grosso(great)was written for String Orchestra, Soli for two Violins and Cello and with Cembalo (the old Piano). A Concerto of the old style is quite different in character and form from for instance a Piano Concerto by Hummel, such as we have just heard. The Concerto grosso of the first half of the 18th Century was a piece for a combination of several solo instruments with a string—resp-full-band. It contained four, five or even six movements, one being usually a fugue or a fugato and one a dance—a Musette in this one and it is therefore in the old form of a Suite. The present Concerto shows Händel

at his very best. It combines those qualities, which almost all real works of art ought to have, namely, "grace and dignity" (Anmuth und Würde).

H. H.

## Les Erinnyes.

*Massenet.*

"Les Erinnyes" is a French "Tragédie antique" by de Lisle to which the distinguished French composer Massenet (born 1842) has written incidental music, altogether 5 movements, three of which are played on this occasion. The Erinnyes were in ancient times the furies who punished crimes in this world and after death, and pursued the guilty with burning torches. The composer gives us a short picture of this in the Prelude. It begins with a slow and measured movement, outwardly calm, yet the knowledge of guilt already within it. Then the outbreak comes and the guilty is mercilessly hunted to death and condemned even after death. The composer, in composing this Prelude, has quite mastered his task, which means in this case a great deal.

The "Scène religieuse" is a beautiful prayer written for modern Orchestra and is of course French in sentiment. Very fine and out of the common is the middle-movement—the invocation—with the melody played by a single 'Cello. The Entr' Acte consists of a very fine and at times even passionate melody for the Violins, but does not call for any particular comment.

H. H.

## Text for the Duet and Chorus from "Elijah."

*Mendelssohn.*

DUETT:

Zion streckt ihre Hände aus, und da ist Niemand der sie tröste.

CHOR:

Herr, höre unser Gebet!

〔批評および関連記事〕

### 東京音樂學校演奏會

上野公園東京音樂學校にては去る六月六日七日の兩日を期し同校樂堂に於て開會せり。兩日共聽衆滿堂の盛會にて例に依りオルケストラ、合唱等ありて喝采を拍せ[ママ]り、例年よりも進歩の跡は見ゆれど今回の演奏は概して練習不十分の樣見受けたり細評は「藝苑評語」を見られたし。当日の曲目次の如し。〔曲目省略〕

（『音樂界』第一巻第七号、明治四十一年七月、五〇頁）

### 東京音樂學校演奏會評

■前號豫報の如く東京音樂學校演奏會は去六月六日、七日の兩日を以て同校樂堂に開かれた。六日は重に學生其他學生の關係者の招待に依りて、七日は學校よりの招待者及び入場券を發賣せし人々に向つての演奏であつた。例に依つて短評を試むることゝしよう。

■第一・管絃合奏。ヘンデルの序曲（長二調）、近く故人となりし獨乙派樂家フランツ、ヴュルネルの編曲にかゝるもので、大分管樂部に豊麗なる樂器の增加を圖つて居る。前奏部の豪宕なる終曲追覆部の輕妙典麗なる、古典的の常習は免かれないまでも聽く者をして、そぞろ「信」の華さく十八世紀文藝の精髓を味ふの感あらしむる。演奏も當日管絃樂中の白眉と云つてよかろう。土曜より日曜の方遙によく聽かれた。

■第二・合唱及管絃樂。キイル曲、鳥居忱氏歌。題は「海上朝歌」作曲者キイル氏は明治十八年に故人となつた、獨逸の作曲家で神事樂の作曲其他短篇の歌謠曲を殘して居るが或一派の人よりは氏の作風を難じて「和聲と樂式に囚くられたる樂人」と云ふ批難もあるけれども、作風の嚴格なることは皆人の推稱する處である。歌詞今少しく清新の風趣を傳へてほしいと思ふ點もあるが全体からなだらかな出來であると思ふ。演奏は兩日共に十分の出來と云ふことは出來ぬ。尤も是は中々の難曲で伴奏の管絃合奏部の三

變拍子と合唱部の二拍子とが一處になる等の箇處も聽き受くる樣であるが、其にしても今暫らくの練習を經べきものであると思はれる。特に甚だしく次中音部と低音部の不足を感じた。歌詞の不明瞭は例に依つて例の如くである。

■第三管絃伴奏ピアノ司伴樂。フンメルの短イ調。幸田延子女史演奏。ヴヮヰオリンを令妹幸子夫人に讓つてより久しく獨奏に遠ざかつた女史の演奏を聽くことを得しは聽衆の甚だ滿足した處である。曲はフンメル傑作中の一であるが氏の作曲は其手法の困難なるを以て有名である。作曲の欠點と云はるゝ處は徒に手法の絢爛なるに任せて詩趣の慈味に欠くる處があると批難されて居る。女史の演奏中々苦心の痕が見えるけれども過失も中々多かつたようである。和絃の彈じ損じは兩日共兩三度耳についた。如斯は如何なる大家にも無い限りでは無いが、其よりも吾人の遺憾に思つたのは、曲全体を通じての印象が極めて薄弱なことである。部分々々には流石は老手であると感服する處もあるが全曲を通じての感興と云ふことが統一されて居らぬ。演奏者の第一に注意すべきは此の點で全生命の發揮と云ふことが最も大事である。つまり演奏に對する態度が余り冷靜すぎる爲めに、音樂其の者に全自己を沒了せしむることが足りない。言を換へて云へば演奏其の者に向つての全精神の燃燒が足り無い。音樂は音樂、自分は自分と云ふ態度では入神の技は中々覺束ないことである。併し女史の奮て出演とられしは吾等の欣喜に堪ざる處である。

■第四絃樂及ツェムバロ大司伴樂。ヘンデル曲。ヴヮヰオリン獨奏部安藤幸子夫人、ツェムバロはハイドリヒ氏。極めてじみな古典的な曲である。ツェムバロはピアノの發明される以前に用ゐられた有鍵樂器の名で、今回の演奏はピアノを其の代用として用ゐた、曲としては至つて素朴のもので今人の耳には余り感興に値せぬものと思はれる。演奏も上出來とは云ひ兼ねる。とり立てゝ評する程の箇處も無い。

■第五管絃合奏。スート「レ、ゼリニイ」、マスネー曲。此の曲はもと奏間樂として作曲されたもので、テキストは佛國高踏派詩人の鼻祖と云はれて居るルコント、ド、リイルの作で、マスネー作曲中の最も劇的表情に富んで居ると云はるゝものである。演奏は練習が不十分と見えて多少不滿足の點があつたが、ウェルクマイステル氏のセロ獨奏は優に其不滿を充して余りありと思はれた、マイステル氏の音樂こそホントの音樂と云つてよからう。

■第六合唱管絃樂及オルガン。メンデルスゾオンの神事樂「エリアス」の一節。歌詞は乙骨三郎氏の筆になりて「天の岩戸」となつて居る。始めフレツク孃と藤井夫人の聯合の部分と祈禱の文句とは原語の儘にて歌ひ、合唱に入りて邦語の「天岩戸」となるは如何にも窮策と見えて面白く無い、何とか工夫の仕方があるだらうと思はれる。原詩の儘で歌ふなら兎に角にも邦語の歌詞を配する以上はあまり歌詞を輕視するのは宜しくない。フレツク孃と藤井夫人の聯唱は二人ともマチ〳〵で面白くない。特に兩者表情に統一がない樣に思はれた、比較しては少し酷ではあるが藤井夫人の聲は余りに平板で音量に乏しく一本調子の嫌がある。特に表情と云ふ點に今一層の注意を拂う必要があると思う。今回の音樂會は概して練習不十分の樣である。公開演奏は余程の練習琢磨を要することであらう。

（『音樂界』第一巻第七号、明治四十一年七月、四一～四二頁）

**明治四十一年十一月二十八日、二十九日　第十九回定期演奏会**

明治四十一年十一月廿九日

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一　管絃樂

序曲「サクンタラ」……ゴルドマルク作曲

二　獨唱合唱及管絃樂

「美はしきエレン」……（ブルッフ作曲／乙骨三郎作歌）

三　管絃樂附ピアノ司伴樂（短ハ調）……ベートーヴェン作曲
　　獨唱〔助教授　藤ペイ井ン夫環人
　　教師　ヘルマン、ハイドリヒ

四　絃樂
　イ、歌劇「マンフレッド王」前奏……ライネケ作曲
　ロ、小夜樂中の悲歌……チャイコフスキー作曲

五　管絃樂及合唱
　歌劇「タンホイゼル」中の行進曲……〔乙ワ骨ゲ三ネ郎ル作作歌曲

Programme
OF
Orchestral and Choral Concert
BOOK No. 8
*Sunday, November 29th, 1908*
*At 2 p.m.*
Tokyo Academy of Music
UYENO

Programme

1. Orchestra:
   Overture "Sakuntala" .....*C. Goldmark.*
2. Fair Ellen:
   Ballade for Soli, Chorus and Orchestra
   .....*M. Bruch.*
   Soli, *Mrs. Payne and Mrs. Fujii.*
3. Concerto for Pianoforte and Orchestra
   in C minor.....*Beethoven.*
   *Prof. H. Heydrich.*
4. a. Entre Acte from the Opera "King
   Manfred".....*C. Reinecke.*
   b. Elegy from the Serenade
   for String Orchestra .....*P. Tschaikowsky.*
5. Tannhaeuser March for Orchestra and
   Chorus .....*R. Wagner.*

Conductor: *Prof. A. Junker.*

音樂演奏曲目梗概　第八

一、管絃樂

序曲『サクンタラ』　ゴルドマルク作

カール、ゴルドマルク（Karl Goldmark 1830 生）は有名なる匈牙利の作家なり。年少にして維也納府に遊び初めヴアイオリンをヤンザに學びしが、四十八年同地の音樂院に入り暫く此に在りて後は獨學によりて今日の名聲を得るに至れり。其の諸作中殊に有名となりたるは歌劇『サバの女王』にして、其の音樂は絢爛華美なる東洋的色彩を帶びたるを以て特長とす。此に奏する序曲は彼が始めて樂界の注目を惹き得たる作品にして又た其の佳作の一に數ふるを得べし。こは眞の標題樂（Program-music）即ち音樂のみによりて聽衆に物語を聞かする曲なり、印度の詩家カリダーサの筆になれりと傳ふるサクンタラの古話は廣く世人の知る所なれば、こゝには音樂の說明上必要なる限り概略を記すに止む。

さる女神の娘サクンタラは僧侶の長に養はれて尊き森に在りしが、一日大王ドウシュヤンタは獵に出でゝ此の森に來りサクンタラを見て之れに懸想し、己が妃に迎へんとす、之れに次ぐ一幕は二人の幸福なる結緣に終る。かくて王はサクンタラに指輪を與へ、これを證として城に尋ね來よと

て立ち去りぬ。然るに、こゝに有力なる僧のサクンタラに怨を抱ける者ありて、復讐を企て、呪詛によりて王よりサクンタラの記憶を奪ひ、再び女をば想ひ起すことなからしむ。又た指輪もサクンタラが聖き河にて浴する際に折失ひ畢りぬ、されはサクンタラは緣者に導かれて王の許に到りたれども知らずとて斥けられ、今は鄕里に歸ることも叶はず、獨り悲嘆にくれてさまよふにぞ母の女神、あはれと思ひて、己が許に引き取りぬ。然るに指輪は漁夫に見出され、王の許に還りたれば王はこれを見てサクンタラが事を想ひ起し、己が無情を悔ゆると共に悲嘆愛慕の情に堪えずして暮す内、惡魔征伐の軍に上りて凱旋の歸途サクンタラにめぐり逢ひ、物語は玆に目出度局を結ぶ。

曲の初、同音にて奏するヴィオラ、ファゴット及びセロの陰欝なる調子は先づ凶運の來らんとするを豫想せしむ。然れども次で起るセロ獨奏の五節に分れたる上行進行は其の運命の頓て吉に轉ずべき機の到るべきを感せしむ。之れに次では現はるゝクラリネット及びセロ獨奏のあこがるゝ如き上行旋律はサクンタラの容姿を表はし

次で響くオボエ及び第一ヴァイオリンの下行旋律はドゥシュヤンタを示す者と爲すを得べし。

此の兩旋律は今や同時に起り相和合してサクンタラと大王との結緣を示す。

然れども之れに次ぐ稍速かなる部に於ては樂趣一變して、ホルンとトロムペットの鋭き響起る。

こはサクンタラの運命の惡きに向ひたるなり。僧侶の復讐は王よりサクンタラの記憶を奪ひ去りぬ。されば次の緩かなるクラリネットの獨奏も王の耳には見知らぬ者の聲の如くに響くなるべし。

サクンタラは今や王に斥けられ、寄邊なくさすらふ身となれり、彼女の故き旋律は今や英吉利ホルンに移りて如何に淋しく訴ふるが如くに響くぞ。又た同じ樣なる樂句はクラリネットに現はれて更に悲しく響くに非ずや。

然れども此に再び一轉機は來り、次で起る。ヴァイオリンのトリップレトはサクンタラの旋律を圍繞して保護するが如く聞ゆ。されどかの悲しき樂句は尙ほ凡ての樂器に現はれて響く。

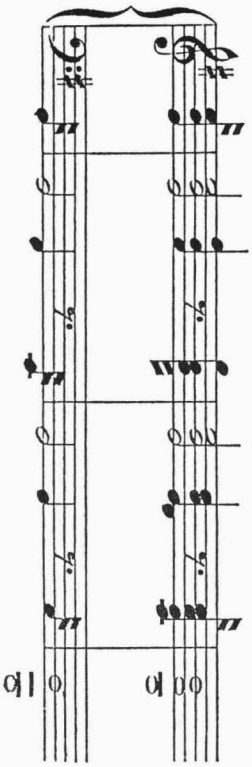
かゝる中に俄に稍速かなる調起り聽衆をして再び大王を想起せしむ。而してバッスは『ト』音上の風琴點を奏する間に半音階的に上行する和絃は漸く大王に往時の記憶の歸り來るを示す。かくて管絃樂は漸次に强く迫り、來り之れに次ぐ稍緩かなる調に於てサクンタラとの初會見の折に響きたる旋律再び現はる。此に於てか王は後悔の念むら〳〵と起り、全管絃樂は勢よき快活調にて絕叫し、引續きて上行する和絃は勝利の歡呼に連りて曲を終る。

## 二、獨唱、合唱及管絃樂

『美はしきエレン』　　ブルッフ作

マックス、ブルッフ（Max Bruch）は一八三八年一月六日を以て獨逸ケルン府に生る。合唱及管絃樂の作家として最も名あり、其の諸作中『オデュセウス』『フリトヨフ』『ノルマンネン、ツーク』等は就中最も彼の名を高からしめたる者而して玆に奏する『美はしきエレン』も亦た其の傑作の一たるを失はず、こは比較的早年の作に係ると雖、其の圓熟せる樂器の編成法と巧妙なる表情法とは既に彼の樂才の非凡なるを示せり。歌詞は世に知られたる詩人エマヌエル、ガイベル（Emanuel v. Geibel 1815-1884）の歌を撰びたる者、物語の筋は蘇格蘭の城塞にて敵の包圍に苦める英軍の一少女エレンが事を叙せり籠城せるエドウオード公の軍は力既に盡きて討死の覺悟を定めたるに美はしきエレンのみは援軍の既に近けるを信じて一向士卒を勵ます間に援兵終に到りて戰は英軍の勝利に歸すといふにて終る。

曲は次に掲ぐる意味深き短和絃を以て起り。



エドウォードの軍に對する運命の警告の如く聞ゆ。次でエドウォードが落城の近きたるを豫言するや伴奏の絃樂器は同音にて四分音符の等長進行を奏し、巧みに軍氣沮喪して士卒の絶望せる狀を描出せり。

次で曲頭の短和絃は再び現れて彼等に警告す。然れども勇しき士卒は唯だ愁を含みて立つのみ。

以上の陰欝なる曲趣と好對照をなす者は次で起る伴奏ヴァイオリンの上行するフィギューア（即ち幾度も疊み返へして奏する樂句）にして、こは美はしきエレンが抱ける勝利の確信を示す者なり。エレンは一向に勝利を期待し微かに援軍の聲を聞くが如く信ず。次で進行曲風の「過度ならざる快活調」に移り、先づ次に掲ぐる「ホルンの獨奏」は微かにピブロックの聲を寫し。

同時にヴィオラ、セロ及びバッスの節奏ある指頭彈奏は既に進み來るカムベル軍の歩調を豫想せしむ。エレンは歡喜に激して、士卒等に援軍の聲の聞ゆる旨を告ぐ。されとエドウォードは之れを信ぜず、此に於てか絃樂は再び、かの力無き同音に移りて公の意氣銷沈の態を表はせり。

かゝる間に日は天に冲して稍や傾き初め、三度運命の警告は響きて何事か起らんとするを語るが如し。エレンは今明かにカムベル軍の進み來るを聞けり。ピブロックの聲は此度は「フリュート」に聞え、同時にヴィオラは次の如きフィギュアを以て隊伍の歩調を示す。

次で曲は熱烈なる快活調となり敵軍は突擊し來り守兵は城を枕に討死すべき時となりぬ、かくて士卒等が臨終の歌（稍緩調）は悲しげに響く。

次で短かき快活調とエドウォードの宣叙調ありて、それより激戰を描出せる「甚だしき快活調」に遷移し、管絃樂の總奏となる。今や一齊射擊は轟き、劍は鳴り、決死の激戰は始まりぬ。かくて味方の軍旗の倒るゝや美はしきエレンの之れを握りて屹立する刹那朗かなる「長ハ調」にてカムベル軍の勝利の導旋律は喜ばしき便りの如くに響き渡る。

此に於てかエレンは尙ほ一度小なる軍勢を勵まして地歩を固守せしむ。かる間にも勝利の導旋律は愈近く愈高く響きてトロンボーンは嚮にヴィオラの奏したるフィギュアを承けて奏す。

勝利の導旋律は愈頻に響きてカムベルの軍は既に敵の背後を突き重圍を破りて今や城に入りぬ。次で聞こゆる美はしきエレンの神に捧ぐる謝恩の歌は甚だ優美なり、こは勝利の導旋律を四分の三拍子に引き延ばしたる勢よき緩調なり。

これよりも更に莊麗、更に歡喜の情の溢れたるは最後に響く勇士の合唱にして勝利の旋律と謝恩の歌との合成せる者なり。

美はしきエレン（獨唱は英語にて唱ふ）　ガイベル作歌　乙骨三郎譯歌

エドウォード公（中音獨唱）

『やよ、者共、善く聞け。今は隱くすも詮なき事。味方は糧の盡きたるのみか、力と頼む彈藥さへも、殘り少くなりたれば、敵の圍を破るべき、援の兵の疾く來ずは、かしこに昇る朝日子の、沈む夕をまつ間もなく、城を枕に共々に、果つべき命と覺悟せよや。』

（合唱）告げ渡す、御言に士卒は萎るゝばかり。

折から花の少女エレンは、ひとり片方に佇みて、耳澄ます氣色。――頓に聲勵まして、士卒に向ひ

エレン（高音獨唱）

『いかに、方々、あの物音を聞かれずや。櫓に上りて篤と見られよ。あれこそキャムベルが陣太鼓。風のまに〳〵聞ゆるは、『昔の盟忘れじ』の、ピブロックの一節。』

エドウォード

『いや〳〵それは其方の僻耳。櫓の上より見渡す限り、青きはみ空、黄ばめるは砂。遠き彼方の、葦原の、風吹くなべにゆら〳〵と、靡く外には見る物なし。』

（合唱）仰ぐ空、日は長けて、傾き初むる程に、最後の彈を筒に籠め、今ぞ果と見交はす中に、エレンは獨り、尙も耳を澄まし、

エレン

『先にも申しゝことなから、今も聞ゆるかの物音は、キャムベルの軍に相違あらじ。太鼓の響ピブロックの聲、さては大地を踏ならす軍兵共の足音。』

エドウォード

『如何に其方の申すとも、援の勢は影だに見えず。早や落城こそ近づきたれ。敵は曲輪に梯子を掛くるぞ。今は共々潔よく、討死すべき時となつたり。』

『さらば別れん妻よ子よ。なれし山邊の水よ野よ。』

『さらば別れん妻よ子よ。なれし山邊の水よ野よ。』

『いざや者共。筒先そろへて一度に放ち、劍を拔きつれ突きかゝれ』

（合唱）筒の音、鯨波の聲、轟く最中に吾が旗の倒るゝを支へ

止めたるエレン

エレン

『方々、挫け給ふな。援の軍の歌聲は、早やも間近に聞ゆるを。――見られよ。漲ぎる煙早や薄らぎて、遠き彼方も眼のあたり。』

（合唱）み山おろし荒ぶごと、敵の後目掛け。

推しよする援の軍勢、これぞキヤムベル軍。

『見られよ彼方の廣き野に、きらめく影は百千の軍兵、頭に鷲の羽を飾り、身に着る衣は市松摸様。風にひらく閃めくは、吾がイギリスの旗標』

（合唱）敵軍破れ、圍解けぬ、嬉しさにエレンは歌ふ。

エレン歌

『天つ神の惠を、いざ共に稱へん。』

エレン及びエドウォード歌

『天つ神の惠を、いざ共に稱へん。』

エレン、エドウォード及勇士等歌

『天つ神の惠を、いざ共に稱へん。』

三、管絃樂附ピアノ司伴樂

短ハ調司伴樂　　ベートーヴェン作

本曲はベートーヴェン（Beethoven 1770-1827）の作なる司伴樂五篇中の第三に位し、千八百年の作に係れり。されば、こは尚ほ彼が早年の作に屬すと雖、然も既にモツァルトの感化より全然脱却したる時代の作品にして其中に表はれたる諸樂想は何れも其の感情に於て全くベートーヴェン的なるのみならず、彼の「短ハ調」諸曲に共通なる特徴を具へ居れり。本司伴樂の形式は古きクラシックの形式に則りたる者にして即ちモツァルトより傳承せる者なり。曲は長き管絃の總奏に始まり豫め第一曲部中の諸樂想を聞かしめ聽衆をして次に來るべき曲部を翫味するに適せしむ。獨奏部は理想的なるピアノ司伴樂獨奏部の模範とも爲すべき者にして即ち此の樂器の曲として巧みに作られ且つ幾分華美にして然かも虛飾に流るゝことなき美妙なる音樂なり。曲部の末に近かく終節と稱する部あり。凡そ司伴樂に於て終節といふはそれまでに奏したる諸樂想中の一二を基礎として獨奏者の演ずる即興演奏の如き者なり。司伴樂中に終節を挿むはベートーヴェン時代の慣例にして今日も尚ほ幾分行はれ居る事なり。而して終節は大抵曲の主調に於て細かく華々しき手を奏する者なれども此の曲の終節は靜かに美はしく他調の和絃に移り行きて甚だ安慰的功果を與ふ。次で急迫激烈なる增强奏となりて曲を終る。

四、絃　樂

甲、歌劇『マンフレット王』前奏　　ライネッケ作

カール、ライネッケ（Karl Reinecke 1824生）は最近に於ける獨逸の有名なる音樂者にして洋琴家并びに作曲家として名あり。殊に作曲家としては凡ての音樂の部門に亘りて夥多の作品を出せり。即ち室樂、歌劇、合唱曲、小歌曲等に於て作る所二百篇を越ゆ彼の大作の一は歌劇「マンフレッド」にして其の序曲及び前奏は最も樂界に愛賞せらるゝ管絃樂曲なり。此の前奏曲は初め質問的告訴的の曲節に起り次で高雅なる旋律に移るこの旋律は美妙なる轉調法を用ひて常に奇警斬新に聞ゆ。本曲は凡て婉美媚ぶるが如き旋律法と温情溢るゝが如き色彩とを帶びたる小管絃樂曲なり。然れどもライネッケの作品が凡て獨創的趣致を缺きたるは惜むべし殊に此の曲に於てはシューマンのロマンチックを摸倣したる痕跡歷々として蔽ふべからず。

乙、小夜樂中の悲歌　　チャイコヴスキ作

ペーテル、チャイコフスキ（Peter Tschaikowsky 1840-1893）は露國作曲家中の最も天才に富みたる者と謂ふを得べし。彼の音樂は殆ど全部露國民的趣致を具へ往々粗野にして狂熱に富み或は抒情的にして感情に趨るも而も尋常平凡に陷ることなし。

此に奏するは彼の小夜樂（作品第四十八）中の第三曲部にして其の初節は纖麗且つ夢幻的なる曲節に始まり、次で婉美極まりなき旋律に移る、セ

ロ及びヴィオラの指頭彈奏は初めこの旋律を裝飾し、後、自らこれを取りて奏するに及びヴァイオリンはそれに從屬す次でトリップレットの進行現はるゝに及び悲哀的樂趣は漸く失はれ、バイオリンは漸次急迫し來りて遂に激動的となる。然れども最强奏の後、ヴィオラは再び鎭撫するが如くに曲頭の旋律を取りて本の速さにて奏す。これよりヴァイオリンとセロとは交々主導者となりて進行する中「稍速なる調」に入りてバイオリンは激烈なる最强奏に高まりそれより節を終るが如くに暫く激情的趣致を帶ぶ、然れどもそは忽ち靜まり最弱奏となりて消え去る。一般休止の後、樂は最初の速度に還りて夢の如くなりし何物かを追想するが如くに響き、陰欝なる和絃の長大息の如くに響くと思ふ間に「ニ」音の風琴點起りて漸次に凡ての聲音を鎭め、悲歌は最も微かなる弱奏に於て終る。

五、合唱及管絃樂

歌劇タンホイゼル中の行進曲　ワグネル作

リハルド、ワグネル (Richard Wagner 1813–1883) は近世に於ける獨逸の名家、所謂音樂劇の創作者にして、又た全音樂界の改革者なり。其の偉業は普く世人の知る所なれば此に贅せず此に奏する進行曲は彼の歌劇タンホイゼル中より拔萃せる者にして即ち彼の創作の中央期に屬する作品なれば未だ彼の天才の一部を發揮したるに過ぎざる者といふべし。こは歌劇の第二幕に於ける歌の爭ひの開かるゝ前に挿みたる行列の行進曲にして先づ人等せの喇叭響き、終りて本曲に入る。曲は充分の威嚴を具へて然も輕快且つ彈性に富めり。其の巧妙なる樂器編成法は曲の進むに從て益々勢力を增大し、終局に近かく合唱の加はるに及びて曲は喧囂を極めたる壯麗を以て終る。

祝　歌　　ワグネル原作
乙骨三郎作歌

(ワルトブルクの城内大廣間にて騎士及貴賓等合唱)

『文藝』の花咲きにほふ、『平和』の園に響ふべき、
尊とき此の御殿、めでたき此の殿、
めでたき此の御殿、尊き御殿、やよ。榮え行けや、
千代も、八千代も、榮えよ。
千代八千代までも。

## I. Overture "Sakuntala."

*By Goldmark.*

Carl Goldmark, born March 18, 1830, is a distinguished Hungarian composer, who made his name principally by his oriental opera "The Queen of Sheba." His great force was the expression of music in oriental colours. His overture "Sakuntala" is "programme-music" i.e. by the music alone the events of the story are to be understood.

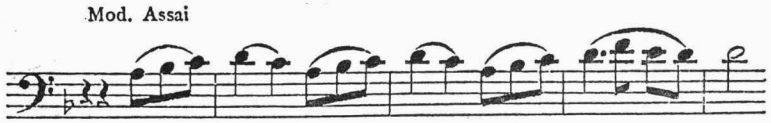
The story of Kalidasa's "Sakuntala" may briefly be told here:

Sakuntala, the daughter of a nymph, has been brought up by the head of a priestly community in a sacred grove. The great King Dushyanta, while hunting, enters the grove, sees Sakuntala and falls deeply in love with her. A love scene follows and they become united. The king gives Sakuntala a ring, by which he will recognise her as his wife, when she comes to his residence, which she is to do soon. But a powerful priest, whom Sakuntala unwittingly had once offended by omitting an act of hospitality, now takes his revenge by depriving the king of his memory and of the recollection of her. Moreover Sakuntala loses the ring one day while bathing in the holy river, and, when brought by her people to the king as his wife, is not recognised by him. She is cast off, not allowed to return home, and is left alone in grief and despair. Then her mother, the nymph, takes pity on her and gives her protection.

One day the ring is found by fishermen and taken to the king. At a glance he recognises it and his memory comes back. Deeply repenting his cruelty he pines away in longing for

Sakuntala. In an expedition against evil demons, whom he fights victoriously against, he finds her at last and there is now no end to their happiness.

An ominous *unisono* of violas, fagots, and 'cellos presages, a sinister fate, which, however, seems to turn favourably in the end by the rising five-fold 'cello-solos. The yearning melody now following (clarinettes and 'cello-solo) may characterize the figure of the heroine:

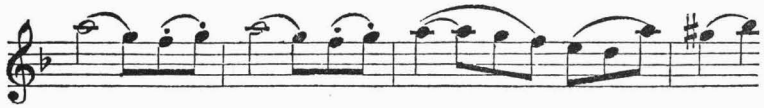



While the descending melody of oboe and first violins pictures King Dushyanta:

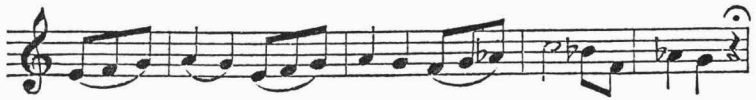
Both melodies now entwine and may indicate in their interlacing the union of the lovers.

In the *Poco piu mosso* following the whole picture changes; abruptly the horns and trumpets set in:

Sakuntala's fate turns into sadness. The priest's curse deprives the king of all remembrance of Sakuntala and the solo of the clarinettes (*Andante assai*) sounds unfamiliar to him.



Sakuntala is cast off, and lonely wanders about. How forlorn and plaintive sounds her old melody, now taken up by the English horn:



and still more sadly the resembling phrase of the clarinette.

But now comes the turning point. Beautiful violin triplets surround Sakuntala's *motif* as if protecting, but still plaintively all the instruments take up her phrase:

until an unexpected *piu mosso* reminds us of the king. The basses have the organ-point on g, chromatically rising chords make the king slowly regain his recollections. The orchestra rises more and more impressively and soon we hear again in the *Poco meno* (*tempo I*) the two melodies of the first meeting with Sakuntala. Now repentance takes hold of the king and the whole orchestra pours forth in an *Allegro vivace*; the swelling, rising chords lead to victory, he has found Sakuntala again and the overture ends with joyous exultation.

H. W. [=Heinrich Werkmeister]

## II. Introductory remarks to "Fair Ellen."

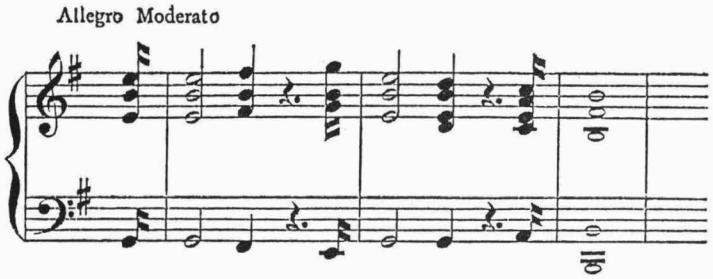
*By Bruch.*

Max Bruch, born January 6th, 1838, at Cologne, is one of the greatest composers of larger chorus and orchestra pieces. He made his name chiefly by his "Odysseus," "Frithjof," "Normannenzug," etc.

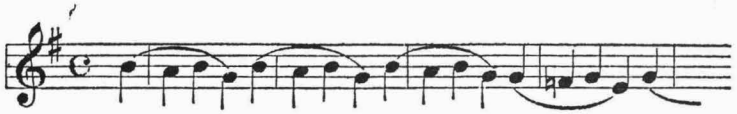
"Fair Ellen" is one of his earlier works, but shows already the master's hand in instrumentation and his ingenuity to dramatize and vivify the mental and visual incidents of Geibel's

ballad.

At the very beginning the expressive chords in minor:




resemble a warning call of Fate to Lord Edward's brave warriors, who find themselves in greatest distress and have given up all hope of deliverance. The *unisono* of the string instruments with their even movement in crotchets indicates utter hopelessness:

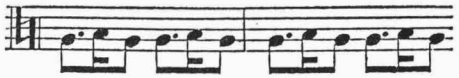


It is the accompaniment of Edward's address to his men, who prothesies their speedy doom. Again the introductory chords give warning, but "Sullen were standing about the fearless comrades in arms."

The rising violin figures now bring into contrast fair Ellen's confidence in victory who listens attentively, expecting deliverance, and imagines to hear faintly the march of the relievers. —A *vivace ma non troppo* (*alla marcia*) follows, in which a horn solo faintly marks the "Pibroch," while the rythmical *pizzicati* of the violas, 'cellos and basses forebodes the measured tread of the approaching Compbells.

With joyful agitation Ellen tells what she has learned, but Edward will not believe her and again the string instruments take up *unisono* their apathic

showing the Lord's utter dejection.—The sun rises highest and for the third time Fate gives her warning that something unexpected will happen. Fair Ellen distinctly hears the March of the Campbells, the piercing pibroch is taken up by the flutes, while the violas with their



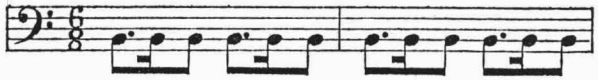
mark the ground-shaking step of the approaching battalions.

Now comes an *Allegro con fuoco*, the enemy charges. Nothing remains for the heroic band but to die the death of heroes, and thus their swan-song pours forth (*poco meno vivo*)

whereupon a short *Allegro* and *Recitation* Edward's goes over into the *Allegro molto*, which pictures the fierce clash of battle. Clang of guns and swords! the standard-bearer falls, Ellen seizes the flag, and at the same moment is heard in clear C-major the victory *motif* of the Compbells:

Once more Ellen calls for courage to stand fast. Nearer and

nearer the friends' signals sound until they grow to the powerful orchestra *tutti* in C-major. Now the pibroch sounds forth in *fortissimo* by all the wind instruments and the first violins. The kettle-drum takes the old motif of the violas:



Louder and louder we hear the victory *motif*. Already the Compbells fall on the enemy's rear—"and the enemy was scattered and they marched through the gate." Of fine effect is now fair Ellens song of thanksgiving, which bring the victory theme in the statelier 3/4 time (*Andante con moto*):

Still more solemn and edifying goes forth the concluding chorus of the brave warriors, in which the song of victory and thanksgiving are beautifully blended.

H. W.

## TEXT.

Edward: My God in his mercy be good to us now;
What boots it to shrink from dying?
No bread to sustain us the long day through,
No shot to the foemen replying:
But pray for rescue and that right soon,
To come to leaguer'd tower;
Though yonder the morning be low'ring red,
There's Death in the sunset hour,

Chorus. (Japanese Text)

Ellen: O haste ye, haste to the rampart high, look out i'the misty gloaming?
Me thought I heard in the distance far the March, the Campbells coming,
Oh list to the rolling sound of drums, the pibroch I hear them playing,
'We come for the sake of our olden troth'
Oh list what the breezes are saying
'We come for the sake of our olden troth' the wind are softly saying,

Edward: Ah Maiden, I ween thou art sore distraught, nought hast thou seen or heard save deep blue sky and yellow sand and distant reeds by breezes stirred and reeds by breezes stirred

Chorus. (Japanese Text)

And the sun arose to his midday height,
and the sun pass'd over the heaven,
And nearer and nearer the last hour came,
and sadly the farewell was given.
Fair Ellen stood with a fixed look
and brightly her eyes were aglowing.

Ellen: The Campbells are coming, I told you true,
I hear, I hear the bugle blowing:
The Campbells are coming,
I told you true, I hear, I hear the bugle blowing,
The Pibroch is borne down the wind, the tones on the breezes quiver,
'Neath the tread of battalions that hurry along afar the plains do shiver!

Edward: Ah maiden, we listen and listen in vain,
and fast the hours are flying,
The breach is wide, and the storm is nigh,
there's Honour, Honour is dying.
Farewell then, wife and child at home!
and the Highland, lochs and the heather!
Wife and child farewell and the Highland lochs

and the heather!
Farewell to the Highland lochs and the heather
farewell then!
Farewell then, wife and child at home and
the Highland lochs and the heather!
And now, for the last time God speed the shot,
let your swords be unsheathed together!
Chorus. (Japanese Text)

Ellen: Oh stay, oh stay 'tis the pipes I hear, the sound
draws nearer and nearer.
Ha! see there's a rent in the mist and the
sight grows clearer and clearer.
Chorus. (Japanese Text)

Ellen: There's a shimmer of steel o'er the far spreading
plain, from the squadrons for battle arrayed,
With their plaids and gay plumes in their bonnets
they come, and England's flag displayed!
Chorus. (Japanese Text)

Ellen: We're saved by the bond of our olden troth,
to God praise and honour be given!

Ellen and
Edward: We're saved by the bond of our olden troth,
to God praise and honour be given!
Chorus. (Japanese Text)

## III. Piano Concerto in C mi. op. 37.

*By Beethoven.*

This is the third of the five Piano-Concertos, Beethoven has written. It was composed in the year 1800 and still belongs to Beethovens' early period, but it is composed at a time, when Beethoven had almost entirely freed himself from the influence of Mozart, the different subjects being not only quite Beethoven in sentiment, but characteristic of his compositions in C minor. The form of this Concerto is the old classical form, accepted from Mozart. It opens with a long "Tutti" which lets the principal subjects of the first movement pass before the listener's ears and thus prepares him for what is coming. The Solopart is just what a Solopart of an ideal Piano-Concerto should be, namely beautiful music, well written for the instrument, with a certain amount of brilliancy, but never showy. As was the custom at the time and to a certain extent is still, towards the end of the movement room is left for the Cadenza which in a Concerto means a sort of improvisation by the soloist on one or more of the different subjects just heard. As a rule it finishes with great flourish in the Keynote, but in this Concerto Beethoven lets it go beautifully and softly into a Chord of a different Key, which has a very soothing effect, after which he brings the movement to a close by a very pressing and passionate crescendo.

H. Heydrich.

## IV.

### a. Prelude to "King Manfred."

*By Reinecke.*

CARL REINECKE, born on the 23rd of June 1824 is a distinguished musician, a master of the piano as well as a composer. As such he was exceedingly fertile in almost all branches of music. He has written more than 200 works: chamber music, operas, choruses, and songs. One of his principal works is the opera "Manfred," the overture and prelude of which still belong to the most popular orchestra pieces.—The "Prelude," presented to-day, has a searching and plaintive introduction, until a nobly conceived melody rises up, which with its beautiful modulations constantly presents novel and surprising effects. The small orchestra piece is full of insinuating melodies in warm and accentuated colours. It is true, though, that Reinecke in none of his numerous compositions shows great individuality of his own,

and especially in this piece the influence of Schumann's romanticism will easily be discerned.

H. W.

### b. Elegy for String Orchestra.

*By Tchaikowsky.*

Peter Tchaikowsky, born 25th Dec. 1840, died 5th Nov. 1893, is perhaps the most talented of all Russian composers. His music is throughout typically Russian, sometimes wild and passionate, then again lyrical and sentimental, but never approaching the trivial.—The Elegy reproduced here is the third part of his Serenade, op. 48.

The introduction sounds tender and dreamy. Of sublime beauty is the following melody, entwined by *pizzicati* of the 'cellos and violas, and afterwards taken up by the latter, while the violins subordinate themselves. The triplet movement following gradually divests itself of the elegiac, the violins become more importune, even pathetic, but after the *fortissimo* the violas drop in again soothingly and take up the first melody in the original *tempo*. Now violins and 'cellos take turn about in the leading, until the former rise in the *Più mosso* to a grand *fortissimo* and then *cadence-like* assume a pathetic aspect, which, however, soon subsides and breathes in the softest pianissimo. —After a general pause the first *tempo* resounds like a remembrance of something dreamy, of something that has been; melancholic chords come like long-drawn sighs, until the organ-point on d sets in, which quiets slowly all the voices and the elegy gradually dies away in gentlest *pianissimo*.

H. W.

### V. March from "Tannhaeuser."

*By Rich. Wagner.*

Richard Wagner, born 22nd March 1813, died 13th February 1883, is without dispute the most gifted composer of "modernism," the creator of the musical drama; and a revolutionary in music. For this reason he was long treated with much hostility and only in his last years was duly appreciated and enjoyed general popularity.—This March from the opera "Tannhäuser" originates from the middle period of his life and does not fully reveal to us the depth of his genius. It is only an incidental processional march. A flourish of trumpets calls the people together and the march begins, moving along with majestic dignity and yet with light-winged and elastic steps. The instrumentation is masterly, and growing continually more powerful, is in the end supported by the chorus, and thus the march sweeps past in grand, boisterous festivity.

H. W.

〔批評および関連記事〕

東京音樂學校演奏會合評

——（明治四十一年十一月二十八、二十九日）——

A、B、C、D

管絃樂　序樂。サクンタラ、ゴルドマルク作。（A）在來の骨董いぢりを離れて、茲に近代樂の第一頁を紹介する氣になられた當局者の雅量を先づ多とせねばならぬ。（B）演奏もまづ無難の出來でせう。殊にマイスステル氏のセロは、全曲の中心をなして、天晴なる出來榮と思ひます。曲調一變してホルンとトロンペットにてサクンタラの運命を示すところ、管樂器の調子整はざりしは如何のものでせうか（C）それもさうでせうが、私には始めの出方が氣に入つた。折々怪しげな音が聞こえないではなかつたが、大なる畏怖を表顯する力は十分にあつたと思ふ。（D）しかしC君、アクセントのしつくりしなかつたことは、辨護の餘地があるまい。（A）全體として概評を下すと、後半よりも前半の方が、力が籠つてゐたばかりでなく、またしつかりした統一があつた。もし後半にして前半ほどの效果を現はすことができたらば、此の日第一の演奏たることができたらうのに、遺憾ながら未成品たるを免れなかつた。（D）はじめセロにて起こりしサクン

タラを表象する旋律を、二たび英國ホルンにて奏する刹那、大分怪しい音がきこえた。肝腎な所だけに齒がゆい思がせられた。(C) 元來東洋的色彩(オリエンタル・カラア)に富んだ曲であらうのに、ホワイシャツの上に袴を着せたやうな趣があつたのは如何(どう)したことだ。指揮長閣下以つて如何となす。(B) 要之、管樂(ブラス)が振はなかつたのは、事實であるが、全體の出來は買つてやつて可いでせう。

獨唱合唱及び管絃樂　『美はしきエレン』ブルツフ作。(B) まづ劈頭第一、短和絃の出が揃はない。土曜が殊に劇しかつた。タクトも妙でないと睨んだ。(A) ペイン夫人のエドワードはまだしも、藤井夫人のエレンは何といふ見すぼらしいことだ。あれではまるで、下町の子守女の聲だね、表情なんて云ふだけ野暮だて。俺は衷心から之を嘆いたよ。(C) 藤井さんの聲は、お菓子で云ふと、煎餅ですね、薄つぺらで一本調子で、嚙んでみたつて旨味がない。之からみると、ペインさんは何と云つても旨いものです、歌ひはじめから中程の『いざや者ども筒先揃へて』のあたり、流石はとうなづかれます。(D) も一つ氣に入らぬ事がある、何だつて日本と英國の雜種兒(あいのこ)にするのだ、日英同盟はよからうが、これでは連續した感興が得られぬではないか。況んや合唱部の歌詞の如き、到底洗煉を經たるものでないに於いてをやだ。聞く所に依ると、かつて歌劇オルフオイス試演の企があつたとき、同校ではこれと同一の手段を取る筈であつたとやら、よし歐米で其の例があるにしたところで、それが必しも許さるべきものでない事は一應考へて貰ひたいものだ。(B) 僕も同感です。聲樂は器樂と異なり、テキストを閑却すると云ふ事は、大なる誤謬である。由來同校には此の弊が多い。テキストより得る感興がなくてもいゝのなら、ドレミでやつた方が餘程演奏者も樂でよからう。西洋人が日本語を解せぬために、此の點を何とも云はぬからと云つて、日本人までが其の氣になるのは沙汰の限である。合唱部の歌詞の蕪雜も、(D) 君の云はるゝ通りである。(A) 合唱はソプラノ益々增長し、バス益々萎縮するばかりで、「筒の音鯨波の聲」たるに過ぎぬ。以つて或は中學生に敎ふるに足るかも知れぬが、斷じて藝術の堂に入れるものでない。(C) ペインさんの英語の外は、何處の國語で歌つてゐるのやら、私には分かりませんでした。(D) しかし日曜の方は少しは聽き優りがした。藤井夫人も一生懸命で最後の二部合唱は無難の出來であつた。

ピアノ司伴樂　(短ハ調) ベエトオヴエン作。(A) 大變結構だつたと思ひます。(B) 餘ほど意志に富んだ作だと思ふ、ハイドリツヒ氏の演奏も純意志的であつた。强ひて難を云ふならば、あまりに形式に囚はれた嫌があつた、囚はれるのは音樂の禁物だ。(C) 土曜の方は、すこし餘計なところに指が觸れたやうでした。(D) ブルツフのあとへ、ベエトオヴエンを出したのは、餘ほど考へものだと思ふ。クラシツク文學を味つてから、ロマンチツク文學を味ふのが、事の順を得たものではなからうか。(A) 形式に囚はれたと云ふ批難はあるが、古典的のものには多少恕してやる必要がある。むしろ後半即興樂的の所はダブルペダルを用ゐて、あまりに現代的の響を聞かした嫌があつた。ベエトオヴエンとしては、前半の演奏法が當を得たもので、ツエンバロを聽くが如き感があつたのが、反つて面白かつた。加ふるに、ベ氏獨得のユウモオアが遺憾なくあらはれたと思ふ。とにかく演奏者の伎倆が當日の諸演奏を壓倒したる事は確かだ。(B) 何も此の演奏を、ハイドリツヒ氏に委せる必要はなかつたらう。否、むしろ氏の個性とは一致しない點が多かつたと思ふ。幸田氏や橘氏などでもよかつたらう。

絃樂合奏　(イ) 歌劇マンフレッド間奏曲、ライネツケ作。(A) アントラクトを前奏曲とは恐入る。立派な「梗概」を配付しながら、これはまた何たる醜態だ。あまり聽衆を愚にしすぎる。(D) 氣合のしつくりした無難な演奏であつたと思ふ。(B) 恐らくこれ此の日の演奏中の白眉であつたらう。極めて切實に曲想が表現せられたのみでなく、こゝに云ふべからざる色合(ニュアンス)を浮動せしめたのは、大いに演奏者の勞を多とせねばならぬ。(D) 日曜の指揮は、反つて演奏にコンダクトせられた感がなかつたか、アツプとダウンが、時々頓珍漢であつたのは如何したことだ。近來ユンケル氏の指揮は、少なからず熱を失した感がある、さらぬだに何とか彼とか噂のある今日、大なる覺醒を促したい。

(ロ) 小夜樂中の悲歌、チヤイコウスキイ作。(B) 曲目中われらの最も

期待したものは、これであつた。然るに一番ヴァイオリン部が動もすれば調和を缺きがちであつたのは、實に興味索然。（A）それも歸する所、同一筆法を以つて凡べてを律してしまふから、いけないのだ。第一のサクンタラが色合に富みこれが詩味に溢れてゐるところを、根底から咀嚼して貰ひたかつたのである。（C）起首唐突に過ぎ、結末また頗る振はざるの感がある。（D）第一あゝいふ曲は、演奏者を十分精選する必要がある。誰でもござれで、賑やかでさへあればよいと思ふのが間違ひだ。一番ヴァイオリンの失態を演じたのも、これに起因するだらう。曲は天晴の名曲、詩趣豊かなる點は曲目中の隨一であらう。選曲の當を得たことを多とする。

管絃樂及び合唱　歌劇タンホイゼル中の行進曲、ワグネル作。（A）現代趣味の似而非なるものだ、音樂學校がいつまでもこんな曲に現を拔かしてゐる氣が知れぬ。歌詞の蕪雜に至つてはまた何をか云はむやである。（C）共益商社にオーケストラフオウヌと云ふものがある。此の曲などは最も其の樂器に適應するものゝ一であらう。而して演奏は稍これより聞きまさりがする。ワグネル氏の山師的病弊を最も明らかに現はしたものは、此の曲であらう。（B）徹頭徹尾、恫喝的にして而かも日比谷式だ。而して合唱の有象無象たち、これが藝術神に對する讃美の聲である、ヘルマン侯に對する崇敬の律であることを御存知の方が幾人あるかも疑はしい、噫、後世畏るべし。（A）D君！君の滯歐中にきかれたフイルハアモニツクの演奏と比較して、どんな感じがしますか。（D）おたづねであるがまづ第一ホオル不相應な樂壇に、あんな大勢だらしもなく並んだ音樂會は始めてだ。それに指揮長がオーヴアチユアにもマアチにも、はた又絃樂にも、同じ調子で鞭を振られるのも珍らしい形だ。あれではどう云ふ形式の音樂を演奏しても、みんな同一型（タイプ）にきこえるのは不思議のない事である、シンフオニイも序樂も感興が少しも異ならぬやうな滑稽を演ずるのも無理はない事でせう。あのやうな叱咤的恫喝的コンダクトは歐州にも餘りないやうだ。

概評　（A）まづ二三の缺點を指摘しやう。音樂會に大詰はいらぬことだ。一番しまひのタンホイゼルで、折角の感興を奪はれて仕舞つた人が、聽衆中に多數あつた事を考へて貰ひたいのである。も一つ氣に食はぬことは、演奏者中に音樂學校とまるで關係のない人が見えることだ。どう考へても今日の音樂學校の事情は無關係人の助力を乞ふまで、人に乏しい譯はない筈だ、あれでは何だか學校が内部の力を缺いてゐるとしか受取れぬ。あまり名譽な事ではあるまいから、今後は純音樂學校の演奏會として公表すべきである。（B）聲樂について非難がある。前の合評にも見えた如く、「美しきエレン」の歌を日英兩國語で歌つたのは、等閑に附すべからざる事である。なほ唱歌者が一般に、歌詞に注意せざる事は、著しき間違で、英語の唱歌は英語に聞こえざるのみならず、日本の歌詞の如きも殆んど明白に聞きとれるものはない。聲樂には對歌より來る感興が、大部分を占めてゐる事は云ふまでもない事で、それに注意を拂はぬのは、學校としても責任のあることであらう。とかく歌詞を閑却する事が、聲樂界一般の通弊であると思ふ。（C）梗概書が益々詳細を極め來つたのみならず、重要なる部分の樂譜を示されたのは、誠によい思ひつきであつた。序でに云ふが、乙骨氏の譯歌が在來の慣用手段を離れて、曲の内容に密接した事は大に喜ぶべき事である、たゞし餘りに原歌に縋りついて、反つて生硬を招いたのは、氏の一考を煩はしたいと思ふ。今すこしく思索的態度を以つて自由なる情懷を吐露せられたい。

（『音樂界』第二巻第一号、明治四十二年一月、一九～二二頁）

●東京だより

東京音樂學校秋季大演奏會

十一月二十九日仝校のホールにて例の如く開かる、二時前にはひしゝと寄せかけて非常なる盛況、押されつゝホールに入ると演奏者の面々は早ステージに勢揃ひが出來たり、人數も大分增せし樣にて一番ヴヰヲリンのポール氏の長軀と、ヴヰヲラのシャーソン氏の樽然たる太き体とシーモア姉妹の清楚なる姿とは先衆目を惹いた、ユンケル氏のタクトの下に忽ち起つたのは　一、サクンタラの序曲である入口で貰ふた曲目概梗を見るとゴルトマルク作とあり、主要のメロデーか挿入せられて曲の説明甚親切詳細

で吾々日本人には是非入用のものである、それに曰く此曲はプログラム、ミュージツクとある卽音樂のみによりて聽衆に物語を聞かす曲なりと、苦心して聞いて居ると、なる程印度の悲劇の始終が巧に現はされて居る樣な氣がした、

二、獨唱、合唱及管絃樂　曲は美はしきエレン　ブルツフ作曲乙骨三郎氏の作歌とある尤も獨唱は英語とある、出るも出たり合唱組、ステージ一杯の演奏者で、聽衆の四分の一は慥にある、詳細なる概梗を見て聞いて居ると非常に面白い、エドウヲードのペイン夫人、絕望の情を表はし得て遺憾なく、エレンの藤井夫人亦甘いものなり、殊に「昔の盟忘れじ」のスコツトのメロデーと低き絃樂器のピシカトーの伴奏とは花の少女エレンが絕望の將士を勵ます樣誠に躍如たり、獨唱、管絃樂の間奏、合唱と交互に起りて、最後に天帝に感謝の總唱總奏となりて歡呼の內に終る、此れ丈けでは聞かない人は御解りになるまいが筋書を書くと長くなるから御免を蒙ります、

三、管絃付ピアノ司伴樂　ベトーベン作　ハイドリツヒ氏余等には面白さが解し兼ぬる、然し從前のに比して余には少し物足らぬ樣な感があつた、

四、絃樂　甲、歌劇マンフレツト王前奏　ライニケ作　ハイドリツヒ氏二番ヴヰヲリンに入りセロにヴエルクマイスター氏あり、絃樂の各部に外人あり、甘く出來ても日本人が與らない樣に思はれる、之の曲は最後の幕の前奏なりとか、靜麗婉美言はむ方なし、

乙、小夜樂中の悲歌　チヤイコースキー作、氏の天才を發揮して餘りなしと、蓋し本日中の白眉なり、セロ、ウヰヲラのピシカトーの邊、弱音器付きで後の弱奏等實にもと思はれた、

五、合唱及管絃樂　タンホイゼル、マーチ　四年前の聖壽無窮の時に比して餘程進步して居る殊にバスの增加せし爲曲は安定となり壯重となつた、ヴエルクマイスター氏に負ふ所大なりだ、ホールの構造の不完全と其廣さに比して演奏者の多きに過くる爲め樂音よりも寧噪音（ノイス）として聞へたのは全く罪ホールにありといふべきなるべし、此れで千秋樂會毎に進步する樣で誠に結構である、殊に曲目概梗の益詳細になるには洋樂の解し難き吾人には何よりである。只一步進めて是れか配布を切符と共にして貰ひたい、ホールの入口で貰つて直に演奏を聞かされては、曲を解し、メロデーを探し、歌詞を見るは餘り忙しい、此れが爲興味が餘程減る「美はしきエレン」の時殊に此の感があつた、望蜀の念とは此の類なるべし、此れは評にてはなし囈言と思召せ、

（『音樂世界』第三巻第一号、明治四十二年一月、一一～一二頁）

## 明治四十一年十二月二十四日　学友会演奏会

音樂學校學友會の演奏

●十二月二十四日午後二時より同校樂堂に開會、聽衆例に依つて滿堂の盛況、曲は會員の合唱にて序に入り、續きて泉千代孃のピアノ獨彈、ベエトホヴエンの傷感（パセチック）ソナアタの「ロンドオ」をひけり。少しあはて氣味にておちつき足らず、あぶなげにきかれた。初舞臺の故ならん、指のおちつきが大切なり。次は

●大和田愛羅氏の獨唱、曲はシユウマンの「二人の老騎兵」無難の出來、音量もあり、歌詞の發音もきこえたり、氏の上達祝すべし、男聲獨唱家缺乏の折から有望の聲樂家なり。次は

●竹內平吉氏のセロ獨奏、音いまだ獨奏と云ふ程に至らざれど落着あるひきかた、上達の見込たしかなり。音程の上づれるは遺憾なり。次は富岡靜女のオルガン獨奏。見事の出來榮なり運指、ペダル、表情、天晴なり。

●次は永田その孃のヴワヰオリン獨奏、當日失望の一、音色、音程、運弓、まだ研究の余地あり。獨奏と云ふまでに至らず。

是にて一部を終り、第二部にうつる。平尾勇氏のオルガン獨奏、富岡孃にゆずらざる出來、オルガン兩氏ともの成功は敎師島崎氏あつかつて力あり、オルガンは當日の白眉と云ふべし

●次は安東恒子孃の獨唱、少し天狗の歌ひ方なり、藝に眞面目（まじめ）でなし、余りに曲を小細工する嫌がある。今の內にあまり細工がすぎると大成覺束なし、團十郎は若くして大根なりし故名優となれり、羽左エ門の大に延びんとするも若くして間（ま）がぬけ居る故なり。是等同孃の參考たるべし。藝は場當りを考へるようでは駄目なり、甘（うま）いと云はれ、まづいと云はるゝは二の

次なり、先づ自己を僞らざるを第一とする。藝術的良心を鏡にかけて勉强すべし、人の評判なぞ、氣にして演奏するようでは上達如何にや、アツと云はせる積で歌ふようでは藝の眞に入つたものでは無し。孃の聲は十分發展の望あり、心掛け一つにて女聲のクインたるべし。苦言はやがて孃を切に思へばなり。次は

●川上淳氏のヴワヰオリン獨奏、上達の跡は著しけれども當日大にあがつてしまいしは遺憾。次は滋野清武氏のコルネツト獨奏、是當日失望の二、練習不十分の結果なるべし。次に會員の合唱ありて閉會、今回の演奏はピアノ演奏不足なりしと合唱の一も新曲ならざりしは殘念に思はれたり。學友會にて絃樂四部位は優に出來る腕揃なるに此事なかりしは意苦智無きことなり。

（『音樂界』第一巻第十二号、明治四十一年十二月、三〇～三一頁）

## 明治四十二年三月二十五日　卒業式

明治四十二年三月廿五日（木曜日）午後二時

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

### 第一部

一報告

一卒業證書授與

一校長告辭

一文部大臣祝辭

一卒業生總代謝辭

### 第二部

一合唱

常盤……（アルカデルト作曲／武島又次郎作歌）

一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　香川鈴

アムプロムプテユー……シユーベルト作曲

一オルガン獨奏　甲種師範科卒業生　高橋テツ

アレグローノントロツポ……ギユルマン作曲

一獨唱　聲樂部卒業生　大和田愛羅

アーリア（パウルス）……メンデルソーン作曲

一ヴアイオリン合奏　器樂部卒業生　川上淳

ピアノ合奏　萩原英一

ソナータ……ベートーベン作曲

一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　泉千代

ロンドブリルアンテ……ウエーバー作曲

一オルガン獨奏　器樂部卒業生　平尾勇

パルテイタ……バハ作曲

一獨唱　聲樂部卒業生　安東恒

アーリア（オデイソイス）……ブルフ作曲

一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　原ミチ

ソナータ……フムメル作曲

一合唱

甲、あゝ、いづちゆく……（ベートーベン作曲／乙骨三郎作歌）

乙、埠頭別離……（スカンデイニア民歌／旗野十一郎作歌）

GRADUATION EXERCISES
OF THE
Tokyo Academy of Music,
UYENO PARK
Thursday, March 25th, 1909.
2 P. M.

PROGRAMME.

PART I.

I. Report.
II. Presentation of Diplomas.
III. Address to the graduating class by the Director.
IV. Address by His Excellency Komatsubara, Minister of State for Education.
V. Response by the Representative of the Graduating Class.

PART II.

I. Chorus:
Weihegesang .....*Arcadelt.*
II. Piano Solo:
Impromptu .....*Schubert.*
Miss Suzu Kagawa.
III. Organ Solo:
Allegro non troppo .....*Guilmant.*
Miss Tetsu Takahashi.
IV. Barytone Solo:
Aria from Pauls.....*Mendelssohn.*
Mr. Owada.
V. Violin and Piano:
Sonata (first movement) .....*Beethoven.*
Messrs Kawakami and Hagiwara.
VI. Piano Solo:
Rondo brillante in E flat major.....*Weber.*
Miss Chiyo Izumi.
VII. Organ Solo:
Partita .....*Bach.*
Mr. Hirao.
VIII. Mezzosoprano Solo:
Aria from Odyseus.....*Bruch.*
Miss Tsune Ando.
IX. Piano Solo:
Sonata (first movement) .....*Hummel.*
Miss Michi Hara.
X. Chorus:
a. Der treue Johnie .....*Beethoven.*
b. Abschied .....*Skandinavisches Volkslied.*

●東京音樂學校卒業式　三月二十五日午後二時より同校樂堂に於て開會、文部大臣代理福原鎮次郎氏を始め朝野の貴顯來會し非常の盛會なりき、卒業生演奏も年一年と進境を見るは慶賀すべきことなり曲目次の如し〔曲目省略〕

（『音樂界』第二巻第四号、明治四十二年四月、三九～四〇頁）

**明治四十二年四月十日　演奏旅行**

明治四十二年四月十日（土曜日）午後七時開會場
午後八時開會場

大音樂會曲目

會場　大阪中ノ島公會堂

一　四部絃樂……（ユンケル教授／安藤教授／幸田教授／ウェルクマイステル教授）
　デー メーヂヤー（第一段）……メンデルスゾーン作曲
二　獨唱……鹽濱ちか子嬢
　アーリア（ガブリエル拔萃）……ハイデン作曲
三　ピアノ獨奏……ハイドリヒ教授
　甲　メロディー（エフ メーヂヤー）……ルービンシタイン作曲
　乙　マツルカ（エー メーヂヤー）……モスコウスキー作曲
四　ヴァイオリン獨奏……安藤教授
　コンセルト（イー マイナー）……メンデルスゾーン作曲
五　獨唱……鹽濱ちか子嬢
　アーヴェ マリア……ケルビーニ作曲
六　四部絃樂……（ユンケル教授／安藤教授／幸田教授／ウェルクマイステル教授）
　甲　アンダンテ カンタビレ……ツァイコウスキー作曲
　乙　カンツォネッター……メンデルスゾーン作曲
七　獨唱……鹽濱ちか子嬢
　甲　オー ホワイ ソー スーン ザ ローズ
　　コンプレインド……フランツ作曲
　乙　ウィルスト ドゥー ダイン ヘルツ ミーア
　　シェンケン……バハ作曲
八　セロ獨奏……ウェルクマイステル教授
　甲　ラールゲット……モッツアート作曲
　乙　チゴイネル タンツ……ディラール作曲
九　ヴァイオリン二部合奏……（ユンケル教授／幸田教授）
　ソナタ……ヘンデル作曲
十　五部合奏（ピアノ及絃）……（ハイドリヒ教授／ユンケル教授／安藤教授／幸田教授／ウェルクマイステル教授）
　イー フラット メーヂヤー（終結段）……シューマン作曲

Grand Concert
HELD AT THE
PUBLIC HALL
NAKANOSHIMA, ŌSAKA.
Saturday, April 10th, 1909.
8 P. M.

Programme.

1. String Quartet: in D minor ……*Mendelssohn.*
   Mr. Junker, Mrs. Ando,
   Miss Koda, Mr. Werkmeister.
2. Soprano Solo:
   Aria from Gabriel ……*Haydn.*

Miss Shiohama.

3. Piano Solo:
   *a.* Melody in F major .....*Rubinstein.*
   *b.* Mazurka in A major .....*Moszkowski.*
   Mr. Heydrich.
4. Violin Solo:
   Concert[o] in E minor .....*Mendelssohn.*
   Mrs. Ando.
5. Soprano Solo:
   Ave Maria .....*Cherubini.*
   Miss Shiohama.
6. String Quartet:
   *a.* Andante Cantabile.....*Tschaikowsky.*
   *b.* Canzonetta .....*Mendelssohn.*
   Mr. Junker, Mrs. Ando,
   Miss Koda, Mr. Werkmeister.
7. Soprano Solo:
   *a.* O, why so soon the rose complained.....*Franz.*
   *b.* Willst du dein Herz mir schenken. .....*Bach.*
   Miss Shiohama.
8. Cello Solo:
   *a.* Larghetto.....*Mozart.*
   *b.* Zigeunertanz .....*Déral.*
   Mr. Werkmeister.
9. Sonata for two Violins .....*Händel.*
   Mr. Junker and Miss Koda.
10. Piano Quintet: in E flat major .....*Schumann.*
   Messrs. Heydrich, Junker, Mrs. Ando,
   Miss Koda and Mr. Werkmeister.

**明治四十二年五月一日　演奏旅行**

五月一日福島私立音樂會の催しにて同縣師範學校に於て東京音樂學校生徒の演奏會ありき

（『音樂世界』第三巻第五号、明治四十二年五月、一三頁）

**明治四十二年六月十二日、十三日　第二十回定期演奏会**

明治四十二年六月十三日（日曜日）午後二時半開會

音　樂　演　奏　曲　目

東京音樂學校

一　管　絃　樂

歌劇「フライシュッツ」の序曲……ウェーベル作曲

二　ピアノ獨奏

甲、ガヴォット及ミュゼット……ダルベール作曲

乙、エチュード二曲……ショパン作曲

教師　ルドルフ、ロイテル

三　管　絃　樂

シムフォニー「短ロ調」（不完）……シューベルト作曲

四　ピアノ獨奏

シムフォニック、スタディス……シューマン作曲

教師　ルドルフ、ロイテル

五　獨唱合唱及管絃樂

歌劇「ローレライ」……〔メンデルソーン作曲　吉丸一昌譯歌〕

獨唱……安東恒

Orchestral & Choral Concert
OF THE
Tokyo Academy of Music
UYENO PARK
*Sunday, June 13th, 1909.*
AT 2.30 P.M.

Programme

1. Orchestra:
   Overture zur Oper "der Freischütz" .....*Weber.*
2. Piano Solo:
   a. Gavotte and Musette .....*d'Albert.*
   b. Two Etudes.....*Chopin.*
   *Prof. Rudolph E. Reuter.*
3. Orchestra:
   Symphony B minor (unfinished) .....*Schubert.*
   *Allegro moderato.*
   *Andante con moto.*
4. Piano Solo:
   Symphonic Studies op. 13.....*Schumann.*
   *Prof. Rudolph E. Reuter.*
5. Loreley Finale for Soprano Solo, Chorus, and Orchestra .....*Mendelssohn.*
   Soprano Solo: *Miss Ando.*
   Conductor: *Prof. A. Junker.*

音樂演奏會曲目梗概　第九

一、管絃樂

歌劇『フライシュッツ』の序曲　ヴェーベル作曲

獨逸ロマンティック樂派の始祖ヴェーベル(Carl Maria von Weber 1786—1826)はオルデンブルク州オイティインの人なり。天生音樂にすぐれしかば、父は幼より之れに音樂を學ばしめ、終に名家ヨゼフ、ハイドンの弟ミハエル、ハイドンの門に托して樂理と作曲法とを修めしめたり。彼れ長じて當代一流の洋琴家と爲り、又た歌劇作家として盛名を後世に傳へたり。

彼は若年より數多の小篇歌劇を創作せしが、何れも世に行はるゝ者なし。其の今日に傳はれる大作は何れも三十餘歳にして成れる者、即ち「フライシュッツ」(Freischütz)「オイリアンテ」(Euryanthe)「オベロン」(Oberon)等の歌劇是なり。此の三歌劇の序曲(オーヴァチュア)は現今尚ほ普く樂界の愛賞する所にして就中「フライシュッツ」は歌劇全篇を通じて至る所に演奏せらる。

本歌劇の樂は千八百二十年に完成せられ、翌年五月十四日初めて之れを伯林歌劇場に演奏し、非常の好評を博せり。こは近代歌劇に於ける獨逸樂風勝利の紀元を爲せる名作にして、最近歌劇界の大家ワグネルの諸作も源をヴェーベルの作に發する者なり。

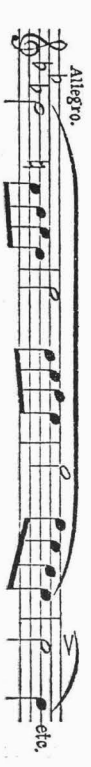
近世歌劇の序曲は舊式序曲に見るが如く歌劇の內容と無關係なる者にあらず。概ね歌劇の開幕に先ちて其の梗概を叙述するを常とす。本序曲に於ても亦た然り。

數小節の序節を終るや、靜かに波動するヴァイオリンの聚成音(アインギュア)に伴はれて、美はしきホルンの聯奏(ディスコット)起る。是れ全歌劇の舞臺なる森林の幽景を描く

者と見るを得べし。

次でヴィオラの顫音（トレモロ）とクラリネットの低音とは先づ來るべき凶運を語るが如くに響き、樂は『狼が谷』の叙景に移りて、深夜鬼神の前に銃丸を鑄る二壯夫マックス、カスパルが事を想起せしむ。續て起る甚だしき活潑調（ヴィヴァチエ）は山谷を疾過する暴風を寫す者にして、漸次に勢を强ふし終に力を極めて怒號すと思ふ間に、樂は突如として轉調し、全管絃は一大掃過を爲して長變ホ調の强大なる顫音（トレモロ）に移る。

ホルンの鋭き和絃三度響くやクラリネットの激情的樂句次で起り、ヴァイオリン、セロの不安なる聚成音（フィギュア）の響くと聽く間に、次の樂しき歌は最弱奏（ピアニシモ）に於て表はれ初む。




この旋律は歌劇の終りに少女アガテの歌ふ者にして、惡鬼の終に屈服し夫マックスの無事なりしを喜ぶ聲なり。この歌の最高調に達する時、山間の光景忽然として再現し、其の漸次に消え去る時、長ハ調の激烈なる和絃數回響き、次で快活なる勝利の旋律再び華々しき長ハ調の最强奏（フォルティシモ）に現はれ、序曲は無限の歡喜を描寫して局を結ぶ。

二、ピアノ獨奏

甲、ガヴォット及ミュゼット　　ダルベール作曲

ダルベール（Eugen d'Albert）は現代一流の洋琴家にして又た才能ある作曲家なり。千八百六十四年蘇格蘭グラスゴー府に生る。父は佛蘭西の人、母は蘇格蘭の女なれども弱齡の頃より獨逸の諸市に移住し、今日も伯林に留り居れば、其の精神は全く獨逸の人といふも不可なし。初め英國倫敦に於て洋琴をエルンスト、パウエルに學びしが、十七歳の時水晶宮に於てシューマンのコンツェルトを奏し、偶々該市に來遊したりしハンス、リヒテルに認められて獨逸行を勸められしといふ。これより獨逸ワイマル府に趣き名人リストの門に入て學びたる後、洋琴家として伯林に現はれ、次で歐洲諸國及米國を遍歷して至る所樂界の耳目を聳動したり。齡を重ぬるに從ひて漸く技術の方面に遠かり、最近二年間は全く作曲に身を委ねたり。其の近著の歌劇『ティーフランド』（Tiefland）は至る處に演奏せられ好評嘖々たり。凡て彼が後年の作品は徹頭徹尾近世的精神に充ちたれども、若年期の者は嚴密に古典風の作法に則れる者にして、玆に奏する舞踏曲の如きも其の適例なり。

乙、エテュード二篇　　ショパン作曲

洋琴樂の作家として有名なるショパン（François Chopin）は千八百十年波蘭ワルショウ府に生れ四十九年巴里に歿す。ロマンティツクの精神に充ちたる樂人にしてシューマン、メンデルソーン、リスト等と友たり。其の洋琴曲は現時の樂界に最も廣く行はるゝ者、和聲的色彩に於て豊麗婉美を極む。彼の作品第十及び第二十五を收めたる練習曲（エチュード）集一卷は正に洋琴曲集の摸範と爲すべき者、古今を通じて他に比類を見ず。初めに奏するは作品第二十五中の第一にして、美はしき和聲の輕妙なる連續はエオリアン、ハープの音色にも譬ふべく洵に全集中の白眉なり。次に奏する作品第十中の第五は黑鍵のみを使用する練習曲にして奏者の右手は終始黑鍵以外に移ることなし。

三、管絃樂

短ロ調シムフォニー（不完結）　　シューベルト作曲

樂聖ベートーヴェンと時を同ふして樂界に並馳したる名家シューベルト（Franz Schubert 1797—1828）の小歌曲は空前絶後の名作として樂界の嘆賞する所なるが、其の器樂に於ても亦た絶美の曲として珍重せらるゝ者數

篇あり。此に奏するシムフォニーは實に其の一にして、彼が作れるシムフォニー合計八篇中の第七に位し、長ハ調の者と共に古今の名曲と稱せらる。千八百二十二年に起稿したれども、唯だ二曲（ムーヴメント）部を作曲して未だ完成を告げざるに先ち、夭死したるは眞に惜む可し。世之を呼んで彼の不完結シムフォニーといふ。温雅にして、憂愁の情に富みたるシューベルトの俤は最も著しく此の作に現はれたり。

第一曲（ムーヴメント）部（快活調（アレグロ））。曲の初セロとダブルベースとは和聲無き同音奏を以て幽玄神秘の餘韻ある次の主樂想（テマ）を表はし

續て第一及び第二ヴァイオリンの私語に似たる樂句が

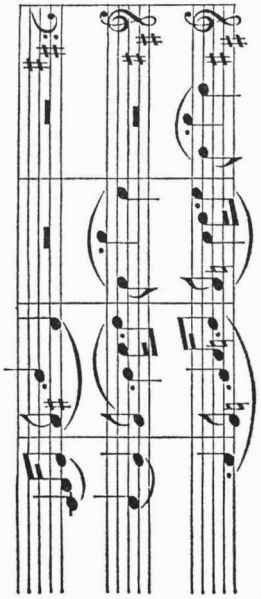
ベースの槌打する如き節奏（リズム）に伴はれて響く間に

木管樂器（オーボエ及びクラリネット）は新に哀訴する如き一旋律（メロディ）を表はし來る。評家或は此の旋律を以て同作家の名曲『糸紡ぐグレチヘン』に比する者あり。

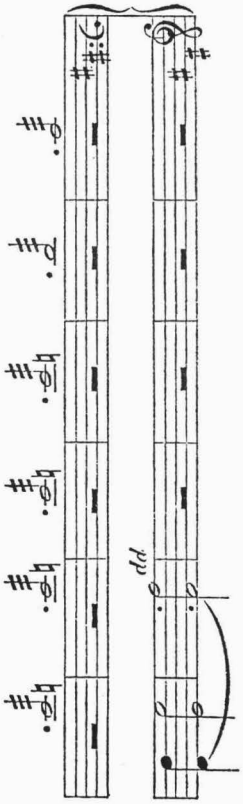
この旋律の漸次高調に達して俄かに消え去る時、ファゴットとホルンとは四部に分れて第二の主樂想（テマ）（ト調）を誘ふ。

此の牧歌に似たる主樂想は始めセロに現はれ、次でヴァイオリンに移り、婉美言ふべからざる妙音を續くる間に、中途にして管絃の音忽然絶え、次で激しき最強奏（フォルティシモ）起る。前に出でたる槌打する如き節奏は再びこゝに聞えて、第二主樂想の一部は凡ての樂器に現る。

されど樂は頓て輕快なるト調の旋律に歸り、此度は輪唱（カノン）の作法に從て絃より管に移る。



此れに次で所謂『開展（エキスポジション）』の部に入る。こは第一主樂想の一部に變化を加へて引き延ばしたる者なり。此の部に於て特筆すべき箇處は、ベースが漸次に下降し、ハ音上に止まりて最弱奏（ピアニシモ）の顫音（トレモロ）を續くる間に、ヴァイオリンとヴィオラとが二小節の間隔を保てる摸倣の形式を以て靜かに第一主樂想の一部を現はす一節にして、一種不可思議の感動を與ふ。



此の進行の最高調に達する時全管絃の最強奏（フォルテイシモ）は短ホ調に於て第一主樂想を表現す。

『開展』の部を終るの後は再び曲の初めに返りて之れを反覆し、頗る長き終節（コーダ）を以て曲部を終る。

第二曲部（長ホ調の活動せる緩歩調（アンダンテ））。全部殆ど強奏節を挿まず。終始流暢なる曲節に深き感情を籠め、美はしき和聲法と巧みなる樂器編成法とを以て之れを豊麗にせり。セロとベースとの指頭彈奏（ピチカート）に續きて現はるゝ主樂想は絶えず問答する短かき對話にも似たり。後半の怪しく美しき旋律は初めクラリネットに表われ後オーボエに移り、凡て最弱奏にて絃樂に伴はる。進行中屢々奇警なる轉調法を用ひあり。次で暫時最強奏に移りて後は今迄の進行を反覆し、曲部は最弱奏に終る。

## 四、ピアノ獨奏

### シムフォニック、スタディーズ　シューマン作曲

シューマン（Robert Schumann 1810—1856）は獨逸ロマンチック樂派の名家なり。作曲者として聲器兩樂に幾多の佳作を遺したるのみならず、又批評家としても後世に摸範を垂れたり。其の早年の作（作品第一乃至二十三）は何れも洋琴曲なるが、其の中『パピヨン』（作品第二）『カルナヴァル』（作品第九）及び此に奏する練習曲は出版の當時全樂界を驚かしめたる作品なり。蓋し此等諸作は一定の形式を除却したる點に於て甚だ斬新なりしが故なり。此の外の點に於ても彼は多くの新機軸を出したりき。後年の洋琴曲は活氣情熱に乏しく、又た獨創の想を缺きたるが故に多く演奏せられず。唯だ洋琴コンツェルト（作品五十四）は此の種類に屬する諸曲中最も廣く行はる。小歌曲の方面に於ても彼の作は頗る有名なり。

此に奏する練習曲は『カルナヴァル』と共に恐らく彼の洋琴曲中最も秀でたる者なるべし。こは其の表題中にも詳記しある如く『變手曲（ヴァリエーション）』體に作られたる練習曲にして其の主樂想は音樂を愛好せる彼の一友の作る所なり。

最後の變手は他の者と異りて獨有の趣を存す。自由に躍動しつゝ然も明かに節奏を具へたるを特徴とす。

## 五、管絃樂

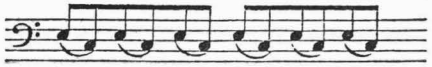
### 歌劇『ローレライ』第一幕の終曲　メンデルソーン作曲

メンデルソーン（Felix Mendelssohn-Bartholdy 1809—1847）は獨逸ハムブルクの人、幼にして神童の聞えあり。十五歳の時短ハ調シムフォニーの作曲に其の天才を表はしてより以來、音樂の有らゆる部門に創作して夥多の作品を出だせり。彼の短生涯を以てして能く此の如き多大の貢献を爲したるを思へば、其の偉才や吾人の驚嘆に値すべし。シェクスピヤ作『中夏の夜夢』の序曲、神事樂（オラトリオ）『エリアス』及び『パウルス』は彼が千載不朽の名作なり。器樂の方面に於ても彼の樂器編成法は輕妙流暢を極め、且つ新機軸を出したる點に於て近代樂器編成法の始祖といふを得べし。何となればベルリオズの有名なる編成法の出づるに先ちて、彼は其の管絃樂譜に幾多の創見を表はしたればなり。彼の序曲『海の靜けさと幸多き舟旅』（Meeresstille und glückliche Fahrt）は實に其の證左なり。

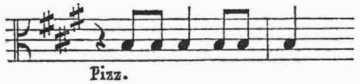
絃に奏する歌劇の終曲は千八百四十七年、死去の少しく以前に作曲した

る者にして、此の外に『聖母讃歌』及『葡萄園丁の合唱』の二曲をも作り置きたれど、終に完成せずして逝きたるは惜む可し。本來劇場に上せんが爲めに作りたる者なれども、ヴェーベルの『プレチオーサ』ベートーヴェンの『アテンの廢墟』などの如く、叙事唱歌として奏樂堂裡に演奏する方遙かに適當なり

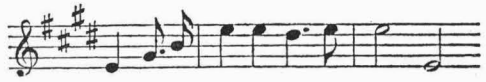
歌詞は獨の詩人ガイベル (Emanuel v. Geibel) の筆に成れる者、話の筋は不幸なるレオノーレといふ女、眞情を捧げて盡したる愛夫に棄てられて人を怨み世をうらみ、終に狂亂してライン河中の幽鬼に身を任せんとするを描けり。樂は終始流暢にして特殊の美を具ふ。曲の初め次の聚成音と



フリユートの半音階的上走音は波靜かなるラインの河流を描出す。此の前奏終るや、舟子を誘ひて波間に引き入るると傳ふるライン河精の合唱先づ女聲に起り次で男聲に移り謳歌相應ふ。此の八分ノ六拍子の流暢なる樂は河精の幸福なる生活を表現する者といふべし。之れに次ぐ四分ノ四拍子の部分は風水を司る破壞的魔力を表はす者にして、就中短イ調より長イ調に移り『時は今ぞ、月も落ちぬ』と歌ふあたり頗る佳調に富めり。此の喧囂なる夜遊の闌はなる比人影忽然と現はれて彼等を驚かす。伴奏ヴィオラの指頭彈奏は巧みに彼等が疑懼の態を描けり。




續てレオノーレの哀訴する如き旋律（短イ調）、緩歩調に表はれて河精に復讐の助力を救ふ。此處に水流の音再び管絃に聞え、次で快活調に移り、漸次最强奏に昂進す。幽鬼群り出でゝ女の求むる所を問ふに、レオノーレは一向に復讐を呼びて魔群の援助を請ひ、其の報酬として貴事を犧牲にすとも厭はじと盟ふ。之れに次ぐ緩歩調は河精の要求にして、レオノーレの永久にライン妖群に加はらんことを盟はゞ望を叶はせんと答ふ。靜かなる半音階的上行旋律の表情に注意すべし。合唱止んで樂は再び活潑神速なる進行に入りレオノーレの決意を表はせり。憐むべし彼は倦くまで素志を貫かんが爲めに心身の自由を擲ちて幽鬼の請求に應じたるなり。次の動機旋律は女の答にして絶えずライン河精の快活なる叫喚と相交はり。



漸次復讐の大合唱に連りて歌劇の第一幕を終ふ。

## I. Overture to "der Freischuetz."

*C. M. v. Weber.*

The first of the great German romanticists, Carl Maria von Weber, was born at Eutin, in the year 1786. His father, perceiving the genius with which the child was endowed, undertook to develop his talent at an early age, finally succeeding in placing him with Michael Haydn, a brother of the great Joseph Haydn, with whom he studied theory and composition. Weber later also became one of the greatest pianists of his day.

He wrote, in early life, a number of smaller operas, most of which have, however, disappeared from the stage repertoire. Three of his overtures: "Freischütz," "Euryanthe" and "Oberon" attained great popularity, and the whole opera "der Freischütz," is to-day everywhere and often performed.

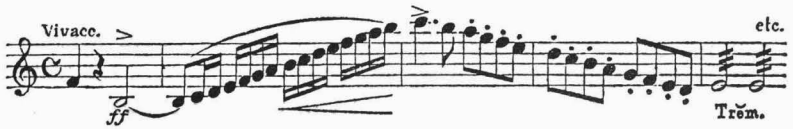
The music was completed in the year 1820, and had its first performance in the Berlin Opera-house on the 14th of May 1821. The success was phenomenal, and marked the beginning of a new era, the triumph of the national German element in modern opera.

Weber's operas may be said to have been the foundation of Wagner's great dramatic works. The latter was inspired by the music of "Freischütz" and "Euryanthe" as by no other.

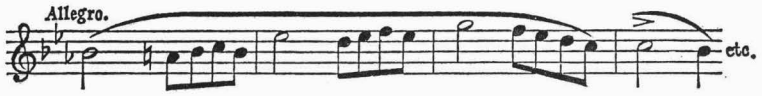
After a few introductory bars, the overture begins with a beautiful horn-duet, accompanied by a quiet, undulating figure in the violins:

It might represent the ideal quiet of the forest.

A tremolo of the violas, foreboding low notes of the clarinets, and we are led to the Wolfschlucht (mountain-cavern) scene, where, at midnight, Max and Kaspar cast the magic bullets in the presence of the evil spirits. The following molto vivace represents the whistling and rushing of the storm in the mountain crevice, finally bursting out in all its fury. Then a sudden modulation, a grand sweep of the whole orchestra, and we are in a mighty tremolo in E♭ major:




Three incisive horn chords announce a passionate clarinet phrase, then a restless figure in violins and cellos, and we hear for the first time, pianissimo, the jubilant melody sung by Agathe at the close of the opera, when the evil spirit has been vanquished, and her lover, Max restored to her:




It is worked to a climax until the mountain-cavern scene is once more suddenly introduced. This gradually dies out, to be followed by several crashing chords in C major, and the joyous triumphal melody, fortissimo in the whole orchestra, appears once more in this bright key. The overture closes in the most jubilant spirit.

R. E. R. [=Rudolph Ernest Reuter]

## II.

### a. Gavotte and Musette for Pianoforte.

*E. d'Albert.*

Eugen d'Albert, born at Glasgow in 1864, for many years regarded as one of the greatest pianists of the present time, has for the last two years been devoting himself entirely to composition. His recent opera, "Tiefland," has achieved the most brilliant success wherever performed.

Though born of a Scotch mother and French father, d'Albert is virtually a German, having come at an early age to Berlin, where he now lives. His earlier compositions, among them the Gavotte and Musette, are strictly classical in style; his later works are, however, thoroughly imbued with a modern spirit.

R. E. R.

### b. Two Etudes for Pianoforte.

*Fr. Chopin.*

One of the greatest composers for piano, François Chopin, was born at Warsaw, Poland, in 1810. An outspoken Romanticist, his compositions are rich and beautiful in harmonic coloring and are to-day among the most popular of piano compositions.

The book of Etudes, opus 10 and 25, is the standard work of its kind, unrivalled by anything similar ever written before or after. Opus 25 No. 1, a mysterious, aeolian-harp-like succession of exquisite harmonies, is one of the most beautiful of all studies. Opus 10, No. 5 is a study for the black keys alone, the right hand not playing anything but these throughout the whole piece.

Chopin, the friend of Schumann, Liszt and Mendelssohn, died in poor circumstances at Paris, in 1849.

R. E. R.

## III. Symphony in b minor.

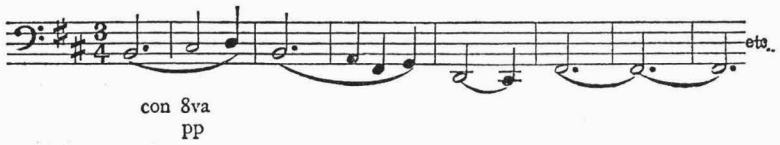
(*unfinished.*)

*F. Schubert.*

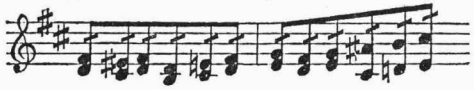
Franz Peter Schubert, born the 31st of Jan. 1797 at Lichtenberg, died the 19th of Nov. 1828 at Vienna, is to be regarded as one of the greatest composers of all times, side by side with Haydn, Mozart and even his great contemporary Beethoven, whom as composer of the German Lied, he outrivals by far. He placed this important branch of modern music upon a sure foundation and brought it up to a standard until now unsurpassed. His songs are enveloped in a haze of glowing romanticism.

Despite his short life, Schubert was one of the most productive composers. Besides some 450 songs, he wrote four small opera, masses, choruses, much instrumental music (including ten beautiful piano sonatas), and eight symphonies, the seventh of which, begun in 1822, was, for some unknown reason, never completed. As it stands, it ranks first among Schubert's orchestral compositions and is a gem of all music literature.

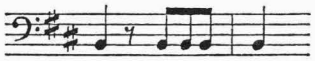
The first movement opens with a mystic, foreboding theme in cellos and double-basses, lacking harmonic support:




followed by the whisperings of the first and second violins:



accompanied by the hammering rhythm of the basses:



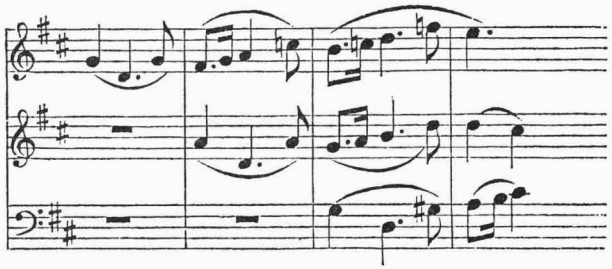
oboe and clarinet meanwhile singing a new plaintive melody:

which, working up to a climax, ends quite suddenly. Bassoons and horns, four-voiced, now lead over into the second theme, played first by the cellos, then by the violins:

A sudden pause, and the orchestra breaks out into a crashing fortissimo. Tho' seemingly new, one is able to distinguish the hammering rhythm once more, as also a part of the second theme:

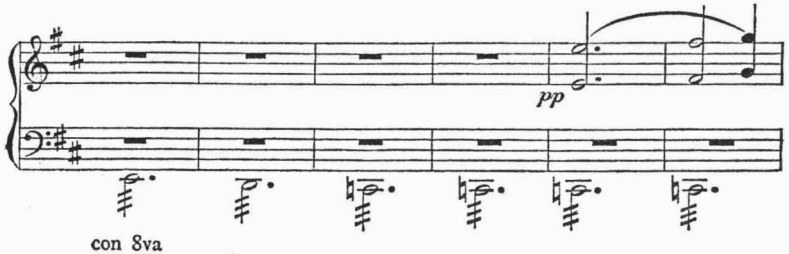
appearing in all instruments.

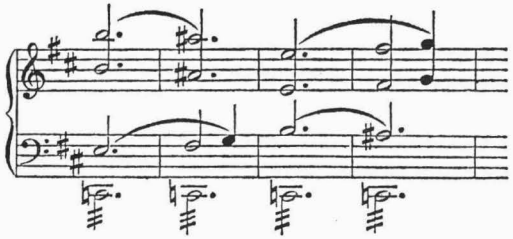
Soon, however, the light, swinging motif in G is again heard, this time in canon form, first in the strings, then in the wind instruments:



The following exposition brings mainly parts of the first theme in different forms.

An unearthly, mysterious effect is produced here by the gradual dropping of the basses to the low c, held pp and tremolo while violins and viola sigh part of the first theme in two-bar imitation:




The climax of the movement is reached when the whole orchestra, fortissimo, thunders out the first theme in e minor. Following the exposition the first part of the symphony is once more heard. A lengthy Coda closes the movement.

The second part, Andante con moto, in E major, almost entirely without forte episodes, is a smooth-flowing, deeply musical piece, rich in beautiful harmonic and instrumental effects. A pizzicato in cellos and basses introduces the movement, consisting almost entirely of short dual episodes, a constant questioning and answering. The second half brings a wonderful melody by the clarinet, later by the oboe, in the most delicate pp, accompanied by the strings, often bringing surprising modulations. After a short fortissimo, everything is repeated, exactly as before, and the movement, and, sad to say, the whole symphony, closes pianissimo.

H. W. [=Heinrich Werkmeister]

## IV. Symphonic Etudes op. 13.

*R. Schumann.*

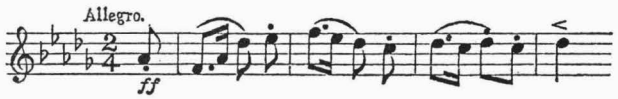
Robert Schumann may be called the most enthusiastic of all composers of the romantic school. He was born in the year 1810. His earlier works, "Papillons" op. 2, "Carnaval" op. 9, and the "Symphonic Etudes" startled the whole musical world at the time of their appearance. Form seemed to have been done away with entirely, and Schumann was a musical revolutionist in many other respects.

His later works lacked fire, spirit and originality, and are, on that account, much less played. His pianoforte concerto op. 54, is however, once of the most popular pieces of its kind. The songs, too, have earned for themselves just fame.

The last few years of Schumann's life were spent in a sanatorium, for he suffered from brain-disease. Here, in Endenich, near Bonn on the Rhine, he died 1856.

The "Symphonic Etudes," with his "Carnaval" are perhaps his greatest pianoforte works. The theme of the Etudes, ("Studies in the form of Variations" is the full title,) was composed by a friend, an amateur musician:

The last variation stands alone as the embodiment of swing and rhythm:




R. E. R.

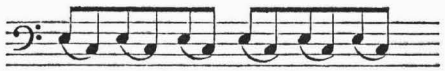
## V. Finale from the unfinished opera "Loreley."

*F. Mendelssohn.*

Felix Mendelssohn-Bartholdy, born on the 3rd of February, 1809, died the 4th November 1847, was one of the greatest and most versatile of German composers. His music to Shakespear's Midsummernight's Dream, his oratorios Elijah and Paul have won him everlasting fame. Yet he was most fruitful in instrumental music; his orchestration combines lightness and flow with beauty. He may be called the father of modern instrumentation, scores of new and beautiful effects having been invented by him years before that epoch-making work on orchestration by Berlioz first appeared. His overture "Calm Sea and Prosperous Voyage," written in 1838, is proof of this.

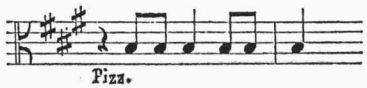
The Finale of "Loreley," calculated for stage production, is infinitely more effective as a choral Ballad in the concert-hall, similar to Weber's "Preciosa" and Beethoven's "Ruins of Athens."

The music is smoothflowing and characteristic throughout. At the beginning the following figures in the strings:



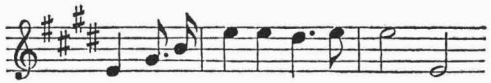
representing the movement of the waves of the Rhine accompanied by smooth runs in the flutes.

After this prelude a picture of quiet and rest, the chorus of Rhine-maidens is heard, enticing the unfortunate humans thither in order to destroy them. In the midst of boisterous play, (in the bright key of A-major,) they are suddenly interrupted by a pizzicato in the violas, characterizing their fright and anxiousness at what is about to come:




Loreley now appears in the following Andante, singing a plaintive melody. (in f minor.) Cheated in love, she comes to the Rhine-daughters to ask their aid in getting her revenge. The movement of the water is once more heard, the following Allegro grows to a fortissimo, all caverns of the deep seem to open and from everywhere come the spectral inhabitants, enquiring after Loreley's wishes. She cries for revenge asking the spirits to give her the greatest beauty, for which she is ready to pay any price.

In the following Andante the Rhine-maidens give answer that Loreley herself is to the reward; that she is to belong to them and to the Rhine forever (chromatics in the melody). A pause, and the Allegro vivace characterizes the sudden resolution on Loreley's part to carry out her intention. The following motif illustrates her answer, always interrupted by the joyous shoutings of the Rhine-daughters:



growing gradually into a great Chorus of Revenge with which the first act of the opera closes.

H. W.

〔批評および関連記事〕

### 大成功の音樂會

十三日午後東京音樂學校に開催せられたる音樂會は露佛大使を始め外交團總出の盛況にて會場僅かに二三の席を剩す程なりき、演奏にウエーベル作歌「フライシュッツ」の序曲に始まり、新來教師ロイテル氏の技倆を公衆に示すべき第一の機會たるガヴォット及びミニゼットは演ぜられたるが、何ほ年若き同氏の手腕は滿場をして感嘆せしめたる上に、更らにシューマン作シムフォニック、スタディズは演奏せられたるが、左手の働きは聽者を恍惚たらしめ、日本一の音樂通田中正平氏は日本には惜しき程の教授よと賞贊したる程にて、アンコールの拍手に連れて再び左手のみにて奏曲したには何人も滿足せりさて此日の大物たる歌劇ローレライは安東恒子

孃の獨唱に花咲けり、前者には若干のケレンあり、從てズルキ筋ありと傳へられたりしが安東孃に至ては飽迄眞面目なるは喜ぶべき次第なるが、あはれ彼女は歌を消化する底の機能を缺けども音海の前途は彼女に待つ事多し（秀生）

（『報知新聞』明治四十二年六月十四日）

●音樂學校演奏會　同校春季音樂會を六月十二、十三の兩日開會例の如く二日とも非常の盛況にて、演奏も面白くきかれたり、特に新任教授ロイテル氏のピアノは氏の技術の一部分を紹介したるに過ざりしならむも演堂の喝采湧くが如く、尙安東恒子孃の狀唱（ママ）も一段の進境を呈したるは喜ぶべし、管絃樂は聊か精錬足らざりしにあらずやと思はれしは否か曲目次の如し。〔曲目省略〕

（『音樂界』第二巻第七号、明治四十二年七月、三一頁）

東京音樂學校春季演奏會

恒例の演奏大會と新任のロイテル氏披露會とを兼ねて十二十三の兩日催され候　十二日の如きは聽衆堂に溢れ爲めに演奏の調和を防げし樣覺え候十三日は外人多く九分の入りにて出來ばえも前日より一層宜敷聞き心地亦良く候ひき　曲を左に

一管絃樂　歌劇フライシュツの序曲　ウエーベル作　奏法中々難澁のものの由に候非常に面白く聞き申候

二ピアノ獨彈　ルードルフ、ロイテル氏

甲ガヴオツト及ミユゼツト　ダルベール作　前日の方上出來なりし由に候

乙エテユード二篇　ショパン作　氏の眞面目なる態度を遺憾なく發揮致し居候就中後者は作品第十中の第五右手は黑鍵を離るゝことなきものにて二篇共腕試めしとして好箇のものに候ひき

三管絃樂　短ロ調シムホニー　シユベルト作　練習充分にして作曲亦名あり、樂想も充分了解せられ居るべく聞く方も解し易し何度聞くも良き曲に候

四ピアノ獨奏　ロイテル氏　シンホニツク、スタデイス　シユーマン作曲

氏の作曲中の白眉の由にて演奏者亦妙技を盡し十三日の如きは拍手止まず爲めに左手のみを使用する一曲を景色として有難く頂戴するを得候

五管絃樂　オペラ、ローレライ第一幕の終曲　メンデルスゾーン作　曲は先ラインの波音に起り次て女聲の合唱となり男聲共に加はり忽ちレオノーレ即主人公の獨唱即ち安東恒子孃の艶ある確かなる歌となり合唱、獨唱、エコー伴奏交々起りて最後復讐々々と叫喚して樂を終へ候十三日の方出來好良なりと覺え候、安東孃日本一なりとは既に定評ありされど欲をいへは「鬼々しさのげによのほかや」の邊は今一層毒々して恨めしく唱ひ「うれし御詞や」以後は悲しみの内にも今少し希望と決意とを示して貫ひ度覺候、邦語にて唱ふは如何にも苦しげに又聞きにくゝ候寧ろ原語の方可ならずや

一般にいへば近來長足の進歩を爲したる樣に候バスの確かになりたるは演奏が一体に安定となり聞き心地大に宜敷候

（『音樂世界』第三巻第七号、明治四十二年七月、一二～一三頁）

音樂學校演奏會概評

■東京音樂學校の所謂春季演奏會は、非常に時期を失して、漸く六月第二の土曜日曜に開かれた。評者は土曜日に聽きに行つたが、曲目すべて五、ピアノ獨彈が其の二つを占めて居たのは、新來の洋琴樂手（ピアニスト）ルドルフロイテル氏紹介の意であるらしく、管絃樂は歸するところ景物でなければ御愛嬌に過ぎなかつた。

■管絃樂として現はれたヴェベルの歌劇『フライシュッツ』序曲は、實に支離滅裂、吾人は不幸にして何處にも其の內容美を窺ふ事ができなかつた。凡そ此の序曲は啻に「開幕に先だちて其の梗概を叙述する」のみでなく、また繪畫的側面を有しつゝ、云はば全曲の背景となつて居る事を忘れてはならぬ。即ち劇の綜合となり背景となり得る點に於いて、此の序曲の價値も存し、美趣も亦生ぜられる筈だのに、序節の下行旋律が沈靜の氣を失つたのは敢へて問はずとしても、ホルンのデュエットが表情を缺いたこ

とや、ギヴアツェの速度が折々齟齬を來たした事は、少なくとも所謂繪畫的側面を遠ざかること甚しかつたと云はねばならぬ。尤もヴアイオリン、セロの聚成音に伴つて起こるクラリネットの吹奏は、此の歌劇の一特徴たる民謠的空氣を僅かに仄めかし得たが、全躰に統一を失し、純化を缺きがちであつた事は爭はれぬと思ふ。此の日第一の劣作にして而かも惡作。

■次はロイテル氏のピアノ、曲はダルベエルのガヴオット及ミュゼットと、ショパンのエチュウド二篇である。先づ其の誇張なく衒氣なき態度が氣に入つた。徒らに技巧の華麗を欲して、內容の充實を知らぬ吾が國音樂家大部分の態度には、實際うんざりして仕舞ふが、氏の技巧は優雅纖麗なる間に、旨味もあれば潤ほひもあれば色合もあつて、微細なる樂想をも亦よく消化せむとする趣に溢れて居る。氏の演奏が飽くまでも內面的で、外面的たり得ざる所以も亦明らかに如上の技巧より生じ來たるので、從つて其の趣味の書齋もしくは客室を出でざる觀を呈して居るのは、まさに氏の長所でもあり短所でもあらうと思ふ。また或る觀察點よりすると、澤田柳吉氏の更に一層進んだる型として可いかも知れぬ。しかしこれは只吾人の感想に過ぎぬのであるから、果して正鵠を得てゐるか否かは保證の限でない。とにかく氏の音樂は、形式美と個性美との抱合が未だ全からざる點よりして、俄に醇化せる音樂と稱するを得ないけれども、其の將來が極めて有望である事は、否定することが出來ぬと信ずる。吾人はわが沈滯せる樂界に、氏の如き趣味の樂人を得たのを喜びとする。

■シユウベルトの不完稿たる短ロ調シンフォニイの管絃樂は、屢々聞かされた曲だけに、多少あてられ氣味であつた。成るほど此の曲はシユウベルトの逸品で、多少いはゆる標題樂に觸れた點はあらうけれども、いつまでも這般の曲にのみ腐心せる當事者の心裡は聊か難解だ。昨年の秋の演奏會でゴルドマルクのサクンタラを演奏した意氣込は何處へ失せたと言ひたくもなる。それは兎に角として、此の曲の演奏は、概して無難である丈けに勢ひ平凡を免れなかつた。第一ヴアヰオリン部の勞憊の色と、齒ぎれよく第一主想を繰返すセロとが、好個の對照をなして居た外、取り立てゝ云ふ程の印象も得られなかつた。

■續いてロイテル氏は、更にシユウマンの有名なシンフォニック・スタディイスを彈いた。作者の深い新しいそして色合豐かな樂想も、ユウモアに富んだ曲風も、比較的に能く現はされたけれども、前の演奏ほど一般の感興を惹かなかつたのは何故だらう？

■終りはメンデルスゾオンの不完歌劇『ロオレライ』第一幕の終曲。歌詞は原詩に忠實なのか何うかは知らぬが、音樂學校一流の「あゝ恨みの、ああ聲きこゆ」と云ふ調子で、極めてお芽出度く出來て居た。はじめピアノにフルュウトを絡ませて、河流の象徴をやるあたりは、多少身に泌みたが、何しろあの狹い樂堂に百何十人と云ふ大勢が居並ぶのだから、騷しいと云ふ感じが九分を占めて、遺憾ながら平靜に耳を傾ける事ができなかつた。「頗る佳調に富んで」ゐるとか云ふ「時は今ぞ」のあたりも、表情が十分で無かつたし、安東女史の獨唱も、此の間の卒業式で接した手腕とは宛然別人の感があつた程生彩を缺いて居た。よく人も云ふ事だが、這般の作を日本語の歌詞に引直す場合には、先づ國語のアクセント及び音量長短に注意して貰ひたい。でないと橋と箸とが反對になるやうな滑稽を得てやり度がるものだ。もしそれが難問題であるならば、はじめから原語の儘で歌つて貰つた方が、いくら無難であるかも知れぬ。歐洲樂を研究してゐる當事者が、歐洲の國語の發音をなし得ない道理もなからうではないか。

■要するに此の日の音樂會は、ロイテル氏の獨舞臺であつた。いつも外來の樂人に花を持たせ得る音樂學校は成程豪いと、つくづく感心して引退つたものは、恐らく自分のみでなからう。（無頭）

（『帝國文學』第十五巻第七号、明治四十二年七月、一一七～一一九頁）

## 不完と曲目に迄記して

東京音樂學校の明治四十二年の春季演奏會は、新任教師ロイテル氏の獨奏もありまして却々の盛況であつた。さて演奏會も終り山を下る途中、知人からその友人を紹介され、一處に茶を喫しました。此人は或縣廳の教育に關係ある官吏で、公用で上京し、此日の演奏會にも參つたのださうですが、話の中に、「あゝした學校でありながらなぜ不完全なものを平氣で公

演するのでせう。併も丁寧に斷はつてまで……」と、何のことか判らないのでまごゝして居ると、その人はプログラムを出し『管絃樂、シンフオニー「短ロ調」（不完）……シューベルト作曲』といふ一項を指しました。段々聽くと、彼は此「不完」の二字を練習不充分といふ斷り書と考へたのであつた。（明治四二年六月）

（『月刊樂譜』第二十三巻第十二号、昭和九年十二月、七二頁）

**明治四十二年十月九日、十日　学友会演奏会**

十月九日、十日　學友會演奏會を午後二時より開催

演奏曲目

第一部

一合唱　會員
　簸の川上　チヤイコフスキー作曲
二ピアノ獨奏　永田また
　ソナタ　クレメンテイ作曲
三獨唱　岡見メリー
　ヴェネチアニッシエツ、ゴンデルリード　メンデルソーン作曲
四オルガン獨奏　橋村その
　第一章（長ヘ調ソナイテイネ）
五獨唱　船橋榮吉
　ダーリーグイヒ、ウンター、デンボイソン　メンデルソーン作曲
六セロ獨奏　信時潔
　ロマンス　ダビドツフ作曲
　カンテイレナ　ゴルターマン作曲

第二部

一オルガン獨奏　園山民平
　パストラール　バハ作曲
二獨唱　清水金太郎
　デル、ヴアンデレル　シューベルト作曲
三ヴアイオリン獨奏　蜂谷龍
　コンモルテイー　シツト作曲
四ピアノ獨奏　貫名美名彦
　プレリユード　ショパン作曲
　フーモレスクエ　チヤイコーフスキー作曲
　シエルツオー　チヤイコーフスキー作曲
五絃樂四部合奏　多川久寅、大塚淳、山田耕作
　セレナーデ　モザルト作曲
六合唱　會員
　流浪の民　シューマン作曲

（『音樂』學友會、第一巻第一号、明治四十三年一月、二六頁）

○東京音樂學校學友會演奏會（十月十日）

前述の會に引替へ滿員の盛況全くロハなるか其の原因なりとは思はれず候

一合唱　簸の川上　チヤイコーフスキー作　會員

前にも出た曲、出來は上々と申し難しバスの足らないのが殘念に候

二ピアノ獨奏　ソナータ　クレメンテイ作曲　永田また孃

未だ前途遼遠の感有之候も立派な演奏振に候

三獨唱　ベネテツセ（ママ）、ゴンデル、リード　メンデルスソーン作
　岡見メリーモリス孃
　ユンケル氏自身の伴奏にて出來は上の部益御奮勵の程を

四オルガン獨奏　第一章（長ヘ調ソナテイネ）　ラインハルト作
　橋村その孃
　表情少しくもの足らず今少しオルガンの特色を發揮出來ざるものにや

五獨唱　吾木の下に在り　メンデルスソーン作　船橋榮吉君
　發聲音色共に佳氏は本校低音部の重鎮自重せられむ事を

六セロ獨奏　甲カンテイレナ　ゴルターマン作
　乙ローマンス　ダビドツフ作　信時潔君
　確りとした感じのある演奏、氏はヴエルクマイスル（ママ）氏の高弟將來有望なる奏手に候甲は痛快、乙は輕妙殊に乙はウヰザース氏が横濱にて奏せしものなりと聞きては感興亦一入、大喝采を以て終り西洋式にやれば尚一度顏を出すべき處伯林のムジークアカデミーにあの蠻カラ（？）姿を見るも遠きにあらざるべしと私言せる人も候ひき幸に健在の程を祈り候小憩ありて二部に入る

一オルガン獨奏　パストラレ　バハ作　園山民平君
　誠に立派な出來曲はバハ流の奇麗なもの感心致候

二獨唱　デア　ヴアンデラー　シューベルト作　清水金太郎君
　氏も亦本校低音部の重鎮丈ありて本日聲樂中の白眉と覺え候

三ヴアイオリン獨奏　コンセルテイノ　シット作　蜂谷龍孃
　弓使ひといひ音色表情共に堂々たるもの感心〳〵と申のみに候少壯女流ヴアイオリン彈きの鏘々たるものに候

四ピアノ獨奏　プレリユード　ショパン作
　ユモレスク　チヤイコフスキー
　スケルツヲ　チヤイコフスキー
　貫名美名彥君
　氏は綽名を「小供」といひ大形ピアノの前に掛けたる有樣は對照の妙を得候而も一度指頭がキイに触るゝや、あの躰であの音と驚かれ候、ユモレスクの如き昨日のエルヂー夫人のに比して却つて立派なる樣思はれ候氏は聲樂、フルート、トロンボン等も何れか本職なるかを知るを得ずと申ことに候全く天稟の致す所と存候

五絃樂四部　セレナーデ　モツアルト作
　多久寅君　川上淳君　大塚淳君　山田耕作君
　春の會に絃樂合奏にて奏せしもの例の四人とて呼吸は全く合し四部のことゝて多君の腕が振つて一層壯快大受にて候ひき、慾には尚一曲をと覺え候

六合唱　流浪の民　シューマン作　會員
　出來は上々といふ程にもなかりしも二三年前の本會の合唱に比しては著しき進歩の跡見え候
　要するに學友會としての進歩の顯著なるは何人も認むる所殊に第二部の如きは何れも立派なるものに候、又ユンケル、ヴエルクマイスル二氏が態態伴奏せられたる熱心は感謝する所近頃の進歩の著しきも決して故なきにあらずと覺え候

（『音樂世界』第三巻第十一号、明治四十二年十一月、八～一〇頁）

**明治四十二年十一月二十七日、二十八日　第二十一回定期演奏会**

明治四十二年十一月二十八日（日曜日）午後二時開會

音樂演奏曲目　東京音樂學校

一　管絃樂

歌劇「イフィゲニー、イン、アウリス」の序曲　……グルック作曲

二　管絃樂付きピアノ　教授　神戸　絢
　カプリシオ゛ブリヤン……メンデルソーン作曲
三　管絃樂
　エロイカ゛シムフォニー第一進行……ベートーフェン作曲
四　ピアノ獨奏　教授　神戸　絢
　甲゛セレナーデ……シューベルト゛リスト作曲
　乙゛ラ゛ヴェロシテー……ジー゛マチアス作曲
五　甲゛管絃樂　教師　ウェルクマイステル
　スイト「レ゛ゼリニー」の一節……マスネー作曲
　乙゛絃樂
　ガヴォット……リュリー作曲
六　管絃樂及合唱
　騎士の娘……パーカー作曲

Orchestral and Choral Concert
OF THE
Tokyo Academy of Music
UYENO PARK
*Sunday, November 28th, 1909*
AT 2 P.M

PROGRAM

1. Overture to "Iphigenie in Aulis." .....*Gluck.*
2. Capriccio Brillant (B minor op. 22) for Piano with Orchestral accompaniment .....*Mendelssohn.*

MRS. KAMBE.

3. Eroica Symphony (No. III, E Flat major op. 55) First movement.....*Beethoven.*
4. Piano Solos:
   *a.* Serenade, "Hark, Hark, the Lark" from Shakespeare .....*Schubert-Liszt.*
   *b.* La Vélocité .....*G. Mathias.*

MRS. KAMBE.

5. *a.* "Scène Religieuse" from the Suite: "Les Erinnyes" for Orchestra .....*Massenet.* (Violoncello solo: Prof. Werkmeister).
   *b.* Gavotte. .....*Lully.* (Arranged for String Orchestra by J. Harada.)
6. Ballad of a Knight and His Daughter for Chorus and Orchestra.....*H. W. Parker.*

*Conductor: Prof. Junker.*

音樂演奏會曲目梗概　第十

一゛管絃樂

『イフイゲニー゛イン゛アウリス』の序曲

グルック作曲

佛の哲學者ルッソー謂へらく゛「我が佛語を以てしては人を感動せしむ可き旋律の歌詞を綴り難しと爲せる余が年來の主張をばグルックの歌劇は゛根本的に破壞し去れり」とぜネバ湖畔の哲人をしてこの嘆聲を發せしめたるものは實にイフイゲニー゛イン゛アウリスなりき。

イフイゲニー゛イン゛アウリスは近世歌劇の創立者グルック(Christoph W. Gluck 1714—87)の第四の傑作にして゛千七百七十二年佛人ドュ゛ルレー(Du Roullet)の歌詞に附して作曲したるもの。ドュ゛ルレーはイフ

イゲニーの筋をラシーヌの同名の悲劇に採りて聊か之を改作せり。

此處に演奏するは此歌劇の序曲にして、彼が以前の傑作オルフェウス(Orpheus)其他の序曲に比すれば、其技巧の優秀なること殆んど同日の談に非らず。今此序曲に付き説明するに先ちて、イフィゲニーの古譚を略述すれば、古代トローヤの戰に希臘軍の將として有名なるアルゴス王アガメムノンが全軍を引率してアウリス港に集合せし時、嘗て月神アルテミスの鹿を射殺したる祟りにてトローヤに出帆せんとするも順風を得ず。乃ち神僧の託宣に從ひて最愛の娘イフィゲニーを犧牲として月神に奉献したりといふなり。グルックの歌劇は此イフィゲニーを神壇に供したる所にて終れり。

序曲は此歌劇の全梗概を描出して、聽者に全曲の發展に對する音樂的感情を豫想せしむるものなり。序曲の冒頭に響く悲痛なる旋律は、娘の犧牲を嘆くアガメムノンの悲調なり。此前奏に引續き短ハ調の快速調(アレグロ)にて勇敢なる第一主題現はれ。こゝに序曲の本節初まる。此節は性急なる希臘の勇士等が涙を呑んで犧牲を要求する心地を現はしたるものなり。此快速調の中に副主題として極めて閑雅なる牧歌的旋律前後二回響き、其第一主題と絶好なる對照をなす。是れ過去に於けるイフィゲニーの樂しかりし生涯を描寫せるものにして此對照あるが爲めに益々來るべき運命の悲慘なるを感ぜしむ。樂しかりし過去の追想によりて暫く目前に逼る運命を忘却せんとすれば、又しても襲ひ來る犧牲要求の叫びに二度迄も妨げられて、あはれ彼女がアウリス原頭の露と消へぬべき定命の日は漸く近づくなり。次で來るホルンの單純なる旋律は、イフィゲニーに神命を督促する希臘軍の號角にして、涙聲に赦免を祈願するオーボエの微かなる不協和絃と相對して悲壯の光景を想ひ浮ばしむ。

原作にありては此曲は終止無くして直ちに歌劇の第一齣に連續す。音樂會に於て序曲のみを演奏するに當てはベルリーンの宮中顧問官なりし音樂家シュミットの附したる終止を用ふ。(此の終止の作者をばモツァルト又はワグネルなりとする説は、筆者の研究に依れば誤謬なり。勿論ワグネルが此歌劇を近世的趣味に適せしめんがために、大なる改作を加へたるは事實なれども、序曲の終止は彼の手に成れるものに非らず)。此終止には前奏に現はれたるアガメムノンの悲調再び響き來る。かくて世にも可憐なる少女イフィゲニーは不幸なる犧牲として神壇に奉献せられ、衆人哀哭の裡に此序曲を終る。

要するに此の序曲は終始を通じて古代希臘的の風致を帶びたる絶佳の作なり。此曲の千七百七十四年四月十九日始めて巴里劇壇に登りし時は、あまりに新形式の點多くして一般の理解を缺きしがため、五回の演奏の後、直ちに以前の傑作オルフェウスの爲めに壓倒せられしと雖も、然かも全體として千七百六十二年以來創作せられたるグルックの三大傑作オルフェウス、アルツェステ、パリス、ウンド、ヘレーナの凡ての美點を網羅したるものといふべく、今日尚ほ古典樂の一大傑作として、樂界に嘆美せらる。終りに望んで一言す、グルックの悲劇イフィゲニーは希臘詩人オイリピデースの同名悲劇よりも、遙かに清き印象を與ふるものなるを。

## 二、管絃樂伴奏附きピアノ

### カプリッショ、ブリヤン(作品第二十二)

メンデルスゾーン作曲

カプリッショ、ブリヤン假りに譯して華美狂想曲といふ。語根より云はばファンタシーア乃ち幻想曲と殆んど同義なり。樂曲の名稱としては何等一定の形式無く極めて急激なる狂想的變化に富める一種の曲を謂ふ。狂想曲は聲樂にもあれども、主として器樂に屬す。歴史的に其淵源を尋ぬれば、十六世紀の後半伊國ナポリの盲目音樂者アントニオ、ヴァレンテの作曲を以て其の嚆矢と爲す可きが如し。

ハンブルクに生れてライプチッヒに逝ける短生涯の樂人フェリックス、メンデルスゾーン、バルトルデイー(Felix Mendelssohn-Bartholdy 1809—47)は、始めウェーバーの感化を蒙りて獨逸ロマンティック派の影響を受け、後バッハ研究によりクラシックの形式樂派として立てる大音樂者にして其生涯と作品とに就ては、普く人の知る所なれば、此處には之を略す。

メンデルスゾーンの管絃樂附ピアノ曲にして、不朽の傑作と稱せらるも

の凡べて五あり。ピアノ司伴樂短ホ調及びニ調、ロンド、セレナーデ併びに此短ロ調カプリッチョ乃ち是れなり。此曲は千八百三十二年の春ロンドンに在りて作曲したるものなるが、千八百四十七年十一月九日ライプツィッヒなる一夜の音樂會に、當時一流の女性洋琴家クラーラ、ウィーク、後のシューマン夫人が、「魔女の如く」巧妙に演奏したる以前迄は、自ら愚作と認め居たるものなりしが其後は彼自身も屢々音樂會にて演奏したることありき。

今此曲を技巧の上より觀察する時は、他の司伴樂と同樣に驚く可く複雜なるものにして、形式樂派としてのメンデルスソーンの特徴は殘りなく發揮せられたり。中頃に現はるゝ長ニ調の輕快なる行進曲的主題は前の短ロ調の激動的主題と絶好の對照を成せり。

## 三、管　絃　樂

### エローイカ、シンフォニー（作品第五十五）

ベートーヴェン作曲

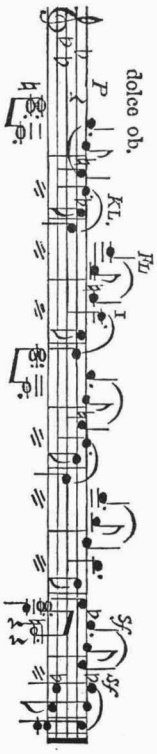
樂聖ベートーヴェン（Ludwig v. Beethoven 1770—1827）の一大傑作エローイカ、シンフォニーは、音樂史家がベートーヴェン時代の開始期とする十九世紀の劈頭千八百四年五月に完成せり。史家の研究に依れば、此樂曲は當時ベートーヴェンが、人類自由の保護者として最大の尊敬を拂ひたる執政官時代のナポレオンの事業を讃美して、そが偉大なる人格を描出し、以て此英雄に奉呈せんが爲めに作曲したるものなり。さればその原稿の表紙には明かに大シムフォニー、ナポレオン、ブォナパルトと書し、遙か下に自己の姓名を認めたり。然るに千八百四年五月十二日ナポレオンが即位の飛報ウィーンに達するや、彼は激怒し「我欲のために人類を犧牲にする暴君！」と叫びて、忽ち机上にありし原稿の表紙を寸斷し、之を床上に投げつけたり。其後新らしき表紙に書き下されたるもの即ち今の表題"Sinfonia Eroica"（英雄的シンフォニー）なりといふ。

由來シンフォニー（協音樂）とは十七世紀の初より漸次に發展し來りたる一種の器樂曲の形式にして其の現今の形式に達したるは十八世紀中葉の事に屬す。其形式は遲速緩急の速度を異にする四部分より成立し、其の第一部は常に快速調（allegro）なりとす。此處に演奏するは此第一曲部のみにして、英雄的シンフォニー中の最美の部分なり。

其始め全曲の序として全管絃樂の打擊最强奏にて二度響き、之に續いて含蓄多き英雄的の第一主題、唯三和音の上に立ちて靜かにセロの音に現はる。

此第一の英雄主題は此第一曲部中に幾度と無く反覆せられ然かも其現はるる毎に轉調し、新音調に於て別種の樂器に響く。之がために英雄生涯の苦戰奮鬪の跡は複雜なる色彩を帶び來る。

又數回響く次の副動機は、英雄が大事業の成功に對する心中の疑念を描出したるものなり。



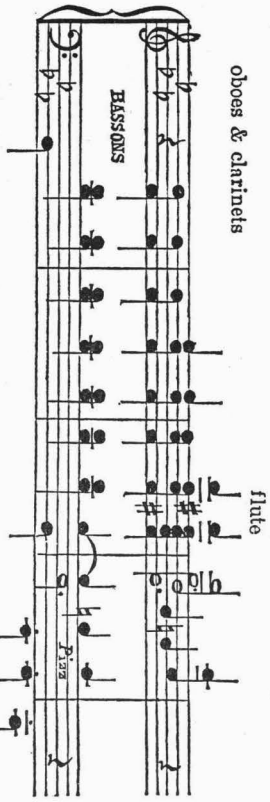

重に木管樂器にて響く此下行的旋律の第一副動機は、其底に眞摯にして偉大なる眞面目を有し、然かも暗澹たる憂愁の氣分を表出す。

されば第一主題と絶美の對照を成し、ために第一主題の英雄的樂想に一層の趣を添ふ。之に續いて次の同音あり。之は英雄心中の疑念の消散して、斷乎たる希望の再現せるを示すものなる可し。

之に續いて全曲中最も痛快且つ奮戰的なる次揭の旋律、第一ヴァイオリンに現はる。此邊は英雄的人格の偉大豪邁なる精神を發表するものにて爽快

極まりなし。

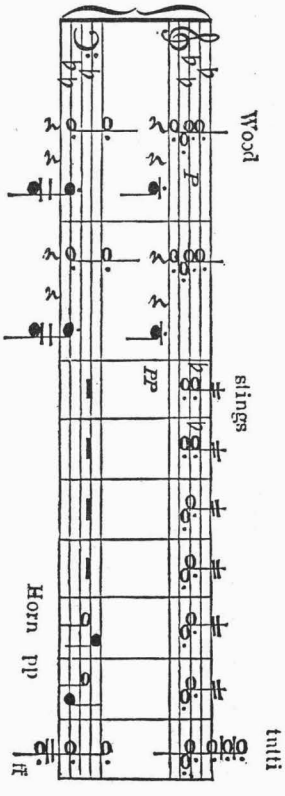
此第二副動機に於て狂亂したるヴァイオリンが、漸次下行し、上屬和絃長ロ調に至りて靜まる時、休息を渴望するが如き穩和なる次の第二の主題初めて木管樂器の上に現はれ來り前述第二副動機と更に好き對照を形成す。




此第二主題の後暫時にして、全曲の第一部を終る。次で此第一部を悉皆反覆して後始めて、開展の部分に入る。

以上叙述したる第一部は、此全曲に現はる可き凡ての主題と動機とを悉皆網羅せるものにして、此處に始まる可き第二の部分は、此主題動機の複雜なる變化より成立す。此部分の結構の壯大なることは外形上の延長より見るも內包的意義の深遠なるより見るも殆んど全世界のシンフオニー中に比肩す可きもの一もなく、ベートーヴェン自身すらも再び斯くの如く規模の絕大なる樂曲を作成することを得ざりしなり。實に此部分は內容の意義に就ていへば奮戰爭鬪其極點に達したる箇處にして、外形より論ずれば或は對位法の驚嘆す可き使用、或は大膽なる不協和絃の應用、或は複雜なる轉回の結合、其他轉置、擴張、短縮、解離、協同、對交、切分音、轉調等あらゆる方法を擺盡したるものといふべし。

此驚く可き開展の部分を終つて、第三の反覆の部分乃ち所謂「反覆」の部分に入る。之れに先ちて注意す可き點は第一、第二の兩ヴァイオリンが屬和絃上の七の和絃の轉回をば最弱奏にて顫はしむる時第二ホルンが徐ろに全曲の冒頭に現はれたる英雄主題を響かす箇處なり。さなきだに英雄の努力、苦戰の後に光彩ある勝利の平和を渴望せる際なればかの不協和絃の響くと共に聽者の全精神は偉大且つ莊重なる第一英雄主題を希求して止まず、是に於てか靜かに進み來るホルンの響に、限り無き歡喜の情を惹起せらるゝなり。




凡そ古來音樂史上に於て、斯の如く巧みに不協和絃を用ひたる者はベートーヴェンの外他に之を求むるを得ず。是は彼が技術の秘訣として、極めて著名なる箇所にして、此大膽なる新機軸の爲に、批評家或は彼を以て苟ろ獨逸ロマンティック樂派の始祖なりと考へたり。

此反覆の部分も當初創作せられし時よりは、遙かに擴張せられたり。此部分は少しの變形を除くの外大體に於て第一部と同樣なり、終に終結の主題が現出し、之と共に激烈なる發展をなして、粲然たる光彩の下に此第一曲部の全部を終る。あらゆる煩悶と奮戰をかさねたる此英雄は、其最後に於て非常なる威嚴と赫々たる偉勳とを以て、彼が大業を成し遂ぐるなり。

要するに此エローイカ、シンフォニーは、ベートーヴェンの形式的技巧の頂點に達したる時の作にして、之を狹くしては彼の作品に、之を廣くしては全世界の音樂史上に、一新期元を劃したるものなり。其拍子の活潑及び壯大、開展部の組織の複雜、音量變化の豐富、音色應用の熟達等實に絕倫非凡の大傑作なり。

## 四、ピアノ獨奏

### 甲、セレナーデ　　シューベルト・リスト作曲

シューベルト（Franz Schubert 1797—1828）は獨逸の最大作曲家の一人なり。殊に唱歌曲併びに純器樂曲の作家としては實に列び無き天才なりき。彼が天才はモツァルトと同樣、其幼時に於て充分に發揮せられぬ。然かも此早熟を以てしても、生涯遂に餘裕ある生活を送るに至らず、職を求めて常に失敗し、纔かに最終の根據たる作曲に依て安心の地を得つゝありき。此點も又モツァルトに類する所少なからずといふべし。彼は其の短生涯の晩年には大抵ウィーンなるベートーヴェンの家より程遠からぬ所に住居したりしが然かも兩者はあまり親密の交情を結ぶに至らざりき。されど臨終のベートーヴェンはシューベルトの唱歌曲を激賞し、次に來る可きはシューベルトの時代なるを豫想して死せりと傳ふ。今や、生前疎交の友は死後永遠の友として、ウィーン府中央墓地に相列びて眠りつゝあり。

シューベルトの樂曲を全體として批評すれば、優美の點に乏しく且稍冗長なるの嫌あり。されど和聲上の豐麗なる一事に至りては優に一流の技倆を有し、此點に關してはシューマンもリストも殆んど全く彼より出でたりと謂ふを得可し。彼が音樂史上の功蹟（ママ）は近世に於ける唱歌曲創立者たるの點に存し、恰もゲーテが文學史上に於ける抒情詩家としての地位に似たり、此れ等唱歌曲の外彼がこまやかなる情緒を發揮せるはピアノ曲にして、メンデルスソーンの無言歌曲及シューマンの幻想曲の源泉を成したるものなり、彼は其生涯嚴格なる對位法と追覆法とを充分に知了する所無かりしが然かも其創作的技倆の優れたることと其短生涯に比して作曲數の多大なることゝは、實に吾人の驚嘆に値す。

リスト（1811—86）は世界最大のピアノ演奏家にして匂牙利に生る。彼も亦早熟の天才にして十二歳の時既に洋琴の技術に於て當時の大家ベートーヴェンを驚かしたりといふ。後巴里に移轉し、此處にショパン、パガニーニ、ベルリオズの感化を受け、二十五歳の時には既に有史以來の最大なるピアノの演奏家と稱せらるゝに至りしが彼はパガニーニの如き技術の達人が其死と共に後世に遺す可き何物をも有せざるに想到して演奏家の生涯の眞に果敢無きを感じ、演奏家としての名聲頂點に達したる時に於て俄かに樂壇より退き、樂界をして此明星を失ひたるに嘆かしめたり。かくてリストは一面作曲に依て永遠に生きんことを計ると共に他面に於て幾多ピアノ演奏家の養成に力を盡しぬ。彼の作曲には幾百の創作あれども、之と共に彼が不朽の功蹟は古來の名曲に改作を加へたる點にあり。此處に奏するセレナーデも其の一にしてシューベルトの歌曲に手を加へて改作し、之をピアノ樂に移したる者則ちトランスクリプシャンに外ならず。

セレナーデとは夜間戸外に奏する一種の樂曲にして、聲樂曲もあれども重に器樂の曲なり。セレナーデには歴史的に一種の形成あり大體に於てソナタ及びシンフォニーに似たれども、之より一層多くの樂句を有し、唯此等よりも輕快幽微の感情に富めり。樂器は以前には吹奏樂器も使用せられしが、後には多く絃樂器のみにて奏せられたり。此處に演奏せらるゝセレナーデも靜夜に於ける戸外音樂の心地を十分に發揮せり。

### 乙、ラ、ヴエロシテ　　ジェー、マティアス作曲

ジュオルジュ、マティアスは千八百二十六年巴里に生れたる有名なるピアノ演奏家にして又作曲者なり。ピアノはショパン其他に就き作曲學はアレビー等に就いて學べり。千八百六十二年巴里音樂學校のピアノの教師と成りしが、後其職を退いて專ら作曲に從事せり。其創作せるものにはピアノ三部合奏曲、管絃樂序曲、シンフォニー、ピアノ司伴樂、ソナタ、合唱曲等あり。ヴェロシテとは急速なる曲の謂にして、彼が作曲の中にても特色あるものとして有名なり。

## 五、管絃樂及び絃樂

### 甲、管絃樂、レ、ゼリニーの一節　　マスネ作曲

マスネ（Jules Massenet）は現代一流の佛國作曲家にして千八百四十二年に生れ現今巴里に住居す。幼時より巴里音樂學校に學び、暫時にして彼が才能は十分に發揮せられたり。彼が成功したる作曲は重に歌劇にして有名なるもの少なからず。マスネの音樂は其形式と表情とに於て特に深刻なる所無しと雖も、器樂的色彩の應用に於て、頗る獨創的趣致に富めり。凡べての點に於て純佛國的にして、艶麗、圓滑なる性質を現はせり。器樂編

成も頗る明亮にして、旋律的要素に豐かなり、又マスネは、或る含蓄に富める思想を一つの樂器を以て發表せしむること屢々あり。他の佛國作曲家と等しく彼も亦た多少の度に於て、ワグネルの影響を蒙りたるが如し、其他奇怪なる不協和絃を時々使用するも、彼の一特色と見るを得。

是等の特色を十分に發揮したるものは即ち彼が三十二歳にして創作したる傑作レ、ゼリニーなりとす。此曲は彼が文豪ドウ、リールの作なる古代悲劇レ、ゼリニーの間奏樂として作れる者にして、此處には其五曲部中の第二部のみを選びて演奏す。エリニーは古希臘神話中の女神、炬火を手にして不義兇惡の徒を追捕し、幽明兩界を通じて一切の有罪者を處罰すと傳ふ。作曲者は其前奏に於て簡短に這般の消息を描出せり。此處に演奏する第二部セーヌ、ルリヂューズは近世管絃樂にて奏する華麗なる祈禱曲にして中に佛國固有の感情を籠めたり。セロ獨奏を含める中部進行（即ち神助祈願の段）は美妙秀拔にして、殊にマスネの音樂を代表するものなり。

### 乙、絃樂、ガヴオット　　ルユリ作曲

ルユリ（Jean B. Lully 1633—87）は古來佛國が有したる最大作曲家の一人にして、伊國フィレンゼに生る。彼は實にワグネル、グルックの歌劇の基礎を創立したる驚く可き天才なり。幼時より樂才に富みしが暫時にして有名なるヴァイオリン演奏者となり、ルイ十四世の宮廷樂人として用ゐられ、間も無く其樂長に登れり。かくて二十一歳以後宮廷作曲家として其技能を揮ひ、以て幾十の驚嘆す可き歌劇を作曲せり。彼が歌劇改革者としての特色は、詩歌のために音樂を或る程度迄犧牲に供せし點にあり。又ルユリの音樂は凡て佛語の如き拍子とアクセントを有す。其序曲とバレット曲とは後世の管絃樂曲に大影響ありし者、唯今日より見て彼が樂曲の稍乾燥したる面影あるは、二百五十年の歳月を經過せるに基因するなる可し。

ガヴォットとは十七世紀の初に於て、佛國に起りたる四拍子又は二分の一拍子の舞踏曲にして、殊に此ルユリ以來一般に好愛せられたるもの、其輕快なる速度と八分音符以下の短音符を有せざることゝは此樂曲の特色なり。

## 六、管絃樂及合唱

### バラツド騎士の娘　　パーカー作曲

ホレーショ、パーカー（Horatio W. Parker）は現代に於ける米國の作曲家にして、千八百六十三年マサチュセッツ州オーバーンデールに生れ、獨逸の作曲家ラインベルゲルに就いて學び、現今紐育市のコランビア大學に於ける音樂科長なり。彼の作曲中オラトリオ「ホーラ、ノヴィッシマ」及び唱歌曲「星の歌」は最も有名にして、米國及び英國に於て廣く知らる。

此處に奏す可きバラドは獨逸十八世紀の詩人シュトールベルヒ伯レオポルドの作に成る叙事詩の英譯に基けり。其主人公の一人たる騎士は往時諸所の戰爭に勳功を建てゝ其英名を轟かしゝが今は幾回の戰爭に兄弟、息子を失ひ、僅かに殘る愛姫一人を無比の寶として暮し居たりしが、此姫は既に久しく勇敢なる一人の若武者と相愛の中に有りしを此處に又老騎士の信を得て末は婿と定められたる若武者ありて終に兩武者の決鬪と成り、姫は敵手の槍に倒るゝ愛人の最後を目擊して失望の餘り絶命すると云ふ筋なり。

音樂は全體として極めて溫和、優美なる佳調を有し、斯くの如き古譚的叙事詩に最も適切なる印象を與ふ。

### I. Overture to "Iphigenie in Aulis."
*Gluck.*

The overture takes us back to ancient Greece, to a time just prior to the war against the Trojans. The King of Greece has offended a goddess. She revenges herself by preventing the Greek warriors from embarking by causing unfavourable winds. Augries are consulted—they predict that only by sacrificing his daughter Iphigenia will the King be able to allay the goddess' anger.

The situation is represented at once. A plaintive subject in the introduction nobly expresses the sorrow and grief of Iphigenia and those about her. Soon a new subject of a demanding, almost rough character makes its appearance, (the actual begin-

ning of the overture)—impatient Greek warriors demanding the sacrifice. The second subject is of quite an idyllic character and gives the necessary contrast. It is evidently intended to remined the listener of the peaceful happiness that has always heretofore enveloped Iphigenia, making her fate seem all the more cruel, but it is soon again and again interrupted by the subject demanding the sacrifice. Effective are certain single notes by the horn, as calling Iphigenia to her duty, together with an almost crying oboe dissonance, praying to be spared.

In its original form, the overture has no separate close, but leads directly into the first act of the opera. To make a concert performance of this masterpiece a possibility, Richard Wagner constructed a fitting close. It finishes with the plaintive subject of the introduction. The overture is pervaded throughout with an antique atmosphere and has, since its appearance, been admired as a great masterpiece of the classical school.

R. R. [=Rudolph Ernest Reuter]

## II. Capriccio Brillant op. 22 for Pianoforte with Orchestral Accompaniment.

*Mendelssohn.*

Of Mendelssohn, his life and works, sufficient has been explained in the last of these program-books. The Cappriccio was written in the early thirties of last century. As its name implies, it is technically an effective composition for the Pianoforte and the true, jovial Mendelssohn is everywhere revealed. A marchlike theme in the middle of the piece in the bright key of D major contracts effectively with the agitated first subject in minor.

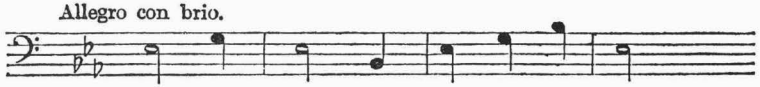
R. R.

## III. Eroica Symphony.

*Beethoven.*

This monumental opus was written during the winter of 1803—1804, Beethoven intending to dedicate it to the great Napoleon, for whose achievements he had the greatest admiration, and who was at that time Consul of France. The original title was in fact: "Sinfonia grande Napoleon Bonaparte." In May, 1804, news of Napoleon's acceptance of the title of Emperor reached Vienna, whereupon Beethoven, in a fury of disappointment for what he regarded as an unpardonable weakness, tore off the title page and dashed it to the ground. Subsequently the work was renamed "Sinfonia Eroica."

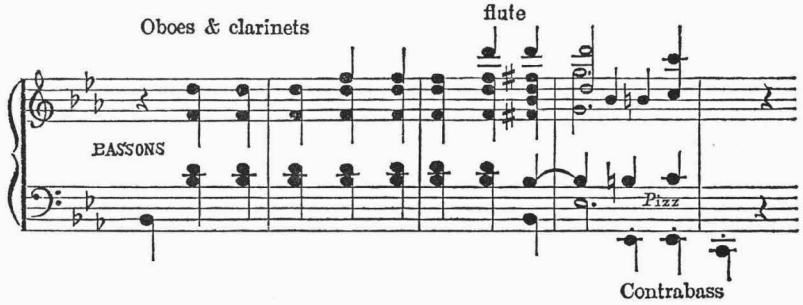
The first movement is a masterpiece of thematic work; the pregnant first motif:




intoned by the 'cellos after but two incisive fortissimo chords as an introduction, and based entirely upon notes of the triad, appears again and again, sometimes only in part always in a new key, or played by a different instrument, investing each repetition in a new surrounding of musical color.

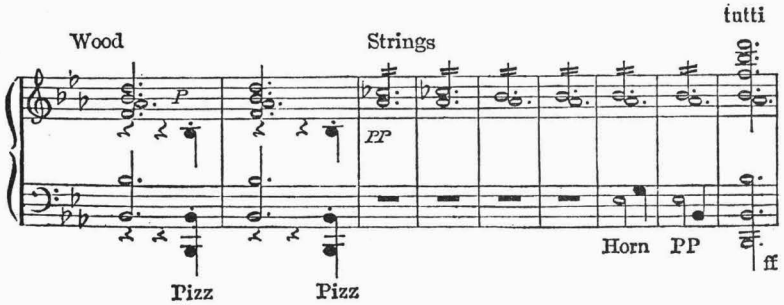
The second theme, in the dominant key, at first intoned in the wood-wind alone, is a longing, yearning phrase of four bars, brought alternately by the string and wood instruments and contrasts markedly with the rhythmical, powerful, clear-cut first motif.

Second theme:



The exposition is a marvel of contrapuntal skill and every effect possible to be gotten out of all themes used in the symphony, their inversions, and in combining two or more of them has been used by Beethoven.

Beethoven should be regarded as the first great Romanticist, for what can be more romantic than the passage occurring shortly before the reprise of this movement:




a dissonance in best sense of the word—but thoroughly justified for does it not intend to show the anxiousness, the eagerness of the first motif, as played by the second horn to once more announce itself, coming in four bars before the time as if not able to wait?

A lengthy Coda brings the movement to a close. It is one of Beethoven's most interesting orchestral pieces.

An innovation for the time of its composition was the use of three horns. Before that, composers including Beethoven had, as a rule, employed but two.

R. R.

〔プログラムIVの英文解説は省略されている。〕

## V.

### a. "Les Erinnyes."

*Massenet.*

Massenet, one of France's leading composers, was born in 1842 and lives in Paris. The music to the tragedy of which de Lisle is the author has five movements and is thoroughly French in spirit. The "Scène religieuse," pervaded throughout by a spiritual atmosphere, contain a beautiful solo for 'cello.

R. R.

### b. Gavotte.

*Lully.*

The first of France's great composers of opera, Jean Baptiste Lully, was born near Florence in 1633. As first a kitchen-boy in the employ of a rich lady, his musical qualities early made their appearance and he was soon playing in the band of King Louis XIV. His ambition and diligence soon brought him to a leading position in musical circles and he is to be reckoned as one of France's greatest composers of all times. He wrote some 20 operas and ballets.

R. R.

## VI.

### Ballad of a Knight and his Daughter.

*Horatio W. Parker.*

The composer is a contemporary musician of America and head of the music department of Columbia University in New York City. His compositions of sacred music have acquired fame throughout America and England.

The ballad is founded on an old German Legend written by Leopold, Graf zu Stolberg, of an old Knight of noble ancestry whose brave deeds upon the field of battle won for him undying fame. Bereft of all his sons and brothers, his beloved daughter remains his only, priceless treasure. She is secretly in love with a brave courageous youth, but there is a rival of whom the old Knight thinks much more. The former reveals his affection for the girl and is challanged by the rival warrior. From her casement window the maiden watches the bitter combat, and as the

one she loves falls to the ground, killed by his opponent's spear, she also sinks to earth in death's embrace.

R. R.

〔批評および関連記事〕

●東京音樂學校演奏會　は秋季音樂會を十一月二十七日二十八日兩日午後二時より開會例によりて盛會を極めたり、曲目次の如し。〔曲目省略〕

（『音樂界』第三巻第一号、明治四十三年一月、六三頁）

**明治四十三年三月二十五日　卒業式**

明治四十三年三月廿五日（金曜日）午後二時

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

第一部

一報告

一卒業證書授與

一校長告辭

一文部大臣祝辭

一卒業生總代謝辭

第二部

一箏　選科修了生（益戸久子長／猿渡マツノ／井上服部喜代）

都の春

一合唱

オルフオイス中第一合唱……グルック作曲

一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　石高テル

アンプロンプテュ……シューベルト作曲

一獨唱　聲樂部卒業生　船橋榮吉

タンホヰゼル中のローマンス……ワーグネル作曲

一オルガン獨奏　甲種師範科卒業生　鈴木ミツ子

ソナータ……ギルマン作曲

一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　鈴木アイ

ソナタ中のフヰナーレ……ベートーヴエン作曲

一ヴアイオリン獨奏　器樂部卒業生　蜂谷龍

コンチエルテイノ……シット作曲

一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　貫名美名彦

カルネヴアルミニオン……シュット作曲

一オルガン獨奏　器樂部卒業生　張福興

パツサカリア……バハ作曲

一ヴイオロンチエロ獨奏　器樂部卒業生　竹内平吉

コンチェルト（第二章及第三章）……ゴルターマン作曲

一合唱

オルフオイス中第卅四合唱……グルック作曲

GRADUATION EXERCISES
OF THE
Tokyo Academy of Music,
UYENO PARK
Friday, March 25th, 1910
2 P. M.

## PROGRAMME.

### PART I.

I. Report.
II. Presentation of Diplomas.
III. Adress to the graduating class by the Director.
IV. Adress by His Excellency Komatsubara, Minister of State for Education.
V. Response by the Representative of the Graduating Class.

### PART II.

I. Koto :
Miyako no Haru.
Misses Chō Masudo, Hisa Saruwatari, Matsuno Inouye, Kiyo Hattori.

II. Chorus :
No. I chor from Orpheus .....*Gluck.*

III. Piano :
Impromptu .....*Schubert.*
Miss Teru Ishitaka.

IV. Bariton Solo :
Romance from Tannhäuser .....*Wagner.*
Mr. Funabashi.

V. Organ :
Sonata .....*Guilmant.*
Miss Mitsu Suzuki.

VI. Piano :
Finale from the Sonata .....*Beethoven.*
Miss Ai Suzuki.

VII. Violin :
Concertino .....*Sitt.*
Miss Riu Hachiya.

VIII. Piano :
Carneval Mignon .....*Schütt.*
Mr. Nukina.

IX. Organ :
Passacaglia .....*Bach.*
Mr. Chō.

X. Violoncello :
Concert[o](2nd and 3rd movement)*Goltermann.*
Mr. Takeuchi

XI. Chorus :
No. 34 Chor from Orpheus .....*Gluck.*

## 演奏會短評

靜陵生

●卒業式演奏（三月二十五日）

◀箏曲（都の春）……（撰科卒業生）…… 盆戸 猿渡 久子 井上 マツノ 服部 キヨ

初めの出は佳かつたが、中程で不揃になつたところがあつた。全體から云へばさう悪い出來と云ふのでもないが、何しろ聲が小さくつて折角の歌詞も薩張り聽き取れない、おまけに合の手から歌に移る所がはつきりしなかつたのは惜しかつた。あれでもう少し聲がよくつて鈴を振るやうな美音で歌ひ出されたならば、聽衆の感興も一層深かつたらうに、あまり四疊半

的の唱ひ方で廣い奏樂堂ではから駄目、都の春の美しい趣は更らに求むるによしがなかつた。

▲合唱（オルフォイス中の合唱）……本校生徒一同

全校生徒總掛り、風琴とピアノの伴奏で中々振つたものだつた。練習の足らなかつた割合によく出來たのは、流石に平生の勉强の賜だらう。もう少し勉めたらどんな好い出來を見るか分らない。

▲ピアノ獨奏（アムプロムプチュー……シューベルト）……

本科卒業生　石高テル

初めは少し駈け出すやうな氣味だつたが、チスモールになつてからはだんゞ落ちついて彈き方が綺麗になつた。アスドゥアになつてメロヂーを左の手で彈いてる間に少しコードを間違へたのは初めての舞臺であつたからだらう。今後の御勉强を祈る。

▲獨唱（歌劇タンホイザー中のローマンス）……船橋榮吉

素敵に澁い曲だから素人受けはしなかつたかもしらんが、中々佳く歌はれた。初めのレシタチヴのところなんかは佳かつたが、伴奏がトレモロになつてから、少し上り氣味だつた。ゲードゥアの六拍子の所になつてからはよく整つたが、終りに又上り氣味になつたのは殘念だつた。

▲ピアノ獨奏（ソナタ……ベートーヴェン）……

本科卒業生　鈴木あい

此曲はモチーフが十六分音符より成つて居り、速度記號も可なり早く彈くやうになつて居るのに、演奏者も暗奏しなくてはならないのだから、時時胴忘（ママ）れして支へた所があつたが、兎に角少しも憶せず終り迄彈じ了つたのは其勇氣を多とせざるを得ない。

▲ヴァイオリン獨奏（コンセルチノ……シット）……

本科卒業生　蜂谷龍

初めのアンダンテの進行のところは少し調子が狂い氣味になつたのは惜しかつた。尤も絃樂器の演奏中に絃が緩むと中々氣の揉めるものだ、此點は深くお察し申す。お仕舞ひにアレグロになつてエードゥーアに轉調してからスピカトと最後のテクニックは實に素晴らしいものだつた。まだうら若い女流ヴァイオリストがテクニツク物を彈くのを聽くのを得たのはこれが初めてだ。

▲ピアノ獨奏（カーナバル……ミニオン）……

本科卒業生　貫名美名彦

第一のゲーモールのパートは中々佳い出來だつたが、慾を云へばもう少し勢をつけて欲しかつた。第二のエスドゥアのパートは第一のテマと第二のテマとが一所になつて來る難曲だが綺麗に彈かれた。第三のエスモールのパートは日本的のメロヂーで、且靜かなものだから、もう少し表情をつけて貰ひたかつた樣に思ふ。第四のアスドゥアのパートはエードゥアに轉調して一寸間違ひらしいところがあつたが中々面白く聞かれた。

▲オルガン獨奏（パッサカリア……バッハ）……

本科卒業生　張福興

始めのバスの部分のソローを彈く時は、少し物足りない感じがあつた、それから途中で少し拍子が崩れかゝつた所があつたが終りは中々立派の出來だつた、パッツサカリアはバッハの傑作中で有名な難曲の一つであるのに、兎も角もあれ迄に彈かれた技倆は流石に感心せざるを得ない。

（『音樂』學友會、第一巻第四号、明治四十三年五月、二六～二七頁）

## 明治四十三年四月二十一日～二十六日　学友会演奏旅行（男子部）

### 修學旅行記

男子部

四月二十一日（東京――靜岡）

我學友會員五十有餘名は、京阪地方へ修學旅行をなすべく旅裝を整へて、四月廿一日午前六時十五分の汽車に乘つて新橋を出發した。之より以前、旅行の報、京阪に傳はるや、其途次演奏會を申込み來る團體が多かつたので、一は趣味普及の爲め、一は吾々の修養の爲め、我修學旅行團の目的に副うて居るからして、其凡てを快諾した。

汽車は矢のやうに西へ〳〵と走つて、箱根の峠にかゝつた。足駄掛

で棧道を踏破した、往時の武士を偲び、白雪を戴ける富嶽、青松白砂の興津の海岸、絶景の賞翫は誰に憚もない。汽車は靜岡に着いた。プラットホームには、有志諸君が出迎へて居られる。我一行は宿に着くや否や、旅裝をその儘に、演奏會場なるメソヂスト教會に行つた。珍らしい宏大な教會で、聽衆は既に立錐の餘地も無い位に詰込んで、開會を待つて居る。重に婦人及女學生である。會は豫定の順序に依つて三時に開かれた。何れも拍手の中に進行して五時閉會した。七時よりは二回目で之は重に男子の爲である。演奏曲目は一回と殆ど大差はない。午後の九時に開〔閉〕會した。聽衆は二回合計千八百餘名で、我一行の初陣はしかく成功した。少くも當初の目的の九分は達せられたを信ずるのである。

時間の許す限りは晝となく夜となく、三々伍々市内の名所を見物した。名產山葵漬の看板のすばらしく大きいのには一驚した。然も本物の山葵は小さくして、食へばピリ〳〵然たる辛味がある。吾人も斯くありたいと思つた。（Z、A）

二十二日（靜岡——名古屋）

昨夜から氣づかはれた空が、夜明け方に眼を醒ますと遂々雨になつて居た。亞鉛の廂を打つ音が春の雨とは思はれない程に凄まじい。今日は名古屋へ向はうといふに何といふ慘めなことだ。

眞似巧者の杉山は、今朝も床の中に居る中から、昨日の汽車中の物賣りの眞似をして皆を笑はす。その騷ぎに眼をさまして起き上つたHの不機嫌さうな顏！

薄暗い光線の中で手早く朝飯を濟して、細い雨の中を一と走りすると停車場だ。昨日からいろ〳〵お世話下つた内藤氏平林氏等の御見送りを受けて、七時五十幾分の下り列車で靜岡を立つ。

熱田で汽車を下りると、そこに愛知師範の〔ママ〕氏外二三の方が出迎へて下さる。順路熱田神宮に詣で、海際の某といふ所で晝飯をすまして、愛知師範の二時からの演奏會に向ふ。

演奏は『春のたそがれ』に始まつて皆で八つ。最終の合唱で男聲三部が幾尾君のタクトにパツト終ると、始終感嘆措く能はずといふ體に聽いて居られた同校の校長が徐ろに立ち上つて、同校の生徒へ『諸子の感想や如何に!!』

雨の中に五十幾臺の車を連ねて、定められた伏見町の旅宿へ歸る。夜の演奏は七時からだ。夕飯もそこ〳〵にそれへ向ふ。

會場は町の東陽舘といふので入口に綠門が裝置へてあつた。純日本式の建物で、雨上りの露に植込みの若葉のキラ〳〵光る大庭を一ぱいに押し明けて、高いステーヂの前には御廉が下がつて居た。聽衆は矢張り學生が多い。曲目に多少の變動のあつた外は凡て豫定の通りに進行することが出來て壁際に並んだ五六人の西洋人が、一曲毎に何事か囁き合つては喜んで居るのが見えた。

九時間際に會が終ると、その後は各自の自由行動だ。義理でも共進會を見なきやならぬのだが、疲れたので失敬してHとOと三人、とある横町の可なりな鰻屋に轉げ込む。瞼のはれぼつたい、背のチンチクリンな、首の白い女が何やら分らないお世辭を並べて誂らへもせぬものまで運んだ。（S、N）

二十三日（名古屋——京都）

昨日の雨天に引きかへて今日は拭つた樣な空模樣。

朝名古屋を立つて京都に向ふ。五時間に餘る汽車の中が、さまで退屈でなかつたのは、途中に琵琶湖や近江八景のあつた所爲かも知れぬ。京都に着いたのは午後の一時。直ぐに電車で會場へ向ふ。會場は府立の第一女學校で聽衆はもう堂に充ちて居た。こゝでも曲目に多少の變動があつたけれども、豫期しただけの結果を納めることが出來て最終に廣島へ出張の途次神戸先生と共に立ち寄られたペツオルド先生のピアノの獨奏及獨唱等が二三あつて午後五時滿足の中に會を閉ぢた。

宿は三條通りの伏見屋といつた。そこで夕飯を濟した後の五六時間より外京都を見物する時間といふのは無いのだ。同志社中學のI君といふ人に案内して貰つて、漸とのことで丸山公園と岡崎公園と新京極の賑ひと、それだけ見て、疲れ切つて眠つた。都踊りといふのを見なかつたのは殘念至極だ。（S、N）

二十四日（京都――大阪――神戸）

我一行は昨日の疲勞も省る暇もなく、京都市立高等女學校の懇望により、豫定以外の演奏會を同校の講堂に開催した。場内の裝飾及歡待は至れり盡せりである。生徒及父兄に依つて場は滿されて居る。只汽車の都合上、充分に演奏をすることが出來なかつたのは雙方の遺憾とする所である。終了後同校職員諸氏及生徒諸君に送られたる花籠を擁して、十時四十分大阪に出發した。

菜の花千里、實に見渡す限り畿内の平野はそれである。十二時大阪に着いた。正一時中之島公會堂に再演奏會を開催した。大阪在住の卒業生及有志家諸君の奔走に依つて豫定以上の盛況を呈した。さしも廣き公會堂は八分聽衆に依つて埋められた。大半は學生である。曲目順序は演奏者の都合に依つて少しく變更した。何れも自畫自讃ではあるが喝采場裡に終つた。大阪朝日の評には合唱を賞めて居た。全く地方に居ては多數の人の合唱は珍らしいのであらう。閉會後各自天滿宮に行くもの、道頓堀に走るもの、杜蠣船に這入るもの、短時間の活動は花々しく且興味がある。氣早のものは神戸に先發したものもある。

四時五十五分の汽車で神戸に向つた。雲は低く垂れて空模樣は怪しくなつて來た。間もなく雨は車窓を打つた。薄暮神戸に着いた。荷物を宿に預けた儘、演奏會場なる湊川小學校に行つた。三度此處に演奏會を開催するのである。聽衆は一行を待飽きて居た。曲目に變更を加へ、漸く八時開會した。熱誠なる聽者は雨を冒して、一行の演奏を聞かんとして參會した。而して有志諸君は種々斡旋の勞を取られた。一行は感謝の意を表して、しかも一日三回目の、しかも長途の旅行の疲勞を意とせず、曲目順序に從つて演奏した。合唱、オルガン獨奏、ヴァイオリン獨奏、絃樂二部……といふ風に進み進んで、神戸灣頭の汽船の燈火が雨に濡れて、眠さうに光つて居る十時過ぎ喝采場裡に閉會した。

我一行此日の奮闘は實に目覺しき限りで、かゝる意氣あつて然る後に、我樂曲の大成も近き將來にあるであらうと自分で感心しながら、靜に湊川神社に身の冥福を祈つた。夜は寂として只雨の蕭々たるのみである。（Z、A）

二十五日（神戸――奈良）

雨はまだ晴れない。

朝九時の汽車で奈良へ向ふ。此の時間がジツと二時間。此日雨ではあり、それに演奏會を控えてのことだから、今日は見物もおちく出來ない。

演奏會は晝夜二回で、晝は當縣及當市の教育會と奈良四新聞社との主催で一般公衆のために当市の公會堂で、夜は女子師範學校のために當校の講堂で開かれた。ともに設備もよく行き届いて、連日來の疲勞の割合には演奏も充分にすることが出來た。會の後で會場の善惡と演奏者の責任の感じ方といふやうな話が吾れくの間に起つた。

この演奏會が濟んでやつと吾々の自由な體になつた。明日は春日の森も猿澤の池も興福寺の塔も見られる。と思ふとそゞろに心が勇む。幸ひ雨もすつかり晴れた。（S、N）

（『音樂』學友會、第一巻第四号、明治四十三年四月、三五～三六頁）

## ●靜岡教會の大音樂會

東京音樂學校學友會の秀才五十餘名の一行は名古屋に於て一大音樂會を開催すべく仝地に赴く途中來る三十一日靜岡市追手町（おほてまち）靜岡教會に於て晝夜二回に分ちて大音樂會を開く由にて入場料は特等五十錢普通二十錢と定め入場切符は昨日より賣り出されたり演奏曲目は左の如し

▲第壹回（午後二時半開會）

合唱巡禮　クロイツエル作曲（小松耕輔作歌）ピアノ獨彈アムプロムプチユ（服部駟郎次）ヴアヰオリン獨奏ベルソース（杉山長谷夫）オルガン獨奏フーグ（伊達愛）ヴアヰオリンピアノ合奏ソナタ（川

上淳、萩原英一）四部合唱甲フリユーリングスグルツス乙リツテルスアプシード（船橋榮吉、大和田愛羅、清水金太郎、古川博道）セロ獨奏ローマンス（林顯藏）獨唱デイ、バイデン、グレナデイル（大和田愛羅）弦樂四部セレナーデ（川上淳、杉山長谷夫、多基永、竹内平吉）合唱花

▲第貳回（午後七時開會）

合唱巡禮　ピアノ獨彈カーナブル、ミニオン（貫名美名彦）ブアヰ〔ママ〕オリン獨奏アヴエマリア（中川雄二）オルガン獨奏、パルテイタ（園山民平）ピアノ、ブアヰオリン、セロ三部合奏トリオ（萩原英一、川上淳、竹内平吉）四部合唱甲フリユーリングスグルツス、乙リツテルスアプシード（船橋榮吉、大和田愛羅、清水金太郎、古川博道）セロ獨奏コンセルト（竹内平吉）獨唱アルマツハト（清水金太郎）弦樂四部セレナーデ（川上淳、杉山長谷夫、多基永、林顯藏）合唱浦のあけくれ

（『靜岡民友新聞』明治四十三年四月十九日）

●氣持のよい音樂會　昨日の午后三時から市内追手町メソヂスト教會に開かれた東京音樂學校學生の大音樂會を聞きに行つた、會場は市中の婦人連音樂家、ハイカラな高女、ヂミな英和精華女學校生徒及び學生有志等の入場者で滿たされてゐる、先づ豊嶋君の開會の辞で學生四十餘名が壇上に現はれクロイツエル作の合唱を始める、合唱は獨唱と違つて素人耳には一寸聞きぐるしいが音量の大なると力があるとコンパスの廣ひのとは聽者を喜ばしめた二回目の服部氏のシユーベルト作ベルソース、ピアノ獨奏は極て明確だつたが稍艶が乏しかつた三回目川上萩原兩氏のヴアヰオリン、ピアノ合奏ソナタはよく調和して諧ふが如く進行したあたりは非常に快感を與へて大喝采であつた、記者は中途に都合があつて會場を出たので全般の概評は出來ぬが音樂の趣味は之に依つて多數の人の頭を惹きつけたらしい、會場内は上流の婦人連が多かつたかバイオレツトの香が非常に高かつた。（はる）

（『靜岡民友新聞』明治四十三年四月二十二日）

●音樂會の大合唱　來る廿二日前津東陽館に於て東京音樂學校校友會一行は大演奏會を催すことは既報の如くなるが五十人以上の日本語の大合唱は未だ嘗て他の音樂會に於て見ざるところにして獨り音樂學校特有の技とも言ふべく昨今續々入會者を見る有樣なれば定めし當日は意外の盛況を見るなるべし

（『名古屋新聞』明治四十三年四月二十一日）

●本日の音樂大會　愈よ本日午後七時より前津東陽館に於て催さるゝ東京音樂學校大音樂會の演奏曲目は左の如し

演奏曲目

△第一部

一合唱　巡禮　クロイツエル作曲　小松耕輔作歌　會員一同

二ヴアイオリン獨奏　アフード作　杉山長谷夫君

ベルソース

三ピヤノ獨奏　シユベルト作　服部駟郎次君

アムプロムプチユ

四四部合唱　船橋榮吉君　清水金太郎君　大和田愛羅君　古川博道君

甲、フリユーリングス、グルツス　シユーマン作

乙、リツテルス、アプシード　キンケル作

五セロ獨奏　ゴルターマン作　林顯藏君
ローマンス
六合唱　花　瀧廉太郎作曲　武島又次郎作歌　會員一同
△第二部
七ヴァイオリン、ピヤノ二部合奏　ベートーヴエン作　川上淳君　萩原英一君
フリユーリングス、ソナタ
八オルガン獨奏　レーメンス作　伊達愛君
〔凱旋〕進行曲
九獨唱リンデンバウム　シューベルト作　船橋榮吉君
十ピヤノ獨奏　カーナヴアル　ミニオン　シユット作　貫名美名彦君
十一絃樂四部　セレナーデ　モツアルト作
川上淳君、杉山長谷夫君、多基永君、竹内平吉君
十二合唱　浦のあけくれ　マツウシキ作曲　吉丸一昌作歌　會員一同

（『名古屋新聞』明治四十三年四月二十二日）

**明治四十三年五月二十八日、二十九日　第二十二回定期演奏会**

明治四十三年五月二十九日（日曜日）午後二時開會

音樂演奏曲目　東京音樂學校

一　管絃樂
ブレリユード及フーグ……〔バーハ　アーベル作　ルト編〕曲
二　管絃樂付きピアノ
コンセルト（第五長變ホ調）……ベートーヴエン作曲　教師　ペツツオルド夫人
三　管絃樂
シンフオニー（第三短イ調）……メンデルソーン作曲
四　獨唱　教師　ペツツオルド夫人
甲　デル　シユヴワーン　……シエルデループ作曲
乙　フオア　リーフ　クローヴアス……ロイテル作曲
丙　ローゼンリード……ユンケル作曲
五　獨唱合唱及管絃樂
歌劇「ローレライ」……〔メンデルソーン作曲　吉丸一昌譯歌〕　獨唱　ペツツオルド夫人

Orchestral and Choral Concert
OF THE
Tokyo Academy of Music
UYENO PARK
*Sunday, May 29th, 1910*
AT 2 P.M.

PROGRAM

1. Prelude and Fugue ……*Bach.*
Arranged for Orchestra by J. Abert.
2. Concerto for Piano, No. 5 in E flat major…*Beethoven.*
with Orchestral Accompaniment.

MRS. PETZOLD.

3. Symphony, No. 3 in A minor (Scotch)...*Mendelssohn.*
4. Songs for Soprano.
   *a.* Der Schwan .....*G. Schjelderup.*
   *b.* Four-leaf Clovers .....*R. Reuter.*
   *c.* Rosenlied .....*A. Junker.*

MRS. PETZOLD.

5. „Loreley" Finale for Soprano Solo, Chorus and Orchestra .....*Mendelssohn.*

Soprano Solo: MRS. PETZOLD.

*Conductor: A. Junker.*

## 音樂演奏會曲目梗概　第十一

### 一、管　絃　樂

#### プレリュード及びフューグ　　バーベルト　ハ　作　アーベルト　編

近世樂の基を開ける樂聖バッハ (Joh. Seb. Bach 1685—1750) の作品は約二世紀を經過したる今日に於て尙ほ樂家が研究の好材料となれり。彼の作を學ぶ者、其の研究を重ぬるに從て愈々妙味の深きを感ぜざる者あらず以て彼の眞價を知るに足るべし。彼の遺作の秀逸なる者には聲樂に於て大カンタータ、受難樂、短「ロ」調祈禱曲の如き宗教樂あり。器樂に於てはオルガン樂最も重要なりと雖、ヴァイオリン樂に於けるソナタ六篇、ピアノ樂に於ける平均率クラヴィコルド曲集及びスキトの如き何れも現時の技術研究者が熟練の基礎と爲す者なり。

茲に奏する二曲の中前のプレリュードといふは『前奏曲』の義にして次のフューグ曲の前彈きに過ぎずフューグは最も嚴密なる作法に從へる樂曲にして所謂模倣式作法の最高發達を示せる曲體なり。其の形式の要は曲頭に於て一音部の呈出する主樂想が或る規定に從ひて順次に他の諸音部に移遷するに在りとす。此の曲體はバッハ、ヘンデルの兩家に至りて完成せられたる者、殊にバッハの者は空前絕後の傑作として萬人の等しく嘆賞する所なり。凡そフューグ曲に於ては唯一の主樂想が交々諸音部に表はれ、全曲の殆ど五分の四を占むるが故に、其の曲動もすれば單調に流るゝの弊を免れず。此の單一なる特性に配するに複雜を以てし、能く變化の妙を極めたる者はバッハの作にして實に彼が樂才の非凡なるを證する者なり。此の外、彼が技巧上の要素にして近代の趣味に投合する者凡そ二あり。一は旋法に於ける半音階及び四分音階の用法の妙を得たる事にして他は節奏の變化の巧みなる事是なり。彼の作には長き樂章を通じて確固不變なる拍子の存するのみならず之れと同時に無限なる節奏の變化を含めり而して附隨的音部は對照的節奏を具ふるが爲めに能く其の箇性を保てり。

編者アーベルト (Joh. Joseph Abert) は一八三二年九月ボヘミアに生る。プラーグ市高等音樂院に學び五十二年スツットガルト宮廷樂司のコントラバッス奏者となりしが一八六七年同宮廷の樂長となり、八八年以來引續き同市に住せり。其の作品にはシムフォニー、オペラ、オーヴァーチュア、クワルテット、ソナタなどあり中には好評を博せる者あり。

此に奏する二曲中プレリュードは平均率クラヴィコルド曲集より撰びたる者にして集中の最も優美沈靜なる者原作は嬰「ハ」短調なるを編者は「ニ」短調に改めたり。曲は次の曲節を以て起る。

フューグは短ト調の大オルガン、フューグにして强大雄健の樂趣を具へたる者、實に前奏曲と絕好の對照を成せり。其の主樂想次の如し

編者が此の出處を異にせる二曲を合併したるは恐らく此に基くならんか。本曲は其の出現以來廣く樂壇に知られて至る處に演奏せらる。

## 二、管絃樂付きピアノ

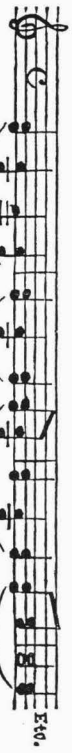
コンセルト、第五（變ホ長調）　ベートーヴェン

本曲は俗に帝王コンセルトと稱す。本曲が其の莊麗なる點に於て此の曲體に屬する他の諸作を壓倒する事實より觀れば此の俗稱も亦故ありと謂ふべし。一八〇九年の作に係り同一一年初めてライプチッヒに演奏せられたりと傳ふ。然れ共初めて作家自身の指揮の下に演奏せられたるは一二年二月ヴィーン市なる慈善音樂會の際にして作者の高弟なるピアノの名人ツェルニー之れを演奏せり。

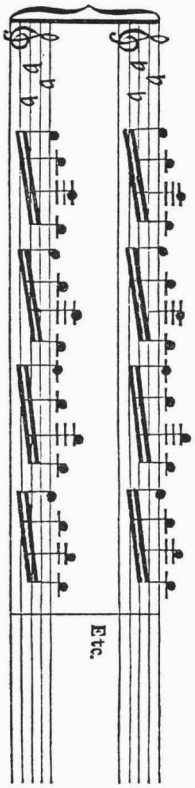
本曲に於て作者は前例なき新機軸を出したり。即ち此の曲體に於けるピアノ部と管絃部とを對等の位置に置きたる一事にして曲頭の數節は既に之れを明示せり。兩部は初めより單獨なる事なく兩々相携えて前奏部を形成せり。前奏部を終るの後初曲部の第一主想は充實せる管絃樂樣式に於て表顯せらる。

此の曲部の終局に近く表はるゝ伴奏附きの終節（カデンツ）は此の以前の諸作に見る如く演奏者の即興作に放任することなし是れ亦た本曲に於て斬新の點なりとす。

此の曲部の進行中第二の主樂想は二箇のホルンに現はれて沈靜溫雅の美を具ふ。




本曲に就て尙ほ特筆すべき一事は本曲のピアノ部が同作家の以前のピアノ曲に比して一層高き音を用ひることなり。是れ以前の諸作は樂器の不完全なる制限せられて上四點「ハ」音以上の音を用ふこと能はざりしも本曲創作の當時より改良せる樂器を得て最高の「ヘ」音までを用ひ得るに至りたればなり。本曲に於て屢々高音を用ひたるは實に此の故にして、時に作家は以前の諸家が到達し得ざりし樂音の新世界に逍遙して飽くまで其の美を樂みつゝあるが如き觀あり。第一曲部の終局部に於て殊に然りとす。




## 三、管絃樂

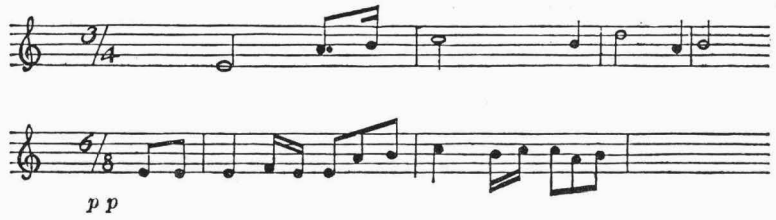
シムフォニー第三（イ短調）　メンデルソーン

メンデルソーン（Felix Mendelssohn-Bartholdy 1809—1847）は獨逸ハムブルクの人幼にして神童の聞えあり。十五歳の時短ハ調シムフォニーの作曲に其の天才を表はしてより以來、音樂の有らゆる部門に創作して夥多の作品を出せり。聲樂に於ける神事樂『エリアス』及び『パウルス』の二者は彼が不朽の名作なるが、器樂に於ても佳作少からず。彼の樂は旋律の艶美和聲の豐麗、樂器法の巧妙等の長所によりて一時はベートーヴェンの匹儔なりとさへ考へられしことありき。ゲワントハウスオーケストラの指揮者たりし得意時代に於て殊に然りとす。然れども之れに次ぐ反動の時代に於て樂界は著しく彼れを輕視するに至り、現代に於ても尙ほ彼を最大樂家中に列せざる者あり。然れども彼は要するに稀有の天才たるを失はず。年經るに從ひて其の眞價は再び認めらるゝに至るべきか。

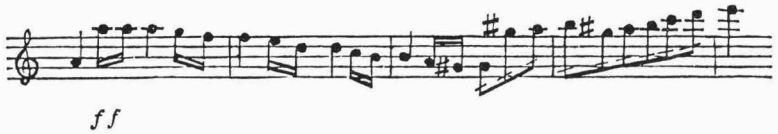
玆に奏する曲は一名蘇格蘭シムフォニーと稱せらるゝ者にして一八二九年其の創作に着手したりしが完成せるは一八四二年なり。こは若年蘇國漫遊の際に得たる樂想を基として作れる者にして其の主樂想中には同國民謠を其の儘用ひたりと察せらるゝ者あり。就中スケルツオ曲部の主想の如きは有名なる蘇國の歌調を取りて短調より長調に移したる者なり。

第一曲部は端嚴なる序節を終る後、八分ノ六拍子の激動せる快活調に入る。其の主要なるモティーフは序節の初めの數小節と幾分の關係を有せ

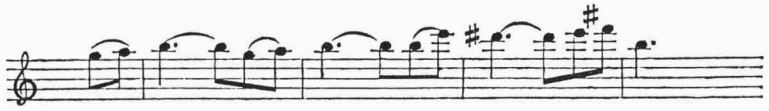
り。




茲に旋律は下八度に於てクラリネットの美音に重複せられ艶美を極む。されど曲部は暫くして最弱奏中庸速度より最強奏の活躍調に移り強大なる新しきモティーフ起る。然るに頓て第一のモティーフは再び現はれて此の度は新たなる一旋律の伴奏的聚成音の如き觀を呈す。



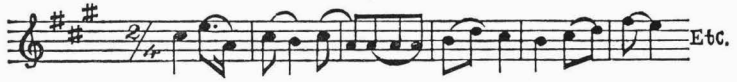

第二の主樂想は



附節を須ひずして第一部分の終局に連る。

第一曲部の第二の部分なる所謂「開展」は折々微音奏を交ふれども重に激動的情調を表はせる者にして、全部を通じて圓熟の技巧を示せり。此の部分中、第一主樂想の歸來するに際し、セロが自己の旋律を表はし、第一ヴァイオリンと二部を形成する箇所は最も感興深し。第一部分に附節無き代りに此の曲部の終局に於ける附節は突進的最強奏に昂上し、然る後最弱奏に鎮靜して終に曲部の初めに聞きたる小節に復歸す。

第二曲部の緩徐調は短かき序節の後、次の美妙なる旋律第一ヴァイオリンに表はる。




此の旋律と好個の對照を爲すものは暫時の後表はれ來る葬送進行曲に類する旋律にして全曲部の骨子をなせり。本曲は比較的小の管絃を以て組成せられたれども能く管絃樂の色彩を表はしたる點に於て模範となすに足る。

四、獨　　唱

五、管　絃　樂

歌劇『ローレライ』第一幕終曲　　メンデルソーン

〔明治四十二年六月十一日、十三日の「音樂演奏曲目梗概」を參照〕

## I. Prelude and Fugue.

*Bach-Abert.*

Bach is the cornerstone of modern music. Living two centuries ago, (1685 to 1750), leading the modest life of the hard-working German musician, writing to please his own sense of the musically possible and desirable, he nevertheless wrought in such master wisdom that the more his works are explored and the more we hear them, the more their beauty and inspiring musical quality appeals to us. Bach proved himself the master in three entirely distinct schools of technical development: by his six great sonatas for violin solo; by his eight volumes of organ pieces in every style, and by his Well-Tempered Clavichord and a multitude of suites and other pieces for the pianoforte. The virtuoso student of to-day in these three departments makes Bach the foundation of his mastership. But Bach went much further, and in his church cantatas and Passions and in his great Mass in B minor, wrote also remarkable things for choral music, wherein only the great Händel can be placed by his side.

The great distinction of Bach is his treatment of musical themes—the consummate *variety* which he manages to combine with the *unity* inevitable to the fugue form, where a single subject forms about four-fifths of the subject matter. While Schumann and his followers occasionally afford a wider range of contrasts in the course of any serious extended musical discourse, they accomplish this by great changes of key and the introduction of radically differing new matter.

Two technical elements in Bach lie very near to the source of his modern acceptability. They are his knack of the chromatic and the enharmonic in the tonal mode, and his *rhythm*. With Bach it is not alone the steady sweep of his measure through long extended periods, but the endless variety and fancy with which he contrasts the rhythmic development within the measure and period and the individuality he contrives to impart to his secondary voices by means of contrasting rhythms.

*Johann Joseph Abert* (born 1832) is a Bohemian musician educated at the Prague Conservatory. In 1852 he was contrabassist in the Stuttgart court orchestra and became director in 1867 where he remained until 1888. He has been quite a productive composer, his works embracing symphonies, several operas, overtures, quartets, songs, etc.

The Bach number on the program consists of a prelude from the Well-Tempered Clavier and the great Organ-Fugue in G minor. In all the Well-Tempered Clavier there is no other so graceful and meditative number as the prelude in C sharp minor (transposed by Abert into D minor.) It opens—

A more complete contrast to the strongly-marked fugue could not have been chosen; this was probably Abert's reason for combining two pieces from sources so remote. The main subject of the fugue is here given:

Ever since the piece was first produced it has been very popular, as proven by its frequent appearances on the programs of orchestras all over the world—

R. R. [=Rudolph Ernest Reuter]

## II. Concerto for Piano no. 5, in E flat.

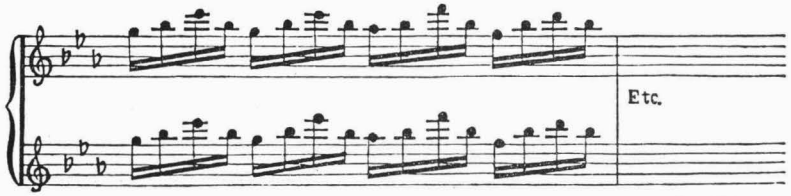
*Beethoven.*

The sobriquet "Emperor" which has been given Beethoven's *Fifth Piano Concerto* is well conceived, for one would look in vain in musical literature for a composition in this form which must not be accorded a second place in its presence. It was composed in 1809, just a century ago. A performance of it is stated to have taken place in Leipzig in 1811, but in Vienna it was played for the first time under Beethoven's personal direction by Czerny, the composer's pupil, at a concert given for the benefit of a charity in February, 1812.

In this concerto Beethoven introduced features absolutely new and unprecedented. The very opening measures designate it as a composition for the piano *and* the orchestra, a symphonic composition in which both these factors are of equal importance. Neither begins alone but both launch out into a prelude together after which the first subject of the opening movement is proclaimed in massive orchestral style. Another departure from the customary is to be found in the accompanied cadenza near the end of the movement. It is not left to the performer to improvise one, as had invariably been the case heretofore.

A secondary subject occuring during the course of the movement attracts by its quiet beauty. It is intoned by two horns:

Wheras Beethoven formerly had to confine himself to writing within the limits of the upper $c^1$, his piano not extending above that note, he was now able to write up to the highest *f* on his newly acquired instrument, and in the present concerto made very much use of the high notes thus placed at his disposal. It would seem at times as through he were revelling in the beauties of a new region of tone which none before him were able to do. At the end of the first movement this is most prominent:



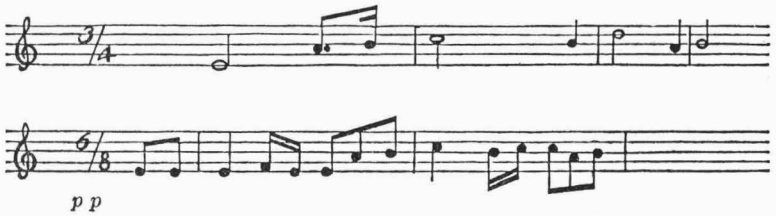

R. R.

## III. Symphony no. 3 (A minor)

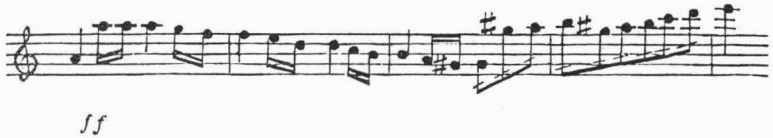
*Mendelssohn.*

This symphony, known as the Scotch, begun in 1829, but not finished until 1842, the date on the score, owes its origin to musical "impressions de voyage," jotted down while on a tour through Scotland which the composer made in his youth. Some of the themes were no doubt made use of exactly as Mendelssohn must have heard them from the months of the country folk, and the theme of the Scherzo is a well-known Scotch tune, changed from minor to major.

The first movement begins with a broad introduction of severe character, upon which follows an *Allegro un poco agitato* in $\frac{6}{8}$ time, the main motif of which bears a certain relation to the first bars of the introduction:

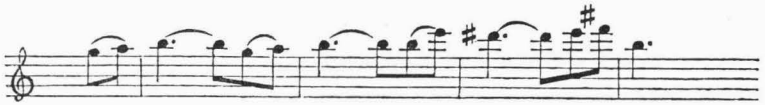



A charming effect is produced here by the doubling of the melody in the lower octave by the low, mellow tones of the clarinet, but soon the movement grows from a pianissimo and moderate tempo to a fortissimo and an *assai animato*. A new, powerful subject appears:




which, however soon makes way for the reappearance of the first motif, though now the latter comes with a superimposed, new melody, and is hardly anything more than an accompanying figure.

The second theme:



bare of any independent coda leads to the close of the first part.

The working-out, mostly in an *agitato* mood, though oftimes *sotto voce*, shows everywhere the hand of the master. An effective moment is when at the return of the first theme, the cellos give out a new melody of their own, forming a duet with the

first violins. The first part has no Coda; Mendelssohn is therefore all the more liberal at the end of the movement, this Coda working up to a rushing fortissimo and afterward subsiding to piano as it goes back to the bars which we have heard at the beginning of the movement.

The Adagio, after a short introduction, brings the following beautiful melody intoned by all of the first violins:

As a contrast thereto a funeral-march-like motif is afterwards introduced, and of this material the movement is effectually built up.

The Symphony is a model of orchestral coloring accomplished with but a comparatively small orchestras. Mendelssohn's complete mastery of the form, the ease with which he could invent beautiful melodies, his excellent orchestration and effective harmonies, caused him to be ranked by many, particularly during his highly successful career as conductor of the Gewandhaus Orchestra, (1835 to 1843) as a rival to the great Beethoven himself. This was followed by a period of reaction, which still has firm grip on the musical world of to-day, and Mendelssohn does not now receive the homage due him, though as time goes on it is to be hoped that he will gain his right place: *a high one among the greatest of them.*

R. R.

V. Finale from the unfinished opera
"Loreley."
*F. Mendelssohn.*

〔明治四十二年六月十二日、十三日の「音樂演奏曲目便概」を参照。〕

〔関連記事〕

◀豫定の如く春季演奏會は、兩日共無事に結了した。二日目は、朝來非常な暴雨であつたが、會衆は雨を犯して來り、直に滿員となつた。此一事を以て見ても、好樂の氣風が如何に横溢して居るかゞ分る。音樂者須く奮励すべしである。

(『音樂』學友會、第一巻第五号、明治四十三年五月、三頁)

## 明治四十三年七月二十五日、八月十三日　文部省主催第二回夏期講習会開会式閉会式

◀前號の本欄で報じて置いた通り、文部省主催の第二回音樂夏期講習會は七月二十五日から三週間本校に於いて開かれた。出席者は全國の師範、中學、女學校の教諭、助教諭等五拾餘名で、折から倦怠を來し易い季節ではあり、それに搗てゝ加へて極めて短期の講習ではあるにも拘はらず豫期以上の効果を修めることを得て、八月十三日無事に終了した。學科及講師は次の通りである。

| | |
|---|---|
| 和聲學 | 教授　島崎赤太郎 |
| ピアノ | 教授　神戸　絢 |
| 唱歌 | 助教授　岡野貞一 |
| ピアノ | 助教授　久野久 |

猶開會及閉會式の演奏曲目を左に掲げる。

△開會式演奏曲目

一、唱歌（第一部）　東京音樂學校生徒

カラス

とけいのうた

蟲のこゑ

近江八景
舞へや歌へや　多久寅
二、ヴァイオリン獨奏
レゲンド　ヴイエニアフスキー作
三、獨唱　原田潤
デイテルリーベ　シューマン作
一、イム　ヴンダーシェイン　モナートマイ
二、デイ　ローゼ、ディ　リリー
三、ヴェン　イヒ　イン　ダイネン　アウゲン　ゼー
四、イヒ　グロルレ　ニヒト
四ピアノ獨奏　神戸絢
甲、アンプロチュ〔ママ〕　ショパン作
乙、ル　ロプ　デ　ゾルヌ　シューベルト作
五唱歌　東京音樂學校生徒
ツキ
こうま
出征兵士
たけがり
卒業
△閉會式曲目
一、ピアノ獨奏　久野久
二、ソプラノ獨唱
アルツェステ　ペツォルド
三、ヴァイオリン獨奏　グルック作
ユンケル
甲ロマンツエ　ヴイニアウスキー
乙マヅルカ
四、ピアノ獨奏
甲エチュード、ヘロイック　ショパン作
乙バルカロール　ショパン作
五、ソプラノ獨唱　ペツォルド
甲アリア　フロム　タンホイゼル　ワグネル作
乙ローゼンリード　ユンケル作
六、ピアノ、ヴァイオリン二部
スキツト　〔ペツォルド　ユンケル〕

（『音樂』學友會、第一巻第八号、明治四十三年八月、二六頁）

**明治四十三年十月十六日、十七日　学友会演奏会**

來る十六七日に擧行すべき學友會演奏曲目

第一部

一、合唱　會員
甲、雁の叫び……露西亞民謠　旗野十一郎作歌
乙、秋……和蘭古謠　吉丸一昌作歌
二、オルガン獨奏　安藤憲
ソナテイナ……ラインハルト作
三、ヴアイオリン獨奏　杉山長谷夫
シゝリアーノ……ペルゴレージ作

四、獨唱　澤崎定之
甲、エスハツトデイローゼズイツヒベクラークト……フランツ作
乙、イムヘルプスト……フランツ作
五、ヴイオロンチエロ獨奏　林顯藏
アンダンテ……ゴルターマン作
第二部
六、ヴアイオリン獨奏　末吉雄二
ソナタ……モツアルト作
七、獨唱　中島かね
セミラミス中のカヴアテイナ……ロツシニ作
八、ピアノ獨奏　松島彝
甲、ファンタジア……バツハ作
乙、プレリユード……ショパン作
九、ピアノ四部合奏　萩原英一
川上淳
大塚淳
信時潔
番外ピアノ獨奏　教師ルドルフロイテル
カーナヴアル……シユーマン作
十、獨唱及合唱　會員
オルフエウス中の一節……グルツク作

（『音樂』學友會、第一巻第九号、明治四十三年九月、四三頁）

學友會音樂會演奏曲目梗概（四十三年十月十六、七日）

一、合唱　會員
甲、雁の叫び……露西亞民謠　旗野十一郎作歌
乙、秋……和蘭古謠　吉丸一昌作歌
「雁の叫び」は露西亞の有名なる民謠にして、其の曲節は一種陰鬱なる國民的色彩を帶べり。「秋」は和蘭の古謠にして、其の調の輕快なる前者と好對照をなせり。
二、オルガン獨奏　安藤憲
ソナテイナ……ラインハルト作
アウグスト、ラインハルト（August Reinhard）は最近獨逸のオルガン家にして、其の著はせる教則本多し、本曲は作品三十八中第一番の長ハ調ソナテイナなり。
三、ヴアイオリン獨奏　杉山長谷夫
シヽリアーノ……ペルゴレージ作
曲の原作者（Pergolesi, 1710–1736）は伊太利ナポリ派の天才ある作曲家なり。シヽリアーノは伊太利シヽリアの民謠を基となせる牧歌的の曲にして、もと聲樂の曲なるをフランツ、リースがヴアイオリンに直せるものなり。
四、獨唱　澤崎定之
甲、エス、ハット、デイ、ローゼ、ズイツヒ、ベクラーグト……フランツ作
乙、イム、ヘルプスト……同
甲乙共に聲樂の作曲に名ある大家フランツ（Robert Franz 1815–1892）の作なり。甲の歌詞の意は、薔薇の花が己の香の消え易きを嘆きけるに、詩人は「さな嘆きそ、汝が香は吾が歌にうつりて長しえに消えざるべし」と慰めたりと云ふなり。乙は秋の日に友無くして獨りさまよふ心の淋しさを歌へり。

五、ヴイオロンセロ獨奏　林　顯　藏

アンダンテ……ゴルターマン作

ゴルターマン（Georg Eduard Goltermann 1824–1898）は獨逸の有名なるセロ奏者にして、又巧みなる作曲家なり。本曲は其のセロコンセルト第五中の中部進行にして、アンダンテは緩徐なる進行といふ程の義に過ぎず。

六、ヴアイオリン獨奏　末吉雄二

ソナタ……モツアルト作

樂聖モツアルト（W. A. Mozart 1756–1791）の作は其の旋律の優麗溫雅なる點に於て、今日も尙樂界に愛賞せらる。本曲はその數多きヴアイオリンソナタ中に佳良にして短ホ調のものなり。

七、獨唱　中島かね

「セミラミス」中のカヴアテイナ……ロツシニ作

「セミラミス」は伊太利歌劇界の名家ロツシニ（Gioacchino Rossini 1792–1868）の作れる歌劇にして、バビロンの皇后セミラミスの事を筋となせり。カヴアテイナとは歌劇中の短かき歌調の意味にして、此歌調は裝飾音及細分音符を多く含める、所謂ブラヴールアリアに屬す。即ち古き伊太利式の歌劇に屢々存する處の華美なる旋律也。歌者は中音（アルト）にしてアルサーゼスと云ふ勇敢なる將軍が、皇女アゼーマに對する愛慕の情を述ぶる箇所也。

八、ピアノ獨奏　松島彝

甲、フアンタジア……バツハ作

乙、プレリユード……ショパン作

フアンタジアは空想曲とも譯すべきものにして、嚴密なる作法に由らざる器樂曲の義なり。即ち本曲を作れる樂聖バツハ（J. S. Bach 1685–1750）の頃には一定の作法に從へるフーゲに對して自由なる曲體を指したるなり、プレリユドは前奏曲の義にして、或る長き曲の前に奏する曲なり。作家ショパン（Frédéric François Chopin 1810–1849）はポーランド生れの洋琴家にして、其の作品は今日ピアノ曲の最も秀美なるものとして名高し。

九、ピアノ四部合奏　シューマン作

ピアノ　萩原英一

ヴアイオリン　川上淳

ヴイオラ　大塚淳

セロ　信時潔

ピアノ、ヴアイオリン、ヴイオラ、セロ、との合奏より成る、所謂 Piano-quartet は近頃の樂界に歡迎せらるゝ合奏なり。シューマン（R. Schumann 1810–1856）の作には此の如きもの只一曲あり。茲に奏する作品四十七變ホ長調のもの即是なり。

番外、ピアノ獨奏　教師　ルドルフ、ロイテル

カーナヴアル……シューマン作

シューマンの洋琴曲の秀でたるものは皆若年期の作なり。茲に奏するカーナヴアル（謝肉祭）もその一にして、作品の第九に位し一八三四—三五年に作曲し、一八三七年世に現はれたり、こは廿二の短かき曲を集めたるものにして、その創作の由來はシューマン自身の言に由れば次の如し。

彼の樂友 Miss Ernestine v. Fricken と云ふ人 Asch と言ふ都會に住み居たるが、此の Asch と云ふ文字が偶然にも音階中の音名のみを含み、且つ Schumann 自身の中に存する文字のみより成れりと云ふ理由より、その諸音を基とせる曲を幾つか作りみんとの考を起し、一つ宛特別の意味も無く作りたるが、その完成せる時が恰も一八三五年の謝肉祭の時に當れるを以つて、之れを集めたる全體に謝肉祭の名を冠せしめたるなりと云ふ。彼はまた友人 Moscheles に宛てたる書翰のうちに述べて曰く『曲の標題は後より付けたるなれども、音樂は實際その意味を現はし居るに非ずや』と然り彼の云ふ如く本曲は自ら謝肉祭に於ける假面舞踏者の歡樂を描き出したるものとして聞くを得べし。廿二曲の題名次の如し

1. Préambule　2. Pierot　3. Arelequin　4. Valse noble　5. Euse-

bius 6. Florestan 7. Coquette 8. Réplique 9. Sphinxes 10. Papillons 11. A.S.C.H.S.C.H.A. (Lettres Dansantes) 12. Chiarina 13. Chopin 14. Estrella 15. Reconnaissance 16. Pantalon et Colombine 17. Allemande 18. Paganini 19. Aveu 20. Promenade 21. Pause 22. Marche des Davidsbündler

此うち(1)は前奏曲にして、その他の曲の標題は重に假面舞踏會に出席せる人名なり。即ち(2)(3)(16)等の如し。中には彼の友なりし音樂家の實名もあり(5)(6)(12)の如きダヴイツド結社の友人及(13)(18)の如き人名の名もあり又前述のフリツケン孃はエストレラてふ名前にて(14)に入れり。(7)のコケツトは誰を指したるや明ならず。斯の如き人名の他に舞踏會に起れる事件を標題にしたるものあり(15)の再遇(19)の愛の誓(20)の逍遙(21)の舞踏の休止等の如し。是れ等の曲の間に圓舞曲(ワルツ)の響聞ゆ(4)高尚なるワルツ(17)獨逸のワルツ等の如し。(11)はA、S、C、H、の四文字が自ら騒がしく舞踏し幽靈の如く消さる(10)の蝶々は彼の作品第二の蝶々曲の思ひ出の如く疾過し、又(6)に於ては蝶々曲の第一番の一節をその儘挿入せり。最後の曲は「俗人等に對するダヴイツド結社員の進行曲」と呼ばるゝものにして、俗人の象徴として獨逸の古き老父踊りの曲を用ゐたり。本曲は四分の三拍子にして進行曲の拍子を具へたるものにして、單に一種諧謔象徴的の意味を現はせるものと云ふべし。(9)のスフインクスは休止符のみより成りたる曲にして眞の無言曲なるが、何人を指したるかはスフインクスの如く不可解なり。

十、獨唱及合唱　　會　員

歌劇オルフエウス中の一節……グルツク作

本合唱はグルツク(C. W. Gluck. 1714-1787)の名作歌劇オルフエウスの最終幕中の合唱なり。舞臺は愛の神アモールの殿堂の前、玆にオルフエウス、オイリデイケの夫妻は牧童牧女等の群とともに、愛神に感謝讃美の聲を揚ぐ。第一の中音(アルト)獨唱はオルフエウス第二の高音(ソプラノ)獨唱は愛神、第三の高音はオイリデイケの詞なり。獨唱の間に牧童等相和して合唱す。曲の終りに近くに及び歡呼愈々急迫し聲極まらんとして纔かに止む。

（『音樂』學友會、第一巻第九号、明治四十三年九月、三七頁）

▲學友會の演奏會　會長閣下初め諸先生の懇篤なる御指導と、會員諸君の熱誠によつて、豫期以上の成功を擧げることが出來たのは、學友會のために大いに賀すべきことである、一體今度の演奏會は、附帶事業として、雜誌や紀念繪葉書やで從來にない試みをやるので、どんな結果を生ずるだらうかと、蔭ながら心配したものだ。それが二日ともあのやうな雨天にも拘らず、繪葉書も賣り切れ雜誌も殘り少なくなつて、大方は、帝都の好樂の子女の手に渡つたので、今度大いに我が校の主張抱負を世人の腦裏に植え込むにいゝ機會を捉へ得たことを慶ぶ次第である。

當日來聽した人々に就いて其の感想を訊いて見るに、少しも西洋樂に接したことのない人ですら、流石に International language だけあつて簡單な旋律には、餘程歡樂を覺えたと云つてゐる。況んや、時々接する事の機會のあつたものは、一層洋樂のために良好(フエーヴラブル)な印象を刻まれて奏樂堂を出たに違ひない。實に愉快だ。來年からは春秋二期に學友會の演奏も開かれるやうになつたのだから、其の都度機會を利用して一般の趣味と洋樂との距離を縮少するに力めたいものだ。

（『音樂』學友會、第一巻第十号、明治四十三年十月、二一頁）

## 明治四十三年十月十八日～二十日　学友会演奏旅行（男子部）

●男子部演奏旅行記事

十月十八日（東京―高崎―前橋）

夜前までシトシトと降つて居た糠雨がカラリと晴れて、今日はお誂へ向きの音樂日和。雨を當て込みに羽織つて行つたマントの下に汗を掻き乍ら、本居、原田の兩先生を頭に一行三十三人ズラリと、玆は高崎停車場前の廣場に並んだのが午前八時四十六分。高等女學校から迎ひに來て呉れた人の後ろについて靴先き輕く小石を蹴乍ら澄んだ秋の大氣の中を練つて行

くと往來の人が物珍しげに軒下へイんで、一行の顔には愉快と得意の表情がニコ〳〵と笑つて居た。

學校には前橋の大西君が出張して呉れて何かにと世話を燒いて呉れた、午前十時と云ふに同校の講堂で生徒諸孃を聽衆として開演、豫定の曲目が滯り無く濟んでホツと息を吐いたのが正午十二時、扣室で晝飯を饗せられて直ちに同校を出る

前橋では同地主催者の好意で停車場から直ぐ車へ乘せて呉れた流石は共進會の開催中とあつて、町の家並がはり切れる程人がはいつて居た。會場は共進會内の講堂、主催は群馬縣師範學校音樂研究會、各學校生徒諸君千有餘名の聽衆を前に、小學唱歌から「浦の明け暮れ」まで無慮十二番の演奏が終へると、前橋の夜は和かに暮れてイルミネーションが燦然と輝き出す。午後六時半演奏の義務を終へて一同住吉屋、岩六と云ふに分れて引き揚る。制服を浴衣に代へ疊の上に横になつて頻りに痛快がり乍ら、内田舊先生と大西君から寄贈された林檎と饅頭とを遠慮なく頂戴した。此夜理事のうちから「大久保」と「青山」とか先發隊として伊香保へ立つ。〔後略〕

（『音樂』學友會、第一巻第十号、明治四十三年十月、二二頁）

**明治四十三年十一月二十六日、二十七日　第二十三回定期演奏会**

明治四十三年十一月二十七日（日曜日）　東京音樂學校

音樂演奏曲目

一、獨唱、合唱及び管絃樂

獨逸平和曲……ブラーム ス作曲
吉丸一昌譯歌

甲、惱みあるものは幸なり　バリトン獨唱　研究生　清水金太郎
乙、神よ、吾に教へよ　教師　ロイテル

二、洋琴司伴樂

短ニ調（作品第七十）……ルービンシュタイン作曲
甲、モデラート、アッサーイ
乙、アンダンテ

三、管絃樂

スキト「ラレジエンヌ」……ビゼー作曲
甲、プレリュード
乙、ミニュエット
丙、アダージョ
丁、カリヨン

四、獨唱　本科生徒　中島かね

『オディッセウス』中の歌調……ブルッフ作曲
吉丸一昌譯歌

五、女聲三部合唱

甲、清流……ブラーム ス作曲
武島又次郎作歌

乙、述懷……ブラーム ス作曲
武島又次郎作歌

六、管絃樂

歌劇『オベロン』の序曲……ウェーバー作曲

Programme

I. Ein deutsches Requiem ……Brahms.
for Soli, Chorus and Orchestra.
a. Selig sind, die da Leid tragen.
b. Herr, lehre doch mich.
Bariton Solo.
Mr. K. Shimidzu.

II. Concerto for Piano and Orchestra in D minor.
……Rubinstein.
a. Moderato assai
b. Andante
Prof. Reuter

III. 1er Suite L'Arlésienne for Orchestra. ……Bizet.

a. Prélude.
b. Minuette.
c. Adagio.
d. Carillon.

IV. Aria from Odysseus. ……Bruch.
Miss K. Nakajima.

V. Female Choruses for two Horns and Harp. …Brahms.
a. Greetings.
b. Song from Ossian's Fingal.

VI. Overture to Oberon. ……Weber.

〔「音樂演奏曲目梗概　第十二」欠〕

## ●音樂學校演奏會

東京音樂學校の秋季演奏會は廿六、七の兩日午後二時から催されるとの事で記者は廿六日に聽きに行つた、第一はブラームスの獨逸平和曲で研究生の清水金太郎氏がバリトンで獨唱し之に合唱と管絃樂を付けた曲は先づ陰欝な調子に始まつて漸次不安の調子が高くなり最後に豁然として明快な旋律に終るので演奏者の力强い豐富な肉聲は能く其心持を現はして居た但し作歌は甚だ拙いものでリズムを埋める爲め同じ語ばかりを繰返して居るのも感服出來ぬ、第二はルービンシュタイン作曲のピアノ司伴樂でロイテル教授の演奏は實に聞惚れて了ふ程の巧さで殊に終りに近く最强部になる處など雄勁にして濶達とでも謂ふのだらう、第三はビゼーの管絃樂で第一スキト　ラルレジエンヌ、之は殊に前奏とカリヨンとが面白かつた、第四は此前の演奏會で評判を取つた中嶋カネ子の獨唱でブルツフの「オデユッセウス」の中の咏嘆調を歌つたが此前とは違つてズツと聞劣りがした斯出來不出來がある樣では困る、第五の女聲三部合唱は二つとも不出來で殆ど何等の感興も無かつた、第六の管絃樂はウエーベルの「オベロン」の序曲で曲も良いが演奏も整つて非常に良かつた而してユンケル教授の指揮も如何にも目覺しいものだと思つた斯くて午後四時半散會した

（『時事新報』明治四十三年十一月二十七日）

## 東京音樂學校演奏會

…東京音樂學校に於て十一月廿六七日午後二時より開會す曲目左の如し

〔曲目省略〕

當日は空前の大曲を上場された平和曲はブラムスの傑作で羅馬舊教の祈禱曲清水君の聲には頗る適當で同君の熟練に一入の妙味を發揮したが素人受のせぬ曲であると譯歌であつて併も邦語的の發音でない爲でもあつたが一部の聽衆には物足りなく思はせたらしかつた。ロイテル教師のピアノは當日の最大聽き者で西歐の音樂を解さゞる人に迄非常な感動を與へた。管絃樂「スキトラレジエンヌ」は佛のビゼー氏の作曲に係り三幕五場のメロモドラス曾て巴里ヴオーヴイル座に上場して大喝采を博したるもの筋はフレデリーと云へる農夫アール生れの小女と相愛の中となるもフレデリーの母是れを許さず結果フレデリーは遂に狂氣す母大に驚いて結婚を許すに至りしも其時已に遲し小女は失戀の餘り高塔より身を投じて死したる後なりしと云ふ悲劇で非常な出來榮え。オデイセスは愛情の籠つたよき曲であるがペツ教師の聲癖表情を其儘模倣された爲め（無理もないことだが）スタツカトーの多い謠ひ廻しが國語に對して最も不調和に聞こえたが無論大喝采で實際よかつた。管絃樂「歌劇オベロンの序曲」獨の大家ウエーバーの作、魔王オベロン其女王と不和を生じ人の世にあらゆる誘惑に打勝つ者を得ざる中は相見えずと約し小魔パツクをして汎く人の世を探し遂に騎士ユオンを得て女王と握手すと云ふ筋で上乘の出來で敬服の至りだ併しかくなると「清流」や「述懷」が實にツマラナク見えて頗る不調和に思はれたは吾人の僻見だろふか

（『音樂界』第四巻第一号、明治四十四年一月、七二頁）

## 明治四十四年三月二十五日　卒業式

明治四十四年三月廿五日（土曜日）午後二時

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

# GRADUATION EXERCISES
OF THE
Tokyo Academy of Music
UYENO PARK
Saturday, March 25th, 1911.
2. P. M.

## PROGRAMME.

### PART I.

I. Report.
II. Presentation of Diplomas.
III. Adress to the Graduating Class by the Director.
IV. Adress by His Excellency Komatsubara, Minister of State for Education.
V. Response by the Representative of the Graduating Class.

### PART II.

I. Piano:
Rondo in F minor (from the Sonata)...*Beethoven.*
Mr. Date.

II. Soprano Solo:
Cavatina di Rosina .....*Rossini.*
Miss Okami.

III. Organ:
Fuge in C minor .....*Bach.*
Miss Yamada.

IV. Violoncello:

第一部

一報告
一卒業證書授與
一校長告辭
一文部大臣祝辭
一卒業生總代謝辭

第二部

一ピアノ獨奏……甲師範科卒業生　伊達愛
短ヘ調ロンド（ソナタの第三章）……ベートーヴェン作曲
一獨唱……聲樂部卒業生　岡見メリーモリス
カヴァティナ……ロッスイニ作曲
一オルガン獨奏……器樂部卒業生　山田フク
短ハ調フーゲ……バハ作曲
一ヴイオロンチエロ獨奏……器樂部卒業生　林顯藏
短ロ調コンツエルト（第二章及第一章）……ゴルターマン作曲
一ピアノ獨奏……器樂部卒業生　松島彝
プレリユーディウム及フーゲ……メンデルソーン作曲
一ヴアイオリン獨奏……研究科修了生　永田その
第七番コンツエルト……ローデ作曲
一合唱
甲　常盤……武島アルカデル作歌曲
乙　菊の盃……武島ベートヴェン作歌曲

Konzert in B minor (2nd and 1st movement) ……*Goltermann.*
Mr. Hayashi.

V. Piano :
Präludium und Fuge ……*Mendelssohn.*
Miss Matsushima.

VI. Violin :
Konzert No. 7. ……*Rode.*
Miss Nagata.

VII. Chorus :
*a.* Weihegesang ……*Arcadelt.*
*b.* O Welt, bist du so schön ……*Beethoven.*

## 東京音樂學校卒業式演奏評（上）

### 一、ピアーノ獨奏

甲種師範科卒業生　伊達　愛

ロンド（Fモール）ソナータ第三章……ベートベン作曲

甲師卒業生で僅か三ケ年の教育を受けたとしては上出來の部であらう、最初色々異つたカツコールドを打つとき二三回指を外した爲汚い音を出したのは耳障た、然し大体のエキスプレツションは宜いテンポも指の短かい日本人には適當な程度だらう特に中途に起るメロデイツクな所は大分感じて彈いて居た、唯だベートフエン獨特のアクセントを要する場合に強い音が出なかつたのは遺憾だ、テクニツクも相當にあつた今迄の同科卒業生ピアーノ獨奏は本科卒業生に比して格段の相異があつたが今日同氏のを聞くに及んで敢て遜色なき程度に達したのを發見した多分同校學制改正の結果ピアーノを主科の一部とした事に起因すると思ふ。

### 二、獨唱（ソプラーノソーロ）

聲樂部卒業生　岡見メリーモリス

カヴアテイーナ、デイ、ロジイナ　ロツシイニ作曲

岡見孃は今年の優等卒業生だ以前此曲は左程の難解でなく寧ろテクニツクを主としたものらしい、同孃の伊太利亞語の發音は中々明瞭で音色も美しく本曲の最大條件たるテクニツクも可成の出來だが之より靜かなメロデイーを唱ふとき却つて調子が外れて高くなつた樣に聞えた。最後に漸次テンポが迅くなり、音が強くなる所謂アツチエレランドに終る部分は尙一層幅があり力のある強い聲を出して欲しかつたペツオールド夫人の伴奏は絶妙、伊太利亞風に輕く聞かせたのは嬉い同孃獨唱の半分は慥かに夫人の援助に依ると思ふ。

### 三、オルガン獨奏

器樂部卒業生　山田　フク

フーゲ（Cモール）……バツハ作曲

オルガン曲ではバツハが古今獨歩だ而かも作者得意のフーゲで拍子も運指法も中々六ケ敷しい難曲を兎に角奏したが最初の彈出は上出來だつたが卒業式と云ふので氣怯れしたのか二三回障えたのは氣の毒だつた其上一体にテンポが正確でなく完全に追覆の實を擧げ得なかつた、今少しく餘裕があつてほしい。

### 四、ヴイオロンチエロ獨奏

器樂部卒業生　林　顯　藏

Bモール、コンチエルト（第二及第一章）……ゴルテヤマン作曲

最初の第二章アンダンテを奏いた時全体の調子が低かつたので折角の美しい旋律も大に感興を殺がれたが之は糸の調子を合せるときの不注意とはいへ單に同氏のみならず伴奏者ウエルクマイステル教授にも責任がある。然し發想もよくセロの曲らしく聞いた、第一章は糸の調子は直したが總てがテクニツクを要するので隨分調子が外れた復音やオクターヴには二三箇所好い音が出た、然し氏には此曲は重荷であつた樣だ。（つゞめ）

（『讀賣新聞』明治四十四年三月二十八日）

## 東京音樂學校卒業式演奏評（下）

五、ピアノ獨奏

プレルデイウム及フーゲ　メンデルソーン作曲　　器樂部卒業生　松島　彝

同孃も今年の優等卒業生である、吾人はフーゲと云ふと直ぐにバツハを聯想し、今日は第三にオルガンで聞たのでメンデルソーンとの比較が出來た、プレルデイウムに於ては細微な各種のヴアイエートされた音の中からメンデルソーン固有のリード的な旋律が聞えて來るので氣持がよかつた無論同孃も上手に奏いたフーゲに至りては總体にバツハの如く明白でない爲聽衆には一寸解り難く、曲其物も兎角ダレ氣味になり易いのだが奏者は此間の消息を知つてか大分注意して居たので幸に此弊に陷らず工合好くいつた

落付いた態度と確かりした音量を以て曲意に觸れつゝ自身樂みを以て奏いたのは大に我意を得た

一言注意して置きたいのは譜捲に出た人が樂器の傍に立て居つた事で見苦しい今後は是非綺子に座つて欲しい若し手が譜面に届かぬ場合は捲る時だけ立てば宜い外國には決してない不体裁な圖だ

六、ヴアイオリン獨奏

第七番コンチエルト　ローデ作曲　　研究科終了生　永田　その

先づ當日プログラム中の大曲だ曲はAモール、永田女史は全体に音程も拍子もよい、音色は別としても女としては可成大きな音を持つて居る、處處表情に今一息と思ふ所もないではないが先づ成功と思ふ、唯間々伴奏とシツクリ合はなかつたのは同女史の早いのかユンケル教授の伴奏が遲いのか、兩者の呼吸の一致しなかつたのは練習不足の故だろう、折角一生懸命に奏かれたに拘らず大切なアクセントも變な音がしたのは樂器の罪かも知れぬが同女史は要するに音の人にあらずしてテクニツクの人たるを免がれぬ

七、合　唱

甲、常盤、乙、菊の盃

二曲とも決して上出來とは云へぬ寧ろ失敗に近い一度もいゝハーモニーを聞かなかつた第一の曲では何故かユンケル教授のタクトに少しく變な處があつた

第二の曲は同校で是迄四五回以上も演奏した云はゞ得意であるべき筈だのに矢張感心しなかつた殊に全部合唱に入る前のパウゼではソプラーノが高過て聞苦しい全部合唱に至りロイテル教授が始めてピアーノを以て島崎教授のオルガンと共にエネルギールな音を出されたのでバツスが著しく引立ち漸々ベートフエンらしくも聞えた（つゞめ）

（『讀賣新聞』明治四十四年三月二十九日）

**明治四十四年四月二十二日、二十三日　学友会春季演奏会**

四月廿二、三の兩日午後二時より春季演奏會を開いた。その曲目は

一、合唱　　會　員

甲、逝ける友　　ベネケン作

乙、神言　　メンデルソーン作

二、オーガン獨奏　　吉田繙子

クライネ　プレルーディウム　ウンド（ママ）　　バッハ作

フーゲ

三、ヴァイオリン獨奏　　佐藤謙三

アンプロムチユー（ママ）　　オスカーリーディイング作

四、低音獨唱　　樋口信平

甲、靈笛中のアリア　　モツアルト作

乙、靈笛中のアリア　　モツアルト作

五、ピアノ獨奏　　藤田愛子

ソナータ（作品第三）　　ベートヴェン作

六、ヴァイオリン獨奏　　杉山長谷夫

アンダンテ　レリジオーゾ（作品第七十）　フランシス、トーメ作

七、女聲二部合唱　原のぶ子　林豐子

甲、ヴァンデラース　ナハトリード　ルビンシュタイン作

乙、デルエンゲル　ルビンシュタイン作

休　憩

八、ピアノ獨奏　小泉千賀子

ファンタシーア　オウ　カプリース　メンデルソーン作

九、高音獨唱　青山なみ子

ドンファン中のツェルリーネのアリア　モツアルト作

十、ヴィオロンチェロ獨奏　多基永

コンセルト（第一、第二樂句）　リンドナー作

十一、ヴァイオリン獨奏　末吉雄二

コンセルティーノ中のアンダンテ　ジツト作

番外

甲、ピアノ獨奏　ペツオールド夫人

幻想曲（短ハ調）　シユーマン作

乙、高音獨唱

イ、エルザの夢（歌劇ローエングリンより）　ワグナー作

ロ、聖き泉（歌劇フイガロの婚禮より）　モツアルト作

十二、合唱　會員

シェップング　ハイドン作

（『音樂』學友會、第二巻第五号、明治四十四年五月、五四頁）

## 東京音樂學校學友會演奏會評（上）

二十二、三兩日同校に開催

一、合唱　會員

甲、逝ける友　ベネケン作

乙、神言　メンデルソーン作

兩者共歌詞と曲想とが珍らしくも稍一致したのと練習充分なりし故か會員一同が何等の不安なく確固なる自信を以て唱ひ特にテノーレが振つたのとバツソが比較的强かつた爲非常に成功した、コンダクターは先例に依て學生より選出されたが今回のは先づ遺憾なき指揮振である只甲に於て稍テンポの遲きに過ぎたのと伴奏のオルガンが一二回中途で變なデイスコードを出したのを缺點とする

二、オルガン獨奏　吉田繙子

クライネー　プレルデイウム　ウンドフーゲ　バツハ作

大體上出來である殊にプレルデイウムよりフーゲに移る時のテンポの變り工合大によかつたが最後のトウリラは餘り短かく尙少しリタルダンドに終つたらば如何なものか。

三、ヴァイオリン獨奏　佐藤謙三

アンプロンプティユー　オスカー、リーディング作

只奇麗な何となく快感を與ふる位で決して大曲とか難曲と云ふ程のものでない隨つて特別なテクニツクを必要とせぬ、態度も中々落付て見え音も調子も好く、感じも相應に好い樣だが未だ何所やら若い處がある調絃の際DとGとが少しく低かつたので定めて奏し難くかつたらう、今後の努力如何に依りては大に前途に望みがあると思ふ、

四、バツソ獨唱　樋口信平

甲、歌劇「魔笛」中サラストロのアリア　モツアルト作

乙、同前

同氏は體格に比し不思議な程太く低い聲を出すには感心した音量は豊富だが未だ充分精練されて居ない唱ひ方が眞面目でよく曲意を解した樣だ甲に於ては音程が餘りよくなく常に上がつて居たので多少聞苦しいが乙は其

短所を補ひ得た

五、ピアノ獨奏　藤田　愛子

ソナター（作品第三）　ベートヴェン作

當日の白眉である、優雅で沈着な態度を以て彈じた可成な大曲を斯く迄に彈じた事は徹頭徹尾賞讃に價する、惜むらくは左右兩手ユニソンで變拍子的ものを奏する場合に少しく混亂を來たしたのが瑕だ

六、ヴアイオリン獨奏　杉山長谷夫

アンダンテ　レリヂオゾ（作品第七十）　フランシストーメ作

普通の出來だ曲の宗教的で寧ろメロデイツクな爲に起るダレ氣味を先づ無難に奏し終つた音程はよいが餘りに音を殺し過ぎた結果一寸した雜音を生じたので吾人は感興を以て曲趣を味ふ事が出來なかつたのは殘念だ奏法に今一層光澤があつて欲しい

七、女聲二部合唱　原　のぶ子　林　豐　子

甲、ヴアンデルラルス　ナハトリード　ルビンシュタイン作

乙、デル　エンゲル　同　人作

甲乙共ソプラーノが音程惡るく始終上つて居た爲一ケ所もハルモニーを聞けなかつた、地方の女學校あたりで聞く二部合唱なら兎も角も苟くも日本に於ける音樂の最高學府の學生の演奏とは思はれず實に聞くに耐へなかつた。

（『讀賣新聞』明治四十四年四月二十六日）

## 東京音樂學校學友會演奏會評（下）

二十二、三兩日同校に開催

八、ピアーノ獨奏　小泉千賀子

ファンテージヲカプリース　メンデルソン作

餘りに媚びるが如き態度だつた、Aモールのアンダンテから Aドウアのアツレグロに行くあたりの氣合は可成の出來だつたが、左手が難かしいアツコールドを押す時再三鍵盤を違へた樣だ

九、ソプラーノ獨唱　青山なみ子

歌劇「ドン、ファン」中ゼルリーナのアリア　モツアルト作

音量は少ないが音色は汚くない、高い聲も可成出るがどうも音程が確實でなく何となく浮薄に感じた、伊太利語を以て歌つたが發音の不明瞭と誤謬の多いのは聲樂を修むる人に向て斷然許す事は出來ない今少しくピアーノに近い位置に立つてもらひたい

十、ヴイオロンチエツロ獨奏　多　基永

コンチエルト第一及第二章　リンドナー作

態度は莊重だつた、最初のアンダンテでは折角の奇麗なメロデイーも樂器の惡い爲か一向に引立ず恰もソルデイナを掛けて奏いで居る樣だ、音程も間々外れた。次のアツレグロは非常に錯雜して居るにも拘らず申分のないテクニツクを聞かせた、オクターヴで進行する邊も美事だつた兎に角テクニツクでは青年セリスト中氏の右に出ずる者はなかろう。

十一、ヴアイオリン獨奏　末吉　雄二

コンチエルティノ中のアンダンテ　シット作

由來此曲は感じが取り難く奏法如何に依ては無味乾燥に陷り易いにも拘らず同氏は頗る宜い感じを以て奏した爲非常に愉快だつた、音量豐富で調子も完全だ、特に操弓法には感服する。今日のヴアイオリン獨奏中第一の出來と思ふ。

番　外　ペツオールト夫人

甲　ピアーノ獨奏幻想曲　シューマン作

乙　ソプラーノ獨唱

（イ）エルザの夢（歌劇「ローヘングリン」より）　ワグネル作

（ロ）聖き泉（歌劇「フイガロ」の婚禮）　モツアルト作

複雜なテツニツクの後に再三再四來るシューマン獨特のリード的部分にはアツトラクトされた我人のピアーノに向ふとは異り自在に樂器を統御して莊嚴に且つ雄大な音を出すので異つた樂器を彈じてゐる樣に思つた。拍手止まず更に他の一曲を禮奏した、之はメロデイクなもので曲名は知らぬが矢張シューマンの作ではあるまいか。

獨唱の中前者は幽雅、後者は華麗と云ふ抽象的な讃辭以外に批評の餘地はない同夫人の獨唱よりも寧ろピアーノの方を取る、時々神戸教授の伴奏

と合致せぬ點もあつた

十二、合唱　　會　員

シエプング　　ハイドン作

先第一に吾人の久しき宿望たる原語を以て合唱する事が漸く今日實現された從來の如く不穩當な譯詞又は無意義の邦語歌詞を附加して唱ふとは異り感興も一層深く近來にない出來榮であつた、然し近頃同校の合唱は各人コーラスの條件を無視し各自の技倆を發揮せむとする爲全体の統一を欠いて居る女聲に於て殊に著しい。今日も大分其傾向があつたが出來得る限り自個の技術を或程度まで犧牲にしてコーラスの意味を明かにする事を切望する。（つゞめ）

（『讀賣新聞』明治四十四年四月二十六日）

▲四月二十二日（土）二十三日（日）の兩日本校に學友會春季演奏會あり、非常の盛會にて兩日を通じて聽衆約一千六百人餘、午後二時より五時過に渡る。（プログラム別頁學友會記事を參照されたし）

（『音樂』學友會、第二巻第五号、明治四十四年五月、五三頁）

## 明治四十四年五月三日～十日　学友会春季演奏旅行（男子部）

學友會記事

▼春季演奏旅行　本會男子部員三十六名吉丸教授指揮の下に去る五月三日より十日迄甲府松本上田長野高田新潟長岡の各地に演奏旅行を擧行せり。其の概略次の如し。

五月三日「午前五時十五分飯田町發、同十一時廿六分甲府着、機山館にて演奏、午後六時三十五分甲府發、同九時四十一分上諏訪着、牡丹屋に一泊。

五月四日、午前八時二十分上諏訪發、午前十時四十分松本着、松本高等女學校にて演奏、淺間溫泉（常盤の湯）に一泊。

五月五日、午前八時〇五分松本發、午後十二時卅一分上田着上田高等女學校にて演奏、午後四時六分上田發、同五時十一分長野着城山館にて演奏對旭館に一泊。

五月六日、午前八時五十五分長野發、同十一時五十九分高田着高田師範學校にて演奏、午后五時高田發同十時廿四分新潟着篠田旅館に一泊。

五月七日、午前、午後二回新潟師範學校にて演奏、午後六時新潟發、同八時三十五分長岡着高木旅館に一泊。

五月八日、午前長岡女子師範學校にて演奏、午後十二時五十五分長岡發、同十時澁溫泉着、半は澁溫泉（採蘭館）に半は安代溫泉（山口屋）に一泊。

五月九日、同溫泉滯在。

五月十日、午前八時澁發、午後十時廿分上野着。

曲　目

一、合唱、こうま、舞へや歌へや（讀本唱歌）河瀬の流れ（吉丸一昌作歌ハウプトマン作曲）春のたそがれ（吉丸一昌作歌マラン作曲）花（武島又次郎作歌瀧廉太郎作曲）浦のあけくれ（吉丸一昌作歌マツジンギ作曲）二、オルガン獨奏、クライネプレルーデウムウンドフーゲ（バッハ作）オッファートイレオヴソルテイ（マイロッヒョー作）三、獨唱、靈笛中のアリア（モツアルト作）ホームスヰートホーム。テイスザラストローズオブサムマー。リナルド（ヘンデル作）ウィドウング（シューマン作）エンドリッヒオハイスゲリープテ（グルック作）才女（スコッテッシュ）デルリンデンバウム（シューベルト）フリューリングスグラウベ（シューベルト）四、ヴァイオリン獨奏、アヴェマリア（グノー作）アンダンテレリジオーゾ（フランシストーメ作）マドリガル（シモネッテイ作）コンセルト中のアンダンテ（ジット作）アリア（G線）（バッハ作）スーヴニーア（ドゥルドラ作）ローマンス（第二コンセルトより）（ウィニアウスキー）五、男聲四部合唱、リツテルスアプシード（キンケル作）コミテート（メンデルソーン作）ウァツセルファールド（メンデルソーン作）六、ピアノ四部合奏（ハイドン作）七、絃樂四部合奏第五番（ハイドン作）八、ピアノ獨奏、ノクターン（フィールド作）プレリュード（カーナヴァルミニオン）中より（シュット作）八、セロ獨

奏、ラサンカシテーヌ（アリー作）コンセルト（第二樂句短ロ調）（ゴルターマン作）九、ピアノ獨奏、ノクターン（フィールド作）プレリウド（シユット作）カメンノイ、オストロフの第廿二番アンダンテ（ルービンシュテイン作）十、オーケストラ、愛國々歌集（エッケルト作）

（『音樂』學友會、第二巻第六号、明治四十四年六月、六一頁）

## ○樂界空前の壯擧

### 音樂學校の奏樂旅行

東京音樂學校にては地方音樂を開拓せんとて同校職員生徒にて大音樂團を組織し時々奏樂旅行をなさんとは年來の計畫なりしが愈々今回合奏團及合唱隊の編成をなし男生徒五十名は五月三日出發山梨、長野、新潟三縣下を漫遊甲府、松本、上田、長野、新潟、長岡各市の學校劇場等に於音樂會を開催し十一日歸京女子部演奏旅行團八十名桐生町高等女學校にて演奏夫れより前橋、伊香保、榛名を經て歸京大に洋樂趣味を鼓吹し傍々地方音樂の普及の程度、俗曲民謠の情況等に就き詳細なる視察をなせり、萬事に不活動なるを憾みとする官立學校としては近來の壯擧と云ふべし。

（『音樂界』第四巻第六号、明治四十四年六月、四一～四二頁）

## ●音樂學校生徒の演奏會

市内各新聞社主催の東京音樂學校生徒甲信越演奏團演奏會は豫記の如く五日午後六時半より城山館藏春閣（じやうざんくわんぞうしゅんかく）に開催聽衆約一千三百餘名何れも非常なる喝采場裡に演奏を終り多大の感興を與へて午後九時閉會したり

（『信濃毎日新聞』明治四十四年五月七日）

## ◉師範學校演奏會

東京音樂學校學生演奏會は昨日午前九時より師範學校講堂に開く、聽衆は林事務官、阪本市參事會員、市内各縣立學校長、教員其他男女學生二千餘名にして司會者鳥居縣教育會長の挨拶、南音樂學校助教授の曲目及び作者紹介ありて演奏に入る、ヴアイオリンの幽婉、ピアノの雅麗なる、これを奏するに妙手を以てす、殊に大塚淳氏のヴアイオリン獨奏の如き一線によりて能く百種の音波を送りスーバアニーアの複雜なる言ひ知れぬ興趣あり、當日第一の呼物なるオーケストラは普通樂隊に絃樂を加へたる如きものなるも其の音律の整調なる或は急流の決する如く或は靜寂怨ずるが如く覺えず恍惚たらしむるものあり最後にオーケストラにて國歌君が代を奏し二千の學生之れに唱し十二時三十分散會す、午後一時三十分より育兒院慈善演奏會を開く、入場者千餘人にして同樣の演奏あり、盛會なりし

（『新潟東北日報』明治四十四年五月八日）

## 明治四十四年五月三日～四日　学友会春季演奏旅行（女子部）

▲春季旅行　本會女子部員八十一名楠美教授引率の下に五月三日一泊にて伊香保へ旅行の途中桐生にて演奏會を擧行せり。其の概況を略叙すること次の如し。

五月三日、午前六時四十分淺草驛發、同九時十六分足利驛下車、足利公園見物並びに足利學校遺蹟參觀、同十一時二十九分足利發、零時桐生着、桐生高等女學校にて演奏、午后四時四分桐生發、同四時五十三分前橋着、伊香保横手館に一泊。

五月四日、有志三十餘名午前六時發にて榛名登山、一同午后四時五十分前橋發、同八時三十五分上野着

（『音樂』學友會、第二巻第六号、明治四十四年六月、六一頁）

五月三日　桐生の高等女學校　東京音樂學校學友會女子部の旅行團の演奏會

一、合　唱　　會　　員

賤のおだまき　　吉丸一昌作歌、ヴエンド作

一、オーガン獨奏　吉田繙子
クライネ、プレルーデウム、ウンド、フーゲ
一、獨唱（高音部）　バッハ作
アツハ、ノツホ、アインマル　齋藤花枝子
一、ピアノ獨奏　ロッテイ作
ファンタジー、オウ、カプリツス　小泉千賀子
一、獨唱（高音部）　メンデルゾーン作
バルビエル中のカヴアテイナ　青山浪子
一、ピアノ獨奏　ロッシニー作
甲、プレルユード　松島彝子
乙、同　ショパーン作
一、獨唱（高音部）　同
甲、リターナイ　中島かね子
乙、四葉のクローヴアー　シユーベルト作
一、ピアノ獨奏　ロイテル作
パピヨンス　松島彝子
一、合唱　シユーマン作
螢狩　會員
鳥居忱作歌、アプト作
（『本邦洋樂變遷史』三浦俊三郎著、七三八頁）

**明治四十四年五月二十日、二十一日　奬学金募集邦楽演奏会**

明治四十四年五月二十日（土曜日）午後一時半
上野公園東京音樂學校ニ於テ開會
奬學金募集　邦樂演奏會曲目

一、常磐津節　三味線三絃上調子
忠臣藏二段目　桃井館の段　常磐津文字太夫
常磐津文字兵衛　常磐津文字太夫
常磐津文字八百吉　常磐津和歌八　常磐津文字太夫
一、富本節　三味線上調子
新曲高尾懺悔　名見崎得寿齋喜
名見崎友里　鳥羽屋清
一、京唄（上方唄）　三味線本手三味線替手
砧　米川親敏
加藤柔子
一、河東節一中節浄瑠璃供養　かけ合　シテワキ三味線上調子
源氏十二段　十寸見東翁　十寸見秀甫
山彦八重子　山彦秀子
一、清元節　シテワキ三味線上調子
吉原雀　都太夫一　菅野序吟　菅野一　都中遊平濱
清元延壽太夫
清元家内喜久太夫　清元寿三郎
清元吉梅太郎　清元三郎
一、大薩摩　長唄三味線
筑摩川　杵屋六左衛門忰　杵屋喜三郎
岡安喜三郎
五月廿日（土曜日）追加番組
一、青海波　踊藤間政彌
清元寿々葉　清元三綾葉　清元直葉　清元葉　清元葉　清元葉　清元葉満　清元〆南

◎廿一日　一中「泰平船盡」菅野序遊、菅野利三、三味線都僊卜、上調子菅野吟平▲河東「亂髪夜編笠」山彦山子、山彦蝶子、三味線山彦秀翁、上調子山彦英子、▲富本「徒髪戀曲者」名見崎志女壽、三味線名見崎得壽齋、上調子鳥羽屋里清、▲清元「深山櫻及兼樹振」踊藤間政彌、清元延壽太夫、家内太夫、喜久太夫、三味線梅三郎、上調子吉太郎▲京唄「東獅子」三味線本手加藤柔子、三味線替手米川親敏▲常磐津「釣女」文字太夫、彌生太夫、三味線文字兵衞、三弦八百八、上調子和歌吉▲長唄「勸進帳」芳村伊十郎、中村兵藏、松島庄十郎、三味線杵屋六左衞門、同五三郎、上調子岡安喜三郎、笛望月太喜藏、小皷田中傳左衞門、小づゝみ望月仙右衞門、大皷望月長左久

（『音樂界』第四巻第六号、明治四十四年六月、三八～三九頁）

## ◎邦樂演奏會の第一日

東京音樂學校の主催に係る邦樂演奏會第一日は廿日午後一時半から同校内に於て開會された曲目は常磐津富本京唄河東一中清元大薩摩と各方面に亘り皆一流の人々を網羅した事は流石に同校の主催丈あると肯かれる▲富本は新曲「高尾懺悔」を名見崎友喜が得壽齋及里清の絃で語つた聲量の豊富なことや節廻しの巧な事は驚くべき程で殊に末段カンに入つてからは思はず魅せられてしまつた▲常磐津は文字太夫文字兵衞の一派で「忠臣藏桃井館」で飽くまで舊調を持して行かうとする特長は遺憾なく覗はれる然し邦樂演奏と云ふ上からは今少し節の多いものを選んで欲しかつた▲京唄「砧」は珍らしい出物だ米川親敏の絃は今一息といふ所である殊に相の手になつて絃の斷れたのは頗る殘念で一方ならず興を殺がれた▲河東一中掛合の「源氏十二段」は確に當日第一の聞者で河東は十寸見秀翁、一中は都一中の一派由緒深き段物で聞いてゐる中に江戸時代の聲曲といふ感が適切に感じられる▲清元は延壽家内喜久太夫の一派で「吉原雀」だから既に折紙付で延壽の光澤ある聲量は誠に天下一品だ殊にカンの「深山の奥の其の奥のグツとの奥の佗住居」のあたり筆には盡せぬ妙がある、梅三郎の絃は車輪乍ら絶えず追はれて苦しさうであつた▲大薩摩「筑摩川」は六左衞門の伜喜三郎の唄に六左衞門と岡安喜三郎の絃だ未だ十二歳の幼年ながら先頃歌舞伎の舞臺に上つた丈ありて中々に度胸は有る聲量の少し乏しい點はあるが責むる程ではない▲切は藤間政彌が清元一派の地で踊青海波を演じたが流石に手に入つたもの角々の極りも鮮かで末段濱唄になつてからは差手曳手妙を極めて大喝采であつた（紫雲）

（『中央新聞』明治四十四年五月二十一日）

## 聽樂の後の對話
### ―邦樂演奏會に於て―

小林愛雄

かれ。常磐津の桃井館は近頃は芝居でも滅多にやらない珍らしい出物だね。

われ。だが、文字太夫の語り樣は常磐津としての情趣はあるが、明確を缺いて居る。私には文字兵衞の絃ばかり、然と頭に入つた。あの中風で居て輕妙と力とを備へた技藝は吉兵衞と梅吉の亡なつた今日三味線彈中の至寶である。殊に此人がしつくり語る太夫と心を合せて、絃で補なつて行く處が得難い。

かれ。富本は何故新曲なんぞを出したらう。

われ。邦樂家の新曲熱にも困つたもんだまだ古曲も人に傳へきらない中から新曲とは何事だ。何の必要があつて新曲を作るんだ。何處が新らしいんだ。

かれ。京唄は江戸唄とはまた別趣の味があつて雅びな温なしいものだね。

われ。さう。これ丈けに拍子と細やかさが出ればまあいゝ。然し唄は閉口した。

かれ。河東一中掛合の源氏十二段の一時間以上もかゝるのをあの堅い椅子で聽くのは隨分苦しい。

われ。帝國劇場でひぼしになる時世時節と諦らめしやんせ。それはさて置き、斯うして聽くと京で源を發した一中より、矢張江戸前の河東の方が我々の肌には合ふやうだ。

かれ。河東の秀翁と東觚の行き方の離れないのと、三味線の秀子八重子の鮮やかに曲想を出して行く處とは、一中の三味線が稍强過ぎて然も上調子の存在すら疑はれる彈方のに比べて、一段聞ばえがした。

われ。君も中々話せる。然し慾をいふと河東のシテ、ワキに稍さびを缺いて居やう。河東の三味線に稍位を缺いて居やう。然しこれは望蜀。

かれ。此に特記したいのは藝者の音樂學校壇上に現はれた事だ。秀子あれは踊に於ても當代の大家、あの赤阪の鹿の子だぜ。眞の技藝を以て起つ藝者、眞の意味の藝者即ち藝術家が現代に少數乍ら居る事は人意を强うする。富本の友喜さんも終りの清元も皆藝者なんだ。邦樂は半分藝者で命を繼いで居るんだ。

われ。不粋は知らなかつたが、左樣なのかい。何しろ十分眞面目に腕を磨いてもらひたい。一中での聞き處といはれる「竹に雀はなあえ」のくだりは今一息、河東での「しんき上氣の顏紅葉」の處はなだらかであつたと思ふ。何しろ淨瑠璃中で此曲の如きは價値の最も多いものゝ一だ。「投節」などの曲調も殘つて居る。

かれ。只掛合といふものは比較研究には便利だが、兩者の味がまとまつて出ないのは遺憾だと思ふ。延壽の清元はどうか。

われ。新内の加賀太夫と共に今日の江戸藝術中の絶品。近年殊に醇化の境に入つたものだ。「賴むぜ」「傘を置いとくぜ」等の詞の輕妙自在、「深山の奥の」咽喉の圓轉自在。

かれ。何とも言へないね。只梅三郎の三味線は延壽には氣の毒だが、梅三郎の熱心を買つて名人に育てるやう延壽に言て呉れたまへ。

われ。さうなくてはならない。大薩摩筑摩川はどうだい。

かれ。六左衞門は隨分と叩くね。うまいには違ひないが處によると彈くのぢやない叩くのだ。だから絃が切れるんだ。仲の喜三郎はくせが無いから上達するだらう。勉强すれば。

われ。慢心しなければねえ。ところで終の青海波は藝者とは云へ唄も絃もよく揃つたもんだ。感心感心。

かれ。踊は六ケ敷いんだが政彌はうまいね。

われ。實に涙が出る。文字兵衞と延壽と政彌と、私は今日三度藝術の感極まつて泣いた。

かれ。この上は、邦樂調査に、義太夫（越路？）と新内（加賀太夫）と歌澤とを加へたいものだ。

われ。かうした古い酒は矢張り味がいいかういふ酒に醉つて死にたい。

（『讀賣新聞』明治四十四年五月二十四日）

## 邦樂演奏會（上）

東京音樂學校の邦樂調査囑託の各家元が發起で廿、廿一の兩日同校の演奏場で音樂會を開いた、出演の曲は一中、河東、富本、清元、常磐津、長唄、京唄、踊等で邦樂の現時盛んに行はれて居るもの衰微に近きものを殆ど一堂に集めた觀がある、集めて是を聽けば聲曲各派の興廢には自から頷かれる節も多く大勢が葬り去らんとする曲節を强いて保存に力めるのは其れほど重要の事か何うかと言ふ事も端なく考へたが其れは別の問題である

▲河東一中　初日はかけ合で源氏十二段を次の日には別々に曲を撰んで出したが兩者とも三味線は元より語り口にも格段の差は無く特に河東節が今日衰微の次第を明かに告白し而して忘れられんとする特徴が最も多く聽者に或る悲哀の感銘を與へた其れを一言にして言へば弛んだ調子、底を這ふ調子である

▲富本　も亦衰頽せる曲の一であるが其處には河東や一中と趣を異にした次第も有ることを認めなければ成らぬ前者に較べて確に生命あるべき曲節に富みながら常磐津清元等に蹴押されて居たのも一には家元の不明瞭と名人の現はれなかつたのが原因であつたに違ひ無い、併し今度の初日に高尾を語つた名見崎友喜や二日目に松風を出した志女壽等の女流は前者の奔放なる後者の堅實なる確に斯流復興の先驅者たる事は先頃新橋倶樂部出演以來の所信であつた

▲京唄　生田流の琴曲家米川親敏、加藤柔子の三味線で砧も東獅子も無意味に近いと思はるゝまで手事の延びたもの、或は此の徒らに長い曲の中に何物か有るやうにも思はれたが不幸にして確實に捕へる事が出來なかつた（牽一）

（『都新聞』明治四十四年五月二十七日）

## 邦樂演奏會（下）

▲常磐津　前日には文字太夫、志妻太夫、彌生太夫に三味線文字兵衛、和歌吉で忠臣藏二段目を出し次の日は顔觸れが變つて志妻太夫を立に彌生太夫、鳴戸太夫に三味線は文字兵衛が缺け八百八に上調子和歌吉の連中で出し物は釣り女であつた一體家元は何れの會にも好んで白物を出す人だが此の場處にまで斯るものを持ち出すと言ふのは氣が知れぬと言ふより餘りに智慧の無い話である、他に聽かすべき斯流獨特の節物は澤山有る筈だ、但し音量の無い家元に取つては節物を出すのが得策で無いのかも知れぬが果して然うとすれば前途は悲しむべきものである、されば二日目の釣り女に入を取られて了つたのも無理は無い、志妻の節には家元だけの纖巧に達して居ない處は有らうが總別語り物は音量が無くては話に成らぬ彌生、鳴戸等それ〴〵有望の人と思つた又三味線は二日目に文字兵衛を缺いて居たが上調子の和歌吉は達者に力めて居た

▲清元　延壽太夫、家内太夫、喜久太夫に三味線梅三郎、吉太郎の連中で吉原雀と保名を出した、保名は踊の地であつたが延壽の音量と調節とは動かぬ家元である此頃常磐津にも清元にも新派が出來たが彼れの新派と此れの新派とは大いに其の赴きを異にして居る、其れに付けても故梅吉の三味線は惜しい事をしたものだ

▲長唄　初日の筑摩川と言ひ次ぎの日の勸進帳と言ひ出し物に智慧の無さ加減は常磐津の家元と好い對照である

▲踊　は最上位の邦樂だ、邦樂演奏會に必ず踊を採るのは賛成であるのみならずもつと番數を殖やして貰ひたい位だ、藤間政彌は青海波と保名とを踊つた、青海波の振りは政彌自身の付けたものか何うかは知らぬが新曲の事だから振りも現代の名匠の手に成つたものであらう、乃で古名匠の殘した振りとの比較が取れたのは近頃面白い見物であつた、細い處は後に讓りて此處には初めて見た政彌の踊に就て言へば一體に手の細いのと首に力の薄いのは踊を小さくするの傾向となり絶えず曲線的でキマリの不明瞭なのは見た目に引立たぬ一つの摺足も勘右衛門には未だ遠いと思つたが三下がりの手踊りあたりは流石に奇麗なものであつた（牽一）

（『都新聞』明治四十四年五月二十八日）

## 邦樂演奏會評

野狐髯

○拙の聽いたのは二十一日（日曜）の方である。時間が三十分ほど遲れたので一中節「泰平船盡」は中ほどから聽いた。例に依つて序遊の喉と吟平の三味線はうまいものだ。一中節は序遊に依つて辛くも維持されて居るのであるが、どうか有望な人物を得て發展は出來なくとも湮滅せしめぬやうにしてゆきたいものだ。

○河東節「亂髪夜編笠」いつ聽いても捨てがたい趣はあるが山彦山子の技術には感服が出來ない。節廻しも音量も音色も今一呼吸といふ處でがつかりして仕舞ふのは如何にも殘念である。英子の上調子は大分ひどい。もつとしつかりと腕を錬へなければ河東節の体面にかゝはることゝ思はれる。何にしても稽古が肝腎だ。

○富本節「徒髪戀曲者」名見崎志女壽の聲は不相戀妖婉を極めてをる。三味線得壽齋の掛聲「ヨ、エ」といふのが何時聽いても氣になつて仕樣がないが、何とかもすこし穩な方法はあるまいか。あのピツチの高い、サビのある志女壽の聲に老いさらばいた胴間聲で「ヨ、エ」とやられると、あつたらを滅茶々々に蹂躙されて仕舞ふ。

○京唄「東獅子」所謂上方唄である。加藤米川二氏とも本手替手のあざやかな手さばきは十分伺はれたが、唄は最少ししつかりとやつて貰ひたかつた。珍らしいものだけに失望も大きい。

○番外とあつて新柳二橋の藝者連の清元を出した。先づ明治の藝者にもこ

のやうに藝道熱心の藝者があるかと思つて頻りに感服して仕舞つた。そして中々腕前が冴えてをる。呼吸も撥捌もしつくりした者だ。切に斯道の爲に自重を祈つておく。

○長唄「勸進帳」伊十郎、六左衛門例に依つて例の如き演奏、伊十郎を大砲、六左衛門を鉢たゝきなどゝ惡口いふものもあるけれど、技術の確なことは實に感服の外はない。

○常磐津節「釣女」文字太夫近頃めつきりと腕前をあげたのは喜ばしい。文字兵衛の三味線も大につとめた。花嫁を釣り上げるといふ可笑味、太郎冠者の滑稽も程を得て面白い。

○清元節「深山櫻及兼樹振」延壽の藝は益々圓熟して來た。終に廣言が誠になりかけて來たのは嬉しい、以前の妙に薄つぺらな上聲も段々穩になりわざとらしい節廻しもつゝしんで來たし。例の獨特の喉が息もつけない旨みを語るやうになつた。此分でせつせと勉强すれば立派なものになるであらう。政彌の踊は亦妙技神に入つてをる。

（『讀賣新聞』明治四十四年五月二十八日）

**明治四十四年五月二十七日、二十八日　第二十四回定期演奏会**

▲五月二十七（土）二十八（日）兩日午後二時より本校春季演奏會の催しあり。曲目左の如し。

一、合　唱

甲、神　言……（メンデルソーン作曲）（石倉小三郎作歌）

乙、逝ける友……（ベネーケン作曲）（乙骨三郎作歌）

二、絃樂合奏

コンチェルト、グロッソ……ヘンデル作曲

チェンバロ　教師　ロイテル

三、ピアノ獨奏　教授　橘糸重

短イ調コンセルト……シューマン作曲

四、絃樂合奏

甲、インタールーディウム……グラズーノフ作曲

乙、マドリガル……シモネッティ作曲

五、獨　唱　教師　ペッツオルト

歌劇「フィデリオ」中のアリア……ベートーヴェン作曲

六、ピアノ三部合奏　教師　ロイテル　教師　ユンケル　教師　ウェルクマイステル

……ブラームス作曲

七、ピアノ獨奏　教師　ロイテル

カルナヴァル……シューマン作曲

八、管絃七部合奏……ベートーヴェン作曲

（『音樂』學友會、第二巻第七号、明治四十四年七月、六三頁）

音樂演奏曲目梗概　第十三

一、合　唱

甲、神　言　メンデルソーン作

乙、逝ける友　ベネーケン作

甲は詩人 Joh. Peter Lange の詩（一八〇二年作）に Friedrich Burchard Beneken の附曲せるもの、民謠として有名なり。ベネーケン（一七六〇―一八一八）はハノーヴァー附近の僧院に牧師たりし人にして其の在職中數種の唱歌集を出版したることあれども、別に作曲者として名ある人にあらず。唯此の小歌曲 Den Entschlafenen のみは廣く世人に迎へられたり。曲は美しくして淋しみを籠めたり。

乙はロマンチツク派の樂家メンデルソーン（一八〇九―一八四七）の作なれども昔風の聖唱歌の體に作られたれば、古雅の趣を有す。即ち歌聲が樂句の切れ目毎に止まりて、又た新になり、其の新たなる毎に和聲の轉調し行く處に舊き教會唱歌の趣を示せり。

歌詞

神言

天地（あめつち）と廣き　神のめぐみ
苦惱（なやみ）は見（み）じ、正義人（よきひと）
頼みかけよ、たすけ乞へと
言よせ給ふ　神のめぐみぞ
かしこきや。

逝ける友

一、

土の中永久（とは）の闇に
靜かにも眠るか君
墳墓（おくつき）に花散りて、
月もよき　此の宵を。

二、

青白き塚の石を
抱きつゝ獨りたてば
涙なく歌もなく
冷え行くや我か胸も。

## 二、絃樂合奏

コンチエルト、グロッソ　　ヘンデル作

ヘンデル（一六八五―一七五九）の偉業は主として『メシアス』等の神事樂に存するなれども、器樂の曲にも今日に傳はれる傑作なきにあらず、こゝに奏する合奏曲は其の中にても分けて秀逸の作といふべく、眞の藝術品に缺くべからざる「優雅と威嚴と」の二特性を備へたり。コンチエルト、グロッソ（大コンチエルト）とは昔風のコンチエルトにして其の頃コンチェルチノ（小コンチエルト）と區別せられ居たり。後者は唯だ數多の獨奏樂器の相競ひて同時に奏する曲を指し、前者は之れに合奏樂器の伴へるものを指すなり。此の區別は十七世紀の末葉に起りたることにしてヘンデルの時代即ち十八世紀の初半にも此の名稱行はれたり。今日のコンチェルトとは異りて四、五、乃至六曲部より成り、其の中一曲部は通例フーゲ或はフーゲ風に作られ、又た一曲部は舞踏曲（本曲にてはミュゼット）に作られたり。されば昔風のスイトの體に作られたるものといふべし。

本曲の第一曲部は表情に充てる緩調（短ト調）にして聖唱歌を聞くの思あり。終りて第二は快速なるフーゲ體に移り、次で稍緩なるミュゼットとなる（ミュゼットの中部進行は稍快速なり）。之れに次ぐ快速活潑なる曲部に於て獨奏ヴァイオリンが他の絃の指彈に伴はれて跳躍する所聽者の耳を惹く。最後の快速調は極めて活氣に富めり。

## 三、ピアノ獨奏

ピアノ、コンセルト（短ト調）　　シューマン作

徹頭徹尾抒情的なりし樂人シューマンの傑作は第一其の美はしき小歌曲に存し、第二には早年期のピアノ樂に存す。大規模なる管絃樂は其の得意の領分にあらず。其のシムフォニー四篇の如きは間々着想の卓越せるものあるに關せず、樂器編成法に於ける缺點の爲めに今日は餘り顧みられざるに至れり。唯だ茲に奏するピアノ、コンセルトは依然として昔日に異らざる愛賞を受けつゝあり。或は所爲く、「ベートーヴェンのコンセルト以來最も秀美のものなり」と

コンセルトは言ふまでもなく獨奏樂器と管絃樂との相競ひ相爭ひて奏する如き曲體をいふ。而して獨奏部は例規として演奏者の手腕を示すに適當なる樣に六ケ敷き技術を含めり。又た第一曲部又は終曲部の終りに近き部分に於て演奏者の即興演奏を許容せるも此の曲體の特徴なり。但し本曲には作者自ら其の部分を書き記せり。管絃樂の代りに今回は他のピアノを用ふ。

茲に奏する第一曲部（即ち表情ある快速調）は千八百四十一年の創作に係り最初は『ピアノと管絃樂との短イ調ファンタジア』といふ名稱にて現はれたるを後四十五年に至り他の二曲部を附加して之れを「コンセルト」として發表せり。本曲に就て殊に注目に値する一事は本曲の全部が唯だ一の樂句より構成せられ居ることゝ今一つは曲趣が奇妙にメンデルソーン風なること是なり。但しそは剽竊を疑はしむる程に似通へるにあらずして、寧ろシューマンが其の崇拜せるメンデルソーンの感化をば此の頃より受け初めたるを示すものに過ぎず。樂器法と構造とに至ては純然たるシューマンの作品にして、殊に其の構造に於ては後年コンセルトとして表はれたる時に特に樂界の注目を惹きたるが如し。（上述の如く本曲は初めよりコンセルトとして創作せられたるに非るが故に其の曲體は嚴密なる意味に於てコンセルトと稱すべきものにあらず。）

## 四、絃樂合奏

甲、インタールーディウム　グラズーノフ作

乙、マドリガル　シモネッテイ作

甲乙共に最近樂家の作に係る。グラズーノフ（一八六五―）は露都ペーテルスブルクの人十六歳にしてシムフォニーを著してより以來夥多の作曲をなせり。九十九年以來同市音樂學校の作曲法の教授たり。インタールディウムは挿間曲の義。乙のマドリガルはもと十四世紀の頃プロヴァンスに起り延て伊獨諸國に擴がりたる四句乃至十六句よりなる牧歌なりしが十五世紀に至りて此の名は三乃至七重音なる俗樂合唱歌の名となり嚴肅なる聖唱歌に對立せり。其の最盛期は一五二〇―一六五〇年の間にありとす。十九世紀に至りてレンネル（Renner）の牧歌四部合奏など起りて再び樂界に迎へられたり。此に奏するマドリガルも弦樂四部を中心とし、これにバスの指彈を加へたり。曲趣優美にして如何にも抒情的なり。

## 五、獨唱

### 歌劇「フィデリオ」（Fidelio）のアリア　ベートーヴェン作

フィデリオはベートーヴェンが作曲したる唯一の歌劇なり。ベートーヴェンは歌劇を嫌忌すとは誤れる解釋なり。彼は屢々歌劇作曲の目的を以て非常に多くの劇詩を精査したりしが、遂に一も彼が意を充すに足る者無かりしなり。されど或批評家が獅子は一疋なりとも獅子の兒を生むと謂ひしが如く、實にフィデリオは世界最大歌劇の一たるを失はず。

ベートーヴェン嘗て維納に在りし時千八百四年維納劇場長ブラウン男爵より一歌劇の作曲を依頼されたり。彼は之に應ぜんが爲め特にゾンライトナー（Sonnleithner）に依りて飜譯せられたる佛蘭西の詩人ブイリー（Bouilly）の劇詩「レオノール一名夫婦の愛」（Léonore ou l'amour conjugal）を採用せり。此劇詩は既に彼以前に於て音樂者ガヴォウ（Gaveaux）及びパーエル（Paërs）等に依り再度作曲せられたる事あり。ベートーヴェンは千八百五年の春作曲にかゝり、夏には完成せり、かくて同年十一月二十日「フィデリオ」の標題の下に初めて公衆の前に上場せられしが、殆んど何等の喝采も得る能はざりき。此最初數回の演奏に依りて知られたる缺點は其後改作せられ、翌六年三月には再度上場せられて幾分の成功を博したり。其後千八百十四年には更に歌詞、音樂共に大なる改造を加へられ、三月二十三日に大々的の結果を以て演奏せられたり。是れを現今のフィデリオと成す。

### 歌劇「フィデリオ」の筋

歌劇「フィデリオ」は二幕物にして其筋は頗る單純なり。西班牙のセヴィルラ市より數哩の地に、壓制を極めたる知事ドン、ピツァルロの監督せる牢獄あり。フロレスタンなる義士知事の暴横を憤り、之が證據を携帶して時の中央政府に直訴せんと出立せし處を、途中にてピツァルロの爲に捕へられ、此牢獄の最下層に呻吟するの悲運に陥れり。ピツァルロは其典獄

ロッコに命じ、食物を減じてフロレスタンをして餓死せしめんとせり。家に在りたるフロレスタンの妻レオノーレは其夫の變事を知り、必定此牢獄に打込まれたるを想像し、遂に男裝してフィデリオと名乘り、巧みに此牢獄の典獄の助手と成りすませり。かくて其勤勉と怜悧とに依りて漸時に典獄の信用を博し、後には此最下層の牢獄に入るを許さるゝに至りぬ。ピツァルロは大臣の巡視以前に此無辜の罪人を殺して證據を湮滅せしめんと欲し、先づ典獄ロッコ及び助手フィデリオをして古瓶を掘らしむ。かくていざフロレスタンを刺さんとするの一刹那、今迄フィデリオとして働きし妻のレオノーレは突如としてピツァルロの前に立ち塞り、短銃を向けて其夫を救はんとす。此時勇ましく喇叭の聲響き渡り大臣の到着を知らす。かくて殘忍なるピツァルロの犯罪暴露し、レオノーレは神聖なる愛の力を以て夫を此窮地より救ふと云ふ筋なり。

本曲の位置

此處に演ぜられんとするアーリアは第一幕の中央第八段に位し、啻に此歌劇中のアーリアとしてのみならず、全音樂界に於ける最大傑作の一に屬す。第七段に於てレオノーレの密かに立聞きするとも知らず、知事ピツァルロは典獄ロッコに金を與へて獄中のフロレスタンを殺さん事を命ぜしが、ロッコの是を拒むに及び己れ自ら彼を刺さん事に決し、明朝其準備を成す可きを言ひ附けて去れり。續いて此第八段に於て是を聞きたるレオノーレ愈々危機の切迫を知り、先づレシタティーヴ(Recitative)に於て殘忍なるピツァルロを恨む、されど次のアーリアに於て神聖なる愛の最終の勝利を得べき希望と自信とを述ぶ。

## 六、絃樂三部合奏

セレネード　　ベートーヴェン作

英語のセレネードは獨語の同綴のゼレナーデに等しく伊語のセレナータ(Serenata)に淵源し、セレナータは伊語の晩といふ義に由來す。邦語假りに譯して黃昏曲と成す、黃昏時戸外に於て——殊に愛人又は敬する人の窓下に於て——奏する樂曲の意にして聲樂・器樂共に有り。されど近代に於ては主として器樂の方重んぜられ、語義と全く關係無き一種の器樂形式を構成するに至れり。ハイドン、モツァルト時代には戸外用として適せしめんが爲めに多くの場合若干の管樂器を採用したりしが、後室内に於ける演奏會用として作曲せらるゝに至りて、絃樂器のみのもの漸やく其の數を增加せり。其の初めセレネードの特色は對位法の如くに凡ての樂器が幾分の程度に於て獨立旋律を奏するにありしが、近代に於ては此の特色を失ふに至れり。唯だ現今に於ても尙ほセレネードの特異なる性質として殘留するは、そがソナータ又はシムフォニーよりも通常多くの樂句(Movement)を有する事と其各樂句の開展形式がシムフォニー又はスイトに比較して一層簡單自由なる事と、概して其の中に舞蹈曲風の樂句の存する事との諸點にあり。其他第一樂句と最終樂句とが行進曲風の形式を有するも古來の一特色にして此處に演奏せらるゝ本曲も亦然り。要するにセレネードとは其形式上より見るときは約四つ以上の餘り關係なき諸樂句の雜然たる集合體と見る可く其スイトと異る所は唯後者が一樂器の樂曲なるに反してセレネードが數個の樂器又は小管絃樂用の樂曲なる點に存す。此處に演奏せらるるセレネードはベートーヴェンが二十七八歲即ち千七百九十六七年頃最初の維也納滯在の時の作にして、彼が漸やく自己の創作力を自覺し始めたる時代に作曲せられたる者なり。されば其形式的方面より觀る時は尙全然モツァルトの羈絆を脫し居らざるが如し。作としても餘り顯著なる方には有らざれども又た後のベートーヴェンを想ひ起さしむる點無きに非ず。

## 七、ピアノ獨奏

カルナヴァル(作品第九)　　シューマン作

シューマンの洋琴曲の秀美なるものは大抵若年期の作なり。玆に奏する『謝肉祭』も其の一にして千八百三十四年より三十五年にかけて作曲し、三十七年に世に現はれたり。こは廿二の短曲を集めたるものにして、其の創作の由來はシューマン自身の言に由れば次の如し。

彼の樂友に Ernstein v. Fricken 孃といふがありて Asch と呼ぶ町に住ひ居たり。然るに此の Asch という文字は偶然にも音階中の音名のみを含み。又たシューマン自身の苗字の中に存する字のみよりなれり。この理由より A. S. C. H の四音を基とせる曲を幾つか作り見んとの考を起し、

一つ宛別段の意味も無く作りたるが、これ等の完成せる時は恰も千八百三十五年の謝肉祭の時節に當りたるを以て、其の全部に「謝肉祭」の名を冠せしめたるなりといふ。彼は友人 Moscheles に宛てたる書翰の中に述べて曰く『曲の標題は後より付けたるなれども、音樂は實際其の意味を表はし居るにあらずや』と。然り彼の言ふ如く本曲はおのづから祭日に於ける假裝舞踏會の歡樂を描き出だしたるものとして聞くを得べし。廿二曲の題名は極めて奇妙なり。

1. Préambule(前奏曲) 2. Pierrot(人名) 3. Arlequin(人名) 4. Valse noble（上品なる圓舞曲） 5. Eusebius（人名） 6. Florestan（人名） 7. Coquette（浮氣もの） 8. Réplique（繰返し） 9. Sphinxes（謎） 10. Papillons（胡蝶の舞） 11. A. S. C. H.—S. C. H. A.（Letters dansantes（文字の舞踏） 12. Chiarina（人名） 13. Chopin（人名） 14. Estrella（人名） 15. Reconnaisance（挨拶） 16. Pantalon et Colombine（共に人名） 17. Allemande（古き舞踏曲） 18. Paganini（人名） 19. Aveu（誓約） 20. Promenade（逍遙） 21. Pause（休憩） 22 Marche des Davidsbündler contre les philistins（俗人に對するダヴィド結社員の突貫進行曲）

此の内、第一の前奏曲を除けば他は大抵舞踏會に出席したる人名と其の會にて起れる事件とを題にせり。人名の中には彼の友なりし樂人の實名もあり又た彼の空想中に存在したるダヴィド結社員の名（(5)(6)(12)）もあり、前述のフリッケン孃はエストレラといふ名にて(14)に入れり(7)の浮氣ものは誰れを指したるにや明かならず。此れ等の人々集まりて歡樂を盡す間に挨拶誓約逍遙等の出來事あり、其折々に(4)(17)などの舞踏曲の響聞ゆ。(11)にはA.S.C.H.の四文字が騒がしく舞踏して幽靈の消えさるは不思議なり。(10)の胡蝶の舞は彼の作品第二の洋琴曲「胡蝶」の思ひ出の如く疾過し、又た(6)に於ては胡蝶曲の第一番の一節を其の儘挿入せり。最後の曲は四分の三拍子にして然も進行曲の趣を有するもの、一種諧謔的、表徴的の意味を含めり。俗人の表徴として獨逸の古き「老父の踊」を用ゐあり。(9)のスフィンクスは單音の長音符數個より成りたる曲なるが、普通演奏せざれば眞の無言曲なり。其の何人を指したるかはスフィンクスの如く不可解なり。

## 八、管絃七部合奏

ベートーヴェン作

此管絃七部合奏曲はヴァイオリン、ヴィオラ、セロ、ダブルベース、クラリネット、バッスーン及びホーンの七部より成り、ベートーヴェンが尚モツァルトの羈絆を全然脱せざる三十歳の時（千八百年）の作に係る。同年四月二日維納府劇場附屬音樂學校に於て彼自ら其自作の第一シムフォニー及び第一洋琴司伴樂と共に初めて指揮演奏したる者にして、當時の墺國皇帝フランツ一世の皇后マリア、テレージアに奉呈したる樂曲なり。構造のモツァルト樂風に類似して單純なるが爲公衆に理解され易く、從て當初より音樂界の歡迎を受けたる事大なりき。

本曲は左の六樂句より成立す。

1. a) Adagio. E flat major. $\frac{3}{4}$.
   b) Allegro con brio. E flat major. $\frac{4}{4}$.
2. [Adagio cantabile. A flat major. $\frac{8}{9}$.]
3. Tempo di Menuetto. E flat major. $\frac{3}{4}$.
4. Tema con Variazioni, Andante. B flat major. $\frac{3}{4}$.
5. [Scherzo. Allegro molto e vivace. E flat major. $\frac{3}{4}$.]
6. [a) Andante con moto alla marcia. E flat minor. $\frac{3}{4}$.]
   [b) Presto. E flat major. $\frac{4}{4}$.]

此處に演奏せらるゝは右の中括弧無き第一、第三、第四の三樂句なりとす。是が音調の特質を述ぶれば普通長變ホ調は愛、信仰、等の情を、長變ロ調は希望渇仰等の情を表はすに適せりとせらる。

1. a) Adagio. E flat major. $\frac{3}{4}$.
   緩徐に、長變ホ調、　四分の三拍子、

此部分は簡略なる序曲を作成す。續いて直ちに

   b) Allegro con brio. E flat major. $\frac{4}{4}$.
   快速に、活潑を以て、長變ホ調、　四分の四拍子

の部分に入る。樂式上通常のソナータ形式を有す。最初ヴァイオリンに現

はるゝ者第一主題にして、此主題を記憶する時は此全樂句を容易に理解するを得可し。蓋し此樂句の進行中幾度か其回想旋律の開展に遭遇すればなり。第二主題は長變ロ調にして稍嚴肅なる旋律なり。開展部も可なり大規摸の構造を有す。

3. Tempo di Menuetto. E flat major. $\frac{3}{4}$.

メヌエットの速度にて、長變ホ調、四分ノ三拍子、

此メヌエットの旋律は之と少しく形を變じて作品第四十九の第二に於ける洋琴ソナータのメヌエットにも表はれたり。傳ふる所に依れば此ソナータは彼自身發表するの意志無かりしに彼の兄弟に由りて密かに公けにせられたるなりと。

4. Tema con Variazioni Andante. B flat major. $\frac{3}{4}$.

變奏附主題、併歩に、長變ロ調、四分ノ三拍子、

チェルニーの説に依れば此主題はライン河附近の民謡なりとせらるれどもそはベートーヴェン學者として有名なるセイヤー（Thayer.）の反對する所なり。五個の變奏中短變ロ調（B flat minor）の第四變奏最美なり。此變奏はホーンが初めて入る事に依りて直ちに知らる。ヴァイオリン、ヴィオラは不安なる三連音符を奏しつゝ上行して漸時聽者に逼るが如く、セロとダブルベースは Pizzicato にて暗澹たる深みへと沈み、ホーンとクラリネットとバッスーンは交代しつゝ同音にて恐るゝ又悲しげに其上を渡り行く。悉く晩年に於ける幽玄なるベートーヴェンの藝術の豫覺ならざるは無し

〔批評および関連記事〕

演奏會短評

▲純なる素人の感じ（本校春季演奏會）

一　合唱一及二

眼鏡の人

「聽いてから日が經つた。ドッ〳〵〳〵と迫って來る樣なバスの聲と黑い髪のタクトをとる人の動いてる頭だけが僕の頭の中に殘つてる」

舊劇の人

「總躰（曲目全部の意）を通じて何とも云へない程面白く興味を感じた」

好劇の人

「僕には格別何とも感じなかつた、歸りにはもうすつかり忘れて居た」

洋畫の人

「灰色と黑とトン（洋畫家のテクニック）の中から聞へて來るバスの聲を面白く思つた」

彫刻の人

「僕も聞いてから日が經つたので、たゞぼうつとして居る」

夜の人

「なんともなかつた」

二　絃樂合奏

洋「分らない」

好「唯ぽつとしたものだとしか思はれなかつた」

彫「はつきりはして居た、さすが外國人だと思つた」

三　ピアノ獨奏

愛「感じない」

好「橘さんの方が伴奏でペツオールド夫人の方がソロをやつてる樣に思はれた程、橘さんはいた〳〵しくてペツオールド夫人が振つてるのばかりが目にとまつた、音はよく聞かなかつた」

彫「プログラムを見なかつた、又音樂會にも澤山に行つた事もない僕はペツオールド夫人の獨奏だと思つたら終になつて、やう〳〵さうでない事が解つた。日本人に少くともペツオールド夫人位な曲の感激から起る表情がほしいと思つた、日本人がピアノを獨奏して居ると機械的に唯指だけ動いて居るとしか思はれない」

四　絃樂合奏、乙、

好「美しい若い女と、美しいよく晴れた日に、廣々とした原で青い草の上へ寢ころんで、つかんでなげた樣なふは〳〵とした雲のかたまりを眺めて居る樣な感じがした、まあ青い若さをそっと抱きと云ふやうな長詩的

のものに、あたゝかみを加へた様な感じだね」
夜「こう云ふものに接した時、いつでもそう思ふのはやる人の顔がいやなんで氣持がそがれる事だ、」
齲齒の人
「ピティカットが非常に愉快だつた」

五　獨唱

好「怖しい感じがした、顔を見るといやになる、後向にでもなつて唱はれたのなら少しは何とか思はれるだらうがね」
夜「なんだか知れねえが、つよいもんだなあ」
彫「御年のせいか知らないが實に苦しそうだつた」

六　ピアノ三部合奏

好「ヴアイオリンを彈く人のしかめ顔が氣になるので曲なんか聽かなかつた」

七　ピアノ獨奏

彫「聽いた時は全く夢の様で覺えがなかつた」
愛「この人については何時でもテクニックに感心する此時もそうだつた」
好「二度目だつたので、其の上梗概をくはしくよんだので初ての時より面白く思つた」（談）

（『音樂』學友會、第二巻第七号、明治四十四年七月、三六頁）

## ○音樂學校演奏會

東京音樂學校にては廿八日午後二時より同校大講堂に於て第十三回音樂演奏大會を開催したるが記者は遲刻して第二「ヘンデル」作「コンチエルト、グロツソ」より聽く、之はヘンデル作中の秀逸にて絃樂合奏なり第一曲部は宛然ホーリー、ソングを聽の思ひあり第二曲部は輕快なる速調に移り間々獨奏ヴアイオリンの潑溂として跳躍する所頗る聽者の耳を惹きたり第三は教授橘糸重女史のピアノ獨奏にて曲はシューマンの楚々人を感動せしむる抒情的の短調コンセルトなり奏者は音樂家にして又歌人たる橘女史のことなれば優婉なる曲調と餘韻嫋々たる女史の演奏と互に相助けて洵や天衣無縫の絶妙なる樂の音の漂ひの裡に万堂の聽衆を包み坐ろに人を夢幻境に導くの手腕甚だ凡ならずと云ふべし第四はグラツオアノフ作インタールーデイウムとシモネツテイ作マドリガルとの二曲の絃樂合奏ありグラツオノフは露國の音樂家にて天才の稱あり二曲とも喝采を博したり第五は雇教師ペツツオルド夫人の獨唱なるが曲は樂聖ベートーヴエンの歌劇「フイデリオ」の一節なり夫人は滿身の熱誠を傾て此難曲を自由に演じ了れり第六は雇教師ロイテル氏のピアノ雇教師ユンケル氏ヴアイオリン雇教師ウエルクマイステル氏のセロの三部合奏にて曲はベートーヴエンのセレナーデなり名にし負ふ三氏のことなれば惡からう筈なく喝采鳴りもやまざりし事固より當然なり第七はロイテル氏のピアノ獨奏なるが曲はシューマン作カルナヴアルにて大喝采第八ベートーヴエン作曲の管絃七部合奏ありて散會したるは午後四時半頃なりしが近來稀に見るの好コンセルトなりし（一記者）

（『中央新聞』明治四十四年五月二十九日）

## ●東京音樂學校演奏會
### 好成績の演奏

東京音樂學校の音樂演奏會は廿八日午後二時より同校樂堂に於て開かれたり第一の合唱は生徒の出演にて餘り振はず先づ義太夫の簾内といふ格次の絃樂合奏ヘンデル作のコンチエルトグロツソは旋律變化に富みて聽衆の耳に頗る面白く橘教授のピヤノ獨奏はペツツオールドのピヤノ伴奏により引立てられたる事數段、次にペ教師の獨唱はベートーフエン歌劇中より拔けるアリアにして常よりも數段勝れたる上出來此日は安藤教授缺席しロイテル氏代りてピヤノを又ユンケル教師ヴアイオリンを、又マイステル教師セロを彈きて演奏したる三部合奏之も頗る聽くべきものにしてロ氏の稍常ならず聞えしは突然の代理なれば致し方なく其代り氏のピヤノ獨奏シューマンのカルナヴアルは圓轉の妙を極め滿場水を打つたる如く傾聽したり最後の管絃七部も賑やかにユンケル教師のタクトも此日は一段と見勝りた

るは嬉しかりき何と言つても本場所なれば此學校の演奏會は他に類のない面白い事なり此日は好晴なりし代りに時候も餘程暑くして音樂會には少し不適當な程なりし故にや來會者例の半ば程なりしは惜しいものなり斯くて四時二十分散會したり

（『時事新報』明治四十四年五月二十九日）

## 東京音樂學校音樂演奏會評

由來同校の精粋と稱せらるゝ大管絃合奏を一回も聞き得ず物足らぬ心地がしたが今回の樣な曲目も一寸風變りで面白い。ユンケル氏が珍しくもヴアイオリンを奏しながら指揮を取られたが安藤教授の見えなかつた爲か、定めて骨の折れた事だらう。

第一合唱の甲神言（メンデルソーン作曲）及乙逝ける友（ベネケン作曲）は共に先日同校學友會で演奏したが前同斷で特筆すべき程でもない、只人數が少し增して大分卒業生も交つたらしかつた位だ。

第二の絃樂合奏ヘンデルのコンチエルト、グロツソは中曲趣派手でなく落付があり餘りクラシツクな爲め一寸素人には味ひ難い、ロイテル氏のチエンバロ獨奏は非常にリズムが正確で音がいゝから心地よく聞いた、全部五つの樂句より成立つ本曲中最難とする第四のアツレグロを省略したのは何故か。

第三、橘教授のピアノ獨奏（短イ調コンチエルト、シユーマン作曲）は別に不出來とは思はぬが伴奏（オルケストラ代用）ペツツオールド夫人が餘り亂暴に叩き付け伴奏の本領を忘れた爲め何れが主なるかを疑はしめたのは實に遺憾だ。

第四、絃樂合奏の甲インテルルデイウム（グラツオノフー作）は、此前帝國ホテルでユンケル氏、外三名のクワルテツトで聞いたのに比し人數多きだけ不揃の點もあり餘り成効とは云へぬが曲は何時もながら好い感じを與へる。乙マドリガル（シモネツテイ作）は只極めて輕快で一般に俗受がした樣だ、大した價値をも認めぬが今日の如き大曲ばかりの中に挿入したのは息拔になつて思付だ上出來。

第五、ペツツオールド夫人獨唱歌劇「フイデリオ」中の一節初めのレシタテイヴでよく其の感想を現はし得た、アリアに入つてからも決して惡くないが曲趣を充分に表示せんとするには聲が餘りに美しくない。

第六、絃樂三部合奏は安藤教授不參の爲めピアノ三部と變更しロイテル氏を加てブラームスの作品第八を奏した、之は東京フイルハーモニー會で演じたものだが不相變（あひかはらず）申分のない出來で、特にロイテル氏のピアノには敬服の外なし、元來ブラームスの曲は歐洲にても至難とされてはをるが吾人は相當の用意を以て對すれば必ずしも不可解のものでないと悟つた。

第七、ピアノ獨奏、カルナヴアル（シユーマン作曲）、ロイテル氏は此大曲を美事にやつてのけた、態度と運指法及音量は何れも完全無缺、あらゆる讃辭を呈す。レピートをせず、或部分を省略した箇所もあつたが尙三十分近くを費した。

第八、管絃七部合奏（ベエトベン作曲）も僅かにヴアリエーションのみであつた、第一ヴアリエーションのヴイオラのソーロはもつと落付てほしい、第三ではクラリネツトとフアゴツトに少し變な所があつた樣だ、フアゴツトにはあれ以上の音量は望めないものか、第四ヴアリエーションではホルンが可成甘く、丸い音を出したが尙少しのクレツシエンドを欲しかつた。

演奏臺の亂雜は實に見苦しい殊に第五、第六、第七の如き曲を奏する時に一層感興を殺（そ）がれる今少しく整頓しては如何、夜の音樂會を同校で開きたいと云ふのは多年期待した所だが實現されるのは幾年先か否、其勇氣ありや。（燕）

（『讀賣新聞』明治四十四年五月三十一日）

## 近來になき演奏會

地久の佳節絲濃（こまか）な上野の杜に近來にない演奏會が開かれた、出演者はユンケル、ウエルクマイステル、ロイテル、ペツツオルド、橘の諸氏

▲絃樂合奏　チエンバロはロイテル氏で出奏者は教師及び若手樂手の粹、曲はヘンデル傑作の一で優雅と威嚴の二特性を備へて居る「コンチエル

ト、グロツソ」、表情的な緩調に始まりフーゲ體の快速調に移り、次で稍緩なるミユゼツトとなる中々に賑かな變化に富んだ曲、ユンケル氏はバイオリンを執つて司樂臺に立ち獨奏部を奏し且つ導く、其態度何時もの如くでなく、極めて血が籠つて居たのに少からず敬服した

▲橘絲重氏のピアノ獨奏　曲はシユーマンの「ピアノ、コンセルト」、管絃樂の代りにペツツオルト氏がピアノを以て勤められた橘氏當日の出來榮えは中々に振るつて居た其寸毫の隙のないあたり、聽者は譯もなく醉はされて居た

▲ペツツオルト氏の獨唱　珍らしいベートーウエン作の歌劇「フイテリオのアリア」中の義の爲に獄に投ぜられ酷な司獄官より將に射殺されんとする良人を妻が身を以て救ふたと云ふ愛の勝利の場であつて、熱血迸る最高潮の如き此人ならではと思つた、併も表情はいつもの如き嫌らしき處がなかつた、ペ夫人は矢張ゐらい

▲ロイテル氏のピアノ獨奏　廿三の短曲から出來て居るといふシユーマンの「謝肉祭」で變化あり且つ輕妙な曲である、夫れを手のさへた氏が奏したのであるから、惡からう筈はないが、氏は今回何故に斯樣な曲を選ばれたかは知らぬが、是等はペ夫人かユ氏の畑けのものでなからふか、余は寧ろ氏の手から壯大又は森嚴なる曲を聽きたかつたのである

▲此外安藤氏の缺席に依て急に變更されたピアノ三部合奏もあつた、管絃七部合奏もあつた、是等はいつも聽かされるのと大した差はなかつた、校友學生等の合唱は例の上野一流のもの「神言」は兎に角「逝ける友」は寧ろ出さぬがよかつたと感ぜられた（庭栖）

（『都新聞』明治四十四年六月一日）

**明治四十四年六月二十九日　伊澤修二還暦祝賀演奏会**

六月二十九日　伊澤修二還暦祝賀演奏會　於東京音樂學校

一、伊澤修二還暦祝賀會祝歌　本校生徒

一、ピアノ獨奏　神戸絢子

スピンネルリード　ワグネル作

一、ピアノ、ヴァイオリン合奏　ファンタヂア　幸田延子　安藤幸子

ビユータン作

（『本邦洋樂變遷史』三浦俊三郎著、七四八頁）

●伊澤翁の還暦　貴族院議員伊澤修二氏は去る明治十一年愛知縣師範校長を拜命して以來、東京府師範、東京音樂、東京盲啞、高等師範の各學校長に歷任し、我教育界に貢献したる事深く本年は恰も還暦に相當するより男爵辻新次氏以下重なる教育家來月第一二の日曜中何れかを期し東京音樂學校奏樂堂に於て盛んなる祝賀會を兼ね謝恩會を擧行する由伊澤氏は我樂界最初の開拓者なれば音樂家は特に謝恩の意を表せんとて音樂學校長湯原元一氏を始め島崎赤太郎、小山作之助、幸田延子、山田源一郎の諸氏協議の上紀念品を贈呈するのみか頌德歌を新作し當日晴れの式場にて音樂學校生徒に合唱せしむべく目下委員はその作曲中なりと尙小山作之助氏は語つて曰く伊澤翁は我邦最初の洋樂皷吹者で去る十一、二年の交熱心洋樂の普及に盡力し文部省が音樂取調掛を設けらるゝや直に擧げられて掛長となり盛んに外國教師を雇傭し後進の傳習に努めた彼の有名なる小學唱歌集は此頃氏に依て編纂されたものである其後幾何もなく洋樂は全國汎く普及され小學校其他の正科として課せられた結果教員養成の必要上同掛は一躍して今日の音樂學校に改めらるゝに至つた、翁が斯界から音樂の神として崇敬されて居るのも至當な事である云々

（『音樂世界』第五巻第六号、明治四十四年六月、八頁）

**明治四十四年八月十二日　夏季講習会演奏会**

八月十二日　東京音樂學校夏季講習會演奏會　於同校講堂

管絃樂歌劇イフヒゲニア大序グルツク作。獵夫の夢、トパテ作。カルメン雜曲集拔萃ビゼー作。等が演出された。

（『本邦洋樂變遷史』三浦俊三郎著、七四九頁）

**明治四十四年十月二十一日、二十二日　学友会秋季演奏会**

一、合唱　　會員

甲、宵の春雨　　吉丸一昌作歌　梁田貞作曲

乙、月　　瀧廉太郎作歌　同作曲

二、ヴァイオリン獨奏　　筒井ふさ子

ロッシーニの主題に基く替手（作品第八十九）　　シャール、ダンクラ作

三、聲樂三部　　高音部　薗部ふさ子　高音部　竹内うめ子　低音部　梁田貞

歌劇コーシ　ファン　トゥッテ中の一節　　モツァルト作

四、ヴァイオリン獨奏　　佐藤謙三

コンチェルティーノ中のアルレグロモデラート　　ジット作

五、聲樂二部　　高音部　中尾龍子　上低音部　原田潤

歌劇ドン　ファン中の一節　　モツァルト作

六、ピアノ獨奏

ワルトシュタイン、ソナタ（作品第五十三）　　ベートーヴェン作

休憩

七、獨唱及合唱　　會員

歌劇アルチェステ中の一節　　グルック作

八、オルガン獨奏　　池田阿隻子

パッサカリヤ　　バッハ作

九、ヴァイオリン二部合奏　　末吉雄二　兩角龍吉

ソナータ中のアンダンテ及アルレグロ（作品第二十八番）　　ヘンデル作

十、高音獨唱　　小笠原保子

歌劇フライシュッツ中のカヴァティーナ　　ウェーバー作

十一、ヴァイオリン獨奏　　田中久子

コンチェルト第八中のモデラート（作品第十三）　　ロード作

十二、ピアノ獨奏　　小倉末子

甲、ベルセーズ（作品第五十七）　　ショパン作

乙、インテルメツオ（作品第百十七）　　ブラームス作

十三、男聲四部　　第一次中音部　澤崎定之　第二次中音部　舟橋榮吉　第一低音部　原田潤　第二低音部　樋口信平

甲、騎士の別れ　　キンケル作

乙、小夜の歌　　マルシュナー作

番外ピアノ獨奏　　ペツォールド教師

甲、バラーデ（短と調）　　ショパン作

乙、カーナヴァル　グリーグ作
十四、絃樂合奏　會員
甲、ラルゴー　ヘンデル作
乙、ルール　バッハ作
番外ピアノ獨奏　ロイテル教師
パガニーニ、ヴァリエーション（作品第三十五）　ブラームス作

（『音樂』學友會、第二巻第十一号、明治四十四年十一月、五三～五四頁）

○此の日文部大臣長谷場純孝、福原次官、田所局長來聽、其他八百の聽衆である。第一部のヴァイオリンソロの二番と四番とは交代された。第二部の男聲四部は澤崎の急病のため、船橋が代つて獨唱した。ワグナーの『ローエングリーン』中のローマンスを唱ふことになつたら伴奏の譜がないため、メンデルソーンの『ダリーク、イツヒ、ウンター、デム、ボイメン』を歌つた。

ロイテルのピアノソロは米國大使館に用件が出來て一四番目に演奏された。第二日目は前日より三十分早く初めた關係かロイテル教師は自分の番に間に合はず、ペツツオールド夫人が代つてショパンの短と調のバラーデとグリークのカーナヴァルを彈いた。しかしロイテルが來て再びロイテルの獨奏もあつた。

○邦人創作曲の發表されたのは珍らしい。八番の甲オルガン二重フーゲは島崎教授が滯歐中の作で此の曲は第一のフーゲの主想（テマ）が終る後、第二の主想（テマ）が出てそれが終る時所謂縮奏（ストレット）部で第一、第二の兩テマが同時に現はれて終局になるのである。

合唱「宵の春雨」は、『降るや春雨宵の町、軒の燈火露にぬれて、柳は靜かにうなだるゝ、そことも知らぬ物の音はさびしきかな、消えてつゞき、つゞきて消ゆ、たが心を吹きすさむらん。』「月」は作歌作曲とも、故瀧廉太郎の作『ひかりはいづこ、かはらぬものを、ことさら秋の月かげは、などか人に物思はする。などか人に物思はする。あゝ鳴く虫も同じ心か　あゝ鳴く虫も同じ心か　こゑのかなしき。』

（『本邦洋樂變遷史』三浦俊三郎著、七五一～七五二頁）

## 學友會の演奏會について

「編輯室より」中にも書いておいた通り、今度の學友會の演奏會には邦人の手になつた創作を加へることにした。初めは第一部はすべて創作ばかりにし、第二部の方を從前通り歐洲作家の作品の紹介にしようと思つたのであるが、急にそうするには種々の困難があるので單に數曲に止めておいた。來年の春の演奏會にはもう少し創作の量を增してプログラムの色を新らしくして見る覺悟である。

洋人の手になつた曲の紹介にしても、合唱を除いては聲樂も器樂も大抵ソローばかりであつた。なるほどソローにはソローのいゝところがある、初歩の聽き手などにはソローの方が歡迎される。然し洋樂はメロディーの美の外に和聲の美を考へて作曲したものが多數を占めてゐるから、今度は少し耳さきをかへてアンサムブルを多くした。多少批難は覺悟の前である。只本當に音樂を聽かうと云ふ人の同情を得れば十分である。

（『音樂』學友會、第二巻第十号、明治四十四年十月、三三頁）

## 音樂學校學友會の演奏を聽く（十月廿一、廿二兩日）

孤絃生

初日は雨、二日目は曇。上野の樂堂には熱心な聽衆が溢れる程つめかけてた。會は梁田氏の「宵の春雨」故瀧氏の四季の曲中「月」の合唱で始まつた、梁田氏の指揮で春雨の隅田川を思ひ出し、澤崎氏のタクトで寂しい秋の夜の感じが教會樂の樣に響いた。どつちと云へば「月」の方が宜い。筒井ふさ子（本、三）のバイオリン獨奏は未だ云ふに足らない、云へば師の顏にも係はらう。三はモツアルトの劇コーシフアントウツテの一節で姉

妹の許嫁が二人の士官の出征の海邊に送ると云ふ筋。薗部ふさ（本、二）竹内うめ（本、二）梁田貞（本、三）の三部であつたが各自少々お天狗とかで獨唱を三つ合せた樣だ、特に女聲の二部が三度位で上降する邊は頗る混亂した音がする、ともあれ一生懸命だが氣合が乘らない。四は佐藤謙三氏（本、二）のバイオリン獨奏ジットのコンセルチノ中の急快調は割に損な曲だ、而し息もつかせぬ曲の進行に充分テクニツクを表はした、私は只だ氏の前途を祝福したい。五はドンフアンの一節でドンフアン伯がツエルリーナを誘拐する處。伯（原田助敎）ツエルリーナ（中尾龍子）の二部、私は伯の「汝の手を！我が愛者よ、共に我が城に行かずや」と唱ふのに醉ふた樣な氣になつた。而して能く考へると妙な物だ。五、山田多子（本三）のピアノ獨奏、ベートーベンのソナタで外國では此樣の曲が隨分音樂會に出るのだ。而し私は其あまり佛國式に彈かれた爲めかなつかしいベートーベンの顏を見る事が出來なかつた。切に終始一貫の練習を望む。七はグルツクのアルセステの一節、中島孃のレシタチブで始まる而して怒鳴り付ける樣なコーラスがお共をする、中尾龍子の歌がある、而して亦コーラスがお共をする、伴奏が如何にも非音樂的な音を立てるもつと面白いものだと思つたのに。八、池田阿隻子（本三）のオルガン獨奏バツハのパツサカーリア急に寂しい氣がする、而しよくひいて居た。九、末吉雄二、兩角龍吉兩氏（本三）のヴアイオリン二部合奏ヘンデルのアンダンテとアレグロ前のは古式の角のある樣なので中々困難のであらう、アレグロは達者にやつてのけた。十、小笠原保子（本三）のソプラノソロ、ウエーベルの射士中の歌旋、少女アガーテの許嫁の身の成功を祈るくだり。此人はソルデイノを掛けた樣な處に頗る甘い處がある、何となく聲に曳かれて行く、而し普通の聲の時とのつりあひが少々耳さわりだ。平均にやられたらさぞ良いだらう。十一、田中久子（本一）のヴアイオリン獨奏ローデの司伴樂のモデラート、ジットの夫に比すれば美麗なる歌旋に富む點に於て一個の長がある、雄健な演奏振り、たしかに氣焰を吐くに足る、孃は八歳より其の研究を始められ、佐藤氏は十七歳にして提琴に親まる、共に安藤敎授門下の秀才で未だ共に若い勉めよや。十二、小倉末子のピアノ獨彈曲はショパンの「子守唄」ブラームスの「間奏樂」である。ロイテル師を寫した樣な演奏振中々困難な二曲を樂に面白く奏せられたのには驚嘆せざるを得なかつた、ショパンの面影が見へる樣だ。孃も亦少壯天才の一人で今年豫科に入り直ちに本科一年に飛躍せられた人、研精練磨を望む。十二、男聲四部澤崎、樋口、（本三）舟橋、原田（卒業生）の「さよ歌」と「騎士の告別」である、第一日は都合で舟橋氏がメンデルソーンの「我は樹下に横はりて」と云ふのを唱はれた。二日目は曲目通り演奏された。「などてか遠く居ますや君、星の光も和みぬ、月もそが住家に舞ひつゝ沈むを……」の小夜歌澤崎氏の高くて苦しいせいでもあらうが……もう一息だ。「我は行かねばならぬ、さも一度接吻！我は皇帝の爲めに！」の別離の情を歌つた告別歌、相當に面白く聽かれた。時々A音があるので聲の苦しのは御苦勞〳〵。番外としてロイテル敎授のピアノ、パガニーニの替手（バリエーション）、ブラームスの快心の作で十八個程のバリーエーション遵麗とも典雅とも壯大悲歌とも快刀亂麻を斷つ樣だ。胸が清々した。而して尙ほ「謝肉祭の行進（アルレキニヨネ）」を加へられた。感謝にたへぬ。次の日は此の外にペツオルド夫人がショパンの「短ト調話曲（バラーデ）」を彈ぜられた。而して最後に大塚氏の指揮でヘンデルの「ラールゴー」バッハの「ルーレ」の絃樂があつた。ラールゴーは前日はユンケル氏二日目はロイテル氏が伴奏をされた。何でも二日目の方がいゝ。その大納りに納まつたのは成田屋とでも言ひたい。「ルーレ」は昔風の舞踏を忍ぶ草。凡てこうした會合を夢の樣にする。一般に進歩の跡は著しい。最後に私は當事者に望んで置く「世間をより以上に了解して欲しい。世流ともつと密接になつてほしい。今度はプログラムから舊流を打破してる樣に見へた。全校一致！是が音樂界に突進を企つる一大武器である。二日目には某博士から田中孃に花束を送られたそうだが牛若丸殿の騰煎で內々にすましたそうだ。氣短の江戸ツ兒に取つてはツマラヌ眞似だと思つた。吾人は樂友會同人の健康を祈り切に發展を望む。（終）

（『音樂界』第四巻第二号、明治四十四年二月、四六〜四七頁）

**明治四十四年十月二十二日～二十八日　学友会秋季演奏旅行（女子部）**

十月廿二日、午後六時四十分學友會女子部會員六十二名は、吉丸教授、岡野助教授、鈴木先生等の指揮の下に京阪、奈良、名古屋の各地へ向け、秋季大演奏旅行の長途に上る、一行の元氣頗る旺盛、各地に於ける演奏曲目、及び旅行日程は左の如し、

演奏旅行日程

| | | |
|---|---|---|
| 廿二日（日） | 午後七時半 | 新橋發（急行） |
| 廿三日（月） | 午前十時三分 | 大阪着 |
| | 演奏見學 | 宿泊 |
| 廿四日（火） | 午前八時三十五分 | 大阪發 |
| | 午前九時十五分 | 奈良着 |
| | 演奏見學 | 宿泊 |
| 廿五日（水） | 午前見學 | |
| | 午前十一時半 | 奈良發 |
| | 午後一時廿八分 | 京都着 |
| | 演奏見學 | 宿泊 |
| 廿六日（木） | 午前見學 | |
| | 午後二時五十七分 | 京都發 |
| | 午後八時三分 | 名古屋着　宿泊 |
| 廿七日（金） | 午前見學 | |
| | 午後演奏 | |
| | 午後八時十二分 | 名古屋發 |
| 廿八日（土） | 午前七時二分 | 新橋着 |

以上

演奏曲目（名古屋、大阪）

| | | 會員 |
|---|---|---|
| 第一部 | | |
| 一、合唱 | | 文部省小學唱歌集 |
| 甲、オキアガリコボシ | | 卷ノ一 |
| 池の鯉 | | カール、シューマン作曲 |
| 乙、園の白菊 | | 乙骨三郎作歌 |
| 二、ピアノ連彈 | | 小泉千賀子 |
| | | 石原かず子 |
| セレナーデ | アントン、ドゥボールシャック作曲 | |
| 三、獨唱 | | 原のぶ子 |
| チヤーミングバード | | ダビット作曲 |
| 四、ピアノ獨奏 | | 永田また子 |
| ロンドカプリチョー | | メンデルソーン作曲 |
| 五、女聲二部 | | 園部ふさ子 |
| | | 肥田野櫻子 |
| 旅の夜 | | ルービンシテイン作曲 |
| 六、ヴァイオリン獨奏 | | 筒井ふさ子 |
| ロシニーの主想に基く | | |
| ヴァリエーション | | ダンクラ作曲 |
| 第二部 | | |
| 七、オルガン獨奏 | | 吉田トキ子 |
| パルテキタ | | バッハ作曲 |

八、獨唱
甲、埴生の宿　中尾龍子
乙、セレナーデ　グーノー作曲
九、ピアノ獨奏　山田のぶ子
ソナタ　ベートーベン作曲
一〇、ヴァイオリン獨奏　鳥居つな子
ヴァイオリンコンサート　ベリオ作曲
一一、ピアノ獨奏　原みち子
甲、グノーメンライゲン　リスト作曲
乙、ベルセーズ　ショパン作曲
一二、合唱　會員
甲、紅葉　文部省小學唱歌集
乙、雪　卷ノ二
秋の森　メンデルソーン作曲
吉丸一昌作歌

第一部　（奈良）

一、合唱　會員
甲、オキアガリコボシ　文部省小學唱歌集
池の鯉　卷ノ一
乙、園の白菊　カール、シューマン作曲
乙骨三郎作歌
二、ピアノ連彈　小泉千賀子
石原かず子
セレナーデ　アントン、ドゥボールシャック作曲
三、獨唱
甲、埴生の宿　中尾龍子
乙、セレナーデ　グーノー作曲
四、ピアノ獨奏　山田のぶ子
ソナタ　ベートーベン作曲
五、女聲二部　薗部ふさ子
旅の夜　肥田野櫻子
六、ヴァイオリン獨奏　ルービンシテイン作曲
ロシニーの主想に基く　筒井ふさ子
ヴァリエーション　ダンクラ作曲

第二部

七、オルガン　池田さち子
パッサカリヤ　バッハ作曲
八、獨唱　原のぶ子
チャーミングバード　ダビット作
九、ピアノ獨奏　永田また子
ロンドカプリチョー　メンデルソーン作曲
一〇、ヴァイオリン獨奏　鳥居つな子
ヴァイオリンコンサート　ベリオ作曲
一一、ピアノ獨奏　松島彝子
プレリュード及フーゲ　メンデルソーン作曲

一二、合唱　　會員

甲、紅葉　　文部省小學唱歌集　卷ノ二

乙、雪　　メンデルソーン作曲

秋の森　　吉丸一昌作歌

（『音樂』學友會、第二巻第十一号、明治四十四年十一月、五四～五五頁）

●秋の音樂會　東京音樂學校學友會女子部約八十名が近畿地方修學旅行として來阪せしを機とし永井幸次、目賀田萬世吉の諸氏發起し二十三日午後六時半より中之島公會堂にて音樂會を開く演奏者は學友會員なり

（『大阪朝日新聞』明治四十四年十月二十二日）

**明治四十四年十月二十三日～二十五日　学友会秋季演奏旅行（男子部）**

會　告

本會男子部員約五十名は本校教師指揮の下に來る廿四五日頃宇都宮市より日光、鹽原方面に、女子部員約百名は吉丸教授指揮の下に奈良（廿三日）大阪（廿四日）京都（廿五日）に秋季大演奏旅行をなす。一同の意氣頗る昂然、此行必ずや各地の樂界に多大の貢献をなすものあらん。

明治四十四年九月より　　東京音樂學校

學　友　會

（『音樂』學友會、第二巻第十号、明治四十四年十月、六三頁）

○音樂學校學友會　の演奏旅行十月二十一二日の秋季演奏會後男子部は日光及鹽原に旅行し途上宇都宮にて一回の演奏をなし、女子部は上方地方にて京都大阪奈良の三都に演奏を爲すと。

（『音樂界』第四巻第十一号、明治四十四年十一月、五七頁）

**明治四十四年十二月九日、十日　第二十五回定期演奏会**

明治四十四年十二月十日（日曜日）午後二時開會

音樂演奏曲目　　東京音樂學校

一、管絃樂

リュイ、ブラースの序曲……メンデルソーン作曲

二、ピアノ及管絃樂　　助教授　久野ひさ

コンサート……ヴエーバー作曲

三、管絃樂付き合唱

ネーニエ……ゲッツ作曲

四、管絃樂

甲、ラールゴ……ヘンデル作曲

ヴァイオリン、オブリガート　教授　頼母木こま

乙、マルシュ、フュネーブル……ショッパン作曲

五、獨唱（管絃樂伴奏）　　教師　ペッツオールド夫人

歌劇「アルセステ」中のアーリア……グルック作曲

六、絃樂合奏

スキト……グリーク作曲

甲、オーゼの死

乙、アニトラの舞踏

七、オルガン及管絃楽付き合唱

神の御稜威……（シューベルト作曲　吉丸一昌譯）

ORCHESTRAL AND CHORAL CONCERT
OF THE
TOKYO ACADEMY OF MUSIC
UYENO PARK.
*Sunday, December 10th 1911.*
AT 2 P.M.

Program

1) *Overture „Ruy Blas“* .....*Mendelssohn.*
2) *Concert Piece for Pianoforte*
with Orchestral accompaniment
..... *C. M. von Weber.*
Miss Kuno.
3) *„Nenie“ for Chorus and Orchestra...Hermann Goetz.*
4) *Orchestra*:
*a.* Largo .....*Haendel.*
Violin obligato by *Mrs. Tanomogi.*
*b.* Marche Funebre.....*Chopin.*
5) *Aria from „Alceste“*
with Orchestral accompaniment .....*Gluck.*
Mrs. Petzold.
6) *Orchestra*:
*a.* The death of Ase } from the suite Peer Gynt
*b.* Anitras dance .....*Grieg.*
7) *„Die Allmacht“ for Chorus, Organ*
*and Orchestra*.....*Schubert.*
Conductor: *Mr. Junker.*

音樂演奏曲目梗概　第十四

一、管絃楽

『リュイ、ブラス』の序曲　メンデルソーン作

ロマンチック派の名家メンデルソーン（Felix Mendelssohn-Bartholdy 1809–1847）は獨逸ハムブルグの人、幼にして神童の聞あり。十五歳の時短は調シムフォニーに其の天才を表はしてより以來、有らゆる音樂の部門に創作して夥多の佳作を殘せり。其の神事樂に於ける名作『聖パウルス』、『エリアス』中の唱歌、管絃樂に於ける傑作『蘇格蘭シムフォニー』、斷片の歌劇『ローレライ』及び劇樂アタリア中の唱歌等は既に本樂堂に於て演奏したる所なり。茲に奏する序曲（作品九十五）は千八百三十九年三月の作に係り、本、文豪ユーゴーの演劇の幕開き前に奏する目的にて作られたり。當時其劇場は其の設立資金募集の爲めに此の劇を演ぜんと企て、此の作家に至急其の序曲の作成を依頼したるが、メンデルソーンは僅々三日間に之れを完成したりき。彼れ自身の言に曰く『余は今迄此の曲ほど慰み心地に書きたるものなし』と。されば本曲が『アタリヤ』の音樂と同樣に、多少急作の痕跡を留め、他の序曲に比して見劣りせらるゝも故ありといふべし。然れども彼の管絃樂の特徴、卽ち旋律の婉美、和聲の豊麗、及び樂器編成の巧妙等は茲にも其の一端を窺ふを得べし。曲は頗る短篇にして、短は調の緩慢（レント）調と長は調の甚だしき快速（アレグロ）調の二部を交くたり。劇の內容は之れと深き關係を有せざるが故に略して述べず。

二、ピアノ及び管絃樂

コンツェルト（短イ調）　ウェーベル作

音樂に於けるロマンチックの始祖ウェーベル（C. M. von Weber 1786–

1826)は『フライシュッツ』『オイリアンテ』等の歌劇に於ける名作の外、器樂に於ては特にピアノ樂に傑作を遺せり。茲に奏するコンツェルト（作品七十九、千八百二十一年作）は其の尤なるものにして、構想の清新なると細工の巧妙なるとによりて今尚ほ樂界の愛賞を受けつゝあり。

ウェーベルの本曲を作るや、一の小説的物語を基とせるが如し。批評家ロホリッツ（Rochlitz）に與へたる彼の書簡に曰く『余は目下短ヘ調のコンツェルトを企てつゝあり。短調のコンツェルトは人の意に適すること未だ稀なれば、余が此の調子を撰びたるは奇異にも見ゆべし。されど余が胸に浮びたる一種の物語は能く其の各曲部に連絡を附し、且つ其の細かき性質を謂はゞ劇的に規定するの用をなすべし。余は各部に次の如き標題を附せんとす。即ち快速部を別離、緩徐部を愁嘆、終局部を深き悲痛、慰藉、歸來及び歡喜と名けんとす。余は凡て特別の標題を附したる音樂的繪畫を好まざるが故に、吾ながら此の着想に安んずることを得ず。されど此の想は頻りに余を促して、其の結果の良好なるべきことを豫告す。兎に角余は未だ余を知らざる人の前にて本曲を初めて奏することを欲せず。余を誤解して山師と爲すものあるを恐るればなり』と

後世の一評家は本曲の四曲部に就て次の如き劇的解釋を試みたり。『一佳人四阿屋に在りて遠征の騎士を想ひ（表情ある少緩調、Larghetto affetuoso）今將に戰死に際して己を見んことを希ふと想像し、（激情的快速調 Allegro passionato）氣を失せんとする刹那、森の樹陰に人の近づく氣はひするに（進行曲調 Tempo di marcia）驚きて見やれば待ち佗びし人なれば歡喜の聲を揚げて打ち迎ふ（愉快なる極急調 Presto giocoso）』と。

技術上より見れば、本曲はコンセルト樂器としてのピアノの取扱上に一新機軸を出したるものといふべく、又た獨奏部にも管絃部にも多くの巧妙なる意匠を表はせり。其の重なるものを擧ぐれば、序開き數小節の長く緩かに引く旋律にペダルなしの琵音的（アルペジョ）伴奏を附したるが如きを初めとし、頓（スタ）音の八度（カート オクターブ）、漣波の如き十六分音符など何れも清新の技術なりとす。此の外進行曲調の直ぐ前に現はるゝ高きファゴットの泣くが如きモティーフと之れに伴ふ動悸の如き絃の響とは善く其の處を得て、一種の深き感動を與ふ。此處を過ぎて後、特に聽者の耳を欲てしむるはピアノの白鍵上を急速に滑る滑奏（グリサンド）なり。

今一つの驚くべき技術は前者に比して一層ヴェーベル式を發揮したるものにして即ち第一の快速調（アレグロ）の前十六小節に亘りて同じ和聲の上に最弱（ピャニシモ）より最強（フォルチシモ）に絶えず進む所の漸強（クレシェンド）奏なり。こは詩聖ゲーテがウェーベルの訪問を受けしとき、特に所望したりとの故を以て頗る有名なり。

## 三、獨唱及び管絃樂

### 『ネニー』　ゲッツ作

ゲッツ（Hermann Götz 1840–1876）は獨逸ケーニッヒスブルヒの人、初めルイス、ケーラーに學び、六十年ベルリンのシテルン音樂院に入り、六十三年より七十年まで某所のオルガン家を勤めしが、病を以て職を辭してよりは專ら作曲に從事せり。最も有名なる傑作は沙翁の劇に基きたる『喧しき女の懷柔』なり。此の外序曲及びシンフォニーにも一時好評を受けたる作あれども長く生命を持するに至らず、唯だ茲に奏する『ネニー』のみは恐らく今後も樂界に忘らるゝことなかるべし。

『ネニー』（Nenie）は文豪シルレルの教訓詩（一七九九年作）にして、弔詩の義なり。其の意、希臘の古話（オイリディケ、アドーニス、アキレスの事ども）を引きて人生の果敢なく、地上の美の皆な滅び行くを嘆けり。此の種の詩はこれを邦語に譯して曲譜に上すること極めて困難なるが故に、ここには歌曲の美を保存せんが爲めに特に原歌詞を以て演奏す。

Nenie (Ein Gedichte von Schiller)

(Chor) Auch das Schöne muss sterben; Das Menschen & Götter bezwinget, nicht die eherne Brust rührt es des stygischen Zeus.

(Tenor solo) Einmal nur erweichte die Liebe den Schattenbeherrscher, Und an der Schwelle noch, streng rief er zurück sein Geschenk.

(Alto solo) Nicht stillt Aphrodite dem schönen Knaben die Wunde, Die in den zierlichen Leib grausam der Eber geritzt.

(Bass solo) Nicht errettet den göttlichen Held die unsterbliche Mutter
Wann er am skäischen Thor fallend, sein Schicksal erfüllt.
Aber sie steigt aus dem Meer mit allen Töchtern des Nereus:
Und die Klage hebt an um den verherrlichten Sohn.
Siehe, da weinen die Götter, es weinen die Göttinnen alle.
Dass das Schöne vergeht, das das Vollkommene stirbt.
Aber ein Klagelied zu sein im Mund der Geliebten ist herrlich.
Denn das Gemeine geht klanglos zum Orkus hinaus.

nicht gesungen

合唱
美も滅び行く世なりけり　人と神とに勝つものさへ
スチクスの國の大王の　くろがねの胸は動かしがたし

次中音獨唱
たゞひと度は情の力　よみしろす君を宥めしが
いまだ國境を越えざるに　授けしものを召し返しぬ

中音獨唱
世にもたへなる玉の肌を　酷くも猪に傷けられし
美しき子の痛手をば　アフロディーテも癒やす術なく

低音獨唱
スケアの木戸に倒れ伏して　あへなき最後を遂げたりし
神の御子なる丈夫を　其の母神も救ひ得ず』
されどネレウスの娘等を連れ　母の女神は海より現はれ
世に崇められし我子の爲め　悲嘆の聲を高く揚ぐ
見よや其時男神も泣き　女神もこぞりて皆泣く
美しきものゝ滅び絶え　十全なるもの逝くを嘆きて』
さはれ親しき人の口より　弔ひ歌をきくはめでたし
名も無きやからは響きもなく　よみ路の旅に急ぐものを

本演奏は右歌詞中第八行までに止め、再び初に返りて初二行の合唱をなすに終る。音樂は特に强き點を有せざれども、全部に亘りて其の感情の精醇なると技巧の完成せるとは頗る注目に値す。好個の小品と謂ふべきなり。

## 四、管絃樂

### 甲、ラルゴー　ヘンデル作

ヘンデル（Händel, 1685–1759）の作に係る夥多の神事樂及び歌劇は（メシアス等を除けば）一般の樂界より忘れられたるもの多し。然れども其の中の一節のみ特に有名にして千載に傳はるべき運命を有するものあり。此に奏する緩徐曲（ラルゴー）の如きも其の一例にして、もと『クセルクセス』（Xerxes）と題する聲樂曲中のアリアなれども、吾人は普通此の曲によりてさる曲の存在せしことを想起するに過ぎず。曲趣に就ては優美高雅なる好調なりといふ外別に言ふ所を知らず。獨奏は管絃が旋律を一度濟したる後に繰り返しとして起る。

### 乙、葬禮進行曲　ショパン作

波蘭に生れたるピアノ樂の大家ショパン（Chopin, 1810–1849）の本曲は其の創作以來各國に於ける幾多の葬禮に伴ひて眞に世界的名聲を博せり。

本は短變ろ調ソナータ（作品三十五）の緩徐曲として作られたるものなれども、寧ろ單獨に奏する方遙かに優れりとは時に評家の言ふ所なり。曲は葬禮進行曲の普通の形式に從ひて三部分より成り、短調に起りて長調の中間進行に移り、再び本の短調に復す。第一曲部の前半は憂欝なる沈思の氣分を表はすものといふべく、低音の濁れる和絃は葬式の鐘の音を想はしめ、折々高まる旋律（七、八、及び十一、十二、小節）は慟哭の聲にも似たり。この憂愁は其の後半に入りて暫く强奏に高まれども、頓て深き呻吟嘆息の聲（低音樂器に顫音を有する二小節）に沈みて終る。この悲しき情調の最中に表はるゝ中間進行は如何に樂しく響くぞ。こは亡き人とやがて天國に再遇せんといふ希望を表はせるか、將た亡き人が世にありし頃の歡樂を追想するか。さはれそれも暫しにして、曲は本の沈欝に歸り、あきらめがたき悲愁の聲に終る。

## 五、獨　唱

### 歌劇『アルセスト』中のアリア　グルック作

獨逸歌劇の改革者として知らるゝグルック（Gluck, 1714–1787）の本歌劇は彼の四大傑作の一にして、其の筋はユーリピデースの悲劇に基きたり。北部希臘なるフェレーの王アドメートス病篤くして死に瀕す。アポロの神託によれば、其の身代りとして犧牲となるものなくば、本復覺束なしといふ。皇后アルセスト私かに此の犧牲たらんことを決心し、茲に奏するアリ

アによりて之れを幽界の神に告ぐ、アドメートス此の事を知り、妃によりて自らの救はるゝを肯せず、相携えて幽界の門に下る、偶々英雄ヘラクレースの來るありて二人は無事に救助せらる。本曲は歌詞と音楽との密接なる關係を保てる點に於てグルックの劇樂に對する主義を見事に示せる實例と言ふを得べし。左に原歌詞を載す

L'Air d'Alceste

(Andante)

Divinités du Styx, ministres de la mort,
Je n'invoquerai point votre pitié cruelle;
J'enlève un tendre époux à son funeste sort;
Mais je vous abandone une épouse fidèle
Divinités du Styx, ministres de la mort,
Mourir pour ce qu'on aime,
Est une vertue si naturelle, est un trop doux effort.
Mon coeur est animé du plus noble transport.

(Presto)

Je sens une force nouvelle,
Je vais où mon amour m'appelle,
mon coeur est animé du plus noble transport

(Andante)

Divinités du Styx, ministres de la mort,
Je n'invoquerai point votre pitié cruelle

(緩歩調) よみの神よ　死の司よ
　　ながの酷き憫みを我は乞はじ
　　我はやさしき夫を悲運より救ふ
　　されど操高き妻を汝に委ねん
　　よみの神よ　死の司よ』
　　愛するものゝ爲めに死ぬるこそ
　　いともやさしき業なれ
　　自然のまゝの德なれ
　　我が胸は氣高き情熱に燃えたり』

(極急調) 我は新しき力を覺ゆ
　　我は我が愛の呼ぶ處に趨く
　　我が胸は氣高き情熱に燃えたり』

(緩歩調) よみの神よ　死の司よ
　　ながの酷き憫みを我は乞はじ

## 六、絃　樂

スキト『ペール、ギント』中の二曲　グリーヒ作

甲、オーゼの死

乙、アニトラの舞踏

諾威の國民樂家グリーヒ(Edvard Grieg 1843-1907)の本曲は本、イプセン作『ペールギント』の興行の際に書きたる長篇中より拔萃せる小曲を集めたるものなるが、其の着想の奇警と形式の單純と濃厚なる國民的色彩とによりて著しく流行せり。

イプセン劇中の主人公ペールといふは農民の一子にして父は元資產を有せしも、悉く之れを失ひたれば、其の死後母オーゼ(Ase)と共に貧窮の中に日を送れり。されど彼は性質極めて元氣と空想とに富み、種々の大望を抱きては之れを巧みに母に語る。母は彼の亂行を知りつゝも、常に其の語に魅せられて、之れに賛同す。かくて彼の我儘は底止する所なく、或る日他人の婚禮の宴に際して新婦を奪ひ、之れを山中に誘拐して、其處に捨て去り、それより山間に放浪して淫蕩の生活を營む。かゝる中に山中の王族の領内に入り、こゝに圖らず其の娘と相思ふに至り其の結果王の城より驅逐せられて家に歸る。家には母正に臨終の床に在り。愛子の將來の成功を思ひつゝ空中樓閣の中に永眠す。母の死後彼は海外行を企て、數年の後には富んでモロッコに到り、沙漠中に一酋長の女アニトラ(Anitra)に遇ひ、一時之れに想を懸く。されども頓て若年の折に愛したるソルヴェーグの上を思ふ心切になり、終に遙々海を越えて故郷に歸る。かくて年老ひたる彼

は（恰もゲーテのファウストの如く）此の貞操なる婦人の愛によりて初めて慰安を得。

此のスキトには四曲を含めども茲に奏するは第二のオーゼの死と第三のアニトラの舞踏のみ。第二はオーゼが安心して靜かに眠る光景をうつすものにして管を交へざる絃樂のみを用ひたるは善く此の意に適へり。劈頭に現はるゝやさしく、あこがるゝ如き（日本の節に似通へる）旋律は暫く嬰へ短調に移るの後再び本の短ろ調に返る。こは死者の最後の幸福を描くものとも見るべきか、之れに次ぐ第二の部は同じ旋律を少しく變形したものにして漸く哀悼の響にうつる。第三の輕妙を極めたる一曲は沙漠のオアシスのテントの中にてアニトラが他の少女等と共に新來の豫言者（即ちペール）を樂しませんとて爲す舞踏を寫せり。序開に響く數回の和絃に次で第一ヴァイオリンにあらはるゝ輕妙、婉柔なる主旋律は暫くにして混亂せるフィギュアに移り、やがて第二のテマは愉快なる指彈と相交はりて現はる。後、曲は再び最初の旋律に返り、此度は第一ヴァイオリンとヴィオラとのカノンとなりて一層其の美を增す。

## 七、合唱及管絃樂

### 神の御稜威

シューベルト作

こは樂聖シューベルト（Schubert 1797-1828）の讃美歌中の佳作なり。詩は Ladislaus Pyrker の作「萬能」（Die Allmacht）にして神の偉力の森羅萬象に現はるゝ樣を稱へたるもの、曲は善く其の意を傳へて單純、雄大の中に和聲の豊麗なる變化をも含めり。他の説明は歌詞に讓る。

### 神の御稜威

吉丸一昌　譯歌

畏しや神。　天も地も神の御稜威畏しや神。
暴風と現れて　雨を誘へば　山飛び海逆立つ。
畏しや神。　雨を誘へば　山飛び海逆立つ。
畏しや神。　畏しや。

獨唱　木の葉木の實のゆらめきにも（低音木の實のゆらめきにも
見よ御稜威見えたり。見よや御稜威見えたり。
野山には花と咲き　み空には星と散る。み空には星と散る。
野山には花と咲き　み空には星と散る。
合唱　響けば　雷か　霹靂か　火の雷。
御稜威あな畏や。　わが胸戰く。　あな畏や。
わが胸戰く。　あな畏や。
獨唱　神よ神よ。わが世を幸へ。（低音世を幸へ）
合唱　かしこしや天つ神。かしこしや神。

## 明治四十四年の概評

### 四十四年の音樂界

乙骨三郎氏談

今年の音樂界に目ざましい事は多くなかつた。然し樂界が年々同じ所に止まるのでなくて、凡ての方面に一歩一歩進んで行く事、殊に新しい試みや創作の盛になるべき機運の漸く熟して行くことを認めた吾々は寧ろ欣びと希望の間に本年の樂界を送ることが出來る。由來樂界は他の藝術界よりも古い物の繰り返へしが多く行はれる所である。此處では自分の知らぬ新作よりも知りぬいたものを喜ぶ人が多い。また一般に（黑人でも）初めての曲よりは數回耳なれたものゝ方を味ひ易く思ふという事情もある。かくて古い物の尊重せられる上に、尙ほ音樂といふものが、翫賞の側からは極めてのんきなものであるだけ、それだけ創作の側からは困難であるといふ理由も手傳つて、吾が樂界の近い過去は心細い程藝術的創作が少くまた其の狀態が何時まで續くかといふことも明かに答へ得ない樣な有樣であつた。然し今年あたりの狀況から察すると、此の方面の寂寞の破られることも遠くはあるまいといふ希望が現れて來た樣に思ふ。

この希望を強める具体的の事實を左程多く列べることは出來ない。然し邦樂界に於て研精會の新工夫や、文藝協會の出し物や、また上野の邦樂調査掛の掛聲廢止の演奏などは。細かい論は措くとして、兎に角新しい事に導く路である。洋樂界に於ても音樂學校學友會の演奏に邦人の作を發表せんと勉めたことや、また近く帝劇に於てオペラの興行を始めたことなどは何れも創作を促す刺戟として注目すべきことと思ふ。事實上の新作としては本居澤田其の他二三氏の作の外、特に記すべきものを持たなかつた今年も、此の點からは餘程獲物のあつた樣に感ぜられる。

（『音樂界』第五卷第二号、明治四十五年二月、六四頁）

## 明治四十五年三月二十五日　卒業式

明治四十五年三月廿五日（月曜日）午後二時

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

第一部

一報告

一卒業證書授與

一校長告辭

一文部大臣祝辭

一卒業生總代謝辭

第二部

一箏　選科卒業生　大平喜代

都の春……（山勢松韻作曲　鍋島侯爵作歌）

一オルガン獨奏　器樂部卒業生　池田阿隻

パッサカーリア……バハ作曲

一ヴァイオリン合奏（器樂部卒業生師範科　筒井卒業　ふさ生）

甲　メディターション……バハ、グーノ作曲

乙　フューグ（短ト調）……バハ作曲

一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　永田また

ロンド、カプリッチョーソ……メンデルソーン作曲

一ヴァイオリン獨奏　器樂部卒業生　兩角龍吉

エーア、ヴァリー……ダンクラー作曲

一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　石原かず子

パルティタ（長ト調）……バハ作曲

一三部合唱（聲樂部卒業生同師同　小笠原保子　中尾リヨウ　澤崎定之）

歌劇「フライシュッツ」中のテルツエット……ヴェーバー作曲

一ヴァイオリン獨奏　器樂部卒業生　末吉雄二

コンサート第七番（第二樂曲）……ベーリオ作曲

一中音獨唱　聲樂部卒業生　中島かね

歌劇「プロフエート」中のカヴァティネ及エーア　マイアベーア作曲

一ヴィオロンチエッロ獨奏　器樂部卒業生　多基永

コンサート（第一及第二樂曲）……ピアッティ作曲

一合唱

甲　常盤……（アルカーデルト作曲　武島又次郎作詞）

乙　あゝ、いづちゆく……（ベートヴェン作曲　乙骨三郎作詞）

GRADUATION EXERCISES
OF THE
Tokyo Academy of Music
UYENO PARK
Monday, March 25th, 1912.
2. P. M.

PROGRAM.

PART I.

I. Report.
II. Presentation of Diplomas.
III. Address to the Graduating Class by the Director.
IV. Address by His Excellency Haseba, Minister of State for Education.
V. Response by the Representative of the Graduating Class.

PART II.

1. Koto:
   Miyakonoharu. .....*Yamase.*
   Miss Ohira.
2. Organ:
   Passacaglia .....*Bach.*
   Miss Ikeda.
3. Violins:
   a. Meditation.....*Bach-Gounod.*
   b. Fugue in G minor. .....*Bach.*
   Miss Tsutsui and others.
4. Piano:
   Rondo capriccioso .....*Mendelssohn.*
   Miss Nagata.
5. Violin:
   Air Varié.....*Dancla.*
   Mr. Morozumi.
6. Piano:
   Partita in G Major (Preambule, Allemande et Courante) .....*Bach.*
   Miss Ishiwara.
7. Vocal Trio:
   Terzetto from the opera „Der Freischütz“ ...*Weber.*
   Miss Ogasawara, Miss Nakawo and Mr. Sawazaki.
8. Violin:
   Concert[o] No. 7 (2nd movement) .....*Bèriot.*
   Mr. Sueyoshi.
9. Alto Solo:
   Cavatine and Air from the opera „Der Prophet“.....*Meyerbeer.*
   Miss Nakajima.
10. Violoncello:
    Concert[o] (1st and 2nd movement).....*Piatti.*
    Mr. Ono.
11. Choruses:
    a. Weihegesang.....*Arcadelt.*
    b. Der treue Johnie .....*Beethoven.*

○東京音樂學校　卒業式は廿五日午後二時半より上野同校奏樂堂にて擧行　富尾木教頭の學事報告ありて直に本科聲樂部八名本科器樂部十二名甲種

師範科二十五名乙種師範科十三名研究科修了生八名選科三名に對し卒業證書を授與し次に湯原校長（代）の祝辭瀬戸文部視學官の文相祝辭代讀卒業生總代林仙二の謝辭ありて式を終り卒業生の演奏に移り先づ選科卒業生大平喜代子の箏「都の春」を始めとして器樂部卒業生池田阿隻子、筒井ふさ子外數名の合奏同永田また子、原かず子、中島かね子等の獨唱ありて五時閉會したり

卒業生の姓名及び甲師卒業者の任地左の如し〔後略〕

（『音樂界』第五巻第五号、明治四十五年五月、五〇頁）

**明治四十五年四月二十六日　学友会演奏旅行**

▲四月廿六日、本校男生徒卅一名、赤川、大塚兩先生の引率の下に、成田―銚子―千葉（演奏）方面に春季修學旅行をなしたり。千葉にての演奏（千葉縣師範學校内に於て）曲目左の如し

第一部

一、合唱
　虹、汽車、茶摘み、　磯江清
二、オルガン獨奏
　パルテイータ　バッハ作曲
三、次中音獨唱
　夕顔　近藤義次
　四ツ葉のクローバー　梁田貞作曲
四、ピアノ獨奏
　タランテルラ　ロイター氏作曲
五、合唱
　雁、村祭　高折宮次
　ヘルラー作曲

第二部

六、オルガン獨奏
　グロツセ、フアンタヂー　草川友忠
七、獨唱
　フリユーリングス、グラウベ　キースター作曲
　木の葉。駈つこ。お玉杓子。　梁田貞
　シューバート作曲
八、ヴアイオリン獨奏
　コンツエルト（七番）作品第七拾六　末吉雄二
　（アンダンテ、トランキロ）　ベリオ曲
九、ピアノ獨奏
　ストーム　弘田龍太郎
　ウエーバー作曲
一〇、低音獨唱
　ユーデン　樋口信平
　リゴレツト　ハレビー作曲
十一、合唱
　花　ウエーバー作曲
　浦のあけくれ

（『音樂』學友會、第三巻第六号、明治四十五年六月、六四頁）

**明治四十五年五月十八日、十九日　学友会春季演奏会**

▲去月十八日十九日兩日午後一時半より學友會演奏會ありたり。曲目左の如し。

曲目　會員

一、獨唱及び合唱

甲、僧院の庭　ボヘミヤ民謠
乙、別れ路　ブロッス作
丙、遊宴の歌　梁田貞作
二、高音獨唱　青山なみ子
隅田川　梁田貞作
三、オルガン獨奏　草川友忠
二重フーガ　島崎赤太郎作
四、聲樂三部　高音部　薗部ふさ子
高音部　青山なみ子
中音部　竹内うめ子
歌劇『靈笛』中の一節　モツアルト作
五、ピアノ獨奏　高安百合子
アムプロムテイユ（作品百四十二、第三番）　シューバート作
六、中音獨唱　中島かね子
甲、晝の夢　梁田貞作
乙、涙　山田耕作作
七、次中音獨唱　梁田貞
甲、シユテンドヘン　シューバート作
乙、フリューリングスグラウベ　シューバート作
八、ヴアイオリン　田中久子
第九番司伴樂（作品百〇四）　ベリオ作
九、聲樂二部　高音部　原のぶ子
次中音部　船橋榮吉
歌劇『ドン　フハン』の一節　モツアルト作
十、ヴイオロンチエロ　多基永
ロ短調司伴樂中の緩徐調（作品五十一）　ゴルターマン作
十一、高音獨唱　薗部ふさ子
歌劇『イルバルビエーレ　デイ　シヴイリア』中の咏情調　ロッシニー作
番外
ピアノ獨奏　ペツオルド夫人
ルフエスタンデーゾープ　アルカン作
十二、獨唱及び合唱　會員
流浪の民　シューマン作

（『音樂』學友會、第三巻第六号、明治四十五年六月、六四～六五頁）

## 東京音樂學校學友會の演奏をきゝて

北明生

○一番と最終の合唱及び獨唱を概して好出來梁田貞氏作の遊宴の曲はなかなか振つてる。

○青山なみ子の梁田氏作曲隅田川の十分孃の技巧を發表する程の曲でないためか感心するにいたらん

○草川友忠氏のオルガンは那邊に其の味を有してるのか唯追覆樂であるといふ事丈けを紹介する積りなのか、堂々たる音樂學校の演奏曲目中に、あんなものを載せては島崎教授の威信に關する事かと思はれる。

○初舞臺の高安百合子の洋琴は好出來といはねばならぬ、細かくいへば又又足らぬ事は勿論、欠點は免れないが、而し曲の『左右』方は孃の頭腦の明晰たる事を表はして實に感服のいたりである。

○中島かね子は相變らず立派である、乙の山田耕作氏作の垢拔けしてをる涙の曲を餘りなく唱ひつくしてをる、甲の晝の夢は中島孃の名を汚すばかりか、ペツオルド氣取がいや也。

○梁田貞氏の獨唱は素人に荒鉋かけた位で仕上げにいたらんのを惜しむ、氏はステージの人にあらずして宜しく作曲に努力した方前途の榮かと思はれる。
◎田中久子のヴアイオリンは滿堂の喝采を博した通り立派なものだと成る程八九年も勉強した甲斐があつて技巧は驚くべきものだが、其の音の冴えないのは遺憾である。
○船橋榮吉氏相變らず高き名に背かない原信子も稍おもしろく出來た、殊に二部合唱に入つて其の溫かき表情は死せるモツアルト喜色滿面たりでせう、而し折角やるのにしても曲の選み方もあらうに。
○多基永氏、氏は卒業當時の演奏より調子をはずす事多く不出來である、氏は技巧的のものは長所らしいが、緩徐調即ち表情的のものは餘り感心せんのである、之れ偏に音の情緒的ならざるためかと思ふが如何に。
○薗部ふさ子の獨唱は恐らく當日の演奏會の花と見て差支へなからう、日淺くして技巧、表情實に驚變に價する、正女流聲樂家として是認すべきではあるが、音域の狹まいのは惜しむべきである、マアー、自負心を起さんで努力したまへ。
○番外のペツオルド夫人のピアノは喝采をいつもながら博した、が聽衆果して其の眞味を嘗めてをるか否や、疑問である、兎に角に、吾人は日本人の演奏をきくが如きビク〳〵した感じはなく緩漫ときかれる。細緻なる技巧上や、精神上の事は吾人の知る處でないから筆を留るが、怪物たるの名には背かんと思ふ。
○一般演奏者は其の曲の如何を味つてステージに立たれてるか、不明に屬するか故に委しい事はいはないのである。
○其れからプログラム中曲の多くは日本人の作で喜ぶべき事である、今日まで幾人か邦樂は如何にすべきと叫んだ樣ではあるが、西樂入りて短日月の事業としては比較的成功せるものといつた方がよからう。
過日幸陽生の讀賣所載の通りユンケル、ウエルクマイシタヘル〔マイステル〕等の外人といつても頭が古くて餘り現代の歐樂忠〔思〕想に觸れてゐないらしいといつてるが、當らずとも遠からずでせう、こんな風では音樂學校の生徒諸氏も可愛想だ、受動的の小學兒童であるまいし、生徒諸氏進んで大いに研究すべしだ、近きに湯原校長も歸國せられる事であるから今までの樣にして默してをられまいと思ふ。

（『音樂界』第五巻第七号、明治四十五年七月、六〇～六一頁）

**明治四十五年六月八日、九日　第二十六回定期演奏会**

明治四十五年六月八日（土曜日）午後二時開會

音　樂　演　奏　曲　目

東京音樂學校

一、管絃樂
　歌劇「フライシュッツ」の序曲……ウエーバー作曲
二、ピアノ（管絃樂伴奏）……教師　ロイター
　コンチエルト（短ト調）……メンデルソーン作曲
三、絃樂合奏
　セレナーデ……モザート作曲
四、合唱（管絃樂伴奏）
　流浪の民……シューマン作曲　石倉小三郎譯歌
五、ヴィオロンチエッロ獨奏……教師　ヴエルクマイスター
　コンチエルト（短イ調）……センサーン作曲
六、管絃樂
　プレリユード、コーラル及フーギュ……バハ作曲　アーバート編

CONCERT
OF THE
TOKYO ACADEMY OF MUSIC
UYENO PARK.
*Sunday, June 9th 1912.*
AT 2 P.M.

PROGRAM

1. *Orchestra*:
   Overture to the Opera "Der Freischütz" ..... *Weber.*
2. *Piano with Orchestral Accompaniment*:
   Concerto in G minor ..... *Mendelssohn.*
   *Mr. Reuter.*
3. *String Orchestra*:
   Serenade ..... *Mozart.*
4. *Chorus with Orchestral Accompaniment*:
   Zigeunerleben ..... *Schumann.*
5. *Violoncello Solo*:
   Concerto in A minor ..... *Saint-Saëns.*
   *Mr. Werkmeister.*
6. *Orchestra*:
   Prelude, Chorale and Fugue ..... *Bach-Abert.*

Conductor: *Mr. A. Junker.*

音樂演奏會曲目梗概　第十五

一、管絃樂

歌劇『フライシュッツ』の序曲　ヴェーベル作曲

獨逸ロマンチック樂派の始祖ヴェーベル (Carl Maria von Weber 1786–1826) は若年の頃より數多の小篇歌劇を創作せしが、何れも世に行はるるものなし。其の今日に傳はれる大作は何れも三十餘歳にして成れるもの、即ち『フライシュッツ』(Freischütz)『オイリアンテ』(Euryanthe)『オベロン』(Oberon)等の歌劇是なり。此の三歌劇の序曲は現今尚ほ普く樂界の愛賞する所にして、就中『フライシュッツ』は歌劇全篇を通じて到る處に演奏せらる。

本歌劇の樂は千八百二十年に完成せられ、翌年五月十四日初めて之れを伯林歌劇場に演奏して非常の好評を博せり。こは近代歌劇界に於ける獨乙樂風勝利の紀元を爲せる名作にして、眞の意味に於ける獨逸國民歌劇の嚆矢と稱せらる。蓋し其の主題として北歐の古傳說を採り、其の音樂には國民的趣味に適するものを撰びたればなり。

本歌劇の序曲は近式序曲の典型を作れる點に於て音樂史上重要の意味を有す。此の以前の舊式序曲は唯だ聽衆をして劇を味ふに適する氣分を生ぜしむるに止り、其の內容とは深き關係を有せざりしが、フライシュッツ以後の近式序曲は皆な歌劇中の重なるモチーフを連ねて作曲し、以て開幕以前に一通り劇の筋を略叙する趣向となれり。此の如き作法の陷り易き病弊は散漫なるモチーフの羅列によりて形式上の統一を破るにあり。然るに本序曲は叙事と形式との二點に於て共に完備せる好例なり。

フライシュッツは古き妖怪譚なり。サミエル (Samiel) といふ獵界の魔王の名を呼で、月光暗き深夜に彈丸を鑄造して用ふる時は、其の六つは必ず目的の如く命中し、第七彈は魔王の欲する所に赴くといふ。斯くして一度身を魔王に委し、其の彈丸を使用したる射手（これをフライシュッツと云ふ）は三年毎に新しき人を誘ふて魔王の犧牲に捧げざれば、忽ち其の身の破滅を招くといふ。此の傳說を骨子として一の物語を編みたるものにアペル、ラウン共著の妖怪譚 (Apel und Laun, Gespensterbuch) あり。本

歌劇の作歌者キンド（Friedrich Kind）は此の著に基きて別に自家の創意を交へ次の如き筋を構成せり。

獨逸の或る伯爵領にクーノー（Cuno）といふ世襲森林官あり。日頃愛する若き獵夫マックス（Max）をば獨り娘アガーテ（Agathe）の婿と爲して己が嗣子たらしめんとす。然るに此の國の慣例に據り森林官たるべきものは主君の面前に試射を爲して其の妙手の之れに値せるを示さゞるべからず。然るにマックスは試射の少しく以前より頻りに射損じを爲して其の前日に至るも尚ほ止まざれば、翌日の試射の成功せざるべきを想ひて心鬱々たり。カスパール（Caspar）といふ邪惡なる獵夫は既に身を魔王に委ねたる者なるが、此の機に乘じてマックスを誘ひ、之れに魔彈を用ひしめて己は三年の命を延べんと欲す。マックス其の術中に陷り、深夜月暗き時『狼が谷』（Wolfsschlucht）に魔彈を作りて、之れを翌日の試射に用ふ。されどマックスはもと心正しきものなればサミエルは之を如何ともなす能はず。第七彈は却てカスパールの胸を貫く。彼れ死するに臨みマックスを咒ひ、主君は怪しみてマックスを糺問す。マックス告ぐるに實を以てすれば衆皆驚嘆し、主君は怒て之れを追放せんとす。此の時森の隱者現はれ、此の凶事によつて以後試射の慣習を廢せんことを勸め且つ一年の試練を經てマックスを森林官の後嗣たらしめんことを命じて去る。かくて劇はアペルの原本とは異りて善の勝利に終る。

序曲は數小節の序節を以て始まり、次で靜かに波動するヴァイオリンのフィギュアに伴はれて美しきホルンの二部奏（デュエット）起る。こは全歌劇の舞臺なる森林の幽景と平和とを描くものなり。されど之れに繼で直ちに起るヴィオラの顫音（トレモロ）クラリネットの低音及び濁れるチンパニの響（こは魔王のライトモチーフなり）は來るべき凶運を語るが如くに響き、樂は『狼が谷』の叙景に移りて深夜に銃丸を鑄る二壯夫が事を想起せしむ。續て起る甚だしき活潑調（ヴァーチェ）は山谷を疾過する暴風を寫すものにして漸次に其の勢を强ふし、終に力を極めて怒號すると聽く間に、樂は突如として轉調し、全管絃は一大掃過を爲して長變ホ調の强大なる顫音にうつる。ホルンの鋭き和絃三度響くやクラリネットの激情的樂句次で起り、ヴァイオリン、セロの不安なるフィギュアの響くと聽く間に樂しき一歌調は最弱奏に現はれ初む。こはアガーテの大なるアリアの一句にしてマックスの成功を喜ぶ歡呼なり、この歌調の最高調に達する時山間の光景忽然として再現し、其の漸次に消え去る時長ハ調の激烈なる和絃數回響き次で快活なる勝利の旋律再び華々しき長ハ調の最强奏（フォルティシモ）に現はれ序曲は無限の歡喜を叙して曲を結ぶ。

## 二、管絃伴奏付きピアノ獨奏

### 短ト調コンセルト（作品二五）　メンデルソーン作曲

音樂のあらゆる部門に傑作を出せる作家メンデルソーン（Mendelssohn 1809–1847）はピアノ、コンセルトにも佳作二篇を遺せり。（コンセルトとは普通に獨奏樂器と管絃樂とを以て演奏するソナータ形式の曲をいふ。獨奏樂器は管絃樂と覇を爭はんが爲めに自己の有するあらゆる技術と能力とを傾倒す）茲に奏する短ト調のものは其の一にして、今日尚ほ樂界に愛賞せらる。全曲は三つの曲（即ち快速調（アレグロ）、緩徐調（アンダンテ）及び極急調（プレスト））より成れりと雖、其の各部を短縮しあるが爲め、かの有名なるウェーベルの短ヘ調コンセルト（昨年秋季演奏會曲目中に在り）と同樣に極めて簡潔なり。是れ本曲が非常に流行したる一理由なるべし。加之、獨奏樂器の優美且つ表情ある取扱方と同樣に巧妙適宜なる管絃樂の作法とは此の曲をして今日まで其の生命を維持せしめたり。

序開きの數小節を終るの後、ピアノは勢よき主想（テマ）を以て起り、次で稍之れを變形して繼續す。此の最初の獨奏部の終に臨み劈頭のモチーフ再び歸來し、管絃の强勢なる總奏となる。此の管絃部は頓て掛け合ひに移り、ピアノが華々しき走句を表はす間に管と絃とは樂想を引き延ばし行く。間もなく曲は歌調の如く美しき第二の主想に遷移す。（此の主想は初め長變ロに起りて短變ロに赴く後更に長變ニ調に行く）次で曲は再び曲頭のモチーフ（こは全コンセルト曲を通じて骨子となれり）に移り、それより木管はピアノの優美なる琶音に圍まれつゝかの美しき歌調を承けて奏す。

絃樂は茲に骨子のモチーフを以て加はり、次で長き開展部（エキスポジション）を通過することなく、直ちに曲初の總奏に進み、ピアノは流暢なる樂句を以て折々其の間に入る。その中、曲は又た第二のテマ（此度は短ト調）に進み以前と

同様に暫くしてそは管絃に移りピアノは華々しき經過句を以て之を圍繞し其の終りに復た曲頭のモチーフを勢よく表はし管絃は之れを承けて强奏す。此の總奏の終局にホルンとトランペットのファンファーレあり。ピアノは此のリズムを輕く承け、續て短かき終節（カデンツ）を奏し、其の最終音は第二曲なる緩徐曲（アンダンテ）に連る。最初セロに現はるゝ緩徐曲の主想（テマ）は極めて優美なり。ピアノ先づ之れを承けて奏する後旋律は復たセロに現はる。これより以下掛け合ひとなり進行稍活動すれども再びヴィオラとセロに表はるゝ優美なる主想に歸り獨奏部は分割和絃を以て之れに伴ふ。而して今一度ピアノが主導となりて分裂せるヴィオラが最弱奏にて之れに從ふ後此の短かき曲部は靜かに終を告げ直ちに終曲（フィナーレ）即ち極急調に進む。第一曲と第二曲とを連結せると同様のホルン、トランペットのファンファーレに導かれて管絃の總奏起りピアノの短かき琶音の獨奏二回を經る後其の主想に進む。此の終曲（フィナーレ）の主想は快活奔放なるものにして暫く種々の轉化をなして巧みに進行す。之れに次ぐ分割和絃の經過句は先にも現はれたるものなれども管絃部に現はるゝ伴奏によりて新しく興味を惹くに足る。それより大なる漸强奏を經て總奏となり主想を强く現はす後そはピアノの長ロ調に赴く、それより以下特に耳を引くは管絃部に現はるゝ第一曲部（即ち快速調（アレグロ））のテマ及びこれに次ぐ短かき獨奏部に於ける第一曲部の第二の主想なり。此の兩主想の再現は能く曲部間の連絡を保てり。最後の感銘深き獨奏部は管絃に於ける跳躍的のフィグュアと相待（マヽ）て益々快活奔放を極む。かくて全曲は管絃の活潑なる總奏を以て終る。

## 三、絃樂

### セレネード　　モツァルト作曲

セレネード（黄昏曲）は原と黄昏時戸外に於て（殊に愛敬する人の窓下に）奏する樂曲の義にして聲樂、器樂幷び行はれしが、近代に於ては主として器樂の方重んぜられ、原義と全く關係なき一種の器樂形式（數曲部よりなる數多の樂器の合奏曲）を成すに至れり。ハイドン、モツァルト時代の作には戸外用に適せしめんが爲めに若干の管絃樂を加へたるもの多けれども室内の樂として適當なる絃樂器のみのものもあり。本曲の如き即ち其の一例にして第一及第二ヴァイオリン、ヴィオラ、セロ、及びダブルベースの五部合奏なり。（本演奏には四部となせり）

天才モツァルト（W. A. Mozart 1756–1791）は三十餘歳の生命を以てして、而かも莫大の作品を遺せり（此の短生涯と生産力との點に於て彼は後のシューベルト及びメンデルソーンに酷似す）。彼の作曲するや如何なる部門に於てすと雖も佳ならざるなし。其の作品の通性は溫雅の中に熱情を湛ふるに在り、イタリヤ風の美調と獨乙風の深奥とを綜合せるは其の作風の特徴なり。本曲は一七八七年八月十日ヴィーン市に於て作成せるもの、即ち彼の晩年圓熟期の作なれば、彼の室内樂作風の好例と見るを得べし。全部四曲を含む。（一）長ト調四分四拍子の快速調（アレグロ）。（二）長ハ調二分二拍子の緩徐調（アンダンテ）（ロマンツェ）（三）長ト調四分三拍子の稍快速調（メヌエット）。（四）長ト調二分二拍子の快速調（ロンド）是なり。

## 四、管絃伴奏付き合唱

### 流浪の民　　シューマン作曲

ロマンチック派の樂人シューマン（R. Schumann 1810–1856）の短篇合唱曲中にて最も流行したるものゝ一は其の早年の作なる本曲（作品第二〇）なり。詩人ガイベル（E. Geibel）の作『チゴイネルの生活』（Zigeunerleben）に基き、最も單純、簡潔なる形式によりて可憐なる音樂的風俗畫を描き、之れに溢るゝばかりのロマンチック感情を盛れり。靜かなる夜の森、奇異なる浮浪民の姿、彼等の無邪氣なる宴樂、見知らぬ故郷を戀ふる情、神明を賴むやさしき心――凡て此れ等は最も單純且つ自然に描かれたり。秀逸の作と言はずして何ぞ。

全曲は之を三部分に區別し得べし。第一はチゴイネルの森に現はるゝ景、第三は森を出で去る景なり、作家は此の兩部分に同一の樂句を用ひて前後を照應せしめ、其の中間の第二部分に幾多の性質を異にせる樂句を挿みて變化ある光景を描きたり。かくて全曲は變化ある中に十分の統一を保てり。（十六分音符を以て始まるモチーフも亦に全篇を一貫して之れに連絡を附す。）中間の通行中『唄ひさわぐそが中に』以下の稍や緩かなる部分は特に和聲の豐麗を以て人耳を惹く。之れに次で起る歌舞の一段は何等の

好對照ぞ。此の一節は四音聲の獨唱體に作られ、其の伴奏は輕快なる舞踏の拍子を表はせり――シューマンの本曲を作るや伴奏にはピアノ樂を用ひたり。本演奏に用ふる管絃樂の伴奏は後の樂家グレーデネル(Carl Grädener, 1812–1883)の編成せるものにして巧みに原作を改編せり。但し管絃樂中に用ふる三角器及び鈴太鼓の二樂器は原作にも任意使用すべしと附記せり。上述の歌舞の一節に於ける此の二樂器の使用は之れに一段の活氣を添ふ。

流浪の民　　石倉小三郎譯

山毛欅の森の葉がくれに
宴ほがひ賑はしや
松明あかく照しつゝ
木の葉しきて倨居する
これぞ流浪のひとの群
眼ひかり髪きよら
ニイルの水に浸されて
煌々かゞやけり
（高音）焚火かこみつ
（中音）赤き焔めぐりめぐり
（次中音）焚火を圍みて男息らふ
（低音）燃ゆる火を圍みつゝ
強く猛き男息らふ
女たちて忙がしく
酒をくみてさしめぐる
唄ひさわぐそがなかに
南の邦戀ふるあり
厄難はらふ祈言を
語り告る嫗あり
（高音）可愛し少女舞ひ出でつ
（中音）松明あかく照り遍る
（次中音）管絃のひゞき賑はしく
（低音）つれてたちて舞ひ遊ぶ
既に唄ひ勞れてや
眠りを誘ふ夜の風
なれし故郷を放たれて
夢に樂土求めたり』
東空の白みては
夜の姿かきうせぬ
ねぐらはなれ鳥鳴けば
何處往くか流浪の民
何處往くか流浪の民

流浪の民

## 五、セロ獨奏

短ト調コンセルト　　サン、サーンス作曲

パリに生れたる現代の名家サン、サーンス(Camille Saint-Saëns 1835――)は演奏家としてはオルガン及びピアノに長じ、指揮者としては秀拔なる手腕を有し且つ作家としては稀有の才能を藏せり。彼はコンセルヴァトアールに於て作曲をアレヴィ及びレーベルに學び、別にグーノーに師事

して完全に作曲法を習得せり。一八七〇年以後は凡て公職を棄てゝ専ら作曲に従事せり。其の作風は好んで古典の形式に遵ひつゝも之れに近代的作法を加ふ。彼の創作の範圍は廣く聲器兩樂に亘れども、最も得意なるは器樂の方面なり。彼の多能なるや自己の長ぜる樂器以外の曲にも多くの傑作あり。彼のヴァイオリン、コンセルトは彼のヴァイオリンに熟達せるかを思はしめ、彼のセロ、コンセルトは彼のセロに通曉せるかを疑はしむ。茲に奏する曲は一八七二年の創作（翌年出版）に係るものにして、數多からぬセロ樂譜中にて恐らく最も秀美且つ最も演奏せらるゝものなるべし。こは旋律の豐麗、技術の華美及び形式の完備等、近代的コンセルトの有すべき凡ての長所を具備す。加之最も重要なる一事はそが樂器に適する如く作曲せられ居ること是れなり。此の事項は屢々忽視せらる。例へばブラームスの如きも常に此の用意を忘れたるが爲めに、彼のピアノ、ヴァイオリンのコンセルトはピアノ、ヴァイオリン的よりも寧ろ管絃樂的にして且つ之れが爲めに大なる演奏上の困難を生ぜり。

サンサーンスは徹頭徹尾佛人なり。此のコンセルトの表はす所亦優美にして輕捷、何等直接の憂を知らず、高々軟かき鋭感の時々縱に快活の氣と混ずるを見るのみ。最終曲部に見る長大なる音階（低き「ハ」音より最高の「ヘ」音迄）の如きは彼の諧謔を示すもの、又た最終の附節（コーダ）及び稍快速（アレグレット）の曲部に於けるワルツ的節奏（リズム）の輕きスケッチの如きは枝葉を省きて輕妙の機智を弄せり。曲の形式は普通行はるゝ如く曲部を別々に分たず、其の三曲部を連續せしめて一つの纒れるものとなせり。先づ快速調（アレグロ）を以て起り、次で奇麗なる稍快速調（アレグレット）に進み、終曲として再び稍や活潑なる快速調（アレグロ）を用ひたり。終曲部は間に唯だ一度華々しき經過句を挿み、極めて効果ある附節を以て局を結ぶ。

## 六、管絃樂

### プレリュード、コーラル及びフューグ

バッハ作曲
アーベルト改編

樂聖バッハ（J. S. Bach 1685–1750）の偉業は其の宗教樂とオルガン（并びにピアノ）樂に存す。茲に奏する三曲中プレリュードとフューグとは彼の最も好んで作曲せる曲體なり。プレリュードは前奏曲の義にしてフューグ其他の曲の前に附して演奏せらるゝものなるが、茲に奏するプレリュードとフューグとは本來續けて作られたものにあらず。前者は『平均率ピアノ曲集』の第四番に位し後者はオルゲル、フーゲの第十二番に在りたるをば後の樂人アーベルト（Joseph Abert 1832——）は管絃樂に改編の際これ等を一つに纒め且つ二者の間に短かきコーラル（聖唱歌）を創作して三曲部のものとなせるなり。アーベルトはボヘミアに生れ、初め僧院の少年歌者として音樂教育を受け、次でプラーグのコンセルヴァトリュームに學びたる後、六七年スツットガルトの宮廷樂部長となれる人、其のシンフォニー、オーヴァーチュア、オペラ等の作品は頗る好評を博せり。

プレリュードは沈靜幽雅なる氣分を表はすものにして其の運動は極めて滑かなり、其の各音部進行の秀拔なるは言ふまでもなし。

次の緩かなるコーラルは巧みに二者の間に介在して原曲の意を傷ふことなし。眞鍮管の響きは之れに莊重の感を添ふ。此のコーラルの歌調は後のフューグ曲の中途に現はれ、自ら主要なる旋律（所謂『定旋律』Cantus firmus）となりてフューグの主想（テマ）をば自己の對位聲（コントラプンクト）たらしむ。最後のフューグは『甚だしきに過ぎざる快速調（アレグロ）』にして、全曲中最も進行の活潑なる曲なり。（フューグの曲體は言ふまでもなく曲頭にあらはるゝ主想（テマ）をば他の音聲にて漸次に模倣し行く作法の一なり）本曲に於ては主想は初め第一ヴァイオリン（オーボエを伴ふ）に表はれ、次で五度低く第二ヴァイオリン（クラリネットを伴ふ）に赴き次でヴィオラ、セロ（クラリネット第一、第二）よりセロ、ベース（ファゴット）と移り行きて凡て絃樂器の出揃ひたる時、かのコーラルの歌調は先づトロンボーンに現はれ、次で他の管絃器にそのモチーフ現れ、此の曲に豐麗なる色彩を加ふ。

**明治四十五年八月六日　学友会第一回土曜演奏会**

▲去月六日本校講堂に於て、學友會第一回土曜演奏會を催ふせり。

其の曲目左の如し。

第一部

一、合唱　會員

夜の濱……（吉丸一昌作歌／シューベルト作曲）

夢……（吉丸一昌作歌／シューマン作曲）

二、中音獨唱　竹内うめ子

歌劇「セミラミス」中の咏嘆調……ロシィニー作曲

三、洋琴獨奏　高折宮次

プレリュード（作品二十四）……ショパン作曲

四、聲樂二部　高音原信子／次中音澤崎定之

歌劇「ファウスト」中の二部……グノー作曲

五、風琴獨奏　木岡信子

ソナティネ……ラインハルト作曲

番外、獨唱　船橋榮吉

二人の戀……（船橋榮吉作曲／服部嘉香作歌）

第二部

六、低音獨唱　樋口信平

歌劇「ユーディン」中の咏嘆調……ハレビー作曲

七、洋琴獨奏　綠川政野子

ワルツ（作品六十）……ショパン作曲

マツルカ（作品七）……ショパン作曲

八、聲樂四部　（薗部ふさ子／中島かね子／澤崎定之／船橋榮吉）

歌劇「ファウスト」中の四部……グノー作曲

九、洋琴獨奏　藤田愛子

ソナタ（作品二十二）……ベートーヴェン作曲

第三部

十、聲樂二部　（薗部ふさ子／船橋榮吉）

歌劇「バルビェーレ、デイ、シヴィリヤ」

中の二部……ロッシニー作曲

十一、ヴァイオリン獨奏　佐藤謙三

コンセルト（作品二十三）……ヴィオッティ作曲

十二、洋琴獨奏　小泉千賀子

忘られたるリズムの試作中の一番

（作品二十八）……アレンスキー作曲

十三、中音獨唱　中島かね子

歌劇「ヘロディアード」中の咏嘆調……マッスネー作曲

十四、合唱　會員

心の花……（吉丸一昌作歌／パルメ作曲）

（『音樂』學友會、第三卷第八号、明治四十五年八月、四九頁）

▲四月より隔月に第三土曜に學友會の土曜演奏會を開いて手輕に會友諸君及び會員諸氏のために私達の藝術を聽いて戴けるやうにします。四月に

は學友會の演奏、五月には學校のがありますから第一回は六月下旬か七月上旬にならうと思ひます。其頃は上野の森も若緑りの影がなつかしく、水色のうすものが涼しく見えるだらうと思ひます。

（『音樂』學友會、第三巻第三号、明治四十五年三月、五一頁）